人生サイクルと他界イメージの多文化比較による生命観モデルの構築

（課題番号　13571006）

平成13年度～平成15年度科学研究費補助金
基盤研究(B)(2)研究成果報告書

平成16年3月

研究代表者　山田　洋子
（京都大学大学院　教育学研究科教授）

京都大学図書
1040941500
附属図書館

人生サイクルと他界イメージの多文化比較による生命観モデルの構築

（課題番号　13571006）

平成13年度～平成15年度科学研究費補助金
基盤研究(B)(2)研究成果報告書

平成16年3月

研究代表者　山田　洋子
（京都大学大学院　教育学研究科教授）

＜研究組織＞

研究代表者

山田　洋子	(京都大学大学院・教育学研究科・教授)

研究分担者

Becker,Carl	(京都大学大学院・人間・環境学研究科・教授)
矢野　智司	(京都大学大学院・教育学研究科・教授)
皆藤　章	(京都大学大学院・教育学研究科・助教授)
加藤　義信	(愛知県立大学・文学部・教授)
戸田　有一	(大阪教育大学・教育学部・助教授)
伊藤　哲司	(茨城大学・人文学部・助教授)

研究協力者

Bryant, P.E.	(University of Oxford, Dep.of Exp. Psychology, Professor)
Phan Thi Mai Hung	(ベトナム社会人文科学国家センター心理学研究所・主任研究員)
Wallon, Ph.	(Institut National de la Santé et la Recherche médicale, Chargé de recherche)
Mesmin, C.	(Université ParisⅧ, Maître de Conférence)
井上篤子	(University of London, Goldsmiths College, Psychology Department, Graduate student)
徳田治子	(京都大学大学院・教育学研究科・教務補佐)
田端拓哉	(京都大学大学院・教育学研究科・教務補佐)
川島大輔	(京都大学大学院・教育学研究科・博士前期課程)

＜研究経費＞

平成 13 年度	3, 600, 000 円
平成 14 年度	3, 800, 000 円
平成 15 年度	2, 500, 000 円
計	9, 900, 000 円

＜謝辞＞

この研究のために多くの方々のお世話になりました。本当にありがとうございました。特に下記の方々には、多大な御支援をいただきました。記して感謝いたします。

岡崎甚幸先生(京都大学名誉教授)
小松和彦先生（国際日本文化研究センター教授）
後藤倬男先生（愛知県立芸術大学教授）
渡辺恒夫先生（東邦大学教授）
西平直先生（東京大学助教授）
竹内謙彰先生（愛知教育大学助教授）

目次

1　研究の概要 …… やまだようこ…… 1

2　研究成果一覧 …… 5

2-1　公開講演会・公開シンポジウム …… 7

2-2　理論班の研究成果 …… 7

著書・論文・国際学会発表・国内学会発表・シンポジウムなど

2-3　調査班の研究成果 …… 10

著書・論文・国際学会発表・国内学会発表・シンポジウムなど

3　理論班のおもな研究成果 …… 13

3-1　The generative life cycle model: Integration of Japanese folk images and generativity …… Yamada Yoko…… 15

3-2　日欧に於ける「生まれ変わり」：イメージの由来を探って …… カール・ベッカー…… 31

3-3　子どものまえに他者が現れるとき：生成する物語としての賢治童話 …… 矢野智司…… 51

3-4　物語からみた転移・逆転移 …… 皆藤　章…… 65

4　調査班のおもな研究成果（1）

「この世とあの世」国際比較調査研究 …… 75

4-1　現場（フィールド）心理学における質的データからのモデル構成プロセス：
「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に
…… やまだようこ…… 77

4-2　Japanese students' depictions of the soul after death: Towards a psychological model of cultural representations
…… Yamada, Y., & Kato, Y.…… 99

4-3　The spatial representation of this world and the next world in Japanese, Vietnamese, British and French drawings
… Yamada, Y., Kato, Y., Ito, T., & Toda, Y.…… 121

4-4　Les représentations spatiales de ce monde et l'autre monde vues dans les dessins des étudiants japonais, vietnamiens, français, et anglais
（日本、ベトナム、フランス、イギリスの大学生のイメージ画にみる「この世」と「あの世」の空間表象）
Kato, Y., Yamada,Y.,Wallon,Ph., Mesmin,C., Ito,T. & Toda,Y.… 129

4-5　アジアの視点から見たベトナムの他界イメージ
…… 伊藤哲司…… 141

4-6　Folk beliefs of this world and the next world after death in Japanese, Vietnamese, French and English People
Toda, Y., Yamada, Y., Kato, Y. & Ito, T. …… 153

4-7　現代フランス文明における死生観－質問紙調査による日仏比較
（Les idées sur la vie et la mort dans la civilisation française contemporaine.　Philippe Wallon）
フィリップ・ワロン（加藤義信訳）…… 155

5　調査班のおもな研究成果（2）

生命観にかかわるフィールドワーク研究 …… 175

5-1 家族ライフストーリーが語られる「場所」としての墓地：
イギリスの19世紀末の家族墓碑と現代の子ども墓碑を中心に

…… やまだようこ…… 177

5-2 「グランド・ゼロ」での犠牲者追悼のかたちと9.11「同時多発テロ」の位置づけ：テロ事件11ヶ月後のニューヨークを歩いて

…… 伊藤哲司…… 205

5-3 事故死の「現場」における生者と死者のコミュニケーション：
ニューヨーク、グラウンド・ゼロにおける追悼の語り

…… やまだようこ…… 219

5-4 他界観に関するベトナム・フィールドワークの記録

…… 伊藤哲司…… 231

6　調査班のデータ分析資料：

「この世とあの世」国際比較調査研究の資料 …… 241

6-1 4か国調査協力者に関する統計資料 …… 加藤義信…… 243

6-2 この世とあの世の空間配置（1）：

イメージ画1の4か国比較統計的分析 …… 加藤義信…… 251

6-3 この世とあの世の空間配置（2）：

イメージ画1の事例、ベトナム …… 伊藤哲司…… 255

6-4　この世とあの世の空間配置（３）：
イメージ画１の事例、イギリス　…… 戸田有一…… 263

6-5　たましいの形とこの世からあの世への移行（１）：
イメージ画２の４か国比較統計的分析 …… 伊藤哲司…… 273

6-6　たましいの形とこの世からあの世への移行（２）：
イメージ画２の事例、ベトナム…… 伊藤哲司…… 279

6-7　たましいの形とこの世からあの世への移行（３）：
イメージ画２の事例、イギリス　…… 戸田有一…… 287

6-8　他界信念質問紙調査　４か国比較の統計的分析（１）：
各他界信念項目別にみた賛否回答分布 …… 加藤義信…… 293

6-9　他界信念質問紙調査　４か国比較の統計的分析（２）：
因子分析　…… 戸田有一…… 303

6-10　他界信念質問紙調査　４か国比較の統計的分析（３）：
イメージ画と信念調査との関係 …… 戸田有一…… 311

6-11　学会発表資料 …… 337

6-12　４か国の調査用紙…… 363

1

研究の概要

やまだようこ

I　研究の目的

本研究は、現代社会における「他界観」「死生観」「生命観」を根幹から考えるという緊急度の高い重要な問題を、「ライフ（人生・生命）サイクルの問題」として関連づけてとらえようとするものである。

死は生物的には肉体の消滅でしかないが、あらゆる文化において死後の世界が想像されてきたのは、なぜだろうか。他界の表象を、「いのちの連続性」を保つための心理学的物語として考えてみたらどうだろうか。人間は、人生に「意味」を求め、人生物語（ライフストーリー）を次世代に語り継ごうとする存在だからである。

生涯発達的にみると、生から死への移行は人生移行の究極の形であり、世代間連関を含むライフ・サイクル（人生/生命・循環）の一環と位置づけられる。文化的にみると、死生観や他界観には、その文化の中核となる、人間観、発達観、いのち観、身体観、聖なるものの見方が集約した形であらわれると考えられる。

この共同研究では、次のような問題について研究することを大きな目的とした。

1）「死」や他界観を組み入れた新しい生涯発達モデルの構築

従来の発達心理学は、子どもを対象としていたが、現在の生涯発達心理学（life-span developmental psychology）では、人間の生涯全体を扱うようになった。しかし、それでもまだ、「個人」の生涯の枠内にとどまっている。人間の人生を、個人を越えるより大きな世代連関サイクルや生態サイクルや文化歴史サイクルのなかで位置づける視点が必要であろう。また、死生観や他界観など「死」を含みこんだ生涯発達心理学の理論が必要であろう。そのような考え方は、代表的なBaltesやEriksonの理論にもまだ見られない。

本研究では、「死」の問題を正面にすえて、他界観や生命観にあっかわる新たな生涯発達心理学モデルを考えていきたい。本研究では、人が死後に託す願望の世界としての他界観念や世代間伝達を

組み込んだライフサイクルの斬新なモデルの構築を試みる。

2）日本を含む東アジアからの多文化比較：西欧中心世界観を相対化する現代の他界観の実証的研究

日本文化の他界観は、柳田、折口らの古典に加え、文化人類学や民俗学や宗教学や歴史学などで文献や伝承資料を中心に研究されてきた。現代青年の心の世界に現在どのようなかたちの他界観が生きているのかを、心理学的観点から科学的・実証的にとらえた研究はほとんどない。

また、本研究は、日本文化を日本という狭い枠に閉じないで、より広い国際的観点から見ていきたいと考えている。日本文化は閉じた孤立したものではないから、西欧とともに東アジアの別の文化と比較することで、日本文化を相対化するとともに共通項を見いだし、現代日本の他界観を国際的視野へひらく。近代の思想に圧倒的影響力をもってきた西ヨーロッパ文化に対し、日本から発想した調査で切り込む発信・輸出型の国際研究である。

3）イメージ描画調査法と図像・写真資料の活用

非言語的なイメージ描画法を用いる本研究の方法は、方法論的にも画期的である。従来の言語に依存した意識調査の制約を越え、暗黙知探求に優れ、文化比較に適し、簡便で多様な反応を自由に産出でき、歴史的図像資料と比較可能な方法として一般化できる。

4）いのちの教育や倫理教育への示唆

死の世界からの反照的視線は、現在をより良く生きようとする生成への志向性をもたらす。本研究の成果は、人間のいのちや死をどのようにとらえていくのかという教育に対して、大きな示唆を与えることができるだろう。

Ⅱ　具体的な研究の内容

本共同研究では、理論班と調査班の２つに分かれて活動し、各班ごとに頻繁に共同研究会を開催した。また年に数回共同で研究会を開催し、最終年度には共同で公開講演とシンポジウムを開催した。

この共同研究において、全体として具体的に研究目的にしたのは、おもに次の２点であった。

1）現代日本の民衆文化のなかに共有されている「他界観」と「ライフ（人生・生命）サイクル観」の特徴を「イメージ描画法」という斬新な手法を用いた国際調査によって、西欧やアジアの他文化と多重比較することで実証的に明らかにする。

2）国際調査のデータを、生涯発達心理学、臨床心理学、教育人間学、宗教倫理学の立場から学際的に理論化し、２０世紀の人間観や発達観を変革しうる新たな世界観や人生観のモデルを提案し、いのちや死の教育に役立てる。

理論研究班

理論研究班の分担者は、代表者の山田洋子（生涯発達心理学）の他、以下のような各領域の第一人者による、国際的・学際的メンバーによって構成された。

カール・ベッカーは、ハワイ大学東西文化センター出身で、比較宗教学、死の倫理学と死の臨床の第一人者であり、臨死体験やスピリチュアリティの研究をすすめてきた。矢野智司は、教育人間学が専門で、教育とは何かという問いを根本的に問いかえし、自己生成論、物語論、聖なるものについて深い考察をすすめてきた。皆藤章は、臨床心理学が専門で、臨床描画法の一種「風景構成法」の専門家で、ユング心理学の造詣が深く、描画法、図像イメージの国際的研究を幅広い視野からすすめてきた。

理論班では、各自が自らの専門テーマを追求しながら積極的に研究を行った。これらの分担者によってなされた研究は、理論班の研究成果一覧にあるように、大変生産的なものであった。それらの研究の一部は、共同研究会で討議を行った。また、それらの研究成果の一端を本報告書に掲載した。

調査研究班

実証的研究を行う調査研究班は、代表者の山田洋子の他に、加藤義信（愛知県立大学・フランス担当）、戸田有一（大阪教育大学・イギリス担当）、伊藤哲司（茨城大学・ベトナム担当）の４人のメンバーで構成された。いずれも、各国での在外研究の経験が深い気鋭の心理学者である。

調査研究は、先行研究「平成10年－１３年度科学研究費基盤研究Ｃ（２）代表者・山田洋子、分担者・加藤義信、課題名・現代日仏青年の他界観の生涯発達心理学的研究、経費290万円」を引き継いで行われた。先行研究では、現代の日本とフランス青年の他界イメージを、１）この世とあの世のイメージ画調査、２）人生移行とたましいの形と往来のイメージ画調査、３）信念構造から明らかにした。また、４）他文化調査に適用できるイメージ画調査質問紙の作成と、５）描画カテゴリーの作成と信頼性と妥当性の検討、統計的分析手法の検討を行った。

先行研究の日仏調査結果の一部は、論文（Yamada,& Kato,2000; やまだ・加藤1998）などの出版物のほか、国際学会（A Japanese view of the after life, Vienna,1999; The IInd Conference for Socio-Cultural Research, Geneva 1996; International Society for Behabioral Development , Beijing, 2000 ; XXVIIIInternational Congress of Psychology, Stockholm, 2000）などで発表され、オリジナリティの高い研究として注目され、国際的に高い評価を得てきた。

本研究では、先行研究をさらに発展させて、今まで現代日本とフランス青年の２国比較で考察してきた「他界イメージ」を基にしたライフサイクル観を、本研究によって、宗教的・歴史的背景が異なる西ヨーロッパ（イギリス・フランス）と東アジア（日本・ベトナム）の４国比較に発展させ、より一般化したライフサイクル・モデルを考えることを目的にした。

具体的には、次の目的で、ベトナムとイギリスのデータ収集を行い、日本とフランスのデータとつきあわせて、４か国の国際比較調査研究を行った。また、死や他界観に関する国際的フィールドワークを行い、各種の図像資料や写真資料を含む現場データを収集した。

目的１：現代イギリスとベトナム青年の他界イメージを次の３つの調査から明確にする。

１．他界の描画表象。この世とあの世の関係イメージ画調査の分析

２．人生移行の描画表象。死と生を含むたましいの形と往来のイメージ画調査の分析

３．他界観の信念構造。質問紙調査の分析

目的２：上記のデータを先行研究の日本とフランス青年の他界イメージと合わせて、４か国の比較をする。

目的３：上記の４か国のデータと、フィールドワークのデータ等をもとに理論的に検討し、ライフサイクルと生命観にかかわるモデルを構築する。

調査班の研究結果は、調査班の研究成果一覧にあるように、内外の学会やシンポジウムで積極的に発表してきた。その研究のオリジナルな視点と方法は、国際的にも高い評価を得てきた。その一端は、次のような外国出版の専門書に掲載された論文によって、知ることができるであろう。

Yamada, Y. (2003). The generative life cycle model: Integration of Japanese folk images and generativity. In de St. Aubin, E., McAdams, D. P., & Kim, T. C. (Eds.), The generative society: Caring for future generations (pp.97-112). Washington, DC: American Psychological Association.

Yamada, Y., & Kato, Y. (2004,in press).Japanese students' depictions of the soul after death: Towards a psychological model of culutural representations. In Formanek, S., & Lafleur, W. (Eds.), Practicing the afterlife: Perspectives from Japan (pp.417-438). Verlag der Osterreichischen Akademie der Wissenschaften

なお、調査班の研究全体としては、膨大なデータを集積しており、そのデータ分析と考察は大変多岐にわたっている。それらの全体的な結果については、この報告集に収録した論文のほかに、著書「この世とあの世のイメージ」（金子書房、やまだ編　2004　印刷中）の刊行が予定されている。したがって、本報告書では、調査班の研究データ分析に関しては、そのデータ資料の一部を収録するにとどめた。

また、調査班では、質問紙調査を行って分析する作業や国際学会発表と併行して、他界観や生命観、生涯発達観にかかわるフィールドワークや資料収集も積極的に行ってきた。本報告書に掲載した調査班のフィールドワーク研究の成果は、その一部である。これら調査班メンバーによるフィールドワークの論考はいずれも、本報告書において新たに書き下ろされたものである。

本研究は、研究協力者の方々、謝辞にお名前を記載した方々、そして、そこには記載しきれなかった多くの方々の支援によって行われてきた。支えてくださったすべての方々に、心より感謝したい。

2004年2月

2　研究成果一覧

2-1　公開講演会・公開シンポジウム

2-2　理論班の研究成果

著書・論文・国際学会発表・国内学会発表・シンポジウムなど

2-3　調査班の研究成果

著書・論文・国際学会発表・国内学会発表・シンポジウムなど

2

研究成果一覧

2-1　公開講演会・公開シンポジウム

やまだようこ（企画）．(2003)．人生サイクル・いのち・他界のイメージ：多文化の視点から．
　2003年6月8日 京都大学芝蘭会館
＜講演＞
矢野智司　「子どもが他者と出会うとき：宮沢賢治を手がかりに」　司会　やまだようこ
＜シンポジウム＞
「多文化の視点からみる他界とたましいの表象」　　司会　戸田有一
小松和彦　「日本文化における他界とたましいの表象」
やまだようこ「この世とあの世のイメージ：日本・ベトナム・イギリス・フランスの描画から」
カール・ベッカー「日欧における『生まれ変わり』：イメージの由来を探って」
　指定討論　加藤義信　伊藤哲司

2-2　理論班の研究成果

＜著書＞

やまだようこ．(2001)．エリクソンの子どもたちと生成継承性．藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学(編)，*教育学年報：8 子ども問題*(pp. 25-48)．神奈川：世織書房．
やまだようこ・サトウタツヤ・南博文(編)．(2001)．*カタログ現場心理学：表現の冒険*．東京：金子書房．
小嶋秀夫・やまだようこ（編）．(2002)．*生涯発達心理学*．東京：放送大学教育振興会．
やまだようこ．(2002)．人生なかば：危機と成熟．小嶋秀夫・やまだようこ（編），*生涯発達心理学*（pp. 144-155)．東京：放送大学教育振興会．

やまだようこ．(2002)．成人後期： 世代を育み伝える．小嶋秀夫・やまだようこ（編），*生涯発達心理学* (pp. 156-170)．東京： 放送大学教育振興会．
やまだようこ．(2002)．生涯発達心理学の課題と未来．小嶋秀夫・やまだようこ（編），*生涯発達心理学* (pp. 203-224)．東京： 放送大学教育振興会．
やまだようこ・西平直（監訳）．(2003)．*エリクソンの人生：アイデンティの探求者*（上・下）．東京：新曜社
Yamada, Y. (2003). The generative life cycle model: Integration of Japanese folk images and generativity. In de St. Aubin, E., McAdams, D. P., & Kim, T. C. (Eds.), *The generative society: Caring for future generations*(pp.97-112). Washington, DC: American Psychological Association.
無藤隆・やまだようこ・麻生武・南博文・サトウタツヤ（編）．(印刷中)．*ワードマップ質的心理学*. 東京： 新曜社.
Becker, C. (2001). On crossing cultural borders. In Inaga, S. (Ed.), Crossing cultural borders(pp. 309-316). Kyoto: International Research Center for Japanese Studies.
Becker, C. (2001). Terminal care and religion in east Asian context, In Young, C. (Ed.), *Gerontology and Religion* (in Korean) (pp.7-81). Kang Nam University Press.
Becker, C. (2002). Bang! Bang! You're dead? : Rethinking brain death and organ transplantation in Japan and China. In Howie, J. (Ed.), *Ethical issues for a new millennium* (pp. 162-191). Carbondale, IL: Southern Illinois University Press.
Becker, C. (2002). A Buddhist paradigm for a sustainable future. In Bachika, R. (Ed.), Traditional religion and culture in a new era(pp. 115-124). New Brunswick, NJ: Transaction Press.
Becker, C. (2002). On the present and future of thanatology in an age of Asian religious pluralism. In *Thanatology in the 21st Century* (pp. 41-67). Samsung Noble County (Korea),
Becker, C. (2002). The changing faces of disease and psycho-spiritual healing. In Becker, C. (Ed.), *Time for Healing* (pp. 1-9; 247-266). Minneapolis: Paragon Press.
Becker, C. (2003). Good Clinical Practice? : Can East Asia accommodate Western standards? In Barnhart, M. (Ed.), *Varieties of ethical reflection* (pp. 317-327). Lanham, MD: Lexington Press.
カール・ベッカー．(2002)．死は終わりではない：東西の共通と相違．日野原重明(編)，*死をみつめ、今を大切に生きる* (pp. 129-152)．東京：春秋社.
カール・ベッカー．(2003)．生の教育・死の教育．野田正彰・カール・ベッカー(著)，*宗教と教育(平成１４年度教化活動委員会研修会講義録)*（pp. 115-195)．京都：相国寺出版.
Becker, C. (in press). A Japanese Buddhist critique of the death of Saint Buddhadasa and medical elites. In Jonsen, A. (Ed.), *Pacific Rim Bioethics*. University of Washington Press.
矢野智司．(2001)．子どものまえに他者が現われるとき：生成する物語としての憲治童話．藤田英典・片桐芳雄・佐藤学(編)，*教育学年報：８ 子ども問題*(pp. 49-71)．神奈川：世織書房.
矢野智司．(2002)．*動物絵本をめぐる冒険*：動物 - 人間学のレッスン．東京：勁草書房.
矢野智司．(2003)．子どもの遊び体験における創造的瞬間：体験を反復する創造性のコミュニ

ケーション論．佐藤学・今井康雄（編），*子どもたちの想像力を育む ： アート教育の思想と実践*（pp. 56-72）．東京: 東京大学出版.

皆藤章.（2001）．心理療法と道徳教育．河合隼雄(編)，*講座心理療法：8 心理療法と現代社会*（pp. 23-64）．東京：岩波書店.

皆藤章.（2002）．*風景構成法の事例と展開 ―心理臨床の体験知.* 東京：誠信書房.

皆藤章.（2003）．道徳とカウンセリング．四天王寺(監)，*四天王寺カウンセリング講座３*(pp. 45-77)．大阪：創元社.

皆藤章.（2003）．臨床教育学の構想－体験をとおしてもたらされた覚書（ラフスケッチ）．皇紀夫(編)，*臨床教育学の生成*(pp. 33-57)．東京：玉川大学出版部.

＜論文＞

やまだようこ．（2002）．なぜ生死の境界で明るい天空や天気が語られるのか？：質的研究における仮説構成とデータ分析の生成継承的サイクル．*質的心理学研究*, 1, 70-87．東京：新曜社.

Yamada, Y. (2002). Models of life-span developmental psychology: A construction of the generative life cycle model including the concept of "death." *京都大学大学院教育学研究科紀要*, 48, 39-62.

やまだようこ．（2002）．喪失から生成への物語．*PSIKO*, 21, 22-29．東京：冬樹社.

Becker, C. (2001). Nakayama Miki and human science: The quest for the Doroumi Koki. *Tenri Journal of Religion*, 29, 73-107.

カール・ベッカー. (2001). 日本人の死生観を考える．*余韻*, 101, 70-86, 呉市医師会.

Becker, C. (2001). Terminal Care and Counseling in an East Asian Context(in English). *宗教研究*, 24, 63-107, 韓国宗教学会.

カール・ベッカー．(2001)．瞑想は英知を引き出すことができる．*理想世界*(11月号), 8-11．東京：日本教文社.

カール・ベッカー．(2001)．親鸞聖人は嘘吐きか：極楽往生と臨死体験の今昔．*真宗文化*, 11, 23-46. 光華女子大学真宗文化研究所.

カール・ベッカー．(2002)．何の為に人は生きるのか．*真理と創造*, 31, 81-86. 東京:中央学術研究所.

カール・ベッカー．(2002)．死から考える生命．*日本の哲学*, 3, 92-109. 京都：昭和堂出版.

カール・ベッカー．(2003)．日本の危機への警鐘．*マクロビオティック*, 791, 3-4.

カール・ベッカー．(2003)．日本の危機への警鐘．*マクロビオティック*, 792, 5-7.

皆藤章．(2001)．物語による転移／逆転移の理解．*精神療法*, 27, 8-14．東京：金剛出版.

皆藤章．(2001)．風景構成法．*臨床精神医学 2001年増刊号：芸術療法と表現病理*, 180-184．東京：医学書院.

皆藤章(2002)．臨床としての風景構成法．*京都大学大学院教育学研究科臨床教育学講座紀要 臨床教育人間学*, 4，119-130．京都：京都大学.

＜国際学会や国際シンポジウムにおけるおもな発表＞

Yamada, Y. (2002). The visualized stories of "my life": The Images of Linear Progressivism vs. Generative life cycle. *International Society for the study of behavioral development, 17th Biennial Meeting*, 2-6 August 2002, Ottawa.

やまだようこ．(2002)．ライフサイクルといのち循環．*日本教育学会主催国際シンポジウム 大人・子ども関係の構造転換：子どものケアを中心に．* 2002 年 12 月 16 日　京都大学芝蘭会館：京都.

Yamada, Y. (2003). A generative Life cycle model: The visual representations of Life and death cycles in Japanese drawings. *11th European Conference on Developmental Psychology*. August 27-31 2003. Catholic Unversity, Milano.

Yamada, Y. (2004). The generative life cycle model: The image of circular time and rebirth in Japanese culture. *文化心理学と人間関係論の諸相*. 2004 年 1 月 25 日 立命館大学：京都.

2-3　調査班の研究成果

＜著書＞

加藤義信・井川真由美（訳）．(2002)．*子どもの絵の心理学入門*　(Wallon, Ph., Le dessin d'enfant)．東京：白水社（クセジュ文庫）．

Kato, Y. (2003). Attitude. In D.Groux, S. Perez, L. Porcher, V. Rust, & N. Tasaki(éds.), *Dictionnaire d'éducation comparée*.(pp. 99-101). L'Harmattan.

やまだようこ(編)．やまだようこ・加藤義信・伊藤哲司・戸田有一（著）．(2004，印刷中)．*この世とあの世のイメージ*．東京：金子書房.

Yamada, Y., & Kato, Y. (2004, in press).Japanese students' depictions of the soul after death: Towards a psychological model of culutural representations. In Formanek, S. & Lafleur, W. (Eds.), *Practicing the afterlife: Perspectives from Japan* . (pp.417-438). Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften

＜論文＞

Yamada, Y., & Kato, Y. (2001). Images of the soul and the circulatory cosmology of life: Psychological models of folk representations in Japanese and French youths' drawings. *京都大学教育学部紀要*, 47,1-27.

やまだようこ．(2002)．現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス：「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に．*質的心理学研究*，1，107-128．新曜社.

加藤義信・やまだようこ．(2002)．日仏青年が抱いている素朴「他界」観と「たましい」観．*愛知県立大学大学院国際文化研究科論集*，3，47-72.

Kato, Y., & Takeuchi, Y. (2003). Individual differences in wayfinding. *Journal of*

Environmental Psychology, 23, 171-188.
加藤義信. (2003). 日本におけるフランス語圏心理学の受容: 研究序説. *平成13−14年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書（研究代表者：足立自朗）*, 78-95.

＜国際学会・国際シンポジウム発表＞

Yamada, Y., Kato Y., Ito, T., & Toda, Y. (2002). The spatial representations of this world and the next world in Japanese, Vietnamese, British and French drawings. *The Social Context of Death Dying and Disposal 6th International Conference*, 5-8 September 2002, York St John College.

Ito, T., & Yamada, Y. (2002). Exploration into folk representations of this world and the next world in Vietnamese youths. *International Society for the study of behavioral development, 17th Biennial Meeting*. 2-6 August 2002, Ottawa.

Toda, Y., Yamada, Y., Kato, Y., & Ito, T. (2002). Folk beliefs of this world and the next world after death in Japanese, Vietnamese, French and English People. *International Society for the study of behavioral development, 17th Biennial Meeting*. 2-6 August 2002, Ottawa.

Yamada, Y. (2002). The Image drawings of this world and the next word in Japanese, Vietnamese, British and French people. *Exchange of psychological researches between Vietnam and Japan*. 2 December 2002, National Centre for Social Sciences and Humanities, Hanoi,

Ito, T. (2002). Folk representations of this world and the next world in Vietnamese people. *Exchange of psychological researches between Vietnam and Japan*. 2 December 2002, National Centre for Social Sciences and Humanities, Hanoi,

Yamada, Y. (2002). Selves and others in the places: The spatial representations of this world and the next world in multiple cultures. *International Symposium on the Socio-Cultural Foundations of Cognition* , 14-15 December 2002, Kyoto University.

Kato,Y., Yamada,Y., Wallon,P., Mesmin,C., Ito,T. & Toda,Y. (2003). Les représentations spatiales de ce monde et l'autre monde vues dans les dessins des étudiants japonais, français, anglais et vietnamiens. *l'exposé dans le séminaire de Madame Claude Mesmin à l'Université Paris VIII,* 19 mars 2003, Saint-Denis, France.

Ito,T. & Yamada,Y.(2004).Folk representation of this world and the next world of Japanese and Vietnamese people（日本とベトナムにおける「この世」と「あの世」のイメージ）. *The Scientific Seminar of Asian-Pacific Area Youth Psychologists*, 26 February 2004, Beijing Normal University（北京師範大学）

＜国内学会・国内シンポジウム発表＞

やまだようこ・加藤義信. (2001). 「あの世」と「この世」の関係イメージ（16）：多文化理解の枠組みとしての社会文化的表象ネットワーク・モデル. *日本発達心理学会第12回大会発表論文集* 210.

戸田有一・やまだようこ・加藤義信・井上篤子. (2001). 「あの世」と「この世」の関係イメージ (17) : イギリスにおける２つの世界の空間配置と分離標識. *日本発達心理学会第 12 回大会発表論文集*, 211.

伊藤哲司・やまだようこ. (2001). 「あの世」と「この世」の関係イメージ (18) : ベトナムにおける２つの世界の空間配置と分離標識. *日本発達心理学会第 12 会大会発表論文集*, 212.

戸田有一・やまだようこ・加藤義信・伊藤哲司. (2001). 「あの世」と「この世」の関係イメージ (19) :日・越・仏・英データにみる信念項目群内順序性構造の表現. *日本教育心理学会第 43 回総会発表論文集*, 312.

伊藤哲司・やまだようこ. (2002). 「この世」と「あの世」の関係イメージ (20) : ベトナムにおける大学生の他界観. *日本発達心理学会第 13 回大会発表論文集*, 336.

やまだようこ (企画) . (2003). 社会・文化的文脈からみた人生サイクルと他界観 : 日本・ベトナム・イギリス・フランスの『この世とあの世』のイメージをもとに. *日本発達心理学会第 14 回大会シンポジウム* (やまだようこ、戸田有一、加藤義信、伊藤哲司、遠藤利彦、渡辺恒夫、矢守克也、山本登志哉) .

やまだようこ. (2003). 他界観を含むライフ (いのち・人生) サイクル: ４か国の「たましい」の循環と生まれ変わりのイメージ画をもとに. *日本発達心理学会第 14 回大会発表論文集*, S55.

加藤義信. (2003). 他界の空間イメージ: 日本、ベトナム、イギリス、フランスの大学生が描いた絵の比較. *日本発達心理学会第 14 回大会発表論文集*, S53.

伊藤哲司. (2003). アジアの視点からみた他界イメージ: ベトナムにおける「この世とあの世」のイメージ画を中心に. *日本発達心理学会第 14 回大会発表論文集*, S54.

3　理論班のおもな研究成果

3-1　The generative life cycle model: Integration of Japanese folk images and generativity

Yamada Yoko

3-2　日欧に於ける「生まれ変わり」：イメージの由来を探って

カール・ベッカー

3-3　子どものまえに他者が現れるとき：生成する物語としての賢治童話

矢野智司

3-4　物語からみた転移・逆転移

皆藤　章

3-1

de St. Aubin, E., McAdams, D. P., & Kim, T. C. (Eds.), The generative society: Caring for future generations (pp.97-112). Washington, DC: American Psychological Association.

7

THE GENERATIVE LIFE CYCLE MODEL: INTEGRATION OF JAPANESE FOLK IMAGES AND GENERATIVITY

YOKO YAMADA

> Think not forever of yourselves
> nor of your own generations,
> Think of continuing generations of our families,
> think of our grandchildren
> and those yet unborn whose faces
> are coming from beneath the ground
>
> —*Native American Elder*

> When we think of the life of a person, it may be necessary to draw a map of his or her life in such a way that it starts not from birth, but from going back to the past, and concludes not with death but extends toward the future. What a person is born into in this world does not mean only his or her birth. We should see that he or she is born under the large shadow of the cycle of people which includes everyone, and even after death, there is something in succession.
>
> —*Kenzaburo Oe (1986)*

It is my intention to critique a set of assumptions in developmental psychology and propose a new model of the life cycle. As a researcher in life-span developmental psychology, I would like to suggest a paradigm shift in our view of human beings and their development. The model I propose grows out of the traditional Japanese worldview, but it seeks to integrate perspectives that are both Eastern and Western, and both traditional and modern. The linchpin for my integration is Erik Erikson's (1950) conception of *generativity*. In bringing together perspectives from different cultural traditions, I ultimately seek to redefine generativity and to expand and enrich its conceptualization.

I begin by critiquing the underlying assumptions of *individualism* and *linear progression* as they exist in Western developmental theories. In com-

I am very grateful to Ed de St. Aubin, Dan McAdams, and Regina Logan for kind comments and helpful advice regarding a draft of this chapter. This study was supported by Grant-in-Aid for Scientific Research from the Japanese Ministry of Education, Science, Sports, and Culture (No. 13410081) and by the 21st Century COE Program (D-2 to Kyoto University), Japan.

parison with this individual model, I describe a contextual model drawn from traditional Japanese culture, with its central notion of cyclical development. I then comment on Erikson's life cycle model, focusing on the idea of generativity, as it relates to this traditional developmental scheme. I propose a new model: the generative life cycle model (GLCM), based on a blending of Western assumptions, concepts drawn from Japanese traditional folk culture, and selected segments of my own research. I conclude with a discussion of how the GLCM can contribute generally to life-span developmental psychology and specifically to a new understanding of generativity.

INDIVIDUALISM AND LINEAR PROGRESSIVISM

One of the main constructs undergirding Western developmental theory is the primacy of the individual (Miller, 1993). Models developed by Freud and Piaget, for example, reflect the individualistic view of human beings in Western culture that originated with the ancient Greek philosophers. The word *individual* has the same etymology as the word *atom*, which means an ultimate entity that cannot be further divided. But in modern physics, an atom is no longer treated as an ultimate simple substance. Nonetheless, in the field of psychology, the emphasis on the individual persists as the basic unit of study (Sampson, 1989). It has often been assumed that each individual can be understood independent of his or her context and that a person's identity is consistent, despite changes in the natural or social environment. In this individual model for psychology, the ecological, cultural, social, and historical contexts are downplayed or ignored. The careful study of these contexts is left to sociologists, economists, and historians. In fairness, some recent Western theories of development have sought to offer more ecologically contextual viewpoints (e.g., Bronfenbrenner, 1994; Elder, 1995). And certain feminist perspectives have suggested human interdependence as a developmental goal (Gilligan, 1982). Nonetheless, the dominant thrust of developmental theorizing in the West tends to separate out the individual from social and historical contexts.

A second basic assumption that has dominated Western developmental models is linear progressivism. Development is understood to involve movement forward and upward, a progression through which earlier and simpler stages are left behind as the individual moves upward, onward, and toward greater complexity in life (Loevinger, 1976). According to such thinking, time is progressive, irreversible, and unidirectional; stagnation has a negative meaning, and regression implies failure or an abnormality. Regardless of the pace of development of individuals, it has been assumed that basically all development takes the same course in the same direction, whether development is treated as a process of continuous change (Bandura, 1977) or as one divided into many stages (Kohlberg, 1969). Developmental psychol-

ogy has historically been a science closely associated with great Enlightenment values of progress, evolution, and expansion.

Rooted in conceptions of child and adolescent development, developmental progressivism considers positive change to involve the process of ascending, rising, improvement, competence, or advancement with age, at least until adulthood. Developmental psychology has historically covered the period from infancy to adolescence. This perspective places primacy on the first half of life with the implication that the second half of life, from middle age on, which may be characterized by degeneration and decline, is somehow less significant. Excessive emphasis on childhood and adolescence is a reflection of the modern, progressivism-centered attitude toward life. Beginning in the 1960s, developmental psychology began to expand into life-span developmental approaches (e.g., Jacques, 1965; Neugarten, 1968). Indeed, Baltes (1987) pointed out that social, cultural, and historical contexts were important, and that what was needed was a multidimensional model including not only acquisition and ascent but also loss and decline. Nonetheless, currently popular conceptions of "successful aging" still represent an extension of the individual and progressive view of human development (Baltes & Baltes, 1990).

As indicated by the expression *successful aging*, which is frequently used in life-span developmental psychology, there is an inherent assumption that development equates with "progress," which implies acquisition, struggle, and success. These terms are used to describe the first half of life and are thus assumed to continue into adulthood. Why should we think of life metaphorically as struggle and winning, which also connotes losing? Why do we believe that we should continue to succeed or progress? Who decides whether our lives are "successful"? We could select other words such as *meaningful* or *tasteful* to represent our lives. Kanji characters of the Japanese word *meaning* involve *Aji*, which translates as "taste, flavor, sense, impression, appreciation, enjoyment, and experience." Even if a person's life ended in what others might judge as complete failure, the "failed" person might still assess his or her life as he or she would assess the taste of food, using a variety of adjectives such as bitter, sour, salty, spicy, smoky, and so on. Though the person may not appear to have been successful, his or her life could have a great depth of meaning and been rich in human experience. Just as we cannot proclaim which is the most delicious food—fruits, vegetables, fish, or meat—we cannot presume to define success or progress for any person's life.

The individual and progressive view is apparent even in the writings of Levinson (1978), who was a strong critic of conventional developmental psychology. Levinson criticized the conventional approach of developmental psychology as characterized by the special treatment accorded to infancy and adolescence and insisted on the importance of development in the adult years. Taking the four seasons as an analogy for life, he argued that, just as it was meaningless to say that spring, for example, is better than autumn, in the

same way, no stage of life should be given special priority over any other stage. However, despite his metaphorical expression of the four seasons of life, what Levinson proposed as a developmental model for the adult years ended up being a stepped progressivism, as indicated in Figure 7.1. Recent trends toward a perspective of life-span development mean that more attention is now paid to development in the latter half of life. Despite such a shift to life-span perspectives, however, models of development, like Levinson's, are still mainly based on assumptions of individualism and progressivism.

CONTEXTUALISM AND CYCLICAL IMAGERY

In contrast to the modern conception of developmental psychology based on an image of individual progression, let us consider an alternative view, drawn from traditional Japanese images and from Buddhism—a view that conceives of the person as being enveloped in his or her context. Ancient Japanese tradition holds the belief that humans are embedded in nature, as found in religious beliefs such as the Kami (Harris, 2000). The Kami are animistic gods perceived both in all aspects of nature such as trees, waterfalls, and mountains, and in human activities and practices such as cultivating, cleaning, and crafting. The Kami are gods who live together with deified ancestral and historical figures. Another source of Japanese tradition is Buddhism. A fundamental idea of Buddhism is to describe reality in terms of process and relation rather than entity or substance. The central Buddhist teaching of nonself (*anatman*) asserts that there is no independent existence and all phenomena arise in interrelation with causes and conditions.

As pointed out by Aries (1960), the way the life cycle is depicted in art and folklore may reflect a culture's collective understanding in a given time period. Accordingly, the stages of human life are depicted in a chart of Kanshin Jukkai Mandala (Daienji Temple; Amino, Onishi, & Satake, 1999). This chart was used by Buddhist missionary nuns in the 17th–19th centuries to teach those people who could not read sutras to narrate religious lessons orally. In this chart, the images of life between the personal world and the natural world are represented as parallels. In the limited space of this painting, seasonal changes are symbolically depicted as the context or background for personal development. The composition is intended to show that human beings change according to what surrounds them—a house, mountains, fields, the seasons.

Humans are not depicted as individuals isolated from nature; their clothing and personal belongings reflect the social, cultural, and historical contexts in which they live. The people in this art are not represented in an individualistic fashion; rather, they reflect the human life as being wrapped in meaningful contexts. Furthermore, identities of people are changed from one stage to another. At the beginning and end of life, gender is not exhibited, but in the middle there is a mix of both male and female. People wear

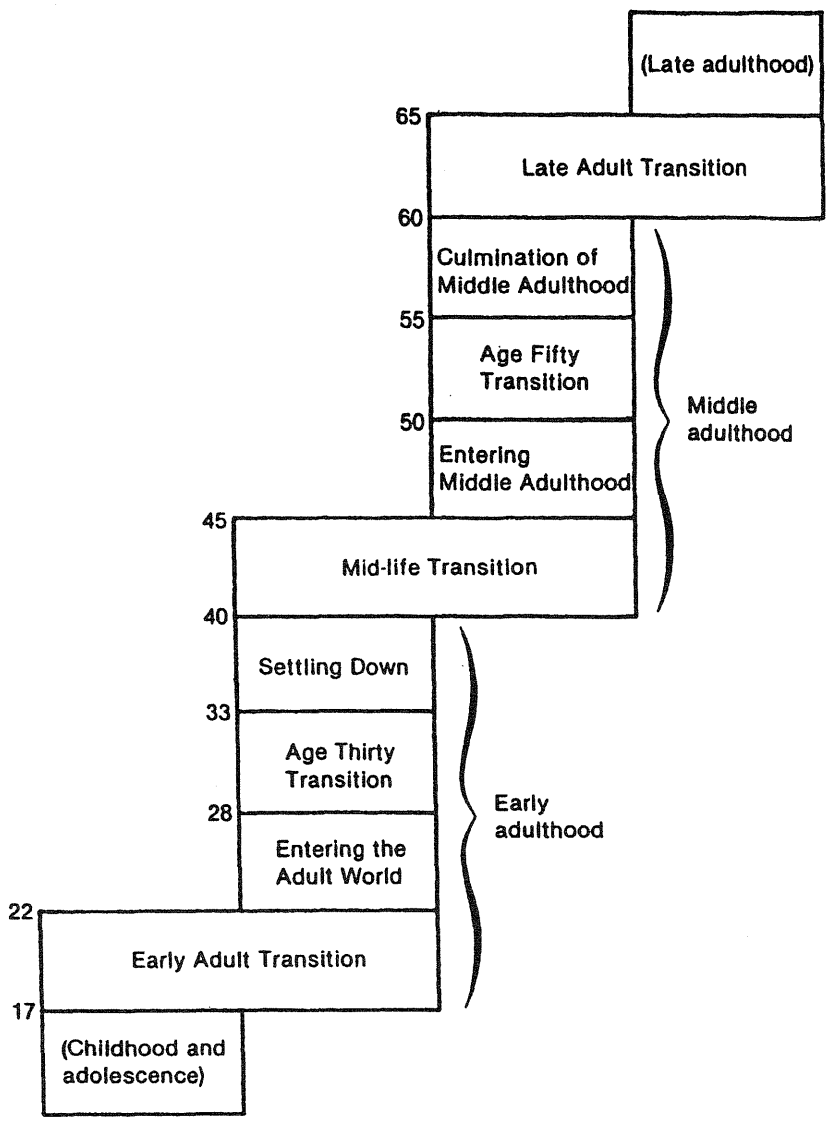


Figure 7.1. Levinson's stage model. From *The Seasons of a Man's Life* (p. 57) by D. Levinson, 1978, New York: Knopf. Copyright 1978 by Alfred A. Knopf, a division of Random House, Inc. Reprinted with permission.

different costumes, indicating the diversity of their social classes. The painting portrays a social representation of various groups of people on different time axes, rather than focusing on the consistent identity and development of any particular individual (Yamada, 2002).

This artistic chart includes not only the first half of the individual's life but also the latter half, subsuming the process of decline to death. The average life expectancy at the time this picture was originally drawn in the 17th century was only around 40, less than half the expected life in contemporary Japan. In the 17th century, very few people lived into old age. Nevertheless, it should be noted that the way in which old people have bent backs or carry their canes is carefully observed and expressed in detail in the limited space of the picture. We may presume that because there is as much detail devoted to old age as to youth, the fading process is also valued in life.

Now, I reconsider the linear progressive model of development that is related with the concept of time. Different understandings of time seem to coexist in many cultures. For example, in ancient Europe the time seemed to be linear in the Hebraic period but cyclic in the Hellenistic period. In East Asia, ancient Chinese also had two concepts of time (Loewe 1999). Time was seen as a thread or line that linked past and present. It provided a starting point toward which men and women could trace their ancestry and permanent existence of their kin, stretching from one generation to another. A separate image of time was the cyclical track: the repetitive cycle of birth, death, and rebirth charted alike in the movement of the stars, the growth and decay of vegetation, the births of sons and daughters, and the deaths of grandfathers and grandmothers.

These images have been transformed by scientific notions but still pervade fundamental thought. The Japanese concepts of time (*toki*), age (*toshi*), and generation are viewed as cyclic images. They are combined with the meanings "cyclic change of nature" and "seasonal transition." An appreciation of the natural world has always been an intrinsic part of Japanese culture. In particular, they value a sense of awareness regarding the seasonal changes, with their fleeting or fading beauty and attendant promises of renewal. New Year is a most important festival. The sense of starting afresh, returning to the origin, and regenerating life is a key concept of Japanese religious beliefs and daily life.

The cyclic time perspective seems to be combined with loss and renewal. One example of Japanese concepts of cyclic change and continuity is to be found at the highly sacred imperial shrine of Ise, a seventh-century building that is carefully rebuilt every 20 years. The regular reconstruction means both destroying the old building and preserving the original style of architecture freshly and continuously for over 1,000 years. It means both a repetition of loss and renewal of life and an eternal succession of life.

TOWARD AN INTEGRATION: ERIKSON'S MODEL AND GENERATIVITY

Erikson's (1950, 1982) model of human development may be considered a mixed model. It combines elements of the individual and the contextual, the linear progressive and the cyclical. His view of development attempts to maximize the power of the human ego and stresses the concept of identity and the continuity of an individual's personality. However, unlike many other developmental theorists, Erikson does take into account the individual's context. For example, his concept of identity includes interactions with social contexts to establish a psychosocial niche in the world (McAdams, 1985). Erikson also conceives of development as a process of

epigenesis, that is, a gradual, progressive unfolding with the acquisition of wisdom in old age positioned as the highest stage of ego integration. Therefore, his model is a stepped progressive model. However, unlike Piaget and Freud, who overestimated childhood and neglected developmental changes after aging, Erikson focused on adulthood and old age as well. Along with Carl Jung (1961), who valued integration in the latter half of life, Erikson was a pioneer in extending development across the entire life span. Regrettably his understanding of the ideal "successful life" was quite similar to other life-span researchers. Erikson neglected the natural loss of power or ability in old age and the appreciation of death in human life.

Erikson presents a theory in which development is more complex than the models based on a scheme of linear, quantitative functions. His model may be likened to a textile interwoven with warps and woofs. It is not a tree model in which progress, ascent, and differentiation take place linearly, but a model of a woven textile—a textured fabric made up from crossings of coetaneous lines from society to the individual and temporal lines from the past to the future. Still, his term *epigenesis* implies a linear unidirectional time perspective, reflective of a Western sensibility. Yet, from an Eastern perspective, one might ask: Does life "complete itself" within each individual, as indicated by the title of Erikson's (1982) last book, *The Life Cycle Completed*? The idea that a single human life has both an origin and an ultimate goal seems to be an expression of the West, and in particular, Judeo-Christian cosmology. The origin is the starting point where every creature is created, and the end is the completed conclusion or the terminal point of the Last Judgment. One's life is assumed to be similar to this time perspective that completely divides time between the origin and the goal. Though the term Erickson used is *life cycle*, this time perspective is used in linear models of development.

Erikson defined *generativity* as creating and producing things, people, and outcomes that are aimed at benefiting the next generation (see also McAdams & de St. Aubin, 1998). Generativity is a word coined by Erikson from the words *generation* and *generate*. This concept suggests the process of life succession from the parents' generation to that of the children in the sequence of generations: transmission of life to the next generation. Generativity involves concern in establishing and guiding the next generation and is connected with intergenerational relations beyond the ego of the individual (Kim & Harrison, 1999; Yamada, 1999, 2000). Generativity is a critical concept throughout the entire lifetime, though it is particularly meaningful in the latter half of life (McAdams & de St. Aubin, 1998). It is related to communication between generations, educational processes, genetic transmission, and even concerns with global issues. It suggests we should care for not only our own generation but also for the next and future generations. Generativity captures the process of creating a vision of our responsibilities for future generations and societies.

THE GENERATIVE LIFE CYCLE MODEL: AN ILLUSTRATION OF AN APPLE'S LIFE

My own generative life cycle model (GLCM) integrates Erikson's concept of generativity with a Japanese folk image. To show the typical illustration of GLCM, I offer here an example from my research. I sought to understand how young people visualized the life course by having them construct drawings that depict their own life stories (e.g., Yamada, 1988). The participants were 137 Japanese university students. They were directed to draw a map of their life and to draw their images freely, without regard for drawing skill. They were encouraged to include a variety of images in their drawings. Many students conceptualized their lives using images of progress and ascent. However, there were a number whose images were classified as representing a circular model, such as the image in Figure 7.2. Figure 7.2 shows an image of the cyclical nature of the life of an apple. Although Figure 7.2 is an especially unique drawing, it is illustrative of the GLCM's concepts, especially in regard to generativity.

The six stages of a self's life are listed below and are illustrated by the example in Figure 7.2 of Japanese youths' images of their lives (Yamada, 1999).

1. (There is a tree.)
2. The tree begins to bear fruits. The first fruits are very beautiful. My fruit (myself) has not appeared yet.
3. My fruit (myself) appears at this stage.
4. My fruit is not picked and I remain on the tree.
5. I have stayed behind, but I have fallen to the earth.
6. The earth is nourished (by my fruit).

The GLCM is defined as a way of looking at human development based primarily on the following five concepts:

1. Cycle model: Time perspectives and transitions of an individual's life and generations' lives are circular, spiral, and/or recurrent.
2. Changing process: In the cycle model, the concept of changing process itself is fundamental. It is compared with the linear model wherein the beginning (the origin) and the ending (the goal or purpose) are important.
3. Generating and dying: The changing process of generating, growing, decaying, dying, and regenerating is a naturally transitional function of the vital life.
4. Contextualism: The core concept is not the individual, the self, or the entity but the contextual relationships. An individual life is fundamentally related with others' lives, such as former and latter generations and other living things in nature.

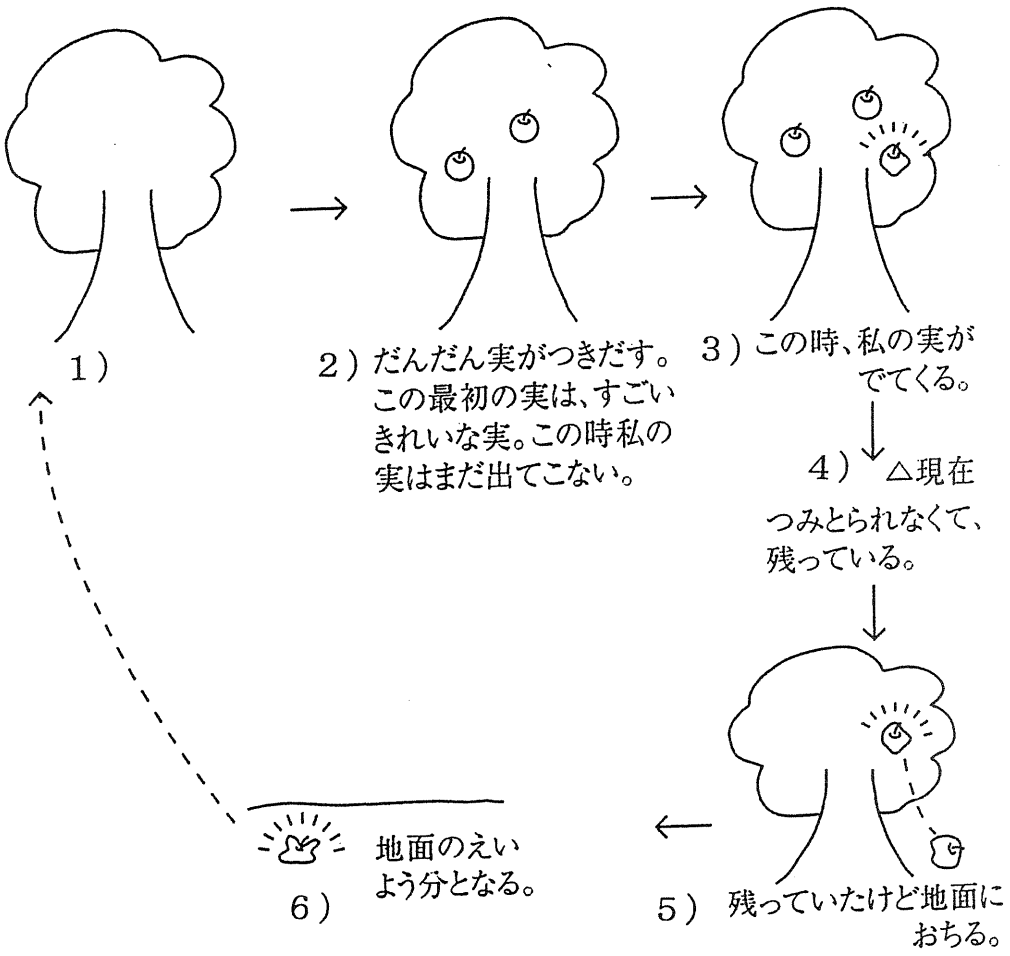


Figure 7.2. An illustration of the generative life cycle model: An apple's life cycle.

5. Meaning of life: No phase of an individual's life has a privileged status over any other phase because each phase has its own flavor, taste, and meaning.

In Figure 7.2, time is regarded as a cycle. In this conceptualization, the participant has chosen to represent his life by an apple. The Japanese word *mi*, which stands for "fruit," has the same pronunciation and the same origin as the Japanese word *mi*, meaning self and body. Therefore, the use of an apple as a metaphor for the self has a deeply symbolic meaning. Furthermore, the apple represents not only the self but also the dual meaning of the child and the parent: a symbol of maturity, fertility, and generativity (Yamada, 1988). An apple is a "child" of an apple tree and matures into an edible fruit; in its flesh are nested the seeds, its "children." An apple means both a child to the tree and a parent to the next generation. In this circular depiction of an apple's life, the fall of an apple does not represent a useless death but shows how the dropped fruit produces new life as the next generation. We

can imagine a larger life cycle beyond a person's individual life or ego identity.

A self's life does not begin with birth. Rather, the self is part of a circle of successive generations. In Figure 7.2, "my life" does not begin with the birth of the self as an individual. A tree, representing the larger environment or the place that gives birth to apples, is drawn first, followed by the initial two fruits, which are supposed to represent the parents. Then, "myself (my fruit)" as the third motif is born. "My apple" and other apples are not distinguishable from each other. The uniqueness or identity of myself is not emphasized. A self is one member of the family of apples and one part of a connected chain of generations of apples. According to this circular generative image, the question, "Which is the origin: the parent or the child?" is meaningless. A child is born by the parents; he or she then becomes a parent, who in turn gives birth to a child. From the Japanese perspective, attention is paid not to the beginning or the end, but to the movement of transition and succession and to the process of generating and regenerating. The generative process has a spontaneous function that vitalizes and renews a life. In the GLCM, individuals coexist in a circle of a nested ecosystem. Figure 7.2 shows a contextual model in which a self lives interactively as a coexistence within its ecosystem (Yamada, 1988). A life of an apple is embedded in a larger system of life, like the tree on which it grows, and a tree is enclosed in larger life cycles such as seasonal changes. Thus, one's life is nested within a series of interconnected, concentric life cycles.

Another claim in the GLCM is that decline and descent should not be viewed negatively, as there is an emphasis on the natural cycle of transition. The model of progress or ascent assumes that time flows straight in one direction and that descent and regression have negative connotations. In the circular model, which imagines time as a cyclic, recurrent process, even descent and regression lead to comeback or rebirth, so that the meanings between the positive and the negative are relative. When the self is viewed at the individual level in the progressive model, time is irreversible and rebirth is impossible. Figure 7.2 includes descent and decline rather than ascent and progress; and the former does not have negative connotations. The apple's dropping to the ground was included as one of the life phases because it is an integral part of how the participant understands the life cycle. Contrast these images with progressive linear models (see Levinson, 1978 and Figure 7.1) in which the self must aggressively climb up against the force of gravity. The person needs to acquire the power to climb over obstacles, overcome difficulties, and successfully attain a higher position. Along the way, he or she develops a series of skills and virtues that work to assure success and well-being. Indeed, Erikson's listing of stage virtues—from hope (Stage 1: Trust vs. Mistrust) to wisdom (Stage 8: Ego Integrity vs. Despair)—suggests a progressive developmental journey. Over time the protagonist of the story gains more and more resources to meet the challenges of aging and, finally, the despair

of facing death. By contrast, the images in Figure 7.2 show no motifs such as will, struggle, conquest, or success. The drawing shows a self naturally accepting a decaying self, instead of a self resisting or trying to conquer aging and death.

Figure 7.2 represents the notion that "my life" does not end with "my death." A life containing seeds does not end with death. In the last phase of the apple's life in Figure 7.2, the decayed apple is under the ground, invisible from above. The comment on the drawing is, "The apple becomes a nutrient for the earth." The dotted line in the drawing indicates that "myself in the earth" serves as nutrition for a subsequent life. The seeds of my fruit (my self) return to the earth, and the seeds will realize a succession to new lives of blossoms that will bear fruit in the future. When we think of the succession of life, it is interesting to note that the metaphor chosen is a fruit, specifically an apple. If the metaphor had been a flower, it would have emphasized the spring season of life in which the sexes have their initial encounter. By contrast, the fruit emphasizes the autumn season with a connotation of reproduction and generativity.

IMPLICATIONS AND DISCUSSIONS ABOUT GLCM

The progressive model reflects the view of Western culture from the 19th century, when modern science and industry developed. By contrast, the cyclical model reflects the naturalistic view that was the basis for premodern agricultural society. The concept of cycle is connected with the concept of ecological time that reflects seasonal changes as recurrence. At the same time, the cycle is connected with the concept of birth and rebirth as abstracted from plants that die in winter and sprout in spring. This kind of circular image of human life frequently has been seen in traditional culture. Tuboi (1984) analyzed Japanese rites of passage in the form of a circular chart showing how the human life cycle was regarded as overlapping with the cycle of the growth of rice plants. The Japanese word *toshi* (age) means both crops such as rice plants and an age including a year and a time. In this way, crops, which nurture human lives, were analogized to human beings. It was assumed that rice plants develop in the following sequence: sprouting, growing, bearing fruit, death in seed, sprouting, and so on. Modern scientific thinking has ignored organic cosmology as "unscientific," "primitive," or "premodern." Japan is no longer a society whose main economic activity is agriculture. We are in a highly sophisticated age of information technology. The GLCM does not imply a nostalgic revival of the images of a simpler agricultural society. However, the GLCM does suggest elegance and truth in the cyclical patterns of the natural order that may apply to human life as well as all other living things.

The GLCM is also based on notions drawn from Buddhist cosmology. But it is crucial to note that the meaning of the cycle in GLCM is also differ-

ent from that in Buddhism. In Buddhism, *cycle* refers to transmigration of souls, or the wheel of life. Buddhism accepts the Indian presupposition that living beings are trapped in a continual cycle of birth and death, with rebirth determined by one's previous actions. The release from this cycle of rebirth and suffering is the transcendence called *Nirvana*. This is considered a fundamental precept of Buddhism, but it is not really germane to conceptualizing the vital cyclical relationship between generating and regenerating in the GLCM.

Another key concept of Buddhism that is integrated in the GLCM is the idea of transition or impermanence. The concept of transition is that everything—every function, energy, and power—appears and disappears, one after another, and that the universe is not constant but continuously moving. The *Abhidharma-kosa*, an important Buddhist text, teaches that the process of appearance and disappearance (birth and death) consists of four phases. The first phase is *jati*, generating; the second, *sthiti*, staying or being at rest; the third, *jara*, transforming, changing or declining; and the fourth, *anityata*, perishing or decaying (Saigusa, 1977). This life cosmology is in striking contrast to that of the West, as represented in the Judeo-Christian perspective. The Judeo-Christian life story is characterized by the creation of creatures by the Creator, the active selection of purpose or the right way of one's life, and attaining permanent or immortal life by going up to Heaven at the end of life.

The GLCM incorporates the continuity of life or the immortality of life that members of every culture maintain. Humans have always contemplated what happens when one's physical existence ends in death. When we confront the dying process, we cannot neglect images of the soul and the spirit. In another study, I asked 327 Japanese university students and 234 French university students to construct images of "the soul" (Yamada & Kato, 2001). The students were asked to draw an image of the relationships between the people in this world and those in the next world and of the soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Among the interesting results in this study was the finding that the majority of Japanese students (63.7%) imagined the soul returning to this world after visiting the next world, whereas only 37.8% of the French students made such drawings. The majority of all students who conceived of the eventual return of the soul from the next world back to this one depicted souls being reborn into human wombs or as babies. The key concept of these images is making the connection between former generations and future generations. We should note how the Japanese students' depiction of the soul after death differs from Western traditional ideas, such as Plato's "immortality of the soul." Plato's concept of immortality dualistically contrasts the integrity of the immaterial soul with the decomposition and dissolution of the material body. Since Plato, much of Western traditional thinking has considered the soul as an eternally unchanging, ultimate entity (Vernette, 1998). Yet, the Japanese regard the soul as a changing, renewing, and recurring spirit.

In the images of circular cosmology found in our research (Yamada & Kato, 2001), Japanese depict rebirth into human beings, including dead ancestors and future newborn babies. This interaction with their ancestors allows them to feel that they occupy a certain position in a long succession of related lives. Japanese share some conceptualization of ancestors with East Asian people. This concept of the succession of generations is different from the Chinese concept of kinship, however, which is a linear model like a string or a thread of the permanent existence of the kin (Loewe, 1999). It is essential for the GCLM that people feel their lives are an animate part of a larger cycle of life from generation to generation—an ongoing project.

CONCLUSION

Recall the generative image in Figure 7.2 that interconnects death and rebirth: The seeds hidden in the earth suggest an implicit connection indicated by the dotted line. I suggest that the circular concept of one's life story that constructs a linkage from death to the following birth is a generative function. The Japanese construct generativity as one generation's caring for and linkage not only to the succeeding generation but also to preceding generations. The apple story (Figure 7.2) emphasizes that the chain of life remains constant, whereas individual life is transient. What transcends the limit of one's life is not the image of "eternal life" but the image of "a continuing cycle of life." Continuity of life is not equal to immortality; continuity of life assures that the life cycle of human beings persists. The cycle of life never ends in individual death because each individual and each generation is born anew out of the previous generation, just as the apple became a nutrient for a tree in the ecosystem and was passed on to the generation of new lives. Individual life and death are thus interwoven into the large, continuing cycle of life.

I suggest that generativity concerns not only future generations for which we cannot care directly. It seems to me that generativity should be interpreted as an intergenerational life cycle or in an even broader sense as a spiritual life cycle implying continuity of life that stretches both forward and *backward*. I do not mean that we should accept the existence of the soul, the spirit, reincarnation, or an afterlife. Rather, I think that we should acknowledge that the question of afterlife may be a universal dilemma for all of humankind. Every culture throughout time has developed images and stories related to the roles of life, death, and afterlife. A redefined generativity responds to humankind's deepest need for the succession of life by acknowledging the continuity of life through death and rebirth. Again, we should not expect a redefinition of generativity to encompass a belief in reincarnation. Yet, a redefined generativity considers, as the traditional Japanese conception does, a feeling of being closely interrelated with past generations, one's

ancestors, and nature. Also, we should note that for the Japanese, importance is placed on generations more than individual family and kinship. The redefined generativity allows a conceptual shift away from individualism, anthropocentrism, and egocentrism toward a way of conceptualizing the self that is centered on one's role as a link in culture and history, as well as how one relates to living nature or the ecosystem. Thus, a redefined generativity places an emphasis on the generation, rather than the individual, and asserts that both individuals and generations are embedded in their psychosocial contexts, reaching forward into future, unborn generations and back into past generations of ancestors. This definition of generativity is the building block of the GLCM.

The GLCM suggests a new view of human development, particularly in its conceptualization of time, the generative process, the shift in emphasis from individual to generation, and the insistence that all phases of the life cycle have appropriately important meanings. When time is construed as cyclical, rather than unidirectional, generational care and societal concern go both back into the past and forward into the future. The GLCM argues for a conceptual shift from individualism and egocentrism to a way of thinking centered on the generative life cycle that leads to respect for all generations, past, present, and future. The GLCM also redefines old age and death. According to the GLCM's perspective on decline and death, the old are valued as much as children and youths, especially because the elderly pass on their gifts of memory and tradition to the following generations.

We live in a sophisticated technological society in which we are surrounded by mounting ecological and social problems. There is now, more than ever, the critical need to develop the concept of generativity for the survival of our future generations. A redefined generativity emphasizes the nonlinearity of time, and the vital function of generating and regenerating. In so doing, the generations are linked, forward and backward, in never-ending cycles of birth and rebirth. It is hoped this emphasis on the generative process may lead to reverence for every cycle of life on earth. That is, similar to rebirth stories that are thought to encourage people to care for generations yet unborn and younger people to care for ancestors they have never seen, a generativity that respects all generations would also honor all of human history and the natural world in which history unfolds. When we conceptualize our lives as the linkage between the past and the present, we take on the responsibility for providing a safe and healthy world in reverence for all past generations and in hope for all future ones.

REFERENCES

Amino, Y., Onishi, H., & Satake, A. (Eds.). (1999). *Jinsei no Kaidan* [The staircase of life]. Tokyo: Fukuinkan Shoten.

Ariès, P. (1960). *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Règime* [Centuries of childhood: A social history of family life]. Paris: Editions du Seuil.

Baltes, P. B. (1987). Theoretical propositions of life-span developmental psychology: On the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology, 23*, 611–626.

Baltes, P. B., & Baltes, M. M. (1990). Psychological perspectives on successful aging: The model of selective optimization with compensation. In P. B. Baltes & M. M. Baltes (Eds.), *Successful aging: Perspectives from the behavioral sciences* (pp. 1–34). Cambridge, England: Cambridge University Press.

Bandura, A. (1977). *Social learning theory* (2nd ed.). Morristown, NJ: Prentice-Hall.

Bronfenbrenner, U. (1994). Ecological models of human development. In T. Husten & T. N. Postlewaite (Eds.), *International encyclopedia of education* (2nd ed.). New York: Elsevier.

Elder, G. H., Jr. (1995). The life course paradigm: Social change and individual development. In P. Moen, G. H. Elder, Jr., & K. Luscher (Eds.), *Examining lives in context: Perspectives on the ecology of human development* (pp. 101–139). Washington, DC: American Psychological Association.

Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: Norton.

Erikson, E. H. (1982). *The life cycle completed*. New York: Norton.

Gilligan, C. (1982). *In a different voice*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Harris, V. (Ed.). (2001). *Shinto: The sacred art of ancient Japan*. London: The British Museum Press.

Jacques, E. (1965). Death and the midlife crisis. *International Journal of Psychoanalysis, 46*, 502–514.

Jung, C. (1961). *Memories, dreams, reflections*, New York: Vintage.

Kim, T.-C., & Harrison, R. (1999). (Eds.). *Self and future generations*. Cambridge, England: White Horse Press.

Kohlberg, L. (1969). Stage and sequence: The cognitive–developmental approach to socialization. In D. A. Goslin (Ed.), *Handbook of socialization theory and research* (pp. 347–480). Skokie, IL: Rand McNally.

Levinson, D. J. (1978). *The seasons of a man's life*. New York: Knopf.

Loevinger, J. (1976). *Ego development*. San Francisco: Jossey-Bass.

Loewe, M. (1999). Cyclical and linear concepts of time in China. In K. Lippincott (Ed.), *The story of time* (pp. 76–79). London: Merrell Holberton.

McAdams, D. P. (1985). *Power, intimacy, and the life story: Personological inquiries into identity*. New York: Guilford Press.

McAdams, D. P., & de St. Aubin, E. (1998). (Eds.). *Generativity and adult development: How and why we care for the next generation*. Washington, DC: American Psychological Association.

Miller, P. (1993). *Theories of developmental psychology* (3rd ed.). San Francisco: Freeman.

Neugarten, B. (1968). (Ed.). *Middle age and aging*. Chicago: University of Chicago Press.

Oe, K. (1986). *M/T to mori no fushigi no monogatari* [A mysterious story among M/T and the forest]. Tokyo: Iwanami Syoten.

Saigusa, M. (1977). The concept of the time in Buddhism. In F. Tagima (Ed.), *Jikan kukan* [The time and the space] (pp. 225–261). Tokyo: Iwanami Shoten.

Sampson, E. E. (1989). The challenge of social change for psychology: Globalization and psychology's theory of the person. *American Psychologist, 44*, 914–921.

Tuboi, H. (1984). Murashakai to tukagirei [Mura-community and the rites of passage]. *Nihon Minzoku Bunka Taikei*, 8, 455–506.

Vernette, J. (1998). *L'au-delà* [The afterlife]. Paris: Presses Universitaires de France.

Yamada, Y. (1988). *Watashi wo tutumu hahanarumono* [Self wrapped by the mother: Japanese mentality viewed through image drawings]. Tokyo: Yuhikaku.

Yamada, Y. (1999). *The image maps of life*. Paper presented at the 10th Congress of Japanese Developmental Psychology (p. 540). Japan Society of Developmental Psychology, Tokyo. (In Japanese).

Yamada, Y. (2000). *Jinsei wo monogataru* [Telling generative life stories]. Kyoto: Mineruba Shobo.

Yamada, Y. (2002). Models of life-span developmental psychology: A construction of the generative life cycle model including the concept of "death." *Kyoto University Research Studies in Education, 48*, 39–62.

Yamada, Y., & Kato, Y. (2001). Images of the soul and the circulatory cosmology of life: Psychological models of folk representations in Japanese and French youths' drawings. *Kyoto University Research Studies in Education, 47*, 1–27.

3-2

日欧に於ける「生まれ変わり」
—イメージの由来を探って—

カール・ベッカー

序文

本研究は、生まれ変わりに関する回答者の想像するイメージを調査することを目的にしている。この調査では、生まれ変わりが実際に存在するのかどうか（実在性）、理論的に存在し得るものなのかどうか（可能性）、人々に信じられているかどうか（信憑性）等は問うていない。信じようと信じまいと、回答者には生まれ変わりのイメージを描け、と要請しているので、本人の見解・信仰・死生観などとは関係無く、イメージが問題にされているのである。

比喩的に言うならば、この調査は「ネッシー」を描け、「UFO」を描け、というような、相手の想像力を引き出すような質問の仕方てである。「ネッシー」や「UFO」の実在性・可能性・信憑性の否定を回答者に許さず、飽くまでも教室で「描け」と要請した時に問題となるのは、相手が描いたイメージの原因や出典であろう。その原因や出典を調べるのならば、勿論率直に回答者に対して、そのことを聞くのが恐らく一番手っ取り早く、分かり易い方法に違いない。万が一回答者が「ネッシー」を見かけたり、「UFO」を体験したりしたことがあり、そのような返事をが得られれば非常に興味深い追跡調査にも繋がるであろう。自分の生まれ変わりを覚えているという子供が何万人に一人くらい居るので、同様にそのような記憶を調査すれば心理学上非常に興味深い研究にもなる。

しかしながら、本研究では、実在性・可能性・信憑性を予め質問していないと同時に、回答者の描いたイメージの出所を率直に回答者に訊くこともしていない。（確かに、各国の宗教心に関する調査は存在するが、それらのサンプルと調査法を無理やり本研究のサンプルに当てはめることは余りにも無謀であり、学問上有意義とは到底思えない。従って、生まれ変わりの実在性・可能性・信憑性に関する回答者の見解・信仰・死生観などは、本研究ではブラックボックスとして棚上げせざるを得ないのである。）

但し、「ネッシー」や「UFO」、「生まれ変わり」などのイメージの出所については直接的に訊かない場合でも、ある程度、学問的な見解は提示できるであろう。たとえ現象自体が存在していなくても、それぞれ回答者の文化の中ではその現象のイメージがどのように表彰・伝播・流行・理解されてきているか、という研究が出来るわけである。本研究は日本と外国の世界観の

比較研究と違い、イメージ表現の研究であるが故に、その一端として、日本と外国における生まれ変わりのイメージの理解の歴史を明らかにする必要性はあるであろう。それが本章の目的である。

大きく分けて、「生まれ変わりのイメージ」の歴史は３つの時代に分類できる。即ち（１）古典的な宗教思想、（２）その近現代の伝播、及び（３）最近のマスコミや若者文化である。アジアとヨーロッパのそれぞれの文化において、その三つの過程を整理してみよう。

（１）アジアの古典的な宗教思想

生まれ変わり思想は、多くの原始農業社会の信仰形態に見られるが、一番古くからそれを文字化して表現したのは、言うまでもなくヒンズー教であった。今から五千年ほど前に、生まれ変わりの表象とされるシール（印）が、インヅス川のモヘンジョダロなどから発掘されているし、世界最古とされる宗教経典リグヴェーダにも生まれ変わりを意味する文がある。釈尊が生まれる前から、生まれ変わりの解釈は様々な流派に分かれており、またその在り方は宗教論争の中心的論点とまで発展したのである。

しかしヒンズー教は、神道や道教同様、基本的に民族宗教であるが故に、自分の世界観を異文化へ伝えようという試みは薄い。生まれ変わり思想が極東や南洋まで広がったのは、個別文化を越えられた仏教の影響である。その理由を端的に述べれば、仏教は生老病死の苦しみから解脱・涅槃への道を提示するが、それが必要となるのも生まれ変わり思想が動かし難い事実と言う前提に立っているからである。換言すれば、もしも人生が一回きりであり、天国の手前の試練であるならば、一回きりの生老病死の苦しみを耐えるか、自殺するか、いずれにせよ遠からずその生老病死の苦しみは終わるわけである。しかし、長い生涯の苦しみを耐えても、自殺しても、まだ無数回の生まれ変わり、四苦八苦が半永久的に連続するからこそ、釈尊がその生まれ変わりの輪からの解脱を探求したのである。ヒンズー教同様、仏教においても、生まれ変わりはごく当たり前の避け難い事実と考えられている。そして個人の自我が消えてしまう涅槃が四苦八苦からの唯一の「逃げ道」であり、万物の得難い究極的目標とまでされるのである。

仏教が全アジアに広がり流布するにつれて、生まれ変わり思想も勿論伝播されるようになるが、それぞれの文化の受け入れが異なり、例えば南洋では比較的に柔軟に受け入れられたのに対して、極東における先祖崇拝の土台が強く影響し、生まれ変わりの思想は余り深く根を下ろせなかったのである。生まれ変わりは極東では信じられていないことは、先祖に対する墓参り、霊前報告、お盆の行事などで示されている。つまり、死者が数週間の内に別の身体に生まれ変わるのなら、その死者の霊を呼び出したり報告したりすることが出来るはずがない。逆に墓参り、霊前報告、お盆の行事などをするということは、他界した祖父母の御霊は未だ生前のままであり、既に隣の新生児や犬猫に生まれ変わっているとは思われていない証拠でもある。

しかし、奈良時代から、佛教のジャタカ説話や胎蔵曼荼羅などによって生まれ変わりの言葉と発想自体は確かに伝播されてきている。空海などの紹介によって日本で知れ渡るようになる胎蔵曼荼羅は、『大日経』所説の一部で、その中の外金剛部院（最外院、さいげいん）というところで六道輪廻の姿や状況が写されている。平安朝中期になると、密教僧や公家の間で親しまれた胎蔵曼荼羅の生まれ変わりの発想は、民俗的な姿に変形し、美術の六道絵や文学の源氏物語で流行するようになる。また鎌倉期に入ると、日本霊異記の次に、宇治拾遺、平家物語、（亡父が唐土の第三皇子に生まれ変わった）浜松中納言物語、等々、生まれ変わりをテーマにした数々

の名作が出回るようになる。また美術としては、人間が前世から現世へと生まれ変わる三世輪廻を12の因果関係で描く十二因縁絵巻も胎蔵曼荼羅よりも盛んになる。そして僧侶の中で、一遍上人が生まれ変わりを本格的に説き、日蓮聖人が自ずから自分自身が釈尊の生まれ変わりであるなどと、生まれ変わりを信じた（或いは便宜上、利用した？）宗教家もあらわれるのである。

（2）日本の近現代における伝播

時代が変わるにつれて、生まれ変わりの思想は、宗教的な美術が文学のみならず、庶民的なものにまで広がったのである。室町時代の御伽草子、世阿弥の能楽論、後に近松門左衛門や鶴屋南北の桜姫の歌舞伎心中物語などでも、主人公は誰々の生まれ変わりであるという粗筋が度々見かけられる。やがて徳川家光は、家康の生まれ変わりと自分自身で名乗るようにもなる。当時、周囲の家来が実際に家光が家康の生まれ変わりであると認めたかどうかは別として、生まれ変わり自体に対する違和感が示されなかったということは、生まれ変わりの思想そのものは完璧に受け入れられていた証拠とも言えよう。

宗教家も真面目に生まれ変わりの思想を取り上げ続けていた。江戸後期の国学者平田篤胤（1776-1843）は、霊界や霊魂の死後の行方に強い関心を示し、前世の記憶を持っていた子供の聞き入れ調査まで行った。（但し、篤胤の名作、「霊の真柱」は、最終的には生まれ変わりを拒み、むしろキリスト教的な天国思想に近い他界観を提唱した。）更に、小泉八雲で知られるラフカディオハーンは篤胤の聞き入れ調査の事例を英文でも紹介している。

同時代に、天理教の教祖中山みき（1798-1887）も、人間は人間のみで生まれ変わるとし、他界した親戚が自分の子供として生まれ変わったなどと発言しており、生まれ変わり思想を積極的に教義に入れ込んでいる。（面白いことには、ヒンズー教や佛教の本格的な生まれ変わりの信仰と同様に、天理教も墓参りやお盆行事を拒否する傾向にあるが、ミキ自身（及び教会の中心人物？）だけが二度と生まれ変わらず、永遠の霊体として祀られている。）尚、明治期の天理教は日本人口の 4-5 %まで上り、その影響は決して小さくはない。佛教や天理教が言う因縁という概念は、前世からの影響を意味し、現在も広く使われている発想である。

同時代の生まれ変わり思想は、決して宗教家の世界に限っておらず、落語まで広く引用されている。因果や輪廻の民間信仰を背景にし、落語に幽霊や怪談を導入したのは「怪談噺（化物噺）の祖」とも呼ばれている林屋正蔵(はやしやしょうぞう)（1780-1842）であった。そして三遊亭円朝（1839-1900、本名出淵次郎吉）も累(かさね)解脱物語を題材にし、『累ヶ淵』や『牡丹灯籠』などで因果応報や生まれ変わりを描写した落語で大ヒットをするように至る。

以上の様な大衆文化的影響によってか、当時の俗信から、男と女の双子の時、大阪の北河内では畜生腹と嫌い、佐渡ではメットゴ（夫婦子）と呼び、心中した者の生まれ変わりと信じられていた。

（3）日本の最近のマスコミや若者文化

２０世紀の日本においても「輪廻」と名付けられる彫刻、絵画、歌や画像は実に多い。夏目漱石の弟子、森田草平（1881-1949）は1925年に大作『輪廻』（1923-25）を出版することで、歴史小説に新分野を開いたとされていえる。また、シナリオ作家野田高梧（1893-1968）も生まれ変わり思想の影響を以て、松竹の脚本を書き、特に小津安二郎（1903-63）監督と組んで撮影

された『東京物語』(1953) などで、イギリスのサザランド賞を受賞することで、海外までも生まれ変わりの思想を伝えたと言われている。

さらに、山田風太郎 (1922-) の新聞連載小説『魔界転生』(1964-66) や、三島由紀夫 (1925-70) の『新潮』に連載する長編小説『豊饒の海』(1965-70) の主人公などが生まれ変わりを繰り返す設定となっている。また山田や三島と同様に、世界的に賛美される漫画家、手塚治虫 (1928-89) の長年に亙る大作『火の鳥』が生まれ変わりの思想を豊かに利用し、東洋的な歴史観・自然観を描いていると付け加えねばならない。以上は、極一部にしか過ぎないが、生まれ変わりのイメージが現在に至っても広く出回っていることを証明していると言えよう。

このように、日本の近現代史を振り返ってみた場合、生まれ変わりを本格的に確信している現代日本人が少ない割には、生まれ変わりのテーマ自体は落語や文学、映画や漫画などで、実に良く知られているものである。従って、日本の大学生は生まれ変わりを各自が本気に信じていなくても、中有と再生の循環を描けと要請された場合、それなりのイメージを持つわけである。

(1) ヨーロッパの古典的な宗教思想

生まれ変わりの思想はアジア生まれのもので、キリスト教文化圏とされる欧米ではあまり広く知られていないと考える日本人が多いのかも知れない。しかし「信じる」西洋人が日本人同様、一・二割しかいなくとも、その発想を知らない西洋人は皆無に近いであろう。そのルーツはヨーロッパの古典的な宗教思想に始まり、そして日本同様、最近の哲学・文学・マスコミの世界にまで及ぶのである。以下で簡単に纏めて見よう。

キリスト教の教義によれば、人間は地上に一度のみ生まれて、死んでから二度と地上には生まれ変わらない。従って、生まれ変わり思想が無い、ということになる。一回きりの人生の後、暫く世の終りを待ちながら居眠り、最後の審判によって天国か地獄かで永遠な賞罰を受ける。これは東洋でも良く知られている正式な教義上の解釈である。

しかし、だからと言って、西洋宗教思想に生まれ変わりが無いということでは決してない。むしろ、生まれ変わりの哲学がプラトン以前より強く唱えられる様になり、またキリスト教の歴史上、異端扱いの弾圧こそが繰り返して流行するからであった。特に 2-3 世紀ころ、エジプトや中近東では、仏教層とキリスト教の神父が交流した為か、生まれ変わりを提唱するキリスト教徒も続発したのである。この論文では、キリスト教の長い異端史・弾圧史を全部取り上げる余裕はない。現在の若いフランス人 (欧米人) に一番広く知られ、影響の強い歴史的一例だけを取り上げよう。それはアルビジョア十字軍 (1209ー29) の話である。

現在で言うと、フランスの西南部からスペイン、イタリア、スイスの一部にかけて、生まれ変わりを信じるカタリ (ギリシア語で「清浄」) 派のキリスト教徒が 11 世紀から栄えた。このカタリ派は 1151ー56 年頃ケルンとトリールでよく知られ、第三ラテラン公会議で破門宣言を言い渡された。南フランスではアルビジョア派とも呼ばれたが、その宗教的・政治的情熱を恐れて、ローマ教会は彼らに対して、有名なアルビジョア十字軍を起こした。そこでは多くの生まれ変わりを信じたカタリ派のキリスト教徒が大量虐殺され、モンセギュール城の陥落 (1244) によってフランス地方の信者は全滅したと言われる。(イタリアでは 15-16 世紀まで活動した形跡もある。) アルビジョア十字軍によって、生まれ変わりは「信じてはいけないのだ」ということが強く再認識される反面、逆にその思想自体は広く知られ、そして欧米の歴史教科書にま

でも存在を残すこととなる。従って、仏教やヒンズー教における生まれ変わりは知らなくとも、母国の歴史を知る西欧人の多くは、アルビジョア十字軍及びそれを引き起こした生まれ変わりの発想自体は知っている筈である。

六〇年代の末に、モンセギュール城の陥落を生まれた時から記憶しているという意外な発言をする青年達が出現し、それに基づき、アルビジョア十字軍とカタリ派の研究が急に栄えた。1970-1990 年代にかけて、研究論文から単なる文庫本にいたるまで、何十冊もの本がフランス語と英語とで出版され、信じるか否かは別にして、カタリ派の生まれ変わり思想が新たに知れ渡ったのである。

16 世紀以降のヨーロッパでは、(同時代の日本と同様)、生まれ変わり思想は信仰の対象というよりも文学、美術、演劇等を通して一般的に知られている。実際に信じられていなくとも、比喩的なイメージとしては生まれ変わりの思想が西欧の著名な詩人や文人に繰り返し提唱されてきたことは、教養ある者にとっては言うまでもないことであろう。

(2) ヨーロッパの近現代における伝播

例えばドイツでは、かの有名なゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe、1749-1832) が、『ファウスト』の中で生まれ変わりのテーマを取り上げている。19 世紀においては、ヒンズー教や仏教に関する関心が高まるにつれて、ドイツ哲学までもが影響を受けているのである。ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer、1788-1860) は、ドイツの代表的な厭世(えんせい)思想家である。その代表作『意志と表象としての世界』(Die Welt als Wille und Vorstellung) でも生まれ変わりの思想を真実として取り上げ、「ヨーロッパは、全世界の中でも唯一生まれ変わり思想を信じない、変な地域だ」とまで言っている。尚、その意志哲学を継承するニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche、1844-1900) も 1883ー85 年に書き上げた『ツァラトゥストラはかく語った』(Also sprach Zarathustra) で生まれ変わり思想を提唱し、永遠の回帰として知らしめている。

尚、ニーチェの影響というよりもゲーテ思想の研究によって、生まれ変わりを信じるようになるもう一人のドイツ哲学者は、シュタイナー (Rudolf Steiner、1861-1925) である。『自由の哲学』(1894) を初めとし、人智学 (Anthroposophie) を唱えるシュタイナーはゲーテアーヌという研究機関やバルドルフ学校を設立した (1919)。欧米のみならず、世界の教育界に現在まで多大な影響を及ぼしていることは言うまでもないことであろう。

当時のフランスでは、哲学者の世界よりも小説の世界で「生まれ変わり」の発想が広く取り上げられていた。例えば、バルザック (Honore de Balzac、1799-1850) は『セラフィータ』(1835) で、女流作家で高名なサンド (George Sand、本名オーロール・デュパン Aurore Dupin、1804-76) は神秘主義的大作『コンスュエロ』(1842ー43) で、生まれ変わり的な思想を導入していた。バルザックやサンドがたびたび「冒涜的」或いは「スキャンダル的」とされる評価を受けたことによって、皮肉なことに逆に世界的な注目を浴びたのである。更に有名なフランスの劇作家ユゴー (Victor Hugo、1802-85) も生まれ変わりを思い起こさせるセリフや場面を何カ所も描いているのである。

しかし 19 世紀ヨーロッパの生まれ変わり思想を語るのであれば、なんと言っても、独仏よりは植民地の印度と深い関わりを持つ英国が先進的と言わねばならないであろう。その最も早い提唱者の一人は、詩人・画家であったブレイク (William Blake、1757-1827) であろう。ブ

レイクの晩作『ミルトン』(1804ー08) や『エルサレム』(1804ー20) では、死と再生や魂の不滅性というテーマが特に印象的に描かれている。当時のイギリス人はブレイクを異端視し、理解しなかったが、百年後にはアイルランドの詩人イェーツ (William Butler Yeats、1865-1939) がブレイクの思想を再提唱し、それによって今はブレイクの死生観を知らないイギリス人はいないであろう。

当時、ブレイクよりはるかに高く評価された詩人には、19 世紀初頭のロマン主義文学を代表するシェリー (Percy Bysshe Shelley、1792-1822) がいる。最初の長詩『マブ女王』(1813 年) を初めとし、シェリーはたびたび生まれ変わりのイメージを取り入れている。またビクトリア朝のイギリス詩を代表するブラウニング (Robert Browning、1812-89) は『パラケルスス』(1835) の中で生まれ変わりを唱えているし、ブラウニングと良く並べられるテニソン (Alfred Lord Tennyson、1809-92) も「魂の経路」を描く追憶詩の『イン・メモリアム』(In Memoriam A. H. H.、1850 年刊) の中でもこの思想を取り上げている。後の詩人にも見られる傾向だが、身近な友人に死なれてしまうことによって、霊魂の不滅や歴史を超える循環を考えるようになると言える。ブラウニングやテニソンにおいては、この影響が偉大であった。さらに、牧師の子として生まれる小説家、バトラー (Samuel Butler、1835-1902) でも、ケンブリッジ大学時代から書き出す個人ノートで、生まれ変わりを信じるという記述を多数している。(Yeats)

ヒンズー教の影響を受け、イギリスに伝えたのは、インド生れ・インド勤務のノーベル文学賞受賞者キップリング (Joseph Rudyard Kipling、1865-1936) であった。インド人とインド在住のイギリス人との出会いや思想を描く小説や、動物の世界を人間の世界と同様に描く「ジャングル・ブック」などで、馴染みやすい形でヒンズー教的な生まれ変わりの死生観を扱っている。そして百年前のブレイクと違い、二〇世紀初期のヨーロッパはその思想を大変歓迎した。生まれ変わりを唱える、キプリングに負けないほどの人気を博したイギリス作家には、ショーやドイルも挙げられる。劇作家のショー (George Bernard Shaw、1856-1950) は宇宙の「生命力」を認識し、「創造的進化」に添うべき生まれ変わり説が『メトセラへ帰れ』(1921) でも取り上げられている。また世界中の子供に愛読されているシャーロック・ホームズの創作者である推理作家ドイル (Sir Arthur Conan Doyle、1859-1930) は、インド思想や心霊学に大変な興味を示し、その関心は「心霊学の歴史」の中でも明らかである。

インドやヒンズー教の影響を受けたのは、決してドイツ人やイギリス人だけではなかった。アメリカの思想家エマソン (Ralph Waldo Emerson、1803-82) は、その「超越主義」を通して、物質より霊の世界がより重要だと述べている。そしてその影響下で詩人のホイットマン (Walt Whitman、1819-92) も、代表作の『ぼく自身の歌』などで、社会に対する危機感を示すと同時に、一時代を越える自我の不滅と再生の可能性にまでふれている。

尚、哲学、教育、文学の世界に限らず、生まれ変わり思想は天理教と同時代の西洋の新宗教にも現れている。その代表的なものは、神智学 Theosophie である。1875 年に、ロシア生れのブラバッスキイ夫人 (Helena Petrovna Blavatsky、1831-91) がアメリカのニューヨークに神智協会を設立する。神智学は神秘的体験を大事にする宗教で、世界諸宗教を統合する目的をも持った。79 年にブラバッスキイ夫人はインドに渡り、86 年には協会の本部をインドのマドラスに設けた。そこからイギリスの女性社会改革家のベザント (Annie Besant、1847-1933) が協会に加入する。ベザントは 1893 年インドに渡り、ヒンズー教的思想を受け入れ、ベナレス・ヒンドゥー大学を創設した。その大学では多くの日本人や英国人留学生がインド思想を勉強してい

る。またベザントは神智協会を通じて教育向上運動を推進し、そのTheosophie運動はスタイナーのAnthroposophie運動のように、ヨーロッパ各地で哲学的な教育活動力を発揮したのである。

アメリカやイギリスからインドへ移民したブラバッスキイ夫人やベザントとは逆で、東からニューヨークへ移民する宗教的詩人もいた。そのもっとも影響力の大きかったのは、おそらくレバノンのジブラーン（Jibran Khalil Jibran、1883-1931）であろう。瞑想的詩人としてその名を不朽のものにしたのは『予言者』(1923)で、霊的世界に人間の魂を解き放つこの話によって、生まれ変わりの夢が今も消えぬ魅力と影響力を欧米の若者達に発揮したと言わねばならない。

以上見てきたように、欧米では生まれ変わり思想が百年余り前から、異端的宗教思想としてだけではなく、むしろ小説や詩、哲学や宗教、さらに教育のテーマの一つとしてさえとらえられている。従って、少しでも教養ある人ならば、生まれ変わりの言葉の意味するところを理解し、そのイメージを十分に持っているわけである。それは全べて一種の文化的底流として、現在の西欧にも流れているに違いない。但し、現在の大学生には、更に大きな情報源であるマスコミがある。以下では、この十年前後、どの様な形でマスコミが生まれ変わりを取り上げてきているかをさらに検証してみよう。

（3）ヨーロッパの最近のマスコミや若者文化

本研究の対象となった回答者の殆どが二十歳前後の若者であった。なかには、無意識にせよ文化的教養から、生まれ変わりに関して何らかのイメージを抱いた者も少なくないであろう。但し、若者に最も影響を及ぼしているものは、伝統文化などよりは、マスコミであるに違いない。特にこの十数年の間、生まれ変わりを取り上げるマスコミの報道は後を絶たない。それも大きく分けて、政治方面、芸術方面、宗教方面という三種類に分類できよう。以下ではそれぞれを簡単に見直そう。

一つの世界的なニュースは、89年ダライ・ラマのノーベル平和賞受賞であろう。ダライ・ラマは、ラマ教とも呼ばれるチベット仏教では生き佛の最高者の称号だが、第14代テンジン・ギャツォ（1935-　）は中国の激しい弾圧・虐殺の下、1959年にラサの反乱からインドに亡命し、ダラムサーラに亡命政権を樹立している。彼は欧米各地で平和やチベット亡命政府の立場を訴えながら、仏教の教義をもいたるところで説法している。特にこのチベット仏教では、ラマが他界する際に、そのラマの記憶を持っている子供が捜され、ラマの生まれ変わりとされているが、このことはもはや周知の事実と言えよう。

これが特に目立った理由は、パンチェン・ラマの相続問題であった。ダライ・ラマがノーベル平和賞受賞を受賞した89年に、もう一人のチベット国の最高政治指導者パンチェン・ラマは解脱(他界)した。その後、チベット仏教僧が数年をかけて、伝統的な宗教方式でその後継者を捜し求めた。その結果、チベットの首都ラサ市の近く、ラリ地区に住む六歳のゲジュン・チェキ・ニーマという男の子が次代のパンチェン・ラマであることを、ダライ・ラマは95年3月に確認し、宣言したのである。チベット人が大喜びしたのとうらはらに、中国政府は慌てて支配下に置くべく代わりになる子供を検討した。ニーマ君の支持者が広がるに連れて、慌てた中国政府は半年後の11月上旬に新たな候補者を探すために、共産党に忠実なチベット僧100人ほどを任命した。三週間後には、六歳の男の子三人ほどを候補に挙げ、彼らを一人、ギャルツエン・

ノルブに決定した。皮肉なことに、12月8日には、宗教を異端視する中国支配下のチベット共産党政権が盛大な伝統宗教儀式によって、ノルブ君を正式に着任する大嘗祭を実行し、同時にニーマ君を逮捕してその後も解放しない。このデタラメな政治に対して、世界中のチベット人は反対を示し、チベット内でも命がけのデモが起こされた。

また数ヵ月後には、四歳のチベット系アメリカ人が、八年程前にシアトルで他界したデシャン・リンポチェ三世の生まれ変わりだと宣言され、デシャン・リンポチェ四世と認定された。四歳のデシャン・リンポチェ四世は、シアトルからカトマンズまで旅し、大勢のチベット系ネパール人に大歓迎された。尚、チベット人の中では、前米大統領のビル・クリントンが、五〇数年前に他界した宗教的指導者ガミャン・シェパの生まれ変わりだと信じられている、という報道までされている。

チベット人の信仰の是非をそもそも論じるつもりは全くない。飽くまでここで強調したいことは、過去五年間、生まれ変わりに関する新聞記事が政治面やニュース報道を飾ることが非常に多くなった、ということである。従って、何も生まれ変わりの事実を信じていなくとも、マスコミを耳にする通常の西洋人は生まれ変わりの発想自体を知るようになったに違いない。

（4）西洋における仏教の発展

生まれ変わりを信じるヒンズー教や佛教に対する欧米人の関心は、ビートルズ以来強まりつつある。チベットのリンポチェ（ラマ僧）、ベトナム戦争を非難した僧侶、禅宗や日蓮宗の日系僧などが、移民の社会に対してのみならず、白人の社会に対しても布教活動と翻訳出版を盛んに行い、数々の修道寺院を設立し、何万人もの市民に親しまれてきている。民族宗教にとどまりやすいヒンズー教への改宗者がごく僅かであるのに対し、佛教を本格的に自分の「道」と考える欧米人は少なくない。改宗者の過半数が大学院卒で、平均年収６万ドル（800 万円）以上であることから、改宗者の多くは中流階級以上の層から来ていることは明らかである(Coleman)。

西洋宗教の中で、来世を殆ど語らないのはユダヤ教であるが、スピッツやシャピーロの様な有名なラッビ（ユダヤ教の祭司）自身が「生まれ変わりを信じてはいけないのか」と、真面目な信者によく訊かれると言う。そして西洋仏教における白人「老師」や「道場長」の多くは、ユダヤ教と異なった死生観を求めてのユダヤ系からの改宗者である。熟慮することなく佛教を受け継ぐ日本の檀家と違い、ユダヤ教からの改宗者は佛教の瞑想、菜食、禁欲などを本格的に実践する傾向にある。何故ならば、多くの日本人僧侶よりも生まれ変わりを含む佛教思想を強く信じるからである。

七十年代まで、西洋における多くの仏教信者はロンドン、パリ、ロスなど、移民の多い大都会に集中していたが、この四半世紀、フランスのボルドー、アメリカのロッキー山脈やアジロンダック山脈など、移民の影響とは到底思えない地域にまでも深く浸透してきている。そして彼らは「ヒッピー」や「異端者」とは必ずしも見なされず、尊敬すべき思想家として受け入れられている場合も少なくない。またリチャード・ギアやティナ・ターナーのように、国際的に注目を浴びている映画俳優や女優も熱心に佛教を信じていることが広く知られるようになってきている。

仏教やダライ・ラマに関する知識が広がると共に、政治面のニュース以外に、宗教心理学や宗教社会学関係でも、生まれ変わりをテーマにする本や論文が 80 年代以降激増しつづけている。平田篤胤が前世を記憶した日本の少年を調査した事を（１）で述べたが、現在でもその様な例

は世界的に見て少なくない。バージニア州立大学医学部を中心に、その様な症例を精神医学の観点から調査する研究講座まで成り立っている。そこではイアン・スティベンソンを初めとするバージニア医大の医師が、全世界から何百という症例を収集し分析している。本人が生まれる前に亡くなった別人の記憶や趣味・才能を持っているという、常識的な情報伝達手段では説明の付かないことが意外にあるのである。その多くの例は、義務教育以前の年齢、或いは、義務教育の無い社会で発見されている。ということは、子供が義務教育を受け始めると、前世までの記憶を保つ余裕がなくなるということであろうか。何千頁にも及ぶスティベンソン等の著書や発表が、著名な精神医学専門雑誌に出版され、その一部は和訳されている。中でも、ビルマで戦った日本兵がビルマの子供として生まれ変わる等の例は日本人の関心を引いている。更に、後退催眠術中、前世を思い出せる患者がいることから、「前世療法」という精神医学の治療法まで確立するに至っている。そしてカナダやアメリカの政府からも科研費が提供され、生まれ変わりは単なる迷信としてではなく、科学的仮説として調査されているのである。生まれ変わりの思想は、終末期医療の現場、ホスピス等での末期癌患者に対して、死への恐怖を和らげる為に大変有効に応用できるとも言われている。(Cf. Robert Saks and Kathleen Dowling Singh: Perfect Endings, a Conscious Approach to Death and Dying (from Hospice Accounts). 医学会においても、このような研究によって、生まれ変わりは真実であると確信する者もいれば、便宜上、治療の方便として利用する者もいるが、その是非は別にして、生まれ変わりという発想を知らない人は更に減っていると言えよう。

精神科医の専門分野のみならず、一般向きの雑誌やマスコミもこのようなテーマをしばしば取り上げている。90 年代に入ってから、タイム、ニュースウイーク、マクリーンズ等が天国、地獄、天使、死後の世界などについて言及し、カバー・ストーリーまで出している。アメリカの出版業界をリードする Publishers Weekly 誌が、生まれ変わりというテーマは非常に良く売れる分野であると宣言している。また、ファミコンのビデオ・ゲームや映画・テレビドラマでも、生まれ変わりは度々登場し、活字離れが進む現代子にとってもよく目にする話であることは、もはや言うまでもないことであろう。

生まれ変わりを含む、来世に関することを研究する宗教社会学者も、この数十年のトレンドを取り上げている。1950 年代まで遡ると、有名な人類学者ジェフリー・ゴーラー氏は 5000 人ものロンドン人について調査をし、その 24%もの人が何らかの生まれ変わりを信じていたと発表した。1969 年には、当時プリンストン大学で行っていたガラップ調査においてもフランス人とドイツ人の 1/4、イギリス人やアメリカ人の 1/5 が生まれ変わりを信じ、また若者の中での割合は更に高い、と報告している。またデンマーク教会が行った調査ではキリスト教の教義である死者の復活を信じる若者より、生まれ変わりを信じる若者の方が上回っているという、ある意味で困った結果まで報道されている。無論、原住民のアメリカン・インディアンやケルト、ドルイドなども生まれ変わりを信じていたようだが、アメリカン・インディアン文化やケルト音楽など、原住民に対する関心が高まるにつれて、生まれ変わりへの関心も付随して上がる傾向にあるのかも知れない。

結論を述べれば、生まれ変わりを信じる西洋人は未だ少数派であるにも関わらず、哲学や歴史教科書から様々な文学や映画、新聞、一般雑誌の心理学や社会学紹介まで、生まれ変わりの思想自体は、この百年以上に渡ってよく知られてきているわけである。そして更にこの十数年、生まれ変わりに対する関心ないし信仰は明らかに高まってきている。但し個々人の信仰の度合

いやイメージの起源・伝播については、本研究以外に更なる調査を待たねばならないであろう。

Sources Francaises

L'ABCdaire du bouddhisme. (2001) Paris: Flammarion.

Bacot, Jacques. (1997) Le Tibet Revolte. Paris: Editions Phebus.

Bechert, Heinz, et Gombrich, Richard. (1999) Le Monde du Bouddhisme. Thames & Hudson.

Butigieg, Corinne. (2001) Les Bouddhismes en France. Paris: Editions Quest France.

Combes, Claudette. (1993) Le Clair Visage de la mort. Paris: Maisnie Tredaniel.

Cornu, Philippe. (1998) Guide du bouddhisme Tibetain. Pairs: Livre de Poche.

Dagpo, Rinpoche. (1993) Le Dalai-Lama, Tibet en exile. Paris: Editions Olizane.

Deshayes, Laurent. (1997) Histoire du Tibet. Fayard.

Doan, Van Thong. (1993) Nhu'ng Bian Ae Tien Kiep Va Hau Kiep. Nha Xuat Ban: Nguon Song.

Douais, Celestin. (1980) Les Albigeois. New York: AMS Press.

Dupre, Jose. (1999) Catharisme et chretiente: la pensee dualiste dans le distin de l'Europe. Chancelade: La Clavellerie.

Durban, Pierre. (1968) Actualite du catharisme. Toulouse, Bordeaux: Cercle d'etudes et recherches de psychologie analytique.

Duvernoy, Jean. (1976) Le Catharisme. Toulouse: Privat.

Ennesch, Carmen. (1969) Les Cathares dans la cite. Paris: A & J Picard.

Georges, A. Des (1966) La Reincarnation des ames selon les traditions orientales et occidentals. Paris: Albin Michel.

Jouvenel, Marcelle de. (1993) La Seconde Vie. Paris: Sorlot-Lanore.

La Rencontre du bouddhisme et de l'Occident.(1999) Paris: Fayard.

Lehman, Steve. (1999) Les Tibetains. Paris: Editions Hoebeke.

Lenoir, Frederic. (1999) Le Bouddhisme en France. Paris: Fayard.

Levenson, Claude. (1998) Symboles du bouddhisme. Paris: Editions Assouline.

Misraki, Paul. (1974) L'Experience de l'apres-vie. Paris: Rpbert Laffont.

Morrannier, Jeanne. (1988) L'Univers spirituel, la mort est un reveil. Paris: Sorlot-Lanore.

Muller, Denis. (1986) Reincarnation et foi chretienne. Paris: Labor et Fides.

Neil, Fernand. (1965) Albigeois et Cathares. Paris: Presses universitaires de France.

Oldenbourg, Zoe. (1959) Le bucher de Montsegur, 16 Mars 1244. Paris: Gallimard.

Prieur, Jean (1994) Le Mystere Des Retours Eternels. Paris: Robert Laffont.

Rommeleure, Eric. (1997) Guide du Zen. Paris: Livre de Poche.

Ronce, Philippe. (1998) Guide des centers bouddhistes en France. Paris: Editions Noesis.

Saurat, Denis. (1948) La Religion esoterique de Victor Hugo. Paris: La Colombe.

Savini, Savino. (1958) Il Catahrismo italiano ed I suoi vescovi nei secoli XIII e XIV.

Firenze: F. LeMonnier.
Siemons, Jean-Louis. (1990) La Reincarnation. Paris: Retz.
Silburn, Lilian. (1997) Aux sources du bouddhisme. Paris: Fayard.
Sillard, Alain. (1998) Bouddhismes. Paris: Editions Le Sir – Nil editions.
Simonet, Monique. (1994) Realite de l'au-dela et transcommunications. Paris: Le Rocher et Age du Verseau.
Snelling, John. (1999) L'essentiel du bouddhisme. Paris: Calmann-Levy.
Stanley, Marie-Pia. (1989) Christianisme et reincarnation, vers la reconciliation. Paris: Or du Temps.
Thomas, Pascal. (1987) Le Reincarnation, oui ou non? Paris: Le Centurion.
Vernette, Jean. (1989) Reincarnation, Resurrection. Communiquer avec l'au-dela? Paris: Salvator.
Wild, Georg. (1970) Bogumilen und Katherer in ihrer Symbolik. Weisbaden: F. Steiner.

On Buddhism

Adeney, F. S & Muck, Terry C. (1998) "Economic Growth vs. Human well-being: An Interview with John Cobb." Buddhist-Christian Studies (Honolulu) 18, pp. 77-86.
American Buddhism: Methods and Findings in Recent Scholarship. (1999) Richmond, Surrey: Curzon.
"China Installs its Choice as Reincarnated Lama," New York Times Current Events Edition, Dec. 9, 1995, p. A4.
Coleman, James William. (1999) "The New Buddhism: Some Empirical Findings," in American Buddhism: Methods and Findings in Recent Scholarship. (1999) Richmond, Surrey: Curzon.
Coleman, James William. (2001) The New Buddhism: The Western Transformation of an Ancient Tradition. New York: Oxford University Press.
Forney, Matt. (1995) "Divide and Rule," Far Eastern Economic Review. 158 (48) Nov. 30, 1995, p. 26.
Forney, Matt. (1995) "Time Warp," Far Eastern Economic Review. 159 (44) Oct. 31, 1996, p. 27.
Guruswamy, Binaya. (1996) "Buddhist Monks Celebrate Seattle Lad's Arrival in Nepal," USA Today, Jan. 29, p. A10.
Morreale, Don. (1998) The Complete Guide to Buddhist America. Boston: Shambala.
Prebish, Charles, & Tanaka, Kenneth. (1998) The Faces of Buddhism in America. Berkeley: University of California Press.
Rapaport, Al. (1998) Buddhism in America: Proceedings of the First Buddhism in America Conference. Rutland, VT: Tuttle.
"Seattle Boy, 4, Enthroned as a Lama in Nepal," New York Times Current Events Edition, Jan. 29, 1996, p. A4.

Shoumatoff, Alex. (1996) "Sun without a Moon," Vanity Fair, 432, Aug. 1996, pp. 98-101.
"A Star is Reborn," The Economist. 335. London, May 20, 1995, p. 36.
Taye, Jamgon Kongtrul Lodro (1997) Enthronement: The Recognition of the Reincarnate Masters of Tibet and the Himalayas. Trans. Ngawang Zangpo. Snow Lion.
Thurman, Robert (1997) Inner Revolution. Riverhead,

On Reincarnation in the West

Abel, Allen. (1998) "Soul Survivors: Anthropologist Antonia Mills studies reincarnation for 30 years among Canada's native peoples." Saturday Night (Toronto) Sept. 1998, 113 (7) 33-4.
Atkinson, William W. (1980) Reincarnation and the Law of Karma: Yoga Pubs Society.
Banerjee, H. N. (1974) Lives Unlimited: Reincarnation East and West: Doubleday.
Berg, Philip S. (1984) Wheels of a Soul: Reincarnation: Your Life Today and Tomorrow: Kabbalah Learning Center.
Besant, Annie Wood (1983, 1996) Reincarnation: Theosophical Publishing House (Madras, India).
Beth, Rae. (1996) Reincarnation and the Dark Goddess: Lives and Teachings of a Priestess. Robert Hale & Company, Inc.
Bhaktivedanta, A. C. (1982) Coming Back: The Science of Reincarnation: Sankirtan Movement.
Birks, Walter. (1987) The Treasure of Montsegur: a Study of the Cathar Heresy and the Nature of the Cathar Secret. New York: Crucible.
Bluthardt, O.D. (1979) Kindergarten of the Universe: Introduction to the Realm of Metaphysics and Reincarnation. Vantage Press.
Bowman, Carol. (1997) Children's Past Lives: How Past Life Memories Affect Your Child. New York: Bantam.
Brennan, J. (1981) Reincarnation. Samuel Weiser.
Brownell, George B. (1981) Reincarnation. Sun Pub Co.
Burke, June K. (1998) Booklets: Reincarnation/Introduction to Meditation/The Decade of the Nineties. Burke-Srour Pubs.
Butler, Chris. (1987) Reincarnation Explained. Science Identity Foundation.
Cahlin, Michael. (1998) Reincarnation Certificates sold by Vedic Sciences Institute. San Francisco: PC World, 16 (11) Nov. 1998, p. 176.
Cannon, Dolores. (1993) A Soul Remembers Hiroshima. Ozark.
Chaney, Robert. (1984) Reincarnation: Cycle of Opportunity. Astara.
Chinmoy, Sri. (1974) Death and Reincarnation: Eternity's Voyage. Buddhist Pub. Group.
Christie-Murphy, David. (1981) Reincarnation: Ancient Beliefs and Modern Evidence. Newton Abbot, UK: David & Charles.
Clifford, Eth. (1982) Strange Reincarnation of Hendrik Verloom. Houghton Mifflin Co.

Cohen, Daniel. (1975) Mysteries of Reincarnation. Dodd Mead.
Connolly, Eileen (1984) Earthdance: A Romance of Reincarnation. Newcastle Pub.
Cooke, Hannah. (2000) When Someone Dies: A Practical Guide to Holistic Care at the End of Life. Boston: Butterworth-Heinemann.
Cooper, Irving Steiger. (1979) Reincarnation: A Hope of the World. Theosophical Pub House.
Coscia, Joseph F. (1981) Reincarnation of Bridgett. Exposition Press of Florida.
Costen, M. D. (1997) The Cathars and the Albigensian Crusade. Manchester: Manchester University Press.
Cranston, Sylvia/ Head, Joseph. (1968) Reincarnation: An East-West Anthology: Theosophical Pub House.
Cranston, Sylvia/ Head, Joseph (1979) Reincarnation: The Phoenix Fire Mystery: An East-West Dialogue on Death and Rebirth from the Worlds of Religion, Science, Psychology, Philosophy, and Art. New York: Warner Books.
Cranston, Sylvia & Williams, Carey. (1984) Reincarnation. New York: Julian Press.
Dallison. (1985) Yamamoto Returns: a True Story of Reincarnation. Unarius Pubs.
Dart, John. (1987) "New Age Ideas and Theological Vacuum: Can Churches Resist the Pull of the Paranormal?" Los Angeles Times, Feb. 14, 1987. Part 2, p. 4.
DeSilva, Lynn A. (1968) Reincarnation in Buddhist and Christian Thought. Colombo: Christian Literature Society of Ceylon.
Dethlefsen, Thorwald. (1977) Voices from Other Lives: Reincarnation As a Source of Healing. M Evans & Co.
Dixon, Jeane. (1970) Reincarnation and Prayers to Live By. William Morrow & Co.
Ebon, Martin. (1979) Reincarnation in the Twentieth Century. New American Library.
Edmonds, I. G. (1979) Other Lives: The Story of Reincarnation. McGraw-Hill.
Edwards, Paul. (1996) Reincarnation: A Critical Examination. Amherst, NY: Prometheus Books.
Ehrlich, Max. (1975) Reincarnation of Peter Proud. Bantam Books.
Ehrlich, Max. (1979) Reincarnation in Venice: Simon & Schuster.
Fisher, Joe, and Dalai Lama. (1985) The Case for Reincarnation. Bantam Books.
Fox, Thomas C. (1993) "Buddhism Blossoms in French Wine Country (Bordeaux)," National Catholic Reporter. July 16, 1993, pp. 11-13.
Freeman, James Dillet. (1986) Case for Reincarnation. Unity School of Christianity.
Gandy, Tily. (1984) Ten True Tales of Reincarnation. Carlton Press.
Gardner, Martin. (1997) Reincarnation Undressed. Free Inquiry, Summer 1997, 17 (3), 58-60.
Geisler, Norman L. and Amano, J. Yutaka. (1986) Reincarnation Sensation. Tyndale House.
Gilgun, John. (1981) Everything That Has Been Shall Be Again : The Reincarnation Fables of John Gilgun. Bieler Press.

Gnanasambandan, A.S. (1998) India: Cycles of Birth and Rebirth. UNESCO Courier, March, 1998; 51 (3) 14-18.

Graham, David. (1976) Practical Side of Reincarnation. Prentice Hall.

Grosso, M. (1975) Reliving Reincarnation Through Hypnosis: Exposition Press of Florida.

Guirdham, Arthur. (1986) We Are One Another: A Record of Group Reincarnation. Borgo Press.

Hall, Manly P. (1960) Astrology and Reincarnation. Philosophical Research Society.

Hall, Manly P. (1999) Reincarnation; The Cycle of Necessity. Philosophical Research Society Inc.

Head, Joseph, and Cranston, S.L. (1977a) Reincarnation in world thought. New York: Julian Press.

Head, Joseph, and Cranston, S.L. (Eds) (1986) Reincarnation: The Phoenix Fire Mystery, an East-West Dialogue on Death and Rebirth from the Worlds of Religion, Science, Psychology, Philosophy, Art. New York: Julian Press.

Hodgson, Joan. (1979) Reincarnation through the Zodiac. Circus Pubs.

Hodson, Geoffrey. (1967) Reincarnation: Fact or Fallacy. Theosophical Pub House.

Holzer H. (1975) Reincarnation Primer Patterns of Destiny. Barnes & Noble.

Holzer, Hans. (1985) Life Beyond Life: The Evidence of Reincarnation. Prentice Hall.

Holzer, Hans. (1985) Life Beyond Life: The Evidence of Reincarnation. Simon & Schuster.

Howard, Alan. (1980) Sex in the Light of Reincarnation and Freedom. St. George Book Service.

Howe, Quincy. (1974) Reincarnation for the Christian. Westminster John Knox Press.

Irwin,Rita. (1998) "Leadersihp Metaphors: Cycles of Carnations and Reincarnations." Art Education. July, 1998. 51 (4) 47-51.

Jones, Gladys V. (1984) Flowering Tree: A Mystical Interpretation of Reincarnation. Devorss.

Kear, Lynn. (1996) Reincarnation, a Selected Bibliography. Westport, CN: Greenwood.

Kear, Lynn. (1999) We're Here; An Investigation Into Gay Reincarnation. Brookhaven Publishing.

Kearl, Michael C. (1989) Endings: A Sociology of Death and Dying. New York: Oxford University Press.

Khan, Inayat. (1996) "The Soul's Journey (Sufism says souls journey to and from the earth)" Parabola, Summer, 1996; 21 (2) 57-61.

Klawinski, Ron. (1999) Chasing the Heretics: A Modern Journey through the Medieval Languedoc. St. Paul, MN: Hungry Mind Press.

Lansing, Carol. (1998) Power & Purity: Cathar Heresy in Medieval Italy. New York: Oxford University Press.

Leek, Sybil. (1974) Reincarnation: The Second Chance: Stein & Day.

Lenz, Frederick. (1979) Lifetimes: True Accounts of Reincarnation. Bobbs-Merrill.

Leonardi, Dell. (1975) The Reincarnation of John Wilkes Booth. Devin-Adair Pub.

Logan, Daniel. (1972) Your Eastern Star: Oriental Astrology, Reincarnation and the Future. William Morrow.

London, Jack (1987) Star Rover: The Great Reincarnation. Valley of the Sun.

MacGregor, Geddes. (1978) Reincarnation in Christianity: A New Vision of the Role of Rebirth in Christian Thought. Quest Books.

MacGregor, Geddes. (1982) Reincarnation as a Christian Hope. London: Macmillan.

MacReady, Robert (1981) Reincarnation of Robert MacReady. Kensington.

Mann, A. T. (1995) The Elements of Reincarnation. Element Books.

Martin, Eva. (1927) The Ring of Return. London. Philip Allan & Co.

Martin, Walter. (1977) Riddle of Reincarnation. Gospel Light.

Miles, Eustace. (1983) Life After Life or the Theory of Reincarnation. Sun Pub Co.

Moody, Raymond A., Jr. (1991) Coming Back. New York: Bantam.

Moore, Marcia, and Douglas, Mark. (1968) Reincarnation Key to Immortality. Arcane Books

Morey, Robert A. (1980) Reincarnation and Christianity. Bethany House.

Morris, Michael, and Peng, Kaiping. (1994) Culture and Cause: American and Chinese Attributions for Social and Physical Events. Journal of Personality and Social Psychology. 67 (6), Dec. 1994, 949-971.

Mullin, Glenn H., Dalai Lama, Valerie Shepherd. (1999) The Fourteen Dalai Lamas: A Sacred Legacy of Reincarnation. Clear Light Publishing.

Onwubalili, James K. (1983) "Belief in Reincarnation is Fading in Nigeria," New York Times, Sept. 27, 1983. C2.

Osborn, Arthur W. (1967) Meaning of Personal Existence: In the Light of Paranormal Phenomena, Reincarnation, and Mystical Experience. Theosophical Pub House.

Paramananda, Swami. (1961) Reincarnation & Immortality. Vedanta Center.

Perkins, James Scudday. (1977) Experiencing Reincarnation. Theosophical Pub House.

Prophet, Mark L. and Elizabeth C. (1986) Missing Texts, Karma and Reincarnation, Mysteries of the Higher Self (Lost Teachings of Jesus). Summit/Beacon.

Querido, Rene. (1977) Questions and Answers on Reincarnation and Karma. Rudolph Steiner College.

Raphael, Lev. (2001) "Do We Get a Second Chance?" The Jerusalem Report. June 4, 2001, p. 46.

Riley, Betty. (1984) Veil Too Thin: Reincarnation Out of Control. Valley of the Sun.

Risedorf, Gwendolyn. (1977) Born Today, Born Yesterday : Reincarnation. Olympic Marketing.

Rogo, D. Scott. (1985) Search for Yesterday: A Critical Examination of the Evidence for Reincarnation. Prentice Hall.

Roll, William G. (1998) "Where Reincarnation and Biology Intersect," Journal of Parapsychology, Dec. 1998, 62 (4) 363-370.

Rosen, Steven. (1997) The Reincarnation Controversy: Uncovering the Truth in the World

Religions. Torchlight.
Schulman, Martin. (1975) Karmic Astrology: the Moon's Nodes and Reincarnation. Samuel Weiser.
Schulman, Martin. (1977) Karmic Astrology: Retrogrades and Reincarnation. Samuel Weiser.
Shapiro, Rabbi. (1998) "Death and what's Next" Tikkun 13(4) July/Aug., pp. 32ff.
Sharma, Ishwar Chandra. (1975) Cayce, Karma, and Reincarnation. Harper Collins.
Sheler, Jeffrey. (2000) "Hell Hath No Fury," US News & World Report, Jan 31, 2000, 128 (4) 44-54.
Smith, R. (1985) Searching for Healing Through Reincarnation. Hi Barbaree Press.
Snyder, John. (1984) Reincarnation versus Resurrection. Moody Press.
Spanos, Nicholas, et al. (1991) Secondary Enactments During Hypnotic Past-Life Regression. Journal of Personality and Social Psychology. 61 (2), Aug. 1991, 308-320.
Spitz, Elie Kaplan. (2000) Does the Soul Survive: A Jewish Journey to Belief in Afterlife, Past Lives, and Living with a Purpose. CA: Jewish Lights.
"Stir in Danish Church over Reincarnation," (1994) Christian Century (Chicago) March 2, 1994; 111 (7) p. 222.
Stearn, Jess. (1986) Yoga, Youth and Reincarnation. Bantam Books.
Steiner, Rudolf. (1980) Reincarnation and Immortality: Harper Collins.
Steiner, Rudolf. (1986) The Principle of Spiritual Economy in Connection with Questions of Reincarnation: An Aspect of the Spiritual Guidance of Man. Anthroposophic Press.
Stevenson, Ian. (1975) Cases of the Reincarnation Type: India. Univ. Press of Virginia.
Stevenson, Ian. (1978) Cases of the Reincarnation Type. 10 Cases in Sri Lanka. Univ. Press of Virginia.
Stevenson, Ian. (1980) Cases of the Reincarnation Type. Univ. Press of Virginia.
Stevenson, Ian. (1980) Twenty Cases Suggestive of Reincarnation. Univ. Press of Virginia.
Stevenson, Ian. (1983) Cases of the Reincarnation Type: Twelve Cases in Thailand and Burma. Univ. Press of Virginia.
Sullivan, Lawrence E. ed. (1989) Death, Afterlife, and the Soul. New York: Macmillan.
Sweeney, Camille. (1997) The Afterlife, As I See It. New York Times Magazine, Dec. 7, 1997, Sec. 6, p. 124.
Takashimaya, Miki. (1999) Ancient Egyptians Live On. Yomiuri Shimbun, Sept. 9, 1999, p. 7.
Taylor, Albert (1996) Soul Traveler: A Guide to Out-of-Body Experiences and the Wonders Beyond. Dutton.
Tingley, Katherine. (1981) Reincarnation. Sun Pub Co.
Van Auken, John. (1987) Born Again and Again: How Reincarnation Occurs, Why & What It Means to You! Inner Vision.
Van Den Tak, Richard. (1981) Scientific Proof of the Existence of Reincarnation and Transmigration. Todd & Honeywell.

Van Praagh, James (1997) Talking to Heaven. Dutton.
Viney, Geoff. (1994) Surviving Death: Evidence of the Afterlife. New York: St. Martin's.
Walker, Benjamin. (1981) Masks of the Soul: The Facts Behind Reincarnation. Newcastle.
Weiss, Brian L. (1988) Many Lives, Many Masters. Fireside.
Weiss, Brian L. (1993) Through Time into Healing. Touchstone.
Weiss, Brian L. (1997) Only Love is Real: A True Story of Soulmates Reunited. Warner.
Woodward, K. L. et al. (1989) "Heaven," Newsweek. March 27, 1989, pp. 52 ff.
Woodward, K. L. et al. (1993) "Angels," Newsweek. Dec. 27, 1989, pp. 52 ff.
Wright, Leoline L. (1975) Reincarnation: A Lost Chord in Modern Thought. Theosophical Pub House.
Yankelovich Monitor Minute. Belief in the Beyond Growing Sharply. USA Today. April 20, 1998, p. 1A.

Images in Modern Media/Fiction

Ansen, David. (1987) Stairways to Heaven. Newsweek, November 16, 1987. p. 108.
Barasch, Lynne. (1998) Old Friends (reincarnation as animals). Farrar, Straus & Giroux.
"Dream Mother: Mary Sutton reincarnated as Jenny Cockell," People Weekly, Oct. 3, 1994; 42 (14) p. 79f.
Esquival, Laura. (1996) The Law of Love. Crown.
Evans, Bruce & Giddeon, Raynold. (1987) "Made in Heaven," (film).
Ferran, Tom. Spiritless Show on Afterlife's Allure. Plain Dealer, Oct. 19, 1994, 9E.
Garrett, Lynn. New Roads to Meaning. Publishers Weekly. Aug. 12, 1996; 243 (33) p. 37.
Harrison, Nick. (1998) Spinning Spiritual Tales that Sell. Publishers Weekly. Aug. 17, 1998, 245 (33), S6-S14.
Horwitz, Jane. (1996) "Heaven: It's a Dog's Afterlife (Films "All Dogs Go to Heaven" and "Oliver & Company" show even animals reincarnate)" Washington Post, April 4, 1996, C7.
Jensen, Jeff. (1998) Whose Afterlife is It, Anyway? Entertainment Weekly, Dec. 4, 1998; 461, pp. 54-58.
Kumai, Kei. (1996) Deep River (Film of Endo Shuusaku's novel.)
Lanctot, Denise. (1997) Have You Lived Before? Cosmopolitan, Sep. 1997; 223 (3): 328-333.
Mantell, Suzanne. (1998) Shedding a Brighter and Broader Light. Publishers Weekly. Apr. 13, 1998, 245 (15), 30-43.
Mattox, W. R. (1998) Hell Deserves as Much Respect as Heaven. USA Today, Oct. 29, 1998, p. 15A.
Pardun, Carol J. & McKee, Kathy B. (1995) "Strange Bedfellows: Symbols of Religion and Sexuality on MTV," Youth & Society, June, 1995; 26 (4), 438-449.
Peck, M. Scott. (1996) In Heaven as on Earth: A Vision of the Afterlife. Hyperion.
Segrest, Susan A. (1996) Born Again (past-life stories of children in Asia). New Woman,

April 1996; 26 (4) 48-56.

Roof, Wade Clark (1993) A Generation of Seekers: The Spiritual Journeys of the Baby Boom Generation. San Francisco: Harper.

Spanos, Nicholas P. et al (1991) Secondary Identity Enactments During Hypnotic Past-Life Regression, A Sociocognitive Perspective. Journal of Personality and Social Psychology, 61:2, August 1991, pp. 308-320.

Taylor, Sally. Pilgrimages on the Pan American Highway: Religion and Spirituality are as Hot in Spanish and Portuguese as they are in English These Days. Publishers Weekly. Sept. 15, 1997, 244 (38), 30-33.

Wall, James M. (1995) Films of Longing. The Christian Century, Sept. 13, 1995; 112 (26) 835ff.

"Weird Science at Steiner School (Curriculum Includes Reincarnation)" Skeptical Inquirer, Fall, 1991; 16 (1), pp. 23-4.

Wickens, Barbara. (1996) I was Guenevere (Reborn as Laurel Phelan). MacLean's, Feb. 26, 1996, 109 (9) p. 71f.

Williams, Niall. (1999) As it is in Heaven. Warner.

Winston, Kimberley. (1998) Publishing Not Perishing. Publishers Weekly, Nov. 16, 1998; 245 (46) S6-S10.

On Media and Communication of Ideas

Bryant, Jennings, and Zillman, Dolf, eds. (1986) Perspectives on Media Effects. Hillsdale, NJ: L. Erlbaum Associates.

Carlson, Les et al. (1993) A Content Analysis of Environmental Advertising Claims: A Matrix Method Approach. Journal of Advertising. Sept. 1993; 22 (3) p. 27 ff.

Holsti, Ole R. (1991) Content Analysis for the Social Sciences and Humanities. Reading, MA: Addison-Wesley.

Jowett, Garth S., Jarvie, Ian C., & Fuller, Kathryn H. (1996) Children and the Movies: Media Influence and the Payne Fund Controversy. New York: Cambridge University Press.

Kolbe, Richard H. and Burnett, Melissa S. (1991) "Content Analysis Research: An Examination of Applications with Directions for Improving Research Reliability and Objectivity," Journal of Consumer Research 18 (September) 243-250.

"Learning to Watch," Technology & Learning. Nov.-Dec. 1997. 18 (4), p. 52.

James, E. L. & VandenBergh, B. G. (1990) "An Information Content Comparison of Magazine Ads Across a Response Continuum," Journal of Advertising. 19 (2) 23-29.

Lemart, James B. (1981) Does Mass Communication Change Public Opinion After All? A New Approach to Effects Analysis. Chicago: Nelson-Hall.

Pardun, Carol J. and Kathy B. McKee (1995) Strange Bedfellows: Symbols of Religion and Sexuality on MTV. Youth & Society, 26: 4, June, 1995, pp. 438-449.

Perrault, William D. & Leigh, Laurence E. (1989) "Reliability of Nominal Data Based on Qualitative Judgments," Journal of Marketing Research. 26 (May), 135-148.

Podro, Michael. (1998) Depiction. New Haven: Yale University Press.

Postman, Neil (1981) "TV's Disastrous Impact on Children," US News & World Report. Jan. 19, 1981. p. 43ff.

Richey, Warren. (1996) Group Enlists Parents to Fight TV Violence; Attorneys General Decry TV Violence. Nov. 13, 1996, p. 3.

Vaughn, Stephen. (1997) Sin and Censorship: The Catholic Church and the Motion Picture Industry / Children and the Movies: Media Influence and the Payne Fund Controversy. Film Quarterly, Fall, 1997. 51 (1), 59-61.

Weimann, Gabriel. Communicating Unreality. Thousand Oaks, CA: Sage, 2000.

3-3

子どものまえに他者が現れるとき
―生成する物語としての賢治童話―

矢野智司

わたくしという現象は
仮定された有機交流電燈の
ひとつの青い照明です
（あらゆる透明な幽霊の複合体）
風景やみんなといつしよに
せはしくせはしく明滅しながら
いかにもたしかにともりつづける
因果交流電燈の
ひとつの青い照明です
（宮沢賢治『春と修羅』の「序」より

第１章　「子ども問題」という物語

「子ども問題」というテーマは、問題に先行するある構えを想起させる。その構えとは、子どもが起こすさまざまな諸問題を、たとえば「登校拒否」や「いじめ」と名づけ、それを教育学的・心理学的・社会学的観点から分析し、有効な解決手段を提示しようとする一連のプロセスを発動させようとする構えである。このとき、私たちは医学的な問題解決モデルにたって問題をとらえている。

医者は、まず患者の病状を注意深く観察し検査し、その観察と検査の結果をもとに診断をくだし処方箋を書き、処方箋にしたがって病気を治癒しようとする。このような医学モデルは、直線的な因果関係の機構として取りだすことのできる局所的な病状の場合にはとても有効である。しかし、病状を直線的な因果関係で提示できないときには、このモデルは役にたたないだけでなく、病状を悪化させる危険性をもっている。ところで、経験が教えるところによると、教育の「問題」事象で、原因が一義的に特定され問題の解決された事例はほとんどといってない。教育の「問題」事象のどれを取りあげてもその因果関係は直線的ではなく、複雑に錯綜しながら循環しており、局所的に病状の因果関係の機構を確定することは困難なのである。

もともと、医学モデルで教育の「問題」事象をとらえることができるという構えには、子どもを客観的に観察し記述し理解することができるという前提があった。医学モデルを目指す実証科学の方法論にしたがえば、子どもに質問したり、あるいは子どもの生活を注意深く観察したり、実験をしたり、テストをしたり、統計をとったりすることによって、「子ども問題」を理解可能な処方箋的言説に変換することができるはずであった。しかしそれは本当に可能なのだろうか。

この子どもの理解という課題は、精神科医が直面している精神的な病者の理解や、人類学者が直面している文化を異にする人々の理解と同様の学問的な困難さに直面している。その理由は、客観的な記述ということの理論的困難さに由来している。それは、主観的な思いこみを徹底的に排除し、できうるかぎり客観的な観察のうえで書かれた記述といえども、事実の収集や選択や省略といった編集作業において、またなにより言葉によって複数の事実間の有機的な構造化を実現することにおいて、「物語」の構造を不可避的にもたざるをえないということである。つまり、記述とは、リアリズムが信じていた鏡のように現実を模写することなどではなく、「物語」として「現実」を「再構築」することなのである。このことは、教育学や心理学によって制作された子どもについての記述にもあてはまる。記述者は、好むと好まざると、あるいは意識しようとしまいと、子どもについて書くことにおいて、「子どもについての物語」を読者に提示していることになる。

しかし、子どもについての記述も「物語」であるということから、子どもについての記述は、どれも信用のおけない主観的な思いこみにすぎないという結論が直ちに導かれるわけではない。反対に、子どもについての記述も一つの物語であるという自覚から出発すると、記述者に新たな構えが可能性として開かれることになる。この新しい構えにたつとき、これまでの子どもについての記述の機能が変わるばかりか、記述の価値をはかる基準も異なるものとなる。

これまでの実証科学における記述の機能は、できうるかぎり主観を排して子どもの現状についての客観的な記述をすることであり、その価値の基準はこうしてできあがった記述が「客観的な事実」にどれほど近いかということであった。しかし、このような客観的な記述も構成された物語の一つであるという自覚をもつとき、記述＝物語の機能は記述者（大人）と被記述者（子ども）との関係においてなんらかの意味を実現することであり、評価の基準はどのような意味がそこで実現されたのかということになる。

従来の教育学のテクストでは、作者はテクストの外部にたち、超越的な視点から、被教育者（子ども）の生を「客観的」・「実証的」にとらえ、「彼あるいは彼女らの物語」として、客観化され標準化された発達段階の物語を作りだしてきたからである。この「発達の物語」は、誕生から死まで生の全体を見通すことのできる全能の作者によって構築された閉じた物語世界である。この物語は正典（カノン）として教師や親や子どもにたいして現実に規制力・強制力をもち、この物語のうちに生が全面的に回収されるように作られている。このような物語を作ることが可能なのは、人間の生成変容を共同体内部における「社会化－発達」として縮約することによってである。社会的有能性を基準にして閉じた物語を作ることができる。しかし、閉じられた物語はその物語の内容がどれほど優れていようと、閉じているというその形式自体において人間の多様な生成変容を否定してしまう。「物語」自体の向こう側を考える必要があるのではないだろうか＊1。

物語であることを自覚する教育学の作者は、作者自身がテクストのなかの時間に定位し、子どもという他者との出会いを、自身の生成とのかかわりで、自身の生涯全体の課題として物語を制作することになる。しかし、それは、「彼あるいは彼女の物語」と「私という物語」とが結局は一つの声に結び合わされる弁証法的な物語ではない。それでは、モノローグが複数化するにすぎない。他者の声が入るとき、物語はモノローグではなく、多数の声が響くポリフォニーとなる。他者の声は弁証法には回収されず、したがって物語は完結せず、たえず意味を開いていく「生成する物語」へと変わるのである（矢野 1999）。

しかし、教育学のテクストでこのような「生成する物語」を実現した例はない（cf. 矢野 2000a 20

00b）。「生成する物語」としての教育学を構想するための補助線を引く作業として、本論文では宮沢賢治の作品を「生成する物語」の一例として検討してみたい。賢治の童話は、読者が子どもという点でテクストが子どもに開かれているだけでなく、その読者である子どもを共同体の外部のできるだけ遠くへと連れだそうとするところに特徴がある＊2。ここでは教育学の作者が子どもと出会うのではなく、子ども自身が共同体の外部の他者と出会う。その意味で「生成する物語」としての教育学の直接のモデルとなるわけではないが、私たちはそのような外部へと開く物語を考察することで、共同体内部の一員となるというこれまでの教育物語を超える方向を垣間見ることができるのだ。

第２章　他者が出現する子どもの物語

「生成する物語」の中心テーマは、子どもにとって共同体外部の「他者」はどのように現れるかということである。「子ども問題」（発達の物語）では、「他者」は即座に社会的な他者と同一視され、親や兄弟姉妹、同輩や教師といった社会的他者との人間関係の問題へと限定されるだろう。しかし、他者とはそもそも同じ言語ゲームに参加していない者のことである。社会的な他者とは、その意味では同じ共同体のなかで同じ言語ゲームに参加している相対的な他者にすぎない。もちろんこのような社会的な他者との交流のなかに、今日の社会化をめぐるさまざまな問題があるということはよく言われていることでもある。それでも、このような共同体内部の他者は、子どもにとって一次元的な水平の次元の共同体への導き手以上の者ではない。

子どもはこのような実体的な社会的他者との関係だけで生きているわけではない。むしろこのような共同体内の他者ではなく、共同体の外部から来る他者との出会いこそが、子どもを共同体の外部へとつれだし、超越とかかわる垂直の次元で子どもを深く変容させるのである。この子どもをどこまでも遠くへとつれていく他者とは何者だろうか。そして、子どもは他者とどのような関係を発見することができるのだろうか。

賢治の作品のなかから比較的マイナーな作品である『種山ヶ原』を取りあげてみよう。『種山ヶ原』は、四百字詰原稿用紙にして三十数枚ほどの短編の村童スケッチ風の作品である。この作品の一部は改変されて、嘉助が高田三郎とともに霧のなかで逃げた馬を探す場面として『風の又三郎』のなかに取り入れられている。あとで述べるように、『風の又三郎』の方が作品としては優れているのだが、『種山ヶ原』には子どもが出会う他者のさまざまな位相がわかりやすくでているので、この作品をまず手がかりにすることにする。

夏休みの最後の日、達二は母に命じられて、種山ヶ原（北上山地の高原）に草刈りにでている兄と祖父のものに、牛をつれて弁当を届けにいくことになる。高原の入り口に到着し、兄と会い弁当を手渡す。兄は達二にそこで弁当を食べているように言い、祖父のところへいく。しかし、牛が急に逃げだしたため、達二は牛を夢中になって追いかける。晴天だった天候は悪くなりはじめ、風が吹きさらに暗く冷たい霧に覆われる。達二は霧のなかを牛を追いかけているうちに、道を見失ってしまい、いつのまにか草のうえに倒れて眠ってしまう。そして達二は続けて四つの夢をみる。夏祭りでの剣舞の夢、新学期の教室の夢、かわいらしい女の子の夢、そして山男を殺害する夢。夢から目覚めると、見失ったはずの牛はすぐ近くにおり、達二を探している兄の声が聞こえてくる。達二は兄と祖父と再会し、祖父から達二が危険な場所のすぐ近くにいたことを知らされる。やがて霧は消え天気は好転して

晴れる。

ここに登場する四つの夢には、異なる位相にある他者と少年との交流が表現されている。一つずつ丁寧にみていくことにしよう。

【第１の夢】

夏休みの祭りの日、達二は、鶏の黒い尾を飾った頭巾をかぶり、昔からの赤い陣羽織と硬い板を入れた袴をはき、脚絆や草鞋をきりっと結んで、種山剣舞連と大きく書いた沢山の提灯に囲まれて、友人や兄とともに町に踊りにいったのだった。最初の夢はこの祭りに参加したことがもとになっている。

> 黄昏時、達二は異形の装束で友人の楢夫や兄や大人とともに、「ダー、ダー、ダー、ダー、ダースコダーダー」と叫びながら、剣舞を踊りにいく道中を歩いている。やがて、町長のうちに到着し
>
> そこで剣舞が踊られる。この剣舞には次のような歌がついている。
>
> 「ホウ、そら、やれ、
>
> むかし　達谷（たっこく）の　悪路王、
>
> まっくらぁくらの二里の洞（ほら）、
>
> 渡るは　夢と　黒夜神（こくやじん）、
>
> 首は刻まれ　朱桶に埋もれ。
>
> やったぞ。やったぞ。ダー、ダー、ダースコ、ダーダ、」（宮澤 1995, Vol.8:97）

この歌は、言葉は少し異なるが、賢治の有名な詩『原体剣舞連（はらたいけんばひれん）（mental sketch modified)』（『春と修羅』所収）とほぼ同じである。この歌に登場する「達谷の悪路王」とは、坂上田村麻呂によって滅ぼされた陸奥蝦夷の酋長のことである（一説には朝鮮半島からの渡来者という）。「首は刻まれ　朱桶に埋もれ」というように、とても血腥い歌である。このような歌にのせてさきに述べた異形の装束をした踊り手たちが、二組に分かれて、剣をカチカチさせて踊るのである。日常生活では経験することのない異様な興奮が伝わってくる。

賢治の童話の一つ『狼（オイノ）森と笊（ざる）森、盗（ぬすと）森』では、入植者たちがはじめて森に入りこんでコロニーを建設するとき、入植者と森や先住者である狼や山男たちとの間に生じた葛藤とその和解の過程が描かれている。入植者の進出は、先住者にとって大きな脅威となったであろう。『狼森と笊森、盗森』では、入植者は先住民に粟餅を供することによって和解が成立する。しかし、現実には両者の葛藤はもっと悲惨なものであった。そのように考えると、剣舞の意味は明らかだ。悪路王の殺害は、このような達二たちの先祖による共同体建設の起源とかかわっているのだ。坂上田村麻呂という中央から派遣されたものによる「征伐」が、剣舞として再現され反復されている。こうして達二たちは、剣舞によって時間を超えて歴史と伝説の世界と融合し、共同体建設の原初の時間にたちもどるのだ。

町長の家で、剣舞をみていた小さな子どもたちが泣きだすのにたいして、「達二は笑いました」という一文がはいっていることに注意しておこう。達二もかつてはこの子どもたちのように、仮面をかぶった異様な姿の者たちが演ずる剣舞を前に泣いていたにちがいないのだ。笑っている達二は、剣舞の踊り手としていまや家族からも離れ同胞関係に包まれた共同体の一員になっているのである。

この刃と殺害のイメージは、あとで述べる第４の夢のなかでの山男の殺害と結びついている。その

ことは第４の夢の説明で述べることにする。また、ここで仲間と交わされている会話が、すべて「方言」であることにも注意しておこう。その理由はつぎの夢の解釈で明らかになる。

【第２の夢】

達二は、新学期の最初の授業がはじまった教室にいる。教師が、夏休みの宿題の提出を求めるが、最後までやってきていたのは達二と楢夫の二人だけだった。教師は生徒に夏休中で一番楽しかったことはなにかと尋ねる。教師に指名された達二は祖父と仔馬を集めたことだと答えるが、楢夫は剣舞だと答える。すると教師はつぎのように言う。「達二さんも、さうですか。よろしい。みなさん。剣舞（けんばひ）は決して悪いことではありません。けれども、勿論みなさんの中にそんな方はないでせうが、それでお銭を貰ったりしてはなりません。みなさんは、立派な生徒ですから。」「先生。私はお銭を貰ひません。」「よろしい。さうです。それから……。」夢はここで終わる。

まず指摘しておかなければならないのは、この出来事が起こったのが、夏休みの終わりの日、つまり新学期が始まる前日だということである。この二つの時間を隔てる「境界の時間」は、構造主義者たちが指摘したように、日常の世界とは異なる特別な意味をもった時間となる。その意味で「境界の時間」は、危機的な時間である。新しい時間に移行するときにはさまざまなことが起こりうる。ひょっとすると新学期のはじまる九月一日に学校に行くと、自分の席に「まるで顔も知らないをかしな赤い髪の子供」が座っているかもしれないのだ（『風の又三郎』）。

この二つの時間の境界を作りあげているのは、達二が夏休みを過ごした家族ー村落共同体と、大日本帝国のエージェントとしての学校との差異である。学校が日常の生活の場である共同体と異なった秩序空間であることを示す最も特徴的な指標の一つは、学校では教師のみならず子どもたちも「標準語」で会話をしていることである。

明治期以降、近代的な国民国家の建設を目指して、帝国は「標準語」すなわち「国語」を創出し、学校教育によって帝国の隅々まで普及させようとした。イ・ヨンスクは『「国語」という思想』のなかで、「『国語』とは、はじめから存在している事物ではなく、近代国家に適合する言語規範を求める意志が作り出した価値対象なのである」（イ 1996:93）と述べている。標準語政策によって制作された第一次国定国語教科書『尋常小学読本』（1904年）では、「異様なまでに綿密な（方言の）発音矯正がもくろまれた」（イ 1996:150）といわれる。そのために、学校内では「方言」の使用は、厳しく禁止されていたのである。したがって、教師と生徒の標準語での会話の背後に、抑圧された「方言」の声と身体とをみなければならない＊3。

学校と共同体は、子どもの形成をめぐってたがいにライバル関係にある。母親は達二のことを「善い童（わらす）」と呼ぶが、共同体にとって「善い童」が、いつも学校＝国民国家にとっての「立派な生徒」であるわけではない。教師は子どもに「善い童」ではなく「立派な生徒」として振舞うように要請している。達二と楢夫の二人は、教室で唯一夏休みの宿題を忘れなかった「立派な生徒」である。しかし、教師がこの夏休みに一番楽しかったことは何かと問い、楢夫が剣舞に参加したことだと答え、さらに達二も参加したことを知ると、教師はつぎのように言う。「よろしい。みなさん。剣舞は決して悪いことではありません。けれども、勿論みなさんの中にそんな方はないでせうが、それでお銭を貰ったりしてはなりません。みんなは、立派な生徒ですから。」（傍点は引用者）教師の応答のうちに、

共同体とは異なる学校の秩序を読みとることができる。

なぜ教師は子どもが共同体の祭りに参加することを疎ましく思い、子どもが金を受け取ることを禁止しようとするのか、なぜそれらが「立派な生徒」にとってふさわしいことでないのか。その理由は、学校が子どもをできうるかぎり抽象的な存在に維持しておきたいからである。近代学校は、言語においては土着の方言を禁止し、「国語」教育をとおして国民国家の成立に不可欠な標準語を使用させることによって、子どもが地縁・血縁的な村落共同体の一員である以上に国民国家の一員となることを要請する。また身体性においても、ある特定の地域や職業（たとえば農民）の身体技法に固定化されることがないようにし、「体育」教育を通して、どのような労働や兵役でも可能な身体に作り変えようとする。言葉を換えれば、近代学校の目的は、子どもを農民や商人や職人といった共同体内での「一人前」の大人に形成することではなく、将来何者にでもなりえるような抽象的な国民を形成しようとするのである。

それにたいして、共同体の祭りへの子どもの参加は、村落共同体の地方性・土着性に子どもが精神的にも身体的にも染められることを意味するし、また子どもによる金銭の授受は商品世界への早すぎる参入を意味する。どちらにしても、子どもに求められている抽象性を破壊してしまうのだ。学校は子どもを商品世界から隔離し、何色にも染められる可能性を維持させることによって、子どもの抽象性を高めていこうとするのだが、このことは同時に子どものイノセント性を作りだすことでもある。

共同体と学校、この二つの世界の間には対立線が引かれている。このことを子どもはよく理解している。夢の冒頭のシーンで、「先生がなんだか少し痩せたようです」という一文がある。達二の目に教師が少し痩せてみえるのは、夏休みの間に剣舞に参加したことにより共同体の精神が達二に宿ったため、比例して国民国家のエージェントとしての教師の権威が低下しているからである。だからこそ、教師は共同体との競争に負けないためにも新学期早々に手を打つのである。

この二つの夢をみたあと、達二は一度覚醒し、これらが夢だったことを確認する（このこと自体夢だった可能性もあるのだが）。そして達二は再びまどろみ三番目の夢をみるのだ。

【第３の夢】

「可愛らしい女の子」が登場し、「おいでなさい。いゝものあげませう。そら。干した𦾔果（りんご）ですよ。」という。達二が「ありがど、あなたはどなた。」と尋ねると、「わたし誰でもないわ。」と女の子は答える。女の子はお返しに達二に驢馬を求めるが、達二は驢馬をもっておらず仔馬ならあるという。すると「只の仔馬は大きくて駄目だわ。」と女の子はいう。「そんなら、あなたは小鳥は嫌ひですか。」「小鳥。わたし大好きよ。」「あげませう。私はひわを有ってゐます。ひわを一疋あげませうか。」「えゝ。欲しいわ。」「あげませう。私今持って来ます。」「えゝ、早くよ。」達二は自分のひわを家からもちだし、女の子にあたえようとする。家を出ようとすると母親に「達二、どこさ行く。」と呼び止められるが、達二はひわをもったまま走りだす。するといつのまにか掌の鳥は、萌黄色の生菓子に変わってしまっている。

第３の夢は、四つの夢のなかで一番わかりづらく、それだけ無気味な夢でもある。女の子が小鳥を望んだのは、おそらく食べ物として望んだのだろう。ひわが生菓子に変わってしまったのはそのせいである。女の子は「只の仔馬は大きくて駄目だわ」という。いったい大きくて何が駄目なのだろう？

驢馬なら呑みこむことができるというのだろうか。どうもこの女の子は生命を取りこむ存在である

ようだ。あるいは抽象度を上げて言えば、すべてを食べ尽くす「時間」の喩のようでもある。

しかし、この喩はそれほど明瞭ではない。たとえば「干した苹果」である。賢治の作品には、しばしば苹果が特別な価値ある食べ物として登場するが、「干した苹果」が描かれることはほとんどない。『銀河鉄道の夜』のなかでは、ジョバンニとカンパネルラ、そして氷山に衝突し沈もうとする船で他の人を押しのけてまで救命ボートに乗ろうとしなかった家庭教師と二人の子どもたちに、燈台看守から「黄金と紅でうつくしくいろどられた大きな苹果」があたえられる。苹果は特別な人間に贈与される特別な果物なのである。女の子がくれる「干した苹果」は、この苹果のようなみずみずしさを失っている。しかし、それでも食べることのできる苹果であることにはちがいない。だからこそ「干した苹果」をあたえる行為は、両義的な印象を受ける。

この短い夢のなかに、達二と女の子のほかにただ一人達二の母親が登場するのは、この女の子と母親との関係を暗示させているのだろう。わざわざ「可愛らしい女の子」と表現されているのは、魅力的な異性ということなのだろう。異性のもつ魅力と畏れ、取りいれること（食べる＝生命の破壊）と取りだすこと（出産＝生命の誕生）とが同じ存在、女性によってなされることの驚き。夢の始まりは「霧が生温かい湯のやうになった」と表現されている。羊水の内部のような生温かい霧の世界に包まれた世界、エロスが瀰漫している世界での生命と死の相即性がこの夢の主題なのだ。

また母親と達二との場面をのぞいて、この女の子と達二との間の会話が教室の場面と同様、標準語によって交わされている。その理由は、女の子（死ー生）が教師と同様、共同体の外部に位置する存在だからであろう。しかし、両者の外部性は異なる次元にあるように思われる。教師は共同体成立のあとで新たに付加された外部の存在者なのにたいして、この女の子が示しているのは、共同体成立以前の外部性である。ヒトが、死を意識し死体にかかわるタブーを生みだすことによって、人間として動物性から離陸したとするなら、女の子のもつ外部性の次元は、共同体成立以前のみならず言語成立以前の次元と結びついている（矢野 2000a:24-45）。だから本当はこの女の子は名前をもたないだけでなく、言葉によって会話することが不可能な他者なのだ。

【第４の夢】

達二は夢から再び目覚める。「伊佐戸の町の電気工夫のむすこぁ、ふら、ふら、ふら、ふら、ふら、」とどこかで言っているのが聞こえる。そして空がミインミインと鳴り、また達二はうとうとしはじめる。達二は四番目の夢をみる。

> 山男が楢の木の後ろからまっ赤な顔をだす。山男をみつけると、達二は脇差しを抜いて山男を脅して家来にし、さまざまな仕事を命じる。しかし油断をしているうちに、山男に刀を取り上げられてしまい、反対に家来になるように言われる。達二が拒んでいると山男につれていかれそうになる。達二は山男から刀を奪いかえして、山男の脇腹を刺して殺害する。「山男はばたばた跳ね廻って、白い泡(あわ)を沢山吐いて、死んでしまひました。」（宮澤 1995, Vol. 8:108）

第４の夢は、山男の殺害がテーマである。このときの山男とは、賢治の作品に登場する山男がそうであるように、木樵(きこり)や木地師やあるいは登山家などではなく、人間と異なる異類の存在者である。山男はあるときには黄金色の目をしたまっ赤な顔として描かれたりする。山猫や狐といった動物と同様、人里にではなく森や山に生きる存在である。人間と異類の存在者との間の境界線を超える体験には、

いつも危険が存在している。

たとえば、『雪渡り』では、四郎とかん子は狐の紺三郎から幻燈大会に招待される。この物語は、賢治の童話のなかで、異類のもの同士の最も友好的な出会いが描かれているといえよう。それでも、幻燈会が終わり、狐の世界から人間の世界への境界を超えようとする四郎とかん子の目には、人間の世界から迎えにやってきた兄たちが、あたかも異類の存在であるかのように「三人の黒い影」となってあらわれる瞬間が描かれてもいる。四郎とかん子の視線は、狐の側にたっているのだ（別役 1990: 169）。このような視線をもつことができない十二歳以上の人間ははじめからこの境界を超えることができず、招待からはずされるのである（宮澤 1995, Vol. 12:103）。

それでは、この山男の殺害の意味は何だろうか。達二を「意識性」とみなし山男を「動物性」だと考えると、この二人の戦いは意識と無意識との戦いということになるのかもしれない。そうだとすれば、ちょうど朝廷から派遣された坂上田村麻呂が悪路王を殺害することによって、「野蛮」な蝦夷の地に「文明」的な秩序を形成したように、動物性が殺害され意識が勝利したことになる。しかし、注目すべきことは、達二と山男とは「方言」でもって脅しあい、相手を自分の家来にしたいという同じ欲望をもっていることである。だから両者は、立場がくるくる入れ代わってしまう対称型の行為パターンを作りだす。その意味では、この殺害は半身同士の戦いの結果としての殺害であり、兄弟殺しなのである。

この夢を最終的にどのようにとらえればよいのか、章をあらためてほかの夢との相互の関係のなかで述べることにしよう。

第３章　外部の他者との出会いと自己の変容

【イニシエーションとしての他者の出現】

なぜ達二はこの四つの夢をみたのだろうか。四つの夢の相互の関係をどのように考えればよいだろうか。

この一連の夢の秘密を解くカギは、最初の夢にある。夏祭りで剣舞を踊ったのは、達二にとってはじめての経験だった。この経験はたんに剣舞を踊ったということにとどまらず、イニシエーションの経験でもあった。そして、これが達二と世界とのそれまでの関係のあり方を根本的に変容させる引き金となっている。

まず、この経験によって、彼ははじめて共同体の一員になり、共同体の一員となることで、学校の秩序との間に微妙な異和を作りだしてしまう。達二はこのことに気づいており、それが第１の夢に続けて第２の夢をみた理由である。この二つの夢は一対の夢として扱うことができる。

剣舞の経験に加えて、山男が子どもをさらっているという噂を聞いたことが第４の夢をみるきっかけをあたえている。「伊佐戸の町の、電気工夫の童（わらす）ぁ、山男に手足ぃ縛らへてたふうだ。」は、第１の夢の世界への移行時に聞こえてくる言葉でもある。剣舞が坂上田村麻呂による悪路王の「征伐」を反復しているのなら、この山男は悪路王の末裔に位置づくといえるだろう。第１の夢でみた祭りにおける悪路王の殺害の再現が、第４の夢で山男の殺害という形で繰り返されている。その意味では、第４の夢は第１・第２の夢と結びつく夢でもある。この他者への恐れは、帝国の領土拡大によって流入してきた共同体外部の他者である「外国人」（「異邦人」）の増大によって現実的なものだった。

『風野又
三郎』で、子どもたちに転校生が「一向語が通じない」「外国人（ロシア人）」とみえたりするのはそのせいである。のちに最初の印象はあらためられ、この転校生は「風の又三郎」とみなされるようになる。

それでは第１・第２の夢と第４の夢との狭間にある第３の夢とは何か。第３の夢は、第１の夢がもっていた死と生にかかわるモチーフを、社会化のレベルではなく垂直軸の次元で深化するかたちであらわしている。その意味では、ここに賢治童話における他者の秘密が隠されている。このことを考えるには、賢治の擬人法について言及する必要がある。

【他者を出現させる擬人法という生の技法―動物・植物・鉱物との交流】

賢治が他者がもつ異質性を読者に贈与することができたのは、賢治特有の方法論によっている。賢治の作品のなかには、宇宙と交感する人の姿がしばしば描かれている。この宇宙は細やかなリストに仕上げることができるだろう。星座、銀河系、鉱物、植物、昆虫、動物、さらに大気の諸相（雲・霧・雨・風・雪）……。この交感の体験の表現を実現しているのが賢治の擬人法である。動植物のみならず鉱物のような無機物でさえも賢治の世界ではまるで人間のように言葉を話すのだ。

ところで通常、擬人法は動物や植物などを人間化することによって、それらが本来もっている固有の異質性を消去するモノローグの表現法である。イソップの物語を読めばわかるよう、擬人法で描かれた世界は、狡賢い人物はキツネ、力と威厳のある王様はライオンといったように、人間の世界を動物の世界に置き換えただけなのだ。動物が登場する児童文学や絵本でも、多くの場合、動物は典型的な性格をもつ人間のべつの姿にすぎない。言い換えれば、擬人法は動物や異類の存在者がもつ異質性を、理解可能な同質性へと変換させる魔術的な手法である。こうして唯一人間の言葉によるモノローグとして語られることによって、本来言語ゲームを共有しないはずの他者も、透過性をもった見慣れた日常の他者に変わるのである。

それにたいして、賢治の擬人法は、通常の擬人法とまったく正反対のポリフォニックな語りを可能にする生の技法である。

賢治の擬人法は、人間の声だけが語る世界を、多数多様な存在者たちの多声がたがいに響きあう世界に変えてしまう。この技法は賢治によって「心象スケッチ」と名づけられた実験的な生の技法によっている。しかし、それは原始的なアニミズムにたち返って世界を主観化＝人間化＝擬人化することではない。反対に、人間の方が世界化される生の技法と言い換えてもよい。

自己がどこまでも拡大して世界を覆いつくすのではなく、自己と世界との境界が溶解してしまい、自己が世界化し同時に世界が自己化しているのである。賢治の擬人法では、世界の方が基準になって作られており、人間の方が宇宙の全存在者から召還されているのである。したがって、この世界では人間であることの特権性はない。むしろ、人間からそのような特権性を奪うためにこそ擬人法が機能しているのだといってよい。このことによって、描写の視点は、人間の視点に限定されることがなく、あるときは遙か上空から地上を見下ろす鳥の目となり、あるときはキノコを巨大な建築物のように見上げる小さなアリの目に移るというように、多数多様であるだけでなく、時空を自在に移動することができるのである＊4。

描写の視点の次元だけでなく、存在という次元でも、人間はもはや世界の中心という特権性をもたず他の存在者と等価であり、全存在者によって作りだされる風景の一部分となる。そのとき、動物や

昆虫や植物や鉱物は、人間が欲望を実現するための手段や道具であることをやめて、異なる言語ゲームに生きる他者となる。したがって、賢治の擬人法では、動物や植物や鉱物は人間と意思を交わすことによって、かえって人間には測り知れないそれぞれに固有の得体のなさが露わとなる。いくらそれらが言葉を話したところで、それらは人間にとって不透過で不透明な異質性を背負っている。言葉を交わすことによって一層それらがもつ人間とは異なる固有の異質性が際だってくる（たとえば、『かしはばやしの夜』のなかの清作と柏の木大王との会話）。翻って考えてみれば、それは人間という存在が、他のすべての存在者にとって他者であることを明らかにするのである。

この擬人法の特質は、賢治の童話に頻出するオリジナルなオノマトペ（音喩）をみてもわかる。オノマトペは、普通、動物の鳴き声のような事象を言語のもつかぎられた音の表記法で写し取ることであり、それは事象を人間化する作用をもっている。その意味ではこれもまた擬人法なのだが、しかし、賢治のオノマトペは私たちの文化的・伝統的、つまりは共同体に内属する標準語の音の規範を突き崩してしまう。それは標準日本語の音の表記法が、その内側から異化される事態であるとともに、「言語の牢獄」を超え事象をそのまま直接に写し取る原初の言葉として、世界と出会う瞬間でもある。

この擬人法によって何が起こるのか。この他者との交感によって、「私」という人間は、社会の軸によって構成されている人間の原理を失い、垂直の軸において深く変容させられることになる。擬人法によって、人が「異事」や「異空間」に出会うときは、「にんげんの壊れる」（宮澤 1995, Vol.2: 85）危機にさらされているときでもあり（見田 1984:194）、同時に自己の新たな変容に開かれるときでもある。賢治の擬人法は、世界の生命的な本質を明かすための生の技法であるばかりでなく、自己解体の危機を招くとともに、垂直の次元の生に触れ自己変容の可能性を開くものでもある。賢治の擬人法（逆擬人法と呼ぶべきか）は、このような共同体の外に触れる生の技法なのである＊5。

【再びイニシエーションについて】

再び第３の夢にもどろう。先に述べたように、賢治の童話では、人間は人間である特権を失い、世界の中心ではなくなり、ほかの存在者と同じレベルへと変容させられる。この名前をもたない女の子が、誕生以前と死後とを示しているとするなら、誕生以前と死後の状態というのは、もっとも極端な在り方で「世界」の一部そのものになることであるといえよう。そのような共同体外部の世界を表す他者の出現によって、前の夢との間に位相的な切断点が作りだされる。

そのように考えると、第４の異人殺害の夢は、第１の夢のたんなる反復ではなく、より深いところで生じているといえよう。山男は、共同体の内部で出会う社会的他者ではなく、共同体の外部から顔を出してこちらを伺う異類の存在者である。彼は方言を話し達二と同じ欲望をもつており、その意味では達二の鏡像として兄弟である。それは達二が共同体の一員として自己を確立することによってはじめて現れる、自己の外部の存在者であるといってもよい。

したがって、この殺害は、剣舞として初源の殺害を再現することによって、共同体の起源に立ち返るという共同体神話の次元を超える殺害である。「打つも果てるもひとつのいのち」（『原体剣舞連（mental sketch modified)』）の歌が示すように、達二と山男のどちらもが「ひとつのいのち」であるような共同体の外部である「世界」の次元へと、突き抜けていくための闘争なのだ。つまり、第１・第２の夢は、共同体の一員になるという社会化の次元でのイニシエーションとかかわる夢であったのにたいして、第３・第４の夢は、共同体を超えた世界へと開く次元でのイニシエーションとかかわる夢だったのである。

この異人の殺害をテーマとした剣舞への参加、そして異人の殺害の夢は、アドレッセンスに入ろうとする達二の心に新たな次元を開いた。達二は、学校においては抽象的でイノセンスな存在であった。しかし、夏祭りの剣舞への参加を境にして、達二は共同体の一員になるとともに共同体外部の他者と出会うことになる。この他者との出会いは、「危ぃがった。危ぃがった。向ふさ降りだらそれっ切りだったぞ。」と祖父が言うとおり、達二を生と死の境界線という危険なところに追い込む。この第３・第４の夢のなかで出会う他者とは、共同体の内部に共に生きる社会的な他者ではなく外部の他者である。他者の殺害によって、イニシエーションは新たな次元を生みだし、達二の抽象的でイノセントな少年期は終わることになる。

『種山ヶ原』は、賢治の作品のモチーフとして共同体外部の他者との交流があることを明示している。また、子どもが出会う他者のさまざまな位相を分化して提示している。しかし、作品として成功しているわけではない。読者である子ども自身が、読書体験としてこの共同体外部の他者と出会う必要があるのだ。そのため、『風の又三郎』では、達二の夢の部分はバッサリと削られて、ガラスのマントを着て光るガラスの靴をはいた風の又三郎の幻影をみる場面に変わる。転校生高田三郎は風の又三郎だったのか、さいかち淵で「雨はざっこざっこ雨三郎／風はどっこどっこ又三郎」と最初に叫んだのは本当は誰なのか、『風の又三郎』は子どもの日常生活に生起する小さな亀裂から異界が垣間見られるようになっており、作品として『種山ヶ原』よりはるかに優れたものになっている。

こうして賢治は読者である子どもたちに共同体外部の他者が何者であるか、他者とどのように出会うのかを提示する。そして、子どもがもつ自己理解や他者理解の基盤となる物語の構造にひずみを入れ揺さぶるのである。

第４章　外部世界からの贈与としての賢治童話

読者である子どもは、賢治の童話によって、共同体の物語（発達の物語）に回収されてしまうのではなく、共同体の内に閉じた物語を超えでて物語の果てにまでいくように促される。

賢治の童話は、夢のようなファンタジーではないし、手に汗握る冒険物語でもない。そうかといって、子どもの日常を生き生きと描いたリアリズム小説でもない。むしろ、賢治の童話には、名状しがたい不気味さや、声にならない孤独感、言いしえぬ暗さがつきまとっている。しかし、賢治の童話を読んで、不気味だったり孤独感を喚起されるときには、いつも、共同体の内部のなじみやすさとは異なる不透過な共同体の外部の他者と出会っている瞬間でもあるのだ。

この共同体外部の世界は、なじみやすい人間化された世界ではなく、非人間的な世界そのものである。それは賢治の童話というものの起源自体が、共同体の内部ではなく、共同体の外部である世界の側にあるからである。童話集『注文の多い料理店』の「序」において、賢治は自分の童話の由来について次のように述べている。

> 「これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらつてきたのです。
>
> ほんたうに、かしはばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかつたり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立つたりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書

いたまでです。

ですから、これらのなかには、あなたのためになるところもあるでせうし、ただそれつきりのところもあるでせうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんのことだか、わけのわからないところもあるでせうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。

けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾(いく)きれかが、おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません。」

(宮澤 1995(1923), Vol. 12:7)

もともと、賢治の童話は、作者が構想したのではなく、「林(はやし)や野(の)はらや鉄道線路(てつだうせんろ)やらで、虹(にじ)や月(つき)あかり」から賢治が贈られたものを、「ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを」というように賢治自身の身体（メディア）を一度通過させて、「そのとおり書い」たのだという。つまり、賢治の童話は共同体の外部からの贈与物であり、それを賢治がメディアとなって、子どもに贈与したのだ。さらに、「あなたのためになることもあるでせうし、ただそれつきりのところもあるでせうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません」というように、賢治の童話は共同体内部で子どもを教育的に方向づけようという意図とは無縁でもある。作者は「あなたのすきとほつたほんたうのたべものになること」を願っているだけなのだ。賢治の童話は、その起源からして非人間的な外部性をもっているのである。

児童文学は、子どもが共同体外部の他者に出会うためのすぐれたメディアとなりえる。もちろんすべての児童文学がこのことを実現できるわけではない。むしろ多くの児童文学は、共同体内部での「発達」を促すものである。たとえファンタジー文学のように共同体の外部を描いているようにみえても、その多くは共同体をたんに反転させたものにすぎず、登場人物が妖精であっても動物であってもそれは人間を置き換えたものにすぎない。しかし、児童文学は、賢治童話に実現されたように、「生成する物語」として、子どもを共同体の外部へと開く垂直の次元での「生成」を実現する可能性をもっているのである。

教育学は、このようなメディアとしての賢治の童話を自己の視界のうちに入れながら、子どもの記述をこころみる必要がある。このとき賢治の童話とは、共同体での発達という水平の軸の変容に回収できない、共同体の外部へと開く垂直の軸の変容にかかわる他者の重要性を教えてくれる。教育学は、賢治童話との出会いにおいて、「共同体の内部における発達という物語」に囚われてきた思考から一歩ずれることができる。「教育」という近代の構築物の不可思議さに気づくには、この一歩で充分なのである。

【註】

①「発達」と「生成」という用語についての詳細な解説は、拙著『自己変容という物語－生成・贈与・教育』を参照。本論文はこの本の続編をなすものである。

②賢治自身が語るところによると、童話とは「少年少女期の終わり頃から、アドレッセンス中葉に対する一つの文学としての形式」（宮澤 1995:12校異篇;10）のことである。この「対する」というのは、「対象とする」という意味にもとれないことはないが、「読者対象」というのが妥当なところだろう。

③賢治が町立花巻川口尋常高等小学校に入学するのは1903年だから、彼はこの教科書で「国語」を習

いはじめた最初の生徒の一人であった。『フランドン農学校のブタ』のブタは「流暢な人間語」を話し、『ベヂテリアン大祭』には「流暢な英語」を話す中国人が登場するが、この場合の「流暢」とは、「周辺」に位置づく者が、自分の属さない「中心」の共同体に不平等なまま組み込まれたことを受容する在り方である。上京した賢治は「流暢な標準語」を話すことができたのだろうか。

④このような賢治の思想の背後に、賢治が深く帰依した大乗仏教の教えをみることができるだろう。輪廻思想をもつ大乗仏教の理念にしたがうとき、人間と他の生物との差異は絶対的なものではないからだ。さらに進化論のヘッケルの思想にもとづく「万象同帰」の思想、そしてアインシュタインの相対性理論における四次元の思想にもとづく往復可能な時間のイメージ、これらが賢治特有の世界構成を可能にしている（見田 1984:189）。

⑤賢治童話における逆擬人法の具体的な分析は、拙著『動物絵本をめぐる冒険―動物 - 人間学のレッスン』勁草書房、80-88頁参照。

【引用参考文献】（紙幅に制限があるため最小限のものをあげるにとどめる）

Ashcroft, B., Griffiths, G., & Tiffin, H., 1989 *The Empire Writes Back : Theory and Practice in Post-Colonial Literatures. London : Routledge. =1998 木村茂雄訳 『ポストコロニアルの文学』青土社。*

Clifford, J., & Marcus, G. E., 1986 *Writing Culture : the Poetics and Politics of Ethnography. Berkeley, LosAngels, London : University of California Press. =1996 春日直樹ほか訳 『文化を書く』紀伊國屋書店。*

天沢退二郎 1993(1987) 『宮沢賢治の彼方へ』ちくま学芸文庫。

天沢退二郎編 1996 『宮沢賢治ハンドブック』新書館。

イ・ヨンスク 1996 『「国語」という思想―近代日本の言語認識』岩波書店。

太田好信 1998 『トランスポジションの思想―文化人類学の再想像』世界思想社。

小松和彦 1985 『異人論－民俗社会の心性』青土社。

小森陽一 1996 『最新宮沢賢治講義』朝日新聞社。

齋藤　孝 1997 『宮沢賢治という身体―生のスタイル論へ』世織書房。

菅谷規矩雄 1980 『宮沢賢治序説』大和書房。

鳥山敏子編 1998 『賢治と種山ヶ原』世織書房。

中沢新一 1998(1995) 『哲学の東北』幻冬舎文庫。

中路正恒 1997 『ニーチェから宮沢賢治へ』創言社。

西　成彦 1997 『森のゲリラ　宮沢賢治』岩波書店。

別役　実 1990 『イーハトーボゆき軽便鉄道』リブロポート。

見田宗介 1984 『宮沢賢治－存在の祭りの中へ』岩波書店。

宮澤賢治 1995 宮澤清六ほか編『【新】校本　宮澤賢治全集』筑摩書房。

村瀬　学 1989 『「銀河鉄道の夜」とは何か』大和書房。

矢野智司 1998 「生成と発達の場としての学校」『現代の教育　学校像の模索』第二巻、岩波書店。

矢野智司 1999 「教育の語り方をめぐる省察」香川大学教育学研究室編『教育という「物語」』世織書房。

矢野智司 2000a 『自己変容という物語―生成・贈与・教育』金子書房。

矢野智司 2000b 「生成する自己はどのように物語るのか」やまだようこ編『人生を物語る－生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房。
矢野智司 2002 『動物絵本をめぐる冒険―動物 - 人間学のレッスン』勁草書房。
吉本隆明 1989 『宮沢賢治』筑摩書房。
『國文學』1984 第29巻1号、學燈社。

［本論文は、藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学編『教育学年報8 子ども問題』（世織書房、2001年）に掲載された論文を補足したものである。］

3-4

物語からみた転移・逆転移

皆藤　章

I　はじめに

かつて、Freud の問いに応えて Jung が、「転移は治療のαでありωである」と語ったように、「転移／逆転移」は心理療法の本質である。したがって、この概念・現象をいかに理解するかは、そのまま心理療法をいかに理解するかに繋がっていく。

また、記憶に新しいところでは、境界例の心理療法とくに逆転移の治療的有効性を巡って、この概念・現象が議論されてきたことが想起される。現在においても転移／逆転移に関する議論はとどまるところなく展開されている。筆者はこのようなこと全般を、心理療法ひいては人間存在の理解を深めていこうとする営為と捉えている。

転移／逆転移は心理療法におけるクライエントと心理療法家との間に生じる意識的・無意識的情動と言えるが、広義に解釈すればそれは人間関係全般にかかわる事態でもある。ここでは、転移／逆転移をこのように広義に捉えておきたい。それによって、「物語による転移／逆転移の理解」が深まると考えるからである。

一方、「物語」は、人類学・社会学・教育学・心理学など、人間にかかわるさまざまな学問領域において近年とみに注目されている概念であり、心理療法の領域では河合(1992, 1993)が先駆的に研究を展開している。この概念の定義は、多種多様にあり得る。ここでは、心理療法との関連を念頭において、広義には「ときに個人を超えることもある人間の体験過程の所産」、構造としては、「複数の事象が繋がって筋(plot)が生成されていくこと」と捉えておく。

ところで、物語というのは通常、自然発生的に生成されていくものではない。そこには、ある種のまとまりが不可欠だからである。心理療法からみれば、それはクライエントと心理療法家の自我関与によって、クライエントの内界にある程度の統合がもたらされることと言えるだろう。たとえば症状を例にとれば、それはクライエントの物語に収まらない、つまりまとまらない体験と考えられるわけであり、症状の解消は、クライエントにとって自身の物語がまとまりをもってきた状態と理解することができる。

さりとて筆者は、物語は人間が創り上げたものだとも言い切れない感じがする。先の定義で「ときに個人を超えることもある」との表現、事象の繋がりとプロットの生成を主体の行為の下におかないように配慮して表現したことは、このような臨床体験に基づいている。心理療法

の場に身を置いていると、クライエントでも心理療法家でもない第三の何かによって物語が展開していることを実感させられることがある。このあたりのことは、心理療法における物語の多層性というテーマとみることもできるし、転移／逆転移の多層性とみることもできる。物語にも転移／逆転移にも、無意識と意識を繋ぐ機能があるからである。したがって、一口に「物語による転移／逆転移の理解」といっても、そこには複雑多様な事態が含み込まれている。本稿では、おもに「物語の生成」と「物語の覚醒」というふたつの次元からこのテーマにアプローチしてみたい。

Ⅱ　物語の生成

物語は複数の事象が繋がることから始まる。それでは、その繋がりの端緒にある事態とはどのようなものであろうか。複数の事象がそこにあるだけでは物語は成立しない。たとえて言えば、「母親がいました」「息子がいました」というだけでは、そこに繋がりがないのである。たんなる事象の羅列である。心理療法においても同様のことが言える。心理療法の場において、クライエントと心理療法家がいるというだけでは心理療法は展開しない。当たり前のように聞こえるかもしれないが、誤解している心理療法家も少なくないのではなかろうか。

それでは、なぜ繋がっていないのだろうか。先の例で言えば、母親と息子がいましたということが両者にとって自明性の下にあるからである。つまり、それが当たり前の事実であると両者に体験されていれば、繋げる(繋がる)必要がなくなるのである。けれども、母親がいて息子がいましたという自明のことでも、物語の聴き手にとっては、そこに繋がりがないと母親(息子)が息子(母親)にどのような感情を抱いていたか、両者の間にどのような体験があったのかといったことが伝わってこない。物語としては聴くことができない。まさに、事象の羅列なのである。

ここで、両者の間に、「女手ひとつで育て上げた」という表現が加わると、これまで事象の羅列であった場はその様相を一変させる。すなわち、この表現によって両者が繋がるのである。「母親がいました。(母親には)女手ひとつで育て上げた息子がいました」。ここに物語の生成をみることができる。同様のことを河合(1993)も指摘している。

さて、心理療法ではこのようなことは転移／逆転移として理解されてきた。クライエントの語りを聴くことをとおして、心理療法家はクライエントが語る複数の事象をクライエントがいかに繋げていくのかにこころを傾ける。すなわちクライエントがどのような物語を生成していくのかにかかわるのである。そして、クライエントの語りを聴きながら、心理療法家も自身の内に物語を生成していく。心理療法の場において、さまざまな言語・非言語のやりとりが交わされる。転移／逆転移である。したがって、物語の観点からみれば、心理療法はクライエントと心理療法家双方が物語を生成していく「場＝トポス」における作業であり、転移／逆転移によって事実の繋がりすなわちプロットがもたらされると言うことができる。ときには、クライエントの物語のなかに、心理療法家がひとつの事象として位置づけられることがある。またその逆の場合もある。こうしたことについては、後に詳述することにして、物語の生成に再度立ち戻ってみよう。

先に、複数の事象が自明性の下にあるだけでは物語は生成しないと述べた。それでは、なぜ、

複数の事象がそこにあるのだろうか。このクライエントは、他ならぬ私という心理療法家となぜ出会ったのだろうか。それはまったくの偶然に他ならない。根源的には、物語生成の端緒にある複数の事象の出会いは偶然である。人と人との出会いは偶然の事態であり、さらに言えば、私が生まれたこと自体、偶然なのである。このことは、当然、心理療法にも妥当する。すなわち、人間同士が出会うことによって始まる心理療法のその出会いは、偶然にもたらされるのである。この事態については、これまであまり言及されてこなかったように思われるが、筆者(1999)は心理療法の実践においてきわめて重要なことと考えて論じたことがある。物語の生成に「偶然」という事態が含み込まれることによって、偶然に意味を付与するプロセスが現出するからである。あるいは、ある何らかの「偶然」に別のある事象が吸い寄せられるように繋がり、ひとつのプロットが生成されるプロセスが生じる。これは、意味が見出される糸口となるひとつのプロットである。心理療法は、非因果的連関の事態に「生きる意味」を見出そうとする転移／逆転移の織り成すトポスの作業であると言うことができる。「このクライエントに出会ったのは偶然的必然である」などと心理療法家が述懐するのは、そういうことである。

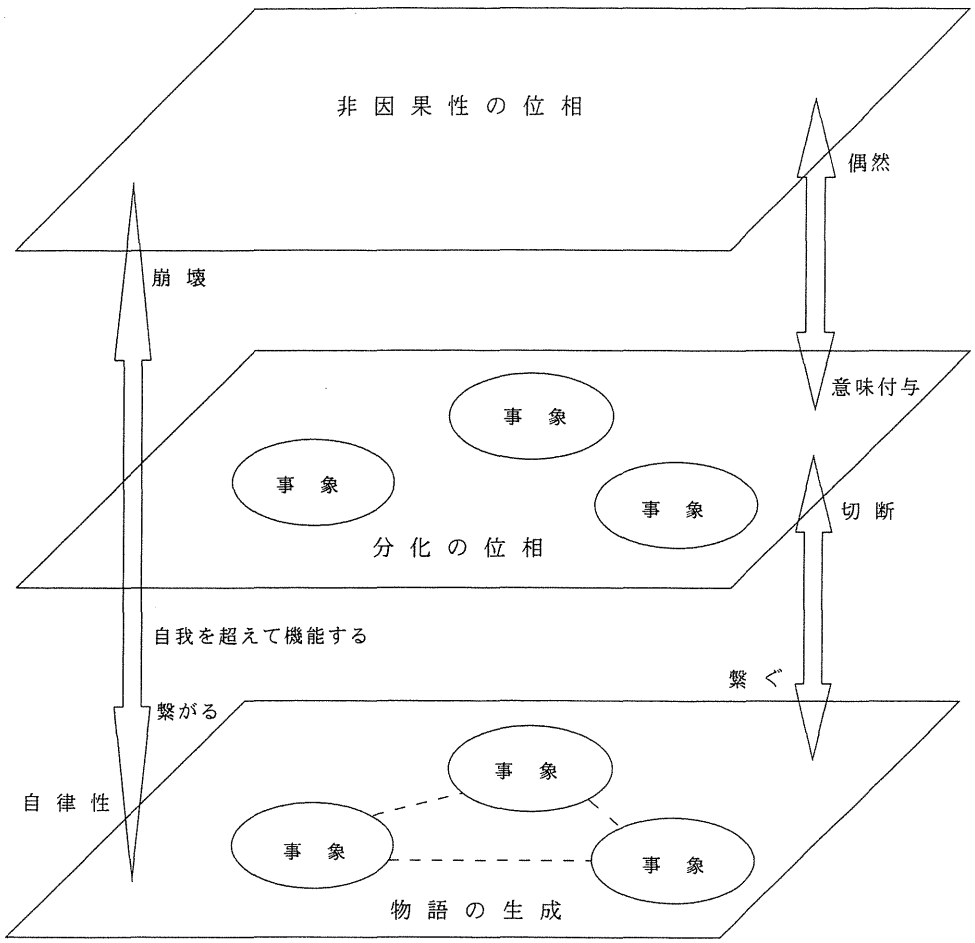


図1　物語の生成

物語は、「非因果性の位相」から直接的に生成されることもあり、「分化の位相」を通過して生成されることもある。上向きの矢印は、いわば物語が崩壊していくプロセスである。そして、このような矢印の機能が転移／逆転移である。

Ⅲ　事象の繋がり

それでは、事象間の繋がりについて詳しくみていこう。事象が繋がるとき、そこにどのような事態が生じるのであろうか。すでに示唆したが、事象間の繋がりは繋げようとする者の意識的力(意図・意志)によって生じると考えられるが、はたしてそれだけであろうか。先の例を再び取り上げてみる。

「母親がいました」と「息子がいました」というふたつの事象を繋げるということに注目してみると、たとえばふたつの事象の間に「五歳」という表現を置いてみると、ふたつの事象は繋がるであろうか。「母親がいました。五歳の息子がいました」と語っても、それはやはりふたつの事象を語っているにすぎないのではないだろうか。すなわち、きわめてプロットになりにくいのである。極端に言えば、それは息子の側の事実を増やすことでしかない。あるいはまた、「母親がいました。母親には三人の子どもがいました。そのうちのひとりに息子がいました」と語っても、やはり事象の羅列にきわめて近い。プロットになりにくい。たしかに、聴き手にはある感情を喚起させる。しかし、それはほどなく「母親がいた」「母親には三人の子どもがいた」「そのうちひとりは息子だった」という三個の事実に分割され、プロットは切断される。

心理療法において、クライエントがこのように語るとき、そこには転移／逆転移現象が生じている。クライエントと心理療法家の「間主観性」である。しかしそれは、両者にとってきわめて事実に近い体験と言える。クライエントが語り心理療法家が聴くことをとおして、両者は物語を創り上げようとする。しかしそれは、「生きた」物語としては展開しにくいのである。情動の関与に乏しいからである。

これにたいして、「女手ひとつで育て上げた」という表現がふたつの事実の間に置かれた場合はどうであろうか。この内容は、第三の事実というよりも、きわめて母親の側の情動体験として語られている。そして、先の場合に比べて聴き手にはるかに強い情動を喚起させる。心理療法における語りとしてみると、生じている転移／逆転移現象は、ふたつの事象の間に置かれた内容が情動表現であるため、強いと言える。この場合は、事象を繋げるときに情動が機能するのである。心理療法においては、転移／逆転移によってこのような情動が機能するのであり、それによってクライエントと心理療法家は物語を創り上げていくことができる。まさしく、プロットは情動によって生成される。

そこには、情動表現によって強い転移／逆転移が生じている。そして、転移／逆転移を基盤にして、物語は両者によって創り上げられるのである。心理療法のトポスとして、かりに母親がクライエントで男性心理療法家がこのような語りを聴いているとしよう。転移／逆転移の内容については個々の事例によって異なるので、あくまで一般論であるが、クライエントが「私には女手ひとつで育て上げた息子がいました」と語るとき、そこに生じている転移／逆転移をとおして、クライエントが生成する物語のなかに心理療法家がひとつの事象として位置づけられ、逆もまた同様であることが分かるであろう。クライエントは息子のことを語ろうとしつつ、心理療法家に感情を向けている。このようなとき、心理療法家がクライエントの感情にコミットするのか、クライエントの物語生成にコミットするのかによって、転移／逆転移もその様相を変え、心理療法そのものの展開が大きく変わっていく。筆者は、心理療法はクライエント自

身の物語が生成されていくトポスにおける作業であり、それはまた心理療法家自身の物語が生成されていく作業でもあると捉えている。そのプロセスには当然のこと、心理療法家がクライエントの物語のひとつの事象になることが起こり、その逆も起こってくる。しかしそれは、あくまで両者個々の物語の創出プロセスなのであって、両者がひとつの物語を創出していく作業ではないと考えている。もしも、両者がひとつの物語を創出しようとするのであれば、両者は心理療法のトポスで出会う必要はなくなるであろう。この意味で、すでに拙著(1998)で自身の立場を明確にしたが、筆者の考える心理療法はあくまでも individuation である。したがって、先の例に戻ると、心理療法家はクライエントの物語生成にコミットすることが必要と考えている。クライエントの感情にコミットしたときに展開される物語はしばしば、クライエントと心理療法家の間の、いわば「水平関係」に終始する。後述するが、「強い転移／逆転移」の状況と言うことができる。

ところでこの場合、コミットのプロセスのなかで心理療法家に、「母親は本当に女手ひとつで息子を育て上げたのだろうか」との疑問が自然に湧き上がってきたとしたらどうであろうか。これもひとつの転移／逆転移現象であろう。そうなると、物語の展開は大きく変わってくることになる。そして、突き詰めていけば、本当に「女手ひとつで」母親が息子を育て上げたのかどうかは曖昧になっていく。因果律的思考が機能し始めると、「女手ひとつで育て上げた」という表現は、ふたつの事象を繋ぐものとしては機能しなくなっていく。そうして、プロットは消える。もちろん、また別の情動体験が語られ、それがプロットを生成していくことはあるだろう。このようにみると、ふたつの事象の間に置かれる内容によって、物語の生成はそのプロットを変えていくと言うことができる。そして、このようなプロットの生成によって創り上げられる物語は、クライエントと心理療法家双方の自我関与が強く働いたものになると考えることができる。

さて、それではクライエントが次のように語った場合はどうであろうか。「私にはなぜかわかりませんが息子がいたんです」。この語りは、ふたつの事象が「なぜかわからない」という表現によって繋がっている。ここには、ある不思議な体験が醸し出されている。ふたつの事象は因果律的に繋がっているのではない。大切なことは、この表現がふたつの事象を「繋げた」のではなく、この表現をとおしてふたつの事象が「繋がった」ということである。すなわち、「なぜかわからない」という表現が産み出す世界は、ふたつの事象の繋がりが「偶然」であることを示唆していると考えることができるのである。心理療法のトポスでこのような表現に出会うとき、物語が異なる位相で生成されていく体験を心理療法家は共にする。そのとき、生成される物語は「水平関係」というよりもむしろ「垂直関係」において展開される。「深い転移／逆転移」が生じていると考えることができる。

河合(1985)は深い転移と強い転移とを区別して論じているが、それを簡潔にまとめると、「強い転移」は転移／逆転移がクライエントと心理療法家という個人に向かう「水平軸」で展開するのにたいし、「深い転移」は直接に個人に向かうのではなく、両者が無意識に向かって開かれ、そこにおいて出合うことをとおして個性化へと向かう「垂直軸」で展開するのである。

このようにみると、「なぜかわからない」は、ふたつの事象が繋がる語りであると同時に、さらに人間の不思議へと開かれていくものであると言うことができる。そこには、母子というふたりの人間がこの世に存在していたことの不思議を感じることができる。この体験はさらに、クライエントと心理療法家双方をして、人間存在(その生と死)という普遍的事実へと向かわせ

る。

そもそも、人間存在はまったくもって不思議としか言いようがないのではないか。母親がいて息子がいたというのはたしかに事実である。しかし、その事実がクライエントと心理療法家の actual な関係性、さらには深い転移／逆転移をとおして心的現実にまで到るとき、人間存在は不思議としか言いようのない現実となる。このようにして生成される物語は普遍性へと開かれていると言うことができる。

心理療法を物語創出のトポスと捉えると、そこには、クライエント固有の物語の創出にかかわろうとする心理療法家の姿勢がある。クライエントはいかなる歴史を生きて今このトポスにいるのか、クライエントみずからの語りに耳を澄ませるのである。クライエントの語りの背後には世界が広がっている。このような心理療法家の姿勢は、クライエントの語りをとおして世界を知っていこうとすることでもある。そして、心理療法家もまた自身の物語を生きる存在としてクライエントに対峙する。クライエントの語りに「聴き入り」、クライエントと心理療法家を巡るコンステレーションの動きを細心の配慮をもって感得しようとする。筆者はこのような姿勢でもってクライエントに会っているが、それはいわばクライエントをとおして、同時に自分自身をとおして人間の普遍に触れようとする試みと言える。河合(1998)の指摘する「聴き入る」とはこのような心理療法家の姿勢であると考えられる。深い転移／逆転移というのは、このような姿勢をとおして現出してくるのではないだろうか。

このようにみると、非因果性の下にある事態を、クライエントと心理療法家双方が「生きる体験」として意味づけていく営み、すなわち物語生成のプロセスに転移／逆転移が機能していると筆者は考えている。

Ⅳ　物語の覚醒

人間の営みは物語創出の歴史であると言える。個々の物語としては、たとえば『自伝』の冒頭に、Jung(1961)がいみじくも、「私の一生は、無意識の自己実現の物語である」と述べたとおり、個人の一生はまさに物語の創造にあると言うことができる。また、個人を超えて、人間の歴史をとおして、神話・昔話・民話などさまざまな物語が創出されてきた。こうしたことは、人間の生存と物語の深く密接な関係を示唆する。人間は、生きるプロセスにおいて物語を必要としてきたと言うこともできるであろう。それでは、このように創出された物語と現代人の営みにはどのような関連があるのであろうか。

人間は個々それぞれの物語をもっているわけだが、その物語を個々は完全に把握しているだろうか。たとえば、まったく見知らぬ外国人が私に転移を向けてくるとき、その私の背後に、自分自身では意識していなかった、またそれゆえどうしようもなく規定されている物語が潜んでいたことに気づかされることはないだろうか。たとえばそれは、文化、民族、国籍などの物語である。これを文化転移／逆転移、民族転移／逆転移、国籍転移／逆転移などと言うこともできるであろうし、さらには元型転移という概念はユング心理学がつとに強調するところでもある。具体的に考えてみよう。

かつて、筆者が訓練段階の心理療法家であったころ、人間関係がうまくいかないという主訴である若い女性が相談に来られたことがあった。結果的に、一回かぎりの面接となったのだが、

筆者にはいまだに深いテーマを提示してくれる事例である。つまり筆者の内にはその女性との出会いによって覚醒された物語が今も生成されているのである。その女性は、自身のこれまでや現状を語りながら、ときおりじっと筆者を見つめることが多かった。語りの内容は筆者には了解可能なものであったが、微妙に伝わってこないという印象も抱かせた。しかしそれは今後のテーマとして継続していけるとの手応えをもった筆者は、時間終了近くになって継続して会っていきたい旨を話すと、その女性はさながら彼岸からこちらを見るような視線を筆者に向けてきっぱりとこう言ったのである。「けっこうです。私は部落出身者です。このことがどういうことか、あなたにはわからないでしょう」。筆者にとっては人間の普遍に深く思いを馳せる瞬間であった。クライエントと筆者の間に、クライエントの物語をとおして深い転移／逆転移が現出したと言うことができる。このことばにたいし、いろいろな返答があり得るであろう。しかし筆者には返すことばがなかった。そして、筆者の内におのずと物語が覚醒したのである。

差別の物語はクライエントが創出したものではない。しかし、クライエントはその物語を生きつづけていたのである。クライエントを巡るさまざまな事象がこの物語のプロットによって繋がっていたのである。当時の筆者にはそのプロットが読めなかった。クライエントもまた、「あなたには読めません」と明確に告げていた。また、その物語は筆者が創出したものでもない。しかし、筆者という個人を超えて、筆者という人間の内なる物語が覚醒したのである。この物語は今もなお、覚醒しつづけている。

このように、物語があるまとまりをもっているとき、それは、個人を巡るさまざまな事象があるプロットによって了解可能に思われるときであるが、そのようなときに、そのまとまりが揺さぶられ崩されかかる事態が生じることがある。

これはある友人が語ってくれたことである。彼女がフランスの語学学校に通っていたとき、次のようなことがあった。ジャンヌ・ダルクの話が出たときのこと、クラスにいた二人のイギリス人がきまり悪そうに「僕たちは外に出てるよ」と言って立ち上がりかけた。そのとき、フランス人の教師は、そうしてちょうだいというような目配せをして彼らの態度を尊重したうえで、「ジャンヌ・ダルクを火刑にしたのはイギリス人だけど、ジャンヌ・ダルクを売ったのはフランス人。気にしないで」と言ったそうである。自国が犯してきた歴史をみずからが引き受けていこうとしているイギリス人の姿に、彼女は彼らの覚悟の深さを痛感したと筆者に語ってくれた。フランス人の教師もまた同様であろう。彼らの内には、個人の体験を超えて物語が生きているのである。

物語を生きるというのは、このような姿勢を言うのであろう。ここで、生存の危機と物語の生成を生きたJungの体験を振り返ってみよう。それは、周知のようにFreudとの訣別を契機としていた。「無意識との対決」と呼ばれるJungのこの時期について河合(1978)は次のように述べている。Freudと訣別した当時、現実・内界のいずれにおいても不確実感と方向喪失感におそわれていたJungは、大学職を辞し、「自身の無意識の世界と、患者の語る夢や妄想などの世界に直面することを決意する」。そのプロセスにおいて、「その内容が神話や昔話などと極めて類似していることに気づき」、神話・昔話の研究に没頭することになる。その体験から得たJungの結論は、「人間というものは生きてゆくために、神話と必要とする、ということであった。人間は生きてゆくためには、外界に対する知識を必要とするが、それと同時に、一体、自分はどこから来てどこへ行くのか、という根源的な問いに対して答えうる知恵をもたねばならない」。その知恵が神話にあると考えたJungは、「お前の神話とは何なのか」との

内界の声を聴き、無意識との対決へと向かっていったのである。Freud との訣別という生存の危機となる事態を契機として、Jung は自身の物語の生成を生きていくことになったのである。Ellenberger が「創造の病」と呼んだこの体験は、Freud との転移／逆転移関係を Jung 自身が切断することによって、深い転移／逆転移すなわち人間存在そのものに触れる世界との関係を深め、物語の生成を生きていったと理解することができるであろう。

このようにみると、日本人は、「私は日本人である」という物語をいかに生きようとしているのであろうか。私は日本人である、というようなことは、普段、何気なく過ごしているときはさして意識することはない。しかしたとえば、外国に行ったときはどうであろうか。筆者は自身が日本人であるということを、二度の韓国滞在体験をとおして痛烈に意識させられた。そして、筆者の内に、いわば眠っていた物語が覚醒するのを明瞭に自覚したのである。現代に生きる筆者個人が韓国人といかに繋がるのかということは、「水平関係」すなわち筆者の物語の生成である。しかし、筆者個人の背後には、「垂直関係」すなわち筆者の存在によって覚醒させられる「韓国と日本」の物語が生きている。それは、韓国人にとっても同様であろう。筆者個人の意志を超えてそれは生成しているのである。このようなとき、「私という日本人」と韓国との間にどのような物語が創出されるのか、それは「日本人である私」がどのような物語を創出しようとしているのかに密接に関連することであろう。

V　おわりに

冒頭にも若干述べたが、筆者は、個の確立が声高に語られるようになった時代に、心理療法の領域においては、その個を徹底的に攻撃する境界例のクライエントが増えてきたことに、物語の観点からして、とりわけ意味深さを感じる。これについても河合(1989)の深い論考があるが、筆者は、個の確立という現代人が創出しつつある物語にたいし、境界例のクライエントは、その物語は現代を生きるに充分でないどころか個にとって危機的状況にすらあることを訴えていたのではないかと考えている。境界例のクライエントは自身の物語を心理療法家、ひいては現代社会に向けて語るけれども(強い転移)、心理療法家はその物語を自身、ひいては現代人の物語に組み込んでいくことができなかった(強い逆転移)。つまりそこには、「深い転移／逆転移」体験をとおしての物語の生成がなかったのである。

筆者(1987)はかつて、境界例の心理療法における心理療法家の体験すなわち逆転移についてアンケート調査を行ったことがあるが、そのなかで、多くの心理療法家が境界例のクライエントの物語を聴くことに自身の痛みを体験していた。それは、クライエントにたいする破壊性および自己破壊性の強烈な高まりであり、境界例のクライエントの物語を聴くことが「生死にかかわるものである」ことを容易に連想させた。まさしく切断の危機である。個の確立には分節化・切断とそれに伴う痛み・悲しみ・怒りの体験が必然的に伴ってくる。その体験は、いわば世界に向けて訴えられているのである。すでに河合(1989)が「片子」の物語で示唆したように、境界例のクライエントは、そうした痛み・悲しみ・怒りにあまりに無自覚すぎた現代に攻撃を向けていたと言えるように筆者には思われる。この物語は、現代においても生成途上であると筆者には思われる。

Jung, C. G. (1961) Memories, Dreams, Reflections. "Erinnerungen Träume Gedanken" Jaffé, A., ed. Random House, Inc.(河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳(1973)ユング自伝－思い出・夢・思想. みすず書房)

皆藤　章(1987)　境界例患者 ── 治療者関係における治療者の体験の検討.　心理臨床学研究, 4, 2, 7-17.

皆藤　章(1998)　生きる心理療法と教育 ── 臨床教育学の視座から. 誠信書房.

皆藤　章(1999)　内なるクライエントの語り ── クライエントにとっての事例報告.　臨床心理事例研究, 26, 30-36.

河合隼雄(1978)　ユングの生涯. 第三文明社.

河合隼雄(1985)　箱庭療法と転移. (河合隼雄・山中康裕編)箱庭療法研究２. 誠信書房.

河合隼雄(1989)　生と死の接点. 岩波書店.

河合隼雄(1992)　心理療法序説. 岩波書店.

河合隼雄(1993)　物語と人間の科学. 岩波書店.

河合隼雄(1998)　聴き入る ── 心理療法の根本. 精神療法, 24, 6, 32-34.

4 調査班のおもな研究成果（1）

「この世とあの世」国際比較調査研究

4-1 現場（フィールド）心理学における質的データからのモデル構成プロセス：
「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に
やまだようこ

4-2 Japanese students' depictions of the soul after death: Towards a psychological model of cultural representations
Yamada Y., & Kato, Y.

4-3 The spatial representation of this world and the next world in Japanese, Vietnamese, British and French drawings
Yamada, Y., Kato, Y., Ito, T., & Toda, Y.

4-4 Les représentations spatiales de ce monde et l'autre monde vues dans les dessins des étudiants japonais, vietnamiens, français, et anglais
(日本、ベトナム、フランス、イギリスの大学生のイメージ画にみる「この世」と「あの世」の空間表象)
Kato, Y., Yamada, Y., Wallon, Ph., Mesmin, C., Ito, T. & Toda, Y.

4-5 アジアの視点から見たベトナムの他界イメージ
伊藤哲司

4-6 Folk Beliefs of This World and the Next World after Death in Japanese, Vietnamese, French and English People
Toda, Y., Yamada, Y., Kato, Y. & Ito, T.

4-7 現代フランス文明における死生観ー質問紙調査による日仏比較
(Les idées sur la vie et la mort dans la civilisation française contemporaine. Philippe Wallon)
フィリップ・ワロン（加藤義信訳）

4-1

質的心理学研究　第1号／2002／No.1／107-128

フィールド 現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス
――「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に

やまだようこ　Yoko Yamada
京都大学大学院教育学研究科　Graduate School of Education, Kyoto University

要約

本論は，現場心理学において質的データからモデルを構成する方法論について，実際の研究を例にしてモデル構成プロセスを考察した理論論文である。まず，モデルとは何かについて考え，モデルを「関連ある現象を包括的にまとめ，そこに一つのまとまったイメージを与えるようなシステム」と定義した。そして論理モードとは異なる図像モードによるモデル作成を提案した。

次に現場データからどのようにモデル構成していくか，その実際のモデル構成プロセスを，「この世とあの世」イメージ画研究をもとに考察した。そのプロセスにおいて，Ⅰ基本要素，Ⅱ基本構図，Ⅲ基本枠組と名づけた水準の異なる3つのモデルが構成された。Ⅰ基本要素は，生の質的データからボトムアップで構成され，分類カテゴリーの作成と再び生データを見直して数量的・質的分析をするために使われた。Ⅲ基本枠組は，理論からトップ・ダウンでつくられた座標系である。Ⅱ基本構図は，最後につくられた媒介モデルで，ⅠとⅢを包括的に関係づけ，基本要素の変化プロセスを位置づける関係体モデルである。これは，質的データの具体性と固有性を保持しながら一般性を表示できる「半具象的図像モデル」として注目された。

キーワード　モデル構成，質的方法，現場（フィールド）心理学，イメージ描画，図像モデル

Title

The process of model construction based on qualitative data in field psychology: Figurative models from image drawings of "This World and the Next World"

Abstract

The methodology of model construction based on the qualitative data was considered by our research on Japanese-French image drawings of "This world and the Next world." The following three figurative models were constructed: Ⅰ Element, Ⅱ Composition, Ⅲ Framework. Model Ⅰ (Element) was the fundamental pattern categorized from raw data of image drawings. Model Ⅲ (Framework) was the theoretical coordinate for mapping the elements. From the combination of these two models, Model Ⅱ (Composition), the process of change of the elements from this world to the next world within the framework, was constructed. It is an integrated model depicting the abstract configuration and variety of concrete arrangements of naive images.

Key words

model construction, qualitative method, field psychology, image drawing, figurative model.

I　モデル構成のための現場（フィールド）心理学の方法

現場（フィールド）心理学において質的データをもとにモデル（理論・仮説）を構成する方法として，山田（1986）は「モデル構成的現場心理学の方法論」を提案してきた。本論文では，それをさらに具体的な方法論として発展させるために，実際に行われた「この世とあの世」イメージ画研究を例にして，特にモデル構成プロセスに焦点をあてて考察する。

モデル構成的現場心理学は，まず私たちが生きている日常生活のローカルな現場を研究の土台として，その現場から問題や方法を立ち上げてモデルをつくり，より多くの場や文化において共有できるように一般化していくことをめざしている。

従来の心理学研究では，特定の現場や文化でつくられたモデルやカテゴリーを普遍的な基準とみなし，それを輸入して改良や修正を加える研究が多かった。しかし，それでは現場に根がないので育たず次々と流行の切り花輸入を繰り返す研究になりかねなかった。モデル構成的現場心理学のアプローチは，現場に根づきオリジナルな発想を生み出し育てる研究，そしてそれを特定の現場や文化を超えて一般化したり多文化（多現場）化する研究を志す人々に役立つだろう。ただし，このアプローチでは「特定の現場に根ざすローカリティをもちながら，他者と共有できるような一般化をする」という矛盾する要請を両方とも満たさねばならない。それには，何らかのかたちでのモデル化が有効と考えられる。モデル構成的現場心理学と名づけたのは，そのためである。

それでは，モデル構成現場心理学におけるモデルとは何だろうか，そして実際にどのようにモデル構成をしたらよいのだろうか。本論文の目的は，具体的な研究事例をもとにモデル構成プロセスの実際をできるだけ詳しく記述することによって，これらの問いについて考察することにある。

II　モデルとは？――半具象モデルを図像モードで

モデル（model）とは，「関連ある現象を包括的にまとめ，そこに一つのまとまったイメージを与えるようなシステム」（印東　1973）と定義される。

モデル化は，一般的に3つの機能をもつと考えられる。第1には，個々の多様な事象を包含しまとめて記述する知活動の集積庫や図鑑を提供することである。第2には，個々の事象を一般化したり類型化したりものさしとなる基準をつくる認識の枠組を提供することである。第3には，個々の事象を見る見方が変わり，新たな仮説や実証を発展的に生み出していく生成的な機能をもつことである。

本論で特に強調したいのは，モデル化のもつ第3の機能である。モデルは，個々の事象をまとめて包括するだけではなく，それによって個々の事象を見る新しいものの見方が切り開かれる生成的な働きをすることが望ましい。

ここでとりあげる研究例でいえば，個々に描かれる具体的なイメージ描画は，個人によってさまざまで多様なかたちで描かれる。その個々に描かれた具体的形態を偶然にでたらめに現れた多様性とみなすのではなく，その多様性に何らかの共通性やルールを見いだしてまとめて一般化して認識していく働きは，「知る」という営みの根幹をなすと考えられる。個々の具体的事象をより一般化して認識していく働き，つまり「知る」という doing や working をするための「知活動の図式」（schema for knowing）を，ここではモデル（model）と呼ぶのである。

知活動の図式としてのモデルは，一度知ってしまえば終了というのではなく，知れば知るほどますます知る必要が生まれる生成的機能をもつことが特徴である。上の定義で「知，知識」（knowledge）という名詞形ではなく「知活動」（knowing）としたのは，生成的機能を強調するためである。つまり，ここで想定するモデルは，固定した静的構造ではなく活動的作業を行う「する」（doing）「働く」（working）「生み出す」（producing）モデルである。また「枠組」（frame）や「構造」（structure）と呼ばないで「図式」（シェマ schema）にしたのは次の理由からである。

Furth, H.G.（1969）によれば，Piaget, J.（1946）は有機体の知る働きの一般的形式としてシェムとシェマを考えた。両者はともに協調する複数の働きかけの般化可能な側面であり，類似の複数の事態に対して適用可能な行動の組織や規制をいう。シェムは，外界への同化と調節の活動にかかわる操作性（operative）の知活動の形式であり，シェマは，象徴やイメージや感覚事象の形態（configuration）とかかわる形象性（figurative）の知活動の形式である。Piaget が強調したのは操作性の知活動であった。

本論では形象性の知る働きに重点をおいていること，そして Furth の区別にかかわらず，両者ともに英語圏でも日本でもシェマ（スキーマ・図式）という名称が一般化していることから，図式と呼ぶことにした。ただし，ここで考えるモデルとしての図式は，現実をよりよく記述するためのチャート（chart 地図・海図）のようなものである。Piaget がいうような有機体内部にある認識構造をさすのではない。同様に，ここで考えるモデルは，内部モデルを仮定しないという観点において，Bowlby, J.（1988）たちがいう「内的作業モデル」（internal working model）とも区別される。ここでは，人間の内面にあると仮定された「内的モデル」をそのまま外へとりだそうと試みているわけではない。また，イメージのモデルを，人間の深層にあると仮定された内的現実（無意識など）を外部に投影（project）したものだとも考えない。

本論においてモデルは，内部に実在している実体（entity）ではなく，構成されるものであり，構成主体は研究者である。現実を記述したり説明するための地図の一つとしてモデルがあるのだから，モデルはさまざまな形式で幾つも描くことができるし，目的によって異なるモデルが構成されると考えられる。

さて，先の定義にもどると，「まとまったイメージを与えるようなシステム」としては，数量的データをもとにした数理モデルが自然科学では多く用いられてきた。それに対してやまだ（1986；1987）は，質的データを扱う広義の言語モデルである質的モデルを提唱してきた。

質的データにおいてモデル化が必要なのは次の理由からである。質的データを扱うときには，従来は「記述」か「解釈」かどちらか，あるいは両方が用いられる傾向があった。さまざまなデータを整理し一覧表にしたりタイプに分けて類型化する「記述」，また意味づけに恣意性や主観性がもちこまれやすい「解釈」，そのどちらの方法でもそれだけでは個々のデータ間の意味連関を明確に認識し，現状認識を越える予測力をもつには不十分である。そして現象のよりよい理解には，何らかのモデル化（理論化）が必要だと考えられる。

そこで問われるのは，モデル化の方法である。本論では従来，多く行われてきた論理的方法を唯一のモデル化の方法とみなすのではなく，モード（mode）の違う認識方法を提案したいと思う。モードとは，「方式，やり方であり，そのもとに事実が提示される特別の形式」のことである。Bruner, J.S.（1986）をはじめ多くのナラティヴ研究者は，数学的論理や命題的論理を支える論理実証モード（paradigmatic mode）と物語モード（narrative mode）の相違を区別してきた（やまだ 2000 など）。ここでさらに提案したいのは，広義の物語モードのなかの区別であり，言語モードに対して図像モード（figurative mode）とでも呼べるものである。従来の物語モードについての議論は，ナラティヴ（語り）という用語に端的に示されているように，言語モードに偏向していた。しかし，言語による語り方と，図像による語り方は異質であり，言語シンボルを中心にした認識活動と，図像シンボルを中心とした認識活動は大脳の左右に分極するほど性質の異なる活動である。したがって，広義の物語モードを，言語モード（狭義の物語モード）によるものと，図像モードによるものに区別すべきだと思われる。本論ではいまだ未開拓の図像モードを生かしたモデル化を考えている。

さらに本論では，「半具象」の表示方法でモデル提示する方法を探りたいと考えている。半具象モデル（やまだ 1987）とは，あらゆる現象に適用できる代わりに現実とは乖離する抽象モデルではなく，また無限に多様な具体的現実を個々に写実的に写し取る具象モデルでもなく，具体的現象をできるだけ単純化しながら具体性を保持するための必要最小限の有意味情報を含むモデルである。たとえば「抽象モデル」を数学や化学記号や幾何学図形や抽象絵画に喩えるならば，「具象モデル」は事例や具象絵画に，「半具象モデ

ル」は物語や地図や半具象絵画などにあたる。半具象モデルとは，具体的なイメージのもつローカルで生き生きした意味の本質を保持しながら，あまりにローカルで個別の具体性や複雑性に限定されすぎることからは免れるモデルだといえよう。このモデルの特徴は，イメージからイメージへの比喩的移行や生成的増殖を生みやすいことである。

以上をまとめると，本論で構成するモデルは，言語モードよりも図像モードによる形象的知活動を担うものである。また，包括的説明体系としての抽象的構造としてのモデルよりも，イメージからイメージへと生成的に発展しやすい「半具象的」モデルを求めている。

III　水準の異なる3つのモデル
――I 基本要素，II基本構図，III基本枠組
(Model I Element, Model II Composition, Model III Framework)

モデル構成的現場心理学の方法論は，あらかじめ仮説をたてて，それを実証するためにデータ収集する方法，つまり仮説検証研究の方法論とは異なっている。多種多様な現場のデータからボトム・アップで，より一般化可能な水準のモデルを構成することを目的にしている。

モデルにはさまざまな水準がある。モデル構成は，必ずしも最終生産物ではなく，実証的データ分析に向かう中途段階において必要な場合もあれば，より一般的な高次のモデル構成に向かう場合もある。また，実際のモデル構成プロセスにおいては，いつも現場の生データからボトム・アップで構成されるとは限らず，理論や理念からトップ・ダウンで構成されることもあり，両者が複雑に交互に行ったり来たりしながらなされる。その作業は研究によって独特で，簡単に一般化できるわけではないだろう。そこで，本論では，机上の空論に近い観念的議論ではなく，また個々の詳細な研究技術だけの提示でもなく，実際の研究事例に基づきながら研究方法のメタ化を行うことによって，方法論の一般化と共有化を行いながら具体的に議論していく道をとる。

また，モデル構成を考えなくとも，数量化するために現場の質的データからカテゴリーを作成することは心理学研究では頻繁に行われる。このカテゴリー作成作業も，モデル構成の一部あるいは同質の作業とみなすことができる。したがって，本論は，数量的分析のためにカテゴリー作成する際にも役立つと考えられる。現に筆者たちの研究では数量的分析と質的分析を両方行っており，数量的データと質的データをそれぞれの長所を生かしながら相補的に用いている。

以後は現場データ，特に自由記述で得られた多様な質的データからどのようにモデル構成するかという具体的プロセスについて，実際の研究例をとりあげて考察する。モデル構成プロセスを具体的に示すことによって，質的データをどのように分析しモデル構成していくかについて議論を深めていきたい。

ここでモデル化の事例としてとりあげるのは，やまだが1994年から研究を開始し，その後日本とフランスの国際共同研究に発展した一連研究の一部で（やまだ　2001a；やまだ&加藤　1998；Yamada & Kato 2001），人々が日常的にもっている社会文化的表象をイメージ画によって調べる研究であった。第1の研究目的は，人間を「心理的場所」（この世とあの世という二つの場所）のなかで定義したときに，それらの人々がどのような関係性で表象されるかということであった。第2の目的は，「死ぬこと」を，この世からあの世へ移動するという「心理的場所の移動」と，この世の人からあの世の人に変化する，あるいは人間からたましいに変わるなど「他の存在様式や形態への移動」という二つの移動概念の表象からとらえることであった。現場データは，日本1193人とフランス420人の大学生，計1613人を被験者として二つの教示でA4白紙に自由に描いてもらった2種類のイメージ画である。イメージ画1の教示は，「もしあの世があるとしたらどうでしょうか。あの世とこの世の関係をイメージして絵に描いてください。説明をつけ加えてください」。イメージ画2の教示は，「もしたましいがあるとしたらどうでしょうか。たましいがこの世からあの世へ行く過程，あの世からこの世へ帰る過程をイメージして絵に描いてください。説明をつけ加えてください」であった。

上記の教示で得られた個々の具体的で雑多な大量の

質的イメージを，図像モードにより半具象的にまとめることによって，社会文化的表象としての「あの世とこの世の関係」と「たましい」のイメージを認識するためのモデル構成を行うことが研究の目的であった。

実際のモデル構成の作業は7年間にわたって試行錯誤しながら，数々の構築・破棄・修正作業を繰り返して行われ，現在も改訂されつつある。したがって現時点でも暫定的モデルであり完成品とはいえない。しかし，私はモデル構成を，本来的に改訂・変容していく生成的作業モデルとして考えているので，モデルは常に変容の途上にあるともいえる（やまだ　2000）。ただし，現在ではようやく，一つのステップとしてある程度安定し他者に説明可能な地点まで来たと考えている。

私たちの共同研究では，水準の異なる3つのモデル構成を行った。図1は，3つの水準のモデル構成プロセスの実践を統合して後でまとめたものである。したがって図1は，「モデル構成プロセス」のモデル化である。研究を始める前に図1があったわけではないから，すべてのモデル構成が実際にこの手順で組織的に行われたわけではなく，用語も含めて何度も改訂を重ねてきており，今後の検討課題も大きく残されている。つまり，図1は，試行錯誤と紆余曲折を繰り返して分析をすすめた研究実践の経過を現時点でまとめた作業プロセスモデルである。

まず図1に太枠で示した3つの水準のモデルの性質について簡単に説明しておきたい。

1）モデルⅠ　基本要素（Element）

第1のモデルは，個々の現場データの具体的イメージから，その基本要素をとりだしてまとめたものである。個々の人々が描いた生のイメージ形態にもっとも近く，ローデータを直に反映したモデルである。基本要素は次の基本構図をつくるときの構成要素となる場合と，基本要素のみをカテゴリー化し定義・分類して実証的データ分析に用いられる場合がある。

イメージ画2の分析では，「基本構図作成」と「定義・分類」の両方向の分析を行った。基本要素は，「基本形 Fundamental Figure」と名づけた。

2）モデルⅡ　基本構図（Composition）

第2のモデルは，関連する基本イメージを包括的にまとめ，ひとまとまりのイメージを与える「基本構図」である。

基本構図は，基本要素の配置（arrangement）や構成（construction）によって成る「配置形態」（各要素の相対的配列 configuration）を表している。配置形態という名称ではなく構図という名称にしたのは，本研究では，実際に私たちの目に見える配置形態は3次元であるのに対し，それを描画という方法によって2次元で表した図のみを問題にしているからである。配置形態が「地形」や「星位」に喩えられるとすれば，それを2次元の平面に表した基本構図は「地図」や「星座」にあたる。

3）モデルⅢ　基本枠組（Framework）

第3のモデルは，基本構図を位置づける座標系となる「基本枠組」である。基本枠組は，基本構図を成立させる前提となる枠組，骨格，構造にあたる部分である。また，基本枠組は基本構図の描き方を決める額縁でもある。基本構図の描き方，つまり基本構図の寸法や縮約や抽象のしかたや要素の選択や描線の描き方などは，この基本枠組を現実世界のどこを対象にどのような寸法で設定するかによって決まる。

モデルⅠの基本要素は，より具象的で経験的であり，実際に現場で観察された描画の一部（個々の生のイメージ画）をそのまま要素として用いることもあった。この場合，要素が実際の描画の一部であっても，他の多くのデータ集合から選択しとりだす作業がなされており，表象の程度は低くても，representation（代表作用）が行われているゆえに，「モデル」とみなされる。

モデルⅢの基本枠組は，抽象度が高く複数のモデルを共通して位置づける基礎的骨格を提供する。

モデルⅡの基本構図は，モデルⅠとモデルⅢの相互関係によってつくられたモデルであり，半具象モデルの性質をより明確にもつ関係体モデルである。

以上のようにモデルⅠからモデルⅢに至るほど，抽象化の程度が高い。しかし抽象化の水準は，モデル構成の順序とは必ずしも一致しない。後に示すように，

実際に構成されたプロセスは，モデルⅠ→Ⅱ→Ⅲという順序ではなく，モデルⅠ→Ⅲ→Ⅱであった。

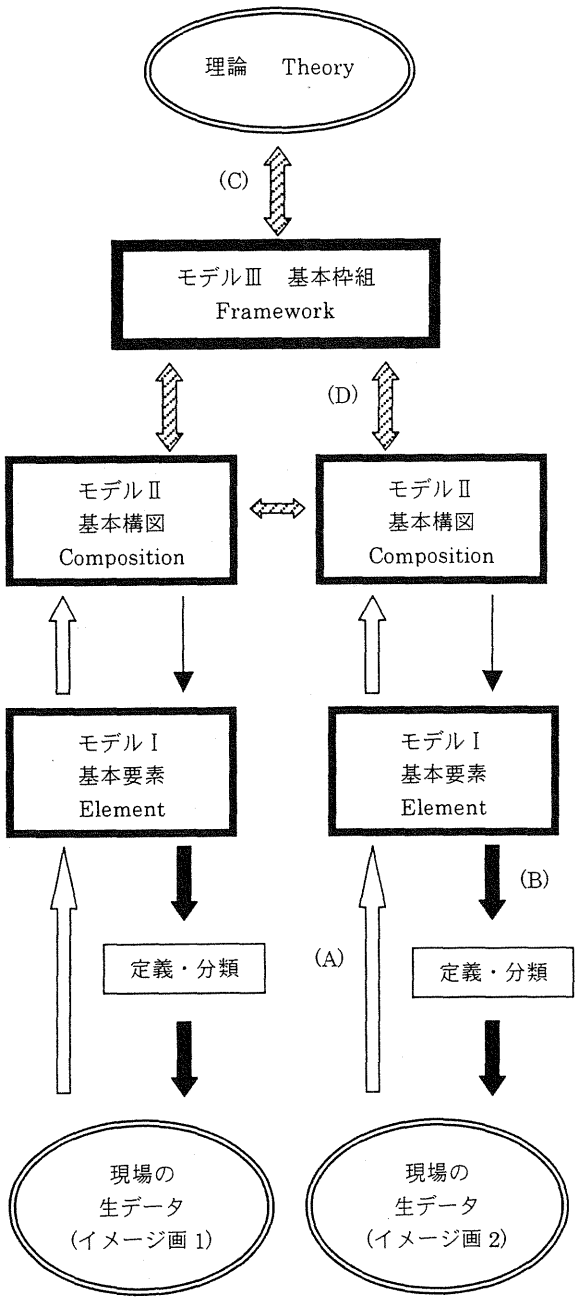


図1　現場データからの3水準のモデル構成プロセス
モデルⅠ　基本要素，モデルⅡ　基本構図，モデルⅢ　基本枠組。（A）～（D）は構成順序。

Ⅳ　「モデルⅠ 基本要素」の構成プロセス

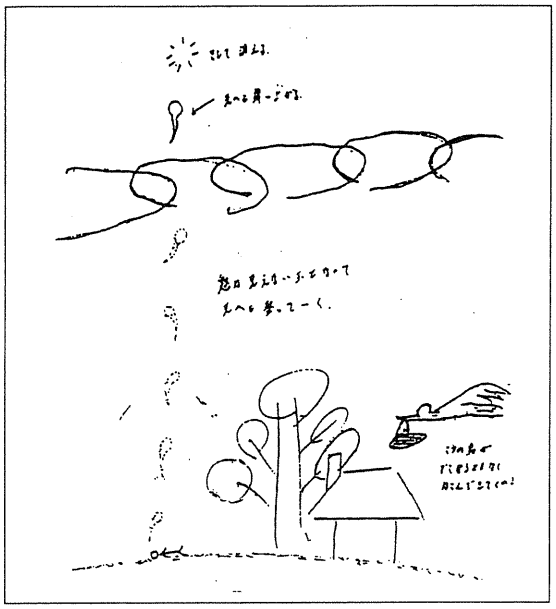
図1に示した3つの水準のモデルの関係と構成プロセスを順に説明する。

イメージ画分析において，イメージ画1とイメージ画2はまず別個に，それぞれのローデータからボトムアップで「モデルⅠ 基本要素」をとりだすモデル化がなされた。そして「モデルⅠ 基本要素」をもとに分類カテゴリーを作成し，定義と分類基準をつくり信頼性を測定し，生起頻度の日仏比較など数量的分析をした。このプロセスは，イメージ画1とイメージ画2で共通していた。

モデル構成は，イメージ画の種類によって，あるいは同じイメージ画のなかでも幾つもの観点から複数のモデルが構成されたので，モデルの水準も多岐にわたった。多くのモデル構成のうちから，ここでは説明事例としてもっとも明確に3つの水準のモデル化が行われたイメージ画2の一部「たましいの形と形態変容」モデルの構成プロセスをとりあげる。

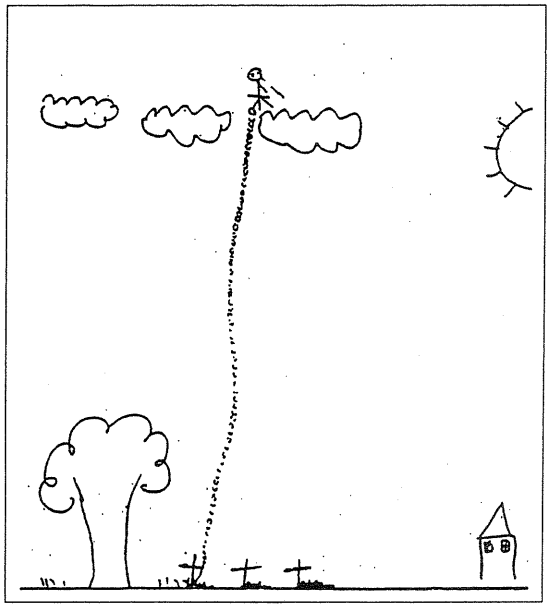
Ⅳ-1. 現場の具体的生データからモデル構成へ「モデルⅠ たましいの基本形」の構成 図1（A）

イメージ画2において実際に描かれた具体例を図2-1，図2-2に示した。現場データの特徴として，実際の描画は多種の意味の複合体であるから，このような描画から何に注目してどのような観点から分析するかが大きな問題となる。私たちは多くの絵を見て，まず「たましいがどのような形態で描かれたか」そして「移行の過程でたましいの形がどのように変容するか」に注目した。図2-1の日本人の絵も図2-2のフランス人の絵も，人が死ぬと死体となった人間の身体とは別の形をした「たましい」になって昇天するというよく似たイメージを表している。この世からあの世へ移行する途中は希薄化して点線で描かれている。これはのちに「気体形」と名づけた形である。二つの図とも，雲の上のあの世では形が見えるように実線で描かれるというアイデアはよく似ているが，たましいの形の表象は異なっている。のちに私たちは図2-1



魂は見えない玉となって上へと登っていく。天へと舞い上がる。そして消える。こうの鳥がどこからともなくはこんできてくれる。

図２－１　イメージ画２の具体例
（日本の大学生の絵，事例 No. J0285②）



人は死ぬと，そのたましいは昇天するが，しかし肉体は残る。たましいのおかげで，人はあの世でまた再構成される。あの世の人は，地上で起こっていることすべてを見ていて（この世の）人の心の中を読むことができる。この世への帰還は，‥‥（解読不能）の形で以外にありえない。

図２－２　イメージ画２の具体例
（フランスの大学生の絵，事例 No. F0317②）

図２　イメージ画２の具体例　日本とフランスの大学生の絵
〈全体的なイメージは共通〉死後にこの世の人間の身体とは異なる希薄化した「たましい」になって空中に上昇し，雲の上のあの世ではたましいの形が明確化するか，再び人間の形になる。〈たましいの形は相違〉日本の絵のたましいは「気体形」と「人魂形」，フランスの絵のたましいは「気体形」と「人間形」で描かれている。

の形を「人魂形」，図 2－2 の形を「人間形」と名づけた。

このように私たちはまず，たましいの形態に着目してカテゴリー作成を行った。カテゴリーに分類して，数量的比較や質的比較を行うためである。しかし，私たちの研究では，通常の実証的アプローチのように，単にカテゴリー分類によって数量的分析をすることだけが目的ではなかった。モデル構成的現場心理学のアプローチ，つまり，たましいのイメージを「形態」から理解するための理論モデルをつくり，データをそのモデルのなかへ位置づけて理解することが第１の目的であり，そのためにカテゴリー作成をしたのである。

まず図２のような実際の描画データをていねいに観察して「たましい」がどのような「形」で表現されているかを知り，その「基本形」をモデルとしてとりだす作業をした。それが図 1（A）で示したプロセスであり，その説明を以下に記述する。

1）収集された現場データの加工・編集〈まるごと手の内へ入れる知の縮小化〉

第 1 ステップにおいて，収集した現場の生データ（A4 版）を 4 分 1 の縮小コピーにしてカード化をして，全体を見やすく取り扱いやすくした。このように現場データを当面の目的にそって観察しやすい形に加工・編集する作業は，第 2 ステップのデータ観察と交互に行ったり来たりすることがふつうであり，両者の順序は入れ替わりうる。

本研究では静止したイメージ画が対象であるから，縮小コピーにしてカード化するという簡便な作業によって，生のデータをまるごと繰り返し観察可能な形に編集した。VTR 画像などの場合には，編集作業をするための視点を発見することが必要なので，生のデータ観察が加工・編集に先立つことが多く，観察と編集の交互の行き来は非常に頻繁に必要となる。

一般に，生のデータをどのような大きさに加工するかは，目的によって異なるわけだが，これが意外に重要な作業であることを注意しておきたい。実験研究では，最初から見る視点や測度を決めてから生データがとられるが，現場研究では生のデータのなかにさまざまに雑多なものが混入しており，そこから何が意味ある視点や指標かをとりだす作業自体が重要であり，それはデータに何らかの加工・選択・編集をする作業と不可分だからである。本研究では最初，もとのデータと同じ大きさの A4 コピーを用いて分析していたが，それを 4 分の 1 のカードにすることによって画期的な合理化がはかられた。縮小化によって一目で複数のカードが同時に比較できるようになり，携帯性や利便性も大幅に増大した。

人間には一度に視野に入れられる範囲に制約があるから，縮小化のもつ長所は大きい。これは単に用紙サイズの大きさの問題ではない。情報をいかに取り扱いやすい大きさにするかが，何を意味ある情報としてとりだそうとするかにかかっているのである。したがって現場から得られた生のデータをどのような大きさに加工するかは，単なる技術の問題ではなく本質的な作業となる。

この縮小化は，KJ 法（川喜田　1967）において，データを縮小カード化しラベル化し，一枚の模造紙の大きさのなかに全体が見えるように配置する作業と共通点をもつ。私たちの研究では，インタビューのような時系列を含む語りデータや観察も含む複雑なデータではなく，A4 一枚の紙にすべての情報をまるごと含みこむ図像データにしぼった時点，つまりデータ収集の時点ですでに「情報のまるごと縮小化」が試みられているのだが，それをさらに「情報を手の内に入れて操作できる」知の大きさへ縮小したのである。

ここで試みた縮小化とは逆に拡大化によって，ふだん気づきにくい部分を見ていく方法もある。絵であれば拡大コピーによる部分の拡大である。VTR データであれば，部分選択や静止画が縮小化にあたり，スローモーションなどの加工は拡大化にあたるだろう。

2）現場データの観察〈有限情報の繰り返し観察による基準づくり〉

第 2 ステップとして縮小加工したデータ束の全体を繰り返し観察した。この観察には，特に初期の予備研究の段階では膨大な時間を費やして何度も行った。

経験的には，この段階で 100 枚程度のイメージ画がすべて記憶されると，それが基準になって，その後は初めて見る絵であってもおよその位置づけや関連づけができる。まったく視点も仮説もない初期の段階では，一度に大量のデータを対象にしないで，幅広くサンプリングされた多様性のあるデータであって，しかも数を限定した同じデータを，繰り返し繰り返し何度も観察することが新しい発見をする基準や標準を観察者の内につくるために重要と思われる。この作業で，あまりに大量すぎるデータがあると，十分にていねいに見られなくなる。

後に記すように，質的分析を行うため質的事例を抽出するときには，生データは大量であるほどよいと私は考えている。質的分析は，少数事例分析と同義ではない。数量的分析では統計的手段によって解釈の妥当性が支えられるが，質的分析では少数事例のみを見て解釈することには大きな危険をともなう。したがって，質的分析のほうが統計的分析よりも大量のデータを必要とするというパラドックスが起こる。経験的にいえば，イメージ画では統計的分析に必要な 100 事例の数倍以上必要だろう。そうすれば，どんな特異に見える事例にも類似した例や関連事例が見つかる。したがって，自信をもって典型パターンや変異パターンを提出できる。また，たとえ独特の一事例だけをとりあげて何かを言う場合にも，周辺ヴァリエーションを含め

た分厚い記述によって，その一事例を支えることができる。分厚い記述（Gearts 1973）は，観察データだけではなく調査データにおいても重要である。

しかし，ここで述べているモデル構成の基礎作業である基準づくりのための観察においては，むしろ 100 事例ほどの有限の情報を繰り返し見るほうがよいと考える。現場観察や調査において何度も現場に行って詳細がわかればわかるほど何がなんだかわからなくなって，意味ある情報を抽出したり研究をまとめることが困難になることは多くの研究者が経験することである。情報量がある程度以上になると複雑になりすぎて収拾がつかなくなるのである。初期の段階ではある程度のヴァリエーションをもつデータが入手できたら，数量を際限なく増やすことを抑制し，その代わりに繰り返し同じ（類似した）データをていねいに見ることが有効と思われる。再現性（replication）を保証することは科学の基本であるが，質的データにおいても再現され繰り返される事例から学ぶことによって，ものを見ていく基準（standard）をつくることができよう。

以上のような限定された対象の繰り返しの観察は，自然観察や VTR 観察の場合にも同様に重要である。繰り返し同じものを見て，自分のなかに改変可能な「シェマ＝雛形」をつくることが以後の作業の基礎になると考えられる。私の場合には，自然観察においては同じ子どもを長期間毎日縦断的に詳しく見たこと，また VTR 観察では限定された同じ実験的場面で 60 人ほどの乳児の行動を横断的に繰り返し何度も見たことが観察の基礎をつくるのに役立った。

3）現場データの質的典型性と多様性の発見

第 3 ステップとして，データを観察して実際にどのような形態が見られたか整理するために，繰り返し同種の形が現れ幾つかの典型的な形に収束する「典型性カタログ」と，形の多様性や変異の大きいもの，不思議に思われる発見を含めた「多様性カタログ」をつくった。

イメージ画カタログは，100 枚程度で枚数が少ない場合であれば，縮小コピーを何度もめくったり，さまざまに並べかえて全体として眺める「図の束」にすれば簡易的にできあがる。私たちの研究では枚数が多かったので着目する観点ごとに独立した作業を行い，数十種類の図録カタログをつくった。特定の「形態」だけをとりだし，「縮小形態コピー」をつくり，それを「図解地図」にした。この作業では，KJ 法における図解化の発想と技術が役立った。

多様性のほうは別途に質的分析の対象にして，繰り返し多量に出現する典型性をもつイメージのほうに注目して次のモデル化にすすんだ。

4）「モデル I　基本要素：たましいの基本形」の構成

イメージ画の典型的事例をもとに，図 3 のように「モデル I　基本要素：たましいの基本形 fundamental figure」として，「人間形」「人魂形」「気体形」などをとりだして名前をつけた。そして再び実際のイメージ画と照合して，図 2 - 1 や図 2 - 2 のような典型事例とそれらの関連を補足的に説明する事例をとりだして検討した。

次に「基本形」を単なる 3 分類のカテゴリーとしてではなく，図 4 に示したような，人間の身体に似た形から消滅していく形までの変容プロセスのなかに位置づけた。たましいの形を「より人間に近いものから消滅に至るまで」の変容と考えてモデル化したのである。

この「モデル I」を変容形としてまとめた段階において，現場の個々ばらばらに見えたデータは，ある種の意味的まとまり（＝モデル）をもって見えてきたわけであり，少し理解がすすんだといえよう。たましいの形態のカテゴリーは，分類するための引き出し，つまり固定した静的カテゴリーではなく，形態変容プロセスモデルのなかの一つの「結び目」として位置づけられた。「結び目」とは，ネットワーク構造をもつモデルにおいて，複数の異質の要素を連結する（結ぶ）とともに，新たな意味を生み出す（嵯ぶ）結節点のことである（やまだ　1987）。モデル化によってものを見る目が変わり，新たな見方が生み出されるのである。

IV - 2. 分類カテゴリーの作成とデータ分析

図 1（B）

以下のプロセスは，図 1 の（B）にあたる。

5）分類カテゴリーの作成〈連続した現象に切れ目

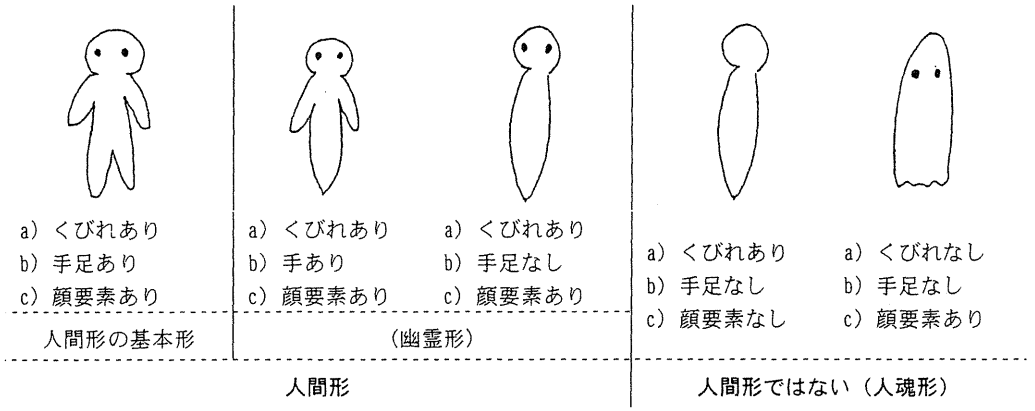


図3-1　人間形の基本形と具体例

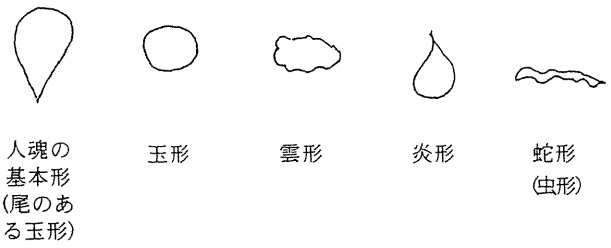


図3-2　人魂形の基本形と具体例

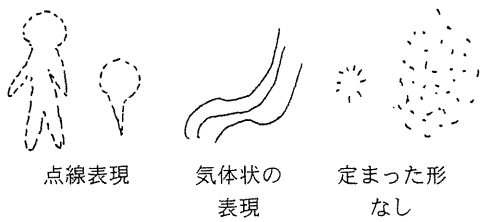


図3-3　気体形の具体例

図3　モデルⅠ　3つの基本要素
各基本要素の定義と分類基準は表1に示した。信頼性測定など手続きの詳細や，数量的・質的分析の実際は，Yamada & Kato (2001)，やまだ (2001a) 参照。

をつくる〉

「モデルⅠ　基本要素：たましいの基本形」としてとりだした「人間形」「人魂形」「気体形」の3基本形の分類カテゴリーをつくった。このカテゴリーは，先にも述べたように，固定した3類型ではなく，形態変化プロセスの一結び目と位置づけられた。実際には連続していて切れ目がない形態変化のプロセスであるが，どこかで区切って分類することによって，ものを見やすくする作業がカテゴリー化である。

6）分類カテゴリーの定義と信頼性測定〈言語化と他者との共有化〉

次にカテゴリーの定義をつくって，表1のように言語化した。そして，おもに予備研究で得たデータの分析を試しに行った。そして実際のデータ分析に耐えうる操作的で実用的な定義であることを確認した。さらに複数の研究者により数十回の検討を行って，改訂を加えた後に定義を確定した。そして，分類カテゴリー作成にかかわらなかった研究者を含めて，独立した二人の研究者が定義に従ってそれぞれデータ分析を行い，

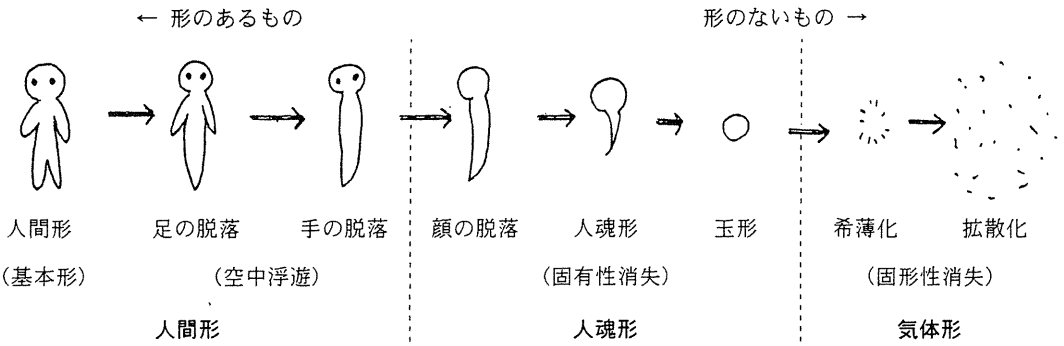


図4　モデル1　3つの基本要素の変化プロセスモデル
図3の第1ステップのモデル化では，基本要素「人間形」「人魂形」「気体形」を3カテゴリーに分類した。カテゴリー分類のためには，基本形とそのヴァリエーション，その形態に分類される範囲，特に「境界」を明確にすることが重要になる。図4では第2ステップのモデル化がなされた。3基本要素の核となる形を中心に「人間形→人魂形→気体形」をたましいの形態の変化プロセスとして位置づけた。図3と図4のモデル化は目的が異なる。図3は，3カテゴリーを区分し，「分ける」ための定義を明確にして数量的分析をするために役立つ。図4は，3カテゴリーの「関係」を表して理解するために役立つ理論モデルである。

一致率から信頼性を測定した。

ここで行われた作業は，単に数量的分析における信頼性測定のための手順としてだけではなく，研究者がつくったカテゴリーを他者に伝達可能なものにし，共有化する過程にもなるので，質的分析のためにも重要である。現場データを繰り返し見てカテゴリーをつくった当事者は，その経験のなかで言語化しにくい暗黙の情報を多く蓄積している。それをできるだけ言語化していくことが定義づくりの重要な作業である。言語化によって他者と共有できるものにすると同時に，信頼性の低い部分や他者と食い違う部分を，共通の議論のまな板にのせることで当初のあいまいな基準をより明確な定義にまで練り上げていくことができる。

この作業では，表1のように定義を明確に言語化し，カテゴリーの中核に位置する典型例を示してわかりやすく他者に伝えられるようにすることがまず必要であった。私たちの研究の一例をあげると，人間形と人魂形の区別にかかわって「人間とみなされる最小限の基本的な形とは何か？」が繰り返し議論になった。最終的には，「人間形とは，a」頭と胴体の分離（くびれ，区切り）がある，b）手か足がある，c）顔の要素（目など）がある，以上の3つのうち2つ以上を満たすもの」という定義をつくった。

次に，カテゴリーの周辺に位置して他のカテゴリーとの境界領域にある例や特異な例を選択して例示することが重要であった。特に境界例については繰り返し検討する必要があった。そしてたとえば，「人間の形の影化（斜線による表現）は人間形に含める」など操作的定義を含めて特記事項を明確にした。

研究によっては，カテゴリー作成の段階で終わる場合もあるだろう。またカテゴリー作成とモデル作成の順序が入れ替わる場合もあるだろう。カテゴリーがモデル構成より先立つ場合もあれば，すべてのモデル構成が終わった後にカテゴリーを作成したほうがよい場合もある。

なお，私たちの研究では「たましいの形」の他に，「たましいの往来プロセス」や「生まれ変わり」のカテゴリーなど，別の目的のためのカテゴリーも多種類つくった。それらの別種の基本形の作成は，上記の1）から6）までの手順を繰り返す作業であり，このループは必要に応じて何度も繰り返された。

表1　たましいの3基本形の定義と分類基準

1. カテゴリー分類する上での基本的注意

〈全般にかかわる分類の基本〉

(1) 基本的には絵を中心に分類する。しかし，説明を加味して総合的に判断する。絵と説明が大幅に矛盾する場合は，絵を優先する。

〈「たましい」分類の基本〉

(2)「たましい」とひらがな表記した場合は，人間形などすべての形を含む広義の内容をさし，人魂形と漢字で示した場合は，狭義の人魂形を示す。

(3)「たましい」の表現形は，死者の肉体から離れた時点以後，途中のプロセスだけでなくあの世での状態も含む。帰還後のこの世における人間あるいは動物の身体表現は「たましい」とはみなさず，分類の対象としない。

(4) 一人の一枚の絵のなかに複数の表現形がある場合は，それぞれの表現形についてカテゴライズを行う。したがって，一人の被験者が描いた絵に複数の異なる形が併存する場合（たとえば，一人の人が人間形と人魂形を両方描く場合）には，両方のカテゴリーにカウントされる。

ただし，一つの表現形には4つのカテゴリー（人間形，人魂形，気体形，その他）のうち，どれか一つに判断してその分類を相互背反的にあてる。また，一人の被験者の一枚の絵で同じカテゴリーに複数個カウントされる場合（人間形が二回出てくる場合など）は，何回出現しても一個とみなす（人間形として一回のみチェックする）。

(5) 一人の一枚の絵のなかに複数の表現形があって，その一つが死者の変形パターンとしての「たましい」の表現と判断される場合，その「たましい」と出会う「お迎えの人」や，「えんま」などの他界の超越的存在の擬人的表現は分類の対象としない。

2. たましいの3基本形の分類基準――「人間形」「人魂形」「気体形」

(1) 人間形

〈人間形の基本形〉

a) 頭と胴体の分離（くびれ，区切れ）がある
b) 手か足がある
c) 顔の要素（目）がある

上記3つをすべて備える形を人間形の基本形とする。

〈分類基準〉

上記2つ以上を満たすものを人間形の最低基準（minimum basic）とする。人間形が影化（斜線による人間形の表現）している場合は，人間形の変形とみなす。

図3-1に，人間形を分類する基準の具体例と，人間形に似ているが人魂形に分類される形の区別を示した。

(2) 人魂形

〈人魂形の基本形〉

人魂形は，人間形と気体形の中間形に位置づけられる。人魂形は，人間形と気体形以外の何らかの特定の形をもち，その形に何も付随していないもの。特定の形の具体例としては，人魂形（尾をひいた球形），球形，雲形，炎形，ファントム（オバQ）形，ハート形などがあげられる。

〈分類基準〉

人魂形は，人間形と次の基準によって区別される。

a) 頭のみの形。頭があるが胴がない，あるいは胴との分離が明確でないもの。
b) 頭と胴（尾）の分離があって手足がないもの。
c) 頭と胴（尾）の分離がなくて顔（目）が描かれているもの

図3-2に人魂形の具体例を示した。

(3) 気体形

〈気体形の基本形〉

気体形は，次のいずれかの表現形をもつものをさす。

a) 光，煙，エネルギーなど特定の対象を表現しているが，定まった形がない表現形
b)「何らかの形」があったものが，消滅，破壊，粒子化，希薄化など形が無くなっていくという表現が明確な場合（「何らかの形」については他のカテゴリーに分類する）
c) 点線による表現形
d) その他，明確な形が特定できない表現形（矢印のみで形が描かれていないものを含む。ただし，矢印が人間形や人魂形の移動「方向」を表示しているだけの場合は除く）

図3-3に気体形の具体例を示した。

(4) その他

a) あの世に移行後，人間，たましい，いずれにもたましいとしての特別な表現がなく，星などの天体表現が見られる場合，その天体表現だけでは「その他」にカウントしない。
b) 具体物に喩えられている場合（たとえば「花」＝たましい）や，心のなかに存在しているなどの表現は，「その他」とする。

7）サブ・カテゴリーの作成

私たちの研究では，3 つの基本形のカテゴリーをつくった後に，「人間形」や「人魂形」の内部をさらに細かく見るために変容パターンを分類するサブ・カテゴリーをつくった。

たとえば「人間形」に関しては，(1) 付加（羽，光輪，頭巾など）：人間形に羽（翼），光輪，頭巾（三角），その他（杖など）がつけ加えられているもの。(2) 脱落（足・顔の要素）：人間形の基本形と比較して，足や顔の要素が見られないもの。(3) 表情・衣服の変容。(4) 影化：人間形が，斜線や黒色などで塗られているもの。(5) その他。以上のカテゴリーがつくられた。

これらの変容形が独立したカテゴリーではなく，サブ・カテゴリーとしてつくられたのは，モデル構成の理念だけからではなく，予備研究からおよその出現頻度を考慮して，あまり頻度が多くなかったからという実際的理由に基づく。他のデータ源（たとえば別の文化の被験者）で，この種のイメージが頻度多く現れるならば，たとえば羽の付加を「人間形」の変容としてではなく，「天使形」などと名をつけて別のカテゴリーにして独立させる場合もありうる。このように，どのようなカテゴリーを幾つ作成するかなどは，現実のデータとの対話によってある程度柔軟に考えたほうがよいだろう。なお，私たちのモデル化では，「羽の付加」など「人間形の変容」のサブ・カテゴリーは，「モデルⅠ」には入らなかったが，後につくった「モデルⅡ　基本構図」のなかへ統合して位置づけることで，より全体的なモデルを作成する際に役立った。

8）カテゴリーへの分類と数量的データ分析

9）多様な形態についての質的データ分析

カテゴリー作成後に，8）数量的データ分析と 9）質的データ分析を行った。数量的分析の分類カテゴリーは，「モデルⅠ」を作成した第 1 段階で作成したのち，何度も改訂された。最初から 3 水準のモデル構成を行うことが計画されていれば，3 つのモデルがすべてできた最終段階で分類カテゴリーをつくったほうがよかったかもしれない。しかし，モデルの全体像が最初からわかっていればモデル構成する必要もないわけだから，モデルとデータのあいだを行きつ戻りつしたり，暫定的にカテゴリーをつくって分析をすすめることは，ある程度不可避であろう。

数量的データ分析と質的データ分析の内容と結果は，報告書（やまだ　2001a）に記述したが，本論の目的からはずれるので省略する。以下にデータ分析の考え方のみを述べる。

数量的分析と質的分析は相補的であり，それぞれに長所をもつ。数量的分析は分類されたカテゴリーの生起頻度など一般的傾向を見るのに適している。また数量化できるのはある程度の出現頻度がある平均的な事例に限られる。質的分析では同カテゴリー内の多様性や微妙な変異をともなうヴァリエーションを詳しく見ることができる。新しい発見をするには，具体的な事例をできるだけ時間をかけて質的にていねいに見ることが重要である。質的データ分析から新たな疑問や洞察を見いだしていくプロセスは，作業としては大変であるが，その過程に現場研究のいちばんおもしろい醍醐味がある。

私たちは数量的分析には被験者総数 561 人の調査資料を用いたが，質的分析の事例は，予備調査も含めて 1613 人の調査資料から選んだ。このように数量的分析よりも質的分析のほうで，より多量の被験者のデータを分析したのには理由がある。

第 1 には，逆説的ではあるが，質的分析においては大量の分厚い記述によって裏付けられた多くの事例がないと典型性や共通性は見えてこないし，少数事例のみでものを言うことは危険だからである。第 2 には，多量のサンプルのなかから選ばないと，絵としても質のよいものが入手しにくいからである。この場合の質がよい絵とは，統計的に大多数の絵と同じカテゴリーに属していながら，全体として重要な要素を含み，印象深くインパクトがあり，生き生きしたイメージをもつもので，このような絵は典型事例としての価値が高い。第 3 には，数量的選択や平均的選択とは異なる基準で選択するためにも，事例は多いほうがよい。多くの事例を見ると類型的で平凡な絵も多く見ることになり，それらと比較すると，特異な絵，独創的な絵，一枚しかないユニークな絵も見いだしやすくなる。少数事例では，それが一般的範疇に属する平凡なものなのか，きわめて変わった特異なものなのかを区別することは難しい。質的分析では，「たった一枚」しか存在

しなくても価値があるとみなせば，重要な事例として選択できる。しかし，なぜその一枚が重要なのかは，ある程度大量の絵を見て比較しながら鍛え上げた見識眼がないと見えてこないし，説得力あるかたちで説明することも困難だろう。

私たちは，イメージ画事例の分厚い蓄積の上で次の3つの観点ごとに，個々のイメージ画を相互に「比較・対照」して選択した。第1に，文化差や個人差を越えた共通性や一般性をもつ典型的なイメージ画，第2に，文化差や個人差をよく表し，多様性や変化可能性を広げる独創性のあるイメージ画，第3に，理論的・文化的・歴史的にみて興味深い観点を含むと思われるイメージ画である。

多くの事例から選択したイメージ画の事例は，比較を可能にした形で，しかしできるだけ生のままで提示することにした。絵は，生の絵のほうが形式化するよりも生き生きして生成的なインパクトをもつからである。また，生の絵のほうが多様性と個性をもつと同時に類似性や共通性をもつイメージの不思議を味わわせてくれるからである。イメージ画の描き方は個人によって独特で一つとして同じものがないといってよいほどさまざまである。しかしまた，類似したものを並べていくと，必ずよく似たものが見いだされる。個々のイメージ画は「個性」的であるが，どれ一つとして「孤立」しているのではない。集合的な社会的表象としてイメージ画を見ると，個々人が描いたイメージは他のイメージと補完したり響きあったり対照したりして大きな織物のなかに位置づけることができる。方法としての「比較」は，共通性を見いだすためにも，相違を明確にするためにも，少しずつズレをもつ変容パターンを見るためにも重要である。

個々のイメージ画は，全体として織物をなす個々の図柄といえるが，その図柄にもいろいろな並べ方や織り方があるだろう。私たちは，あるパターンを典型的な一事例によって代表させるだけではなく類似した絵をできるだけ多く並べて見られるようにした。つまり，一つのイメージのヴァリエーションを重視し，多様な変異形を含めて広く深く味わうことができるように提示した。

V　「モデルIII　基本枠組」の構成プロセス

「モデルIII　基本枠組」構成は，モデルIの構成につづけて行った。図1に示したように，モデルIIIは，本論の事例であるイメージ画2のモデルだけではなく，イメージ画1のモデルも含めて包括的に位置づける枠組モデルとして構成された。

モデルIは，実際に描かれた絵をもとにボトム・アップでつくられたが，対照的にモデルIIIは，理論からトップ・ダウンでつくられた。もちろん，片方向だけの作業はありえず，具体的な個々のイメージとモデルは，双方向に相互に繰り返し行き来して修正を重ね，何度も改訂された。

「モデルIII　基本枠組」を図5に示す。これは，数回の改訂を経たのちの最終ヴァージョンである。この基本枠組は，「心理的場所」（psychological topos）と，「移動」（transition）という二つの理論的な基底概念に基づいてつくられた。この二つの基底概念は，研究調査の初めから仮定されていた概念である。イメージ画2では，「死ぬ」という表象は，この世からあの世へ移動するという「心理的場所の移動」と，この世の人からあの世の人に変化する，あるいは人間からたましいに変わるなど「他の存在様式や形態の移動」という，二つの移動概念によってとらえることが研究の理論的構想であった。このように，およその基底概念は研究を始める前から想定されており，それにそって研究がすすめられた。

しかしここで注意しておきたい重要なことは，最初からモデルIIIの基本枠組が完成していたわけではなかったことである。今まで記述してきたモデルIの構成と定義・分類など現場データとの往還プロセス（この作業に6年以上の月日が費やされた），その地道な作業の繰り返しによって，「モデルIII　基本枠組」も洗練され明確化した。したがって，私たち（Yamada & Kato 2001）は論文を書くときに，このモデルIIIを「問題」の延長としての「仮説」として前半に記述すべきか，「結果」として後半に記述すべきか悩んだ。従来の仮説検証型の論文形式ではどちらかにすべきであるが，どちらにしてもうまく記述できなかった。そ

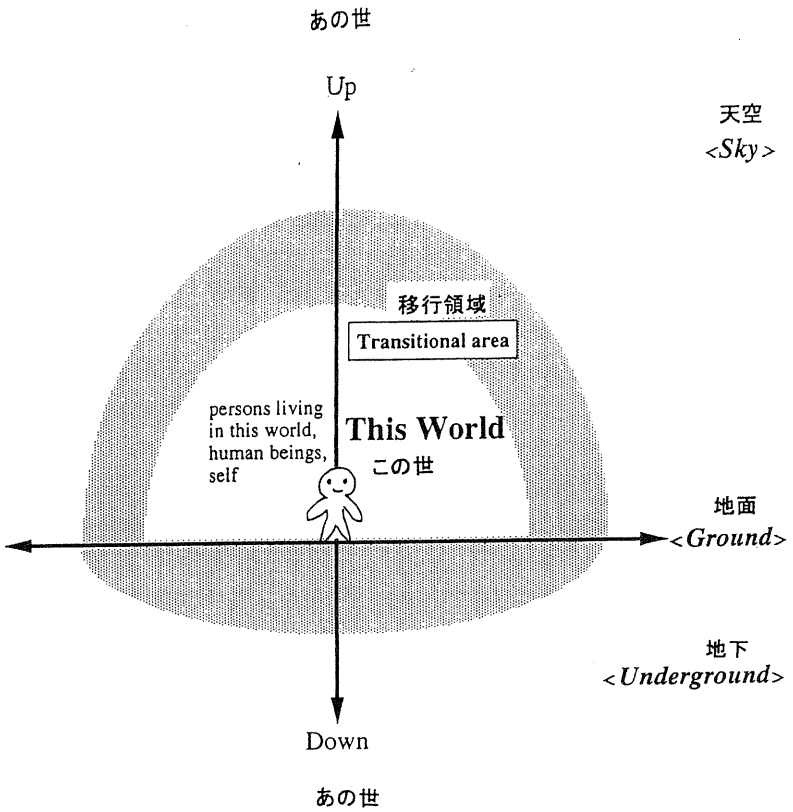


図5　モデルIII　基本枠組　イメージ画1「この世とあの世の関係」と，イメージ画2「たましいの形態変容」を位置づけるための基本枠組

れで論文を書くときには「モデル構成 Construction of the Models」という項をつくって中間に記述することにした。このように，ある程度は理論的に最初から考えられ，ある程度は実証的なデータ分析に触発されるというかたちで，理論とデータの往還によってモデルがつくられた。

図 5 のように「モデルIII 基本枠組」を図式化し，同時に規準となる概念を言語化した。それはおもに次の 7 つの前提からなる。この基本枠組は，「この世とあの世のイメージ」という特定の研究課題を大きく超えて，他の課題にも使える，より一般的な理論モデルを志向している。

1）座標系（Coordinates: Time-Space Frame）

人間が生きている世界をもっとも単純な二次元図式にすれば，垂直軸と水平面からなる座標系が形成される。「この世」と「あの世」という二つの世界も，垂直方向の軸と水平方向の軸によって構成される座標軸によって図式化できるだろう。この表象的座標系は，無機質の幾何学的座標とは異なり，軸にもその軸によって区切られた空間にも「名前」と「意味」がある。また，生き物である人間にとって空間は幾何学的空間

のように等質ではなく，知覚・行動的にも意味的にも異方性をもつ。

2）水平軸：基盤としての地面（Horizontal axe: Ground as a basis）

垂直軸と水平軸の基盤となるのは，地面（ground）である。地面は，数学の座標軸の任意の横軸ではなく，陸生動物である人間の知覚や行動を支持する基礎（basis）となる文字通りの基盤（ground）である（Gibson, J.J. 1979）。地面は，人間が生きて生活を営むライフの基盤であり，世界を表象する基盤「可変的な世界の基準となる不変項としての面」でもある。

人間は地面の上を移動することができるので，垂直軸と違って，水平軸は移動によって拡大できる。しかし，Bollnow, O.F.（1963）がいうように，人間と場所（空間）とは独特の二重関係でむすばれている。一方で場所は人間がそのなかで動く固定したものであり，もう一方では，たとえ私が場所のなかで動くにしても私が場所をもちあるいているかのように，「私」に関係づけられた座標系が形成される。したがって，人間の位置が相対的に移動しても，場所は図5のような座標系を形成すると考えられる。

基盤としての水平面は人間にとってすべてのベースになる重要な面であり，水平軸には「地面」という名前が与えられている。「床」「ベッド」などは地面の別名である。しかし，基本枠組の座標系においては，垂直軸の方位には名前を与えたが，水平軸の方位には名前を与えなかった。それは，天と地をむすぶ上下の垂直軸は重力によって絶対的で固定するが，水平面である地面のなかに引く水平軸の方位は相対的で任意性をもつからである。つまり垂直関係のなかで水平面は「地面」として固有の名前をもつが，水平面のなかで水平軸をどの方向に引くかは任意である。人間の身体の位置を変えても上下は逆転できないが，左右を反転させることはできる。また座標系の水平軸には「左－右」の他にも「東－西」など種々の名前を与えることができる。水平軸上の方位の意味は人間にとって絶対的なものではなく，文化や価値観によって変わりうる。

3）垂直軸：上 - 下（Vertical axe: Up-Down）

垂直軸は，地面（ground）から上方向（up）と下方向（down）にのびている。垂直軸は任意ではなく，重力の方向によって客観的に与えられている（Bollnow）。すべてのものが地面に対して動くのはもちろん，すべてのものが地面に対して直立したり，倒れたり，上昇したり，落ちこんだりする。物理学的にではなく生態学的にみれば，重力は相対的ではなく，絶対的だからである（Gibson）。

4）原点：人間の基本形　（Point of origin: Human Form）

座標系の垂直軸と水平軸の交わる原点に，「この世の人」つまり「人間の基本形」が位置づけられる。人間が主体となるときには，世界は有限であり，人間は自分を座標系の原点として自分の身体を基にして上下，前後，左右などを表象している。人間は「ここ」という有限の場所のなかに根をおろしている存在として座標系の原点に位置づけられる。

5）3つの領域：地面，天空，地下（Three zones: Ground, Sky, and Underground）

地面（ground）を基盤にして，垂直軸は，天空（sky），地下（underground）と名づけた3領域に分かれる。地面は，幾何学的直線ではなく，Gibsonがいうような生態学的地面を表すが，図5では，その文字通りの地面から，表象的・比喩的地面へと拡張されて，「人間」「私たち」「生者」が生きている場所を表している。

天空と地下は，異なる媒体からなる異質の場所であり，どちらも人間がそこで生きることができない場所として定義される。

天空は，空気に代表される無形の気体の層からなり，無重力の宇宙空間へとつながっている。人間の上に広がる天空は透明性が高く可視的空間は広いが，人がそこに飛翔することはできず，何らかの方法で飛ぶことができたとしても身体を支えられず落下する。

地下は，人間の下にあるが，地面の下は不可視であり生きられる場所は天空のようには開けていないし広がっていない。水平線をなす「面」が文字通りの大地である場合には，地下は固体で堅くて進入できない。海のように水面である場合には，落下の危険がある。

媒体が土のような固体であっても，水のような液体であっても，いずれの場合にも人間は地下では生息できない。

6）二つの心理的場所：この世とあの世
（The psychological topoi: This world and Next world）

二つの心理的場所「この世」と「あの世」は，主体の居場所を原点としたときに，図5のように図式化される。原点に近い中心領域に私たちの居場所「この世」がある。「あの世」は，この世から離れた場所と位置づけられる。

この世は，「この世の人・生者・私たち」の居場所であり，中心から空間・時間的に隔たった遠くの周辺的場所が「あの世」である。あの世は，英語でもnext world（次の世界），hereafter（ここから後），another world（もう一つの世界）など，時間的・空間的に隔たった別の世界として表現されている。

「あの世」の住人は，究極の「他者」であり，人間の基本形から隔たった者として位置づけられる。たとえば，生者から隔たった死者や幽霊，私たちから隔たった他者や異人，人間から隔たった化物や魔物などである。

「あの世」は幾つかの領域に分けられる。天空と地下は，どちらも人間が生きられない場所（死者の場所「あの世」）であるが，先に述べたように等質ではない。人間が生きている場所（「この世」）との関係で配置すると，図5のように上空方向へは大きく「この世」の領域が広がっているが，下方向への広がりは小さい。

7）移行領域（transitional area）

移行領域は，二つの世界，この世とあの世とのあいだにある「境界領域」である。移行領域は，境界として二つの世界を区切り分離する標識となる場合もあれば，二つの世界のあいだの中間領域となる場合もある。移行領域は，二つの世界のどちらにも属さない中立的，両義的領域となり，呪術＝宗教的禁忌の課される領域となり，聖と俗，浄と不浄の両義性をもつなど，そこにさまざまな価値が付与されることが多い。

移行領域は，人間が一つの場所から別の場所へ移動するときの，過渡期，境界域である。Gennep, A.V.（1909）によれば，この世からあの世への移行は，生から死への通過（passage）儀礼とみなされ，儀礼的境界は「葬儀」や「喪」によってなされる。喪は，死者がこの世から出て行って分離し，あの世の死者の世界へ入って統合されるまでの過渡的期間である。

VI 「モデルII 基本構図」の構成のプロセス

モデルIIは，図1のモデル構成プロセス（D）で示したように，モデルI（図4）とモデルIII（図5）に関連づけた媒介モデルとして，最後に構成された。

図6に示した「モデルII 基本構図」は，モデルIの基本要素形を，モデルIIIの基本枠組と関連づけてモデル化された。図6を見ると，図4の基本要素を部分的に含みながら，より大きな枠組のなかで「たましいの形態変容モデル」として位置づけられていることがわかるであろう。このように個々のイメージ形態を，より大きな変化プロセスの一部として位置づけ意味づけるモデルをつくることによって，一般化と理論化をすすめ，多文化比較のための枠組としても有効に働くようにした。

図6では，図4の「人間形」「人魂形」「気体形」の基本要素に加えて，サブ・カテゴリーの「人間形の変容形（羽の付加された人間形＝天使形など）」，さらにはイメージ画には少数しか表れなかったが理論的に重要と思われる「動物形」などを加えて，より一般化して「たましいの形態変化」モデルにした。このようにモデルII基本構図では，モデルI基本要素を，モデルIII基本枠組のなかへ並べただけではなく，理論的に拡張して一般化している。

もう一方で，モデルIIは，モデルIIIを具体化，限定化している。図6の基本構図では，図5の基本枠組をすべて使わず，その一部に限定したイメージの具象化を行っている。基本枠組のある部分だけを拡大して，その範囲内で現在のデータを過不足なく記述できる現実的な寸法に加工した。つまり，基本枠組のうち本研究に関与が深い2象限だけに限定し，水平軸に特定の名称を与えて，その部分を拡大して詳細に記述できる

ようにした。このように図6では，抽象的な一般枠組（図 5）をより具象的に加工した上で，たましいの形態変化の基本形（図 4）から演繹した図像を配置して，理論的により深い考察を可能にした。

以下，図6の「モデルⅡ　基本構図　たましいの形態変容モデル」の一部を簡単に説明する。たましいの形態変容モデルは，生きた人間の形（人間形 Human form）を基点として，「たましいの居場所（空間的距離）」と「たましいの形態」の二次元を交差させてつくられている。本来は二次元では次元が少なすぎるが，ここでは必要不可欠な次元のみを使い，できるだけ単純な図式化を行った。なお形が同じでも内包する意味内容（signifié）が異なるとか，形が違っても同じような意味内容をもつことがありうるが，ここで問題にするのは，意味記号（signifiant）としての形のみである。

垂直軸〈U - D〉は，人間の居場所を地上の中心（原点）においたときの，上昇（UP）―― 下降（Down）の軸である。図 5 で想定されていた垂直軸における下降方向は，図6では省略した。地獄など下降方向の表象は理論的には重要と考えられるが，実際のイメージ画にほとんど現れなかったからである。

水平軸〈A - H〉の方位は，左方向が無形化（Amorphousness），右方向が異形化（Heteromorphouseness）の軸とした。図 5 では名称を与えなかった水平軸の方位を，図6ではこの研究のイメージ画を理解するための方位として特定化している。ここで名前を与えた左右の方位は，必ずしも対称ではない。

水平軸において，左への無形化の方向は，人間の形態から，固体としての形態を失っていき，希薄化・消滅化に向かう変容を表す。右への異形化の方向は，人間とは異質の形になっていく変容を表す。これには他者形，動物形，怪物形など多くの変化形があり，複雑な次元と方向分化があると考えられるが，ここでは単純化して一次元で表している。

人間形から気体形への変化は，図6のように，上昇に向かう人間形→人魂形→気体形と，地上における人間形→影形→気体形という二方向の変形を考えた。どちらも人間形から気体形へと変化する二つの主要な方向である。たましいが人間形を起点として上方向へ移動する場合，一般にそのままでは浮揚が不可能なので，翼や特別な衣をつけて浮揚力を獲得したり，地についた足を失うことによって上昇への力を得るといった形態イメージの変容が起こる。人魂形とは，こうした上昇過程の中間に位置づく変容形態としてとらえることができる。幽霊形は，地上にこだわりがあって，人間形にもどることも，地上から離れて気体形になることもできず，地上の空間に浮いている（hovering）特殊な存在と位置づけた。

人間は，地上の生き物であるという肉体的制約をもつ。飛行機などの乗り物か特別の道具を使わない限り，人間形のままでは上昇できない。中空，天空に行くには，水が気化して水蒸気になるように，希薄化・粒子化・気体化など，浮遊できるような変形が必要である。したがって，空間における位置変化と形態の変化は，大きく見れば共変動する。

たましいは原点から左上方向に離れれば離れるほど，人間の形がもっていた固体的性質がどんどん失われていく。そして，ついには透明になったり，何もない無の状態へと至る。つまり，生きていたときに有していた個別性の証である身体や名前，容姿等がしだいに失われ，ついには完全なアイデンティティの喪失へと至ると考えられる。

以上のような「あの世 I」象限における変化を「気化（vaporization）」と名づけた。ただし，物理学で「気化」と呼ばれるよりも，広い意味をもつ。それは，原点から左，あるいは上方向へ離れるにつれて人間が形を失って希薄になり，透明（transparent）になり，見えなくなることを意味している。「気化」は，人間が固体としての形態を失い，有機体から無機化するプロセスである。また個人としてもっていた，名前や個性や容姿や性格を失い，匿名化，無個性化し，生前のアイデンティティを喪失する方向への移行である。

たましいが「気化」の過程の終りに到達する形態を，Ⅰ基本要素の「気体形（Air Form）」として位置づけた。ここで気体（Air）とは，たましいの形なき，透明な状態を表す。Air（空気）は生存にとっての必須条件であり，その空気へと存在が解消していくこと自体，生の終焉を意味している。古くから風や気息はこの世界から消えて去っていくことの象徴であった。気体形は，アニマやスピリット概念の原義でもある。

図6の基本構図において，「あの世Ⅱ」象限におけ

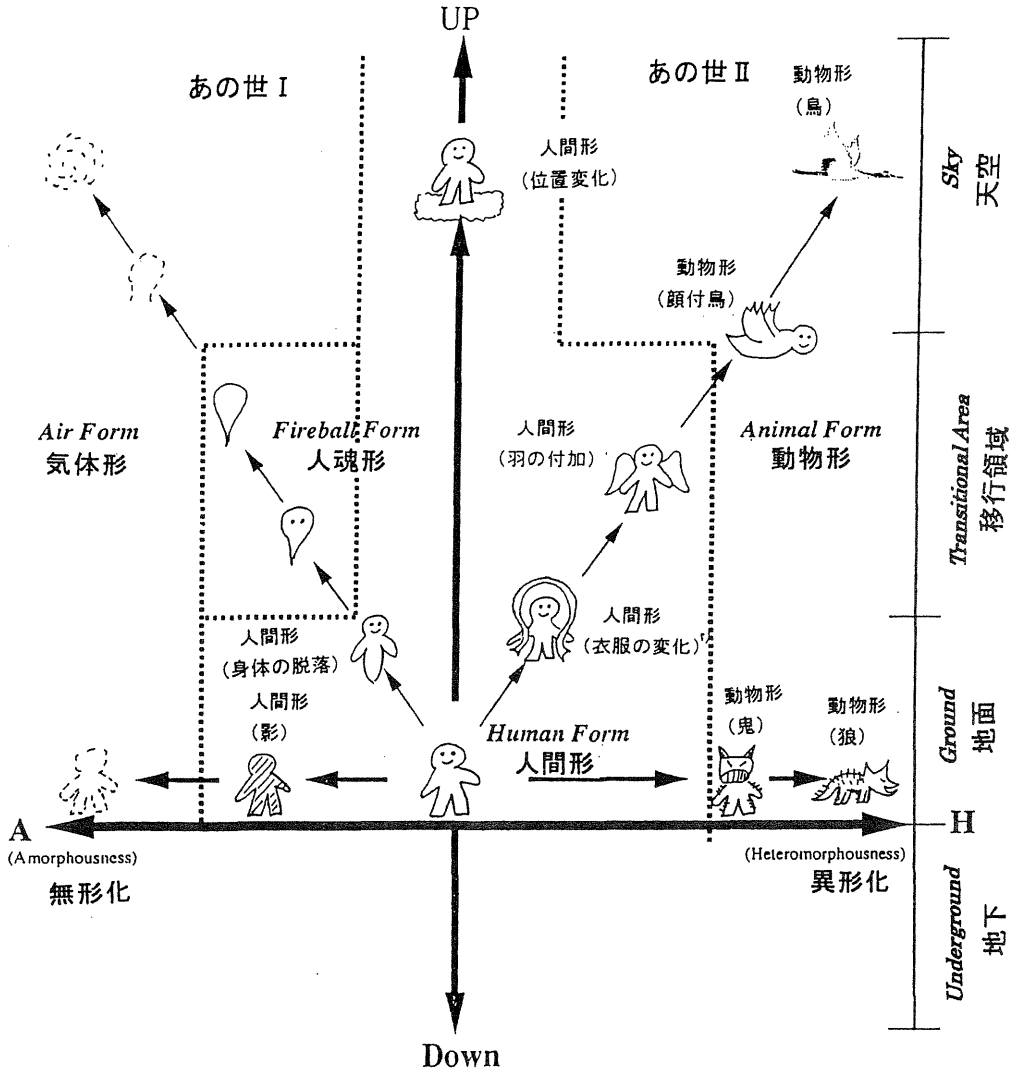


図６　モデルII　基本構図　たましいの形態変容モデル

たましいの変形プロセスを半具象的に表したモデルである。「人間形」を原点におき，基本要素（モデルⅠ）を基本枠組（モデルⅢ）に組みこんで関連づけて説明できるモデル化を行った。

この基本構図（モデルⅡ）では，水平軸に名称を与えて，この研究にもっともふさわしい説明が可能になるように想定した。そして左方向への変化を，無形化（人間形の消失と希薄化），右方向への変化を異形化（人間形からの変異，他者化）を示す軸として設定した。左上への変化は，固形性，個性，アイデンティティの消失と浮遊性の増大を示す。「人間形」→「人魂形」→「気体形」という３基本形（モデルⅠ）は，この左上の変化軸上に位置づけられた。右上への変化軸は，「人間形」→「人間形（羽の付加・天使形）」→「動物形（鳥形）」の変化を示す。

モデルⅡは，モデルⅠとモデルⅢの単なる合成ではなく，新しい視点や説明体系を生成する機能をもつ。この中間モデルをつくることによって，「人間形から希薄化へ」「人間形から異形化（他者化・動物化）へ」という二種類の変化パターンが仮定され，その変化プロセスの説明が具体的な図像形の提示によって可能になったといえよう。

る形態変容は「異形化（Heteromorhousness）」と名づけられた。たましいが原点から離れて右に移動するほど，本来の人間形から，異なる形状の生き物へと変わっていく。右へ向かう軸は，人間形から異人形への変化を表すのである。

異人（strangers）とは，小松（1985）によれば，「異類異形性」（人間がふつうにもつ姿とは異なった鬼や怪物，動物たち）と「他者性」（外集団あるいは外の領域に属していて，「われわれ」の仲間ではないこと）の二つによって定義される。「異類異形性」の側面は，人間形から異人形へと形態が変容していく過程に照応する。「他者性」の側面は，ふつうの人間の状態から社会的，空間的，時間的にどれだけ距離が離れた存在となるかが問題となろう。図6では，この二つの側面が，ともに原点の人間形からの距離の増大による形態変化として表現されている。

異人形次元は，妖怪や魔物や神霊への変形など多次元で多彩であるが，ここでは簡略化して，おもに動物形（Animal Form）のみ図示した。動物形を「異類異形性」の代表としたのは理由がある。人は，たとえ想像上でも，まったく見たことがない新しい図像を生み出すことは困難であり，見聞きした実在物を合成して想像する。「異類異形性」として，さまざまなヴァリエーションの想像上の生き物がつくりだされてきたが，人間の身体の欠損や変形の他には，人間と動物（たとえば「人魚」），動物と動物の合成（たとえば「竜」）など，動物形はもっともポピュラーな変容と考えられる。なお，ここでの「動物」は，生物分類上の動物とは必ずしも一致せず，動物（animal）の原義「動く生き物」というべき広い意味範囲をもつ。なお，動物を人間よりも価値的に低く位置づけ，聖性を認めない文化もあるが，ここでは，動物を神にもなりうる両義的存在とみなしている。

人間形から動物形への変化のうち，たましいの表象として特記すべきは，鳥形（鳥類だけではなく，蝶，蛍，トンボ，蜻蛉など昆虫や飛ぶ生き物を含む）への変容である。それは，図6のように，人間形→天女形→天使形→人頭鳥形→鳥形へ変容すると考えられる。「天女形」は，人間形をしているが，特殊な衣服や道具や乗り物によって，飛ぶことができる表象である。羽状の衣服（羽衣）の脱着や，魔女の道具（魔法の杖など）などによって，人間の姿に簡単にもどることが可能である。「天使形」は，身体に羽が生えた有翼人間であるから鳥との部分合体による変身をともなっている。人顔をもつ鳥「人頭鳥形」は，古代エジプトのたましい「バー」などが有名である。「鳥形」としては，死者のたましいが白鳥などの鳥や蝶になって飛んでいったという話が世界中に見られる。

図6基本構図の「あの世Ⅰ」象限では人間が気化・無化していく。それとは対照的に，「あの世Ⅱ」象限では，人間とは異なる生き物に変身する。後者の変容では，人間の形態やアイデンティティは失うが，個としての名前は必ずしも失わない。形態や性格はデフォルメされて，別のアイデンティティを得て，個性はむしろ強化されやすい。

まとめるとモデルⅡは，当該研究に即した内容をもつ次のような構想を含む「たましいの形態変容」を半具象的に表した基本構図モデルである。

（1）たましいの形の変容（transformation）は，人間形を基点にして，そこからの変異として考えられる。
（2）たましいの形の変容は，場所の変化，つまり「たましいの居場所（たましいが位置する場所）」と「たましいの場所移動（transposition）」と連関している。
（4）たましいの形の垂直軸上の変容は，人間を基点とした価値の上下と関連する。
（5）原点の人間形（Human Form）から垂直軸の「天空（Sky）」方向へ上昇移動するに従い，人間形の形そのものは変わらないが，神性など超越的属性が付与されやすい。
（6）たましいの形の「モデルⅡ 基本構図」における水平軸上の変容は，左方向は「無形化」Amorphousness（希薄化・拡散化・影化・無生物化），右方向は「異形化」Heteromorphousness（異人化・他者化・獣化・他生物化）を表す。
（7）原点の人間形から「あの世Ⅰ」象限に遠ざかる移動をするほど，たましいは人間の形を喪失し，固体としての形を失い，気体化，希薄化，消滅化の方向をたどる。

(8) 原点の人間形から「あの世Ⅱ」象限に遠ざかる移動をするほど，たましいは人間とは異質の形となり，動物と人間の合体形や動物形に近づく。

以上のようにモデルⅡは，具体的なイメージ画データからボトム・アップでつくられたモデルⅠと，理論的にトップ・ダウンでつくられたモデルⅢを関連づけて，一つの半具象的な見取り図としたモデルである。どの水準のモデルでも，モデルであるからには一般化がめざされているが，モデルⅡは，現場の具体的イメージから遊離しすぎないローカリティを含む抽象化であるという意味で，中間形であるとともに中身が濃くて含蓄が多い「半具象的」モデルの特徴をよく表している。

モデル化は，有限で具体的でローカルな知の働きから始まる。たとえば図3に示した「人間形」「人魂形」「気体形」の3基本形は，おもに日本のイメージからとりだされたカテゴリーである。それを図4の変化プロセスに位置づけた「モデルⅠ　基本要素」にした段階で日本とフランスの2文化比較を可能にできるまで一般化し共通化した。図6のモデルⅡでは，多文化比較が可能なまでに，より一般化した図式になっている。どこの文化にも属さないモデルはありえないし，どこの文化にも属さないモデルにしようとすれば，抽象度が高くなりすぎて記号の世界になり，個々の具体的なイメージの比喩形からは大きく離れてしまうだろう。ローカリティを保持しながら一般性を高めるためには，少なくとも3水準のモデル構成が必要であった。

今までの文化比較研究は，基準となるモデルや尺度自体が文化的文脈に依存していることを軽視しすぎてきた。また，上記のような3基本形のカテゴリーをつくった場合に，単にその量的比率の比較に終わることが多かった。この研究のきわだった特徴は，図3〜6をすべてモデルと考えることで，基本枠組や分類カテゴリーそのものも文化によって異なる意味体系をもちうることを想定していることである。他文化においてまったく異なるイメージが表れたときには，この基本形とは異なる基本形をもつモデルへと改訂したり，基本枠組のある部分をより濃密に記述可能にすることによって，基本構図の図柄も変えられるようにしたいと考えている。

Ⅶ　今後の課題

以上，「この世とあの世」イメージ画研究において構成した3つの図像モデルを具体事例として，モデル構成プロセスの実際を記述してきた。ここで記述したモデル構成の作業から，私たちが生きている文化を研究の土台として生身の現場から問題や方法を立ち上げ，長い時間をかけて自前でモデルをつくり，多文化に発信できるように一般化していくことをめざすモデル構成的現場心理学の実際が，ある程度理解していただけたのではないだろうか。

今後の課題としては，4つの方向が考えられる。

第1には，この研究で構成された3つのモデル，それ自体を具体的なデータとの往還によってさらに改良していくことである。モデルは，最初に日本のデータを基盤として構成され，次にフランスのデータとの比較からより共通性が高いものに一般化された。今後はさらに異質の文化を加えて多文化比較を行うことで，実践的によりよいモデルにしていくことが考えられる。この方向では，すでにイギリスとベトナムを加えて多文化研究を進展させつつある（戸田他　2000，伊藤・やまだ　2000など）。

第2には，この世とあの世のイメージ研究という特定の目的のために構成したモデルをまったく異なる目的の研究に応用したり，別のモデルとの関係を考察することで，モデルの汎用性を高めたりモデルの改良をしていくことである。この方向では，やまだ（2001b）において，人間の「寝る」「坐る」「立つ」という身体姿勢を「モデルⅢ　基本枠組」に位置づけるモデル化を試みつつある。

第3には，ここで記述した具体的なモデル構成プロセスが，どの程度方法論として一般化できるかというメタ理論的検討である。データ対話型理論（grounded theory: Glaser & Strauss, 1967）やKJ法（川喜田　1967）など他の現場研究や質的研究の方法論と比較しながら考察することで，方法論として洗練するとともに理論的特徴を明確にしていくことが必要であろう。

第4には，ここで記述した具体的なモデル構成プロセスを研究モデルとした「モデル構成的現場心理学」

の研究を多方面で実践していくことである。そうすれば図像データやイメージ画だけではなく，VTR 観察データやインタビューによる語りデータなどにも適用できる「現場データからモデル構成する方法論」として実践的に練り上げていくことができよう。

謝辞

本論文の構想と内容はすべて著者の責任で書かれたが，事例とした研究は，加藤義信氏（愛知県立大学）との共同研究に基づく。共同研究部分の引用を快く許可してくださった氏に心より感謝する。

本論文の研究は，研究代表者（山田洋子）の下記の科学研究費補助金の援助を受けた。平成 10～12 年度基盤研究 C（2）「現代日仏青年の他界観の生涯発達心理学的研究」（課題番号 10610110）。平成 13 年度基盤研究 B（2）「人生サイクルと他界イメージの多文化比較による生命観モデルの構築」（課題番号 133571006）

引用文献

Bollnow, O.F. 1963 *Mensch und raim*. W. Kohlhammer. 大塚恵一訳　1978　人間と空間　せりか書房

Bowlby, J. 1988 *A secure base: Parent-child attachment and healthy human development*. Basic.

Bruner, J.S. 1986 *Actual minds, possible worlds*. Harvard University Press. 田中一郎訳　1998　可能世界の心理　みすず書房

Furth, H.G. 1969 *Piaget and knowledge*. Prentice Hall. 植田郁朗・大伴公馬訳　ピアジェの認識理論　明治図書

Gearts, C. 1973 Thick description: toward an interpretive theory of culture. In *The interpreta-tion of culture*, 3-30. Basic Books. 吉田禎吾他訳　1987　文化の解釈学　岩波書店

Gennep, A.V. 1909 *Les rites de passage*. Emile Nourry. 綾部恒雄・綾部裕子訳　1977　通過儀礼　弘文堂

Gibson, J.J. 1979 *The ecological approach to visual perception*. Houghton Mifflin Company. 古崎　敬・古崎愛子・辻　敬一郎・村瀬　旻訳　1985　生態学的視覚論　サイエンス社

Glaser, B.G. & Strauss, A.L. 1967 *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. Aldine Publishing Company. 後藤　隆・大出春江・水野節夫訳　1996　データ対話型理論の発見　新曜社

伊藤哲司・やまだようこ　2000　「あの世」と「この世」の関係イメージ(15) ――ベトナムにおけるたましいの形と移行　日本発達心理学会第 11 回大会発表論文集　296.

印東太郎　1973　心理学におけるモデルの構成　印東太郎編　モデル構成　1-28. 東京大学出版会

川喜田二郎　1967　発想法　中公新書

小松和彦　1985　異人論――民俗社会の心性　青土社

Piaget, J. 1946 *La formation du symbole chez l'enfant, Imitation, jeu et rêve, image et représentation*. Delachaux et Niestlé.

戸田有一・やまだようこ・加藤義信・井上篤子　2000　「あの世」と「この世」の関係イメージ（14）――イギリスにおける「たましい」の形と移行　日本発達心理学会第 11 回大会発表論文集　295.

やまだようこ　1986　モデル構成をめざす現場（フィールド）心理学の方法論　愛知淑徳短期大学研究紀要　**25**, 31-51.（やまだようこ編　1997　現場（フィールド）心理学の発想　新曜社　161-186.）

やまだようこ　1987　ことばの前のことば　新曜社

やまだようこ（編）2000　人生を物語る――生成のライフストーリー　ミネルヴァ書房

やまだようこ（研究代表者）2001a　日仏青年の他界観の生涯発達心理学的研究　科学研究費研究成果報告書

やまだようこ　2001b　場所に居ることの身体イメージ――天地のあいだと「立つ」「坐る」「寝る」図像　住田正樹（研究代表者）子どもたちの居場所と対人世界の現在　科学研究費研究成果報告書　19-53.

やまだようこ・加藤義信　1998　イメージ画にみる他界の表象――この世とあの世の位置関係　京都大学教育学部紀要　**44**, 86-111.

Yamada, Y. & Kato, Y. 2001 Images of the soul and the circulatory cosmology of life: Psychological models of folk representations in Japanese and French youths' drawings. 京都大学教育学研究科紀要　**47**, 1-27.

（2001.6.5 受稿，2001.11.7 受理）

4-2

Formanek, S.,& Lafleur, W. (Eds.). (2004 in press). *Practing the afterlife: Perspectives from Japan* (pp.417-438). Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften

Japanese Students' Depictions of the Soul after Death

Towards a Psychological Model of Cultural Representations*

YAMADA YŌKO and KATŌ YOSHINOBU

Introduction

From antiquity to the present time, human beings have lived in two worlds, that is, this world and the next world after death. The former is directly visible to us and the latter is not, but in the past, images of the next world have had a strong influence on people's behavior in this world. In fact, every culture has developed its own system of folk concepts related to life after death. Under the influence of cultural conceptions of the next world, people have constructed the meanings of their lives, and accepted or protested their destiny in this world.

Psychology, founded as a modern science at the end of the nineteenth and developed during the twentieth century, has long overlooked the psychological realities of representations of the spirit, soul and vital forces. Read (1997) points out that, "early in the nineteenth century, psychology was considered to be a science of the soul, but by the end of the century, psychology had more or less abandoned the soul and replaced it with the mind." At the beginning of the twentieth century, even the concept of the mind was rejected by behaviorists in the attempt to make psychology "a true science." With the rise of cognitive psychology over the past three decades, this over-radical position has

* Acknowledgements: We would like to thank Dr. Philippe Wallon and Dr. Claude Mesmin who collaborated with us and assisted with data collection in France for this study. We are also very grateful to Professor Carl Becker for his linguistic support and a helpful reading of the manuscript.

undergone considerable revision. Yet it remains true that twentieth-century psychology has completely disregarded the problem of the soul.

Other human sciences such as cultural anthropology, the sociology of religion, mythology, folklore, historical science, etc. have studied the soul in primitive societies and in traditional cultures by examining discourses based on belief systems, various modes of religious rites and practices, as well as myths and their pictorial representations (Ariès 1983; Hertz 1907; Kuno 1994; McDannell and Lang 1988; Obayashi 1992; Origuchi 1967). But it seems that there are very few reports about what images contemporary people harbor of the soul after death.

In the dawn of the twentyfirst century, we think it necessary for psychology to reconstruct the concept of the soul as a psychological reality. To conform to this requirement, we study folk concepts of the soul, especially the structures of their cultural representations, disregarding the question of whether or not the soul really exists. Our approach is common to the frameworks of folk psychology, cultural psychology, and the psychology of social representations, which consider the importance of folk beliefs with the aid of which people construct their significant acts in everyday life (Bruner 1986; Moscovici 1988; Markus and Kitayama 1991; Shweder et al. 1998).

When we say "folk concepts of the soul," we should distinguish between the two aspects of folk beliefs and folk images. The former is concerned with what people believe of the soul after death, apart from the doctrines of established religions, while the latter bears on how people represent the soul, whether they believe in it or not. Here we are interested in the latter aspect, not in terms of individual variation, but in terms of the collective representation that influences people's images in Japanese culture.

Taking this as our perspective, we surveyed Japanese students on the following three topics: (1) depictions of the relative location of the two worlds, (2) transformations of the soul (*tamashii*) from this world to the next, and (3) beliefs about the next world. For the two former topics, we used mainly the technique of freehand drawing with written explanation, while the third aspect was investigated on the basis of a verbal questionnaire.

We have already reported our analysis of Japanese students' drawings with regard to the first and second topics (Yamada and Katō 1998; Yamada 1998). In their first drawing, the majority of subjects (59.3%) placed the next world in the upper part of their sketches, as opposed to this world which was located in the lower part, while only 27.4% de-

picted the two worlds in horizontal relation. Their second drawings revealed a variety of depictions not amenable to a single rationally unified model of the transformation of the soul.

These results were obtained from Japanese data, so the question remains of whether or not similar tendencies are found in other cultures. Nowadays, modern societies undergo drastic socio-cultural changes under reciprocal influences. It is therefore impossible to imagine that each society has a unique isolated culture independent from others. Japanese culture is no exception. In fact, since the second half of the nineteenth century, Western civilization has greatly influenced Japanese culture. As a consequence, contemporary Japanese culture is a hybrid composed of its traditional and westernized components (Katō 1974). Therefore, certain unique aspects of Japanese folk concepts concerning the next world and the soul after death are better understood by contrasting them with those of Western cultures.

In this study, we conducted a comparative survey of Japanese and French students, because France has the very different religious background of a long Catholic tradition. At the same time, the two countries share a cultural tradition of strong interest in pictorial depictions, as well as similar standards of living and technology. The present article is concerned with the second topic of our research: images of the soul appearing in students' drawings, especially the transformation of the soul after death. Our main purpose is to provide a model, which will lead to a better understanding of its variety. We also examine images showing how the soul might go back and forth after death, and discuss this question of the return of the soul at the end of this paper.

Before detailing the methods of the present study, we should first emphasize the utility of the drawing technique to reveal naive representations and elicit implicit images more immediately than does verbal expression (Yamada 1988; Yamada and Katō 1993). Few studies fully use this method. One rare case is Vaysse (1996), who studied images of the "heart" by asking her subjects to draw it. She also considers drawing an effective approach towards objectifying vague mental images, arguing that it locates more precisely the place of imagery in the psychological organization of the subject. The language-free nature of drawing renders it especially suited for use in cross-cultural comparison of images.

Method

Subjects: 327 Japanese university students (96 males, 231 females) participated in the present study. They were recruited from three universities: one located in the Tokyo metropolitan area and the others in greater Nagoya (Japan's fourth largest city, population 2,150,000). For purposes of Japanese-French comparison, the instructions were translated into French, and the same survey was conducted with 234 students at University of Paris VIII (52 males, 170 females, 12 unspecified). In fact, the French sample showed a wide variety of religion, ethnic origin, age, etc., whereas Japanese students were very homogeneous in these respects. However, separate factor analysis of the French data failed to identify significant differences between such sub-groups. 46 Japanese and 54 French subjects were excluded from the present analysis, because they made no visual sketches of the soul's image.

Questionnaire: The first Japanese version of the questionnaire was designed by Yamada in 1995. Here, we used a revised version (Yamada and Katō 1998) and its French translation. The questionnaire consists of four parts: (1) a drawing representing the image of the relationships between this world and the next world; (2) a drawing of the soul going back and forth between this world and the next world; (3) a color image of this world and the next world; (4) responses to a 21 item-questionnaire on their beliefs about the afterlife.

This article reports the results of the second drawing task (2). The subjects were instructed as follows: "Do you think that there may be survival of the soul after death? Please draw a picture showing the way you imagine its passage from this world to the other world, and the passage from the other world back to this if relevant. You may accompany your drawing with verbal explanations."[1]

The entire questionnaire was distributed to students in their university classrooms, and took about 40 minutes to complete.

[1] French: "Pensez-vous qu'il y ait une survie de l'âme après la mort? Pourriez-vous faire un dessin qui représente la manière dont vous imaginez le passage de ce monde vers l'autre monde, et éventuellement, le passage de l'autre monde vers ce monde-ci? Vous pouvez compléter votre dessin par des explications."

Results and Discussion

Transformation of the Soul

Meanings of the soul: Here we present a conceptual model to serve as the basis of categorization for a variety of depictions of the soul. To begin with, it will be useful to define the term "soul" for our model concept. According to the Oxford English Dictionary (OED), the core meanings of the word soul are:

I 1. The principle of life in man or animals; **animate existence**.
2. The principle of thought and action in man, commonly regarded as **an entity distinct from the body**; the spiritual part of man in contrast to the purely physical.
3. The seat of the emotions, feelings, or sentiments; the emotional part of man's nature.

II 1. The spiritual part of man considered in its moral aspect or in relation to God and precepts.
2. **The spiritual part of man regarded as surviving after death** and as susceptible of happiness or misery in a future state.

III 1. The disembodied spirit of a (deceased) person, regarded as a separate entity, and as invested with some amount of form and personality.

The word "spirit" also shares many core meanings with the word soul. The *Petit Robert* dictionary shows that the French words *âme* and *esprit* share the same meanings as the English soul and spirit in the OED. These dictionary definitions distinguish two core meanings for the word soul:

1) An animating principle irreducible to purely material elements;
2) A non-material, psychological entity separable from the body and surviving after death, in contrast to the physical body.

Differentiating the words soul and spirit, we might say that spirit connotes a more ethereal quality, like that of air, breath, or wind (Latin *spiritus*), but the term soul also derives from a word meaning air or breath (Greek *ánemos*, Latin *anima*). By its very non-material nature the soul is imperceptible and formless. Nevertheless, people are inclined to represent it as having a certain form. Throughout human history, cultures have created various imaginary forms of the soul that still have an influence on us even today. That is why we find such a variety of interesting depictions of the soul in our subjects' drawings.

We believe that these imaginary forms are not created at random, but follow certain rules in the process of their transformation. In other words, the field of imagery has its own proper figurative logic, just as

the field of linguistic grammar has its own propositional logic. The importance of our model is not merely to make an inventory of the different images of the soul, but rather to clarify some aspects of this figurative logic that works in transformation.

Basic framework of the model: Fig. 1 shows our basic conceptual model of the transformation of the soul, constructed on the basis of four major propositions:

1) The transformation of the soul is represented with its change of the position in the universe of the imagination. In other words, its typical transformations can be related to spatial locations in our model.
2) The *Human Form* is the most basic depiction, the point of origin in the process of transformation of the soul. The soul then evolves along vertical and horizontal axes.
3) The farther the soul is from its point of origin along the vertical axis (direction Up [U] or Down [D]), the more different attributes it acquires; while the farther it is along the horizontal axis, the more heteromorphous or amorphous it becomes.
4) When the soul climbs the vertical axis (direction U) from its point of origin, it gains the property of transcendence. The horizontal axis is asymmetric; souls moving left of center grow increasingly amorphous; while souls moving right of center take on increasingly heteromorphous forms. The farther the soul is from its point of origin along the left-hand "amorphous" axis (direction A), the more the soul loses its individuality, specificity, and solidity, eventually vanishing completely. Along the right-hand "heteromorphous" axis (direction H), the soul changes from the *Human Form* into strange ones such as animals, monsters and other creatures.

Crossing the two main axes gives us four zones in Fig. 1, which we might label U-A, U-H, D-A and D-H. Here we shall only deal with the two zones U-A and U-H, because the transformations located in these zones seem important for understanding Japanese students' depictions of the soul.

Detail of the model: Fig. 2 shows a variety of typical transformations of the soul located in the two zones of our conceptual model, U-A and U-H. Here, we use the term *Human Form* to refer not only to the corpse, the point of origin in a narrow sense, but also to its variations found in a certain range of space. Along the upward vertical axes, the space can be divided into three levels which we might call Earth, Transitional Area, and Sky. The Earth is the level where human beings

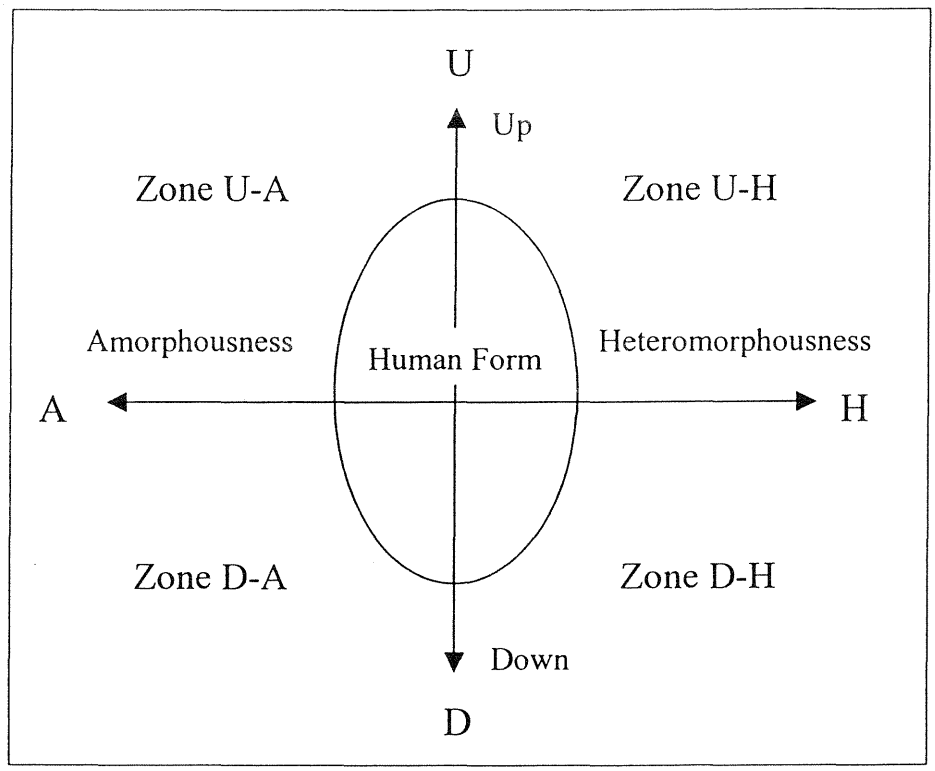


Fig. 1 Basic theoretical framework for understanding types of transformation of the soul

live their everyday lives; it covers not only the physical ground itself, but also a space extending above it for a few meters. The transitional area in zone U-A of Fig. 2 might be characterized by "vaporization," the farther the soul is from its point of origin, the less solid, specific, and individual it becomes, losing its *Human Form* and ultimately reaching a state of nothingness. In this transitional process of vaporization, the soul loses the identity it had when alive and embodied. In other words, it is deprived of its individuality, its own name, its own physiognomy.

The soul's final state of vaporization might be called an *Air Form*, because air symbolizes the formless, transparent state of the soul. The wind, or airflow, has long symbolized what passes away from this world. According to Greek popular belief, a person's soul, described as a breath of air located in the area of the heart, leaves the body through the mouth at the moment of death (Davies 1997).

Zone U-A of Fig. 2 displays two main directions of transformation from *Human Form* to *Air Form*; one is an upward oblique direction by way of a *Fireball Form*, the other is a horizontal movement of the *Human Form* (shadow) on the earth level. It seems that *Human Form*

cannot rise unaided; in order to rise, the soul changes its form by acquiring wings or losing the hindrance of earthbound legs.

Among these intermediate types, the *Fireball Form* is particularly interesting because it has long been a common image in Japanese cul-

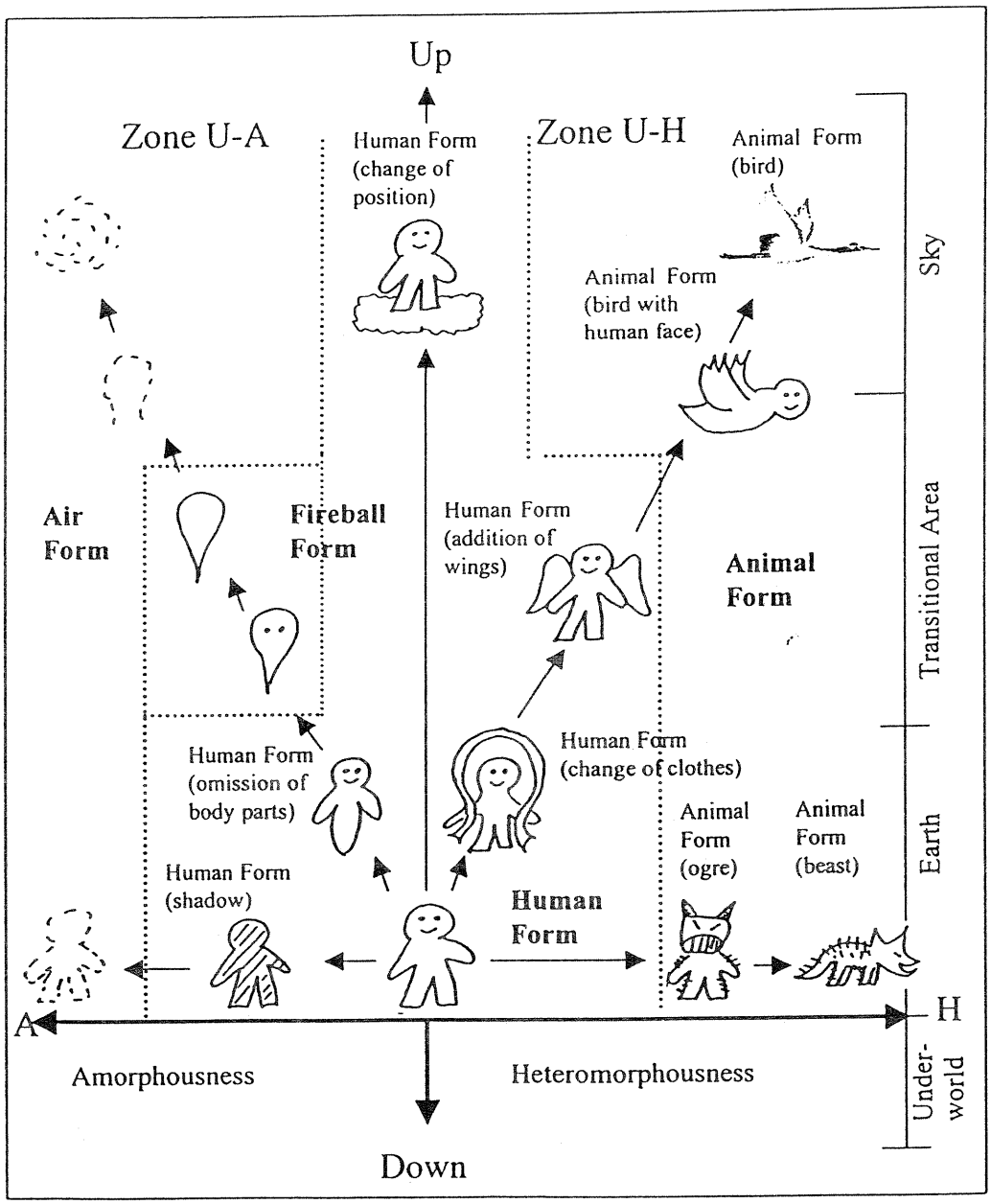


Fig. 2 A model of the transformation of the soul
The upward direction shows the transformation of the soul, which changes by vanishing of solidity, diminution of individuality, floating property, etc. The right side of the plan presents the gradual metamorphosis of the soul into strangers (including animal), while the left side of the plan indicates the direction to the fade-out of the form (amorphousness or vaporization).

ture. In Japanese, the word for soul is *tamashii*, and in ancient times it was *tama*, denoting a sphere or a ball. So in Japanese, the very word for soul connotes images of the form of a ball of breath.

The transformation in zone U-H of Fig. 2 might be called metamorphosis; the further a figure is depicted to the right of its point of origin, the more it changes from *Human Form* into some strange creature. Studying representations of "Strangers" in Japanese folk culture, Komatsu (1985) identified two characteristics: (1) that they take forms different from *Human Form*, such as those of animals, monsters, and ogres; (2) that they are alien to humankind and belong to an other world. The former aspect coincides with the modification of form from *Human Form* to stranger forms, while the latter implies how far they are from ordinary human beings in social or spatio-temporal distance. In our survey, these two aspects refer to the changing of the soul with its increase of distance from original human beings.

"Strangers" include myriad monsters, demons, divine spirits, as well, but for the sake of simplicity, Fig. 2 groups these all under the term of *Animal Form*. *Animal Form* is representative of "Strangers" in that it is the most popular type of transformation found in every culture of all over the world. Most creations of the human imagination are based upon composites or extensions of creatures already known. Thus humans imagine wolfmen, chimera, demons (human-animal combination), dragons (combination of animals), and the like.

Birds and winged insects like the butterfly, dragonfly, and firefly were the predominant images chosen to depict the soul among *Animal Forms* in our survey. As shown in Fig. 2, among the intermediate depictions from *Human Form* to *Animal Form* (bird), the celestial nymph deserves mention (Matsuoka 1996). While assuming *Human Form*, she has a magic wand or clothing, which enable her to hover; she can easily return to *Human Form* by putting off these things. By contrast, a winged angel combines the *Human Form* and *Animal Form* (bird). A similar compound can be found in the Egyptian depiction of the soul called *bar*. Countless legends and myths from all over the world relate the transformation of the soul into a swan or a butterfly after death (Tada 1996). So the entrance to Japanese Shintō shrines is called a *torii*, literally, "bird dwelling" – the residence of the spirits.

In contrast to its gradual dissolution into nothing in zone U-A, in zone U-H, the soul tends to be transformed into other creatures, preserving its individuality while losing its *Human Form* or identity. The

deformation of its appearance and character allows it to establish a new identity by exaggerating some aspects of its previous personality.

Definition of classification categories used for analysing the drawing data: Our model classifies the transformation of the soul into three main categories: *Human Forms*, *Air Forms* (or "Amorphous Forms"), *Animal* (bird) *Forms* (reminiscent of "Strangers"); and one secondary category: the *Fireball Forms*. In fact, very few subjects sketched animals such as wild beasts, and we thought it appropriate to place depictions of winged beings such as angels not in the category of *Animal Forms* (bird), but to classify them as a variation of the *Human Form*. We also included *Shadows* and *Phantoms* as a variation of *Human Form*, because the rough contours of the *Human Form* were generally well preserved, and they were too infrequent to warrant an independent category. With shadows, phantoms, and angels all lumped into the first category, we retained three categories useful for our classification: *Human Form*, *Air Form*, and *Fireball Form*. The criteria we used to distinguish the three forms were as follows:

General principles: Classification must be done on the basis of graphic representation, using verbal explanation only for clarification; in cases of inconsistency, priority should be given to graphic representation. (This presumes that students sketch more accurately than they explain, and that their deliberately added explanations are more likely to distort than to clarify their images.)

Definition of the three Forms:

A) *Human Form*: Drawings exhibiting two or more of the following criteria are considered Human:
   1. Clear differentiation of head and torso.
   2. Arms or legs.
   3. Facial features.

B) *Air Form*: Drawings exhibiting any one of the following criteria are considered Ethereal:
   1. Dotted outlines.
   2. Lack of clear-cut contour, such as that of light, energy, smoke.
   3. Vague, unspecifiable form.

C) *Fireball Form* (intermediate between *Human Form* and *Air Form*) Drawings including representations such as spherical form, cloudy form, fire form, tadpole-like form etc. are considered Fireballs.

Within the *Human Form* category, the wide variety of depictions of the soul was further classified into five sub-categories using the following criteria:

(1) Shadows retaining the contours typical of *Human Form.*
(2) Human bodies lacking some parts (such as hands or feet)
(3) Human bodies with added parts (such as halos, wings or auras)
(4) Human bodies with changed parts (such as clothing, hats, or capes)
(5) Human bodies with distortion of size (miniaturization, enlargement)

These Modification types were checked in relation to typical *Human Forms* or by comparison with the same student's sketch of the living human being. We also attempted an analysis of the drawings in terms of the possibilities of the soul's going back and forth between the two worlds. The methods of this analysis are described later in the results.

Analysis of drawings: Fig. 3 shows the proportion of the drawings for each of the four categories. Classification made by two independent arbiters attained a high degree of agreement: 98.6% for Japanese drawings and 92.8% for French drawings.

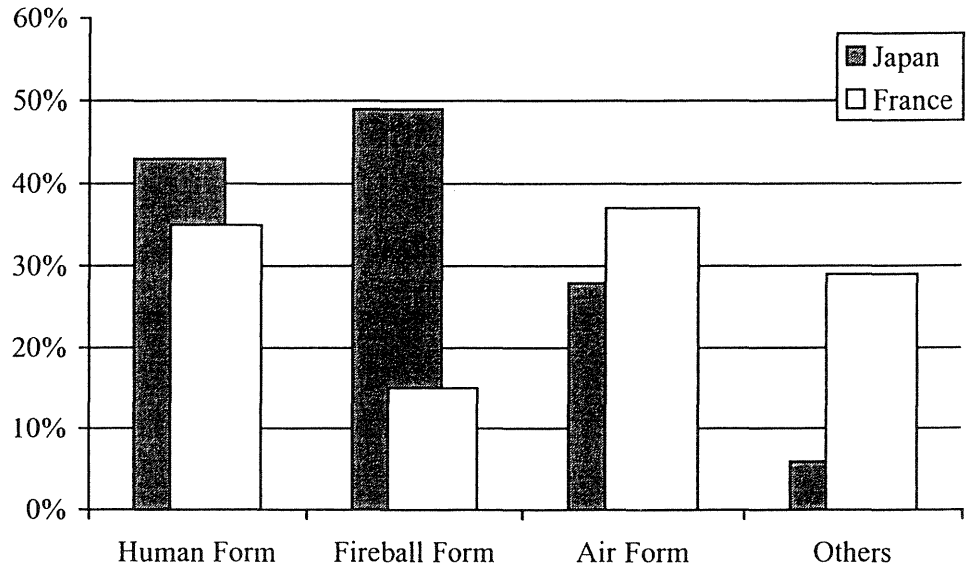
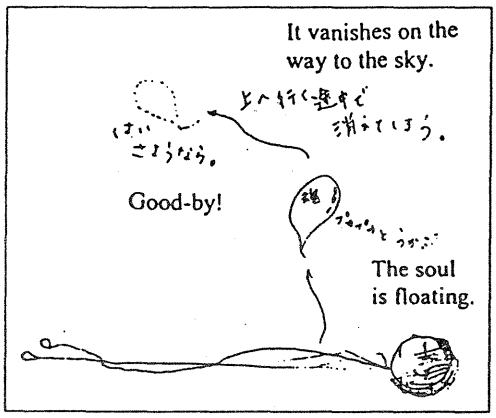


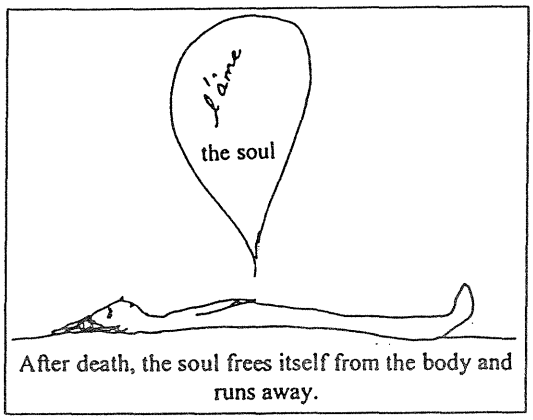
Fig. 3 Frequency of forms representing the soul as depicted by Japanese and French students

There was no significant difference in the percentage of *Human Forms* between the two countries. The Japanese subjects represented the soul much more frequently in a *Fireball Form* than the French subjects, while the latter were more likely to draw *Air Forms*. Incidentally, Japanese painting and literature traditionally depicts the soul in *Fireball Form.* The results of the Japanese students suggest that the *Fireball Form* represents a temporary phase of souls shifting from clearly defined entities to shapeless ones.

We can see a good example of a typical *Fireball Form* in a Japanese student's drawing (Case J1097) which aptly illustrates its intermediate nature. That is, the soul leaves the dead body, changing into a fireball, then vanishes in an *Air Form*. It is interesting to note that a similar type of *Fireball Form* also appeared, although far less frequently, in some French students' drawings (eg. Case F409).



Case J1097 (Japanese)

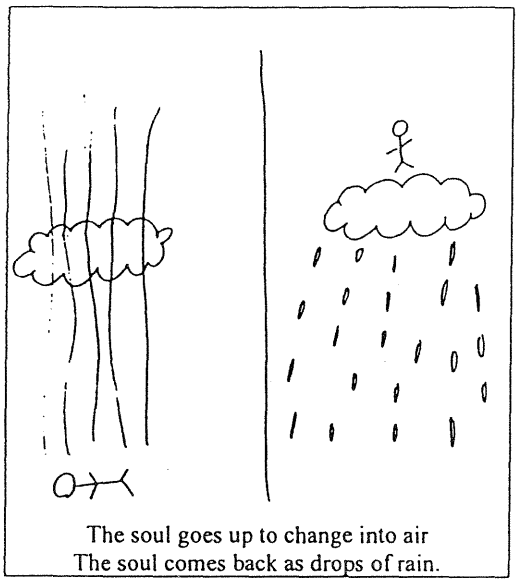


Case F 409 (French)

We do not know when the *Fireball Form* came to be a typical Japanese depiction of the soul. The illustrated encyclopedia *Wakan sanzai zue* published in the early eighteenth century, shows the same kind of *Fireball Form* as that drawn by present-day Japanese students. The author, Terashima Ryōan , wrote, "the soul (*hitodama*, written 霊魂火 or 人魂火, literally „soul-fire") has a round swollen top and a long, pale-colored tail. It flies quietly, at a height of about 10 meters" (Shimada et al. 1987:144–145). The typical Japanese depiction of the soul as *hitodama* is spherical but also has a tail. This feature gives us the impression that its nature is not only floating and gaseous but also self-propelled. This combination of characteristics enables the soul to ascend to the next world.

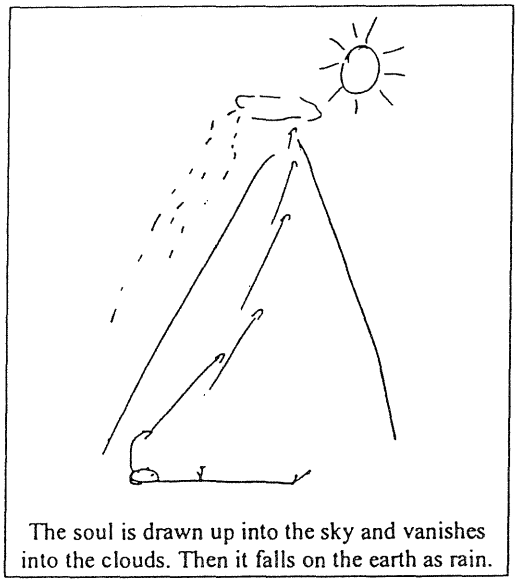
As for the *Air Form*, the idea that the soul is a kind of air or breath and therefore has no shape seems to be accepted worldwide. The Japanese verb to die (*shinu*) literally means that the breath (*shi*) departs (*inu*). Japanese people are familiar with the Chinese concept of *chi* (*ki* in Japanese) – a vital energy and animating principle analogous to breath or air. The ancient Greek word *psyche*, the Chinese *hun* and the Sanskrit *ātman* all relate to breath; these etymologies suggest that the *Air Form* might be the most basic animistic image of the soul (Umehara

and Nakanishi 1996; Yamaori 1976). Two examples of Japanese and French students' drawings (Case J1102, Case F282) show a similar prototypical image of the *Air Form*, which implies that the soul might be incorporated in ecological cycles.



The soul goes up to change into air
The soul comes back as drops of rain.

Case J1102 (Japanese)



The soul is drawn up into the sky and vanishes into the clouds. Then it falls on the earth as rain.

Case F282 (French)

The relatively higher proportion of *Air Forms* in French university students further suggests that French culture has conserved the basic image of the shapeless soul as a dominant type, whereas Japanese culture evolved a spherical image as an intermediate form before the soul attains a shapeless state. However, will-o'-the-wisps and fireballs are also common in European graveyard folklore.

Japanese and French students sketched similar percentages of the *Human Form*, including its five variations.

The shadow retains the shape of the human body in silhouette. This type appears akin to the *Air Form*, but it symbolizes another invisible existence that lives together with us in this world.

Among images lacking body parts, Japanese students frequently drew legless *Human Forms*, some of which were stereotypical of Japanese phantom images current since the Edo period (1600–1868). Such legless *Human Forms* typically float through the air, wandering to and fro on the boundary between this world and the next (Case J452). This lack of legs implies that the soul need no longer walk on the ground, but rather assumes a floating nature akin to that of a spherical-form soul.

If both legless *Human Form* and *Fireball Form* share a common intermediate floating nature, then in what respect do they differ? Japanese phantoms (one type of the legless *Human Form*) retain the proper names, faces, and even voices they had when alive. In fact, the reason they are thought to become wraiths rather than fireballs is that they have sworn vengeance against, or remain attached to, some particular person or place in this world. Far from losing their identity, such Japanese wraiths rather become even more distinctively themselves, embodying their bitter hate or regret towards particular people in this world. This is the distinctive nature of phantoms compared to *Fireball-Form* souls. Fireball souls also wander to and fro on the boundary of the two worlds but have lost their distinctive identities. The semi-spherical *hitodama* might also be a transformation of the *Human Form* with atrophied limbs, in transition to a spherical shape.

Among the drawings of human bodies with added parts, Japanese students frequently depicted winged angels or persons with a halo (Fig. 4). Now winged angels are far removed from traditional Japanese cultural images, so this provides interesting evidence that Japanese youth is strongly influenced by Western culture in its conceptions of the soul.

However, the function of angels seen in the Japanese drawings differs from that of Christian angels. Christianity and Islam depict angels as messengers of God (Knapp 1995), whereas Japanese youth

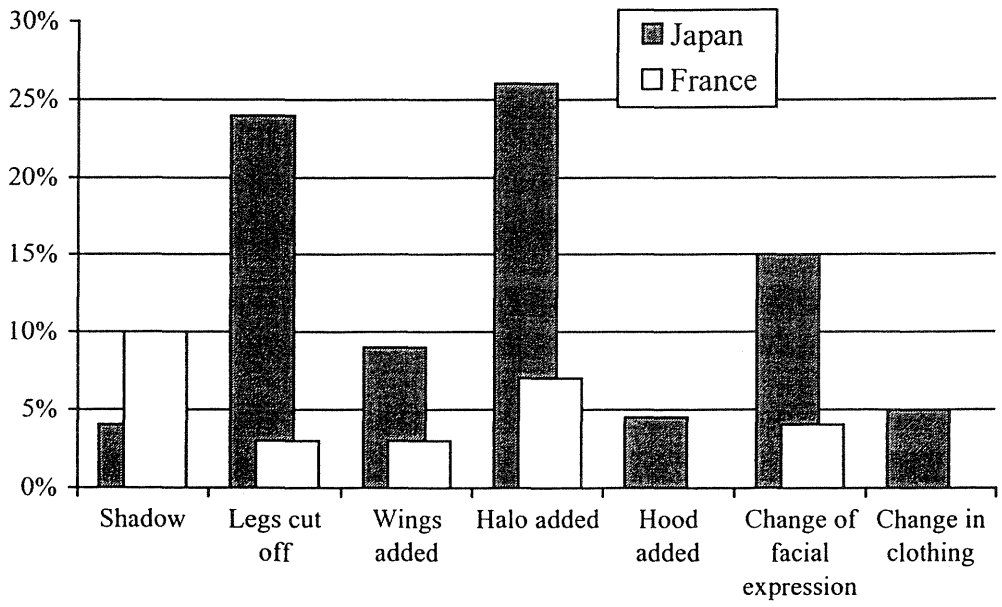


Fig. 4 Frequency of modifications of *Human Form* depicted by Japanese and French students

depict angels as an intermediate form of departed souls. The wings sketched by Japanese students seem to symbolize the "flying," intermediate state of the soul.

The depiction of the feathered soul is reminiscent of images of birds, and in fact, countless paintings from cultures around the globe represent souls as birds. However, our students never represented the soul with bird-like images. Contemporary youth do not easily associate the soul with animals.

It is pertinent here to remark on the general idea of the transformation of the soul that we propose in our model. The soul is depicted in various forms after it leaves the body. Even when the soul retains a *Human Form*, it may lose its legs or gain wings in order to float off the ground. Further, it may transform itself into a Fireball, gaining more freedom of movement at the cost of the loss of its identity. Finally, the soul may vaporize into gaseous matter that becomes the medium for other possible transformations.

The transfer of the Soul

The possibilities of the soul's going back and forth: Fig. 5 indicates that the majority of Japanese students (63.7%) could imagine the soul returning to this world after visiting the next, while only 37.8% of the French students made such drawings when instructed to do so. The famous folklorist Yanagita Kunio (1946) noted that Shintō views of the afterlife are rooted in the notion that souls of the departed can come and go freely between the worlds of the living and the dead. Buddhism presupposes that every person is repeatedly reborn until they transcend the wheel of suffering through selfless detachment. So in traditional Japanese thinking, there are two kinds of ideas on the "circulation of the soul;" one implies visitations by dead ancestors, the other is the reincarnation of the spirit of the dead in newborns. According to the Japanese view, we can sometimes commune with souls of intimate persons who come back to this world, as during the summer Bon festival, and all of us can rejoin our ancestors who await us in the other world after death.

The present survey shows that the majority of young Japanese are familiar with this basic cultural representation, although many of them may not personally believe it, and 14% of them are unable even to make such a drawing when instructed to do so.

It is interesting that some French subjects were able to conceive images of the soul "eventually passing from the other world back to this

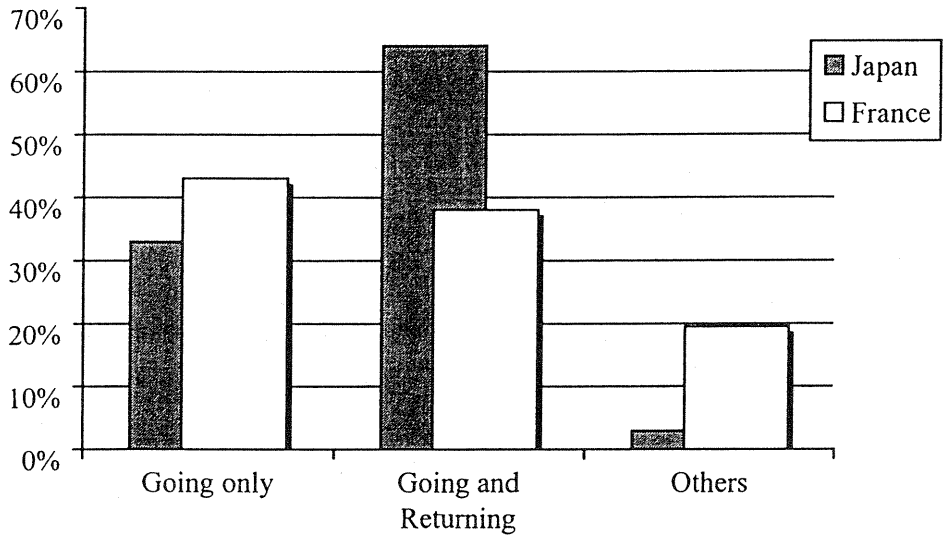


Fig. 5 Frequency of the soul's returning to this world as depicted by Japanese and French students

one." Admittedly, our suggestion was closer to the famous French Cathars' idea of rebirth than to the notion of souls flitting back and forth as in Yanagita's Shintō. Despite the difference in their religious backgrounds, the French students' drawings of returning souls might suggest some acquaintance with the notions of "return" in Catharism, Nietzsche, Schopenhauer, or popular films, if not with Buddhism.

Types of rebirth: The majority of students who could conceive of the eventual return of the soul from the next world to this one sketched returning souls re-entering human wombs or babies (Fig. 6). Very few subjects in either culture produced images of souls being reborn as animals. Thus, the circulatory worldview represented in drawings by today's college students differs from original (Hindu) ideas of the transmigration of the soul. This may also be due in part to the fact that the French word *monde* connotes "people in the world" rather than the animal kingdom.

Circulatory cosmology: The results shown in Fig. 5 and 6 demand further consideration of the nature of circulatory cosmology in Japanese culture.

It is easy to imagine that circulatory cosmologies derive from agricultural societies' cyclical conception of time. Farmers daily confront "the cycle of growth, decay, and regrowth of vegetation" with the

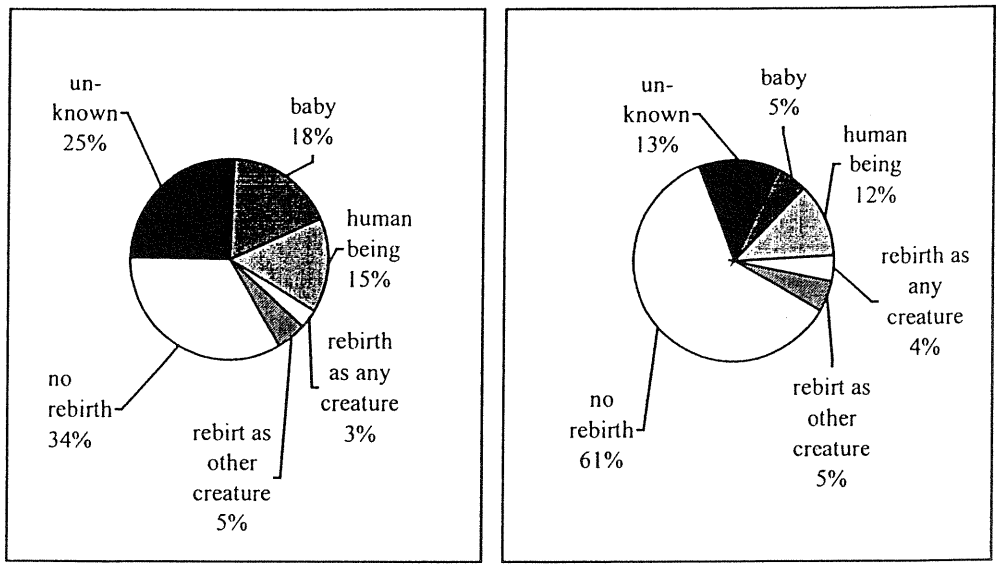
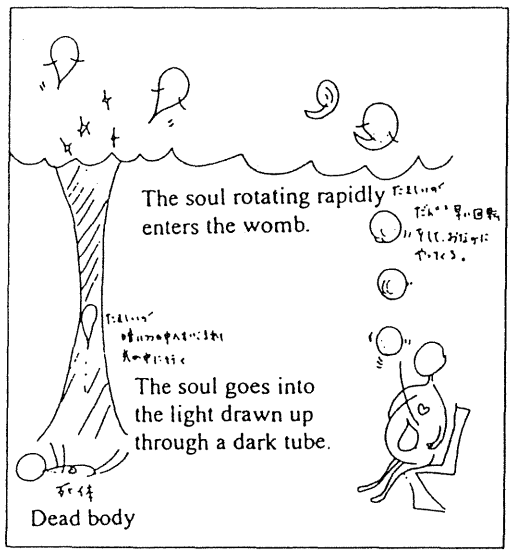


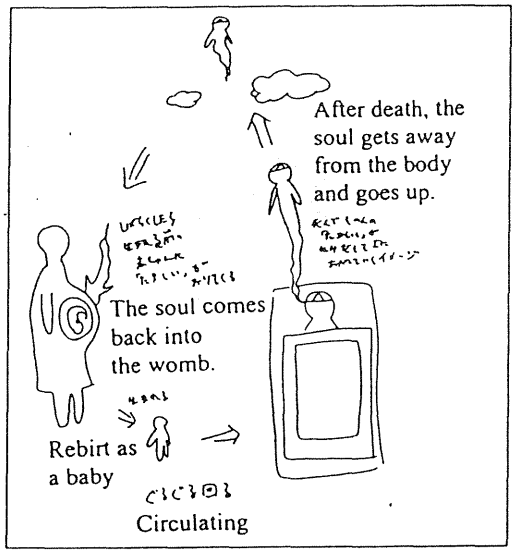
Fig. 6 Proportion of types of rebirth depicted by Japanese and French students

changes of seasons. Agriculture requires intimate and detailed knowledge of this cycle. Tsuboi (1984) suggests that Japanese rites of passage have a cyclical structure modeled on the cycle of rice cultivation. Just as plant life consists of several stages of germination, fertilization, fruit-bearing, decay, subterranean subsistence of seeds and ultimately, regrowth, so the human life cycle might be thought to have similar stages of birth, marriage, childrearing, death, invisible subsistence of the soul and, eventually, rebirth. Japanese culture has long cherished this parallelism between the two. It can be imagined that, just as the vital force of the plant is preserved in the form of the seed after the plant itself decays, so the vital force of the person is preserved in the form of the soul after the person himself decays. This vital force is called sphere (*tama*) or soul (*tamashii*) in Japanese. With the industrialization and urbanization of the last few decades, traditional Japanese worldviews have started to lose their hold on contemporary youth. In fact, very few Japanese students used the metaphor of seeds or germination to represent the rebirth of the soul in their drawings. A small minority also drew rebirths completely unrelated to either traditional Shintō or Buddhist "circulatory" patterns described above.

In spite of these results suggesting that Japanese youth is drifting away from traditional ideas, many of their cyclical depictions do draw on Japanese cultural traditions (Fig. 5). Good examples are Case J371 and Case J452.

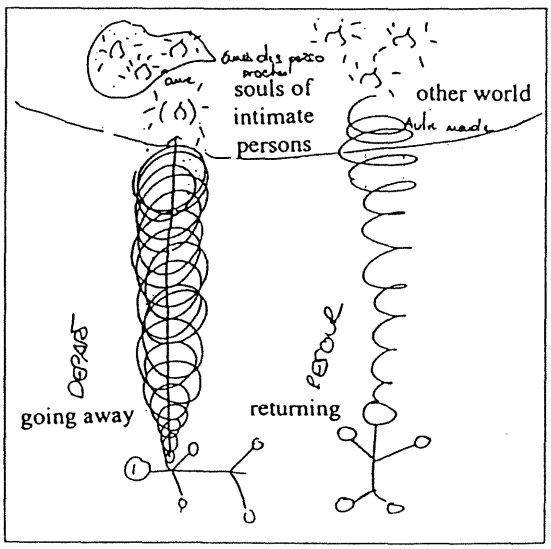


Case J371 (Japanese)



Case J452 (Japanese)

Furthermore, it is interesting that similar depictions were also found in drawings by French students told to draw the return of the soul. Facing the same assignment, French students depicted the soul coming back to this world less frequently than Japanese. But the fact that even a Catholic Frenchwoman (e.g. case F118) could draw similar images suggests that cyclical ideas are conceivable in Western culture as well. These images are obviously not derived from Christian orthodoxy, but Greek myths and folk beliefs often differ from systematic theology and influence people's lives profoundly (Davies 1997).



Case F118 (French)

Fig. 6 shows that the majority of the young Japanese people participating in this study sketched images representing the rebirth of the soul. However, very few drew images of transmigration into animals. Yanagita implies that Japanese traditional folk concepts of the soul differ from the Mahayana Buddhist idea that individuals reap the rewards of their past karma after death, so their souls must pass through other existences such as animals, demons, titans, or ghosts, in their next cycles. Both orthodox and heterodox schools of Indian religions including Buddhism presuppose that transmigration of the soul continues indefinitely (Vernette 1998). The only escape from the suffering of eternal embodied existence is emancipation of the soul from these enduring cycles, through merging with the divine and/or achieving self-extinction.

These Indian ideas of transmigration were introduced into Japan along with Buddhism in the seventh century, but their influence never gained a deep hold on popular Japanese thought. Belief in an afterlife is a good example of traditional resistance to cultural change. Shintō is more life-affirming than Buddhism, shunning discussion of death, and seeing the cyclical nature of death and rebirth in the generations of living families rather than in invisible other worlds. Japanese Shintō tradition places more importance on belonging to family and community than on individual happiness or liberation, and is more optimistic than Indian religions, believing joy rather than suffering to be the fundamental mode of existence. What is important for Japanese people is not to release themselves from infinite cycles of transmigration as Buddhism would propose, but to feel themselves closely associated with their ancestors. These feelings are based not on a sense of directly belonging to particular kinship groups, as in the Chinese case, but on a sense of being loosely linked to their ancestors in general. The Japanese confirm the identity of their community and of each of its members through community participation in ritual dialogue with the dead. This interaction with their ancestors allows them to feel that they occupy a certain position in a long succession of lives. It is essential for Japanese to feel their lives as a part of a larger cycle of Life from generation to generation, an ongoing project.

Conclusion

In conclusion, we should note how the Japanese students' depiction of the soul after death differs from Western traditional ideas, such as Plato's "immortality of the soul." Plato's concept of immortality dualistically contrasts the integrity of the immaterial soul with the decomposition and dissolution of the material body. Since Plato, much of Western traditional thinking has considered the soul an eternally unchanging, ultimate entity (Grégoire 1956; Vernette 1998), whereas Japanese culture regards the soul as an existence perpetually changing in form and content.

From the suggestions above on the characteristics of Japanese idea of the soul, we might go on to an even more detailed examination of the various modes of its depiction. We might elaborate upon the model presented in Fig. 2 so that it might serve as a scheme for better understanding the represented nature of the soul in different cultures. Hitherto, Western philosophy, theology, and anthropology have used methods such as logic, systematics, and functional structuralism to study non-Western, including Japanese, folk concepts. We developed our non-Western model of graphic representation as an innovative method of approaching the psychology of folk concepts.

References

ARIES, PHILIPPE. 1983. *Images de l'homme devant la mort.* Paris: Éditions du Seuil.

BRUNER, JEROME. 1986. *Actual Minds, Possible Worlds.* Cambridge: Harvard University Press.

DAVIES, DOUGLAS J. 1997. *Death, Ritual and Belief.* London: Cassell.

GREGOIRE, FRANCOIS. 1956. *L'Au-delà.* Paris: Presses Universitaires de France.

HERTZ, ROBERT. 1907. "Contribution à une étude sur la représentation collective de la mort." *Année sociologique* 10:48–137.

KATO SHUICHI 加藤周一. 1974. *Zasshu bunka. Nihon no chiisana kibō* 雑種文化・日本の小さな希望. Tōkyō: Kōdansha.

KOMATSU KAZUHIKO 小松和彦. 1985. *Ijinron. Minzoku shakai no shinsei* 異人論・民俗社会の心性 (The Strangers in Japanese Folk Societies). Tōkyō: Seidosha.

KNAPP, GOTTFRIED. 1995. *Angels, Archangels and All the Company of Heaven.* New York: Prestel.

KUNO AKIRA 久野昭, ed. 1994. *Nihonjin no takaikan. Kyōdō kenkyū* 日本人の他界観：共同研究. Kyōto: Kokusai Nihon bunka kenkyūjo (= Nichibunken sōsho 日文研叢書 3).

MARKUS, H. ... R. and KITAYAMA, S.... 1991. "Culture and self: Implications for cognition, emotion, and motivation." *Psychological Review* 98:224–253.

MATSUOKA, M., ed. 1996. *Celestial Breath: Angels and winged messengers.* Okazaki: Okazaki Mindscape Museum.

MCDANNELL, COLLEEN, and BERNHARD LANG. 1988. *Heaven: A History.* New Haven: Yale University Press.

MOSCOVICI, SERGE. 1988. *La machine à faire des Dieux: sociologie et psychologie.* Paris: Librairie Arthème Fayard.

OBAYASHI, HIROSHI, ed. 1992. *Death and Afterlife. Perspectives of World Religions.* New York: Praeger.

ORIGUCHI SHINOBU 折口信夫. 1967. *Shintō shūkyō-hen* 神道宗教篇. Tōkyō: Chūō kōronsha (= Origuchi Shinobu zenshū 折口信夫全集 20).

READ, EDWARD S. 1997. *From Soul to Mind. The Emergence of Psychology from Erasmus Darwin to William James.* New Haven: Yale University Press.

SHWEDER, RICHARD A. et al. 1998. "The Cultural Psychology of Development: One Mind, Many Mentalities." In *Theoretical Models of Human Development*, ed. Richard M. Lerner. New York: John Wiley & Sons (= Handbook of child psychology 1).

TADA CHIMAKO 多田智満子. 1996. *Tamashii no katachi ni tsuite* 魂の形について. Tōkyō: Hakusuisha (= Hakusui U bukkusu 白水Uブックス 1035).

TERASHIMA RYŌAN 寺島良安. 1987. *Wakan sansai zue 8* 和漢三才図会, eds. Shimada Isao 島田勇雄, Takeshima Atsuo 竹島淳夫, and Higuchi Motomi 樋口元巳. Tōkyō: Heibonsha (= Tōyō bunko 東洋文庫 476).

TSUBOI HIROFUMI 坪井洋文. 1984. "Mura shakai to tsūka girei 村社会と通過儀礼." In *Mura to murabito. Kyōdōtai no seikatsu to girei* 村

と村人・共同体の生活と儀礼, ed. Tsuboi Hirofumi 坪井洋文, 455–506. Tōkyō: Shōgakukan (= Nihon minzoku bunka taikei 日本民俗文化大系 8).

UMEHARA TAKESHI 梅原猛, and NAKANISHI SUSUMU 中西進, eds. 1996. *Reikon wo meguru Nihon no shinsō* 霊魂をめぐる日本の深層. Tōkyō: Kadokawa shoten (= Kadokawa sensho 角川選書 271).

VAYSSE, JEAN-MARIE. 1996. *Images du coeur.* Paris: Desclée de Brouwer.

VERNETTE, JEAN. 1998. *L'au-delà.* Paris: Presses Univ. de France.

YAMADA YOKO 山田洋子. 1988. *Watakushi wo tsutsumu haha naru mono. Imēji-ga ni miru Nihon bunka no shinri* 私をつつむ母なるもの・イメージ画にみる日本文化の心理. Tōkyō: Yūhikaku.

– – – – –. 1998. "Tamashii no katachi. Kono yo to ano yo no ikō hyōzō たましいの形—この世とあの世の移行表象." In *Nihon shakai to ha nani ka. "Fukuzatsukei" no shiten kara* 日本社会とは何か・<複雑系>の視点から, ed. Hamaguchi Eshun 濱口恵俊, 206–221. Tōkyō: Nihon hōsō shuppan kyōkai (= NHK books NHKブックス).

YAMADA, YŌKO, and KATŌ, YOSHINOBU. 1993. "Image du Moi dans le rapport mère-enfant." In *Aspects de la psychologie et de l'éducation de l'enfant au Japon*, eds. Masando Kubota and Raymond Voyat, 166–183. Paris: Presses Universitaires de France.

YAMADA YOKO やまだ ようこ, and KATO YOSHINOBU 加藤義信. 1998. "Imēji-ga ni miru takai no hyōzō. Kono yo to ano yo no ichi kankei イメージ画にみる他界の表象—この世とあの世の位置関係 [Parallel title: What Kind of Images Do Japanese Youth Have on This World and the Next World. The Spatial Relationships between the Two Worlds Represented in Their Drawings]." *Kyōto daigaku kyōiku gakubu kiyō* 京都大学教育学部紀要 *[Kyoto University Research Studies in Education]* 44:86–111.

YAMAORI TETSUO 山折哲雄. 1976. *Nihonjin no reikonkan. Chinkon to kinyoku no seishinshi* 日本人の霊魂観・鎮魂と禁欲の精神史. Tōkyō: Kawade shobō shinsha.

YANAGITA KUNIO 柳田国男. 1962. "Senzo no hanashi 先祖の話." In *Teihon Yanagita Kunio-shū* 定本柳田国男集 *10.* Tōkyō: Chikuma shobō.

4-3

The Social Context of Death, Dying and Disposal Conference 2002
(St John College, York, U.K., 6th September, 2002)

The spatial representations of this world and the next world in Japanese, Vietnamese, British and French drawings

Yoko YAMADA (Kyoto University, Japan)
Yoshinobu KATO (Aichi Prefectural University, Japan)
Tetuji ITO (Ibaragi University, Japan)
Yuichi TODA (Osaka University of Education, Japan)

Humans are capable of creating rich images about the invisible world; therefore they can anticipate their own deaths and think about their afterlives. All known cultures have their own ways of representing afterlife and the soul. These representations have helped people connect their lives to deaths and the physical entities to mental ones. The representation of the next world after death seems to be fundamentally common in different cultures and seems to be related with psychological worlds of contemporary lives. This study is a part of psychological researches on life-span development that intend to understand contemporary people's imaginary afterlife in multiple cultures (Yamada & Kato, 1998, 2001). Using our original method (Image Drawing Method: IDM), we asked the participants to draw a picture representing the image of the relationships between this world and the next world.

Method

Participants: The participants were Asian (285 Japanese, 205 Vietnamese) and European (139 British and 159 French) university students.

Procedure: The questionnaire consists of three parts. (1) A drawing which represents the image of the relationships between this world and the next world: (2) a drawing of the soul's passage between this world and the next world: (3) responses to a 21-item verbal questionnaire on their beliefs of afterlife. A sheet of A4 format was used for each drawing.

Here, we report mainly the results of the first drawing task (1). Its instruction was as follows: *If the next world after death exists, what do you imagine? Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing*

Results and Discussion

1. Position of this world and next world in the drawing (Fig. 1 & Cases)

It was found that Japanese, British and French students had similar images. They arranged the two worlds in the vertical structure and put the next world in upper position in contrast to this world. For example, 55.4% of Japanese participants drew the vertical structure, and most of them (91.4 %) put the next world on the upper part of the sheet. The horizontal structure appeared only in 18.8% participants. Students of the three countries showing the vertical structure might value the next world as good places such as Heaven or Paradise, and symbolize people in the next world as the beings over the clouds or

something flying in the sky.

By contrast with them, the Vietnamese significantly preferred horizontal relations between this world and the next world. More than half of Vietnamese participants (58.5%) put the next world horizontally (especially on the right part). As for the representation of the vertical structure, many subjects of the three countries put the next world on upper part and only few on lower part. On the other hand, a considerable number of Vietnamese (20.3%) put the next world on lower part, but it did not always mean the hell or negative part of the world for them. Vietnamese did not tend to represent the two worlds vertically. However, they did not prefer "the horizontal" disposition, because many of them drew the two worlds in "parallel" or free from any meanings given by orientation. Vietnamese seem to have a different type of space representation from Japanese or Western People' ones that ruled by vertical value system. Some Vietnamese drawings could be interpreted by the Yin-Yang theory. According to this theory, all things and phenomena in the universe contain two opposite aspects Yin and Yang which may yet also be seen as complementary.

2. Possibilities of the communication between this world and the next world (Fig.2 & Cases)

The majority of Japanese showed one directional communication from the next world to this world. Most communications were positive behaviors such as "watching," "caring about" and "helping." On the other hand, Vietnamese did not show these tendencies.

3. Questionnaire: Beliefs of After Life (Fig.3)

The Vietnamese believed the after life less than students of other three countries. Besides, the next world was imagined as negative one rather than positive in Vietnamese. One possible explanation of the result is that Vietnamese are inclined to look at the death realistically by the experience of terrible long wars in their country.

References

Yamada,Y. & Kato, Y. 1998. What kind of images do Japanese youth have on this world and the next world: The spatial relationships between the two worlds in their drawings? Kyoto: Kyoto University Research Studies in Education, 44, 86-111. (in Japanese)

Yamada,Y .& Kato,Y. 2001. Images of the soul and the circulatory cosmology of life: Psychological models of folk representations in Japanese and French Youths' drawings. Kyoto: Kyoto University Research Studies in Education, 47, 1-27.

Yamada,Y. & Kato,Y 2002. Japanese and French students' images of the soul its passage after death. In Formanek,S. & Lafler, W. (Eds.) *Practicing the afterlife: perspectives from Japan.* Pp.417-438. Vienna, Der Österrichischen akademie der wissenschaften.(in press).

Correspondence: Prof. Yoko YAMADA
Graduate School of Education, Kyoto University, Kyoto, 606-8501, JAPAN
E-mail: L50096@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp

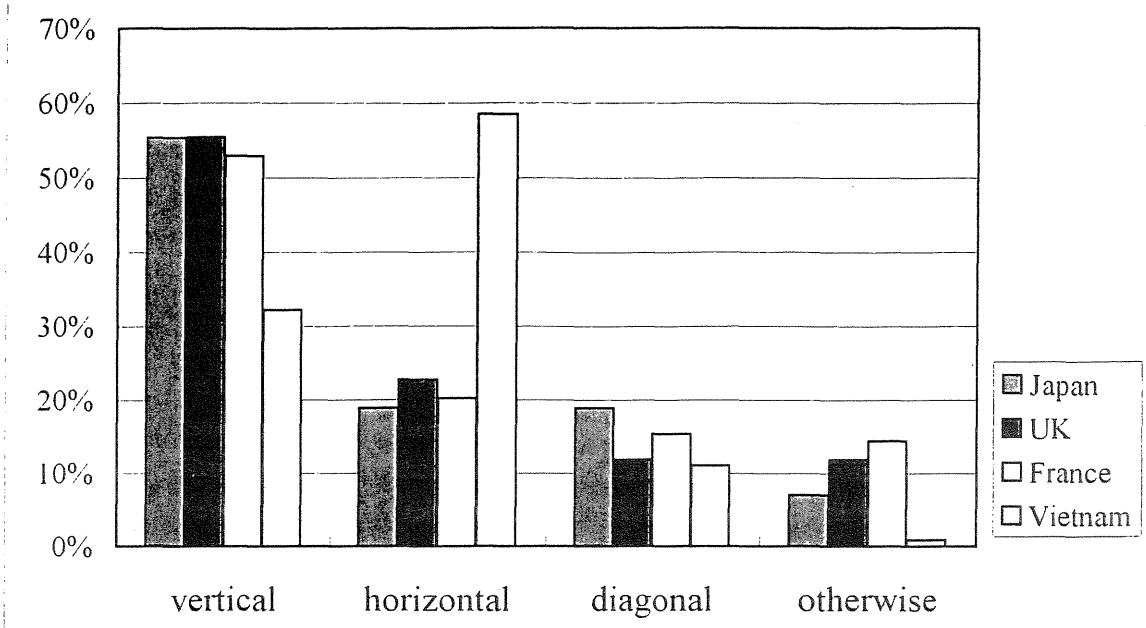


Figure 1 The position of the next world in contrast to this world in the drawings of Japanese, British, French and Vietnamese university students

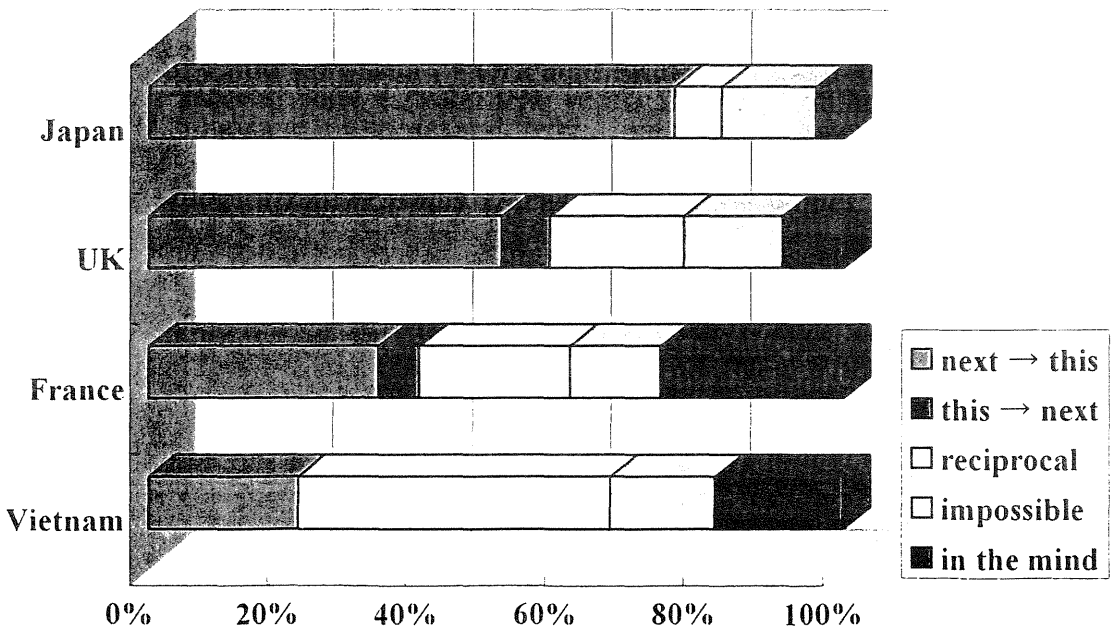


Figure 2 The possibility of communication between this world and the next world

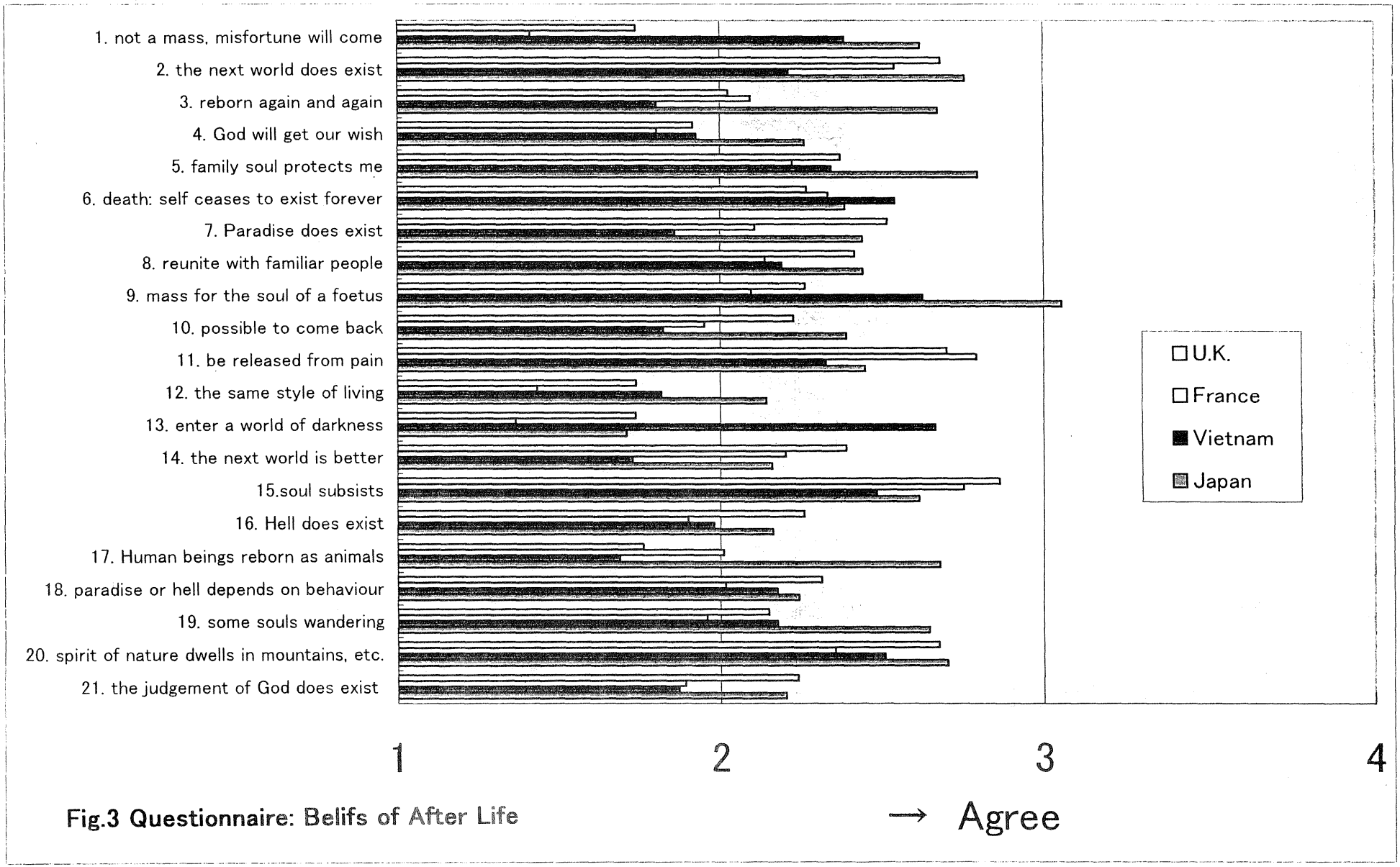
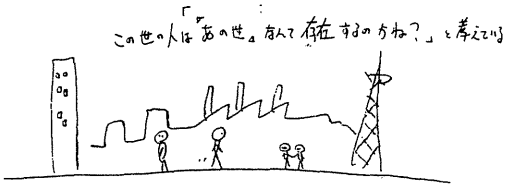


Fig.3 Questionnaire: Belifs of After Life

People in the next world are looking over people in this world.



People in this world wonder whether there is a next world.



Example 1

1) This is a typical example of the vertical type where the next world is above this world
2) The drawing shows a separation with boundary marks represented by a cloud
3) As for the symbolic characteristics of people in the next world, we can see "halo" on their heads. The halo belongs to the Occidental symbolic representation and obviously is an element that has been easily accepted by the Japanese students.
4) This is one of the majority cases where the communication between the two worlds works only from the next world owards this world, and generally in a tenderly way

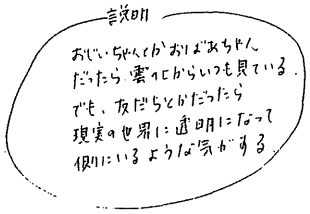
Japan, Case 1

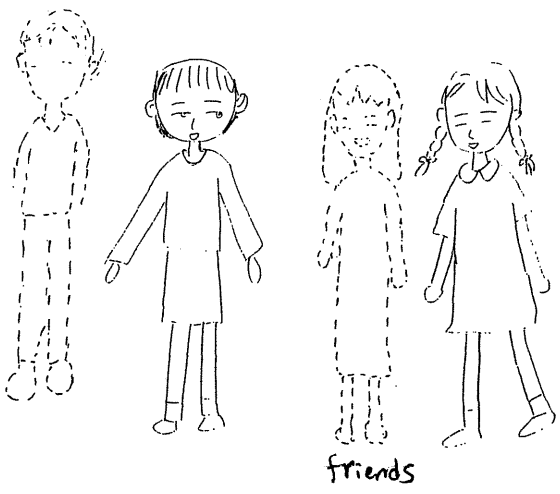


In this drawing, next world characters are flying, like Occidental ang they have no wings and wear on their front head the Japanese tra "triangle sign" on the head.

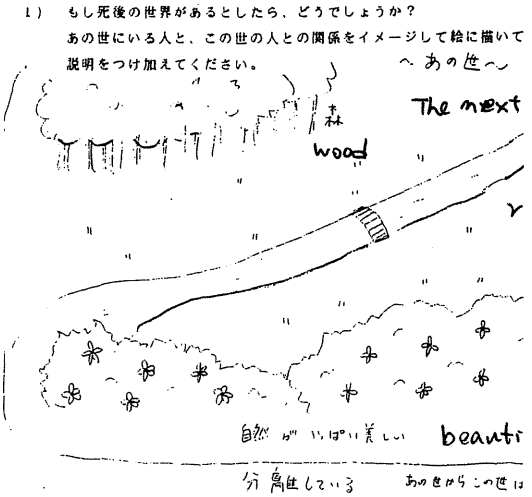
Japan, Case 2







Japan, Case 3





Japan, Case 4

E-286-1

1) If the next world after death exists, what do you imagine?

Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



それらは、私たちの頭上彼方、雲の上の天空の「天国」にある。天使は、この世に降りて見下ろし、何が起こっているのか話すことができる。神は、それより上に、神の大きな空間にいる。

E286 They are above us in heaven, up in the sky, on clouds. Angle creatures able to go to our world and look down at the world discusing what is happening God is above them in his big space.

E286 女性、19 歳、国籍：British（父－Britain、母－Britain）宗教：プロテスタント（家－プロテスタント）

U.K., Case 5

1) If the next world after death exists, what do you imagine?

Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.

E-212-1

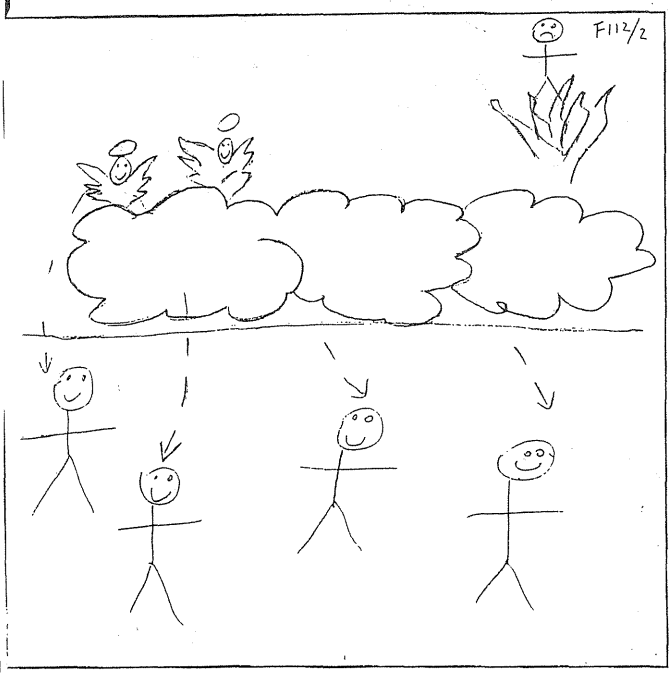


Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

E212 女性、29 歳、国籍：British（父－England、母－England）宗教：不明（家－不明）

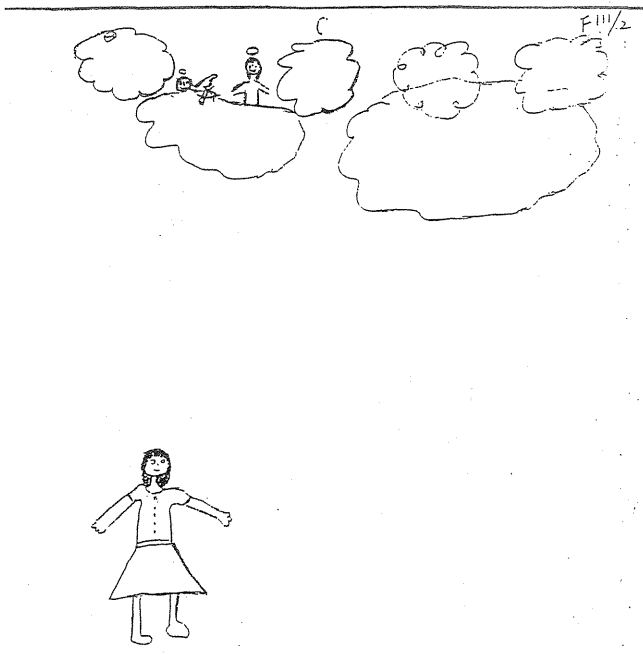
U.K., Case 6

un
a l'autre monde après la mort, qu'est-ce que vous en pensez? VRAI
s dessinez votre image qui représente la relation entre les vivants dans ce monde et
morts dans l'autre monde et vous expliquez votre dessin.



France, Case 7

un
a l'autre monde après la mort, qu'est-ce que vous en pensez?
ous dessinez votre image qui représente la relation entre les vivants dans ce monde et
es morts dans l'autre monde et vous expliquez votre dessin.



France, Case 8

Explication: (si besoin, vous pouvez aussi ajouter votre explication dans le cadre de votre dessin.)

Pour moi, il y a un autre monde après la mort.
Les morts ont un regard sur notre monde mais je ne pense pas qu'ils agissent, qu'ils interviennent sur nous et sur notre monde.

私は 死後の世界は あると思う。天国な生者の世界を見守るが 働きかけたり、介入したりすることはできないと思う。

V001-1

1) Nếu như tồn tại một thế giới bên kia sau cái chết thì bạn nghĩ về điều đó như thế nào? Bạn hãy vẽ một bức tranh trình bày tưởng tượng của bạn về mối quan hệ của con người thế giới này và những người ở thế giới bên kia.



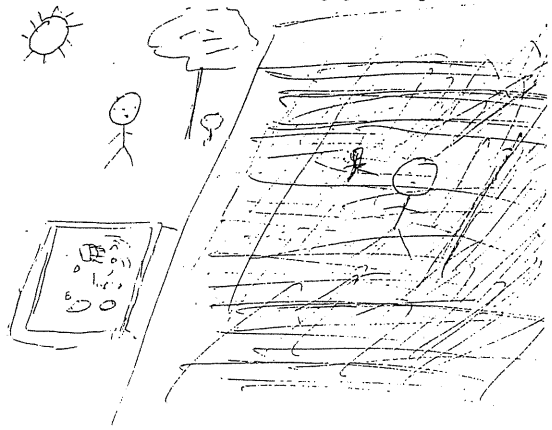
(V001-1)国籍：ベトナム　男性　20歳　先祖の教え　専攻：心理学
この世とあの世は同じ太陽に照らされていると良いなと思う。

Bạn hãy giải thích bức vẽ của mình.
~~Hai thế giới~~
Tôi thương cả hai thế giới đều chung một ánh sáng (mặt trời) chiếu sáng.

I hope 2 worlds have the same sun lights

Vietnam, Case 9

1) Nếu như tồn tại một thế giới bên kia sau cái chết thì bạn nghĩ về điều như thế nào? Bạn hãy vẽ một bức tranh trình bày tưởng tượng của bạn về quan hệ của con người thế giới này và những người ở thế giới bên kia.



(V010-1)国籍：ベトナム　女性　22歳　仏教　専攻：心理学
生きているとき人間は、この世にいる。亡くなってからは土の下にいる。亡くなった終わりである。しかし、人間の思像では、身体だけ死んでも魂はまだ存在している。そため亡くなった人の魂を供養する。

Bạn hãy giải thích bức vẽ của mình.
Con người thường tưởng tượng khi chết nằm dưới đất. Khi chết tôi là hết, nhưng theo tư tưởng của con người cho rằng người chết chỉ chết về thể xác, còn linh hồn vẫn tồn tại do vậy thế cũng linh hồn người đã chết.

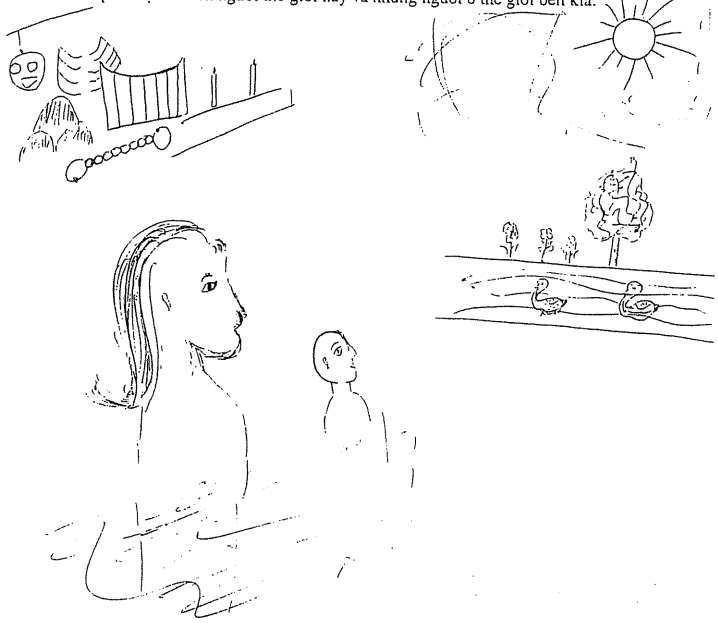
People are living in this world but when he dies lies under the land. 2 Dead is the end. But always ~~a~~imagine that only body died, but so subsists ~~exists~~, because of that ~~there~~ must hold a mas the dead

Vietnam, Case 10

V048-1

(V048-1)国籍：ベトナム　女性　23歳　仏教　専攻：心理学
人々は常に天国のあの世へと向いている。地獄では、人々はおそれを感じ、それを見たいとは思わない。

1) Nếu như tồn tại một thế giới bên kia sau cái chết thì bạn nghĩ về điều đó như thế nào? Bạn hãy vẽ một bức tranh trình bày tưởng tượng của bạn về mối quan hệ của con người thế giới này và những người ở thế giới bên kia.



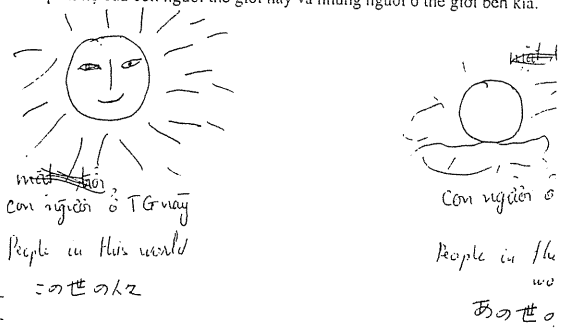
Bạn hãy giải thích bức vẽ của mình.
Con người luôn hướng tới thế giới bên kia dù họ thiện chẳng vẫn chọn ngục hay cõi thiên cũng vẫn hoài vọng không chịu nhìn.

Vietnam, Case 11

Peoples towards to the other world it's a heaven.
In the hell they feeling fearsome and don't want to see.

V083-1

1) Nếu như tồn tại một thế giới bên kia sau cái chết thì bạn nghĩ về c như thế nào? Bạn hãy vẽ một bức tranh trình bày tưởng tượng của bạn quan hệ của con người thế giới này và những người ở thế giới bên kia.



Vietnam, Case

(V083-1)国籍：ベトナム　女性　18歳　無宗教　専攻：ロシア語
この世の人々は太陽のようにカラフルである。
あの世の人々は月光で冷たい。
この世とあの世の人々は一緒には暮らしていない。

Bạn hãy giải thích bức vẽ của mình.
Con người ở TG này như mặt trời, nhiệt nồng còn con người ở TG bên kia như mặt trăng toả ánh sáng dịu mát, hiền lành. Con người ở TG này không bao giờ có thể sống cùng với con người ở TG bên kia.

People in this world is colourful as the sun.
People in the other world is moonlight and cold
People in this world and other world can't live

4-4

Les représentations spatiales de ce monde et l'autre monde vues dans les dessins des étudiants japonais, vietnamiens, français, et anglais[i]

Yoshinobu KATO (Université Préfectorale d'Aichi, Japon)
Yoko YAMADA (Université de Kyoto, Japon)
Philippe WALLON (I.N.S.E.R.M., France),
Claude MESMIN (Université Paris 8, France),
Tetuji ITO (Université d'Ibaragi, Japon),
Yu-ichi TODA (Université de l'éducation à Osaka, Japon)

Introduction

Les images sur l'Après-vie (l'autre monde) se trouvent dans toutes les cultures du monde et elles jouaient un rôle très important dans la vie quotidienne des peuples qui vivaient dans les sociétés pré-modernes, ou même encore chez certains de nos sociétés actuelles. La manière dont nous voyons l'Après-vie constituait ou constitue encore autant la gestion d'une crainte (celle de la disparition de l'être vivant) que la gestion d'un espoir. (celui d'un monde meilleur). À cela s'ajoute l'idée d'une rétroaction, plus encore que d'un «mérite», á savoir, la réponse du Divin à nos actions, comme punition (Enfer) ou remerciement (Paradis) (Wallon,Ph., 2001). C'est dans ce sens-là que la conception sur l'Après-vie fournit le cadre des comportements dans ce monde aux personnes qui la tiennent.

La psychologie du développement, qui est mon domaine principal de recherche, a récemment élargi sa perspective de recherche de la naissance jusqu'à la mort de l'être humain. Elle a montré que chaque période de la vie a ses propres sens psychologique dans le cadre du système de valeur marquant les étapes du développement tout au long de la vie dans la société. Mais il me semble que cette psychologie ne réussit pas suffisamment encore à étendre sa vue vers un cycle plus long qui comprend l'Après-vie. Comme je l'ai déjà indiqué, pour ceux qui croient en l'Après-vie, ces idées constituent les éléments essentiels qui déterminent leur qualité de vie dans ce monde. Mais, même pour les autres, ceux qui ne croient pas, je pense qu'ils ont aussi des représentations naïves (ou inconscientes) sur l'Au-delà et que ces images influencent et guident plus ou moins toutes leurs conduites.

C'est plutôt sur l'aspect naïf que nous avons voulu faire des recherches comparatives entre les cultures différentes.

Plus précisément, nous avons examiné quelles sortes d'images, qui concernent les relations entre ce monde et l'Au-delà après la mort, subsistent encore dans l'esprit des adolescents qui vivent dans les sociétés modernes. Pour savoir s'il y a des représentations significatives communes à toutes les cultures ou s'il y a des types particuliers à chacune des cultures, nous avons tenté de comparer les images sur l'Au-delà, dessinées par les étudiants des universités entre quatre pays ; Japon, Viêt-Nam France, et Grande Bretagne. Les deux premiers sont évidemment les pays asiatiques, différents sur le nivaux du développement économique et du système politique (un pays capitaliste et un pays socialiste). Les deux pays occidentaux, France

et Grande Bretagne sont différents de deux pays asiatiques sur le plan religieux, mais presque les mêmes que le Japon sur le plan de la qualité de la vie moderne.

Il est à noter ici que notre intérêt principal n'est pas de savoir les pourcentages différents des étudiants qui croient ou ne croient pas en l'Après-vie dans tous les quatre pays. Mais, ce qui nous intéresse, c'est plutôt de mettre en lumière les représentations collectives que chaque peuple de cultures différentes ont d'une façon implicite dans leurs esprits. C'est pour cette raison que nous utilisons non seulement le questionnaire verbal qui porte directement sur la croyance, mais aussi le dessin.

Méthode

<Sujets>

Il s'agit de 285 Japonais, 205 Vietnamiens, 159 Français et 139 Anglais qui étaient tous des étudiants d'université. En fait, parmi les sujets qui ont participé à notre enquête en France et en Grande Bretagne, il y avait pas mal d'étudiants étrangers. Nous les avons donc exclu lors de l'analyse comparative entre les cultures. Quand il s'agit de sujets japonais et vietnamiens, ceux-ci étaient très homogènes.

<Enquête>

L'enquête a été rédigé en 1994 par le Professeur Yoko Yamada à l'Université de Kyoto en japonais, et puis traduit en anglais, français et vietnamien avec l'aide linguistique de chercheurs de chacun des pays. L'ensemble de l'enquête se composent de trois parties différentes: 1) dessin sur la représentation des relations entre les vivants de ce monde et les morts de l'autre monde, 2) dessin sur la représentation du passage de l'âme de ce monde à l'autre monde et/ou de l'autre monde à ce monde, 3) questionnaire verbal sur la croyance en l'Après-vie par 21 questions.

La version française de consigne pour le premier dessin est la suivante: *"Pensez-vous qu'il y ait un autre monde après la mort? Pourriez-vous faire un dessin qui représente la manière dont vous imaginez la relation entre les vivants dans ce monde et les morts dans l'autre monde? Vous pouvez compléter votre dessin par des explications."*

La consigne pour le deuxième dessin est la suivante : *"Pensez-vous qu'il y ait une survie de l'âme après la mort ? Pourriez-vous faire un dessin qui représente la manière dont vous imaginez le passage de ce monde vers l'autre monde, et éventuellement, le passage de l'autre monde vers ce monde-ci? Vous pouvez compléter votre dessin par des explications."*

Nous présentons ici les résultats du premier dessin et d'une partie du questionnaire verbal.

<Procedure>

Le format A4 a été utilisé pour le dessin. Toutes les enquêtes ont été faites dans les salles de l'université de chaque pays. On a mis à peu près 40 minutes pour répondre.

Résultats

1. Disposition de deux mondes dans le dessin

Les sujets qui n'avaient donné aucune image visuelle ont été exclus pour cette analyse.

La Figure 1 montre que les trois groupes de sujets, c'est-à-dire, sujets japonais, français et anglais, ont tendance à représenter les deux mondes dans la structure verticale. La majorité de ces sujets mettent l'autre monde au dessus de ce monde. Par exemple, 55,4% de sujets japonais aiment la structure verticale et la plupart d'entre eux (91,4%) dessinent l'autre monde en haut du papier. La structure horizontale est rare parmi les sujets de ces trois pays.

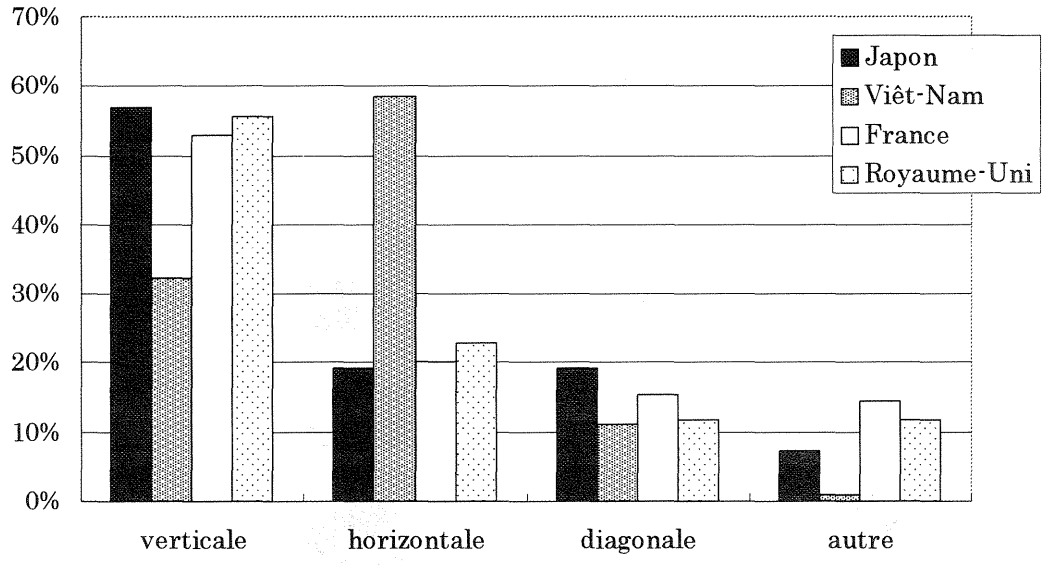


Figure 1 Les positions différentes de l'autre monde par rapport à ce monde dans les dessins des étudiants japonais, français, britaniques et vietnamiens.

Alors, pourquoi ils préfèrent cette structure verticale ? Parce que les étudiants de ces trois pays mettraient en valeur l'autre monde en tant qu'un endroit meilleur tel que le paradis ou le Ciel et ont tendance à représenter les âmes comme étant au-dessus des nuages ou survolant le ciel. Dans les pays chrétiens comme la France et la Grande Bretagne, ce type de cosmologie, sur la base de la structure verticale, semble bien enraciné dans l'esprit du peuple et se concrétise dans les architectures, les pentures etc. Dans le cas du Japon, on trouve plutôt ces idées archaïques sur des images verticales : ici, on croit que les âmes des morts habitent au-delà de la montagne et descendent au village durant la saison du calendrier où elles ont la possibilité de revoir les membres de leur famille.

En contraste avec les sujets de ces trois pays, les étudiants vietnamiens aiment les relations horizontales entre les deux mondes. Il semble qu'ils représentent la coexistence de ces deux mondes par horizontalité, ce qui est tout à fait différent du système symbolique occidental

basé sur la structure verticale.

2. Possibilités de communication entre les deux mondes

À peu près moitié de dessins des sujets de quatre pays ne donnent aucune indication sur la possibilité de communication entre les deux mondes. Parmi les dessins qui peuvent se classer, trois quarts de Japonais pensent que la communication est possible uniquement pour la direction de l'autre monde vers ce monde, tandis que cette proportion est très faible chez les étudiants vietnamiens (Figure 2). Ils tendent à penser plutôt que la communication réciproque entre les deux mondes est possible. La tendance des étudiants français et anglais se situent entre les deux pays asiatiques.

La plupart de sujets qui donnent le dessin du type de sens unique de l'autre monde vers ce monde imaginent que les âmes ou les êtres divins regardent attentivement les gens de ce monde de côté du ciel.

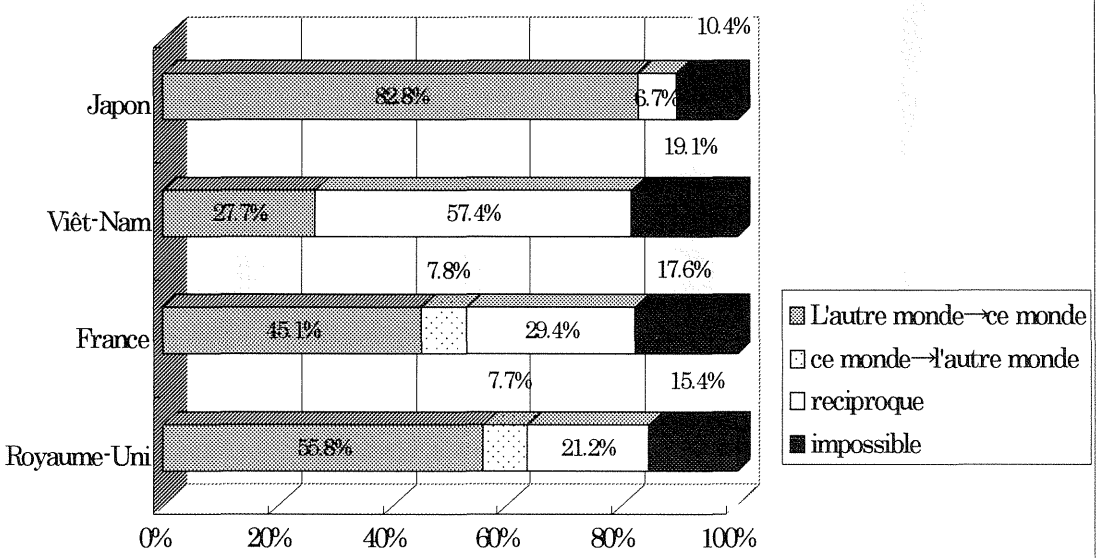


Figure 2 La possibilité de communication entre ce monde et l'autre monde

3. Les résultats de questionnaire verbal

La Figure 3 montre les scores moyens de l'accord à chacune de six questions intéressantes chez les sujets de quatre pays. Ici encore, on trouve que les tendances des réponses chez les étudiants de trois pays, c'est-à-dire, Japon, France et Grande Bretagne, se ressemblent, tandis que les Vietnamiens tous seuls tendent à répondre d'une façon différente des sujets des autres trois pays. Ils sont plutôt matérialistes; les scores de leurs réponses aux questions sur l'existence de l'Au-delà (Question 2) ou de l'âme (Question 15) sont toujours les plus basse (c'est-à-dire, réponses négatives) parmi les sujets de quatre pays et ceux de leur réponse au

question 13 qui suggère le néant après la mort est le plus élevée.

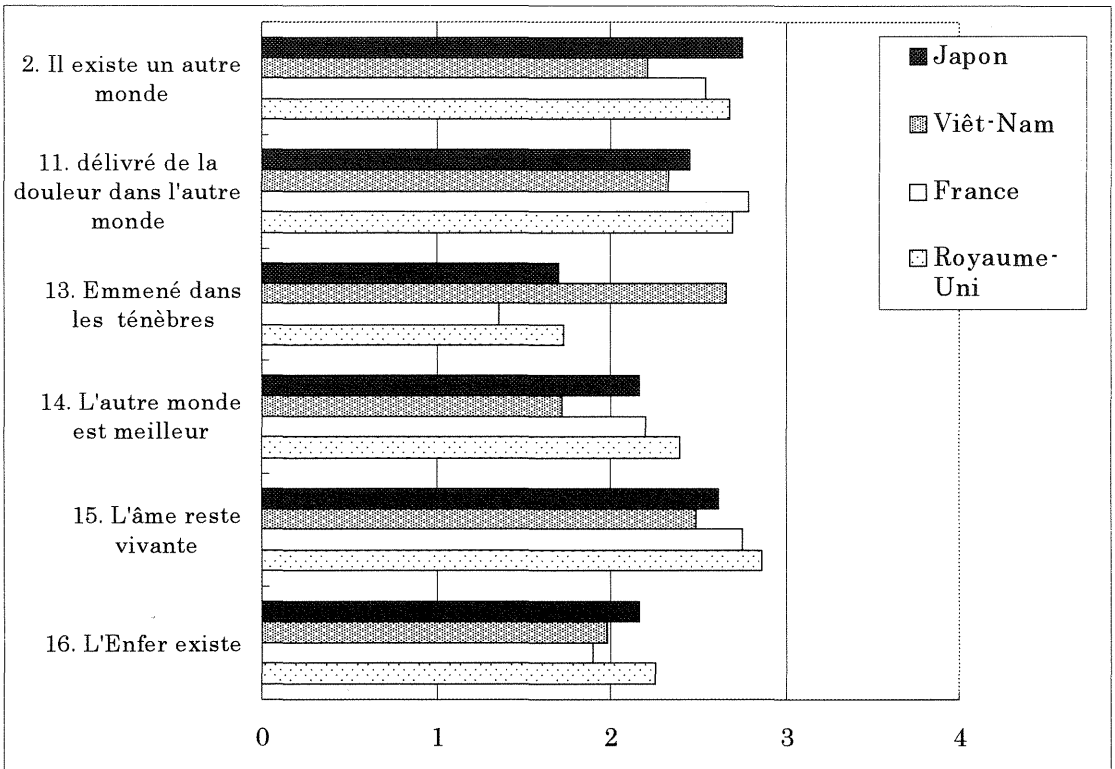


Figure 3 Chiffres moyens des scores de l'accord obtenus à chacun des six questions dans le questionnaire

Conclusion

Nos analyses quantitatives ont montré que les tendances des représentations sur l'Au-delà entre les trois pays industrialisés sont similaires, malgré les grandes différences culturelles et religieuses entre eux, ce qui est le contraire que nous avons imaginé avant de faire cette enquête. La tendance particulière vietnamien par rapport aux autres paraît être imputable aux facteurs du niveau du développement économique et social ou du système politique différent, c'est-à-dire, du système socialiste. Il est encore à noter que le taux de scolarité universitaire au Viêt-Nam est encore beaucoup plus bas que celui des autre pays. Les étudiants vietnamiens sont plutôt élites de la société et sont éduqués dans une orientation vers les pensées scientifiques pour faire sortir vite leur pays de sa tradition pré-moderne. Donc, leurs réponses à notre enquête ont la possibilité d'être nettement différentes de celles de leurs compatriotes qui appartiennent à d'autres classes sociale.

Notre recherche a révélé que même les jeunes de nos époques, qui vivent dans la société post-moderne et qui ont l'air de n'avoir aucun intérêt pour les religions, ont les images vives de

l'autre monde après la mort. Les représentations naïves continuent à exister dans leurs esprits. La psychologie du développement doit les traiter, parce que ces représentations naïves peuvent influencer notre manière de vivre dans la vie quotidienne.

---

[i] Cet exposé a été présenté dans le séminaire de Madame Claude Mesmin à l'Université Paris VIII (Saint-Denis, France) au 19 mars, 2003, lors de la visite de l'auteur (Yoshinobu KATO) à Paris en tant que professeur invité grâce à l'aide financière de la Fondation Canon en Europe.

Ce rapport est basée sur une partie de l'ensemble des recherches inspirées par les idées originales du Professeur Yoko YAMADA (Université de Kyoto, Japon) et faites en collaboration avec les chercheurs à l'échelle internationale.

Voici nos articles déjà publiés en anglais. Nous espérons que nos lecteurs qui ont envie de mieux savoir nos recherches se réfèreront à ces ouvrages.

Yamada,Y. (2003). The generative life cycle model: Integration of Japanese folk images and generativity. In E.de St. Aubin, D. P. McAdams, & T. C. Kim. (Eds.), *The generative society: Caring for future generations.* (pp.97-112). Washington, DC: American Psychological Association.

Yamada, Y. (2002). Models of life-span developmental psychology: A construction of the generative life cycle model including the concept of "death." *Kyoto University Research Studies in Education*, 48, 39-62.

Yamada, Y., & Kato, Y. (2001). Images of the soul and the circulatory cosmology of life: Psychological models of folk representations in Japanese and French youths' drawings. *Kyoto University Research Studies in Education,* 47,1-27.

Yamada, Y., & Kato, Y. (in press) Japanese Students' Depictions of the Soul after Death: Toward a psychological model of cultural representations. Formanek,S. & LaFleur,W.(eds.) Practicing the Afterlife: Perspectives from Japan. Verlag der Oesterreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien.

日本、ベトナム、フランス、イギリスの大学生のイメージ画にみる「この世」と「あの世」の空間表象[1]
(日本語訳)

加藤義信（愛知県立大学）
やまだようこ(京都大学、日本)
フィリップ・ワロン（フランス国立健康医学研究所、フランス）
クロード・メスマン（パリ第8大学、フランス）
伊藤哲司（茨城大学、日本）
戸田有一（大阪教育大学、日本）

はじめに

他界(あの世)のイメージは、世界中のあらゆる文化にみられるイメージである。そうしたイメージは、前近代の社会に生きた人々の日常生活において、また、現代の社会に生きる人々の日常生活においても、きわめて重要な役割を果たしている。他界をどのような世界としてイメージするかは、（いま生きている人々と死別するかもしれないといった）不安や（もっとよい世界に生きたいという）希望と切り離せない大切な事柄であったし、いまも大切な事柄であり続けている。さらに付け加えれば、私たちのこの地上での行為に対する神の応答の観念、つまり罰（地獄）や報い（天国）といった観念が、他界のイメージと大いに結びついている（ワロン，2001)。この意味で、人がどのような他界の観念を有するかは、その人の現世での行動を規定する枠組みになっているといえるだろう。

私たちの専門とする発達心理学では、近年、研究の視野が人の誕生から死に至るまでをカバーするほどに拡大し続けてきた。人生の各時期には固有の心理学的意味があって、そうした意味は社会の価値システムの枠内で生まれること、その価値システムによって一生の間の各時期がいくつかの発達段階に画されること、最近の発達心理学が示したのは、この点である。しかし、その最近の心理学ですら、他界までをも含むより長い人生サイクルを視野に入れるところまでは至っていないように思われる。既にふれたように、他界を信じる人々にとっては、他界の観念は現世での生の質を決める決定的な要素である。だが、他界を信じない人々にもまた、他界の素朴な（あるいは無意識の）表象はあり、そのイメージによって多少ともそうした人々の行動は影響を受けたり、方向づけられたりするであろう。

私たちが異なる文化間の比較研究として取り上げようとしたのは、他界のこの素朴観念の側面である。

もっと詳しく言えば、私たちが研究対象とするのは、この世と死後のあの世との関係にかかわるどのようなイメージが、現代の若者たちの心にいまも生きつづけているか、という点である。どの文化にも共通する重要な表象といったものがあるのだろうか。それとも各文化に特有なイメージ・タイプというものがあるのだろうか。こうした点を知るために、私たちは、日本、ベトナム、フランス、イギリスの4カ国の大学生にあの世のイメージを絵に描いてもらい、相互に比較してみることにした。選んだ4カ国のうち、日本とベトナムはアジアの国であるという点で共通しているが、経済発展の水準、政治体制（資本主義国と社会主義国）の点で異なっている。フランスとイギリスは西洋の国であり、日本、ベトナムとは宗教的背景が大きく異なっている。しかし、日本とは近代

化により達成された生活の質という点でほぼ同じ水準にあるといえる。

ここでは、あらかじめ以下の点に注意を促しておこう。私たちの主要な関心は、他界を信ずる学生、信じない学生の割合が4か国で異なっているか否かを知るというところにはない。私たちの関心は、異なる文化に属するぞれぞれの人々が心のなかに自分でもはっきりと意識しないで保持し続ける（他界の）集合的表象を明らかにすることにある。こうした理由から、私たちは（他界にかかわる）信念について直接問いただす言語的質問紙だけでなく、絵を利用することにした。

方法

＜調査協力者＞

日本の大学生285人、ベトナムの大学生205人、フランスの大学生159人、イギリスの大学生139人が調査に協力してくれた。ただ、フランスとイギリスでは、調査協力者の中に外国人留学生が多数含まれていたので、文化間の比較分析を行なうにあたっては、これらの人々を除外することにした。日本とベトナムでは、調査協力者群にこのような外国人は含まれていなかった。

＜調査内容＞

調査の基本内容は1994年に京都大学のやまだようこ氏によって日本語で作成され、順次、英語、フランス語、ベトナム語に翻訳された。翻訳にあたっては、それぞれの言語表現の選択等において各国の研究者の援助を受けた。調査全体は次の3つの部分から成っている。1）この世の人とあの世の人との関係についてのイメージを絵に描く課題、2）この世のたましいがあの世へと至る、あるいはあの世のたましいがこの世へと至る過程のイメージを絵に描く課題、3）他界に関係する信念についての21項目の言語質問紙。

最初のイメージ画に関するフランス語の教示は以下の通りである。「死後にあの世があると思いますか？この世の人とあの世の死者との関係をどのようにイメージしているか、絵に描いてください。絵に説明を付け加えてください」。

二番目のイメージ画に関するフランス語の教示は以下の通りである。「死後もたましいの存続があると思いますか？この世からあの世へ至る過程、またあの世からこの世へ至る過程をどのようにイメージしているか、絵に描いてください。絵に説明を付け加えてください」。

本稿では、最初のイメージ画と言語質問紙の結果について報告する。

＜手続き＞

描画にはA4用紙が用いられた。調査はすべて、各国の大学の教室で実施された。回答にかかった時間はいずれも約40分である。

結果

1．二つの世界の用紙上での位置

どんな絵も描かなった調査協力者は分析から除外した。

図１を見ると、三つの群、つまり日本、フランス、イギリスの調査協力者の場合は、両世界を垂直的構造としてイメージする傾向の強いことがわかる。また、そのうちの大多数があの世をこの世の上部に配置していた。たとえば、日本の調査協力者はその 55.4%が垂直構造の配置を好んで描いたが、さらにそのなかの 91.4%は用紙の上のほうにあの世を描いた。この三カ国の調査協力者の場合、水平構造の絵はまれであった。

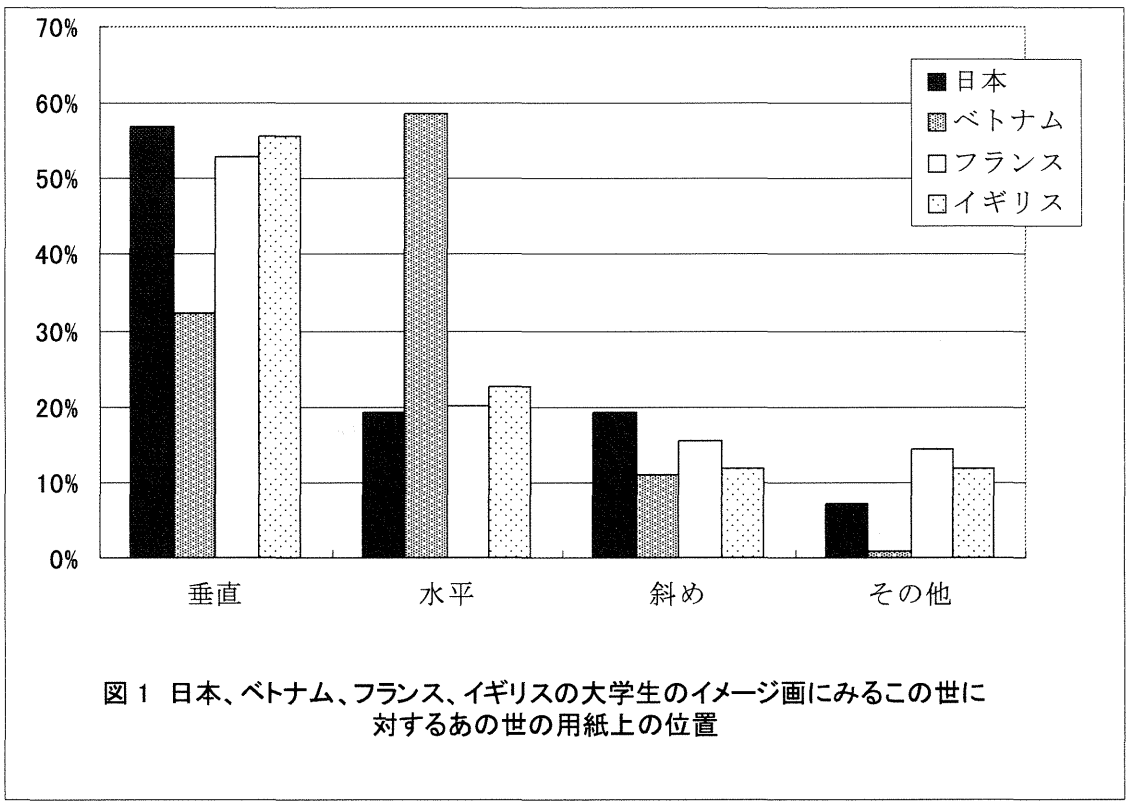


図１　日本、ベトナム、フランス、イギリスの大学生のイメージ画にみるこの世に対するあの世の用紙上の位置

では、なぜこうした垂直構造が好まれるのだろうか？その理由は、三カ国の大学生は極楽（paradis）や天国（Ciel）のようなよりよい場所としてあの世に高い価値を与えているからであると思われる。その証拠に、彼らはたましいを雲の上にあるように描いたり、空を翔けているように描いたりする傾向があった。フランスやイギリスのようなキリスト教国では、こうした垂直構造をベースとする世界観（cosmologie）は人々の心のなかにしっかりと根づいているように思われ、実際、それが建築や絵画などに具現されているといえる。日本の場合は、むしろ垂直的イメージのうちに古層の観念を見出すほうが適切であろう。つまり、古く日本では死者のたましいは山の彼方に住みついていて、季節のある時期になると家の人々と再会するために村に下りてくると考えられていた。

三カ国の調査協力者とは対照的に、ベトナムの大学生は両世界の関係を水平的関係としてイメージすることを好む。彼らは、水平的配置によって、二つの世界の共存を表そうとしているようにみえる。このイメージの仕方は、垂直構造に基礎を置く西洋的なシンボル・システムとはまったく異なるものである。

2．二つの世界間のコミュニケーションの可能性

四カ国の調査協力者のほぼ半数が、二つの世界間のコミュニケーションの可能性を示す表現のある絵を描かなかった。(残り約半分の) 分類可能であった絵のうち、日本人の絵の4分の3が、コミュニケーションはあの世からこの世への方向のみ一方的に可能と考えている絵であった。これにたいし、ベトナムの大学生では、この比率は非常に小さかった (図2参照)。彼らはむしろ、両世界の間には双方向のコミュニケーションが可能であると考える傾向があった。フランスとイギリスの大学生の傾向は、アジアの二つの国の中間に位置する。

あの世からこの世への一方向的なコミュニケーションのみを可能とする絵を描いた調査協力者の大部分は、たましいや神的存在が天から注意深くこの世の人々を見守っているとイメージしていた。

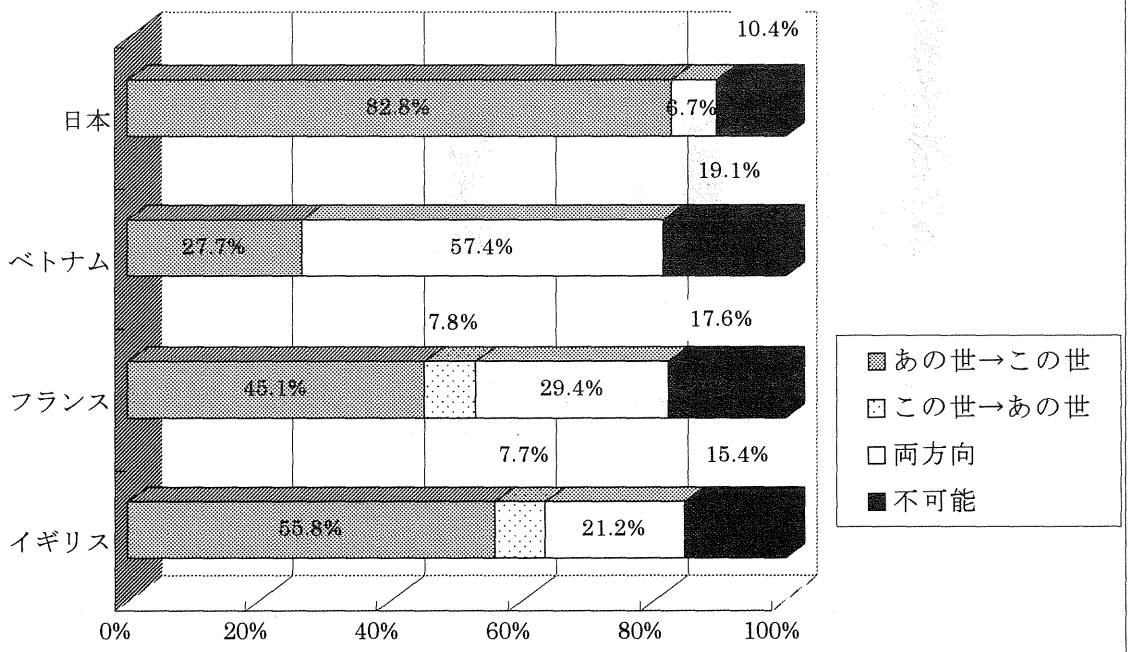


図 2　この世とあの世のコミュニケーションの可能性

3．言語的質問紙の結果

図3は、(21 項目中) 特に興味深い6つの項目を選んで、そのそれぞれにおける四カ国の調査協力者の平均賛成得点を示したものである。ここでもまた、日本、フランス、イギリスの三カ国の大学生の回答傾向は類似しているのに対し、ベトナムの大学生だけが他の国と異なって回答する傾向のあることがわかる。ベトナムの大学生は、唯物論的傾向が強い。つまり、他界の存在に関する質問 (質問2) やたましいの存在に関する質問 (質問 15) への彼らの賛成得点は、四カ国中もっとも低くなっている。また、死後が無か否かに関する質問 (質問 13) への賛成得点はもっとも高くなっている。

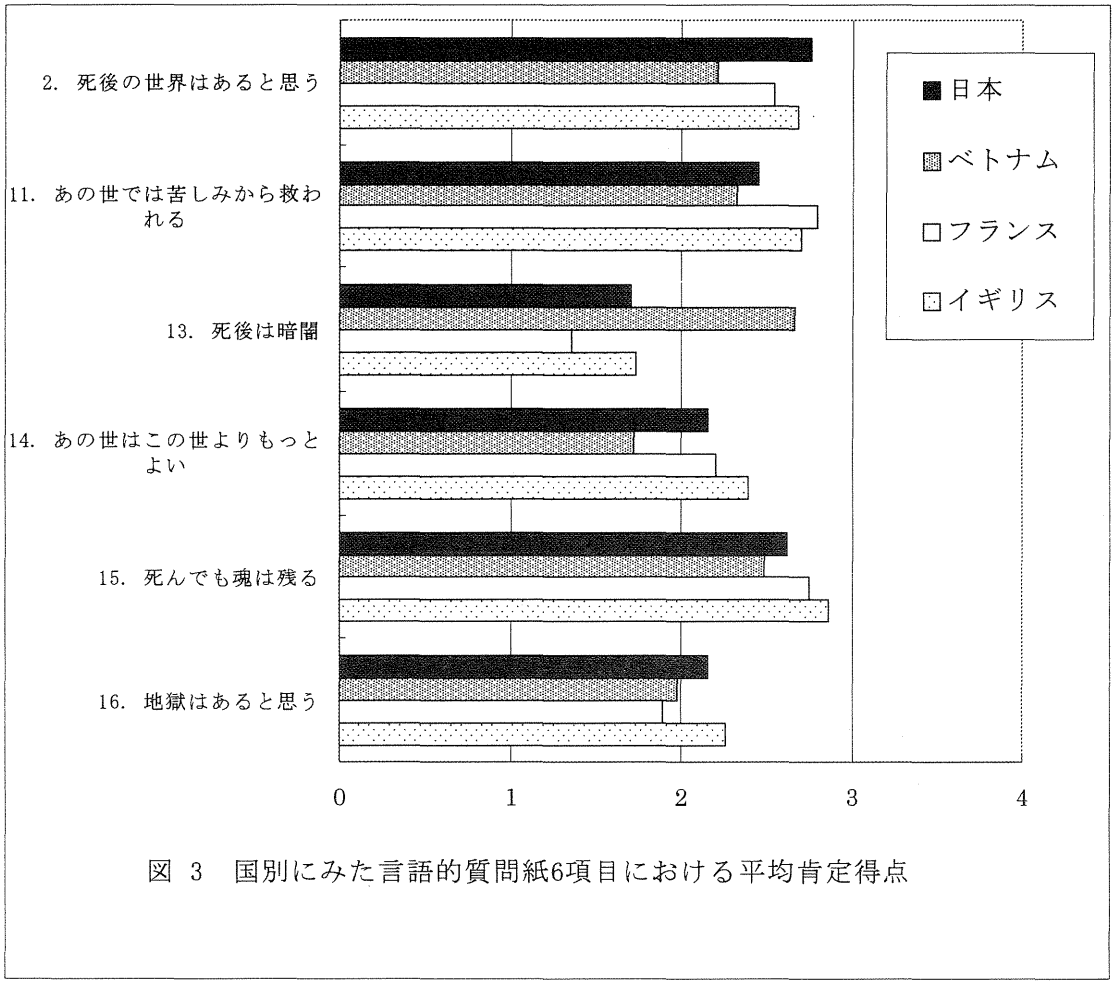


図 3　国別にみた言語的質問紙6項目における平均肯定得点

結論

これまでに述べてきた数量的分析から、その文化的、宗教的背景の大きな違いにもかかわらず工業化社会である三カ国にみられる他界表象は互いに似ている傾向のあることがわかった。これは、当初この調査を実施するにあたって立てた予測とは反対の結果であった。他の三カ国に比べてベトナムにみられた特別な傾向は、経済的、社会的発展段階の違いや政治体制の違い、つまり社会主義体制であることの要因によるところが大きいようにみえる。また、ベトナムでの大学進学率は他の国に比べ相当に低い点も考慮に入れるべきであろう。ベトナムの大学生は社会のエリートであり、自国を前近代の伝統から早く脱却させるべく、科学的思考への方向づけの強い教育を受けていると思われる。したがって、私たちの調査へのベトナムの大学生の回答は、同じ国の他の社会階層の人々と相当に異なっている可能性も残されている。

本研究によって、(日本やフランス、イギリスなどの)ポスト・モダン社会に生き、宗教に何の関心ももっていないようにみえる私たちの時代の若者ですら、死後のあの世に関する明確なイメージを

もっていることが明らかになった。(他界の)素朴表象は彼らの心のなかにいまも生きつづけている。発達心理学はこうした表象の問題を取り上げなければいけない。というのも、こうした素朴表象は日常生活における私たちの生き方そのものに影響を与えるものだからである。

---

1 この小論は、筆者(加藤義信)がヨーロッパ・キャノン財団の援助を得て招聘教授としてパリに滞在したおり、パリ第8大学(サン=ドニ、フランス)のクロード・メスマン先生のセミナーにおいて行なった研究発表(2003年3月19日)に基づいている。

なお、この報告は、やまだようこ氏(京都大学、日本)のアイデアに基づき始められ、国際的レベルでの研究者の協力によって実現した研究の一部である。

この研究の詳細について知りたい方々のために、英語によって書かれた文献を以下に掲げる。

Yamada,Y. (2003). The generative life cycle model: Integration of Japanese folk images and generativity. In E.de St. Aubin, D. P. McAdams, & T. C. Kim. (Eds.), *The generative society: Caring for future generations.* (pp.97-112). Washington, DC: American Psychological Association.

Yamada, Y. (2002). Models of life-span developmental psychology: A construction of the generative life cycle model including the concept of "death." *Kyoto University Research Studies in Education*, 48, 39-62.

Yamada, Y., & Kato, Y. (2001). Images of the soul and the circulatory cosmology of life: Psychological models of folk representations in Japanese and French youths' drawings. *Kyoto University Research Studies in Education,* 47,1-27.

Yamada, Y., & Kato, Y. (in press) Japanese Students' Depictions of the Soul after Death: Toward a psychological model of cultural representations. Formanek,S. & LaFleur,W.(eds.) Practicing the Afterlife: Perspectives from Japan. Verlag der Oesterreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien.

4-5

アジアの視点から見たベトナムの他界イメージ

伊藤哲司

1．はじめに

やまだを中心とするこの共同研究は、当初日本とフランスで収集されたデータの比較を中心に進められてきた。そこに後からイギリスとベトナムのデータが加わり、４か国の国際比較研究へと発展した。ありがちな欧米と日本の比較ということにとどめず、アジアのなかでも、その多様性を探ろうという試みを続けている。洋の東西という言い方でアジアはひとくくりに考えられがちだが、アジアのなかにも当然豊かな文化的多様性が認められる。

筆者は、ベトナムの首都ハノイの路地に広がる生活世界のフィールドワークを出発点とし(伊藤, 2001a ; ITO, 2004)、かのベトナム戦争をベトナム人自身がどのように経験したのか、その語りを通してイーミックな視点からの理解を試みている（伊藤, 2001b ; 2002)。世界史のなかでも重要な位置を占めるベトナム社会を通して、社会心理学の立場から様々な問題を考えていきたいと、現在もベトナムに頻繁に足を運んでいる。

このようなスタンスから、アジアの視点を大事にし、この共同研究のテーマである他界イメージをベトナムで探ったときに、どのようなことが見えてくるのか、本論ではそのことについて社会・文化的背景とともに論じてみたい。

2．ベトナムと日本の文化的共通性

巨大な中国の南の海縁、南シナ海に面して細長く張りついているように見えるのがベトナムである。日本もまた、南北朝鮮やモンゴルなどとともに中国を取り巻く国のひとつであり、圧倒的な存在感を持つ漢民族を中心とした中国文化の影響を、日本もベトナムも受けてきたという歴史がある。それゆえ日本語にしてもベトナム語にしても、その単語の多くを漢語[1]から得ており、ベトナムもまた漢字文化圏のひとつである[2]。また食文化の面でも、米を主食とし、お箸を使って食べるという点が明らかに共通している[3]。とくにベトナムにおけるマジョリティであるキン族は日本人とも顔立ちがよく似ている。

また、日本とベトナムは両者とも儒教文化圏でもある。詳しくは後述するが、大乗仏教を中心としているという宗教的な共通点も認められる。

それらはもちろん、漢民族との共通点でもあるとも言える。しかしながら日本にしてもベトナムにしても、圧倒的な力のある漢民族の文化に飲み込まれないような文化的仕組みを巧みに作ってきたのではないかと、中国をフィールドとして研究を行っている発達心理学者の山本登志哉は話している。人間関係のあり方は日本人とベトナム人との間では微妙な差異が認められ

るが[4]、両者とも中国人のそれと比べれば概して人当たりは柔らかく、あまり角が立ちすぎないような工夫をしているように見える。中国への対抗ということを通して――ベトナムの場合は直接的な支配を中国から長年受けたという点でよりその問題は深刻であったろうが――結果

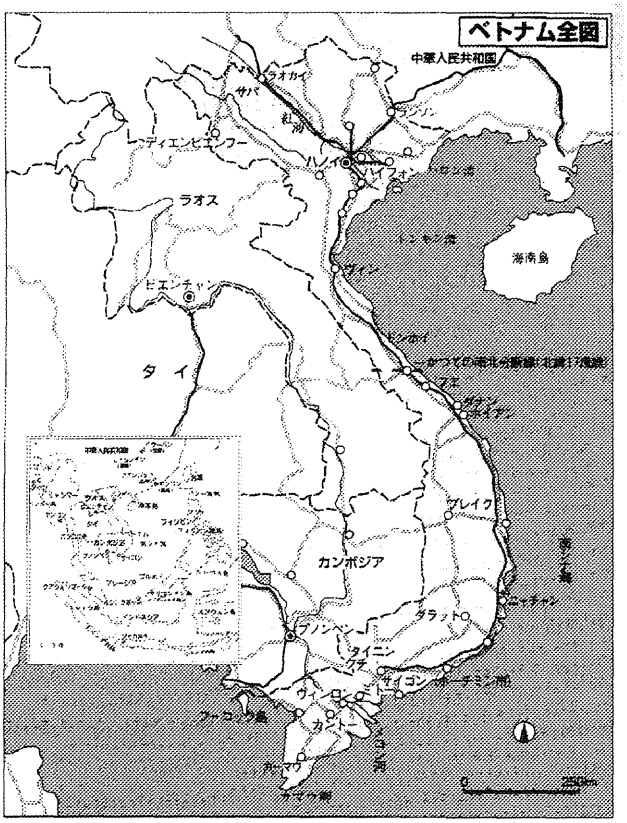


図1　ベトナムの地理的位置づけ（伊藤, 2001a から引用）

として日本人にとって馴染みを感じやすいベトナム文化が生まれたと考えてよいであろう。

しかしながら周知の通り、ベトナムは19世紀から続いたフランスによる植民支配を経験し、その後日本軍の侵攻、フランス軍の再侵攻、さらにはアメリカの干渉を受け、南北に分断されて長い戦争を戦わなければならなかったベトナムでは、それゆえの独特な精神風土が育まれていったという側面も見落とすことはできない。20世紀におけるベトナム戦争[5]は、世界を揺るがした歴史的大事件であり、「象」に例えられるアメリカに、「蟻」に例えられるベトナムが「勝利」したという点でも特筆すべき出来事である。それゆえに、とくに北部のベトナム人は、当時を振り返って、プライド高く自分たちの経験を語ることが少なくない[6]。その精神的支えとなっているのは、現在においても故ホー・チ・ミン主席である。むろん彼に対しても様々な評価があるが、多くのベトナム人になお Bác Hồ（ホーおじさん）と呼ばれて親しまれていることは間違いない。

3．ベトナムの習俗と文化

3-1　国の成り立ち

ベトナムの正式名称はベトナム社会主義共和国（Cộng Hòa Xã Hội Chủ Nghĩa Việt Nam）であり、共産党が一党支配する社会主義国である。1954年以来南北が分断されていたわけだが、1975年4月30日のサイゴン解放（陥落）を経て、1976年に正式に南北が統一され、現在の

国名となった。ベトナム戦争中は国際的な同情を集めたベトナムは、その後のカンボジア侵攻と中越戦争（1979年）で国際的に孤立し、社会主義下における計画経済が必ずしも上手くいかず、「貧しさを分かちあう社会主義」と呼ばれる貧困の時代を過ごすことになった。その間、多くのベトナム人が社会主義政権を嫌って、あるいは経済的困窮さから、決死の思いでボートピープルとなって海を渡り、夥しい数のベトナム難民を生んだ。

しかしながら1986年から始まったドイモイ（đổi mới＝「刷新」の意）という社会主義下での市場経済化がそれなりに功を奏し、1990年代はめざましい経済発展を遂げ、とくに首都ハノイの光景などは一変した。街ではかねてから多かった自転車に加え、日本製のバイクが大挙して走るようになり、ものが溢れんばかりに売られるようになった。一方貧富の差も拡大し、都市部と農村部の格差も広まって、たとえば都市に来た大学生が卒業後も故郷に帰りたがらないなどの問題が生じている。

ベトナムの国土は日本よりやや小さい面積しかないにもかかわらず、54もの民族が共存する多民族国家でもある。海岸部に沿った平地に暮らす人々のほとんどは、マジョリティであるキン族である。彼らが狭義のベトナム人であり、ベトナム語とは実はキン語のことである。一方残りの少数民族のほとんどは山間部に暮らし、それぞれ独特の文化と言語を有している。戦時中は少数民族たちも戦争と無縁ではいられず、しかしながらキン族との関係はおおむね良好で、両者は協力関係にあったと言われる。しかし貨幣経済が山間部にまで浸透するに従って、ベトナム語を話せなければ良い仕事に就けないといった状況も発生しており、そこにはやはりマジョリティーマイノリティという関係の差別化の問題が生じている。

3-2　宗教的背景

ベトナムにおける宗教的背景として顕著であるのが三教（tam giáo）である。三教とは、儒教（Nho giáo）・仏教（Phát giáo）・道教（Đạo giáo）を指す。ベトナムにおいても儒教は、社会の公序良俗を根底から支えている精神的基盤であり、現在でも人々に強い影響力を与えている。中国から入ってきた大乗仏教は、主に伝統的な祖先崇拝を司っており、寺院（chùa）はベトナム人の心の拠り所である。また道教は、日常生活を司る細々とした規範であって、精霊崇拝や英霊崇拝を旨とする神社（đền）をその象徴として有している（冨田, 1995）。

これらに加えて19世紀からはキリスト教（Thiên chúa giáo）が加わり、儒教・仏教・道教・キリスト教などを融合したカオダイ教（Cao đài giáo）と呼ばれる新興の総合宗教[7]なども見られる。そのほかに少数ながらイスラム教（Hồi giáo）や上座部仏教、少数民族のアニミズムなどが認められる。キン族の大半は仏教徒であると自己規定していると言われるが、実際には三教に加えて祖先崇拝（Cúng tổ tiên）・アニミズム・各種の占いなどが融合しており（石井, 1999）、それらが統合されて独特の民間信仰を生んでいる。

各家には必ず祖先を祀る祭壇があり、農村部では祭壇が家のなかの一番中心に、都市部では一番高い階に置かれていることが多い。商売をしているお店や食堂でも、祭壇は客からでも見える位置に置かれていたりする。葬儀や結婚、家屋の新築・改築などの際人々は、占い師や風水師などの指示に従い、彼らは「先生（thầy）」と呼ばれて敬意を表される。巨木に小さな祠が設けられ、そこに線香が常時供えられているのを見かけることも少なくない。一方クリスマスの日に向けてホテルなどに派手なデコレーションが飾られ、その日はキリスト教徒でなくても人々が街に繰り出し、お祭り騒ぎとなる。クリスマスのデコレーションは、そのままテト（旧正月：tết âm lịch）まで飾られることもある。

伝統的な宗教思想や習慣が着実に現代にも受け継がれている一方で、必ずしも多くの人が特定のアイデンティティを確固として持っているとは限らないという点では、日本人と類似しているとも言える。ベトナムの場合はこれに加えて、遅れてやってきた近代と唯物論的な科学信仰が加わっている。それについては後述する。

3-3 陰陽思想

元来は山の日陰と日向を示したという陰陽（âm dương）は、言うまでもなくもともとは古代中国の世界観のひとつであり、すべての現象は太極から生じた陰と陽で成り立っているとされる一元論――二元論ではない――である。たとえば地と天、夜と昼、あの世とこの世といった組み合わせが陰と陽の関係である。西洋の対立概念が概して相容れないものとして捉えられているのに対して、陰陽は、両者が分かちがたく結びついており、また一方が一方を生みだすという循環を繰り返す相補的関係をなすものであり、その関係はいわゆる陰陽図（図２）に象徴的に描かれているとおりである。

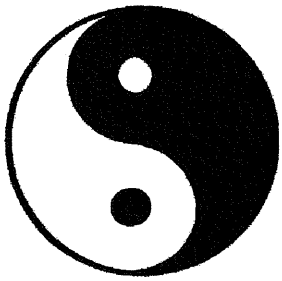


図２　陰陽図

ベトナムでも陰陽思想は根強く人々の間に浸透している。陰陽同一理（âm dương đồng nhất lý）というのは、この世もあの世も同じ道理で物事が進むという意味である。それゆえ死者の魂に対しては、同じ歳まわりの担当官があの世の期間を代表して陰府（あの世）への入戸のために迎えにくると考えられている（末成, 1998）。

ベトナム人学生が描いたイメージ画のいくつかにも、陰陽が明確に現れている。陰陽図がそのまま描かれ、この世とあの世の密接した関係が象徴的に表されているものもあれば、この世にもあの世にもそれぞれ陰陽があるとするイメージ画もある（図３）。ベトナム人学生は、ここで紹介しているベトナムの習俗や伝統文化にもかかわらず、概して科学的な志向が強いのであるが、フランス・イギリスの学生はもとより、日本の学生も描かない陰陽を描くことがあるのは、その思想が深く若い層にも浸透して根付いていることを示唆している。

3-4 死者の弔いと祖先崇拝

ベトナムでも葬儀は人生最大の儀礼とされ、死者があの世で落ち着く場所を得て、「祖先」へと転身する重要な機会となる。また日本などでも見られる高齢者の葬儀を半ば吉事とする考えた方はベトナムでも認められる（末成, 1998）。遺体の埋葬については、現在では火葬が奨励されているものの、土葬がなお一般的であり[8]、とくに農村部では多くの場合、身近な田畑のなかの墓に埋葬される。ベトナム北部では、埋葬された遺体は 2～4 年後に日時や地相を占い洗骨された上で、再び埋葬しなおされることが多い（石井, 1999）。また「先祖の墓を暴いてやる」

という言い方は、最大の侮辱の言い方ともなる（冨田, 1995）。

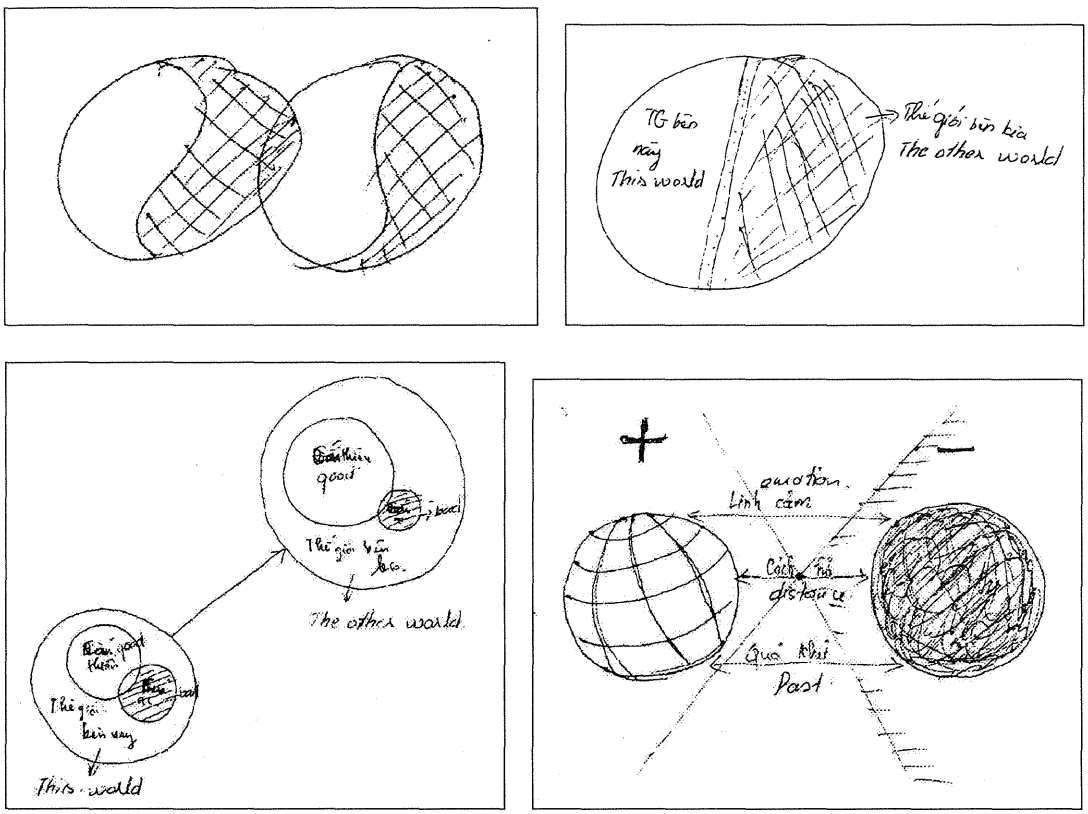


図３　陰陽が明示的に描かれたイメージ画の例
（左上から時計回りに V0203①・V0175①・V0143①・V0171①）

末成（1998）によると弔いに関するベトナムの特徴は、１）死の穢れの観念が相対的に弱いこと、２）祖霊との距離が近いこと、３）死者との関係が個人的な感情に任されていること、などであるという。死後３日間はあの世では食べるものがないため魂は家に戻り、３日目に遺族は、会葬者へのお礼の意味も込めて宴会を催す。あの世での生活がよりいっそう具体的にイメージされ、それへ寄り添うのが子孫の義務であるとされる。先祖は子孫を見守る存在として位置づけられており（Kalman, 1966）、ベトナムではあの世は身近な存在であるともいえる。

結婚式などのときにも、参列者よりも先に挨拶をする相手は先祖である。そのほか、出産や旅行、就職など人生の重要な出来事には、必ず先祖への報告が伴う。先述のとおり各家には先祖をまつる祭壇が家の中心的な位置にあり、常に先祖の存在は意識されている。旧暦の１日と15日には先祖の供養が行われる。線香が焚かれ、紙製の衣服や品物等が燃やされ、それが水（もしくは酒）で消されて灰になることによって、先祖はそれらを受けとることができると考えられている。線香の煙は天へ、水は地へと染みこみ、前者が陽、後者が陰に結びつけられる。

戦争で亡くなった無名戦士の墓はベトナム各地に見られるが、戦死者は基本的に尊敬される英雄であり、直接的に血縁関係があるわけでなくても、人々は自分たちに縁があり守ってくれる存在であるとしてお参りをする。また田畑のなかにお墓の場合、その田畑の持ち主が変わってもその墓はそのままにされ、新たな持ち主が墓を守っていくのが普通である。

3-5　お化け（ma）と悪鬼（quỷ）

ベトナムでは人が亡くなると、心情や思考を司るとされる魂（hồn）と肉体を司るとされる魄（phách）が空にいったん飛び立つと考えられている。葬儀のなかの復魂の儀式で、魂は位牌に、魄は遺体に入る（末成, 1998）。魂と魄という考え方はもちろん中国からのものであり、もともと魄は、横死したりして無縁で祀る人がいない場合、幽鬼として祟りをなすとされる（日本大百科全書, 1998）。なおベトナムでは「魂魄をどこに置いてきてしまったの？（Hồn phách để đâu rồi ?）」とは、たとえばぼーっとしている人への声かけの言葉であり、「魂が傾き魄が落ちる（Hồn xiêu phách lạc）」とは、驚いて恐怖を感じるときに口にされる言葉である。

ベトナムでは基本的に、普通に亡くなった人は、善人であれば天国に行き、悪人であれば地獄に堕ちて裁きを受けると考えられている。しかし不慮の死を遂げた人は、天国や地獄には行かず、この世にとどまるという。そうした死者の霊は、手厚く遇されれば人間と共存可能なお化け（ma）となるが、そうでなければ悪鬼（quỷ）ととなって人間に取りつき悪さを働くとされる（冨田, 1955）。お化けは亡くなった人がなるものであるとされるが、それは人間と共存可能であるとしても恐怖の対象でもある。「悪鬼が釈放してもお化けに捕まる（Quỷ tha ra, ma bắt lấy）」や「闇を行けば常にお化けに出会う（Năng đi đêm có ngày gặp ma）」といった諺は、お化けもまた怖い存在として捉えられていることを示唆している。また悪鬼は、死者がなるものではなく、もともと地獄に住んでいるという捉え方もある。

3-6　遅れてやってきた近代化と科学信仰

以上概観していたように、ベトナムの「あの世」に関連する習俗や文化には、日本のそれとも部分的には共通性のある要素から構成されていることがわかる。しかし、ベトナムにおける近代化の波は、長く続いた戦争の影響が大きく響いたこともあり、日本よりかなり遅れてやってきた。ベトナムを旅行した日本人がしばしば漏らす「〇〇年前の日本と同じ」といった言い方は、半分は当たっている。ただし、半分は当たっておらず、ベトナムでは伝統的な習慣などと近代的なもの（たとえば街中を大挙して走るバイク）が同居している（伊藤, 2001a）。

政治的には社会主義体制を維持し、西洋からの唯物論の影響も認められる。ベトナムの医療には東洋医学と西洋医学が混在しているが、現在ではむしろ後者の方の信頼が厚いようである。たとえば、どのような物を食べると身体が暖まるとか冷えるとかといったことに多くのベトナム人は精通している一方で、体調を崩したときには薬を飲んでこそ治るという考えは現在ではかなり強い。主要な産業である農業は現在でもなお人力や水牛の力に頼る部分が大きいが、機械化をすればもっと社会が発展すると、多くのベトナム人が素朴に信じている。

そのようななかでベトナム社会おけるエリートとして位置づけられる学生たち[9]はなおさら、宗教的あるいは非科学的な考え方には傾倒しないような力学が働いているようである。本研究の調査でイメージ画を書くように求められたベトナム人学生が、「あの世の存在を信じていないので描けない」とだけ答えることがままあるのは、それゆえであると考えられる。

4．ベトナムの映画や小説に描かれた他界イメージ

次に、ベトナムの映画や小説に描かれた他界に関するイメージについて、その例をいくつか見てみたい。

ベトナム戦争時には、多くの兵士が行方不明となり、膨大な数の兵士たちの遺骨がいまだに見つかっていないといわれる。映画「サイゴンからの旅人」（ベトナム語タイトルは「Ai Xuôi Vạn

Lý（誰が万里を流れゆく）」。レ・ホアン監督。1997 年）は、かつて解放闘争をともに闘った戦友の遺骨を探し当て何とかそれを掘り起こし、彼の故郷に届けに行くという物語である。主人公タンは、担ぎ屋の仕事をしている女性ミエンと出会い、旅をともにするのだが、ひょんなことから途中で列車に乗り遅れてしまい、遺骨が入ったリュックはその中身が何かを知らないミエンに託されてしまう。バイクタクシーを雇って追いかけるタン。その後も様々な困難にぶつかり、リュックはさらに思いがけない方へと流れていってしまう。タンが戦友の遺骨をなんとしても彼の故郷に届けることに執念を燃やす様が、この映画では描かれる。死者の遺骨を大切に扱うベトナム人の一側面が窺われる映画である。

元北ベトナム兵士の作家バオ・ニンによる小説「戦争の悲しみ」（ベトナム語の原題は「Nỗi Buồn Chiến Tranh（戦争の悲しみ）」もしくは「Thân Phận Của Tình Yêu（愛情の身の上）」。1991 年）では、筆者自らの過酷な従軍経験を下敷きに、戦争に参加していく主人公キエンと、その若く美しい恋人フオンが、戦争に翻弄され引き裂かれていく悲劇が描き出されている。故郷のハノイに戻って再開したフオンは、すにでキエンが思い描いていた彼女ではなくなってしまっていた。この小説の冒頭で、キエンが身を置くことになったジャングルで、戦死した兵士の魂が漂い泣き叫ぶ様が描写されている。運命を全うできずに無くなった人の魂はこの世にとどまり続けるとされるベトナムの死生観が垣間見えるシーンである[10]。

> ……数え切れないほどのお化けや悪鬼の魂たちがその致命的な敗退をした戦場で生まれていたが、その戦闘の後、誰も第 27 歩兵大隊のことは口にしなかった。その魂たちは解き放たれ、ジャングルのあちらこちらの藪のなかを彷徨い、小川の流れに沿って漂い、あの世へ旅立つことを拒んでいた。
>
> その時からそこは、泣き叫ぶ魂のジャングルと呼ばれた。その名がささやかれるのを聞くだけで、背筋を凍らせるのには十分だった。おそらく泣き叫ぶ魂たちは、失われた大部隊のメンバーとして、ダイヤモンドの形の小さな草地に整列し、自分たちの階級や数を確認し、特別な祭りの日々に寄り集まるのだった。涙にむせぶささやき声は、夜になるとジャングルに深く響きわたり、その遠吠えは風に乗った。おそらくそれらは本当に、亡くなった兵士たちの彷徨う魂の声だったのだろう。

また映画「ニャム」（ベトナム語タイトルは「Thương Nhớ Đồng Quê（故郷の農村を懐かしく思い出す）」。ダン・ニャット・ミン監督。1995 年）は、ベトナム北部の農村に暮らす多感な 17 歳の少年ニャムを主人公とし、ドイモイによって都市部と経済格差が広がった農村の困難さ、しかしその中で素朴に生きる人々を描いたものである。物語は、この村を出てボートピープルとなってアメリカに移住した美しい女性クエンが久しぶりに帰郷することを通じて、ニャムが異性や外の世界に目覚め憧れていく心情を軸として展開している。

物語の後半で、ニャムの妹である幼いミイとその友達ミンは、飲酒運転の大型トラックの下敷きになり、不慮の死を遂げてしまう。嘆き悲しむニャムとクエンら。そのクエンが再び村を離れるときに、回想シーンで亡くなったミイらがボートに乗って川を渡り「あの世」へと旅立っていくシーンが幻想的に描かれる（図４）。その前に出てくる野辺送りのシーンでは、墓地に

到着する前にいったん立ち止まり、先頭にいる老婆たちが舟の櫂を漕ぐような仕草を見せるのだが、これは死者が川を渡っていくことを象徴的に表したものである。



図４　映画「ニャム」で亡くなった子ども２人が「あの世」へ渡っていくシーン
（イラスト：中野聡子）

５．ベトナム人学生が描いたイメージ画の特徴

以上概括してきた社会・文化的背景をもったベトナム人学生が描いた「あの世とこの世」のイメージ画には、先述のとおり陰陽が明確に描かれる例があるなど、日仏英には見られないいくつかの特徴が認められた。そのなかでも顕著であったのは、「あの世」が紙面上で下に描かれるということが比較的多かったということである（図５）。もちろん地獄が下に描かれることは、他国のイメージ画にもあるのだが、地獄でもないあの世が下に描かれることがあったのは英仏だけでなく日本人学生のイメージ画にもほとんどない。ベトナムでは、身近な土中に死者が土葬されているという現実があり、それとの関連を推測させるイメージ画の例もあるが（図６）、土葬とこのこととの関連は必ずしも明確ではない。

そもそも地獄が紙面上の上方に描かれる例があるということ（図７）から、ベトナム人学生にとって、紙面上での垂直軸が実際の垂直軸とが必ずしも一致していないのではないかと考えられる。ベトナムでも地獄は当然地中にあるものとされているが、それが紙面上で下にだけでなく上にも描かれる例が複数ある。また土中にいる死者が紙面上で右側に描かれることもあり（図８）、これもまた垂直軸のずれを推察させる例である。

なにゆえこのようなずれが生じるのかという理由はこれだけのデータでは明らかにはできない。むしろ、現実の上下が紙面上でも上下に対応させられること自体が、一種の絵画技法の結

果と言えるのかもしれない。学校教育等でどのような絵画教育が行われているかということとも関連しそうであるが、その点については未調査であり、今後の検討課題である。

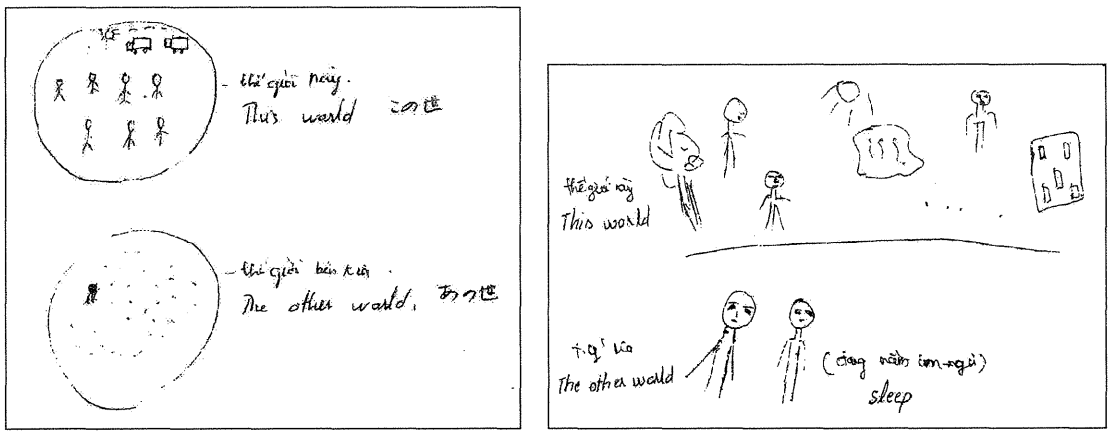


図５　「あの世」が下に描かれた例（V0091①・V0178①）

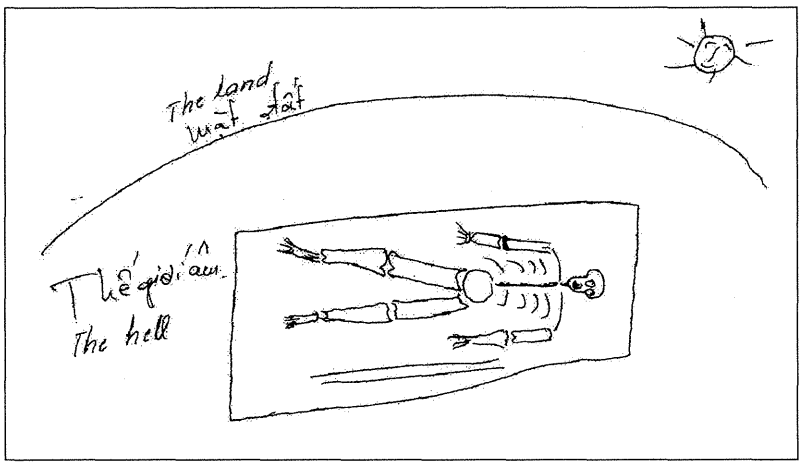


図６　土中の死者が描かれた例（V0179①）

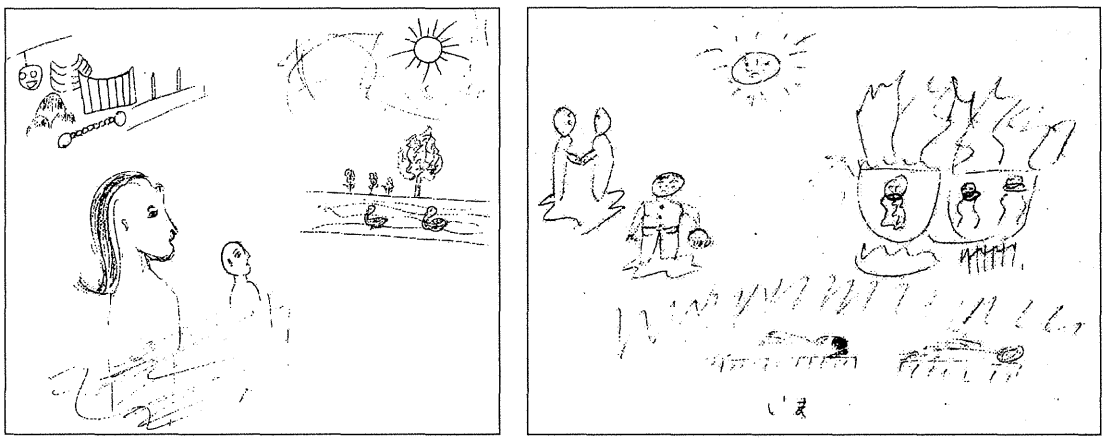


図７　「地獄」が紙面上の上方に描かれた例
（V0048①（左）は左上が、V0021①（右）は右上が「地獄」）

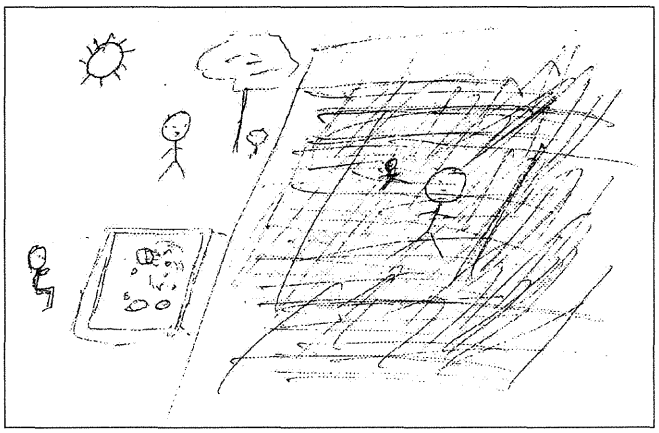


図８　土中の「死者」が右に描かれた例（V0010①）

６．まとめ

この共同研究で対象にしている国のなかでベトナムは唯一の「発展途上国」である。そのベトナムに焦点を当てることで、アジアの多様性の一端が見えてくる。たとえば日本では、旧暦（太陰暦）はほとんど日常生活のなかで意識されないものとなってしまったが、ベトナムなど他のアジア諸国では、旧正月で新年を祝ったりするところが少なくない。むしろ日本が近代化以来「脱亜入欧」を半ば強引に推し進めてきた結果、アジア的なるものをその内に見いだすことが難しくなっていると言うべきかもしれない。

欧米との対比だけでは見えてこなかった「日本文化」の有様が、たとえばこのベトナムを視野に入れることで、また別の角度から見えてくると言えるだろう。本論はいまだ十分なものとは言えないが、このような意味で国際比較研究の視座を広げる役割を果たすことができると考えている。

引用文献

石井米雄監修　桜井由躬雄・桃木至朗編著　1999　ベトナムの事典　角川書店

伊藤哲司　2001a　ハノイの路地のエスノグラフィー　―関わりながら識る異文化の生活世界―　ナカニシヤ出版

伊藤哲司　2001b　「ベトナム戦争の記憶と語り」ノーツ　茨城大学人文学部紀要（人文学科論集），36, 29-50.

伊藤哲司　2002　ベトナム戦争の女性の語り　―３人の女性の物語とベトナム社会―　女性史学，12，34-44.

ITO Tetsuji 2004　Ngo Pho Ha Noi : Nhung Kham Pha（邦題：ハノイの路地　―その探索―）　Hanoi : Nha Xuat Ban Hoi Nha Van（作家会出版社）

Kalman, B. 1996　Vietnam: the culture. The Lands, Peoples, and Cultures Series. New York: Crabtree Publishing Company

日本大百科全書　1998　スーパー・ニッポニカ日本大百科全書＋国語大辞典（Windows 版）　小学館

末成道男　1998　ベトナムの祖先祭祀――潮曲の社会生活　風響社

冨田健治　1995　ベトナム――霊の幸う国　月刊言語（大修館書店），1995 年 10 月号, 32-33.

（脚注）

1 漢越語と呼ばれる。

2 結果としてベトナム語の単語には、日本語と発音および意味が類似したものが散見される。たとえば「nghiên cứu（研究）」「ý kiến（意見）」など。ただし現在のベトナムでは漢字が使われることはなく、ベトナム語の表記は19世紀以降に普及した声調記号などを付加したアルファベット表記（chữ quốc ngữ＝「国語文字」の意）がもっぱら用いられている。

3 隣国のカンボジアやラオスは、お箸文化圏ではないと言われている。

4 筆者がハノイのある路地でフィールドワークを行った観察では、ハノイにおけるベトナムの人々には、日本人が共有している「世間」は認めがたいという結論に至っている（伊藤, 2001）。

5 ベトナムでは通常「ベトナム戦争」という言い方はしない。代わりに「chiến tranh Pháp（フランス戦争）」「chiến tranh Mỹ（アメリカ戦争）」などと呼ばれる。

6 もちろん南ベトナム側にいた人々にとってはベトナム戦争の結果は単純に「勝利」であったと言い難いのは言うまでもない。ましてや戦後ボートピープルとなって国外に命がけで出た人にとっては、当然より複雑な想いを共有している。また国内にいるベトナム人にとっても、現在政権を担当するベトナム共産党に対する不満が、とくに若い人の間でないわけでもない。事実、共産党員になる人の率は若い人ほど下がってきていると言われている。

7 カオダイ教は孫文やビクトル・ユーゴーの思想までを集合し、巨大な「天眼（thiên nhãn）」をご神体としており、約50万人の信者がいるといわれる（冨田, 1995）。

8 筆者の知人のベトナム人によると、火葬はかえって墓を確保する必要が必ずしもなく、貧乏（＝お金をかけられない）というイメージがあるという。

9 1992年時点で、全在学者／就学年齢者数で計算される大学・高等専門学校の在学率は1.6%（石井, 1999）。

10 日本語版の『戦争の悲しみ』（井川一久訳，めるくまーる）は、英語版の『The Sorrow of War』（London: Martin Secker & Warbung Limited）からの訳を一次訳とし、ベトナム語の原版と照合したというのだが、意訳が相当多いと言われる。この部分は、より原版に近いと思われる英語版から筆者が訳出した。なお日本語版として原版から直接訳したという『愛は戦いの彼方へ』（大川均訳，遊タイム出版）もあるが、現在は絶版。

4-6

ISSBD Ottawa, Canada / August 2-6, 2002

Folk Beliefs of This World and the Next World after Death in Japanese, Vietnamese, French and English People

TODA Yuichi (Osaka University of Education, Japan)
YAMADA Yoko (Kyoto University, Japan)
KATO Yoshinobu (Aichi Prefectural University, Japan)
ITO Tetsuji (Ibaraki University, Japan)

Introduction

This report is a part of our multiple comparative studies for examining the nature of folk representations and beliefs of this world and the next world. Peoples living in various cultural backgrounds have various representations in their minds. Here, we focus on naive beliefs of afterlife, of which implicit aspects in western cultures might be clarified with the use of a verbal questionnaire originating in Japanese folk concepts.

Method

Subjects

In this study, two Asian and two European countries were chosen for the purpose of comparison. Three hundreds twenty-seven Japanese (96 males, 231 females), 205 Vietnamese (68 males, 133 females, 4 unknown), 205 French (42 males, 152 females, 11 unknown), and 159 English (52 males, 102 females, 11 unknown) university students were requested to answer to 21 questions concerning the afterlife (Table 1). Each of the questions has 4 options to show the level of their conviction.

Procedure

The questionnaire was administered to the students either collectively in their university classrooms or individually. It took about 10-40 minutes to complete.

Results and discussion

We have applied factor analysis and other statistical methods to our data (Figure 1), and also attempted an original method of analysis which

might reveal the item's internal order structure. Using a technique which is similar to Guttman's scalogram analysis for each pair of items, we derived a table of internal order of the 21 items. Then, by sorting them in terms of the order of the items, we could find unique patterns of order structure consisting of 3 or 4 item-groups for each country (Figure 2). Putting the patterns of four countries for the basic axis in turn, we derived four mosaics to easily compare their mutual differences (Figure 3).

Interestingly, the French-based mosaic and the English-based one were similar to each other, while there was no such similarity between the two Asian countries, Japan and Vietnam. Of course, from the perspective of each country, each mosaic showed the view of the three patterns of the remaining country.

Our results will need further consideration in the light of our new method of analysis.

References

Yamada,Y. & Kato, Y. 1998. What kind of images do Japanese youth have on this world and the next world: The spatial relationships between the two worlds in their drawings. Kyoto: Kyoto University Research Studies in Education, 44, 86-111. (in Japanese)

Yamada,Y. & Kato,Y. 2001. Images of the soul and the circulatory cosmology of life: Psychological models of folk representations in Japanese and French Youths' drawings.
Kyoto: Kyoto University Research Studies in Education, 47, 1-27.

Yamada,Y. & Kato,Y. 2002. Japanese students' depictions of the soul after death. In Formanek,S. & Lafler, W. (Eds.) *Practicing the afterlife: perspectives from Japan.* Pp.417-438. Vienna, Der Österrichischen akademie der wissenschaften.(in press).

Correspondence:

Associate Prof. TODA Yuichi
Faculty of Education, Osaka University of Education,
4-698-1 Asahigaoka, Kashiwara, Osaka ZIP 582-8582, JAPAN
E-mail: toda@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

Prof. Yoko YAMADA
Graduate School of Education, Kyoto University,
Sakyo, Kyoto ZIP 606-8501, JAPAN
E-mail: L50096@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp

4-7

現代フランス文明における死生観[1]

—質問紙調査による日仏比較—

フィリップ・ワロン
Philippe WALLON
(フランス国立健康医学研究所 研究員)
翻訳：加藤義信

I. はじめに

やまだようこ先生の研究にかかわって、死生観の質問紙への回答傾向を西欧の研究者の視点から分析し報告することも重要であると思われる。

宗教観の今日的変化に関心をよせる精神科医として、(フランス人である)私にもこの点でわずかながら貢献できる点があるであろう。実際のところ、フランスやヨーロッパで生活しているわけではない日本の方々も、私がここで述べようとすることの大筋をおそらくご存知であろうが、なかにはその方々の思いも及ばないような点も多々あるに違いない。事実、質問紙への回答をみると、実にさまざまな疑問がフランス側の人間である私にも、思い浮かんでくる。

そこで、他界信念質問紙に対する回答を分析するにあたって、まず、重要であると思われる理論的な問題のいくつかを明らかにしておくことにしよう。

II. あの世はどのように問題とされてきたか

1. フランスの宗教事情

フランスにおける（他界）信念についての検討に入る前に、まず（フランスは日本と）「宗教観」が根本的に違う点にふれておくことが重要である。というのも、フランスには、すくなくともあるひとつのドグマ、つまり、真理はただひとつでなければならないとする、一をとって他を排する傾向があるからである。それに対し東洋では、社会構造の次元では階級間の関係は比較的固定していても、信仰の次元ではそれぞれの信じるところを許容する寛容の精神が生きている。とくに、日本では常に複数の信仰が共存してきた。やまだ先生個人が観察の対象としてきた沖縄諸島にいまの残る信仰儀礼などを見ても、このことは明らかである。フランスでは、ヨーロッパの他の地域と同様、（日本に見られるような）こうした諸々の信仰は、中世から17世紀の終わりにかけての「魔女狩り」の時代に徹底的に破壊されてしまった。西洋人からみると、日本人は宗教を奇妙な仕方が用いていることになる。神道のもとで生まれ、カトリックの儀式によって結婚し（というのも、そのほうが「カッコイイ」から)、仏教徒として死ぬといっ

1　この論文のフランス語原文は、以下の報告書に掲載されている。
『現代日仏青年の他界観の生涯発達心理学的研究』(2001年)　研究代表者 山田洋子：平成10年度~平成12年度科学研究費補助金基盤研究（C）(2)研究成果報告書（課題番号10610110）p.230-246.

たことは、私たち西洋人には考えられない。それも、その一生の間に前の信仰を否認して次の信仰に移ったわけでもないのに、そうしていることが信じられない。フランスでは、一つの信仰から別の信仰に移るということは、必然的に前の信仰を捨てることを意味するからである。人は、カトリックであったり、プロテスタントであったり、ユダヤ教徒であったり、イスラム教徒であったりする。ただ、仏教あるいはヒンズー教に帰依した場合のみが、元の宗教を敢て捨て去らなくともよい。(それらの宗教では) それは背理ではなく、単にどちらをより信じるかの問題であって、この点で東洋には寛容の精神があるといえよう。

しかし、だからといって、フランス人のほうが日本人より信仰の深みという点で明らかに単純だということにならないし、質問紙への回答にもこのことが垣間見える。フランス人の信仰も結構"アラカルト的"である。つまり、あちこちのいろいろな要素の借り物からなっている。それは、つい最近になってそうなったということではない。フランスの歴史それ自体が、さまざまな傾向の混ざり合いの結果である。フランスは、何世紀にもわたってヨーロッパを移動してきた様々な民族が大西洋を前にして"最後に行き着いた地"、「世界の果て」であった。

紀元前6世紀のフランスの地 (当時はゴロワと呼ばれていた) は、互いに戦を繰り返す様々な小部族から成っていて、彼らは多神教であり多くの神を崇拝していた。北欧の宗教やゲルマンの宗教も同じであり、こちらのほうが歴史的にはより遅くまで形を残していた。またアニミズム的傾向 (泉や森等の崇拝) も一部には存在した。紀元前6世紀以後、ギリシャ人がフランスの地中海沿岸の都市に植民し、紀元前52年にはローマのシーザーによってフランスは"平定"されてしまうことになる。これ以後、文字に書かれたフランスの歴史がはじまることになる。ギリシャ人やローマ人は彼らの固有の宗教を持ち込んだが、これらは当時のゴロワ人の宗教とそれほど変わるものでなかった。したがって、キリスト教の布教が始まるまでの 300 年間は、諸宗教間に本当の意味での対立はなく、むしろ相互の浸透や同化が進んだ。しかし、こうした古い宗教は (日本とは異なって) 今やまったく残っていない。わたしたち西洋の宗教史上の悲しむべき1章である「魔女狩り」によって、5万人から50万人の間の死者がでたといわれる。しかし、この1章はもともと秘められた、書かれざる歴史である。というのも、いわゆる「魔女たち」自身が何を行なったかを能弁に語った記録が残っているわけではないからだ。

キリスト教の布教は、フランスでは3世紀以降に本格的にはじまった。修道院が建てられ教区が作られて、宣教師たちが至るところ田舎にまで足を延ばした。ときには、ローマ世界の他の地域同様、殉教者が出ることはあっても、新しい信仰は、今日の歴史家が驚くほどのスピードで普及していった。それも以下のことを考えると理解可能である。つまり、フランスは (ヨーロッパの) 西の端とその海にたどりついた諸民族の「統合」の地で常にあり続けたからである。その後 (7世紀から10世紀にかけてバイキングの) 大侵攻があり、フランスは社会的に大きな変貌を余儀なくされたが、信仰のレベルでの大きな変化にはつながらなかった。後から侵入してきた人々も、前からの住民と同様、すぐキリスト教化されていった。フランス人は本来寛容であって、いつの時代にも異族間結婚によって、数世代の間に外からやって来た人々は (フランスの地に) 同化されていった。とくにノルマン人の場合がそうであって、フランス王は彼らに一地方 (ノルマンディの名が残る) を与えたほどであった。わずかな期間に、猛々しい侵入者たちは平和な農民へと変わっていったのである。互いの信仰の違いによって閉じられた生活圏としての「ゲットー」は、最近では事情が変わりつつあるが、かつては長く続くことはなかったことに注意しよう。

およそ1000年から1850年までの間に、外からやって来る人々の数はしだいに減って、フラ

ンスは自然の国境によって区切られる国としての骨格を鮮明にしていったが、この期間は今度は宗教次元での大変動、とりわけキリスト教宗派内部での大きな争いの時代となった。このうち（フランスで）もっとも重要なのは、宗教改革へとつながる争いである。当時多数派であったカトリックと争ったプロテスタントは、甚大な死者をだした後、他国（ドイツ、さらにはフランドル諸国）に安住の地を求めてフランスを去ることになった。その間はまた、ユダヤ人に対する不寛容と排除が進んだ時期にもあたる。

1850年以降、とりわけ1900年以降は国の工業化にともなって、フランスは多くの移民を受け入れることとなった。自国での失業や貧困を逃れて「約束の地」フランスで仕事を見つけようとしてやって来た労働者たちである。20世紀のはじめにはポーランド人やイタリア人、スペイン人が、続いてポルトガル人が移民として流入し定住したが、宗教的レベルでも信仰のレベルでも、彼らは大きな問題もなく比較的うまくフランスに同化していった。というのも、彼らはもともとキリスト教徒（たいていはカトリック教徒）だったからである。

ところが、ここ数十年ほどの間に問題1962年のアルジェリア（旧フランス領植民地）の独立によって、100万人のフランス人入植者たちがアルジェリアを去って本国に帰ってきた。彼らは大部分がキリスト教徒かユダヤ人であり、エネルギッシュな人々が多く、職業的にも教育の面でも高い水準にあったので、その結果、すみやかにフランスに同化することができた。ところが、ここ30年ほどの間に、問題状況は一変した。産業が「下層」労働力を必要とするようになった“栄光の30年”（フランス経済の発展期）の間に、マグレブ諸国（アルジェリア、チュニジア、モロッコ）や、さらにはブラック・アフリカの国々から大量の移民労働者がやって来ることになった。彼らの多くはもともとイスラム教徒であり、属する社会階層も低く、はじめはフランス語もおぼつかない人々であった。イスラム教は今やフランスでは、ユダヤ教やプロテスタントを凌ぎ、カトリックに次ぐ第二の宗教となっている。活発な宗教活動や強い信仰心によって、イスラム教徒はいまやフランス社会の一大勢力となっているのである。ところが、1990年代はじめ以降の経済不況のもとで、これらの人々は労働市場でまっさきに困難にさらされることになった（フランスの人口全体の失業率は10%であるが、これらの人々の失業率は40%近くに達する）。

要約すると、フランスの古くからある二つの宗教はキリスト教（カトリック）とユダヤ教であり、前者は人口の60%、後者は約60万人、１%を占める。これに加えて、プロテスタントとイスラム教がある。前者の信者は約６０万、人口の１%であり、後者は約100万人の信者を擁する。したがって、現在、第一の宗教はキリスト教、それもローマ・カトリックである。しかし、宗教的実践に参加している者の率は他の国同様低く、自分がカトリックであると答える者の10%でしかない。ローマの支配を受けないカトリックと称する人々は例外的でしかない。プロテスタントはもっと少なく、それもそのうちのどの教会に属するかは（ルター派が多いとはいっても）さまざまである。正教会派のキリスト教徒も（東欧からの移民を除くと）少ない。数の上からいえば、フランスの第二に大きな宗教勢力はイスラム教である。イスラム教徒は比較的貧しい社会階層に属する。これはユダヤ教徒とは対照的で、ユダヤ教徒の場合は、数は少なくとも社会的、知的な領域で大きな影響力を有している。はるかに人数では劣るその他の宗教としては、中国起源の宗教（仏教、タオイズム、儒教など）があり、これらもまたフランスでは社会的に認知されるに至っている。

現在では、自らを「無神論者」と答える者は多いがその程度はさまざまである。彼らも生まれたときから何らかの宗教的環境（多くはカトリック）のもとで育てられてきたわけである。

その数を特定することは困難だが、人口の40%近くあるものと推定される。長らく宗教に代わる選択肢のひとつであった共産主義を信ずる者は、全部合わせても人口の８％ぐらいであろう。

最近では、新興宗教がフランスでも話題になるが、その信者数はわずかでしかない。何を新興宗教とするかの定義は難しいし、常に注意が必要である。というのも、そう名指されることを当該の宗教は嫌うからである。おそらく新興宗教の中で最大の信者数を有するのは「エホバの証人」であろう。もっとも、彼ら自身は、自分たちの教団は純粋に宗教的性格を有し、キリスト教の一派であると主張するのであるが。その他の新興宗教としては、サイエントロジー[2]のような一部知識階層に影響力をもつものもあるが、その信徒数はとるにたらずはっきりしない。

２．フランスにおける他界の観念と信仰体系

宗教が異なっているからといって、それが質問紙への回答に直接反映されるわけではない。フランスでの主な宗教はいわゆる「アブラハム起源」の宗教、つまりキリスト教、ユダヤ教、イスラム教であるが、そのどの宗教でも、他界を信ずることはきわめて重要な教義の一部をなす。確かに、それぞれの宗教間には他界をどのように考えるかについて異なった見解が存在する。しかし、それぞれの信者が、自分の宗教の教義に従って体系的な他界観をもつかどうかは定かでない。むしろ、異なる宗教的グループのそれぞれの他界観よりも、そうした異なる複数の宗教的グループを含んだ社会全体で共有されている「社会的」信念について語るほうが適切であると思われる（ここでは"階級"について語ることは困難である）。

死後（l'après-mort[3]: Vernette はその著『他界』[クセジュ文庫] のなかでこの語を使っているのだが）の観念は、死にたいする恐れや現世よりもよい世界へのあこがれからなることを強調すべきであろう。加えて、フィードバック（rétroaction）の観念、さらには「勲功」の観念、つまり、超越的存在による罰（地獄）あるいは報い（天国）などの観念がこれに加わる。同時に、他界とは、個人的、集団的、社会的にみた場合、答えのない問題であり、宗教的枠組みだけでなくその枠組みを越えた問題といえる。私たちがこのテーマについて予感したり想像したりするのは、「死の向こう（他界）」であるばかりでなく、「物質的現実の向こう」でもある。

さらに、次のような基本的な区別も重要であろう。つまり、（男あるいは女という）個別の人間としての死者（le mort）にかかわる事柄と、あらゆる生ある存在の終わりである、一般的な概念としての死（la mort）にかかわる事柄の区別である。質問紙の多くの回答は前者、つまり目には見えない死後の存続にかかわっているが、回答の中には後者にかかわるものもある。死が問題となるとき、質問に答える回答者は自分がどうなるかを考えるから、おそらく自分自身の死について問われていると感じるのであろう。したがって、後のクロス分析での結果のあるものにとくに驚く必要はなく、この区別を念頭におけば、それらも解釈可能である。

フランスにおいても、死後の転生（魂が他の肉体に宿って蘇ること；réincarnation）の観念は、それが初期キリスト教の公会議（Concile）[4]の決定によって根こそぎにされる以前には存

2　SF 作家ハバードの精神療法理論に基づいて創始された新宗教。70 年代アメリカのオカルトブームの中で広がった。（小学館ロベール仏和大辞典による）

3　フランス語でふつうあの世を表す語は、après-vie（生の後にくる世界）である。après-mort（死後の世界）とは、フランス的論理では、「生」があってその後に「死」があるのであって、さらにその「死」の後にくる世界という意味になってしまい、本来は奇妙だということになる。それを敢て Vernette は使用したということで、本論文の著者ワロン氏はカッコ書きしたと思われる。

4 Concile とは、教義などの問題を討議するためにローマ教皇が全司教を招集して開く会議のことをいう。

在した。こうした観念は、ユダヤ教の中には少数派ではあるが残っている。この観念には、肉体からの何らかの解脱を暗示しているという点で、独特の魅力がある。現世の肉体の中で生きられなかった何かが別の存在の中で生きられるというのであるから。(ただし、前世で生きられたと考えれば別である)

死の苦しみをやわらげる方法にはいろいろある。救済 (Salut) の観念はそのひとつであり、肉体的な再生 (renaissance) の観念も別のひとつである。また、こうした諸観念は互いに両立不可能だというわけではなく、両方のあいまいな折衷や理論的な無理を重ねなくとも、完全に二つを一緒に考えることもできる。

ここ数十年のことだが、フランスでも、死後には悠久の存在 (le Grand Tout) へと自己が溶解するといった東洋的な観念がみられるようになった。この観念は、身体の腐敗・分解と一致していることに留意しよう。実際、この分解は一種の地面への回帰として、もっと広く言えば地球への溶解と重なって、さらには、私たちの惑星も宇宙全体の一部であるから宇宙への溶解と重なってイメージされているわけだ。

いままでのところを要約してみよう。質問への回答には、いわゆる世の中 (の傾向) に対する、もっと広くは、神の観念に対するある「覚醒水準」[5]が読み取れるということだ。調査協力者は、もはや衰弱し消滅してさえしまった自己の信仰に訴えては質問紙に回答できないとき、自分でも意識的に定かにはつかんでいない死や他界の観念にしがみついて回答する。ただ、本研究の調査協力者は青年であり、老いやその恐怖が切実なものでないということも、分析の際に心に留めておく必要があろう。

3. さまざまな他界観

3-1. 「正統派」の宗教的観念

キリスト教的、ユダヤ教的、イスラム教的ヨーロッパでは、伝統的にはどの宗教的信念も似通ったものである。三つの宗教的信念のいずれもがたましいの観念に基礎をおいており、そこでのたましいとは、物質同然の要素、つまり「非物質的物質性」を備えた要素、ジャン・ヴェルネット (『他界』; クセジュ文庫) の言う「微妙な物質性 (matérialité subtile)」を備えた要素とみなされている。それは、主体の意識の全体ではないにしても、意識のある成分の基底と考えられているのである。

死後、「善人」のたましいは天国へ行き、そこで神と一体化して永遠に幸福な生をおくる。「悪人」のたましいは地獄へ行き、そこで悪魔によって際限のない拷問を受けるのである。それ以外の人々は、この両極の間にある煉獄に留まる。この煉獄 (Purgatoire) という語は、「purger (清浄にする、一掃する)」という語に由来し、それは許しを求めて過ちを清算するための試練を意味するのであった。この観念が公式に現れるのは、やっと 13 世紀になってからにすぎない。以来、この観念はたえず論争の的となり、15 世紀には亡くなった人々の苦しみの期間を短縮する「免罪符」の売買となって商業化されるまでに至ったのである。こうした慣行の行き過ぎは、ついには、キリスト教世界をプロテスタントとカトリックに分かつことになる宗教改革の原因となっていく。

5　心理学ではあるレベルの覚醒水準をさす語として用いられるが、ここでは、本人が自覚的な宗教をもたなくとも、その帰属する社会の一般的な他界に関する観念が回答に反映するということを主張するために、筆者はこの表現を用いたものと思われる。

キリスト教神学では、さらにリンボ（Limbes, 古聖所）について語らねばならない。このリンボとはキリスト降誕以前のたましいの待機場所で、キリストはその受難を通してこれらの魂を救ったとされる。これと同じ教義によると、リンボは現在でも、洗礼を受けないで死んだ幼い子どものたましいが留まる場所であると考えられている。

キリスト教の場合、最後の審判が行われるときの死者の復活（Résurrection）について触れておく必要がある。この復活は、クレド（使徒信経）の中では「肉体の復活」と呼ばれている。この事実からもわかるように、ある人々は、そこに、身体の純粋にして簡素な再現を見たのであった（トレド公会議、675年）。この復活の性質については、以来ずっとさまざまな議論が戦わされてきた。この観念が実にさまざまな問題を投げかけたことは、あなた方もお分かりになるであろう。

中世以来の伝統を受け継ぐキリスト教の諸観念は、神学者たちによって現在も熱心に議論されているが、細部の問題になると、真の合意からほど遠いのが現状である。

3-2. ヨーロッパにおける伝統的観念

これらキリスト教の教義は、実は、私が「伝統的」と呼びたい別の観念によって常に浸透を受けてきた。「伝統的」と呼ぶのは、それがどんな明示的な教義の対象ともならないからである。それは私が「交霊（spirites）」信仰と呼ぶものである。おそらく、その始まりから人類は自分の回りに霊（esprits）を、とくに死者の霊を感じてきたのであろう。

こうした信仰は、西洋の諸宗教によって、はっきりと教義化されることなく、受容されてきたように思われる。西洋の諸宗教は、こうしたテーマに対してずっと懐疑的であり、全体として、死者の霊と交信しようとする技術を禁じてきた。さらに言えば、西洋の諸宗教は、あらゆる占いに反対してきた。これは、とくにフランスでは、民法典によってはっきりと禁止されてさえいる。

ただ、だからといって問題そのものがたえず論じられなかったということではないし、著名な神学者がこのテーマについて何も書物を書かなかったというわけではない（フランソワ・ブリュンヌ神父の『死者は私たちに語りかける』という本はフランスでは 15 万の発行部数を数えた）。

キリスト教の教会によって広く認められている霊に対する信仰の唯一のものは、おそらく人間の保護者である天使についての信仰、とくに、生者の一人一人に寄り添う「守護天使」についての信仰である。イスラムでは、さらにジン[6]という存在がある。この起源はさまざまだが、ある人々にとってはそれは死者の霊として現れる。

3-3. さまざまなセクトおよび宗教的グループ

最後に、制度的枠組みからはみ出るさまざまな宗教的グループについて述べておこう。本来グループ間の傾向をごっちゃにして論ずることはできないが、それらのグループはどれも既存の体制から「はみ出した」いろいろな傾向を代表しているといえるであろう。こうした諸傾向は分析対象として興味深い。というのも、まずこうした傾向の多くは、とくに転生（生まれ変わり；réincarnation）という東洋の観念の影響を強く受けた諸傾向に立脚しているからである。その場合の転生とは、ふつう人間の形での転生を意味する。あとで見るように、動物への転生が説かれるのは例外的な場合である。

6　原語は djinn。アラーが火から作った鬼神。性別、善悪の別があり、姿を変えたりして人間に超自然の力を振るう（小学館ロベール仏和大辞典より）。

こうした宗教グループの中には、霊が人間の中に宿る（s'incorporer）可能性を信じる、別のより西洋的な傾向を帯びたものもある。ここでは、死者の霊、あるいは形のない霊（esprit incorporel; 以前に転生していない霊）が宿ることが問題となる。これは、いわゆる「カリスマ的な」諸グループの場合で、つまり、こうしたグループでは、病気の治癒、予言、クセノグロシー（xénoglossie 異言現象；トランス状態などに陥った人が習ったことのない言語を話す現象）などの「カリスマ（特殊な精神的能力；聖霊によって与えられた上記のような能力）」が呼び起こされるとされる。こうした能力が現実のものであるか、単にそう主張されるだけのものかは、実際のところはわからない。こうしたグループは、ときとして伝統的な教会の中にも入り込もうとするが、グループの人々が自分たちは教会に所属していると主張したり、その所属が認められているかのような主張をするとしても、それは真に受容されているということではなく、黙認されているということにすぎない。さらに隠れていてなかなか表に出てこないセクトもある。

3-4. 他界の経験、シャーマンと臨死体験

他界について、私たちは語ったり、何らかの知識をもっているが、そもそも他界を経験することはできるのだろうか。それは他界についてどのような一般的観念をもつかにもよる。この問題は何世紀にもわたって、おそらく何千年もの間、思考と言語が生まれたそもそもの始まりから、広く論じられてきた問題である。

よく知られているように、未開社会ではシャーマン、つまり「医□者」たるとされる人間が死者や精霊の住むという「あの世」と継続的に接触して病気を治したりする儀礼が行われている。シャーマンはそのとき何を見るのだろうか。人間の形をした存在も見るとされる場合もあるが、動物や、この世のどんなものとも似ていない、言葉で表現することも思い浮かべることもできないものが現れるとも言われている。では、どのようにしてシャーマンにはそれが可能となるのだろうか。自発的に引き起こした「発作」によって、あるいは薬物や幻覚剤の助けを借りて起こった発作によって、トランス状態に陥ることによってである。精神科医であれば夢の領域と比較したくなる領域がここにはある。

シャーマン的方法は、古代の専売特許ではない。既存の宗教の影響力が減退したからだろうか、現代では、多くの人々が、この世では答えの得られない問題への解答を探して「あの世」へと赴く「シャーマニックな旅」を実践している。こうした経験の結果によって、ある他界観がもっともリアリティのあるものとして、たえず肉付けされて、ますます広まっていくということがある。

注目すべきは、現代では（少なくとも西欧において）ますます、それとは違った形で、特別な世界を見たと主張する人々が増えている。いわゆる臨死体験（英語では NDE [Near death experience]）の報告であり、これはここで論じている他界と大いに関係がある。医者の、とりわけ精神科医の観点からすれば、この種の体験は血流が極端に少なくなって脳に酸欠状態が生まれた結果として説明できる。こうした状態では意識が消滅し何も語ることができなくなり、脳の機能が全体に著しく低下ないし停止すると考えられているが、実際のところはそうではなく、こうした特別な体験を当の本人が記述できるのである。レイモンド・ムーディ博士はその著『死後の生』でこうした意識体験の見事な一覧表を整理して作っている。この本は多くの言語に翻訳され、世界中で2千万冊も売れたという。確かに、こうした体験を異なる条件から生じた別の多くの体験と付き合わせてみることは可能であり、しかも、その結果は現象的にとてもよく似ているのである。

実のところ、こうした体験は象徴的な次元で現れ、多くの場合、重い意味をおびた情景からなっている。そしてその情景たるや、かつて夢で（このことはあまり強調されてこなかったが、つまるところ悪夢にうなされて）見たことのあるものであることが多い。さらに、その体験は過去に見聞きした内容に酷似していたりするらしい。また、体験の報告者はあるタイプの性格傾向を有する人であるともいわれる。いずれにしろ、この種の体験は、覚醒状態にある脳の働きによって通常は覆い隠されている大脳の構造の働きの結果であって、そうした覚醒状態下での制止がとれたところで現れるのである。このことから、当該の人の体験がただひとつの構造（それをふつう「意識」といっているのだが）に由来するのではなく、複数の構造がかかわっていて順次、その結果が生まれるのだと想像できる。これは、広く認められている事実、つまり、有機体においては高次の構造が下位の構造を制止していて、高次の構造が機能しなくなるやいなや、下位の構造の働きが解き放たれるという事実とよく整合している。

臨死体験の論理は夢の論理と似ている。とても混乱したイメージが次々と現れることもあれば、夢と同様、妙に生々しい現実感のあるすばらしい光景が展開することもある。だからといって、どの臨死体験も同じではなく、一貫性もつながりもない夢想的な内容である場合もあれば、死者やキリストのありふれたイメージからなる場合もある。

臨死体験が他界と関係のないイメージであることもあり、その場合は、自分の身体を外から眺めているといったイメージとなって現れる。この場合は、その身体に何が起こったかを詳しく記述することができ、それが後から確かめられることになる。もしこうした情景を語る人がいると、そのことによって、臨死体験全体は現実に見たことなのだ、私たちが意識ある状態で見るのと同じ真実の観察なのだと、人々は信じやすくなるだろう。

シャーマニズムにみられる経験と臨死体験の２つには、それらと同等の他の経験（薬物による経験、よらない経験）も含めて、明らかな違い以上に顕著な類似性がある。それは、どちらも文化によって伝達されたイメージをそこで人は体験するということである。つまり、他界のイメージはある程度まで、この世と等価な要素から作られていて、（見かけは何であれ）個々の存在、すなわち、欲し運動し働きかけ思考する存在からなっているのである。本研究の質問紙の調査協力者となった人たちのほとんどは、臨死体験に類する経験をしたことがないのは明らかであるが、文化的に共有された他界や死のイメージは、その回答の中にもはっきりと見られるであろう。

Ⅲ．方法とその制約条件

調査の初版は、1994年にやまだようこ氏によってまず日本語で作られ、それから英語、フランス語版が作られた。フランスで実施対象となったのは、おおむねパリ第８大学（サンドニ校）の心理学専攻の学生である。回答は匿名で行われ、回答法は「まったく賛成」「どちらかというと賛成」「どちらかというと反対」「まったく反対」の４件法が用いられた。筆者のここでの報告では、回答傾向の解釈を容易とするため、肯定的な２つの回答をまとめて「賛成」とし、否定的な２つの回答をまとめて「反対」とする整理を行った。

以下に記す結果は、300人の日本の大学生と100人のフランスの大学生を対象としたもので

ある[7]。

まず結果の詳細な分析の前に、この種の調査の有する制約について触れておくほうがよいであろう。

1．質問紙のみを分析対象とする場合の制約

質問紙を通してこの種のテーマを研究しようとしたときには、様々な問題が生ずる。質問紙では、まず、調査協力者の意識可能な範囲の事柄しか明らかにできない。あまり意識しない、あるいは無意識の範囲の事柄は明らかにできない。さらに、回答はあらかじめ何段階かに分けて与えられているから（本研究では4件法）、あの世に関係するような微妙なニュアンスに満ちた個人の回答を正確に反映することができない。また、集団的に実施する調査で心配な点は、個人的要因の多くが隠されてしまい、調査協力者は多くの場合、他人と同じように回答しようとする同調的態度をとりやすいことである。

日本とフランスのように大きく異なっている二つの国で質問紙を実施しようとする場合、もうひとつの方法上の制約として考慮すべきは、概念や意味にかかわる制約である。二つの言語で質問紙を作成すると、一方の言語と他方の言語の間で、質問内容に正確な照合が成り立たつことは難しい。事実、日本語は、漢字をそこから借用した中国語と同様、イメージに支えられた言語であるようにみえる。表意文字は、何世紀にもわたって変形・様式化されてきたとはいえ、もともとは自然の要素（動物、植物）や日常の事物（家など）の形を写して作られている。漢字の諸要素の配置自体も、多くの場合、そうした要素間の空間的関係（上、中、下など）を写す形になっている。そこでは「概念」はイメージ群として解釈されるであろう。それに対し、（他の西洋語と同様）フランス語では、語は意味のない文字によって組み立てられたものである。フランスでは、抽象的な推論が重視される。それがときには空虚なまでの知的推論の洗練に至ることすらある。こうしたことは、日本ではほとんど起こりえないであろう。日本では、反省的思考は直感に、すなわち感じられたことに、身体に、支えられて行なわれるであろうから。

第3の問題は、それぞれの文化の心性に関係する。西洋で神（Dieu）の概念について問えば、人はこの世界の外に立つ、この世界を創造した非物質的人格としての表象を思い浮かべるであろう。ところが、同じ問いを日本人に問えば、彼にはなじみのない西洋の概念を持ち出すことになるか、あるいは自分自身のものの見方に依拠した答え（神道のかみ[les kami]）、仏教の「非人格的神[Dieu impersonnel]」など）をするだろう。さらに、この問いを投げかけた人の善意を裏切ったり、がっかりさせないようにとの心遣いから、フランスでは両立するはずもない二つの態度をごっちゃにして答えるということまで起こりうるだろう。

確かにこれまでに指摘したような問題はあるが、それでも質問紙への回答には意味あるいくつかの事実が、つまり、日仏両国を隔てる距離の大きさにも関わらず、そこには共通の思考が存在するという事実が、はっきりと読み取れる。20世紀以降は相互の影響があったとはいっても、この共通性をそれだけでは説明できない。これは、ユングが「元型」と呼んだような、地

7　論文の分析は、日仏の全体の調査が完了する以前の段階で行なわれた中間集計の結果を対象としている。この段階での結果と、本報告の6-8に掲載した最終結果との間には、回答分布の比率において基本的に大きな差は現れなかった。したがって、論文の以下で展開される考察は最終結果を対象とした場合も同様に妥当であると考えられるので、当日本語訳中の比率の数字は訳者が最終結果の数字に書き改めることにした。

球上全体に広がるある種の観念の普遍性を物語っているともいえる。以下に質問紙の回答結果を見ることになるが、ここでの傾向は別の（イメージ画を用いた）方法で見出された傾向とよく一致している。

2．回答の処理

大学生は、「まったく賛成」「どちらかとういうと賛成」「どちらかというと反対」「まったく反対」の4件法で質問紙に回答することが可能であった。したがって、当初この4件法で得られた回答をそのままの形で利用することも考えた。しかし、グラフを検討した結果、それではあまりに詳細な分析に入り込むことになり、読者には少々複雑すぎることになってしまうと思われる。一方で、科学的厳密さを求める読者がほとんどなら私たちと同じように考えて、分析の詳細を知りたいと思うであろう。

結局、回答の解釈を容易にするため、次のような処理を行なうことにした。「まったく賛成」「どちらかとういうと賛成」を「賛成」としてまとめて、結果を二分法的に表現することにした。その上で、「まったく賛成」を「賛成」で除した比率を「確信的賛成比率」とした。この用語は質問項目への好意的な回答全体の中でどれだけの人が強い気持ちで賛成したかの比率を表している。「反対」の場合も同様に、「どちらかというと反対」「まったく反対」を「反対」としてまとめ、「まったく反対」を「反対」で除した比率を「確信的反対比率」とした。

Ⅲ．結果

以下に各項目別に回答傾向を分析する。その前にまず、解釈の基準を示しておこう。一般的に、私たちは「まったく賛成」（「まったく反対」も同様だが）を全人格的な参与のある、「腹の底からの」明晰な意識をともなう賛成の反映とみなす。それに対し、「どちらかというと賛成」（「どちらかというと反対」も同様だが）を、まずもって表面的で、知的で、社会的な次元の観念に帰しうる賛成としてとらえる。二つの国で同様の回答があれば、その傾向は「普遍的」で、文化から独立の信念を表していることになる。ここでの解釈は未だ極めて主観的な水準にあり、したがって条件付で受け止めてほしい。こうした理由から、既に認められている別の要素、調査、概念などを今後は参考にして、私たちの立場をさらに論証していきたいと考えている。

質問1：死者の供養をしないとたたりがあると思う。

この質問は、（フランス人にとっては）宗教的教義に関係する質問というよりは、有史以前に遡る、アルカイックな観念を反映した質問である。したがって、（フランス人にとっては）質問の内容はあいまいとなっている。たたりは死者の復讐というわけではなく、もっと一般的な、社会道徳的次元でとらえられている。ということは、この問いは霊（の存在）にたいする信仰、もっと言えば、生者の世界に対する霊の力の作用への信仰がどれだけ強いかを調べる項目であるといえる。回答傾向は、予想されたように 2 か国できわめて対象的となった。この問いに、日本の調査協力者ははっきり肯定的に答えている（「賛成」全体 65.2%）。ただし、確信的賛成率は 14.7%でそれほど高くはない。「反対」34.8%、確信的反対率は 36.5%で、これは 21 項目全体の中でも平均に近い数字である。したがって、この結果は、深い信念というよりは、広く日常的に認められた観念を表しているといえよう。この結果は、私たちの解釈では、日本にお

いて行なわれているさまざまな儀式がそれを示しているように、日本人は死者のたましいと接して生きているからであると思われる。日本固有の宗教である神道は、有史以前からの信仰に広く立脚しており、いまも人々の心の中に生き生きと自然に、そのままの形で息づいている。その結果、霊や自然の力への崇拝だけでなく、古くは死者と生者が同じ世界に存在していたとする観念がいまも広く行き渡っているのである。

フランスでは、89.6%が「反対」と答え（これは全体の項目の中でもっとも高い反対率である)、そのうち「確信的反対率」は83.3%にものぼった。これで十分でなければ、「賛成」のほうについても見てみると、わずか10.4%であり、確信的賛成率も43.3%であった。つまり、この観念は広く拒否の対象となっていることがわかる。フランス人は死者のことをその埋葬のときや命日のときに考えるが、それ以外のときには、ただ死者に対する親しみの情を想起したり、個人的なレベルでの死者の（よき、あるいは悪しき）思い出を蘇らせたりするだけで、そのときに死者の存在の「現実性」が問題になるわけではない。たたりといった観念は、フランスの文化の中にはないのである。それでも、中世のフランスには死者の存在と結びつけて危険を考える観念が存在した（クロード・ルクトゥー教授の「幽霊[fantômes]と亡霊[revenant]」参照)。したがって、当時、お祈りは単なる崇拝の行為ではなくて、保護を求める行為だったのである。

質問２：死後の世界はあると思う

この問いは、人類はじまって以来のもっとも古い信仰に関係する。というのも、そうした信仰は、おそらく人類が死者の最初の埋葬を行う以前にあったと思われるからである。最初の埋葬は、人類が「猿」から分かれて最初の人間らしさを獲得した時期（数万年前）まで遡ることができるであろう。ただ、初期のこうした信仰もさることながら、後のどんな宗教も必ず、いろいろな仕方でこの問いに対する答えを用意してきた。回答傾向にはかなり微妙な点がある。「賛成」は日本（66.5%）のほうがフランス（51.3%）を上回っていた。ただ、これは統計的にはぎりぎり有意差のでる数字でしかない。「まったく賛成」の率でみると、フランスは34.4%であり、日本の22.8%より多くなっている。確信的賛成率もフランスは67.1%であり、日本の34.3%を上回る。この結果から、日本では気軽に他界の存在を考えているのに対し、フランスでは少数派ながらこの観念を強い信仰の対象とする人々がいると結論することはできない。むしろ反対に、この観念がどちらの国でも比較的十分な信念の対象となっているという点が重要であろう。「反対」をみてみると、両国とも並外れて熱心にこの観念に反対しているようにみえない（「反対」：日本33.5%、フランス48.7%。確信的反対率：日本39.4%。フランス63.2%)。

全体に、死後の生存についての素朴信念はヨーロッパ文化に今も根をおろしているといえる。確かに確信的にその存在を主張する人が多いわけではないが、反対する場合も弱い反対でしかない。日本の場合は、3 分の２の人がこの観念に好意的であるとしても、その傾向は比較的節度あるものである。要約すると、他界についてのこの基本的質問は、非常に微妙な態度を反映していると思われる。確かに、その信念は宗教的信仰に由来することがあるとしても、もっと広い文化的背景の中にその源泉を求めたほうが妥当なのであろう。その信念は、公の（宗教的）教義から生まれた人工的なものであるよりも、人々の心の奥深くに根ざしたものであるように思われる。

質問３：人は死んでも繰り返し生まれ変わるものだ。

転生（réincarnation）の観念は東洋においても西洋においても、広く見られる。キリスト教

の教会は現在でこそこの観念に反対しているが、常にそうであったわけではない。というのも、この教義が正式に禁止されたのは、紀元3世紀のキリスト教公会議でのことであったからである。しかしながら、最近、ヨーロッパで行なわれた大部分の調査が確認しているように、この信念は宗教の影響力の喪失に伴って、再び失地回復しつつある。東洋では、転生の観念は否定されることなく今日に至っている。この観念は、たとえばバラモン教の基本信仰の一部である。したがって、回答結果は驚くにあたらない。日本でかなり高い肯定的な回答比率が得られたのに対し（「賛成」全体61.7%、うち確信的賛成率32.6%）、フランスでは、その数字ははるかに低いものであった（「賛成」全体 36.5%、うち確信的賛成率 48.5%）。それでも、「まったく賛成」が比較的近い数字である点は、注目してよい(日本 20.1%、フランス 17.7%)。つまりこれは、この信念の普遍性を物語っている。それに対し、「まったく反対」という回答をみると、日本とフランスではっきり異なる意味があることがわかる（「まったく反対」：日本 14.2%、フランス 43.8%。確信的反対率：日本 37.1%、フランス 69.0%）。確信的反対率に関しては、日仏とも21項目中、平均的なレベルであって、とくに強いというわけではない。日本では、「反対」はほとんど形式的なものであるように思われるが、それも驚くにあたらない。というのも、転生の観念はかなり日常的な通念に属しているからである。それに対し、フランスでは 1000 年以上も前にあった古い観念でしかなく、生は 1 回限りという考え方が行き渡っていることを、この結果は反映しているものと思われる。

質問４：仏様や神様を信心して願いごとをすれば、いつかその願いごとがかなえられる。

この質問は、単なる一通念でなく、あらゆる宗教の基礎に位置づくもっとも基本的な信念にかかわる。祈りに応えてくれない神など何になろう。したがって、この質問は単なる知的な信念というよりは、神に対する実際の信仰、神的存在を前にしての深い心的態度を測る項目といえる。したがって、二つの国で比較的近い結果が期待された。しかし、ここでもまた、実際には微妙な結果となった。日本では「賛成」43.2%（確信的賛成率 15.0%）、フランスでは 22.1%（確信的賛成率 63.2%）であった。このことは、日本のほうがフランスより深いところでより宗教的であるといえるのだろうか。ただ、日本の確信度が相当に低い点に注目すべきであろう。このことは、神との直接的対話は宗教的確信の土台になっていないということを示しているのであろう。しかしながら、日本ではこの観念に強い反対もみられず、確信的反対率は 41.4%にとどまった(フランスは 63.2%)。全体に、回答傾向はある種の無関心を示しているともいえる。

しかし、私たちの調査協力者は未だ人生経験の少ない学生であることも考慮に入れなければならない。若い学生には、死に直面するような厳しい状況を経験したり、その経験を通して信仰への道が開かれるといったことは期待できない。少なくとも西洋では相当数の人たちが、とても苦しい場面（たとえば、死の危険にさらされた誘拐事件など）や神秘的体験などの特別の場面に遭遇して強い信仰を獲得したと言っていることを思い出してみよう。

質問５：身近な人は亡くなった後、自分を守ってくれる。

この質問は、質問１と同様、宗教的教義に関係するというよりは、先史以来の祖先崇拝に関係する項目である。ただ、キリスト教は、他の同じように古くからある信仰に対するのとは異なって、この質問にかかわる観念を禁止しているわけではない。したがって、この質問のほうがおそらく、他の質問よりも大学生の心の傾向をより明らかにできるであろう。ここでは、「賛

成」は日本のほうがフランスよりずっと多いという結果となった（日本 70.1%、フランス 42.3%）。このことは、日本では神道や伝統的な宗教が大部分、祖先崇拝からなっていることを考えると、驚くにあたらない。それに対し、フランスでは、この質問への回答は、賛否相半ばしていて、態度はずっと曖昧なものである。しかし、「まったく賛成」の回答をみてみると、幾分か微妙な部分が見えてくる。この回答に関しては、両国ともほぼ同じであった（日本 20.4%、フランス 18.0%）。これは、普遍的な観念であるということなのであろうか。古い観念の持続ということなのだろうか。この比率は無視できない数字であることに留意しよう。全体のほぼ5分の1がこれに該当する人たちなのだから。それに対し、「まったく反対」という回答は、両国で対照的な結果となった（日本 10.5%、フランス 38.1%）。おそらく、この数字には、ヨーロッパの精神の世俗化ということが反映しているのかもしれない。しかし、確信的反対率でいえば、日本 35.1%、フランス 66.0%で、どちらの国も全 21 項目中、中程度の確信率であったことにも注意を向けておこう。

この質問と質問1のクロスをとってみると、41%の学生がどちらにも「反対」と応えていた。彼らは、死者からの祟りも救済も信じないわけであるから、死者とこの世の間にかかわりがないと考えているわけである。たぶん、20 世紀のはじめにはこのような回答比率はありえなかったであろう。

質問6：死とは自分が永久になくなってしまうことである。

この質問は、死を究極的な消滅として扱っている。ここでは、特別な哲学的な意味を避けるために「自分（moi）」という語をあえて使用した。フランスのキリスト教関係の雑誌（Panorama, l'espérance chrétienne, no.24, mars 1997.）のアンケートでも「死は、生命全体の停止であり、肉体と魂は消失する」という類似の質問が行われたが、それに対して 42%が賛成と答えていた。後で見るように、本報告の結果もこれと類似したものであった。しかし、驚くべきことは、別の点にある。それは、この質問だけが、日仏両国で同じ回答傾向を示したことである（「賛成」日本 41.2%、フランス 43.9%、「反対」日本 58.8%、フランス 56.1%）。「賛成」の「反対」に対する割合は3分の2に近いが、これは少なくともフランスの場合は特に意外な結果ではない。しかし、他と同様、確信的賛成率はフランスのほうが高く（日本 47.8%、フランス 68.6%）、この数字は他の項目の数字と比較したとき、全体に高いほうに位置づく。

質問2とのクロスととってみると、フランスでは他界を信じないもの 48.7%のうち、60%は死は自分の全面的消滅であると考えているが、11%は消滅を認めないという立場をとった。この立場を文字通り受け取れば、死後の存続という観念は必ずしも他界の観念を前提としないことを意味する。したがって、物質性を暗示する「世界」という観念に結びつかない、ある種の「別次元」があることになるだろう。ここにもまた、慣習的イメージと死後についての直観が対応するとは思われない領域が開けている。

質問7：天国あるいは極楽浄土はあると思う。

この質問には哲学的意味が含まれているが、一方また、人が死後のたましいの存続をどのように「望んでいる」かもこの質問によって明らかになる。回答はかなり微妙である。「賛成」を分析してみると、日本のほうが多いことがわかるが（日本 51.7%、フランス 35.0%）、「まったく賛成」の割合ではフランスのほうが上回った（「まったく賛成」：日本 12.1%、フランス 19.8%。確信的賛成率：日本 23.4%。フランス 56.6%）。「まったく反対」の割合でもフランスのほうが

高かった（「まったく反対」：日本 19.5%、フランス 44.2%。確信的反対率：日本 40.4%。フランス 68.0%）。この結果から、天国の観念について、特にフランスでははっきり対照的に分れる回答傾向が現れるが、日本では強い賛成も強い反対も少なく、したがって天国の観念があまり重要でないことを示しているのかもしれない。たぶん、質問の仕方があまりに中立的なものであったため、このような結果となったものと思われる。そこで、次の質問によってもう少し事柄がはっきりする。

質問８：死ぬと、先に死んだ人たちに再会できる。

前の質問に比べ、この質問のほうがより実際的であるが、同様な内容を聞いていると考えてよい。前の質問では明示的でなかった、他界での再会の可能性がこの質問では問われている。したがって、このように表現してみても、結果はほとんど質問７と同じであったのは驚くにあたらない（「賛成」日本 51.9%、フランス 36.4%）。確信的賛成率、確信的反対率もほぼ前の質問と同様であった。

質問９：水子供養はするべきである。

この質問は、質問１と似てはいるが、同じ内容ではない。赤ん坊は頼りない存在であり、保護の必要を含意する。さらに言えば、北アフリカのマグレブ諸国（フランスの調査協力者の何人かはそこの出身であったが）では、赤ん坊はある期間、精霊の王国に属する存在なのである。もししかるべき世話を赤ん坊に対してしなければ、それはこうした精霊と対立する危険をおかすことになる。しかしながら、質問１とは反対にこの質問の背後に祟りを予感しないで赤ん坊の救済だけを思い浮かべた回答者が皆、こうした特殊な観念を共有していたということではないのだが。したがって、「賛成」の割合が全体に高くなるのは不思議ではない。実際、日本では 78.6%が「賛成」でありこれは 21 項目中最も高かった。また、確信的賛成率も 45.3%と高かった。この質問では全体に回答が賛成方向に偏っているといえる。フランスでは、質問１に対しては圧倒的に反対が多かったのに、この質問に対してはそれほどには反対が多いということにはならなかった（「反対」フランス 64.8%、確信的反対率 65.9%）。両者のクロスをとると、この質問に必ずしも賛成しなかった調査協力者のほとんどが質問１ではっきり反対にまわっていることがわかった。

質問 10：死んだ後も、この世に帰ることができる。

この質問は、わざとあいまいな内容となっている。つまり、それが肉体の帰還を伴う再生であってもいいし、霊のままの帰還であってもいいし、あるいはキリスト教で主張されているように、最後の審判の後の死者の復活であってもよいわけである。そのうちのどれかを正確に特定するような語は質問に含まれておらず、回答者に解釈は委ねられている。したがって、かなり高い反対の比率があったことは驚くにあたらない。日本では、「まったく賛成」と答えた学生はわずか 9.3%であり、フランスでも 17.1%であった。全般的には、日本人の場合、意見は半々に分かれる傾向にあり（「賛成」48%）、その結果、確信的賛成率 19.1%と全項目中最低となった。フランス人の場合、よりはっきりと「反対」の傾向を示した（67.9%、確信的反対率 76.7%—これは全項目中高いほうであった）。地上への帰還という観念は西洋文化になじまない観念であるといえる。フランスの大学生について、質問３とのクロスをとってみると、予想したように、質問 10 に反対であった学生のほとんどが質問３にも反対する傾向があり、賛成の場合も

同様のことが言えた。

質問 11：あの世では苦しみや痛みから救われる。

この質問もわざとぼかした内容となっている。自我の消滅（質問６）による悩みの消失ということをいっているのか、天国に入る（質問７）ことによって苦しみがなくなるといっているのか、どちらでもよいわけである。興味深いことに、この質問は、フランスで全項目中もっとも高い賛成 62.0%（「まったく賛成」は 43.8%）を得た。しかし、この回答は、肉体的苦痛の消滅という実際的な観念にもっぱら焦点が当たっているのか、よりましな世界の存在をイメージして答えているのか、どちらなのだろうか。このことを知るために、自我の消滅に関する質問６とクロスをとってみると、ここでの項目に賛成と答えた調査協力者のち 52%だけが質問６に賛成と答えていた。ここでの項目に反対と応えた者のうち質問６にも反対と答えたのは 60%だった。このことは、苦しみからの解放という観念は肉体的苦痛の単なる消失の観念とは別のものだということを示している。

なお、日本では、賛成は 46.3%、「まったく賛成」に限っては 15.9%で、フランスとは対照的な結果となった。その適切な解釈を私はさし当たり思いつかない。

質問 12：死んだ後も、あの世では生前同様に生活することができる。

この観念は、コーランにはあるが、西洋ではあまりに単純な観念とみなされている。したがって、反対の比率が高くなったのにも納得がいく（フランスで「反対」は 89.6%、「まったく反対」は 70.5%）。それに対して、日本では反対はずっと少なかった（「反対」は 68.8%、「まったく反対」は 24.4%）。「まったく賛成」が極端に少ない点も、この質問の特徴である。とくにフランスではわずか 3.1%であった。日本でも 7.5%であった。

質問 13：死ぬと、暗闇に入っていって、二度とそこから出ることはできない。

この質問は地獄についての考えと関係しているが、ずっと深刻な形での問いとなっている。どちらの国でも、反対の回答が全項目中最大となった（「反対」：日本 87.3%、フランス 91.8%。「まったく反対」：日本 44.7%、フランス 75.4%）。「反対」の数字も日仏でよく似ていることは注目に値する。つまり、具体的なイメージの形をとっても、死はジェローム・ボッシュの絵にみられるような反応とはならず、現代人の精神状態について私たちはもっと安心してよいということなのであろう。

質問 14：あの世はこの世よりもっとよいと思う。

この質問は、質問７，８，１１とは違った観点から天国について尋ねたものと考えることもできる。文自体が簡潔であるため、回答者はそこにいろいろな意味を投影することができるだろう。意外にも、日本ではわずか 6.5%が、それに対しフランスでは 20.5%が「まったく賛成」と答えた。この違いは死後の世界に対する概念が両国ではっきり異なっていることを表している。「賛成」全体についてみれば、日本は 35.5%、フランスは 43.2%であった（確信的賛成率は日本 18.3%、フランス 47.5%）。全体としてみれば、この質問に対する信念はフランスではっきり二つに別れ、日本では反対に傾く傾向があった。日本の結果は、究極の涅槃に至るまで現世で次々によりよき生をめざす東洋の再生の観念が、「あの世」でのよりよき生という観念と矛盾するということを示しているのだろうか。

質問 15：肉体は死んでも魂は残る。

この質問はそっけないが、なかなかショッキングな内容だ。つまり、肉体は死ぬのに、たましいのほうは自分の道を歩むということなのだから。この質問に対して、フランスでは「まったく賛成」の比率が全項目中もっとも高いほうの 41.2%を記録し（賛成全体では 60.3%）、「まったく反対」も 25.8%と低いほうであった。それに対し、日本では「全く賛成」は 18.1%、賛成全体でも 58.4%で、全項目中平均的な数字となった（「まったく反対」は 14.8%）。この質問は死後の生存の形態については何もアプリオリに限定していないので、直観的であれ特定の宗教的教義に基づくものであれ、死後の存続を信ずる者ならばみんな賛成できる。このことが、フランスの賛成の数字を高くしたのかもしれない。

質問 16：地獄はあると思う。

この質問は、哲学的な意味からいえばかなり中立的であるといってよいだろう。だが、こうした聞き方をしても、この質問への肯定的回答は多くなく（「賛成」：日本 36.4%、フランス 27.1%、「まったく賛成」：日本 7.7%、フランス 17.7%）、むしろ反対傾向がはっきりしている（「まったく反対」：日本 27.8%、フランス 55.7%。確信的反対率：日本 43.7%、フランス 76.4%）。どちらの国でも、確信的反対率が全項目中では高いことに注目しよう。この質問は質問１３と関係するのでクロスをとってみると、質問１６に反対と答えた回答者のうち 91%は質問１３にも反対と答えていて、ほぼ同じ回答者が２つの質問に同じように答えていることがわかる。もはや永遠の懲罰などといった観念は多くの人々には関係のないものなのだろうか。私の考えでは、技術の進歩や生活水準の向上などによって、いまや死後の世界の観念もとても「ソフト」なものになってきたのだと思う。だから、厳しい懲罰はもはや時代にそぐわないのであろう。

質問 17：人は人間以外のものに生まれ変わることもある。

インドでは一般的なこの観念は、かつてはヨーロッパの古代世界に存在し、中世においてもみられた観念である。しかし、これは明らかに西洋よりも東洋において流布している観念である。したがって、フランスよりも日本において賛成が多いのは驚くにあたらない（「賛成」：日本 63.8%、フランス 31.3%）。ただ、「まったく賛成」は両国で同じような数字である（日本 19.1%、フランス 17.7%）。「まったく反対」については、予想されたことだが、これとは対照的にフランスで 47.4%、日本で 14.9%と、はっきり異なっていた。フランスの回答者で質問３とのクロスをとってみると、質問１７で反対であった回答者の 79%が質問３にも反対と回答した。それに対し、質問３で生まれ変わりに肯定的に答えた回答者の 39%が、動物の姿に生まれ変わるという考えには、はっきり反対を表明した。東洋では動物に生まれ変わることは厳しい懲罰のひとつであるが、ヨーロッパでも古代や中世の農村ではこうした考えはかなり一般的であったようだ。フランスの結果には、こうした意味も含まれているのであろうか。

質問 18：この世のおこないによって、天国に行くか地獄に行くかが決まる。

この質問はいくらか大げさな感じがするが、意味はまったく明瞭である。この観念はどちらの国でもあまり賛同を得ていないように思われる。結果は、日仏両国で比較的近い数字となった（「賛成」：日本 42.6%、フランス 33.2%、「まったく賛成」に限ると、日本 8.0%、フランス 16.1%）。ただし、「まったく反対」は日本 26.3%、フランス 47.7%であった。この質問内容は、

特定の宗教的教義よりも、非常に古い、おそらく先史時代の観念－この世での行為とあの世での報い（あるいは罰）のバランスの観念－に関係していると思われる。

質問 19：行き場所がなく、ただよう魂も存在する。

この観念はおそらく最も古くからある観念であろう。したがって、「まったく賛成」が日仏で同じような割合になっている（日本 14.4%、フランス 16.3%）ことは驚くにあたらない。おそらく、この似たような数字はこの観念内容の普遍性を表しているのであろう。しかし、賛成一般となると日仏ではっきりした違いがみられる。日本は「賛成」が 64.7%であるが確信的賛成率はわずか 22.3%で、その賛成の仕方は表面的なものでしかないことがわかる。これと対照的にフランスでは「賛成」は 26.3%、確信的賛成率は 62.0%であった。「反対」をみてみると、もっとこの対照性がよくわかる。フランスの「反対」は 73.7%、確信的反対率は 65.0%にものぼる（これに対し、日本は「反対」35.3%、確信的反対率 40.8%）。西洋におけるこの観念については、私は次のような仮説を考えている。この古い観念は、キリスト教が現れた頃にはとても広い影響力をもっていたので、教会はキリストを贖罪の人として描かなければならなかった。彼の受難はあらゆる人間の苦しみを一身に背負ったものであって、だからこそこのキリストの受難によって人間はそれまでいつ終わるともなくさまよい続けていた冥府から抜け出すことができるとされたのである。奇妙なことに、他者の不幸を自己に一身に背負う贖罪の観念はキリスト教の大切な一教義として想起されなくなっており、そのため、今ではこの観念は、キリスト教の信者と名乗る人たちを含めた西欧の大多数の人々に、十分理解されなくなっている。したがって、フランスの大学生はもっぱら自分の直観によってこの質問に回答したと思われる。

質問 20：山・川・草・木などに自然の霊が宿っているように感じることがある。

この質問は、必ずしも見かけ通りアニミズムについて尋ねている質問とはいえない。実際のところ、霊（esprit）という語は単数になっているので、この問いは自然現象の背後にある漠たる実体についての知覚を対象としているというよりは、むしろ自然との直観的なある主の交流を念頭においている。つまり、私たちがこの質問によって明らかにしようとしたのは、むしろ、あらゆる宗教や信仰を越えたところで持続するアルカイックで原初的な直観についてなのである。そのためか「まったく賛成」の回答は日仏で近い数字となった（日本 20.7%、フランス 26.3%）。つまり、きわめて普遍的な内容がここにはあるということである。ただ、「賛成」全体では両国は対照的で、日本 63.1%、フランス 43.8%であった（確信的賛成率は日本 32.8%、フランス 60.0%）。西洋よりも東洋の文化的背景が、この質問に対する好意的回答に有利に働いたのであろう。このことは、否定的回答をみても確認でき、両国は対照的である（「反対」：日本 36.9%、フランス 56.2%。確信的反対率：日本 36.3%、フランス 59.6%）。しかし、項目全体の中に位置づけてみれば、どちらの国の数字も中間的な位置にあって、これは西洋の場合、とりわけ驚くにあたらない。というのも、西洋では、この種の質問に関係する宗教的教義はまったく存在しないのであるから。

質問 21：死後になんからの審判はあると思う。

この文はフランス語としてはよい文ではないが、意味は十分明瞭である。確かなリアリティとしての神の審判について尋ねているからである。日仏の回答結果は、「賛成」「反対」ともよく似た比率であった（「賛成」；日本 38.2%、フランス 30.8%、「反対」；日本 61.8%、フランス

69.2%)。しかし、確信度のレベルでは、日本の回答者は「まったく賛成」を避けてより慎重な答え方をしたために、両国に大きな開きがみられた（「まったく賛成」：日本 5.1%、フランス 14.9%。確信的賛成率：日本 13.4%、フランス 48.4%)。これに対し、反対はフランスで強く、「まったく反対」が 56.9%もあり、確信的反対率は 82.2%の高率に上った。この観念は、キリスト教ではもっとも基本的な教義のひとつであるのだが、フランスの回答をみると、これを否定している人のほうが多数派であるように思われる。私の考えでは、ここに新しい人生についての考え方を見なければいけないと思う。つまり、このことは、（審判という）脅威はもはや規範とはならなくなり、人々が自由に自分の人生を送るようになってきたことを物語っている。日本では、反対の場合も確信的ではなく（日本の「まったく反対」は 22.9%、確信的反対率は 37.1%)、このような観念は攻撃の対象でも擁護の対象でもないことを示している。

Ⅳ．討論

まずはじめに、質問紙に対して、学生たちがまじめに答えてくれたと思われることを指摘しておきたい。言語的質問紙部分に限れば、回答拒否率は両国で６％未満であった。

ということは、得られた回答内容は、ここで取り上げた項目から知ろうとしたことを知るのに十分であったといえる。さらに言えば、得られた比率は、もっとも基本的な信念に関する「市井の人（homme de la rue)」のためらいをかなり正確に報告していると思われる。ただ、調査の対象となった学生は、フランスの場合はパリの大学生で、パリか地方の都市の出身者がほとんどであり、非宗教的な家庭の師弟が多く、地方の大学の学生とは異なっているかもしれない。日本の大学生の場合は、いろいろな出身階層の学生であったように思われる。また、フランスでは調査対象は心理学の学生であったため、当該人口の全体を代表しているとはいえない。このような学生たちは、科学的なものの考え方のトレーニングを受けている人々であり、その存在自体の基本にかかわる質問には外部から持ち込まれたドグマに基づいて答えることを拒否する人々だということも忘れてはならない。心理学は歴史的には哲学から分化した学問であり、依然としてその影響を受けている学問なのである。

次のことも注意を向けておいてよい。つまり、日仏を比べると、日本の大学生のほうがあいまいな答え方をし、フランスのほうが賛否にはっきりした回答をする傾向が高かった。したがって、日本では、「まったく賛成」という回答は 21 項目中最大でも 35.6%であったが、フランスでは 43.8%の場合もあった。「まったく反対」も同じで、日本の最大比率は 44.7%であるのに対し、フランスの場合は 75.4%にまで達することがあった。中間的な答え方をする傾向はフランスより日本で高く、「どちらかといえば賛成」の最大比率は日本 55.6%、フランス 24.2%、「どちらかといえば反対」の最大比率は日本 44.4%、フランス 28.7%であった。また、どちらの国でも、はっきりした反対の表明のほうが全面的賛成よりも率として高い傾向があったことも、忘れてはならない。このことは、この質問紙に回答する際のなんらかのとまどいを反映しているのかもしれない。回答を「賛成」「反対」の２カテゴリーにまとめた場合で考えると、全般に「賛成」と答える傾向は日本のほうが高かった。21 項目中、「賛成」の最大比率は、日本の場合 78.6%、フランスの場合 62.0%であった。確信率の 21 項目中での最大値でみると、西洋的な回答様式の傾向がよりはっきりする。確信的賛成率、確信的反対率いずれの最大値も、フランスのほうが日本より高かった。とくにフランスでの確信的反対率の高さは、回答者が自

分の主張を強く打ち出したためであるように思われる。

21項目中の平均の率で日仏を比較しても、上記と同じようなことがいえる。

次に、それぞれの国でどのような質問がもっとも高い賛成の回答、あるいは反対の回答を得たかを検討してみよう。まず日本の場合、いちばん高い「まったく賛成」、「賛成」の比率が得られたのは、質問9（水子供養はするべきである）であった。逆に、いちばん高い「まったく反対」、「反対」の比率であった項目は、質問13（死ぬと暗闇に入っていって、二度とそこから出ることはできない）であった。フランスでは、「まったく賛成」のいちばん高い項目は質問15（肉体は死んでも魂は残る）であったが、「賛成」全体でいちばん高かった項目は質問11（あの世では苦しみや痛みから救われる）であった。「まったく反対」のいちばん高かったのは、質問4（仏様や神様を信心して願いごとをすれば、いつかその願いごとがかなえられる）であったが、「反対」全体では日本と同様、質問13であった。後者は日本と同じく質問13であった。

この調査結果から得られた見取り図はたとえ断片的なものであっても、そこから次のようなことが考えられる。まず、悲しいながら、いかに既存の宗教的信仰がその影響力を失ったかということがわかる。質問4（神への願いごと）に対する回答はこの点を雄弁に物語っている。人々はもはや神に多くのことを期待しなくなっている。私たちは手厳しい唯物論からそれほど遠くないところにいるということだろうか。

逆に驚いたことに、既にずっと昔に失われたと思われていた転生（質問3）や自然の中に霊を感じる（質問20）とする観念、また人間以外のものへの生まれ変わり（質問17）といった観念が無視できない地位を占めているということが明らかとなった。こうした観念の再登場は、伝統的な宗教的信仰の重みの失墜にその原因を帰すことができるのかもしれない。

宗教的教義そのものに関しては、結果は特に興味深い。もはやだれも地獄を恐れなくなっているし(質問16)、神による最後の審判はほとんど意味のない事柄となってしまった(質問21)。自分の行動を律する基準として他界のことをもちだす学生はいまやわずかしかいない（質問18)。そもそも、これらの観念は宗教のもっとも原初的な形態であった。また、私たち人類の歴史を支えてきたのも、このような観念であった。信仰の面でもっとも活力ある時代であった中世は、とくにそうであった。

他界に学生は関心をもっている。そのことは疑いない。しかし、その考え方は決まり切った枠からはみ出ているように思われる。質問間のクロスをとってみると、この点が明るみに出て驚きである。大多数の人が、死後には自分が全面的に消滅するとする考え方（質問6）を退ける一方、同じ人たちが魂の存続（質問15）には賛成する。もちろん、この世がそのままあの世に連続するといった単純な考え方（質問12）はあまりに素朴すぎるが、だからといって「あの世」そのものの観念も強い信念としてあるということではない。たしかに、死は苦しみからの解放であってほしいと望まれているが（質問11)、だからといって、他界を信じる人たちが、そこはよい世界だと簡単には思えないらしい（質問7と質問14)、等々。しかし、一方、たましいの永遠の彷徨という観念（質問19）を受け入れたからといって、ヒエロニムス・ボス流の堕地獄のイメージ（質問13）が受け入れられるわけではない。さらに特別なのは、私たちを愛してくれた人々に死後再会できるとする考え方に対して、意外に醒めた反応をしていることである。

他界からの働きかけという考え方も、いまやあまり受けがよくない。死者の復讐という観念も（質問1)、死者が保護者として現れるという観念も（質問5)、あまり受け入れられてはいないのである。さらに、死後、再びこの世界に戻ってくるという観念すら、広く行き渡ってい

るようには思われない（質問 10）。

V．結論

結局、質問とその回答の全体は、世俗化へと向かう現代の傾向、宗教的教義の影響力の喪失という傾向を確認するものであった。そのゆえに、二つの国に共通する信念の新たな出現、普遍性の新たな出現がみられるようである。この調査結果から明らかになったのは、私たち現代人は、そのことに十分気づくことなく、神の観念を有する宗教（religions théistes）の生まれる以前にまで遡る、もっとも原初的な信念を再発見しつつあるという点だ。現代人は、祈りをかなえてくれる神については無関心で、自然との間に直観的な関係を結ぶことにあこがれるようになっている。現代人は死後のことについてあれこれ悩まない。死後も結局、生者の世界との間にある種の連続性が保たれると考えたり、一般的にいって、死後も自分たちにとっては悪くはないと思っているからだろうか。

私の考えでは、若い人々に向けて宗教的メッセージを送ろうと思えば、この調査で得られたような結果を考慮に入れるべきである。つまり、真に宗教的な態度は、人が強制的に押し付ける信仰から作られるのではなく、心の内部に耳を傾け、私たちの回りの人間的、物質的世界や、私たちが遭遇するあらゆる現象と、知的であるよりもまず「感覚的に」交流するよう務めることによって養われるということを知るべきである。

参考文献

BRUNE F., *Les morts nous parlent*, Paris, Le Félin, col. Le livre de poche.

LECOUTEUX C., *Fantômes et revenants au Moyen âge*, Paris, Ed. Imago

MOODY, R., *La vie après la vie*, Paris, Robert Laffont, 1977 (rééd. J'ai lu, New Âge, 1990) (titre orig.: *Life after life*, 1975).

VALLA J.P., *Les états altérés de conscience*, Paris, PUF, 1992

VERNETTE, J., *L'au-delà*, Paris, PUF, 1998, col. "Que sais-je?", n ° 725.

WALLON Ph., *Expliquer le paranormal*, Paris, Albin Michel, 1996

WALLON, Ph., *Le paranormal*, Paris, PUF, 1999, col. "Que sais-je?", n ° 3424.

WALLON, Ph., Rabeyron, P.-L., Mesmin, C. (sous la direction de -), *Guérir l'âme et le corps, au-delà des médecines habituelles* Paris, Albin Michel, 2000

5　調査班のおもな研究成果（2）

生命観にかかわるフィールドワーク研究

5-1　家族ライフストーリーが語られる「場所」としての墓地
イギリスの19世紀末の家族墓碑と現代の子ども墓碑を中心に
やまだようこ

5-2　「グランド・ゼロ」での犠牲者追悼のかたちと9.11「同時多発テロ」の位置づけ
テロ事件11ヶ月後のニューヨークを歩いて
伊藤哲司

5-3　事故死の「現場」における生者と死者のコミュニケーション
ニューヨーク、グラウンド・ゼロにおける追悼の語り
やまだようこ

5-4　他界観に関するベトナム・フィールドワークの記録
伊藤哲司

5-1

家族ライフストーリーが語られる「場所」としての墓地

―イギリスの19世紀末の家族墓碑と現代の子ども墓碑を中心に―

やまだようこ

I　ライフストーリーが語られる場所としての墓地

「墓地の心理学」という本にはまだ出会ったことがないが、墓地を、心理学的視点から見ると、興味深い視座がひらけるのではないだろうか。墓地は、かつて人間が生きてそこに居たことを示す記憶の場所であり、人間の力を超えるものと交流する聖なる場所である。そこには、場所自体が何かを物語る「場所の力（ゲニウス・ロキ）」が働いている。

場所は、つかの間のいのちを生きる人間の生命に比べれば、永遠ではないにしても生きものの命をはるかに超えて長く変わらず存続する。あるいは、長く存続するであろうと願う人間の祈りをたくされる。墓地は、場所のなかの特別の場所、ライフ（いのち・人生）に対する幾重もの意味が重層してこめられた「心理的場所（Psychological Topos）である。そこでは、人が、生と死によせる想いが、究極の形、シンプルな形で語られていると考えられる。

本論では、墓地を、ライフストーリー（いのちの物語、人生の物語、やまだ2000a）が凝縮して語られる場所としてとらえてみたいと思う。墓地には、「人が生まれて死ぬ」という、人間であれば誰でもたどる人生の普遍的なプロセスが縮約して示されているからである。宗教や文化、時代や地域、葬送される人物によって墓地がどのようにつくられるか、墓にどのような素材が選ばれるか、そこに何がつくられ刻まれるかなど、墓地のディテールは大きく異なっている。しかし、墓地は、「人が生まれて死ぬ」という、ライフ（いのち・人生）の物語を、逆方向から、つまり「死」の側から語ってくれる場所という点では共通しているだろう。

墓地をライフストーリーが語られる場所として見るとき、そこでは、少なくとも四重の意味のストーリーが語られていると考えられる。

第1には、墓地では「個人の人生」としてのライフストーリーが語られていると考えられる。個人の人生の凝縮されたライフストーリーとして、墓地や墓碑銘を見ることができる。たとえ、亡くなった人の死亡年月日と年齢が簡潔に書かれただけの墓石であっても、それは、その人の人生のもっとも簡潔な要約の一つだといえよう。まして、それが5歳の子どもの墓であったり、20歳の娘の墓であったり、90歳の老人の墓であったりすれば、そこからさまざまな人生を推測することができる。

第２には、墓地では個人を超える「人と人との関係物語」、たとえば生者と死者の関係、世代と世代の関係としてのライフストーリーが語られていると考えられる。死にゆく人や死んだ人は、自分で自分を看取ることも葬ることも祀ることもできない。人はたった一人で生まれて、たった一人で死んでいくと言われるが、実はそうではない。生と死は、もっとも周囲の誰かの世話（ケア）を必要とするライフ・イベントである。生と死は、一人だけではおこなえない。この世に誕生するとき、人は自分の力だけではなく、誰かの介添えによって生まれ、誰かに世話されねば生き延びることができない。死ぬときも、誰かのケアを受ける。たとえ自分では、墓は必要ないと考え、あるいは逆に墓石まで用意万端を整えて、一人で自死したとしても、その死体の処理やその後の家財の始末などは誰かの手にゆだねねばならない。

人間の生と死は、個人の生と死であるだけではなく、人と人、世代と世代をつなぐライフ・イベントである（やまだ　2000a b c）。墓地は、死者を記念し記憶するメモリアルの場であるとともに、生者が死者の記憶を呼び起こして、死者に語りかけるコミュニケーションの場でもある。墓地では、死を悼む生者と死者の記憶とのコミュニケーションの場であり、死者の死を追悼し祈りをささげ、死者の生を記念して後世に伝達しようとする、世代連関や家族連関の物語が語られていると考えられる。

第３には、墓地は、個人やその家族の人生を超える大きな「社会・文化・歴史的物語」が語られている場所とみなすことができる。そこでは、広い意味での「宗教」ストーリー、「文化」ストーリー、「歴史」ストーリー、「英雄」ストーリー、「村落」ストーリーなどが語られている。このような大きな物語は、墓地だけではなく、ピラミッドや古墳や寺や教会など墓地を兼ねた神殿などの建造物、記念碑、殉教者や英雄の像などによって、その当時の人々だけではなく、幾世代も後の人々にまで語り継がれてきた。そこでは、統治者の死であれ、殉教者の死であれ、庶民の死であれ、多かれ少なかれ、人々によって死がどのようなものとイメージされているか、人はどのように死んでいくべきかが有形・無形のかたちで示されている。そして、死者の葬り方、墓地の形式などは宗教や死者の社会的地位によって大きく異なり、歴史的な変化も大きい。墓地では、「社会・文化・歴史的物語としての死」、集合的な人々のフォーク・イメージとしての死や、道徳、宗教、規範とかかわる理想像としての死のイメージなどが、それが建造された時代の人々、そして後世の人々に向かって語られているといえよう。

第４には、墓地は、単にそれ自体が何かを記憶した過去の「場所」としてあるだけではなく、「相互行為としての物語」が、現に行われている行為（acts）の場所でもある。墓地では、線香をあげる、花を供える、墓参りをするなど、日常生活に組み込まれた儀礼や礼拝が行われている。また、偉大な死者、非業の死者、恨みを残して亡くなった死者を供養し、死者のたましいを鎮めるための儀式、より大規模で組織化された祭りや追悼行事や記念行事や演劇や歌舞が行われる。それら死にかかわる儀礼行為や祀りや祭による物語によって、墓地では、生者と死者のコミュニケーションが、社会的物語としても、人と人の連関物語としても、個人の人生物語としても、相互行為として繰り返し演じられ、生きたかたちで物語られていると考えられる。

従来、考古学、歴史学、宗教学、人類学、民俗学、社会学など多くの学問でおもに研究されてきた墓地へのアプローチは、第３の「社会・文化・歴史的」視点から語られてきた。次に多く注目されてきたのは、第３の観点と関連した第４の観点の一部、とくに「儀礼」「祀り」「祭」などであった。第１の個人の人生に関心が向けられる場合には、歴史的に著名な人物に焦点があてられており、その人物の終焉の場所として紹介されることが多かった。

それに対して本論では、特に上記の第２の観点を中心にして、家族ライフストーリーが物語られ

る場所としての墓地に焦点をあてる。墓地そのものを研究対象として、その形式や儀式の時代変遷や文化を知ろうとするのではなく、人々の人生に焦点をあてて墓地を見るのである。墓地には、そこで生きた無名の人々の人生が集合的に示されている。墓地を、人々の人生が集合的に示された社会的表象として読み解くことができるだろう。特に「人生」を、「個人」という視点から解き放って、「家族と世代連関」「生者と死者のコミュニケーション」など身近な周囲の人々との「関係性」という観点から見ていきたい。

なお本論で「ライフヒストリー」という用語を使わないで、「ライフストーリー」という用語を使うのは、本論の目的が、「家族の歴史」「生活史」を知ることそのもの、つまり時代考証をして「歴史的真実」を明らかにすることにあるわけではないからである。やまだ（2000a）において両用語の使い分けについて議論したように、用語の違いは学問的立場の違いを反映する。本論は、「ライフストーリー」、つまり家族の人生がどのように語られているか、「語られた真実」「物語的真実」に関心を向けたナラティヴ研究の一環として位置づけられる。

本論は、筆者が世界各地の墓地を長年見歩いてきたフィールドワークのうち、イギリスの墓地で2001年7月－11月と2002年9月に現地で観察した資料に基づいている。本論では、イギリスという国名を、Englandという限定された地域の意味ではなく、United Kingdomをさす日本語の通称として使うことにする。

本論の目的は、以下のようにまとめられる。本論では、イギリスの墓地のフィールドワークから、「家族ライフストーリーが語られる場所としての墓地」について、探索的な試論ではあるが次の2つの観点からいくつかの新しい心理学的なものの見方を提示してみたい。第1には、「記憶の場所としての家族の墓碑銘（19世紀末-20世紀初）」、第2には「現代の墓地における生者と死者のコミュニケーション」という2つの観点から考察を行う。

Ⅱ　記憶の場所としての家族の墓碑銘：家族をつなぐライフストーリーと語りの共同生成

日本の墓地では、個人墓ではなく、先祖代々の墓、あるいは＊＊家の墓として、ひとつの墓石に家族の何人かの名前が刻まれた墓石がよく見られる。イギリスの墓地においても、墓石が個人のものではなく、ひとつの墓石に家族の墓碑銘が集合的に刻まれているものは少なくない。そのような形態の墓石では、一度にすべての死者の名が刻まれるのではなく、時間を継いで、次々に死者の名が書き加えられていくことがふつうである。ある死者を祀って、その墓を建てた人物が、次には自分が死者となって墓に刻まれるという巡り合わせ、世代循環の移り変わりを一つの墓石のなかに見ることもできる。

ここではまず、おもに19世紀末から20世紀前半のイギリスの家族墓碑銘の事例をとりあげてみたい。

Ⅱ－1　イギリス、ハワースのブロンテ姉妹の家族ライフストーリー

イギリス、ヨークシャーにあるハワースは、小説家のブロンテ姉妹の故郷として有名な小村であるが、現在も「嵐が丘」が書かれた当時とあまり変わらない風景のなか、古い面影の村が残されて

いる。ブロンテ姉妹については伝記的資料が残されているので、かなり詳細な家族ライフストーリーを構成することが可能である(Howard,T.1995 など)。

父のパトリック・ブロンテは、北アイルランドで10人兄弟の長男として生まれた。貧農であったが成績は優秀で、徒弟奉公や家庭教師をした後、奨学金などを得て名門ケンブリッジ大学のセント・ジョーンズカレッジを卒業し、イギリス国教会の聖職者になり、ヨークシャー地方に移住した。彼の正確な本名はわかっていないが、カレッジに残されている彼の姓は、Brants, Bronte, Brontë, Brontë と変化している。彼は最終的に、ギリシア風の文字を用いた最後の名字にした。貧しさゆえに、アイルランドから海を渡った後、ケンブリッジまでの長い道のりを歩いたと伝えられている彼は、当時としては、きわめて異例の出世をしたわけであるが、この創作的な改名を行った経過をみても、彼が自分の出自に深いコンプレックスを抱いていたことは容易に想像できる。

母のマリア・ブランウェルは裕福な商人の娘で、学校の助手をしていてパトリックと出会い、彼が35歳、彼女が29歳のときに結婚した。1812年、長女マリア誕生、1814年、次女エリザベス誕生、1816年三女シャーロット誕生、1817年長男パトリック・ブランウェル誕生、1818年四女エミリ・ジェイン誕生、1820年五女アン誕生。

1820年1月17日にアンが生まれた直後の2月に、父はヨークシャーのハワース教区の牧師となり、ハワースの牧師館に一家で引っ越した。その半年後、母が床につき、1821年9月15日癌のため死去した。看病にきていた母の姉エリザベス・ブランウェルが、以後そのまま同居して家事を行った。

1824年にマリア（11歳）、エリザベス（9歳）、シャーロット（8歳）、エミリー（6歳）は、ランカシャー地方のカウアン・ブリッジ寄宿学校に入学した。エミリーは最年少の生徒であった。現在でもイギリスでは、裕福な家の師弟は幼いときから寄宿学校に入ってエリート教育を受け、ケンブリッジやオックスフォード大学では、そのような師弟が大多数をしめている。自分ではそのような教育を受けられなかった父は、子どもには人並みはずれて教育熱心となった。しかし、娘たちが入った寄宿学校は、エリート校とはほど遠く、授業料が安いかわりに食事も劣悪で暖房も十分になく神の名のもとに冬でも一日歩かされるという厳しい環境であった。

1825年に上の娘たちマリアとエリザベスは、栄養失調から急性肺結核になって、5月と6月に相次いで死去した。シャーロットとエミリーは、寄宿学校をやめて家にもどり、兄のブランウェルと妹のアンと4人で、父のみやげの兵隊人形などで創作あそびをした。このころのお話つくりの楽しいあそびの様子は、ブロンテ家族の家がそのまま資料館となって現在まで残されているが、その共同あそびが後の創作活動に結びついていったといわれている。

その後、シャーロットは「ジェーン・エア」、エミリーは「嵐が丘」、アンは「アグネス・グレイ」を代表作とする小説家になった。当時は売れなかったが、その後に彼女らの作品は世界的に有名になり今も長く愛読されている。一家の期待を担っていた長男ブランウェルにも、絵画や文学の才能があったが、彼はそれを生かし切れず、最後はアルコールに溺れて悲惨な生活をした。彼は、画家になるためにロンドンのアカデミーまで行ったが、一歩も入れずにハワースに戻ってきてしまったと伝えられる。彼が描いた3人姉妹の美しい肖像画があるが（図1）、その中央にはもともと自分自身の肖像が描かれていた。しかし、現在残っている絵では、その中央部の人物は絵の具で消されてしまい、かつて像があったことがわかる「不在の影」だけが残っている。立身出世を果たした教育熱心な聖職者父のもとで、6人の子どものうち唯一の男子、才能がありながら自ら潰れていってしまったブランウェルの心境が表れた絵である。

ブランウェルは、酒浸りの荒んだ生活をつづけたあげく、1848年9月24日に31歳のとき自宅

で急死した。エミリーは、兄の葬儀で風邪をひいてこじらせ、3か月後の1948年12月19日に30歳で死去した。末娘のアンも同じ病気で倒れ、スカーボローで1849年5月24日、29歳で死去した。シャーロットは、ベルギーのエジェ寄宿学校で英語教師をしたときエジェ教授に恋をしたが報いられず、それが「ジェーン・エア」のモデルになった。その後、父の反対を押し切って1954年6月29日に自分を思慕していたニコルズ牧師補と結婚した。しかし、結婚後1年もたたないうちに、1855年3月31日、風邪がもとになって39歳で死去した。

ブロンテ家族のライフストーリーを、各種資料をもとに、ごく簡単にたどると以上のようなものになる。

Ⅱ－2　イギリス、ハワースのブロンテ姉妹の家族墓碑銘

ブロンテ姉妹の家族が葬られている墓所は、父の勤務先であり家族の住居であったハワース教会にある。ハワース教会の壁にある家族墓碑銘を、先に資料から構成したブロンテ姉妹の家族のライフストーリーと比較してみよう。この家族墓碑銘は、教会の壁に記念プレートとして後でつくられたものであるから、厳密にいえば墓碑銘とはいえない。しかし、あとでヨークのターク家の家族墓碑に示すように、基本的に墓碑銘の様式によって書かれているので、広義の墓碑銘として位置づけられるであろう。

ハワース教会の壁にある事例1（図2）の墓碑銘は、死者の名前と続柄、亡くなった年月日と年齢が記されているだけの簡潔なものである。しかし、死者が生前何をしたかという業績や、どのような人生を歩み、どのような病によって、どのような想いを抱いて亡くなったのかというような感情や思い入れが一切省かれているだけに、かえって「死の事実」だけが圧倒的な迫力をもって迫ってくる。

通常のライフストーリーと墓碑銘のストーリーの相異として気づくことは、まず第1に、「死」の年月日が中心となっていて、人生が「死」を基点に逆向きに語られていることである。通常の自伝や伝記の語り方では、通常は主人公の誕生から、あるいは誕生以前の両親から時間的な順序にそって順向の時間軸にそって人生が語られる。もちろん、最期の死が最初に書かかれる伝記もあるが、それは物語の効果を劇的にするためのレトリックであり、墓碑銘のように、死の年月日は詳しいのに、それと比較して、生年月日が省略されるというような極端なアンバランスはみられない。

私たちが自分の人生を生きているときにも、ライフストーリーを語るときにも、厳密な意味で「死」を基点にすることは、ほとんど不可能である。計画した自殺以外は、死期をさとることはできても、死の正確な年月日を自分では知ることはできないし、記すことはできない。

墓碑銘に記される当事者は、「死者」である。それは、当たり前のことのようにみえる。しかし、墓碑銘を記す当事者がいることを忘れてはならない。それは、「生者」なのである。墓碑銘は、生者が死者を悼み、記憶し、祀るためのものである。極論すれば、墓も墓碑銘も、生者のためにある。

生きているときは、誕生日（生年月日）が重要であり、他者も誕生日を祝ってくれる。私たちは誕生日を基点として、順向の時間の流れにそって自分の人生を生きて、年齢を数えていく。しかし、死んだあとは、命日（死亡年月日）が重要になる。戸籍には、誕生日と命日の両方が対等に書かれるが、墓碑銘には、命日のほうが圧倒的に多く刻まれやすい。命日は、死の世界への誕生である。死者は、生者によって命日を記憶されるが、その日付は、自己のものであるとともに他者のものであり、自己と他者との関係性のなかで記され語られる日付である。

第2には、特に家族墓碑においては、一人の人間が生まれて死ぬという人生プロセスが一人だけ

で行われるのではなく周囲の人々、特に家族のつながりのなかで行われることを、端的に凝縮したかたちでまざまざと見せてくれる。

事例１（図２）のブロンテ家族の記念碑に並列された、死亡年齢の列記には、圧倒させられる。栄養状態や衛生環境（飲水に問題があったといわれる）が悪く、死亡率が高かった時代とはいえ、６人の子を産んだ母親は３９歳で亡くなり、６人の子のうち、２人の娘は１１歳と１２歳、あとの４人も２０代終わりから３０代で死亡している。いちばん長生きしたシャーロットでさえ、３９歳で死亡し、その後に子孫を残すことはできなかった。

そして、たった一人、すべての家族が死亡したあとに、父親だけが８５歳まで生きながらえたことが示されている。ブロンテ姉妹の伝記では、多くの場合、姉妹の作品に焦点があたるので、作品と関連する部分が詳しく語られる。早世した２人の上の姉妹や兄のブランウェルのことはかろうじて語られることがあっても、その後の父親の死亡年月まで語られることはほとんどない。墓碑銘では、端的に死亡年月日と住んだ場所と職業が述べられているにすぎないが、有名なエミリーやシャーロットの立場からではなく、父親の立場にたって彼の人生の物語を読み解いてみたいというような新たな視点をえることができよう。

第３には、墓碑銘は定型的に語られることが多いので、その定型からはずれた語り口を見いだすことが容易であり、そこには興味深い物語が秘められている可能性がある。ブロンテ家族の墓碑では、アンの場合がそうである。アンの墓は、ハワース教会にはなく、スカーボローの旧教会にあると墓碑銘には記されているからである。そこで、次に家族の墓地から離れた場所に個人墓碑がつくられているアンについて調べるフィールドワークを行った。

（事例１　図２）イギリス、ハワース教会のブロンテ家族の墓碑銘

In Memory of
MARIA, WIFE OF THE REVD. P. BRONTË A.B. MINISTER OF HAWORTH;
SHE DIED SEPT. 15th 1821 IN THE 39th YEAR OF HER AGE
ALSO OF MARIA. THEIR DAUGHTER; WHO DIED MAY 6th 1825. IN THE 12th YEAR OF HER AGE.
ALSO OF ELIZABETE.THEIR DAUGHTER; WHO DIED JUNE15th 1825.
IN THE 11thYEAR OF HER AGE.
ALSO OF PARRICE BRANWELL.THEIR SON; WHO DIED SEP. 24th 1848. AGED 31 YEARS.
ALSO OF EMILY JANE. THEIR DAUGHTER; WHO DIED DEC. 19th 1848 AGED 30 YEARS.
ALSO OF ANNE. THEIR DAUGHTER; WHO DIED MAY 28th 1849 AGED 29 YEARS.
SHE WAS BURIED AT THE OLD CHURCH SCARBOROUGE.
ALSO OF CHARLOTTE. THEIR DAUGHTER. WIFE OF THE REV. A.B.NICHOLLS.B.A.
SHE DIED MARCH 31 1855 IN THE 39th YEAR OF HER AGE.
ALSO OF THE AFORENAMED REVD. P. BRONTË A.B. WHO DIED JUNE 7th 1861 IN THE 85th YEAR OF HIS AGE; HAVING BEEN INCUMBENT OF HAWORTH FOR UPWARDS OF 41 YEARS.

"THE STING OF DEATH IS SIN, AND THE STRENGTH OF SIN IS THE LAW, BUT THANKS BE TO GOD, WHICH GIVETH US THE VICTORY. THROUGH OUR LORD JESUS CHRISIT. 1COR.XV.56.57."

（次のものたち）の記憶のために

マリア、 Pブロンテ・ハワース教会牧師の妻
彼女は1821年9月15日に39歳で死去した。
また、マリア、彼らの娘；1825年5月6日に12歳で死去した。
また、エリザベス、彼らの娘；1825年6月15日に11歳で死去した。
また、パトリック・ブランウエル、彼らの息子；1848年9月24日に31歳で死去した。
また、エミリー・ジェーン、彼らの娘；1848年12月19日に30歳で死去した。
また、アン、彼らの娘；1849年29歳で死去した。
彼女は、スカーボローの旧教会に埋葬された。
また、シャーロット、彼らの娘で、A.B.ニコルズ牧師の妻。
彼女は、1855年3月31日39歳で死去した。
また、先に名を記したP.ブロンテ A.B.牧師は、1861年6月7日に85歳で死去した。41年以上もハワース教会司祭であった。

「死の棘は罪である。罪の力は律法である。しかし感謝すべきことに、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜ったのである。コリント人への手紙15章56-57」

Ⅱ－3　イギリス、スカーボローにあるアン・ブロンテの個人墓碑：「場所」の風景

アン・ブロンテは、なぜ、父が牧師を勤め長年住んだハワース教会の墓地ではなく、家族のなかで一人だけ別のところに眠っているのだろうか。アンは、スカーボローに長年移り住んでいたので、そこに埋葬されたのだろうか？そうではなかった。

アンは、兄のブランウェルが急死した3か月後に亡くなったエミリーと同じように、病気（肺結核）で倒れて、衰弱していた。死期をさとったアンは、医者が止めるのもきかず、病をおして強行に東部の海辺の町スカーボローへ行くことを強い意志で望んだのである。彼女は、途中ヨークに立ち寄って、ヨーク・ミンスターを訪れたあと、スカーボローの崖の上の海が見えるロッジにたどりついて床についた。

アンは死の3日前に無理な身体で、最後に海の砂の上を歩くことを望み、砂の感触をいつくしんだといわれる。彼女は、静かに春の夕日を眺めたあと、1849年5月24日に死去した。こうして彼女だけは、家族と離れて、海の見える小高い丘の上にあるスカーボロー旧教会の墓地に埋葬されたのである。

事例2（図3）は、スカーボローにあるアンの墓の墓碑銘である。この個人墓碑は、父親が（姉のシャーロットと共に）建てたものだと思われる。アンの墓には、父がヨークシャー・ハワース教会の牧師である旨がわざわざ記されている。父の胸には、長年家族と暮らしたハワース教会ではなく、家族と離れ知人もほとんどいない場所で、若くして亡くなった末娘への複雑な想いが去来したであろう。この墓碑では、年齢が28歳と（たぶん誤って）書かれており、後に建てられた家族墓碑の記載とは年齢が異なっている。

アンがなぜ、死の場所としてあえて海辺のスカーボローを選んだのだろうか。彼女は家庭教師をしていたときに、保養地であるスカーボローに行ったことがあり、海辺にあこがれをもっていたようである。アンの小説「アグネス・グレイ」（1847）や「ワイルドフェル・ホールの住人」（1848）

には、浜辺の風景が特別の意味をおびて描かれているし、彼女は「浜辺で朝日を仰いでいる女性」の絵も描いている（図３の下、右側参照）。実際に現地を訪れて風景を眺めてみると、彼女の気持ちの幾分かは理解できるように思われた。

スカーボローの風景は、彼女が生まれ育ったハワースの風景とある種の共通点をもっている。平坦な土地が多いイギリスでは珍しく、ハワースは急な崖と小高い丘の上にあるが、スカーボローも急な崖と小高い丘の上にある。そして丘の上からは、広々とした景色が幾重にもひろがって眺められる（図３の下、左側写真参照）。しかし、相違点も大きい。ハワースでは、ひろびろと開ける景色、どこまでもうねりながら続くのはヒースの茂る荒れ地である。それに対してスカーボローから見える風景は、明るいまぶしい陽光がきらめく海であり、海辺にはやさしい砂浜がある。

ハワースという特別の場所、「荒ぶるたましい」が暗躍する場所と心中するように生きた姉のエミリーとは違うものを、アンはスカーボローで希求していたのかもしれない。

エミリーは、生涯ほとんどの時間をハワースにこもって住み、ハワースの丘の散歩を愛し、「嵐が丘」（1847）という場所の化身のような物語を書いた。「嵐が丘」の原題 Wuthering(スコットランド方言でざわざわと嵐が吹きすさぶ)Heights（高み）ということばが、その雰囲気をよく伝えている。ハワースの丘は、天候の良いときは見渡す限りひろびろと視界が広がっており、すばらしく美しいこの世の天国といえるほどの風景が連なっているが、一転して天候が急激に崩れると、容赦なく激しい風が吹きすさんで地獄となり、住民でさえ道に迷ってしまう。丘の上は、作物はおろか、樹木さえ歪んでまっすぐに育たない荒れ地である。エミリーは、「嵐が丘」という、人間の知や情を超える理不尽な嵐が吹く土地の小説、世代を超えてつづく深い愛と激しい憎しみと恨みがえんえんと連繋した小説を描いて、そこで亡くなった。

アンは、「アグネス・グレイ」の最終場面に、陽光にみちた海辺の風景の魅力と、その穏やかなやさしさを描いている。そこには、「明るいきらきらした光と、新鮮な空気」がある。また、海の砂は、人が足跡をつけても波がやってきて、足跡はすぐに消え去って新しくなる。

「空と海の深い、すがすがしい青さ、輝く朝の陽差しは、緑にうねる丘陵地の下のごつごつした岩肌を見せる、半円形に入り江を囲む絶壁の上や、滑らかな広い浜辺に照り返り、遙かに見える海に突き出た低い岩礁の上にも、降り注いでおりました。」「私の足跡が、固く崩れていない砂地に最初につけられた痕跡でした。昨夜の満ち潮が昨日のどんなに深い穴もすっかり消し去ってしまい、真っ平にしてしまってから、引き潮がその後にえくぼのように凹んだ水たまりと、小さい流れの跡をとどめている以外は、この砂浜を踏みつけたものは何もありませんでした。」

海の砂の上を歩く感触を彼女はたいへん愛しており、死の３日前にも無理な身体で砂の上を歩きたがったといわれる。アンが想い描く海辺は、フレッシュな光と空気と砂のある場所である。ハワースの激しい連綿とした深い執着がこもる「嵐が丘」に比して、アンがスカーボローで求めたものは、やさしい繊細な「海の砂」だったのかもしれない。海の砂はもろく頼りないようであるが、人が生きた跡やつけた足跡さえ、波がすぐに消してしまい、常に新しくなる。

アンは、ハワースの激しく重い連繋のなかの家族物語から、ひとりで脱出しようとしたのではないだろうか。海の見える小高い丘に、ひとりひっそり葬られているアンの墓を見ていると、彼女が望んだ場所に葬られてよかったという気持ちと共に、実は彼女にとっては墓などどうでもよかったのではないかという気持ちもわいてくる。それほど、ここでは風景が大きな意味をもっている。彼女のたましいが死に瀕して希求したものは、この風景そのものだったのではないかと思われる。故郷を抜け出たアンのたましいは、故郷の嵐が丘の風景にとけこんでいるように見える姉のエミリーのたましいと同じように、すでに場所の風景と一体になっている。

人間の生も死も、それ単独で存在するというよりは、場所のなかに入れ子のように埋め込まれているように思われる。人間が居なくなっても、人間が造った墓場や建造物がなくなっても、場所は残る。場所のほうが根元的な存在である。永遠に少しでも近づけようとする堅固な墓石も、墓碑銘も、いつかは崩れ落ちる。墓地の究極のかたちは、土地であり、風景だろう。

固い石で墓石を建造し墓碑銘を刻んでモノやことばを後世まで残そうとする石の文化に対して、歳月のなか無言で朽ち果てて消えていくことをよしとする木の文化がある。前者と後者では、自然観も、ライフストーリーを語るという概念も異なっている。前者では、人間は自然に対立するものであるから、自然の風化や退化に逆らって、墓石を含めた人工の建造物やことば、その人が生きた痕跡を、できるだけ長く「永遠」に残そうとする。後者では、人間も大きな自然の一部であるから、死によって消えていくのは自然のことであり、人間が生きた痕跡も大きな自然のなかに解消されて沈黙のなかに消えていけばよいと考える。

日本は基本的には木の文化であるが、墓に関しては石を使ってできるだけ長く残そうと考えるし、もう一方では、墓碑銘が苔むし朽ちて風化し、誰の墓かわからなくなっても、それはそれでよしと考える。墓に関しての想いは複雑で、簡単に2元分割した文化論は通用しないだろう。それは、イギリスの墓においてもいえることである。

木のトーテムポールや墓碑を、それが元々あった場所や風景から切り離して、博物館で保存しようとする人々に対して、カナダ、アラスカ国境の島に住む人々は次のようなことを言ったという。自然のなかに聖なる風景を見ていたアンが、もし現代に生きていたら、どう言っただろうか。似たようなことばを発するだろうか。

「その土地に深く関わった霊的なものを、彼らは無意味な場所にまで持ち去ってまでなぜ保存しようとするのか。私たちは、いつの日かトーテムポールが朽ち果て、そこに森が押し寄せてきて、すべてのものが自然の中に消えてしまっていいと思っているのだ。そしてそこはいつまでも聖なる場所になるのだ。なぜそのことがわからないのか。」

（カナダ・クィーンシャロット島のハイダ族のことば、星野道夫「森と氷河と鯨」ｐ３９）

（事例２、図３）イギリス、スカーボローにあるアン・ブロンテの個人墓碑

LIE THE REMAINS OF	（次のものの）遺体が眠るところ
ANNE BRONTË	アン・ブロンテ
DAUGHTER OF THE	（次のものの）の娘
REVD P. BRONTE,	P.ブロンテ牧師
Incumbent of Haworth Yorkshire,	ヨークシャー、ハワース教会司祭
She died Aged 28	彼女は28歳で死去した
MAY 28 1849	1849年5月28日

Ⅱ－４　イギリス、ヨークのターク家の家族墓碑

今まで考察してきたように、家族墓碑銘は、単純な記載から豊かなライフストーリーを私たちに

語りかけてくれるし、それは他の資料とつきあわせた場合にさらに豊穣になると考えられる。

無名の人々の家族墓碑の場合には、ブロンテ家族のような伝記的資料が残されていないから、詳細なライフストーリーを知るには限界がある。しかし、逆に、無名の人々のライフストーリーに迫るには、墓碑を資料にするほかない場合もある。足りない部分は、資料のある事例と関係づけたり、他の墓碑と関係づけながら見ていくことができるだろう。

純粋に家族墓碑だけを見ても、心理学的に意味のある考察が可能な、興味深い墓碑を見つけることはできる。以下、そのような事例をいくつかとりあげてみよう。

事例3は、イギリス、ヨークシャーの古都ヨーク市の墓地の家族碑の一例である。ブロンテ家族よりも少し後、19世紀後半から20世紀初頭を生きた人々の墓である。この家族の場合にも、妻が先頭に書かれていて、最後には夫が書かれるという墓碑銘の形式はブロンテ家族のものとよく似ている。しかし、公共の場である教会に、戒めと神への感謝のことばと共に掲げられている記念碑の意味が強いブロンテ家族のものに比べると、より私的で、家族への愛情がよくあらわれている家族墓碑である。

この墓碑は、死去した順につくられたというよりも、最初に書かれた母親（妻）の死後か、中央に大きく面積をとって書かれた15歳の末の息子を失った後に、父親によってつくられたのではないかと推測される。

母親（妻）は、51歳で亡くなっているので、当時としては早世とはいえない。彼女は、幼い子ども3人を幼児期に亡くしている。立て続けに亡くなった子どもたちは、流行病だったのだろうか、この幼い3人の子どもたちの墓碑銘は母親を中心とした内容の文章で書かれていることや、文字も小さく文面も簡単で省略されてまとめて書かれていることから、母の死後に、彼らの死後数十年もたってから一緒に記したのだろうと推測できる。

しかし、アレクサンダーという名の子どもは、違っている。彼だけは、定型からはずれた語りがなされている。彼の名前の位置やスペースや説明が家族のなかでは、破格の位置をしめるからである。彼は母親が39歳ころ生まれた最後の息子で、父親と同じ名前を与えられている。母親（妻）を失った3年後に、この息子を15歳という大人になる直前の年齢で失った悲しみが、墓碑からは伝わってくる。たぶん彼は、末っ子として愛され、たくましい青年として育っていた期待の息子であったのだろう。

その後に記された女性と男性の二人は、たぶん成人した子ども夫婦ではないかと推測されるが、簡潔に死去の年月日と年齢だけが書かれているだけなので、家族のなかで、どのような関係なのかは正確にはわからない。これらの人々は、亡くなった時々に、墓碑に名前を追加されたのであろう。

そして、この家族の場合にも、ブロンテ家の父親のように、父親がもっとも長生きして最後に葬られている。たぶん、この父親がまだ壮年期に建立したであろう墓に、約40年後に、いちばん最後に葬られて、この家族墓碑の物語がしめくくられているのである。

この家族墓碑は、約40年という長い年月をかけて、建設した当人も、どのような物語ができるかわからなかったはずの、予測できなかった部分が次々に書き加えられていったもので、ストーリーが生成されるプロセスを物語っている。老いた父親は、当時としては特別に長生きしたが、その分、先だった多くの死を見届けた人物ではなかっただろうか。そして、その父親の死を葬って、彼の死去の日付を墓碑に標した人物は、この墓碑には名を残していない。この家族物語には、隠れた他者も共同参画している。

家族物語は、父親の死で閉じてしまうわけではなく、他者を生成的に巻き込んでいく。約100

年後に偶然に墓地でこの墓石を見つけ、苦労して読みにくい字を判読しつつ、この家族に想いをはせながらこの論考をまとめている筆者自身も、また、この家族物語に巻き込まれた他者の一人である。

（事例３　図４）　イギリス、ヨークのターク家の家族墓碑

In Affectionate Remembrance of
ElIZABETH MS TURK
DIED JULY 27 1878
AGED 51 YEARS
WILLIAM ALEX DIED APRIL 1. 1853. AGED 2YR
GEORGE ・・ MAR. 1. 1863 ・・ 6・・
AGENS ・・ AUG. 25 ・・ ・・ 2 ・・
CHILDREN OF THE ABOVE
ALSO
ALEXANDER.
YOUNGEST SON OF THE ABOVE
DIED SEPT .27. 1881 AGED 15 YEARS
ROSERY MS TURK 1885
AGED 42
JOHN MS TURK 1911
AGED 56
ALEXANDER MS TURK
DIED JUNE 1915
IN HIS 90 YEAR

（次のものへ）の愛情の思い出のために
エリザベス　MS ターク
1878年7月27日死去した
51歳
ウィリアム・アレックス　1853年4月1日死去した　2歳
ジョージ　1863年3月1日・・　6歳
エジェンズ　・・　8月25日・・　2歳
上記のものの子どもたち
また
アレクサンダー
上記の一番末の息子
1881年9月27日死去した　15歳
ロゼイ　MS　ターク　1885年
42歳

ジョン　MS　タ－ク　1911年
　　56歳
アレクサンダー　MS　タ－ク
　1915年6月13日死去した
　　９０歳

Ⅱ－５　イギリス、オックスフォードの天使像の家族墓碑

次の事例は、イギリスの大学町、オックスフォードのなかでも古い地域、ヘディントン石切場保存地区の小さい国教会の墓地にある、19世紀前半の家族墓碑である。この墓碑は、少し特殊なものだが、家族墓碑のなかでも芸術性の高い、あふれる愛が感じられる傑出したものだと考えられる。

図５のような、かれんな姿をした天使の彫像の下の台が墓碑になっている。この墓碑は、17歳の娘マーガレットを亡くした父親が建てたもので、通常の墓碑にはみられないマーシイという通称もつけられている。この名を何度となく呼んで育て、亡くなったあとも、繰り返し呼んでいたのであろう。美しい娘ざかりを亡くした父親の悲痛な気持ちが、この愛称を記さずにいられなかった気持として表れているように感じられる。

また、限られたスペースに書かれた「故郷（ホーム）に帰る」「光の向こうの中へ」ということばも、父親が娘の行く末に家庭のようなやすらかさや光を願う祈りが感じられる。墓碑には、聖書のことばや決まり文句が書き付けられることが多いから定型表現があるが、それでも、定型の中からどのことばを選択するかによって、その人が死者に向けた願望や祈りがうかがえる。

台の下には、「私たちが長く愛し、しばらくのあいだ喪失した、天使の顔がほほえむ朝と共に」という娘に対するあふれる気持ちが短い詩句によって綴られている。

マーガレットの名前の下に刻まれているのは、この墓碑をつくった父親の名前である。約22年後に亡くなった父親を葬ったのは、成人した子どもたちである。たぶん、この父親は、この墓石をつくったとき既に、自分の名前が刻まれる空間をあけておき、子どもたちにも遺言していたのにちがいない。父親の気持ちを受け継いだ子どもたちも、「愛するお父さんへ」ということばを贈り、死去という通常のことばを避けて、「休息」ということばを慎重に選んで刻んでいる。あたたかい愛のやりとりが感じられる仕合わせで美しい家族墓碑銘である。

なお、このように天使などをかたどった芸術性の高い彫像を墓碑にすることは、他にも多々例をみることができる。図６は、やはりオックスフォードの古い国教会墓地にある類似の一例である。図６では、十字架を片手に持ち、もう一方の手をあげている天使の羽の後ろに、たぶん女性である死者の墓碑銘が細かく刻まれているが、今では風化して判読することができない。そして台座には、女性の死後に後年追加された、WILLIAM KIMBERという男性の名前の墓碑銘が刻まれている。

（事例４　図５）　イギリス、オックスフォードの天使像の家族墓碑

In Her Loving Memory of
MARGARET (MARCIE) W. BEESLEY
CALLED HOME DEC. 16th 1911

INTO THE LIGHT BEYOND
AGED 17 YEARS
ALSO OUR BELOVED FATHER
CHARLES BEESLEY
AT REST MAY 6th 1933. AGED 79
"AND WITH THE MORN THOSE ANGEL FACES SMILE
WHICH WE HAVE LOVING SINCE AND LOST A WHILE"

彼女の愛する記憶のために
マーガレット（マーシー）・W. ビーズレイ
1911 年 12 月 16 日に故郷に召された
光の向こうの中へ
17 歳
また、私たちの愛する父親
チャールズ・ビーズレイ
休息する 1933 年 5 月 6 日 79 歳
"そして、私たちが長く愛し、しばらくのあいだ喪失した
天使の顔がほほえむ朝と共に"

今まで紹介してきたのは、19 世紀末から 20 世紀前半までの古い家族墓碑であった。しかし、このような形式の家族墓碑は、現代においても作られつづけている。

図 7 は、ヨークの墓地で 2000 年に作られた新しい墓であり、これから家族ライフストーリーが生成されていく始まりを示している一例である。このように、まず一人の死者の名が一番上に刻まれ、その下に死者の名が順次つけ加えられるように、あらかじめ空白をつくって建造されることがふつうである。

このように家族墓碑は、あらかじめある程度の様式とレトリックを与えられているが、それが完成されるとき、実際にどのような形になるかはまだ誰にもわからず、何十年かかるかもわからない。しかし、人生を待ち受けている死が、いつどのように訪れるかはわからないが、いつかは誰にでも訪れるから、必ず墓碑の空白は埋められていくはずである。墓碑にあけられた空白は、単なる空白ではなく、そこに参る家族に物語を想像させてくれる。その物語は、まだ家族が無事で自分にいのちがあることを感謝し、やがていつかは自分にも死が訪れることをすこしずつ実感として準備させてくれるだろう。死者の運命と、墓碑に名前や命日を刻んで死者を弔う生者、それらの人々と運命や時間との共同生成によって、長い時間をかけて墓碑ができあがっていくのである。

Ⅲ 現代イギリスの墓地にみる生者と死者のコミュニケーション：親の墓と子どもの墓にみる死者へのメッセージ

「家族ライフストーリーが凝縮された場所としての墓地」をテーマにした今まで論考では、おもに 19 世紀後半から 20 世紀初めの古い墓を事例にしてきた。それら古い墓においても、そこを訪れる

人々に今でも何かを伝える力をもっているから、墓地では生者と死者とのコミュニケーションが、常に新たなかたちで生成されつづけるといえる。しかし、どちらかといえば、古い墓は「記憶の場所」としての心理学的機能のほうが強いだろう。

古い墓では、家族の死は、たとえその家系の者や後継者が今も生きていたとしても、喪のプロセスを終えて「死者」が完全に死に、「死者」として墓場のなかに安定して位置づけられている。日本文化のことばでいえば、それらの死者は、「死者」というよりは、もうすでに「先祖」や「祖霊」の領域に入っているのである。古い死者のたたりや幽霊などを蘇らせる伝承や語りが特別になされる場合を除けば、1世紀以上前に亡くなった人々の死は、今ここで生きている自分たちの人生と、生々しく切りむすんで、今ここにいる人々の感情を激しく揺るがしたり、喪失の悲しみに浸らせることは少ないだろう。古い墓地は、「記憶の場所」であり、「死者」は、「祖先」「歴史上の人物」として物語られる。

それに対して、死後それほどの年月がたたない新しい死者の墓場は、別の心理的機能のほうが、よりドミナントに働くと考えられる。死者を埋葬してから間もない新しい墓場は、死者の家族にとっては、「喪のプロセス」が進行していく場所である。まだ死者の記憶も生々しく、喪失の感情も大きいゆえに、墓場は、さまざまなかたちの「生者と死者のコミュニケーションの場所」という機能をより強くもつと考えられる。

墓地は、生者と死者の相互行為としての語りが生成されている場所としてとらえられる。以下においては、特に「生者と死者のコミュニケーションの場所」としての墓地について、現代の新しいイギリスの墓、そのなかでも生者と死者が「親と子」という関係性をもつ墓をとりあげて、その特徴のいくつかを考えてみたい。

Ⅲ－1　現代の墓地にみる生者と死者のコミュニケーション：娘から亡き母へのメッセージ

最初にあげる事例5（図8）は、イギリス、ヨークの市営墓地で見つけたものである。埋葬されて日が浅く、埋められた土の上に花が飾られ、木の簡単な墓標がおかれているだけで、墓石はまだつくられていない。図8のように、木の墓標に簡便にビニールで覆った紙がとりつけられており、そこには、次のような自作の詩句が書かれていた。

母親がどういう理由で亡くなったのか、死者の年齢も、この詩句を書いた娘の年齢もわからないが、亡くなった母を悼み、母を喪失した寂しい感情を綴ったメッセージは、読むものの心を打つ。このメッセージは、雨に濡れないようにビニールで覆う程度の簡略なものであり、ごく一時的なもの、テンタティヴなものであることは、このメッセージがもつ性質をよく表している。

このメッセージは、母が亡くなって間もないときの心情を訴えたものであり、喪のプロセスの進行と共に、ことばの内容は、時間と共に変化していくであろう。娘も、これと同じことばを墓石に刻みたいとは思わないのではないだろうか。メッセージを墓石に刻もうとするとき、人はそのことばを「永遠」に残そうとする。それに対して、コミュニケーションのためのメッセージとしては、「現在」の気持ちや感情を相互行為として伝えることのほうが重要である。墓場では、「永遠の生」をめざした記憶するための語りと、「現在の生」を生きるコミュニケーションの語りの両方が交差している。喪の途上で語られている事例5の語りは、後者にウエイトがおかれている。

このような、生者が死者とコミュニケーションする語りは、生き残った者が死を受け容れ、死者を葬っていく喪のプロセスをあらわすと考えられる。それと共に、生き残った者が死者の何かを記

念に残し、死者の何かを受け継いで生きていこうとする生成継承的プロセスをあらわすと考えられる。死を弔うことを、悲哀から受容にいたる喪のプロセスとしてみるだけではなく、生者と死者の関係性のなかで、生者と死者のコミュニケーション・プロセスとしてみていくことが重要だろう。

死は、その死者の人生にとってのライフ・イベントであるだけではなく、その周囲の人々をまきこんで、人間関係的ライフ・イベント、世代継承的ライフ・イベント、地域共同体的、あるいは場所（トポス）的ライフ・イベントとして行われる。死には、生者と死者の語りの相互行為という意味でのコミュニケーションが含まれている。

今後は生者と死者のコミュニケーションという観点から、死にゆく者の語りと見送る者の語り（やまだ　2000c）、死者を亡くしたときの語り（やまだ　2000b、やまだ他 1999）、死者を亡くして年数を経たときの語り（やまだ 1997、やまだ他 2000）、死の現場の語り（やまだ　2004）、そして、本論で扱っている「墓地の語り」などを統合的に見ていく視点が必要だと考えられる。

新しい墓地では、生者が死者に語りかける多様な言語的メッセージが行き交っている。言語的メッセージは、大きく分けて３種類あるだろう。第１のタイプは、事例５のように、生者が死者に向かって語りかけるものである。第２のタイプは、生者が人間以外のもの（神、仏、超越的なもの、自然など）に向かって、死者の冥福や願いや祈りをささげる語りである。第３のタイプは、生者が死者のことを、墓場を訪れる多くの人々に向かって語りかけるものである。第３のタイプでもライフストーリーが語られるが、語り口は事例５とは異なってくる。たとえば、墓地に母親の写真を飾り「私の母は、家族みんなから愛されるやさしい人でした。とても幸せな人生を送りました。」というメッセージが綴られている例などがあった。

墓地にある多くのメッセージは、１）死者に向かって語りかける、２）死者に対する願いや祈りを、神など人間を超えるものに向かって語りかける。３）死者のことを、（墓地を訪れる）他者に向かって語りかける、という少なくとも３つのコミュニケーション機能を同時にもっていると考えられる。ひとつのメッセージが同時にいくつもの機能をもつことは、死者が葬られた場所（墓地）の語りだけではなく、死者になった場所（死の現場）の語りにおいても共通していた（やまだ　2004）。ただし、墓地の語りよりも事故死の現場の語りのほうが、第３の機能、つまり現場を訪れる他者へ向かう方向性もメッセージ性も強くなり、私的な死ではなく公共性をもった社会的死という意味づけが強くなると考えられる。

（事例５　図８）現代のヨークの墓地の、娘から亡き母へのメッセージ

Mum I think about you everyday	母さん、あなたを毎日想っているから
My love for you will never stray	私の愛は、迷子になんかならない
If I had just one wish, it would be	もし、ひとつだけ願いがかなうなら
To reach out to touch you	手をとどかせて、あなたに触れてみたい
Give my love to you and tell you	愛をとどけて、あなたに言ってみたい
How much I miss you	どれほど淋しいか、あなたがいなくなって
From your loving daughter	あなたの愛する娘より
MANDY	マンディ

Ⅲ－２　現代イギリスの子どもの墓にみる死者へのメッセージ

墓地は、一見すると寡黙な静寂な場所であるが、そこは、さまざまな言語的・非言語的な声が交差している多様なコミュニケーションの場としてみることができる。

墓地では、生者と死者とのコミュニケーションは、狭義の言語によって語られるだけではなく、広義の言語によって「非言語的コミュニケーション」によって多様に語られる。たとえば、「墓地の形態」や「墓石のデザイン」、「花」をたむける、「石」を置く、宗教的な「記号」（十字架や天使など）を記す、生前死者が好きだった「食物」や「事物」を供える、「線香」や「水」を供えるなど、多様なコミュニケーション方法がとられる。墓地では、非言語的コミュニケーションが多用されるが、それは「この世」の感覚を超える世界と交流しようとするためであろうか。

次に示す事例６－事例９（図９－図１２）は、イギリスの現代の墓地において、子どもを亡くした親が建てた墓碑において、親が死者である子どもに語りかけているメッセージのいくつかの例である。それらの墓は、写真で示すように、ぬいぐるみなどかわいらしい子ども用グッズで飾られていた（図９－図１４参照）。

多産・多死の時代とは異なり、現代では幼い子どもの死も、特別の墓で厚く葬られることが多い。家族のなかでの子どもの位置も、親が子どもの死にたくす想いも大きく変わったと思われる。

現代イギリスの子どもの墓は、定型の墓石の様式から出ていることが多いためか、墓場のなかでも華やかで目立っている。墓石もハート形、熊の形、天使の形、本の形、花の形などさまざまであった。墓の周りには白い石が敷き詰められたり、種々のカラフルな花でおおわれたりして、デザインもさまざまに凝っていた。埋葬されたばかりでまだ墓石もない新しい墓(図１４)はもちろん、建立されて月日がたった墓でも多くの花が絶えないで飾られており、手入れもきれいになされていた。

墓は、天使の彫像や人形、熊やウサギなどのぬいぐるみ、光をはなつ灯り、風車、造花、かご、ミニチュアのおもちゃなど、親の子どもにたくす想いのありったけすべてを形にしたような、かわいいグッズで盛りだくさんに飾られていた。

墓はいつも美しく飾られ、おもちゃは新しく次々に追加されているのだろう。これらの盛りだくさんの子ども向けのおもちゃは、この墓地が亡くなった子どもたちと親とがここで共に生きている場所であることを示しているように思われる。両親は、この墓地へ来ては子どもたちに語りかけているのだと考えられる。

これら子どもの墓石の墓碑銘に記された亡き子どもへのメッセージのいくつかの例を、事例６－事例９に示す。親が子どもを亡くしたときの悲しみと愛おしさ、子どもに安らかな眠りを祈る親の想いが、限られたスペースと短い厳選されたことばに凝縮されており、気持ちがストレートに伝わってくるものが多い。

これらの意匠をこらした墓地のデザインやことばは、亡き子どもに向けられたメッセージであるとともに、墓地を訪れる人々に、我が子が短いいのちであったけれど、この世に生きていたことを示すメッセージにもなっている。特に生まれたばかりの乳児の場合には、両親以外にはほとんど誰にも知られずに亡くなり、社会的には生きられず、人々に認知されなかった子どもたちであるから、せめて墓地のなかで人々の目に触れて生かしてあげたいと願うのではないだろうか。

死者を弔う場所にぬいぐるみが多く置かれるのは、子どもの墓の装飾に限らなかった。よく似たぬいぐるみや人形たちの装飾は、同時多発テロ事件で亡くなったグラウンド・ゼロの場所で、大人の死の追悼品としても多く飾られていた（伊藤 2004、やまだ 2004）。なぜ、ぬいぐる

みなのかということに関しては、次のような理由が考えられた。

１つには、死者を慰め、墓地を訪れる生者をも慰める「慰撫」の品として。ぬいぐるみは、花などと同様に、死者も生者も無条件に慰め、ほっとさせる。ぬいぐるみは、安らぎや癒しをもたらし、寂しい場所に華やぎをもたらし、人の気持ちを元気づける効果をもつだろう。

２つめには、死者の「お供」として。死者をひとりぼっちにしておくのは、寂しすぎる。死者には、おもちゃ、従者、友達、ペットの代わりなど、現代版の土偶が死者のお供をしているのかもしれない。

３つめには、死者の身代わりの「人形（ひとがた）」として。ぬいぐるみは生者に訴えかける無言のメッセージをもつ。あどけない表情の熊のぬいぐるみは、無垢な子どものつぶらな瞳のように愛くるしい表情で私たちに訴えかける力をもつ。ぬいぐるみが、墓地に置かれ冷たい雨に濡れていれば、それを見る私たちにとっては、単なるモノとして看過できない感情、罪のない子どもに対するような「哀れ」な気持ちをかきたてられる。ぬいぐるみは、死者の代わりの「人形（ひとがた）」の役目もしているだろう。

事例６－９　現代ヨークの墓碑にみる、親から死んだ子どもへのメッセージ

（事例６　図９，　０歳　死産）

LEWIS ANDREW	ルイス　アンドリュー
MILLER	ミラー
BORN SLEEPING	眠って生まれた
20TH JAN 1998	1998年1月20日
S WEET DREAMS ALWAYS	いつも甘い夢を
LOVE	愛してる
MUMMY & DADDY	母さんと父さん

（事例７　図１１，　０歳　生誕１日）

LAURAN PAIGE SMITH	ローラン　ページ　スミス
Born 14-2-01	2001年2月14日誕生
Died 15-2-01	2001年2月15日死去
Our Little Angel	私たちの小さい天使
Forever In Our Thoughts	私たちの想いのなかで　永遠に
Goodnight Godbless	おやすみ　神の祝福を

（事例８　図１０，　０歳　生誕３日）

JACK	ジャツク
ELVIS	エルヴィス
DAVISON	ダヴィソン
8.1.1999-11.1.1999	1999年1月8日-199年1月11日
OUR SPECIAL	私たちの特別に
GORGEOUS BOY	すばらしい男の子

NIGHT NIGHT	夜よ　夜よ
SLEEP TIGHT	眠れ　ぐっすり

（事例９　図１２，　　12歳）

Cherished	かわいがられた
STEPHAN ADAM	ステファン　アダム
GLASBY	グラスビイ
14.5.1986-27.3.1998	1986年5月14日-1998年3月27日
Your smile is	あなたの微笑みは
engraved upon	深く刻まれている
our hearts.	私たちの胸に。
We will always	私たちはいつまでも
love you	あなたを愛しつづける。
Mum & Dad	母さんと父さん

アリエス（1983/1990）によれば、19世紀から、死は怖れて遠ざけられるものではなくなり、死は日常生活のなかにあふれ、人は死とともに生きることに満足を見いだすように変化したという。それは、みずからのために怖れおののくような死でもなければ、油断に乗じて人を襲う死でもなく、「愛する人を奪い去る死、すなわち他者の死」というモデルができてきたことを意味する。そして、「死にそなえるよりも、死者の想い出を保持する」ようになり、服喪が拡大し、想い出が崇拝され、墓地通いや墓参りが行われるようになってきた。墓地は家族が巡礼のように訪ねる場になり、追憶の場に変わった。

墓地の変化の特徴をもっとも顕著に示すのは、子どもの墓である。なぜなら、子どもの死は、「許し難い死」の筆頭にあるからである。16世紀以前には子どもの墓碑は存在しないか例外的なものであったが、19世紀からは、子どもの墓碑が墓地に現れるようになり、やがて、子どもを死者としてよりも生者として示そうとする意志が明確になってきた。子どもは「葬儀社の最良のお客さん」になり、「墓におけるドラマの第一の主人公」になってきた。

確かに、現代イギリスの墓地においても、子どもの墓は、生者と死者のコミュニケーションが交わされる特別の劇場のような装いをしている。現代の墓地、特に子どもの墓地は、家族ライフストーリーが濃密に語られる生きた博物館である。

以上、この論考では、イギリスの墓地のフィールドワークから、墓地を「人と人との関係物語」が語られる場所という、心理学的な観点から考察してきた。まず第1には、家族ライフストーリーが語られる記憶の「場所」として、イギリス19世紀末から20世紀前半の家族墓碑をとりあげて、その特徴を調べた。第2には、現代イギリス墓地にみられる生者と死者のコミュニケーションという観点から、特に親や子が死者に語りかけているメッセージや墓を飾る非言語的な装飾に注目して幾つかの事例を具体的にみてきた。

墓地の心理学的な考察は、まだはじまったばかりであるが、歴史学や社会学や人類学とはまた違った視点から眺めることができるのではないだろうか。墓地は、死の側から人間のライフストーリーが語られている場所、それも世代継承という長い時間軸のなかで物語が語られている「心理的場所」であり、生者と死者が現に生きたコミュニケーションを行っている「心理的

場所」としてとらえると、興味深い視点が提供できると考えられる。

（謝辞） 本報告に掲載したヨークの墓地の写真は、ヨークで開催された *The Social Context of Death Dying and Disposal 6th International Conference* に参加し、現地の専門家に墓地を案内してもらった時に、筆者と同行した加藤義信氏が撮影したものである。快く使用を許してくださった氏に感謝する。

引用文献

Ariès, P. 1983. Images de l'homme devant la mort. Editions du Seuil. 福井憲彦訳.1990. 死の文化史. 日本エディタースクール出版部.

Brontë,A. 1847. Agnes Grey. London; Thomas Cautley（田中晏男訳 2001 アグネス・グレイ 京都修学社）

Brontë,A. 1848. The tenant of wildfell hall. London; Thomas Cautley （山口弘恵訳 1996 みすず書房）

Brontë,E. 1847 Wuthering heights. London; Thomas Cautley.

星野道夫. 1996. 森と氷河と鯨. 世界文化社.

Howard, T. 1995. Brontë country. London; Caxton editions.

伊藤哲司. 2004.「グラウンド・ゼロ」での犠牲者追悼のかたちと 9.11「同時多発テロ」の位置づけ ―テロ事件１１ヶ月後のニューヨークを歩いて. 「人生サイクルと他界イメージの多文化比較による生命観モデルの構築」科学研究費報告書.5-2.

やまだようこ. 1997. いない母のイメージと人生の物語 濱口惠俊編 世界のなかの日本型システム. 新曜社. 281-300.

やまだようこ編. 2000a. 人生を物語る –生成のライフストーリー. ミネルヴァ書房.

やまだようこ. 2000ｂ. 喪失と生成のライフストーリー ―F1 ヒーローの死とファンの人生. やまだようこ編. 人生を物語る. ミネルヴァ書房. 77-111.

やまだようこ. 2000ｃ. 死にゆく過程と人生の物語. カール・ベッカー編. 生と死のケアを考える. 45-65.

やまだようこ・河原紀子・藤野友紀・小原佳代・田垣正晋・藤野志穂・堀川学. 1999. 人は身近な死者から何を学ぶのか ―阪神大震災における「友人の死の経験」の語りより. 教育方法の探究２, 61-78. 京都大学大学院教育学研究科.

やまだようこ・田垣正晋・保坂裕子・近藤和美. 2000. 阪神大震災における「友人の死の経験」の語りと語り直し 教育方法の探究３, 63-81. 京都大学大学院教育学研究科.

やまだようこ. 2004. 事故死の「現場」における生者と死者のコミュニケーション ―ニューヨーク、グラウンド・ゼロにおける追悼の語り.「人生サイクルと他界イメージの多文化比較による生命観モデルの構築」科学研究費報告書 5-3.



図１ブランウエルが描いたブロンテ姉妹、左からアン、エミリー、シャーロット。
真中にあったブランウエル自身の自画像は、後から消されている。

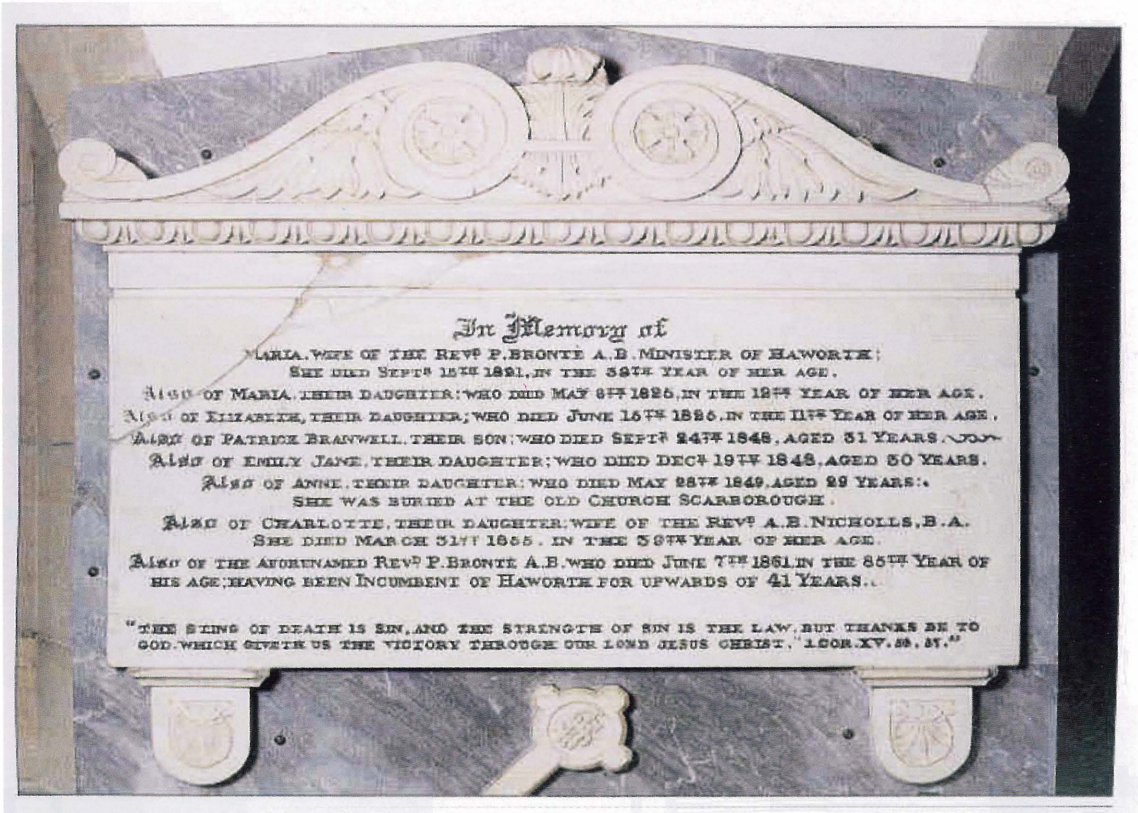


図２（事例１）　イギリス、ハワース教会のブロンテ家族の墓碑銘



図３（事例２）　イギリス、スカーボローにあるアン・ブロンテの個人墓碑



アンの故郷、ハワースの風景



日の出を仰ぎ見る女性（アン・ブロンテ画）

アンが描いた浜辺の風景
（浜辺で日の出をあおぎ見る女性像、
アン・ブロンテ画、ブロンテ全集９
「ワイルドフェル・ホールの住人」
月報７　みすず書房より）



図４（事例３）　イギリス、ヨークのターク家の家族墓碑（1987 年－1915 年）



図５（事例４）

イギリス、オックスフォードの天使像の家族墓碑（全体）（1911 年－1933 年）



図５（事例４）の台座部分



図６　オックスフォードの別の天使像の家族墓碑



図７　現代イギリス、ヨークの墓地にある家族墓碑銘の始まり（下部が空白）　2000 年

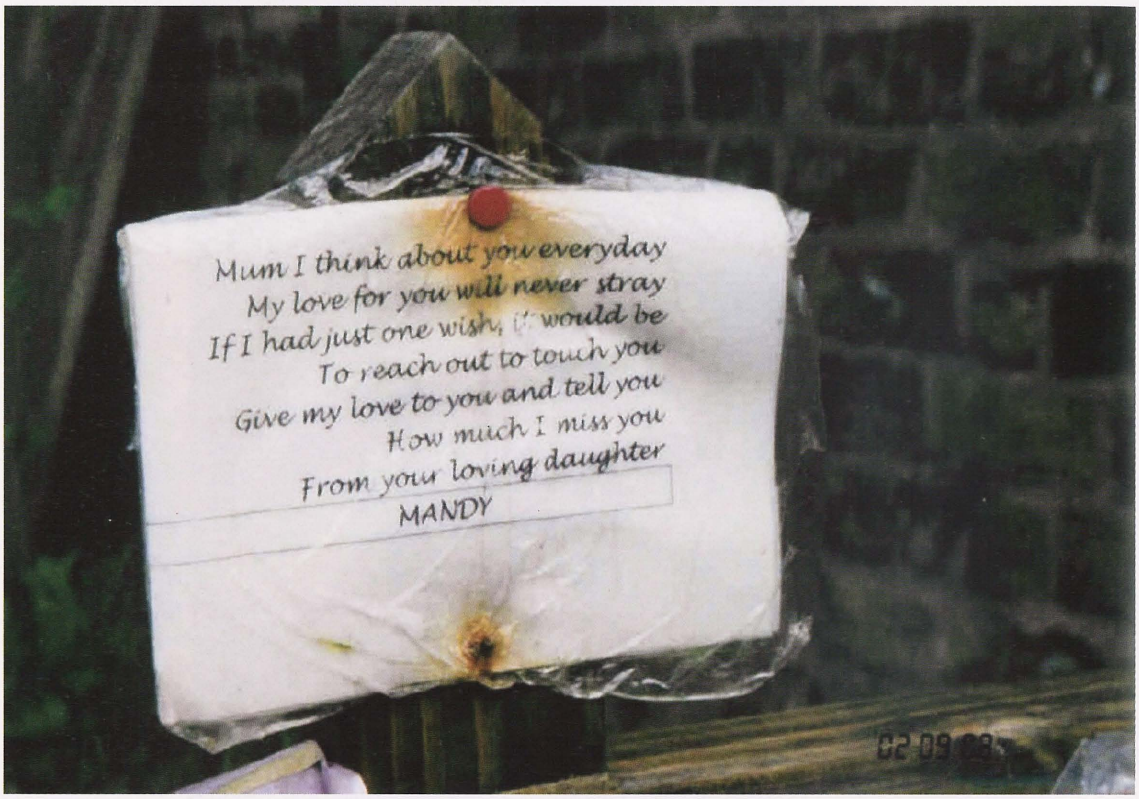


図８（事例５）　現代の墓地にみる、娘から亡き母へのメッセージ（ヨーク）



図９（事例６）死産の子ども墓碑



図 10（事例８）生誕３日の子ども墓碑



図 11（事例 7）生誕 1 日の子どもの墓碑



図 12（事例 9）12 歳の子どもの墓碑。家族墓碑で右は空白になっている。

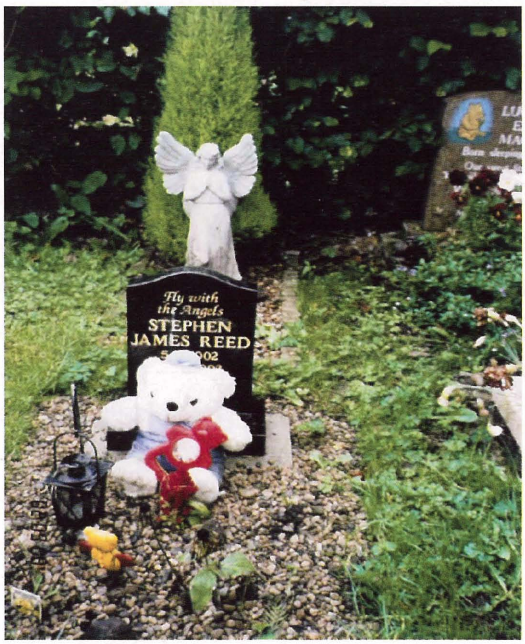


図 13　ぬいぐるみ等で飾られた子ども墓地

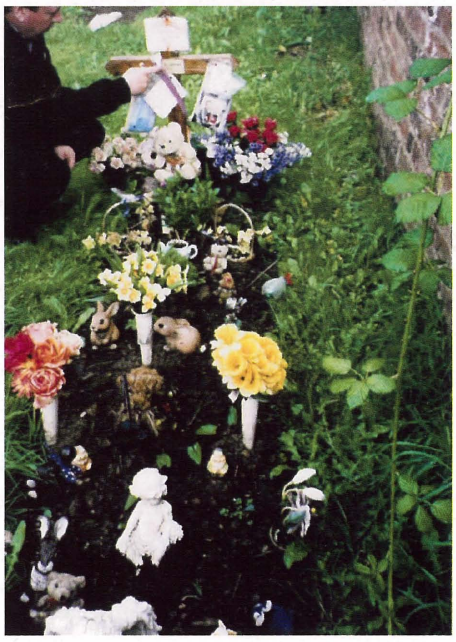


図 14　新しい子ども埋葬地の装飾

5-2

「グランド・ゼロ」での犠牲者追悼のかたちと 9.11「同時多発テロ」の位置づけ

―テロ事件11ヶ月後のニューヨークを歩いて―

伊藤哲司（茨城大学）



自由の女神と、世界貿易センタービルがあったマンハッタンの風景（船上から）



世界貿易センタービル跡地（グランド・ゼロ）

2001年9月11日、アメリカ合衆国のニューヨークなどで「同時多発テロ」が発生した。その日、ニューヨーク・マンハッタンにあった世界貿易センタービルにハイジャックされた航空機が突っ込み、ビル倒壊にともなって数千人が犠牲となり、アメリカをはじめ世界に衝撃を与えた。その首謀者とされるオサマ・ビンラディン氏はいまだ拘束されず、米軍はアフガニスタン攻撃に続いてイラク戦争を展開。アメリカが「テロとの闘い」を進めるものの、暴力の応酬は収まる気配を見せていない。周知のとおりこの事件以後の強権的なアメリカの政策には、日本などが強い支持をしているものの、国際社会の理解を必ずしも得られないままで、言語学者のチョムスキーやドキュメンタリー映画監督のマイケル・ムーアなどによる、アメリカ国内からの強い批判の声も上がっている。

「同時多発テロ」から1年とたっていない2002年8月上旬、やまださんと私はオタワ（カナダ）での行動発達研究学会（ISSBD）に参加したのちニューヨークに立ち寄り、「グランド・ゼロ」と呼ばれる世界貿易センタービルの跡地に立ち寄った。その周辺では、夥しい数の星条旗と犠牲者追悼のためのメッセージなどが飾られていた。当日の私の旅日記と写真から、その様子をお伝えしたい。

2002年8月8日（金）　ニューヨーク

ニューヨークのハーレムにあるYMCAに泊まって2日目の朝、独房のような蒸し暑い部屋のドアを開けたら、廊下の方がはるかに涼しかった。日中はそれなりに気温が上がるが、朝は20度ぐらいまで下がるようだ。シャワーを浴びて外へ出た。歩いてほんの2〜3分のところに地下鉄の135番通り駅があり、その目の前にファーストフードの店がある。黒人客に混じって座り、ハムと卵のサンドイッチとコーヒーを若い女性店員に注文した。中年の黒人男性が、ひとり声を出して新聞を読み笑っている。気の強そうな女性店員が「うるさい！」と注意した。

地下鉄に乗り、やまださんが泊まっているホテルへに出向いた。そのまま一緒にダウンタウンの方向へ向かう地下鉄に乗った。手持ちのガイドブックには貿易センタービルがまだ載っている。地下鉄の路線図も、世界貿易センタービルの敷地内を通ってもう少し南まで行けるかのように描かれている。しかし、そのひとつ手前の駅から先は、行き止まりになっていた。

地上に出て、2ブロックほど歩くと、工事中で行き止まりになっているところに出くわした。路上で小さな店を構えている売り子が、現場に向かって左側から行きなさいと教えてくれた。横手にさらに2ブロックぐらい行ってからまっすぐ入っていくと、今はグランド・ゼロと呼ばれている現場の脇に、案外簡単に出ることができた。

ビルが建っていたところは、瓦礫がすっかり片づけられ、地下数階分まで掘り下げられて、整備のための工事をしているところだった。もちろん中に入ることはできないが、フェンスだけで囲まれて現場が見渡せるようにしてあるところがあり、多くの人が様子を見に来ていた。

そこに巨大なビルが2つそびえ立っていたということを、想像することは難しい気もするし容易な気もする。難しいなと思うのは、現物を直接見たことがないため。容易だなと思うのは、まわりには比較的高いビルがそびえているのに、そこだけぽっかりと巨大な空間があいているためだ。上空を見上げ、ここに立っていた高さ400メートル以上あるビルに飛行機が突っ込んだあの光景を想像してみた。わずか11ヶ月前。今日と同じように青空が広がる日だった。

その現場に隣接して立っている教会の周囲のフェンスには、犠牲者の追悼のための寄せ書きや写真などがびっしりと付けられていた。遺族によると思われる追悼文と犠牲者の写真もたくさんあり、一般向けの追悼文も多い。そのいくつかをメモしてみた。（すべて原文のママ）

Gone but not forgotten 9-11-01.（2001年9月11日は行ってしまったが忘れない。）
We shall return to build highter.（我々は、より高く再建してみせる。）
Peace, hope, love. We stand strong together.（平和、希望、会い。我々は力強く共に立ち上がる。）
Proud to be an American.（アメリカ人であることを誇りに思う。）
God bless America.（アメリカに神の加護を。）
God bless on great country U.S.A.（偉大なるアメリカ合衆国に神の加護を。）
My daddy, my angel. We will be together again.（私の父、私の天使。私たちは再び一緒になるだろう。）

あたりでは、「I love NY」（「ニューヨークが好き」「love」の部分は赤のハートマーク）というデザインが付けられたTシャツや、事件の報道写真がまとめて載っている冊子、それに貿易センタービルを描いた絵などが売られている。絵はがきの中には、指名手配されたオサマ・ビンラディン氏をデザインしたものもあった。

さらにダウンタウンの方向へ歩いていくと、事件当時の塵芥を大量に浴びたままになっている洋服のショーウインドウを、そのまま記念に残している店があった。アメリカにとって前代未聞のあの事件を、何とか記憶にとどめておこうという努力と執念が感じられる。

しかし、その地域を数ブロック離れると、事件の痕跡はどこにも見られなくなる。大惨事であったことには違いないのだがマンハッタン全体が攻撃の対象になったわけでもなく、直接的な被害はきわめて局所的なものだったということがわかる。

午後から用事があるというやまださんと別れて、自由の女神を見物するためにフェリーに乗ることにした。驚いたのは、飛行機に搭乗するときのように、X線による手荷物検査があることだった。私の後ろに並んでいた女性がその検査場で写真を撮ったらしく、係員の比較的若い白人女性がすごい形相で睨み付けて、「写真を撮るな！」と怒鳴った。

自由の女神は、私が漠と想像していたよりもずっと大きかった。女神が向いている方向から左手の方に、巨大なハドソン川を挟んで、マンハッタンの高層ビル群が見える。ここからの風景に馴染んだ人にとっては、一番高い貿易センタービルが見えないことは、本当にショッキングなことなのだろう。背が高くて巨大なお腹を抱えたパークレンジャーが、比較的わかりやすい英語で、周りの人々に解説をしていた。曰く「あそこにあった貿易センタービルが攻撃された。彼らは、自由とアメリカを攻撃したのだ！」(写真 26)

堂々とした話しぶりの解説が終わると、大きな拍手がわき、さらに何人かの人が感謝の言葉を述べつつ彼に握手を求めて近寄っていった。

マンハッタン側に戻り、エンパイアステートビルのところまで行ってみた。キングコングがよじ登る風景を想像してみたら、ちょっと可笑しかった。こんな巨大なビルが、日本の戦前から立っているというのは本当に驚きだ。建物の中に入るときには、またX線による手荷物検査があった。他の博物館でもあったから、相当ピリピリしているのだろう

ブロードウェー近くの HAKATA という店で一人夕食をとった。日本人以外の客のほうがはるかに多く、お寿司などを美味しそうにほおばっている人たちがたくさんいた。博多で食べる博多ラーメンとはやはり違うが、女性店員がにこやかに、「美味しいですか？」と聞いてきたときには、「イエス」と答えるほかなかった。食べ終わって大きなくしゃみを２回。すると、近くにいたやや年輩の白人女性２人が、こちらを見て「God bless you.（神の加護を）」と言った。

ハーレムに戻る地下鉄の中、黒人のカップルが連れている赤ちゃんがベビーカーに乗せられていた。向かいに座っていた白人の女性 2 人が、その赤ちゃんを見て笑顔を送っていた。ハーレムに住んでいる黒人たちとは、また雰囲気がひとつ違うようにも思えたが、悪い光景ではないなと思った。

YMCA に戻って、夕暮れ後にもう一度外へ出てみることにした。YMCA のフロント近辺にいた警備係の黒人男性に「近くにいいバーはないですか？」と尋ねると、すぐ近くにいた黒人女性が、22WEST というジャズも聴かせる店があると教えてくれた。それは嬉しいと思い行ってみたのだが、完全にシャッターが下りていた。窓には「Lost our lease（賃貸契約を失った）」の表示が。どうやら最近になってつぶれてしまったらしい。

ハーレム発信の文化を担ってきた店がけっこうつぶれていると聞く。ハーレムの治安は比較的よくなってきたと言われるが、同時にそういったものが失われていくのは、本当に寂しいことだなと思う。夜の帳が下りたハーレムの街で、開いているのは食品店と美容院とマクドナルドぐらい。あたりを少しだけ散策して YMCA に戻った。

何せニューヨークは初めてなので、「同時多発テロ」以前の雰囲気は知らない。しかし、見渡

せば必ず一人は見える異常に太った人たちの姿も、ハーレムとは対照的なブロードウェーの華やかな雰囲気も、以前と大して変わっていないのだろう。もちろんテロ事件で多大な犠牲を出したことは間違いなく、痛ましいことこの上ない。しかしそれは、国全体が荒廃した状況に追い込まれているアフガニスタンやイラクに比べたら、大変不謹慎な言い方ではるが、これはニューヨークのマンハッタン、そのまたごく一部の場所で起こった、世界のなかではありふれた出来事のひとつにすぎなかったというのが、一つの冷静な見方というものだろう。

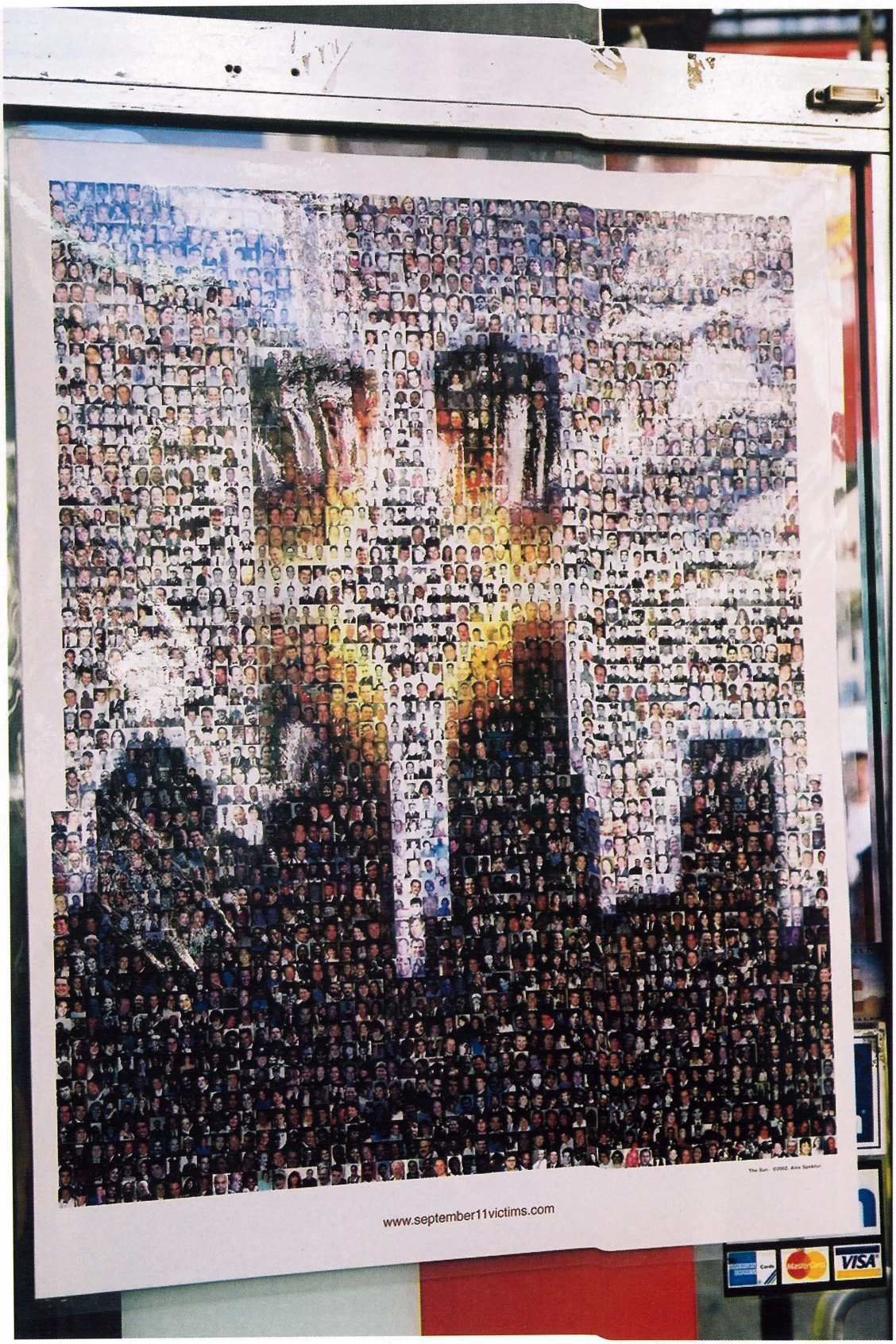
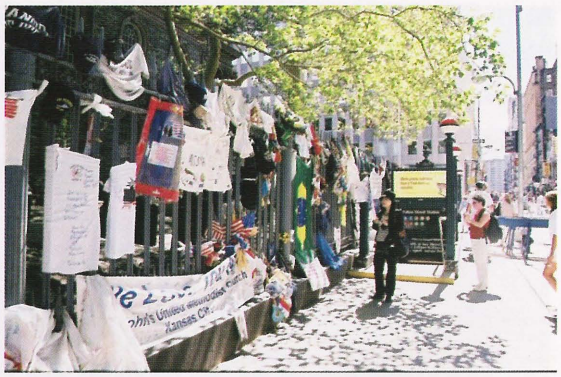


写真 1　犠牲者たちの顔写真で作られた貿易センタービルのポスター





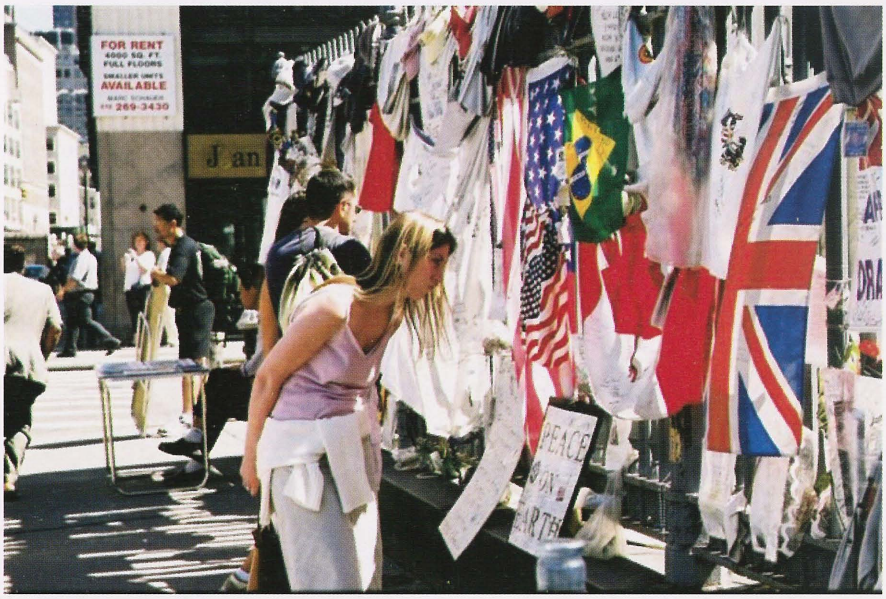




写真 2〜5　「グランド・ゼロ」近くの教会のまわりで









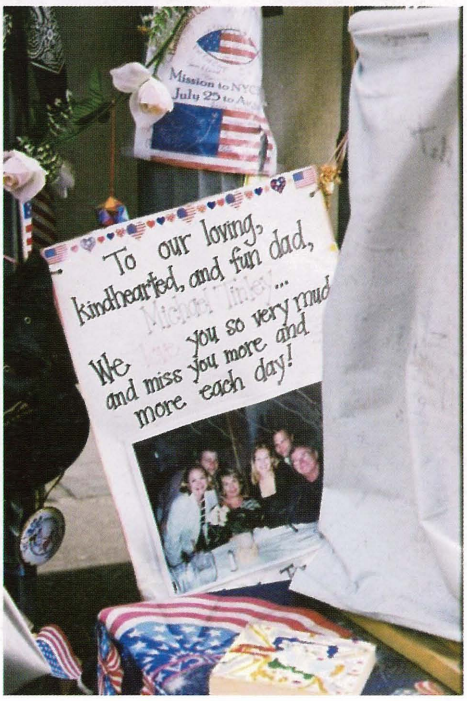


写真 6～10　顔写真入りの犠牲者追悼のメッセージ①





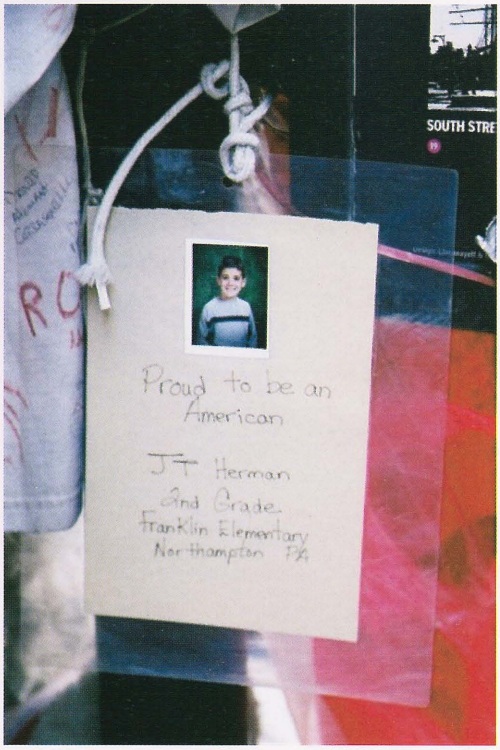


写真 11～13　顔写真入りの犠牲者追悼メッセージ②



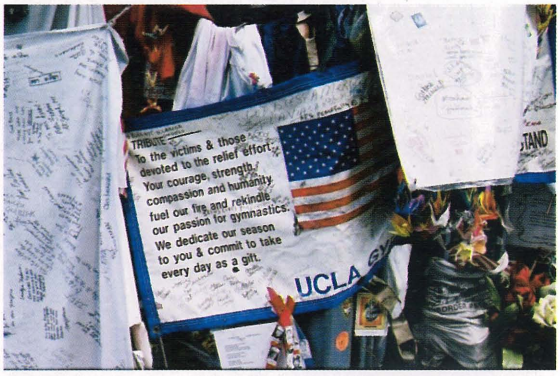








写真 14～18　星条旗やぬいぐるみなどをあしらった追悼メッセージ

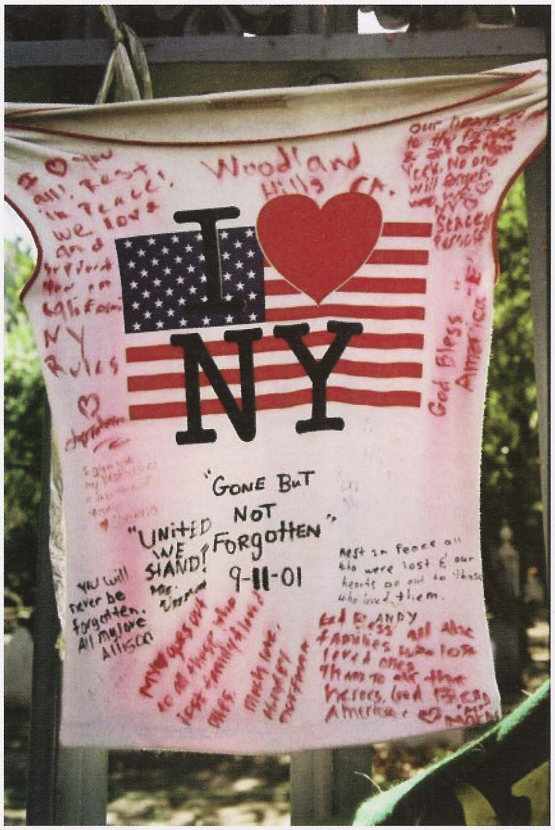




写真 19・20　「I love New York」のメッセージ

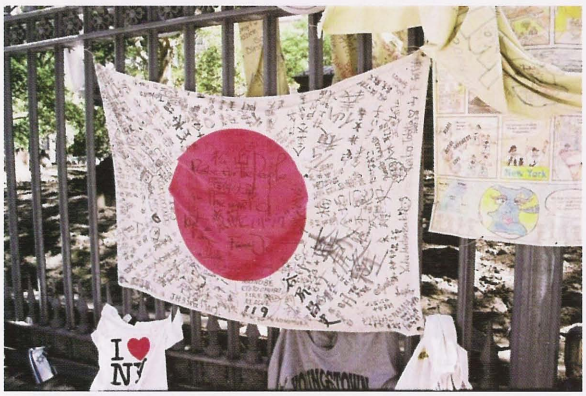




写真 21・22
他国の国旗を使ったメッセージ





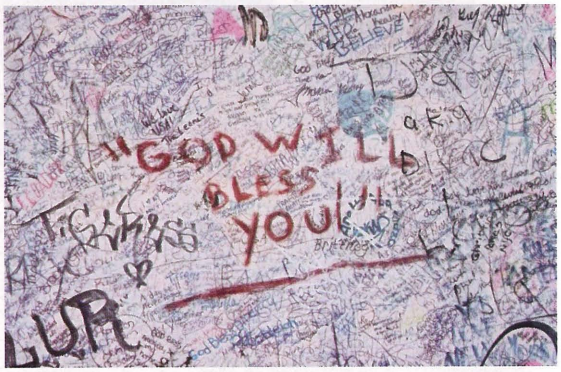


写真 23～25　夥しい数の寄せ書きのメッセージ



写真 26　リバティ島でからマンハッタンを眺め解説するパークレンジャー
（本文参照）



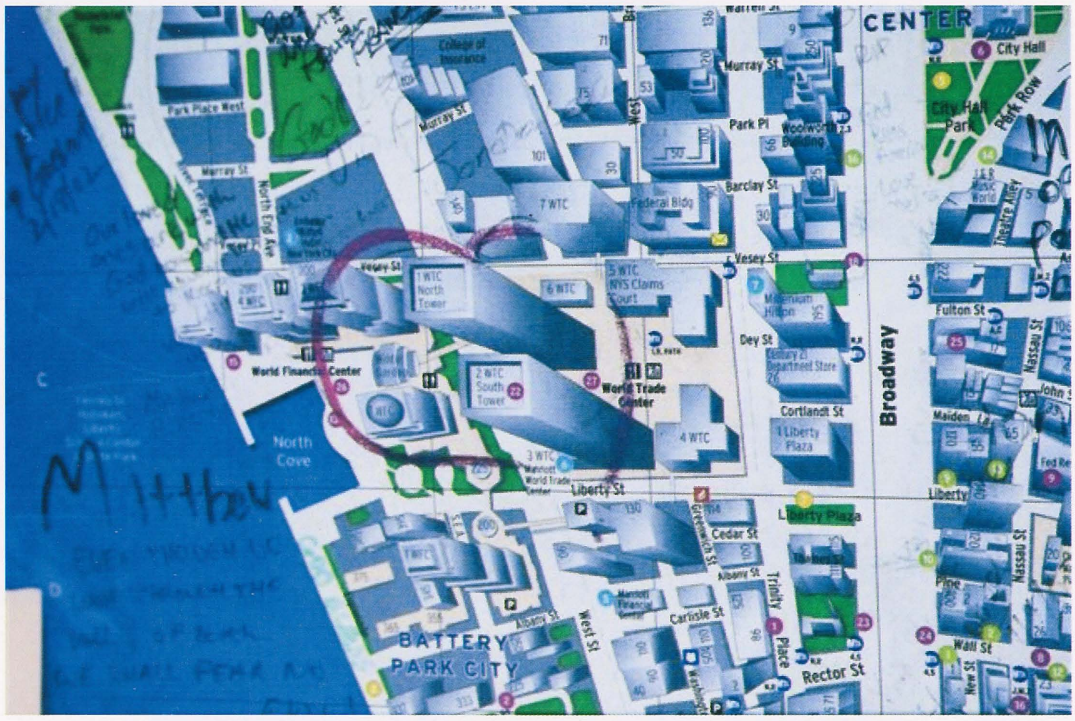


写真 27・28　路上の地図に書き込まれたメッセージ（下が拡大図）

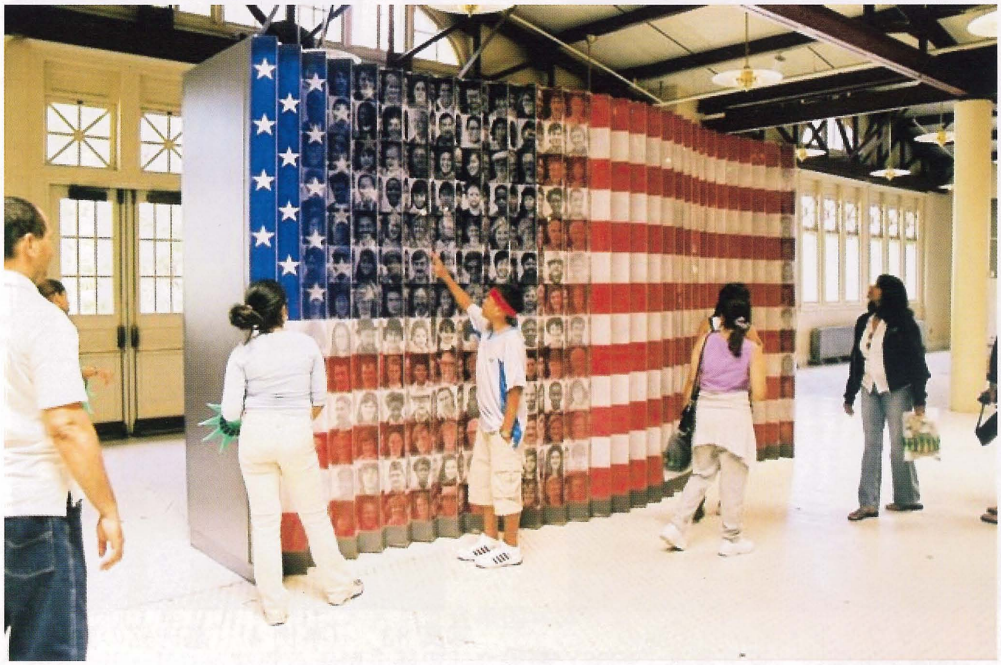


写真 29　角度によって犠牲者の写真と星条旗が見えるオブジェ
（エリス島・移民博物館）

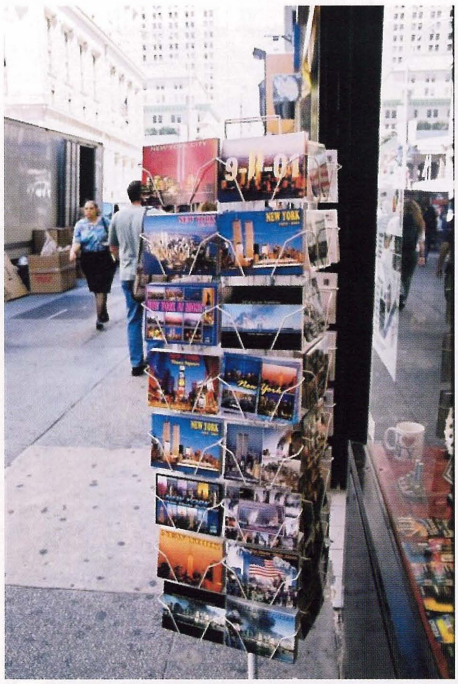




写真 30・31
絵はがきと街中のポスター



写真 32　グラウンド・ゼロの正面の
追悼品の飾られた教会の柵を
教会の墓地の側から見たもの

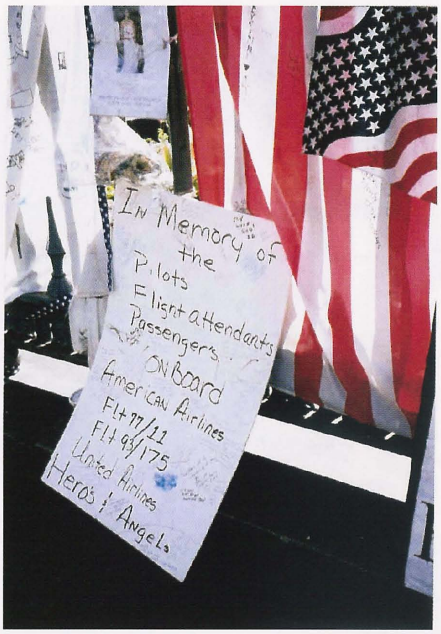


写真 33　（事例 4）「墓碑銘の語り」の例。



写真 34（事例 7）「死者の顕彰と生者の意志が示された語り」（写真 15 も参照）。造花、折鶴、寄せ書き、ぬいぐるみ等の追悼品
(写真１６と、子ども墓地の写真も参照)

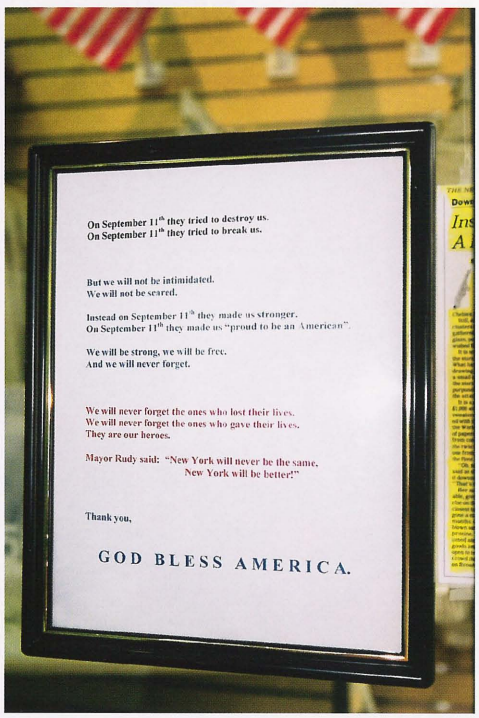


写真 35　（事例 8）「死者の顕彰と、我々は強くなるだろう」という詩句が書かれた額

＜写真 32-35 の撮影者は、やまだようこ
写真番号は、伊藤哲司氏の写真と継続＞

5-3

事故死の「現場」における生者と死者のコミュニケーション
ーニューヨーク、グラウンド・ゼロにおける追悼の語りー

やまだようこ

本報告は、2001年9月11日にアメリカ合衆国ニューヨークで起こった「同時多発ゼロ」の跡地グラウンド・ゼロにおける追悼を報告した伊藤（2004、本報告書）の続報である。私たちが現場を訪れたのは、2002年8月、事件の約11か月後であるが、きわめて多彩な追悼のかたちが見られ、おびただしい量の死者を追悼する言語的・非言語的メッセージがあふれていた。本報告では、それら追悼品のなかに見られた「語り（narrative）」の特徴について考えてみたい。

グラウンド・ゼロにおける追悼の語りは、事件（事故）直後から自然発生的に起こったが、その後刻々と変化し、現在も変化しつづけていると考えられる。したがって、わずか数日間の限られた観察でその全貌を知ることはもとより困難であり、その語りの相互行為としての生成過程を知ることには限界がある。

そこで本報告では、グラウンド・ゼロの近くに飾られていた追悼品に焦点をあて、追悼品のなかに見られた生者と死者のコミュニケーション、特に「死者に対してどのような語り方がなされているか」という問いにしぼって考えることにしたい。やまだ（2004　本報告書）では「墓地の語り」をとりあげたが、それと比較しながら「事故死の現場における語り」の特徴を探ってみたい。

I　事故死の現場

それまで元気で生きていた人々、今日の次には明日がやってくるという日常生活を疑うことがなかった人々が、ある日突然、事件や事故にまきこまれて、いのちを失ってしまう。そのようにして、平和な生活が壊れ、人生が突然に中断されたとき、人はどうしたらいいのだろうか。

「死」は、人間の人生のライフイベントのなかでも最大の出来事である。人は、いつ、どこで死ぬかは予測がつかないが、できれば長生きして、平和に穏やかに、愛する人々に見守られて死にたいと願っている。突然に理不尽に、本人に非がないのに、いのちを奪われていいのだろうか。

事故や事件による死は、さまざまな死に方のなかでも「許し難い死」の筆頭にくるライフイ

ベントであり、残された人々にとって耐え難い苦痛をもたらす。事故死や事件死では、残された人々が、その突然の死を、受け容れたり、納得することが難しい分だけ、人々がその現実と対峙するためにも、「物語・語り（narrative）」をもっとも必要とする事態、ナラティヴが生まれやすい事態だといえよう。

人の死に関して、「いつ」亡くなったかという「時間」にかかわる情報、死亡年齢、死亡の日時（命日）、死亡時刻などは、もちろん重要にされる。「どこ」という「場所」にかかわる情報はどうだろうか。平和な死の場合にも、亡くなった場所は記憶されるが、その「死の現場」がとりわけ重視されることは比較的少ない。愛する者がまさに亡くなった「死の現場」、「病院」や「病室」を繰り返し訪れて、そこに花を飾らずにはいられないという遺族はあまりいないだろう。それに対して、事故や事件で亡くなったときには、その「死の現場」が、特別重要な「心理学的場所（psychological topos）」としての意味をもって浮かび上がってくるように思われる。

筆者は、子どものころ、毎日通っている通学路の脇に「花束」が飾られるだけで、それまで何でもなかった見慣れた道端が、突然違って見えるのを、ほんとうに不思議に感じていた。そこは、昨日までのありきたりの日常の場所から、お供えの「花束」がもつ意味記号によって、「事故死の現場」という「特別に意味ある場所」「聖なる場所」に変わっており、そこにただよう心理的場所の空気が一変したことを、幼い子どもでも感じられたのである。死の現場におかれた「花束」は、それ一つで何かを物語っていたにちがいない。

事故や事件で亡くなった人の「死の現場」は、なぜ重要な特別の場所になるのだろう。そこは死者に向けて慰め追悼する場所であろうが、子どもであった筆者が何かを感じたように、そこを偶然通りかかるだけの生者にも、何かのメッセージを訴え語りかける働きをしている。そこでは何が起こったのか、そこで起こった「物語」に関心をもたざるをえない「場所の力」が生まれるのである。また、そこは、死という理不尽な運命をもたらした「ネガティヴな場所」であるゆえに、何らかの方法で場所の「浄化」や「聖化」を必要とするのかもしれない。

Ⅱ　グラウンド・ゼロという場所と、追悼の場所

ニューヨークで2001年9月11日に起こった同時多発テロは、世界を震撼させた国際的な政治的事件であった。この事件で亡くなった人々は、「（テロによる）殺人被害者」「事件被害者」「事故死」「災難死」などいろいろに呼べるだろうが、ここではそれらすべてを含めて突然にふりかかってきた出来事、広義の意味で「事故（accident）」で亡くなったとみなし、事故死と呼ぶことにする。

その事件にかかわる「時間」は、その後「9.11」というだけで、すぐに人々に通じるほど、特別の日付として記憶され、語られるようになった。その事件にかかわる「場所」はどうだろうか。その「場所」は、「グラウンド・ゼロ」という象徴的な名前がつけられて、特別な意味をおびる場所になった。その名前には、そこにあった世界貿易センターのツイン・タワーが、そこへ航空機が突っ込んでくるという予想もしなかった方法で壊され、建物が崩壊してしまったから、「ゼロ」になったという意味も含まれている。しかし、それだけではないだろう。グラウンド・ゼロという名前は、この場所が、事件によって多くの人々が亡くなった「死の現場」「喪失した現場」になり、そのときから、特別な「意味ある場所」「聖なる場所」に変わった

こと、人々の物語が生成される「場所の力」を得たことを物語っているだろう。

グラウンド・ゼロの近辺では、マスコミに報道された部分だけを見ても、さまざまな物語が生成されてきたと考えられる。国家レベルでの、政治的物語、国家的物語、宗教的物語、社会・文化的物語など大きい物語が語られてきた。そして、個人の人生のレベルでも、まじめに働いていた人々の人生がどんなに悲惨な運命に翻弄されたかが、繰り返し語られてきた。行方不明者の捜索張り紙、数々の星条旗、政治的、個人的メッセージ、写真、想い出の品々などが、所狭しと、柵いっぱいに飾られた様子、グラウンド・ゼロの追悼品の数々も報道された。

今回、現場を実際に訪れてみて、マスコミの報道では今までわからなかったことが一つわかった。それは、グラウンド・ゼロの追悼品が、どこの「場所」に置かれているのかということであった。それらは、グラウンド・ゼロの向かい側にある、キリスト教のプロテスタント教会の柵をぐるりと取り囲むように置いてあった。

写真32（注）は、数々の追悼品がびっしり置かれたグラウンド・ゼロ表側正面の柵を、裏側の教会墓地の側から撮った写真である。追悼品が置かれている場所の柵ひとつ向こうは、もともと教会の墓所であり、裏側には古い墓石が並んでいる。追悼品は他の場所には置かれていなかった。たとえ柵のスペースが足りなくても、何重にも品々が重なっても、すべてキリスト教会の柵をぐるりと取り囲むようにして置かれていた。

人間が、危機的な死にかかわるときには人間を超える力を希求するのだろうか。危機的な「死」と「祈り」がかかわるときには、根底にある「宗教」が表にでてくるようである。それゆえに、イスラム教との関係のむずかしさ、その根深さも同時に感じられた。死者の追悼品は、中央に位置するキリスト教会から守られているようにも見えたし、逆に、死者たちが殉教者としてぐるりとキリスト教会を飾り、キリスト教を守っているようにも見えたからである。

Ⅲ　死者への語りかけ方のタイプと事例

グラウンド・ゼロの追悼ディスプレイ、追悼品のなかで見つけたものから、生者が死者へ語りかけるナラティヴ（語り）の仕方という観点から、いくつかのタイプに分けて、具体的な事例としてとりあげてみたい。本論では、生者と死者との関係性についての語りに焦点をあてているので、グラウンド・ゼロに掲げられた他の種類の語り、「Peace on Earth 地球に平和を」「We love America 私たちはアメリカを愛する」など、一般的なスローガンやメッセージ、広告などはとりあげなかった。

Ⅲ－１　死者を生者とみなした語り

第１のナラティヴのタイプは、「死者を生者とみなした語り」である。たとえ行方不明者であっても、今ではもう生存の可能性がまったくないといえる。しかし、死後１年近くたってからでも、死者を生き続けている「生者」のように扱い、死者というよりも「生者」として語りかけているものである。

事例１（写真９）は、青年の24歳の誕生日を祝う文面と、にこやかに微笑む背広を着てネクタイをしめた若々しい青年の写真の追悼品である。追悼の場所に置かれていなければ、生者に語りかける誕生日祝いのことばとまったく変わらない。

「死んだ子の年を数える」と言うが、特に死者が子どもや若者であったときには、残された

者たちは、「あの子が生きていれば、何歳になった」と想うことは、よくあることだろう。死者の誕生日を祝って、その都度、ひとつ年をとらせ年齢を重ねてくという近親者の心情は、事故死でなくてもみられる。

死者が生者と同じように生き続けると想定する顕著なタイプは、「死霊婚」の風習だろう。結婚前の子どもや若者が死んだ後で、適齢期になったとき、死者どうしで結婚させようとする「死霊婚」の風習は、韓国や日本など東アジアの一部に見られる（松崎　1993）。

事例１（写真９参照）　ネクタイをして背広を着た青年の、大きな肖像写真の下に

Happy　24th	おめでとう　24歳の
Birthday	誕生日
Jimmy Quinn	ジミー・クイン
We Love You	あなたを愛している

Ⅲ－２　死者とコミュニケーションする語り

第２のナラティヴのタイプは、「死者とコミュニケーションする語り」である。死を悲しみ、喪の途上にある者が、この世にいなくなった不在の死者に何かを伝えようとするメッセージである。これは、生者が死者に向けて直接相手にコミュニケーションし話しかける語りである。

事例２（写真１０）は、「愛する、父さん、亡くなって、日々ますます寂しい」というメッセージが綴られ、今は失われてしまった楽しかった６人家族がそろって笑っている写真が下に添えられている。

この語りは、やまだ（2004）にあげたヨークの墓地の事例５「娘が亡き母に向けてつづったメッセージ」とよく似ている。ただ異なっているのは、楽しかった家族の写真が添えられていることで、家族の団らんを壊し「父の喪失」をもたらしたものに対する悲しみや訴えが暗黙のうちに含まれており、写真を見る者（観客）に訴えかける効果が強くなっていることであろう。

事例２　（写真９参照）　下に６人家族の写真

To our loving,	私たちの愛する
kind-hearted, and fun dad,	やさしい心の、楽しい父さん
Michael Tinley･･･	ミカエル　ティンリイ
We love you very much	私たちはあなたを大変愛している
and miss you more	そして、あなたがいなくて、ますます寂しい
and more each day!	そして、日ごとに、ますます！

Ⅲ－３　死者のメモリアル、墓碑銘の語り

第３のナラティヴのタイプは、「メモリアル、墓碑銘の語り」である。これは、死者を「記憶」する誕生日や年齢や命日などの「記録」、「追悼のことば」などを贈るものである。第１や第２のタイプの語りに比べると、死者はもう生者とは異なる位置、「死者」として位置づけられている。

このタイプの事例は下記のようなものであるが、やまだ（2004）に示した「墓碑銘」とほぼ同じような内容と、そのまま墓場の墓碑銘に刻まれてもよいような形式で書かれているので、

「墓碑銘の語り」と呼んでもよいだろう。

事例３（写真７）は、きわめて簡潔なものであるが、「メモリアル」としての墓碑銘のミニマムな形式をよく表している。死者の名前、生年月日、死亡月日、亡くなった場所、これを記した人の名前が縦書きの様式で書かれている。

事例４（写真３３）や事例５（写真６　左側）も、「・・の記憶のために」「神の恵みがありますように」ということばにつづいて、死者が縦書きに表されるという墓碑銘の形式で書かれている。事例５のように、残された家族の心情が語られる場合にも、事例２とは違って、すでに「死者」として扱われ、その「メモリアル」への想いが書かれている。そして、死者がいなくなっても残された者がその人を記憶しつづけること、死後の加護を祈る追悼の内容になっている。

これらの事例に見られる「メモリアル、墓碑銘の語り」は、墓石とはほど遠い媒体、たとえ粗末な紙一枚に書かれた一時的なものであっても、すでに死者を葬る墓碑銘の様式を備えている。

しかし、実際に墓場の墓碑銘にあるものとの大きな違いは、ここでは死者が、ただ「私的」に死んだのではなく、「公共性」をもつ死であることが強調されていることである。星条旗など国旗で飾られていることや、「ヒーローと天使」という文面などにそれがうかがえる。このような国家や英雄とむすびついたメモリアルの語りは、のちに示す「死者を賛美したり顕彰する語り」へとつながっていくものだろう。

事例３（写真７）　左に本人の顔写真、右にゴルフの写真、上に星条旗

Robert	ロバート
Emmett	エムネット
Parks Jr.	パークス　ジュニア
4/22/54~	1954 年 4 月 22 日～
~9/11/01	～2001 年 9 月 11 日
1 WTC/105	ワールドトレードセンター1　105 号室
Bond Broker/ Cantor Fitzgerald	ボンド　ブローカー/カーター　フィッツジェラルド

事例４（写真 33）

In Memory of	（次のものの）記憶のために
the	
Pilots	パイロット
Flight attemdants	添乗員
Passengers	乗客
ON Board	（次のものに）乗っていた
American Airlines	アメリカン航空
Flt 77/11	Flt 77/11
Flt 93/175	Flt 93/175
United Airlines	ユナイテッド航空
Heroes　Angels	英雄と天使

事例５　（写真６左側）下に星条旗の絵。濡れないようビニールの覆い。

God Bless You	あなたに神の恵みがありますように
Bobby Hughes	ボビー　ハーガス
Loved and Missed	愛されて、居なくて寂しがられている
by　your Family and Friends	あなたの家族と友人から。
You will live on in our hearts	あなたは生き続けるでしょう　私たちの胸と
and minds for ever and ever	心に、いつまでもいつまでも
Memorial Day 2002	2002　記念日に

Ⅲ－４　死者のメモリアル、人生を紹介する語り

第４のナラティヴは「メモリアル、死者の人生を紹介する語り」である。これは、死者がどのような人であったのか、死者の人生がどのようなものであったかを紹介する語りである。死者のシャツや帽子のような遺品、アルバムの何枚かの写真、活躍した新聞記事、人生の紹介など、多様な構成がなされる。

事例としては、写真６の右側（死者の２枚の肖像写真と、その人生の紹介）、写真８（死者を紹介する３枚の肖像写真、うち１枚は大学卒業式の記念写真）、写真９の一部などがあげられる。これらの多くは、肖像写真入りである。人生の紹介は、細かい字で、長文で長々と書かれているものが多かったので、文章の全文は記録できなかった。

この死者の人生を紹介する語りは、死者の記憶と追憶を中心にしているので、大きくみれば「メモリアルの語り」の類型に入ると考えられる。実際に家庭のアルバムや私的記録を簡略にしたようなものもあった。しかし、これらは、メモリアルの簡潔な様式をもつ墓碑銘の語りとは、ある意味で対極をなすものである。墓碑銘の語りが、最小限の記銘と祈りにも似た短い詩句で構成されているのに対して、死者の人生を紹介する語りは、新聞記事や伝記や小説に似ている。遺品は証拠の提示、肖像写真も挿絵のような役割をしている。

墓碑銘の語りは、死者に向けられ、死者を追悼する語りがなされている。それに対して、死者の人生を紹介する語りは、どちらかといえば死者に向けた語りというよりは、ここを訪れる「他者」「観客」に向けられているように思われる。誰に向かって語るのか、語りの宛名によって、語り方はおおきく異なる。死者を紹介する語りは、「死者を賛美し顕彰する語り」により近い位置にあり、他者に死者の情報や死者の人生を紹介することの方にウェイトがあり、ある種の報道性やメッセージ性をもっている。

Ⅲ－５　死者を賛美し顕彰する語り

第５の語りのタイプは、死者を賛美し顕彰する語りである。事例６（写真 13）は、その一例である。この事例では、死者は小学２年生の子どもである。彼がグラウンド・ゼロで亡くなった経緯は明確ではない。彼は、なぜ「アメリカ人として誇りに思う」という、名誉の犠牲者や殉教者や戦死者のようなことばで飾られるのだろうか。このことばが、救助活動で亡くなった消防士や、飛行機の乗務員や、崩壊したビルでアメリカのために働いていた人々に贈られるのであれば、まだ顕彰される必然性があるかもしれない。しかし、この事例６ではそうではなく、このことばを贈られるだけの具体的な理由はないように見受けられる。このように根拠がないのに、飛躍的に「アメリカの誇り」とむすびつけられて語られているところが、「死者を顕彰する語り」の特徴をよくあらわしているように思われる。

「死者はすばらしい人であった」「死者は勇敢であった」「死者は幸せな人生を送った」など、死後に死者を生前よりも高い位置にあげるような賛美や顕彰の語りは、一般的な死の場合にもよく見られる。しかし、事故死や突然死の場合には、より顕著に、死者の賛美や顕彰の語りがなされるように考えられる。たぶん、理不尽におそいかかってきた突然の死を納得し、心理的バランスをとるためには、何らかの「物語」が必要になるからであろう。

やまだ(2000)の研究において、レーサーであったセナを突然の事故死で失ったファンは「セナは短かったけれど幸せな人生だった」「ヒーローらしい死だった」「良い人から先に死ぬ」などセナを賛美するとともに、死が必然であったかのような語りをした。そして、セナがすばらしいヒーローであり、雲の上の人になったかのように語られた。また、阪神大震災で突然友人を亡くした人は、「友人のおかげで奇跡がおこって大学が卒業できた」というような、死者が特別の能力や恩恵をさずけてくれたという意味の語りをした(やまだ他 1999, 2000)。

このように、突然の事故で亡くなった場合には、特に、死者への賛美や顕彰の語りが起こりやすいと考えられる。また、場合によっては死者を人間以上のもの「天使」や「神さま」や「仏さま」や「お星さま」の位置にまでひきあげるような語りも行われる。

しかし、グラウンド・ゼロの語りにおいては、小学生の死でさえ個人や家族、学校のレベルをはるかに超えて、「国家レベル」の誇りへと飛躍的にむすびつけられているところが、際だった特徴を見せている。今まで考察してきた他のタイプの語りにおいても、星条旗などで飾られており、公共的な死、国家がかかわる死として扱われていた。それは、この事件が単なる偶然の「事故」ではなく、テロによって「アメリカが攻撃された」「アメリカの危機」という受け止め方がなされたからであろう。死者を賛美し顕彰するタイプの語りにおいて、死者は、まるで国のために戦って名誉の死をとげた戦死者のように扱われている。

事例6　(写真13)　にっこり笑った子どもの肖像写真の下に

Proud to be an	誇りに思う
American	アメリカ人として
JT Herman	JT ヘルマン
2nd Grade	2年生
Franklin Elementary	フランクリン小学校
Northampton PA	ノーザンプトン

Ⅲ-6　死者の賛美や顕彰につづいて、生者の行動や意志が示される語り

第6のタイプの語りは、グラウンド・ゼロの追悼の語りと、その後にアメリカ人が報復的戦争をする行動に向かったこと、その二つをつなぐ上で、特に興味深い特徴的な語りである。

人が事故で突然亡くなったとき、死者を賛美し顕彰したり、「死者の死は無駄ではなかった」と心理的に納得させるような語りは、比較的よくおこる。しかし、それが「死者の死を無駄にしてはならない」「だから、自分は・・する」というように、生者の次の行動への意志や決意を生むかどうかは、大きな違いである。

事例7(写真 15, 34)は、テロで犠牲になった人々や救援活動で亡くなった人々を顕彰するとともに、それにつなげて「体操クラブをがんばる」「日々を大切にする」というかたちで、

自分たちの日常行動を改善する決意を語っている。

事故で愛する人を亡くしたとき、その悔いや悲しみが大きいほど、また死が理不尽だと感じられるほど、「死者の意志を引き継ぐ」「死者の死を無駄にしない」というような形で近親者や周囲の人々が、社会運動などより大きなレベルでの活動を始めることは、よくみられる。アメリカに留学中に誤って銃で撃たれて亡くなった高校生の両親が、「銃を規制する運動」をはじめたことなどが、その例になるだろう。

また一般に、交通事故や災害や病気などネガティヴな体験をしたときに、「あの体験があったおかげで、強くなれた」というように、ポジに反転させる「改善の物語り」もよく行われる（McAdams&de St. Aubin 1988）。

したがって、死者についての「賛美や顕彰の物語」ができるだけではなく、死者の死を無駄にしたくないという意志によって、生者の行動が変えられていくこと、その心理的メカニズム自体は一般的にも生じると考えられる。

グラウンド・ゼロで起こっている語りの特徴は、それが個人のレベルではなく、一足飛びに超えて「国家レベル」の決意に変わっていることである。

その典型的な一例を、事例８（写真 35）にみることができる。この事例は、追悼から報復へと自らの行動を変え、踏み出していくアメリカの心理を、「見事」に表現した語りとして特筆すべきものであろう。この語りでは、死者を英雄として顕彰すると同時に、自分たちを破壊した彼ら「敵」と闘う意志と、自分たちが脅しや破壊にもめげずに「より強くなる」「より良くなる」という意志が明確に示されている。

事例７　（写真 15，写真 34）　右に星条旗を縫いつけた枠をつけた布

TRIBUTE----------	賛辞----------
To the victims & those	犠牲者と
devoted to the relief effort:	救援の努力を捧げる者たちへ
Your courage, strength,	あなたがたの勇気、強さ
compassion and humanity	思いやりと人間性が
fuel our fire and rekindle	燃料になり、再び火をつける
our passion for gymnastics.	私たちの体操への情熱に。
We dedicate our season	私たちは、このシーズンを捧げる
to you & commit to take	あなた方へ。そして約束する
every day as a gift.	１日１日を贈り物として受け取ることを。
UCLA GYMNASTICS	UCLA(カルフォルニア大学・ロスアンジェス校)　体操部

事例８　（写真 35）　ガラスケースの額に飾られた詩句

On September 11th　they tried to destroy us.
On September 11th　they tried to breake us.

But we will not be intimidated.

We will not be scared.

Instead on September 11th they made us stronger.
On September 11th they made us "proud to be an American".

We will be strong, we will be free.
And we will never forget.

We will never forget the ones who lost their lives.
We will never forget the ones who gave their lives.
They are our heroes.

Mayor Rudy said: "New York will never be the same.
New York will be better!"
Thank you,
GOD BLESS AMERICA.

9月11日に、彼らが我々を殺そうとした。
9月11日に、彼らが我々を壊そうとした。

しかし我々は怖えないだろう。
我々は怖がらないだろう。

9月11日のかわりに、彼らは我々をより強くした。
9月11日に、彼らは我々に「アメリカ人としての誇り」をもたせた。

我々は、強くなるだろう。我々は、自由になるだろう。
そして我々は、忘れないだろう。

我々は、いのちを失った人々を忘れないだろう。
我々は、いのちを与えてくれた人々を忘れないだろう。
彼らは、我々の英雄だ。

メィヤー・ルーディは言った：“ニューヨークは同じではないだろう。
ニューヨークはより良くなるだろう！“
感謝する。
神がアメリカを祝福されますように

Ⅲ－7　非言語的な語り：国旗、手形や寄せ書き、十字架、肖像写真、衣類、造花、ぬいぐるみなど

グラウンド・ゼロでは、今まで考察してきたような言語的メッセージだけではなく、さま

ざまに多様な非言語的メッセージもあふれるほどに飾られ、きわめて多弁な多声性にみちた場がつくられていた。ここでは、おもに墓地との比較によって、追悼の品のなかで目立った特徴と思われるものをあげてみたい。

どのような追悼の品が飾られていたであろうか。まず、もっとも目立つのは国旗であった。もともとアメリカは、国をまとめるために国旗を必要としている国であるが、テロが「アメリカに対する挑戦」とみなされたゆえに、アメリカの愛国心が高まったのであろう、大小さまざまの星条旗の国旗がみられた。これは、通常の個人の墓地には例外的にしか見られないものであろう。

国旗、T シャツ、大きい白い布や紙に書かれた、手形や署名や寄せ書きなどが多く見られた（写真 14, 18, 19, 21, 23, 24, 25 など参照）。これは墓地では見られない種類の語りであり、「公共性」をもつ集合的語りの性質をよく表している。これらは、送別会で集まった人々が色紙に寄せ書きして去っていく人に渡す風習や、戦争のときに千人針や多くの人が署名した国旗を戦士に持たせる風習とも似通った部分がある。

十字架や天使やクルスなど、宗教的な祈りにかかわる事物も多くみられた。これらは、墓地の装飾とも共通している。

肖像写真は、墓地にもある。しかし、まだ喪の途上であるからだろう、死者の人生を肖像写真で訴える語りやメッセージは、墓地よりもはるかに目立つ。

墓地とは、きわだった差異をもたらしているのは、帽子やシャツなど衣類が多く飾られていたことである。これらの衣類は死者の遺品もあるだろうし、グラウンド・ゼロを訪れた人が自分の帽子など衣類の一部を置いていく場合もあるだろうし、近くで買った T シャツにサインして飾っていく場合もあるだろう。衣類は、ある意味で生臭いもの、人間の身体や生活のにおいを連想させるものである。したがって、死者を葬って身体の形をなくしていくことに主眼がある墓地では、衣類を飾るという発想はあまり起こらない。グラウンド・ゼロでは、死者の身体を葬ることとは逆の感性、生々しい身体や日常生活の臭いを喚起させるような感性が働いているのかもしれない。

造花や折り鶴など、死者を飾り慰めると同時に、生者の心も癒すための色とりどりの美しい華やかな品々は多く飾られていた。これらは墓場を飾るものと共通している。

いちばん不思議なものは、おびただしい量のぬいぐるみが飾られていたことであった。熊のぬいぐるみがもっとも多かったが、大小さまざまのぬいぐるみや人形が飾られていた（写真 16、写真 34 などを参照）。

これらのぬいぐるみの装飾は、子どもの墓の装飾（やまだ　図 13,　図 14 など）と大変よく似ていた。しかし、ここで亡くなった大多数の人々は、立派な大人である。なぜ、ぬいぐるみが飾られるのだろうか。死者が大事にしていた人形を供える例もいくつかはあるだろうが、それだけでは説明がつかない。他の理由が考えられる。

その１つは、ぬいぐるみは花などと同様に、死者も生者も無条件に慰め、ほっとさせる安らぎや癒しの効果をもつことがあげられるだろう。２つめには、ぬいぐるみは、ペットの身代わりかもしれないことである。死者をひとりぼっちにしておくのは、寂しすぎる。死者のお供としてのペットの代わりのぬいぐるみ、それは現代版の「土偶」といえるかもしれない。３つめには、ぬいぐるみが生者に訴えかける無言のメッセージが関係するように思われる。あどけない表情の熊のぬいぐるみが、路上におかれ冷たい雨に濡れていれば、それを見る私たちにとっては、単なるモノとして看過できない感情、罪のない子どもに対するような「哀れ」な気持ち

をかきたてられる。ぬいぐるみは、死者の代わりの「人形（ひとがた）」の役目もしているのではあるまいか。

Ⅲ－８　事故死の「現場」における語りの共同生成

多数の死者を出した事故の「現場」は、数々の追悼品で飾られることによって、語りが共同生成される「劇場」になる。その現場は、観客をよびこむ場所になるだけではない。参加自由で出入り自由の公道にあり、誰もが好きなかたちで「物語」に参画できる祝祭の「劇場」である。

観客は、多数集まってきて、熱心に、追悼品たちが重なって演じる「パフォーマンス」を見、そこで語られている多声的な言語的・非言語的語りに耳を傾ける。そして、一方的に語りを伝達されるだけではなく、誰もがいくぶんかの共同生成に参画する。自分のハンカチをむすびつけたり、帽子をおいたり、寄せ書きの端に自分の名前を書き込んだり、いくらかの「お供え」をそこに残す。また、写真を撮って誰かに見せたり、自分がそこで見たメッセージについて誰かと語り合ったりして、自発的に語りべの一員となる。

事故死の「現場」は、巡礼の聖地ともなる。「グラウンド・ゼロ」は基点となって、そこへ何度でも訪れる人々を招き、そこで語りが継続され、新たな語りが繰り返し生成される。

ここで事例としてとりあげた語りは、個々別々の語りのようにみえたかもしれないが、それらは互いに影響をあたえあって、空間的にも時間的にも、共同生成されている集合的な語りという特徴をもつのである。

（注）やまだの論考の写真番号は、伊藤(2004　本報告書)の継続番号、写真 32-35 にした。それよりも若い写真番号の引用は、伊藤が撮影した写真 1-31 を参照していただきたい。

（文献）

伊藤哲司　2004　「グラウンド・ゼロ」での犠牲者追悼のかたちと 9.11「同時多発テロ」の位置づけ　－テロ事件１１ヶ月後のニューヨークを歩いて　「人生サイクルと他界イメージの多文化比較による生命観モデルの構築」報告書 5-2

松崎憲三編　1993　東アジアの死霊結婚　岩田書院

McAdams, D.P. & de St. Aubin, E. 1998. Generativity and adult development. American Psychological Association.

やまだようこ 2000 喪失と生成のライフストーリー　－F1 ヒーローの死とファンの人生　やまだようこ編　人生を物語る　ミネルヴァ書房　77-111.

やまだようこ・河原紀子・藤野友紀他　1999　人は身近な死者から何を学ぶのか　－阪神大震災における「友人の死の経験」の語りより　教育方法の探究２，61-78. 京大教育学研究科

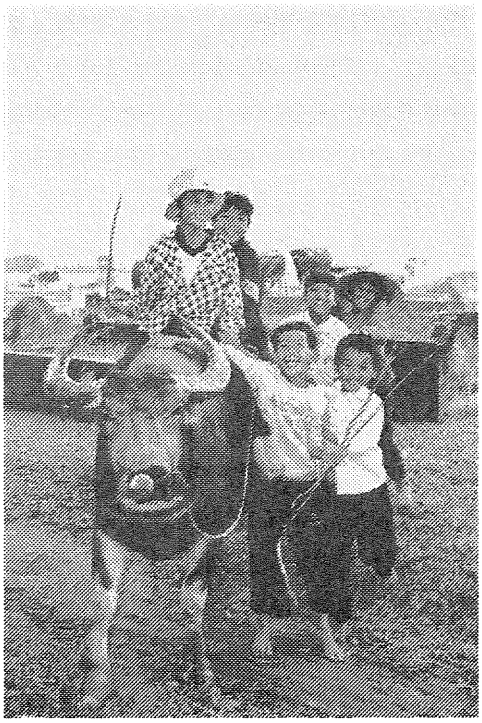
やまだようこ・田垣正晋・保坂裕子他　2000　阪神大震災における「友人の死の経験」の語りと語り直し　教育方法の探究３，63-81. 京大教育学研究科

やまだようこ　2004　家族ライフストーリーが語られる場所としての墓地　－イギリスの 19 世紀末の家族墓碑と現代の子どもの墓碑を中心に　「人生サイクルと他界イメージの多文化比較による生命観モデルの構築」報告書 5-１

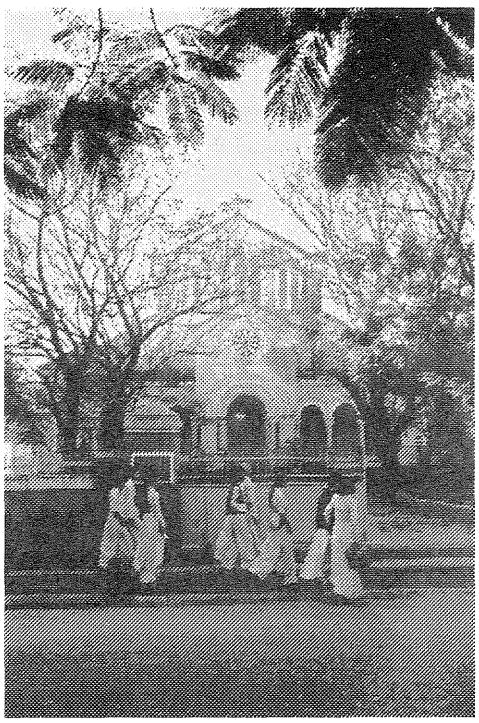
5-4

他界観に関する
ベトナム・フィールドワークの記録

伊藤哲司



墓地で遊ぶ子どもたち（ハタイ省）



アオザイ姿の女子高校生たち（フエ）

はじめに

2002年11月29日～12月7日の期間、やまだようこさん・川島大輔さん・伊藤哲司の3人でベトナム社会主義共和国のハノイおよびフエに滞在し（やまださん・川島さんは12月6日までの滞在）、ベトナムの他界観について手がかりを探しもとめる短期間のフィールドワークを行った。以下はその記録を、旅日記風にまとめたものである。

11月29日（金）　ハノイへ

私にとっては今年4度目となるベトナムへの旅。どれも違う目的の旅だったが、今回は、あえて題すれば「ベトナムの『あの世』のイメージを探る旅」。同行するやまださんと川島さんに

とっては、初めてのベトナムへの旅だ。

短い滞在のなかで本格的な調査をするのはもともと無理があるので、ベトナム人の生活のなかで「死者」がどう弔われ祀られているのかということを垣間見るぐらいになりそうだ。そのためにハノイの南にあるハタイ省の農村部を訪れることにしているし、中部の古都フエにも足を伸ばしてみるつもりでいる。それから、ハノイにある心理学研究所で私たちのこれまでの研究成果を聞いてもらい、ベトナム人研究者たちがそれをどう受け止めるのかも知りたい。

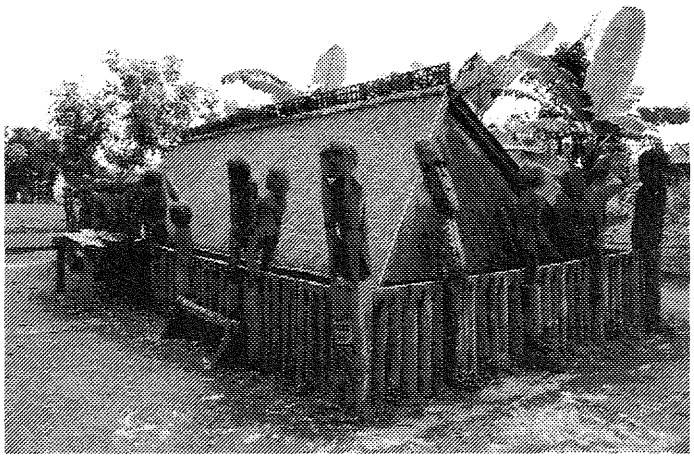
やまださんと川島さんは関空発。私は成田発で、乗り継ぎの香港の空港で合流した。成田も香港もいい天気だったのが、ハノイはどんよりと雲が垂れ込めていた。機内のアナウンスによると気温は 20 度。暑からず寒からずでちょうどいい。空港まで迎えに来てくれたホテルの若い男性従業員の話によると、このところハノイは雨が多く、昨日あたりは「とても寒かった」とか。もっともベトナム人は概して寒がりであり、ハノイの冬は日本人にとっては大したことはないということが多い。

ハノイの旧市街にある定宿のプリンスホテルに収まって、女性オーナーのニンさんと再会。いつもの人なつっこい笑顔を見せながら迎えてくれた。他の若い従業員たちとも馴染みがある。ああまたここに戻ってこられたなと思う。初日の夜は、ホアンキエム湖畔にあるトゥイータというレストランで、民族音楽を聴きハノイビールを飲みながら食事をした。やまださんは、民俗音楽で使われるダンバウ（一弦琴）の何ともいえずしまりのない曲線的な音色が気に入った様子だった。

11 月 30 日（土）　ハノイ２日目

今日も曇天。朝 3 人で外へ出てみると、わずかに雨粒が落ちてきた。ホテルのすぐ近くで、ソイ（おこわ）を買い、鶏肉入りのフォー（ベトナムうどん）を食べた。やまださんも川島さんも、ベトナム料理の味はよく口に合うようだ。今朝食べたフォー屋は小さなお寺の敷地のなかにある。そこにも戦争犠牲者を祀った碑があって、やまださんは興味深そうにしげしげと見入っていた。

今日は実質的な初日なので、ハノイ市内のいくつかのところを見て回わることにした。あらかじめ日本からメールで連絡をとっておいた友人のヴァンさんが、8 時半にやってきてくれた。彼女は、日本への留学経験はまだないのだが、現在 JICA で働き、日本語はずいぶん達者。カラッとした気持ちのいい女性だ。一緒にタクシーに乗り合わせ、文廟やホーチミン廟などをめぐった。昼食後に民族学博物館を見学。ベトナムには 54 の民族があると言われるが、とくに少数民族の生活の様子などを展示したのがこの博物館。葬儀についての展示もあり、死者を弔う流儀を少しだけだが知ることができた。屋外に死者の安置するための小屋が展示されていて、性交をする男女や妊婦などを象った荒っぽい作りの彫り物がたくさん飾られてあった。



死者を安置する小屋（ハノイの国立民俗学博物館）

夜になってヴァンさんが帰っていくときに、今日１日付き合ってくれて通訳などもしてくれたお礼に、20 ドル入りの封筒を渡そうとしたら、いつもの笑顔を見せながら彼女は「いいえ、それはいりません」となかなか受け取ってくれなかった。でもやまださんらと相談してそうしようと決めたこと。何とか無理矢理受け取ってもらった。

12 月 1 日（日）　ハノイ３日目

今日は、茨城大学に留学しているミンさんという学生の実家を訪ねていくことにしている。彼女自身は日本にいて同行できないのだが、今回私がハノイへ行くのを知って、ぜひ実家を訪ねてほしいと言われていた。彼女の実家は、ハノイの隣のハタイ省にあり、農村部である。研究テーマ「あの世とこの世の関係イメージ」のためにも、そこでの人々の生活ぶりを垣間見たい。

今日の通訳と案内役をかねて同行してくれるトゥイさんが、朝９時ごろやってきてくれた。彼女もまた、JICA で働いていて、日本語を流暢に話す。今回、あらかじめミンさんの実家に連絡をとったりするといったことも、彼女がすべて引き受けてくれていた。

タクシーでハノイの街中を南へ抜け、田んぼや畑が広がる地域へと進んでいった。比較的細い道を入っていき、ちょっとした集落のなかに入った。ミンさんのお父さんは私のことがすぐにわかったようで、バイクを降るとすぐに、ニコニコと満面の笑みで握手をしてくれた。さらに、家々が密集した細い路地を徒歩で入ったところに、ミンさんの実家があった。

家では、ミンさんのお母さんやお姉さんが昼食の準備をしてくれているところだった。小さな中庭には果実がなり、小さな小屋に大豚と子豚が１匹ずついた。簾の架かった出入り口から家のなかに入れてもらい、さっそくお茶をいただいた。壁にはミンさんらの写真がたくさん飾ってあり、日本で私の家族と一緒に撮った写真も飾られてあった。

時間をかけて丹念に作ってくれたのであろうたくさんの家庭料理をたくさんいただき、飲み過ぎたらまずいなと思いながら、米で作ったドブロクのようなお酒を、お父さんらと差しつ差されつ何杯もいただいた。やまださんや川島さんも、初めてベトナムの家庭料理を楽しんでいる様子だった。

私たちの研究テーマについて説明し、集落のなかのお墓の様子などを見せてもらうことにした。１キロほど離れた墓地には、お父さんのご両親のお墓が、それぞれ別々にあった。あたり

では数人の男の子たちが遊び回っている。お墓はまばらに建っていて、方向はバラバラ。聞けば、お墓の方向は占い師に決めてもらうのだという。もちろんこのあたりは土葬で、埋葬して3年後に骨を拾い、洗骨してまた埋葬しなおすのだそうだ。子どもたちがキャッキャとはしゃぎ回るなか、お父さんは線香に火をつけて、熱心にお祈りを捧げていた。

ミンさんの実家近くに戻ると、路地で男の子たちが10人ぐらいでビー玉遊びをしていた。かなり小さな3歳ぐらいの子どももいれば、高校生ぐらいの子どももいる。みな生き生きとして本当に楽しそう。「ああいう顔をした子どもたちが、どうして日本からいなくなっちゃったのかねぇ」とやまださん。本当にそうだなと思う。

お父さんお母さんは私たちに、お菓子などのお土産まで用意してくれていた。その細やかな気遣いに、何とも恐縮する。それから、これは予想していたことなのだが、お父さんから娘のミンさんへ届けてほしいと、大きなビニールの買い物袋に積められた食材などを預かった。



お墓参りをするミンさんのお父さん
（その左がトゥイさん、ミンさんのお姉さん、やまださん）

ハノイ市内のホテルに戻り、一休みしたあとに、元北ベトナム兵士の作家バオ・ニンさんの自宅へ向かった。『戦争の悲しみ』（日本語版はめるくまーるから出版）という小説の作者で、これまでに2回自宅を訪ねたことがある。前回訪ねたときに一緒だった共同研究者の戸田有一さんが、彼の話に感激して、それで今回は戸田さんが送ってきた鳥取の銘酒を2本、私が預かってきていた。トゥイさんには通訳としてそのまま同行してもらった。

バオ・ニンさんは以前と変わった様子もなく、自然体で私たちに接してくれた。現在彼は新たな戦争小説を執筆中とのこと。来年には出版したい意向のようだ。やまださんらとの話のなかで、「(今の) ベトナム人はあまり好きじゃない。昔のベトナム人の良さが失われてしまっている」といったことを話していた。本当に過酷な戦場での経験がある彼にとって、戦後大きく変わっていくベトナムについては、いろいろと複雑な想いがあるのだろう。

これからフエに行く予定であることを告げるとバオ・ニンさんは、フエに行くならブー・チーさんという有名な画家がいるからぜひ会ってみてはどうかと言って、その人の名前と住んでいる通り名を紙に書いて渡してくれた。

今日1日お世話になったトゥイさんにも、昨日のヴァンさんと同様に20ドルの入った封筒を渡した。彼女は、ヴァンさん以上にそれは困ると返そうとしてきたのだが、「勉強のために使

って」と繰り返して何とか受け取ってもらった。「私はガイドではありませんから。困ります……」と繰り返す彼女の律儀さには、かえってこちらが恐縮してしまった。

12月2日（月）　ハノイ4日目

今日は、ベトナム社会人文科学大学国家センターにある心理学研究所で、私たちの研究を発表させてもらうことになっている。今日の通訳をお願いしたハノイ外国語大学講師のフオンさんという女性と一緒に4人でタクシーに乗り、ホテルから研究所へと向かった。

まず心理学研究所長のドー・ロングさんに挨拶し、続いて予定通り9時から研究会。私たちはドー・ロングさんと一緒に、雛壇のようなところに座ることになった。聴衆は約 30 人。心理学研究所の研究者以外に別の研究所からも人が何人も来ていて、人間学研究所に勤める知り合いのチーさんという女性の姿も見えた。

挨拶の後、やまださん、続いて私の順で、「この世とあの世の関係イメージ」の研究発表を



ハノイの心理学研究所で発表するやまださん

OHP を使いながら行った。やまださんが全体的な方法論の話と日本・フランス・イギリス・ベトナムの4カ国比較の話を、私がそれを受けて、とくにベトナムのイメージ画の特徴について話をした。

今日はいろいろとベトナム人研究者とディスカッションがしたいと思っていたのだが、正直なところあまり生産的な議論にはならなかった。質問をしたのはいずれも比較的年輩の人ばかりで、しかも学生のデータだけでは代表的ではないとかといったあまり本質的ではない質問が多く、「あの世」そのものを研究していると勘違いされたような質問もあった。どちらかというと「こういうふうにしたほうがいい」といった上からものを言う「指導的」なにおいのするものが多かった。

午後は、2002 年 9 月に茨城大学人文学部と学術交流協定を締結したばかりの社会人文科学大学へ足を運び、日本語クラスの学生らとちょっとした交流をした。夜は、茨城大学に留学しているもうひとりの学生であるハインさんの家族に、食事に招かれた。ハインさんの夫のタンさんと息子、ハインさんのご両親、それにタンさんのお父さんも揃って、みなで一緒に美味しい家庭料理をいただいた。タンさんからは、日本にいるハインさんへのお土産を預かった。12月 20 日の彼女の誕生日の日に渡してほしいというネックレス。その日までは、私が秘密にし

て預かることになりそうだ。やまださんは「いい旦那さんだねぇ。理想の旦那さん！」としきりに感心していた。

12月3日（火）　フエへ

フエへ向かう朝、その出発前に、昨日の研究会に出たファックさんという年輩の男性がホテルを訪ねてきた。話を聞くと、どうやら超心理学の研究をしている人らしく、正直言って彼の話すベトナム語がよくわからなかったのだが、魂の種類だとか、それが身体のどこから出ていくのかとかいった話をしているようだった。一緒についてきた比較的若い男性が、私と彼の写真を撮ると、いちおうそれで満足したのか、名刺だけ置いて帰っていった。

ハノイからフエまでは、飛行機で1時間足らず。ハノイはずっと曇っていたが、フエは晴天だった。機内のアナウンスによると気温は28度。猛烈に暑いというほどではないが、やはりそれなりに暑い。空港からすぐにタクシーでホテルに向かった。

午後3時になって、今回フエで通訳を務めてくれるフアンさんが、予定どおりやってきてくれた。彼はフエの外務部に勤めていて、今年3月に調査できたときにもお世話になった。まずフエに来た手始めに、やまださんと川島さんも一緒にシクロ（自転車タクシー）で王宮へ行った。もちろん私はすでに行ったことがあるのだが、初めてフエに来たのなら、やはりまずは行ってみるべきところだ。

天気が良く、ほどほどの暑さ。シクロに乗りフオン川を眺めながら、吹いてくる風を感じるのは気持ちがいい。ああまたフエに来ることができたのだなと思う。

夜は、フアンさんが連絡を入れてくれていた空手家のズンさんと、フエ師範大学の文学の先生であるナムさんと一緒に、フオン川に面した水上レストランで食事をした。2人とも、以前に私が調査でインタビューをさせてもらった人だ。63歳だというのにとても若々しいズンさんは、鈴木さんという師匠のお墓参りのために初めて日本に行ってきたいところだった。ナムさんは今年50歳。詩人でもある彼は、ブー・チーさんという画家が描いた絵を載せた詩集の本を、最近出版したと言って私に1冊贈ってくれた。驚いたことに、ナムさんはブー・チーさんの親戚にあたるのだという。ベトナムでもまた、世間は狭い。

12月4日（水）　フエ2日目

早朝6時半ごろ、カメラを持って外へ出た。フエを歩いていてどうやっても目に留まるのが、白いアオザイ姿の女子高校生たち。彼女らがアオザイの端をなびかせながら自転車に乗って行く姿は、本当に絵になる。今朝も天気良く、チャンティエン橋あたりに陣取って、何枚もシャッターを切った。単純に、ああ本当にきれいだなと思う。

今日の午前中は舟に乗って、フエで一番有名なティンムー寺と、フエ王朝の第2代皇帝であるミンマン帝の廟を見にいった。いわゆるフエの観光コースと言っていい。私ひとりで来ていたなら、おそらくは行かないのだが、やまださんと川島さんは初めてだから、こんなのもいいだろう。

昼過ぎに市街に戻って、昼食をちょっと急いで取り、画家のブー・チーさんを訪ねていった。彼の家は、ちょっと古風な屋敷で、味のある庭もあるところだった。応対してくれたアトリエには、彼の作品がいくつもあった。1948年生まれだというブー・チーさんは、恰幅がよく、ベトナム人にしては珍しく中年太りでお腹がポコンと出ている。ヘビースモーカーのようで、く

わえタバコのまま喋り、火がフィルターのギリギリのところに来るまで吸う。芸術家らしく少々気むずかしい感じでもあるのだが、その割には結局2時間ぐらいよく喋ってくれた。とくにやまださんが、私たちのイメージ画による研究と結びつけて関心を示し、いろいろ質問をしたのに、とても好意的に応えてくれた。

昨日会ったフエ師範大学のナムさんにもらったのが、ブー・チーさんの絵と自身の詩を組み合わせた本だった。実は以前ナムさんから、反戦運動に参加していたころブー・チーさんが刑務所のなかの様子を描いた絵のコピーをもらっていたのだった。そこには、獄中に理不尽に収監されている人々の様子などが描かれている。ブー・チーさんも、こういう絵を描いたがゆえに収監された経験があるのだという。それでも、獄中でも隠れて絵を書き続けたのだそうだ。

そのブー・チーさんが現在描く絵の一貫したテーマは、どうやら「生と死」、それに「人間」ということのようだ。反戦歌を歌って有名になったチン・コン・ソンという歌手とも親友だといい、彼の死後に彼を想って描いた絵もある。「本当にあの世があるかどうかはわからない。で



ブー・チーさんのアトリエで
(右から、川島さん、やまださん、伊藤、ブー・チーさん)

も彼はいつも、私の頭のなかで生きている」と彼は語った。

軍隊に入った経験はないが、戦争はもちろん経験している。それが下地にあって今の彼の作品がある。私自身の研究の関心と、やまださんを中心に進めている「あの世」の研究と、彼のところで見事に結びついた。バオ・ニンさんにナムさん、今は亡きチン・コン・ソンさん、そしてブー・チーさん。そういった人々のつながりが見えてきて、身震いを覚えるほどだった。やまださんや川島さんにとっても今回のベトナム訪問で、一番良い出会いになったようだ。

ブー・チーさんの家を辞したあと、以前にインタビューをしたことのある女性の元反戦活動家であるトさんとセンさんがホテルまで来てくれて、カフェでしばらく話をした。今日は彼女ら自身の話というよりは、たったいま会ってきたブー・チーさんなどとの繋がりの話が中心となった。同じく投獄された経験があるトさんはとくに、ブー・チーと繋がりがあるようだ。センさんも、彼の絵の素晴らしさ、特別さ、独創性についてとても評価しているという話をした。当時の反戦運動仲間の繋がりは、今でもずっと生きているようだ。

亡きチン・コン・ソンさんについての話も聞いた。チン・コン・ソンさんは彼女らからすると10数年年上だ。その歌は、当時の時代の雰囲気と大いに重なるのだろう。トさんは、「反戦の歌も、気持ちを歌った歌もあるが、どれも好き。彼の歌を聴くとクラクラする」という。私もベトナム戦争の問題を自分の研究で取り上げるようになって、いろいろな人からチン・コン・ソンさんの名前を聞いた。絶大な影響力がいまだにあるようだ。

彼女らとほぼ同世代と言ってもいいやまださんが、ベトナム以外にも当時反戦のフォークソングがたくさんあったことを紹介し、たとえば「ジョン・レノンは知っていますか？」と問うたのだが、彼女らは「当時はテレビを見たりラジオを聞いたりするチャンスがなかったから」知らないという。私たちもチン・コン・ソンの名前も歌も知らないとなると、あの時代のそうした反戦の世界的なうねりが、必ずしもいまだに互いに繋がっていないということなのかもしれない。もう一度あの1970年前後の時代が何だったのか、総括してみる必要があるかもしれないと、やまださんは後で話していた。

12月5日（木）　フエ3日目

やまださんと川島さんは、私より1日早い今日のお昼ごろ、ハノイへと戻っていった。ひとりでホテルの部屋に戻ると、ちょっと疲れが出たのか、そのまま眠り込んでしまった。研究調査ということから解放されて、今日は比較的のんびりと、かねてからの知り合いに会いにいったりして過ごした。

12月6日（金）　再びハノイへ

フエからハノイまでは1時間足らずのフライト。これまでの旅の疲れが出て、機内で軽食が出たのにも気づかないぐらい眠ってしまい、あっと言う間にハノイに到着した。フエからハノイまで列車で行けば一晩かかる距離だが、まったく距離感を感じなかった。明日はもう帰国。定宿のプリンスホテルへと戻り、今日中に会っておきたい知人の家をいくつかまわった。

ホテルに戻り、近くのローカルな店で、遅めの夕食を一人でとった。ビールとフォー・サオ（焼きうどん）。こんな簡単な料理が案外美味しい。今回の旅も、目まぐるしくいろいろなことがあった。できることならあと1日ぐらいハノイでのんびりしたい気分。旅の時間は、終わりが近づくほど早く流れていくような気がする。

12月7日（土）　帰国へ

今回の旅では留学生の家を訪ねて行ったりした。それぞれに届け物があったのだが、その代わりにたくさんお土産をもらった。他にもお土産をくれた人が何人もいる。今朝早起きして荷物を積めたのだが、大きなスーツケースが、ほとんど土産物だけで一杯になってしまった。ハノイのノイバイ空港で荷物を預けるときに重さを確認したら、スーツケースだけで30キロを超えていた。エコノミーのチケットで預けられる荷物は規則としては20キロまでだが、カウンターの担当者が目をつむってくれたのがありがたかった。

今回の旅は、やまださん川島さんという2人と一緒だったが故に、またいっそういろいろなものを見ることができたように感じている。自分一人の旅だったら、むしろあれこれアレンジしたりはしなくなる。自分がむしろ案内役になってベトナムに行くことによって、またベトナムとの付きあい方が広がり深まっていく。これからもまだこうしたことが続くだろう。

追記

2002年12月4日にフエで会った画家のブー・チーさんは、私たちが帰国した数日後、脳出血で倒れ、12月14日に帰らぬ人となってしまった。享年54歳。本当に思いがけない出来事だった。またフエに行ったときには再会して、きっとさらにいろいろとお話しを聞かせてもらえるものと思っていた。3人とも、偉大な画家の、結果的に最晩年となった残り数日の間に邂逅した奇遇さと幸運さと不思議さを噛みしめることになった。ブー・チーさんのご冥福を心からお祈りすると同時に、彼の仕事を何らかの形で継いでいきたいと思う。

なおブー・チーさんの作品のいくつかは、次のサイトで見ることができる。

http://www.tudogallery.com/BuuChi/

http://www.artmania.com/TuDo/BuuChi/

http://www.asiart.com/BuuChiText.htm

http://www.nhandan.org.vn/english/art_work/20021123.html

6　調査班のデータ分析資料：

「この世とあの世」国際比較調査研究の資料

6-1　４か国調査協力者に関する統計資料　加藤義信

6-2　この世とあの世の空間配置（１）：
　　イメージ画１の４か国比較統計的分析　加藤義信

6-3　この世とあの世の空間配置（２）：
　　イメージ画１の事例、ベトナム　伊藤哲司

6-4　この世とあの世の空間配置（３）：
　　イメージ画１の事例、イギリス　戸田有一

6-5　たましいの形とこの世からあの世への移行（１）：
　　イメージ画２の４か国比較統計的分析　伊藤哲司

6-6　たましいの形とこの世からあの世への移行（２）：
　　イメージ画２の事例、ベトナム　伊藤哲司

6-7　たましいの形とこの世からあの世への移行（３）：
　　イメージ画２の事例、イギリス　戸田有一

6-8　他界信念質問紙調査　４か国比較の統計的分析（１）：
　　各他界信念項目別にみた賛否回答分布　加藤義信

6-9　他界信念質問紙調査　４か国比較の統計的分析（２）：
　　因子分析　戸田有一

6-10　他界信念質問紙調査　４か国比較の統計的分析（３）：
　　イメージ画と信念調査との関係　戸田有一

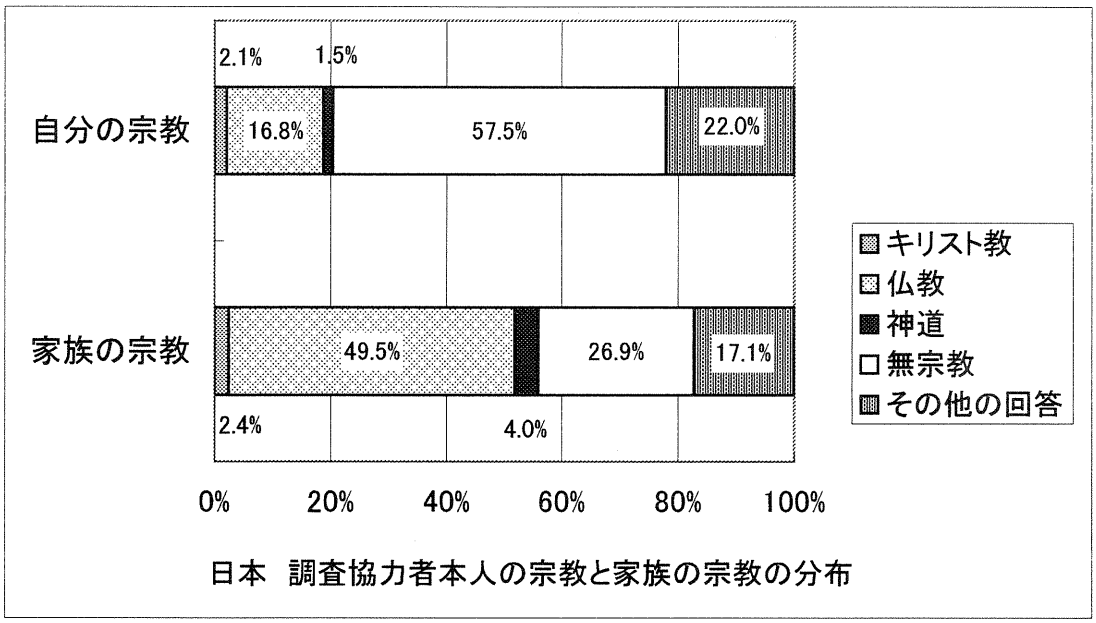
6-11　学会発表資料

6-12　４か国の調査用紙

6-1　4か国調査協力者に関する統計資料

加藤義信

日本　調査協力者本人の宗教と家族の宗教の分布



日本　調査協力者本人の宗教と家族の宗教の分布

宗教分布の詳細
（左は人数、右は比率）

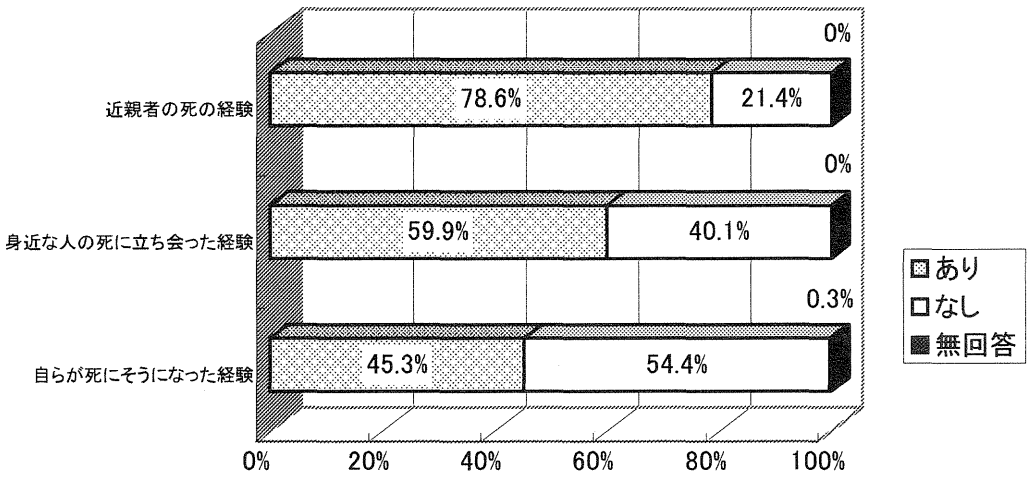
	本人の宗教		家族の宗教	
キリスト教（カトリック）	3	0.9%	3	0.9%
キリスト教（プロテスタント）	4	1.2%	5	1.5%
仏教	55	16.8%	162	49.5%
神道	5	1.5%	13	4.0%
その他の宗教	8	2.4%	3	0.9%
無宗教	188	57.5%	88	26.9%
わからない	59	18.0%	46	14.1%
複数記入	2	0.6%	7	2.1%
無回答	3	0.9%	0	0.0%
総計	327	100%	327	100%

宗教分布：縮約版
（左は人数、右は比率）

	本人の宗教		家族の宗教	
キリスト教	7	2.1%	8	2.4%
仏教	55	16.8%	162	49.5%
神道	5	1.5%	13	4.0%
無宗教	188	57.5%	88	26.9%
無回答その他	72	22.0%	56	17.1%
総計	327	100%	327	100%

＊　絵が白紙回答であった調査協力者も含む。

日本　調査協力者の死に関する経験



日本　調査協力者の死に関する経験

近親者の死の経験

あり	なし	無回答	総計
257	70	0	327
78.6%	21.4%	0%	100%

身近な人の死に立ち会った経験

あり	なし	無回答	総計
196	131	0	327
59.9%	40.1%	0%	100%

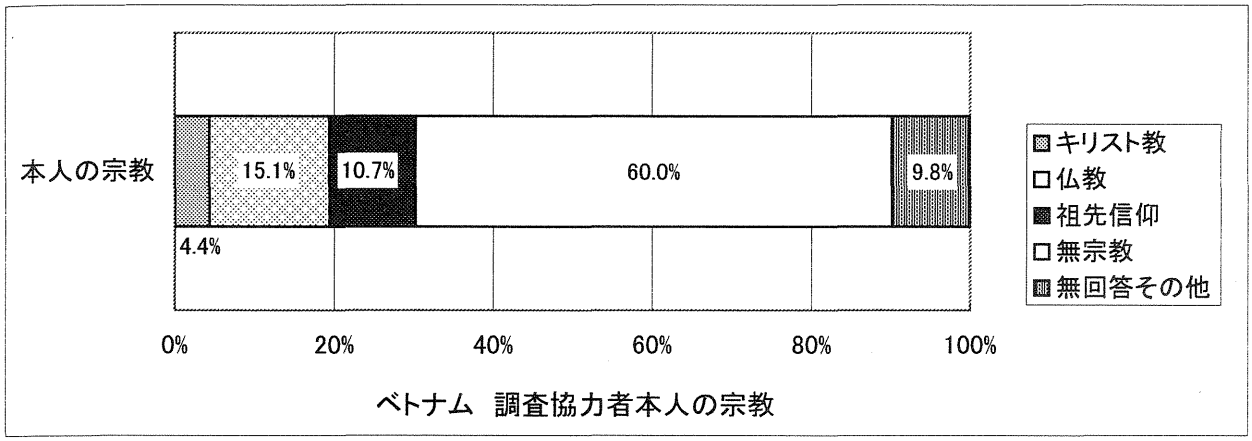
自らが死にそうになった経験

あり	なし	無回答	総計
148	178	1	327
45.3%	54.4%	0.3%	100%

＊　上段は人数、下段は比率。絵が白紙回答であった調査協力者も含む。

＊＊ 日本、ベトナム、フランス、イギリスでは、「経験」について尋ねた項目が同じ数となっていない。日本3項目、ベトナム1項目、フランス4項目、イギリス3項目であった。

ベトナム　調査協力者本人の宗教の分布

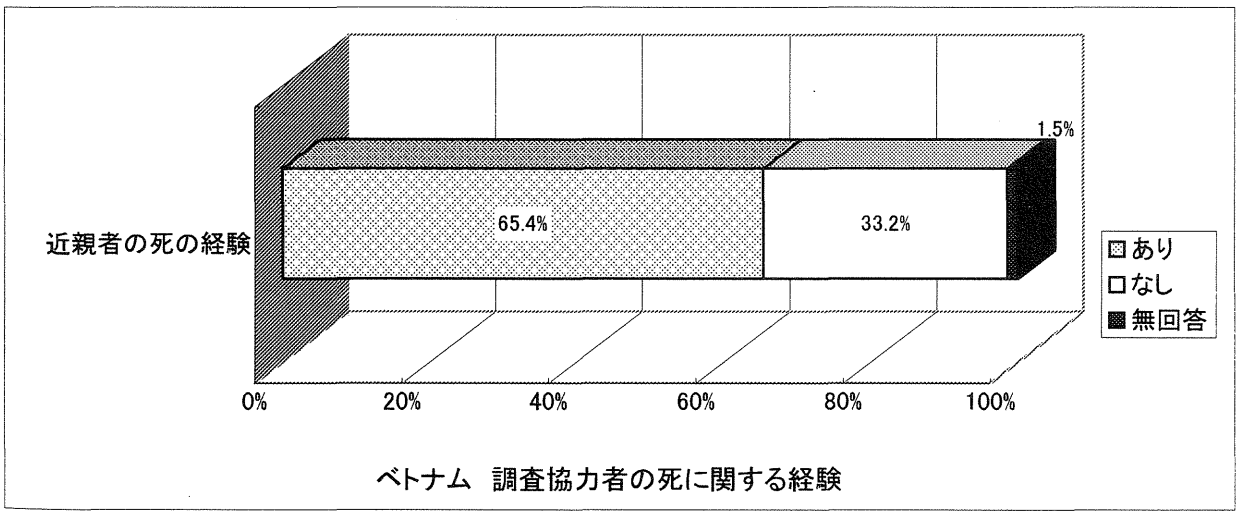


宗教分布の詳細
（左は人数、右は比率）

	本人の宗教	
キリスト教	9	4.4%
仏教	31	15.1%
祖先信仰	3	1.5%
ルーオング	19	9.3%
無宗教	123	60.0%
わからない	1	0.5%
無回答	19	9.3%
総計	205	100%

宗教分布の縮約版
（左は人数、右は比率）

	本人の宗教	
キリスト教	9	4.4%
仏教	31	15.1%
祖先信仰	22	10.7%
無宗教	123	60.0%
無回答その他	20	9.8%
総計	205	100%

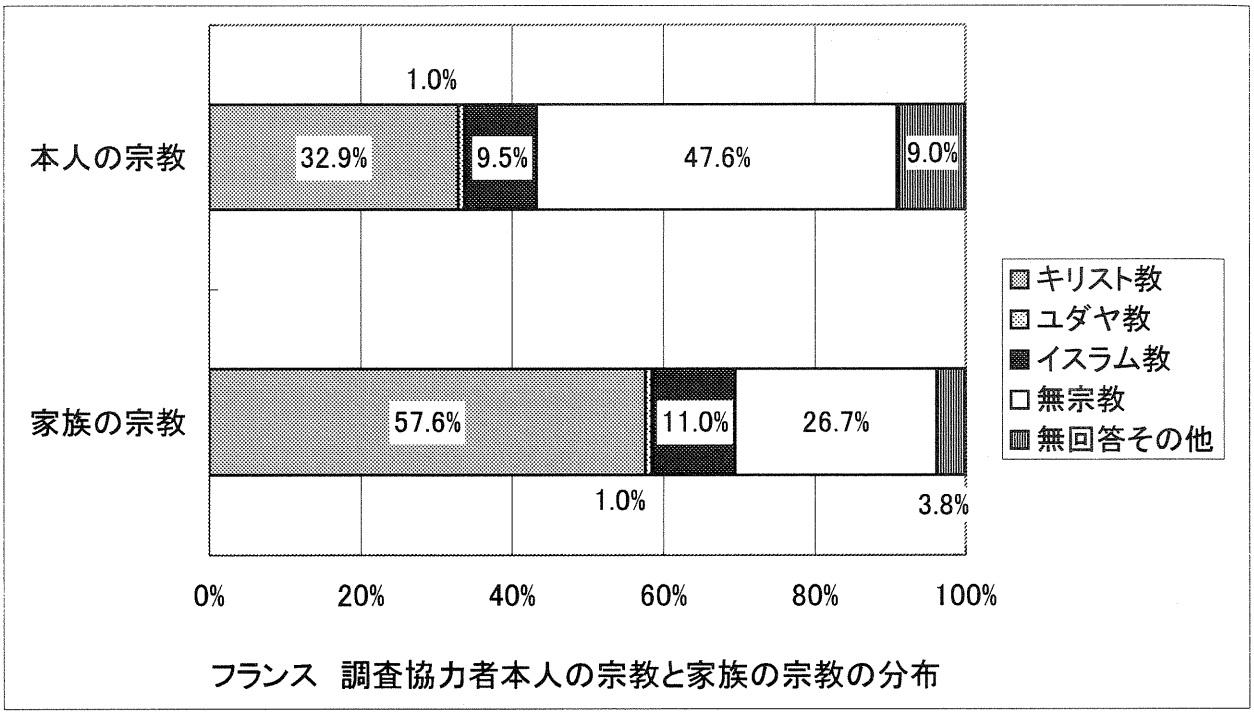


近親者の死の経験

あり	なし	無回答	総計
134	68	3	205
65.4%	33.2%	1.5%	100%

＊　上段は人数、下段は比率。絵が白紙回答であった調査協力者も含む。

フランス　調査協力者自身の宗教と家族の宗教の分布



フランス　調査協力者本人の宗教と家族の宗教の分布

宗教分布：
カトリックとプロテスタントを分けた場合
（左は人数、右は比率）

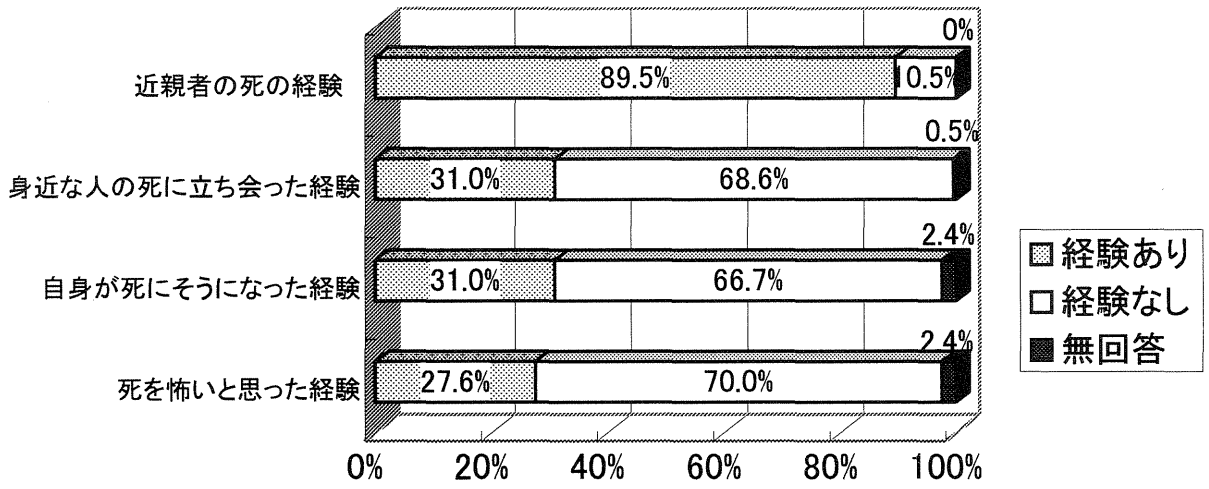
	本人の宗教		家族の宗教	
カトリック	64	30.5%	118	56.2%
プロテスタント	5	2.4%	3	1.4%
ユダヤ教	2	1.0%	2	1.0%
イスラム教	20	9.5%	23	11.0%
無宗教	100	47.6%	56	26.7%
無回答その他	19	9.0%	8	3.8%
総計	210	100%	210	100%

宗教分布：
キリスト教を一括した場合
（左は人数、右は比率）

	本人の宗教		家族の宗教	
キリスト教	69	32.9%	121	57.6%
ユダヤ教	2	1.0%	2	1.0%
イスラム教	20	9.5%	23	11.0%
無宗教	100	47.6%	56	26.7%
無回答その他	19	9.0%	8	3.8%
総計	210	100%	210	100%

＊　絵が白紙回答であった調査協力者を含む。

フランス　調査協力者の死に関する経験



フランス　調査協力者の死に関する経験

近親者の死の経験

あり	なし	無回答	総計
188	22	0	210
89.5%	10.5%	0.0%	100%

身近な人の死に立ち会った経験

あり	なし	無回答	総計
65	144	1	210
31.0%	68.6%	0.5%	100%

自身が死にそうになった経験

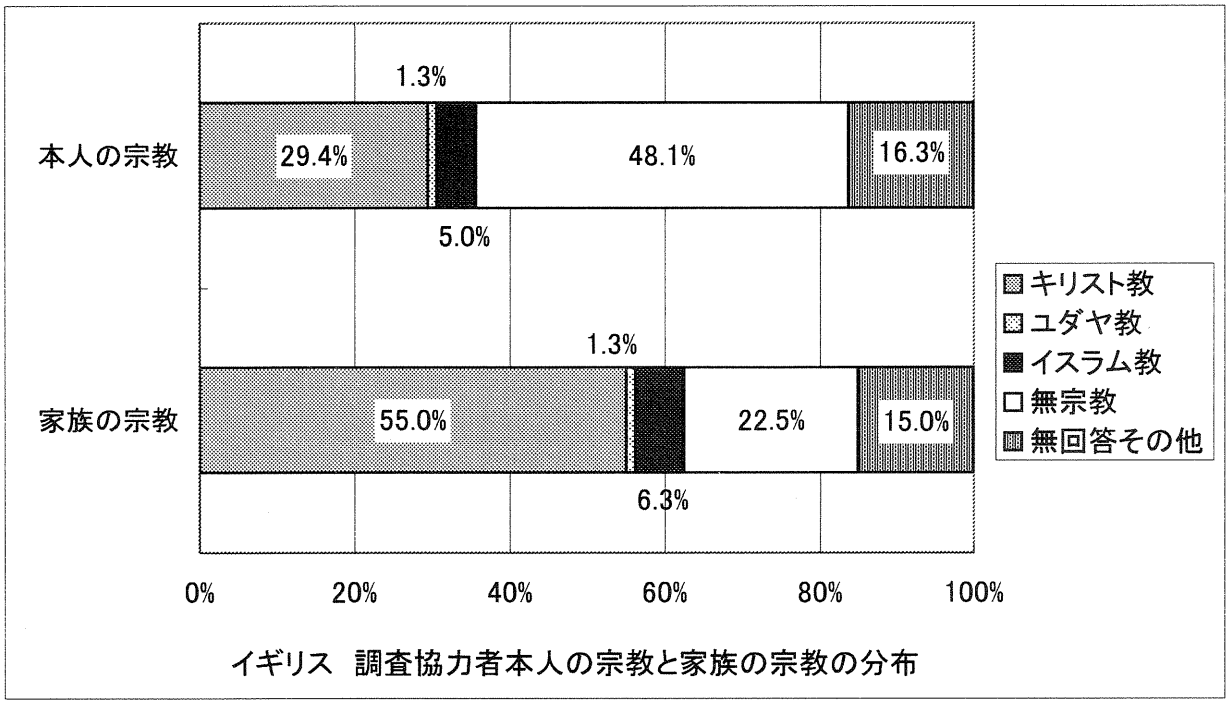
あり	なし	無回答	総計
65	140	5	210
31.0%	66.7%	2.4%	100%

死を怖いと思った経験

あり	なし	無回答	総計
58	147	5	210
27.6%	70.0%	2.4%	100%

＊　上段は人数、下段は比率。絵が白紙回答であった調査協力者も含む。

イギリス　調査協力者本人の宗教と家族の宗教の分布



イギリス　調査協力者本人の宗教と家族の宗教の分布

宗教分布の詳細
（左は人数、右は比率）

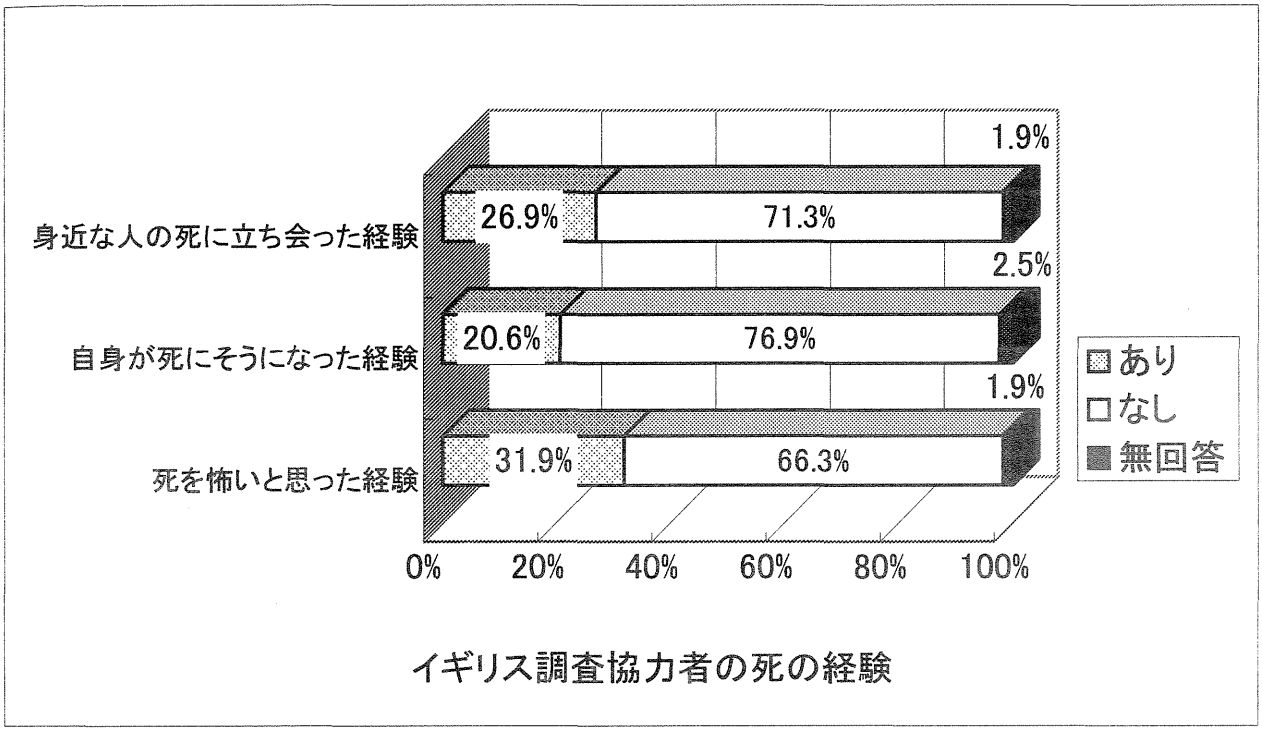
	本人の宗教		家族の宗教	
イギリス国教会	15	9.4%	28	17.5%
プロテスタント	5	3.1%	14	8.8%
カトリック	14	8.8%	30	18.8%
ギリシャ正教	1	0.6%	2	1.3%
キリスト教その他	12	7.5%	14	8.8%
ユダヤ教	2	1.3%	2	1.3%
イスラム教	8	5.0%	10	6.3%
ヒンズー教	1	0.6%	1	0.6%
仏教	2	1.3%	2	1.3%
その他の宗教	2	1.3%	4	2.5%
宗教なし	77	48.1%	36	22.5%
回答望まない	5	3.1%	3	1.9%
無回答	16	10.0%	14	8.8%
総計	160	100%	160	100%

キリスト教を一括した場合
（左は人数、右は比率）

	本人の宗教		家族の宗教	
キリスト教	47	29.4%	88	55.0%
ユダヤ教	2	1.3%	2	1.3%
イスラム教	8	5.0%	10	6.3%
無宗教	77	48.1%	36	22.5%
無回答その他	26	16.3%	24	15.0%
総計	160	100%	160	100%

＊　絵が白紙回答であった調査協力者も含む。

イギリス　調査協力者の死に関する経験



イギリス調査協力者の死の経験

身近な人の死に立ち会った経験

あり	なし	無回答	総計
43	114	3	160
26.9%	71.3%	1.9%	100.0%

自身が死にそうになった経験

あり	なし	無回答	総計
33	123	4	160
20.6%	76.9%	2.5%	100.0%

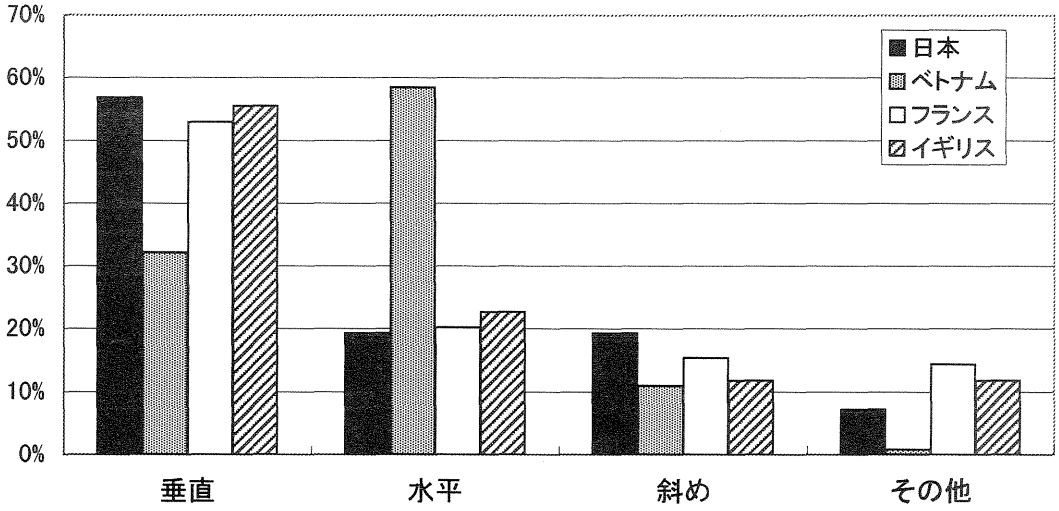
死を怖いと思った経験

あり	なし	無回答	総計
51	106	3	160
31.9%	66.3%	1.9%	100.0%

＊　上段は人数、下段は比率。絵が白紙回答であった調査協力者も含む

6-2 この世とあの世の空間配置（1）：
イメージ画1の4か国比較統計的分析

加藤義信



この世とあの世の空間配置:4カ国比較(不明を除いた比率)

不明を含めた場合（上段は人数、下段は比率）

	垂直	水平	斜め	その他	不明	
日本	150	51	51	19	21	n=285
	52.6%	17.9%	17.9%	6.7%	7.4%	
ベトナム	38	69	13	1	64	n=182
	20.9%	37.9%	7.1%	0.5%	35.2%	
フランス	55	21	16	15	52	n=156
	35.3%	13.5%	10.3%	9.6%	33.3%	
イギリス	61	25	13	13	29	n=139
	43.9%	18.0%	9.4%	9.4%	20.9%	

不明を除いた場合の比率

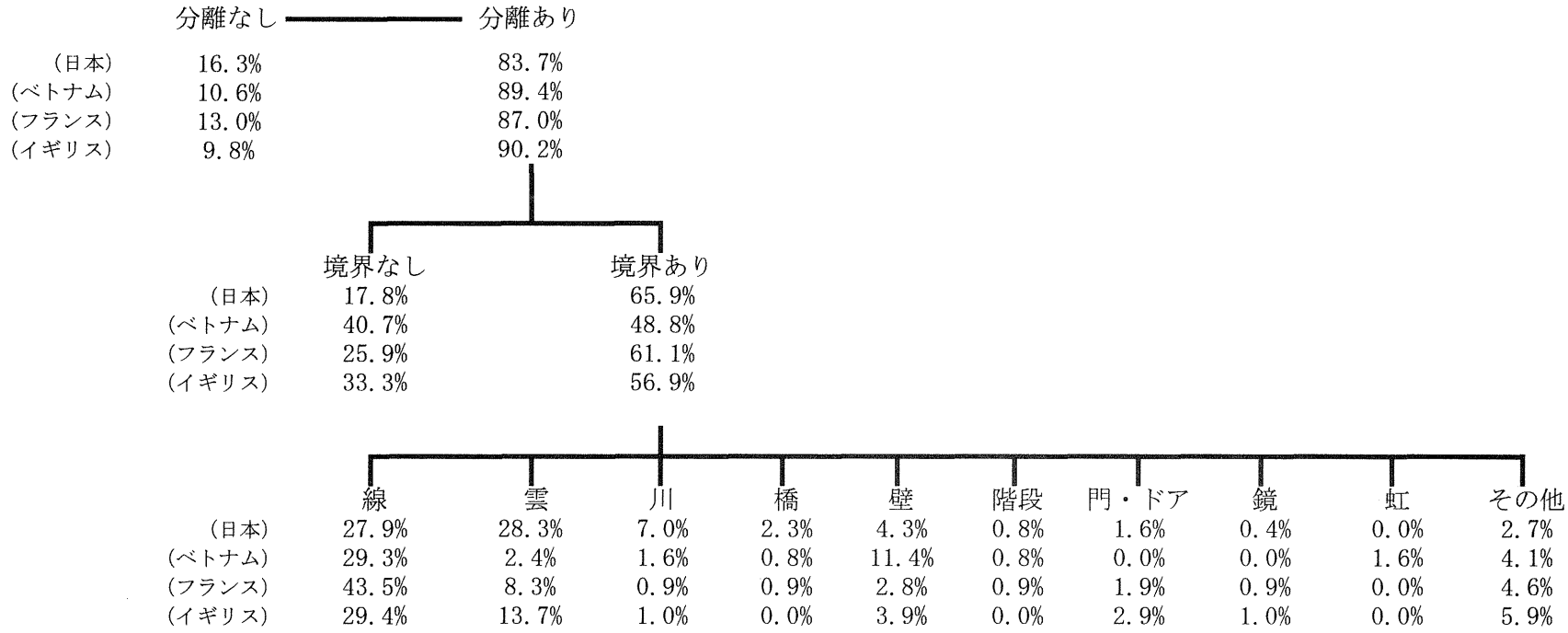
	垂直	水平	斜め	その他	
日本	56.8%	19.3%	19.3%	7.2%	n=264
ベトナム	32.2%	58.5%	11.0%	0.8%	n=118
フランス	52.9%	20.2%	15.4%	14.4%	n=104
イギリス	55.5%	22.7%	11.8%	11.8%	n=110

カテゴリー詳細内訳（上段は人数、下段は比率）

	垂直			水平		斜め				その他	不明
	上	上下	下	左	右	左上	右上	左下	右下		
日本	137	8	5	33	40	24	22	1	4	19	21
	48.1%	2.8%	1.8%	11.6%	14.0%	8.4%	7.7%	0.4%	1.4%	6.7%	7.4%
ベトナム	10	4	24	18	51	3	6	2	2	1	64
	5.5%	2.2%	13.2%	9.9%	28.0%	1.6%	3.3%	1.1%	1.1%	0.5%	35.2%
フランス	45	3	7	6	18	4	7	0	5	15	52
	28.8%	1.9%	4.5%	3.8%	11.5%	2.6%	4.5%	0.0%	3.2%	9.6%	33.3%
イギリス	50	4	7	6	23	2	9	1	5	13	29
	36.0%	2.9%	5.0%	4.3%	16.5%	1.4%	6.5%	0.7%	3.6%	9.4%	20.9%

*フランスは斜めdouble count分0　　*イギリスは斜めdouble count分４

この世とあの世の分離・境界

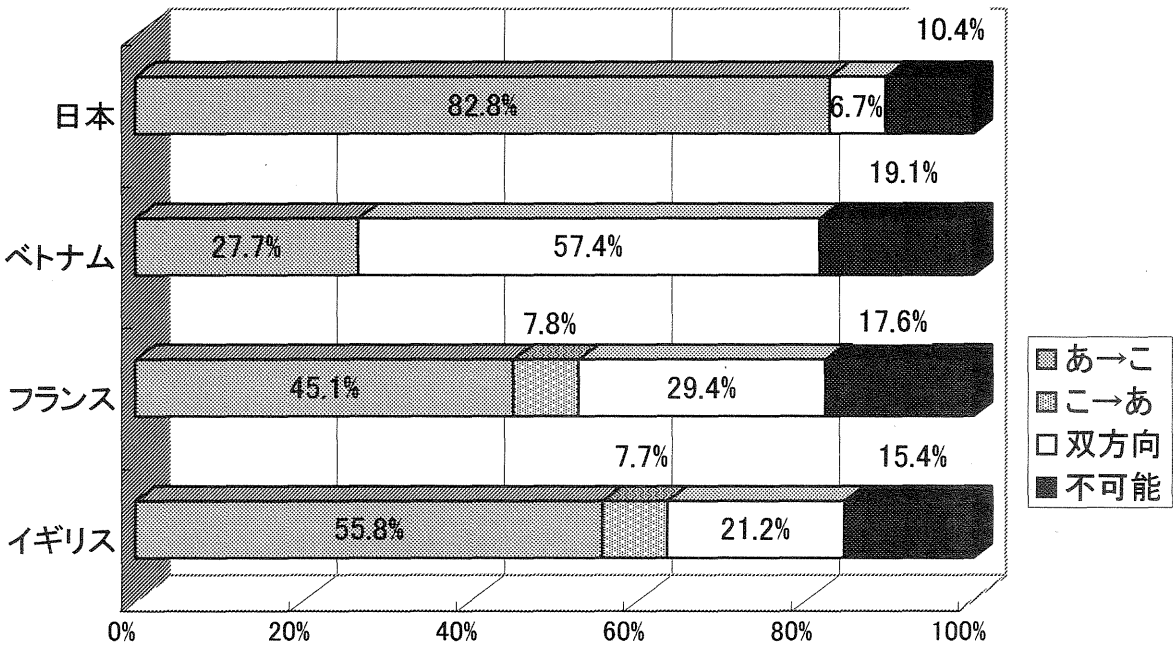


この世とあの世の分離・境界（不明を除いた比率、標識は重複カウント可）

国別にみた各カテゴリーに該当する人数

	分離なし	分離あり											不明	対象人数
		境界なし	境界あり											
			境界あり合計	線	雲	川	橋	壁	階段	門・ドア	鏡	虹	その他	
日本	42	46	170	72	73	18	6	11	2	4	1	0	7	27	n=285
ベトナム	13	50	60	36	3	2	1	14	1	0	0	2	5	11	n=134
フランス	14	28	66	47	9	1	1	3	1	2	1	0	5	48	n=156
イギリス	10	34	58	30	14	1	0	4	0	3	1	0	6	37	n=139

この世とあの世のコミュニケーション



この世とあの世のコミュニケーション（不明・その他を除いた比率）

この世とあの世のコミュニケーション
（不明・その他を除いた比率）

	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能	人数合計
日本	82.8%	0.0%	6.7%	10.4%	n=134
ベトナム	27.7%	0.0%	57.4%	19.1%	n=49
フランス	45.1%	7.8%	29.4%	17.6%	n=51
イギリス	55.8%	7.7%	21.2%	15.4%	n=52

この世とあの世のコミュニケーション
（不明・その他を含む各カテゴリー該当人数）

	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能	不明・その他	人数合計
日本	111	0	9	14	151	285
ベトナム	13	0	27	9	146	195
フランス	23	4	15	9	105	156
イギリス	29	4	11	8	87	139

この世とあの世の感情的評価に関する4カ国比較

（不明の絵を除いた比率）

	この世				あの世			
	肯定	否定	肯定･否定両方	中性	肯定	否定	肯定･否定両方	中性
日本	18.8%	25.4%	6.5%	49.3%	71.8%	7.4%	18.8%	2.0%
ベトナム	51.9%	7.7%	1.9%	38.5%	33.8%	48.6%	16.2%	1.4%
フランス	19.4%	27.8%	5.6%	47.2%	61.7%	10.6%	17.0%	10.6%
イギリス	10.2%	28.8%	1.7%	59.3%	76.5%	11.8%	8.8%	2.9%

感情的評価の各カテゴリーに該当する人数（不明を含む場合）

		肯定	否定	両方	中性	不明
日本	この世	107	11	28	3	136
n=285	あの世	26	35	9	68	147
ベトナム	この世	27	4	1	20	144
n=196	あの世	25	36	12	1	122
フランス	この世	7	10	2	17	120
n=156	あの世	29	5	8	5	109
イギリス	この世	6	17	1	35	80
n=139	あの世	52	8	6	2	71

国別にみたこの世とあの世の感情的評価の関係

日本		この世				
		肯定	否定	両方	中性	不明
あの世	肯定	15	34	2	51	5
	否定	9	1	0	0	1
	両方	0	0	6	17	5
	中性	2	0	1	0	0
	不明	0	0	0	0	136

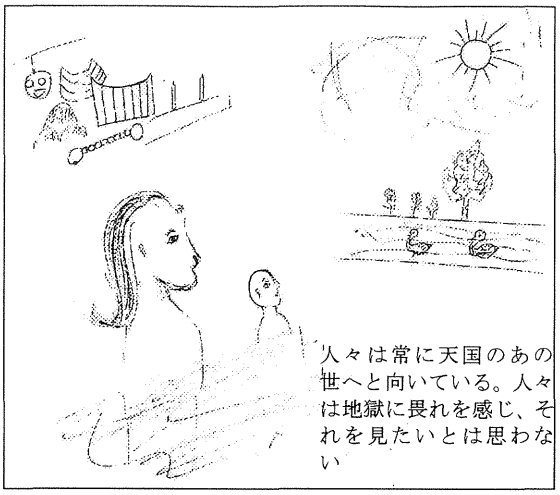
ベトナム		この世				
		肯定	否定	両方	中性	不明
あの世	肯定	4	3	0	9	9
	否定	21	1	0	4	10
	両方	1	0	1	6	4
	中性	0	0	0	1	0
	不明	1	0	0	0	121

フランス		この世				
		肯定	否定	両方	中性	不明
あの世	肯定	3	8	2	9	7
	否定	2	0	0	1	2
	両方	0	0	0	6	2
	中性	2	2	0	1	0
	不明	0	0	0	0	109

イギリス		この世				
		肯定	否定	両方	中性	不明
あの世	肯定	5	14	1	24	8
	否定	1	1	0	6	0
	両方	0	0	0	5	1
	中性	0	2	0	0	0
	不明	0	0	0	0	71

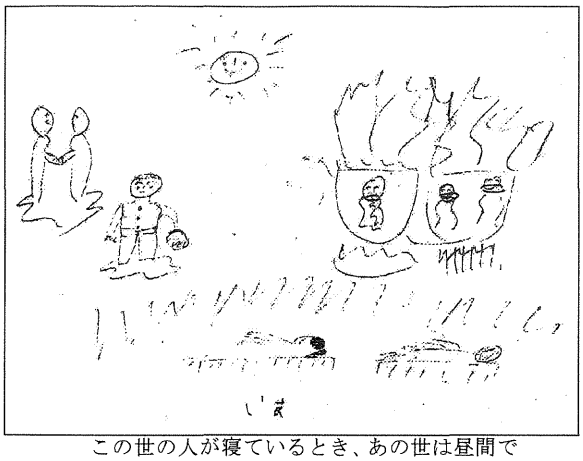
6-3　この世とあの世の空間配置（2）：イメージ画1の事例、ベトナム

伊藤哲司



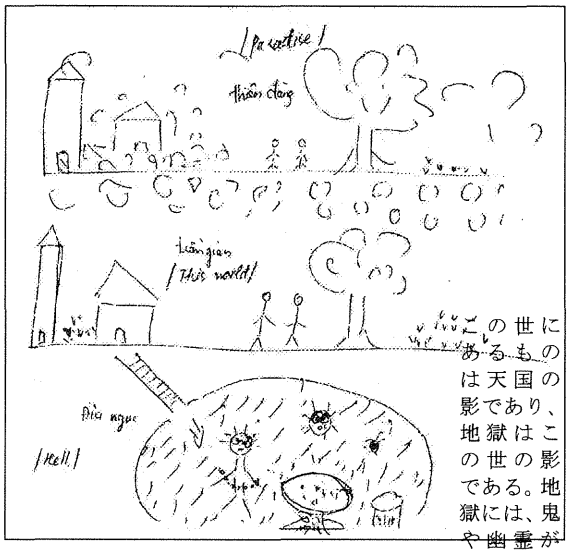
人々は常に天国のあの世へと向いている。人々は地獄に畏れを感じ、それを見たいとは思わない

V0048①　上方に描かれた天国と地獄①



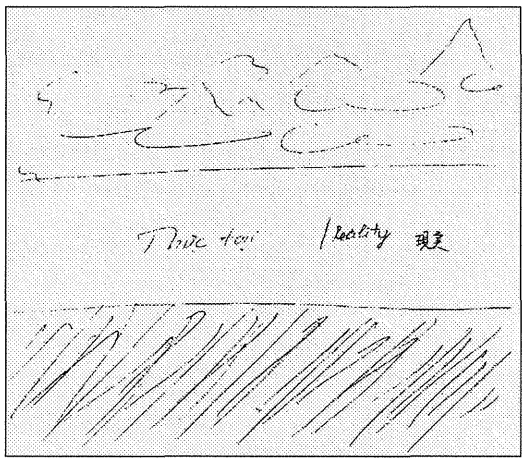
この世の人が寝ているとき、あの世は昼間である。この世で悪いことをすれば、あの世に行ってから他の魂と楽しく活動することができず、罰が当たり、油の鍋に入れられる。

V0021①　上方に描かれた天国と地獄②



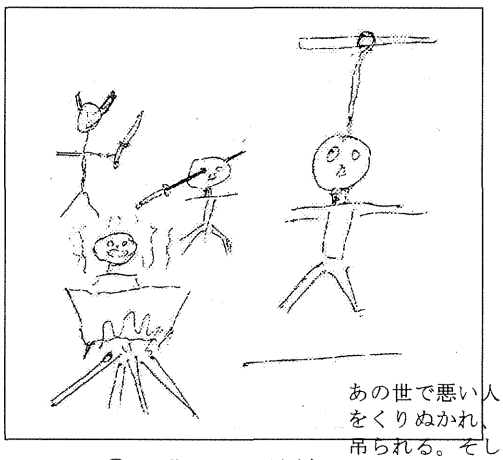
この世にあるものは天国の影であり、地獄はこの世の影である。地獄には、鬼や幽霊がたくさんいる。

V0015①　天国と地獄①



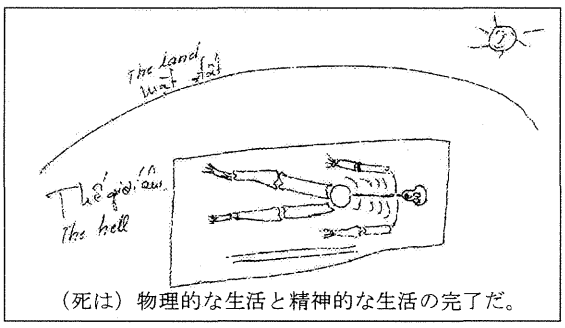
生きているとき優しいと天国に行ける。一番下は地獄。そこは悪いことをやった人が死んだ後に行くところ。

V0003①　天国と地獄②



あの世で悪い人は目をくりぬかれ、首を吊られる。そして油の鍋に入れられる。

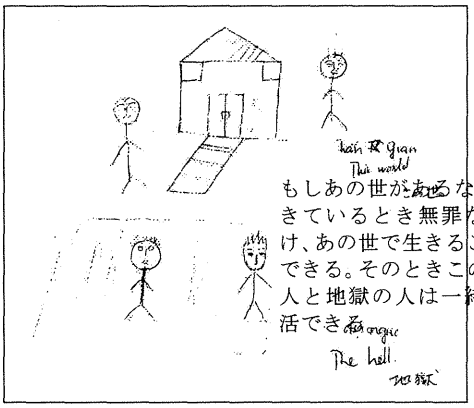
V0183①　恐ろしい地獄



（死は）物理的な生活と精神的な生活の完了だ。

V0179①　土葬された死者

事例 1-1　地獄、下方に描かれるあの世



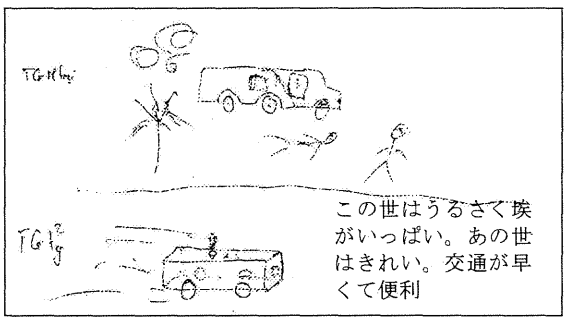
もしあの世があるなら、生きているとき無罪な人だけ、あの世で生きることができる。そのときこの世の人と地獄の人は一緒に生活できる。

V0103①　共存できる地獄



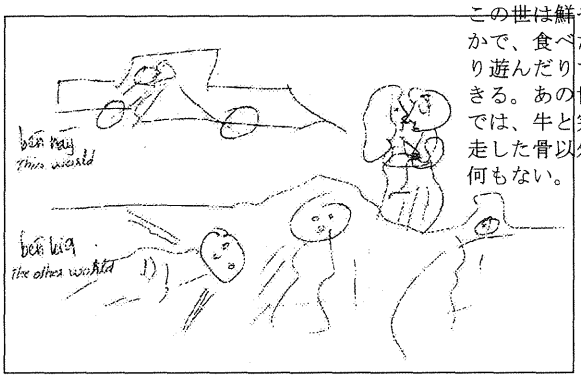
この世は活動的で生成する。あの世は静かで生がない

V0178　静かな下方のあの世



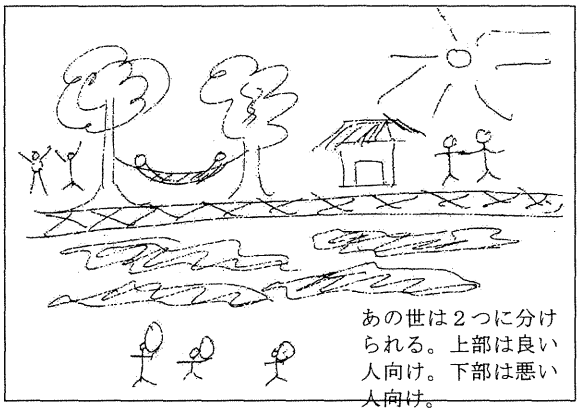
この世はうるさく埃がいっぱい。あの世はきれい。交通が早くて便利

V0162①　きれいで便利な下方のあの世



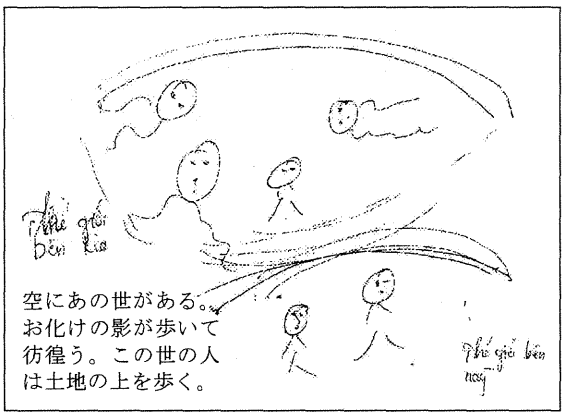
この世は鮮やかで、食べたり遊んだりできる。あの世では、牛と完走した骨以外何もない。

V0163①　つまらない下方のあの世



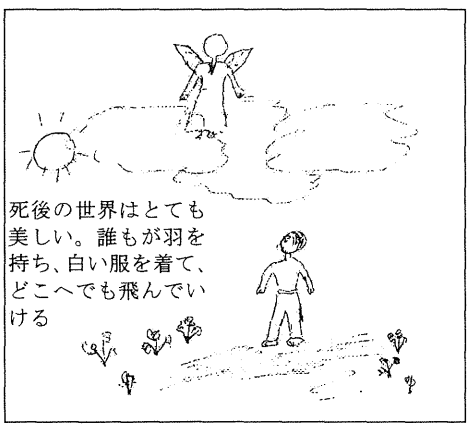
あの世は２つに分けられる。上部は良い人向け。下部は悪い人向け。

V0111①　２種類のあの世



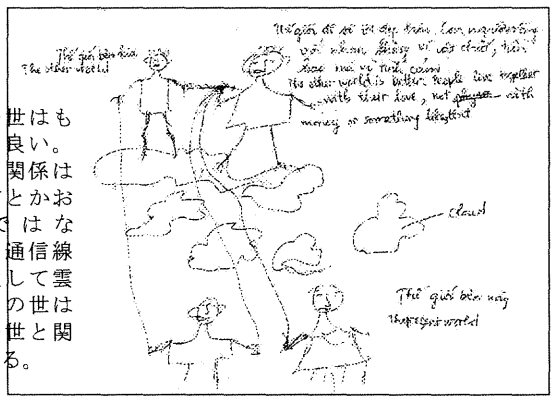
空にあの世がある。お化けの影が歩いて彷徨う。この世の人は土地の上を歩く。

V0176①　空にあるあの世



死後の世界はとても美しい。誰もが羽を持ち、白い服を着て、どこへでも飛んでいける

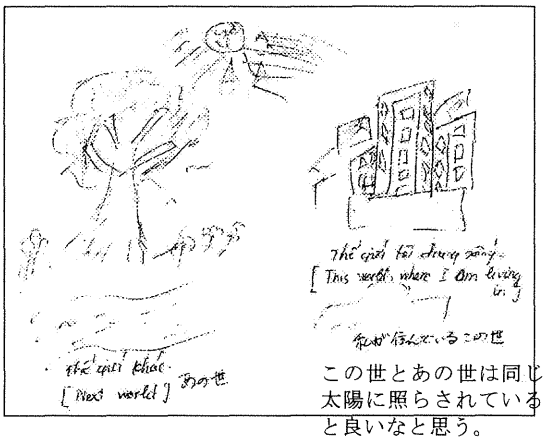
V0094①　美しい上方のあの世



あの世はもっと良い。人間関係は物質とかお金ではない。通信線を通して雲でこの世はあの世と関係する。

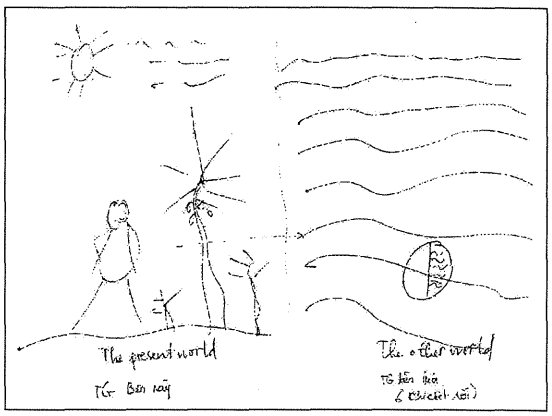
V0126①　通信できる上方のあの世

事例 1-2　下方のあの世、上方のあの世



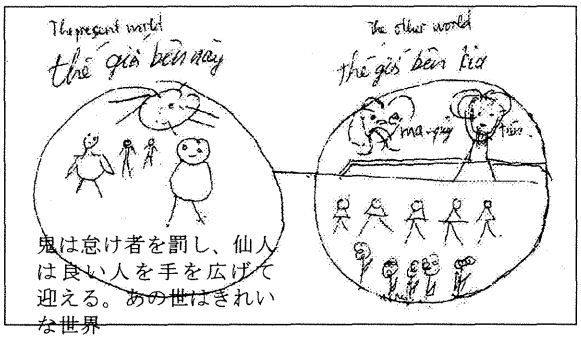
この世とあの世は同じ太陽に照らされていると良いなと思う。

V0001①　同じひとつの太陽



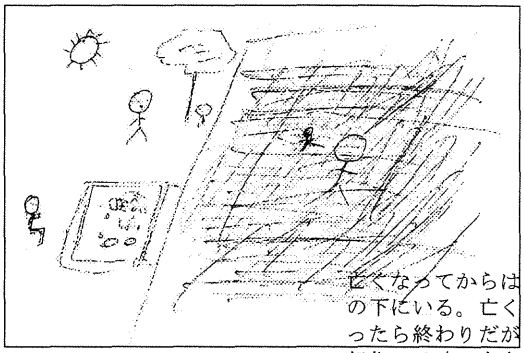
V0120①
あの世でも太陽が

太陽はあの世の黒い幕。それはもともと存在して、この世からあの世に人を迎える。



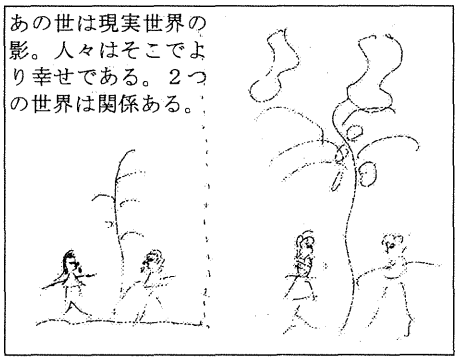
鬼は怠け者を罰し、仙人は良い人を手を広げて迎える。~~あの世はきれいな世界~~

V0104①　鬼と仙人のいる「あの世」



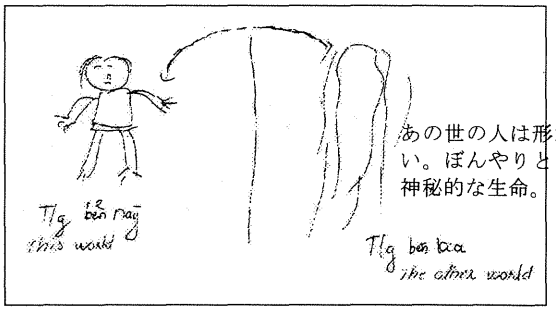
V0010①　右方の土の中

亡くなってからは土の下にいる。亡くなったら終わりだが、想像では魂は存在している。



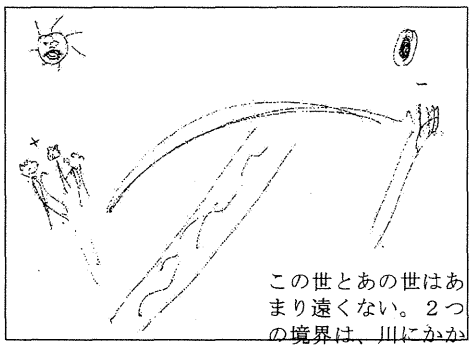
あの世は現実世界の影。人々はそこでより幸せである。２つの世界は関係ある。

V0059①　現実世界の影



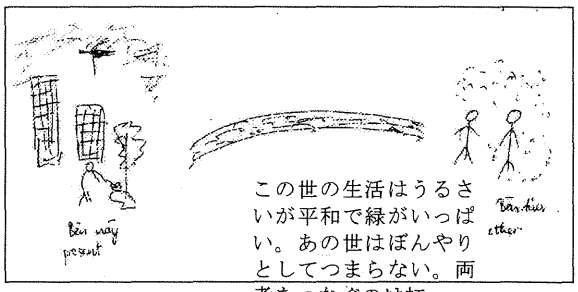
あの世の人は形がない。ぼんやりとして神秘的な生命。

V0160①　形のないあの世の人



この世とあの世はあまり遠くない。２つの境界は、川にかかる橋のよう。

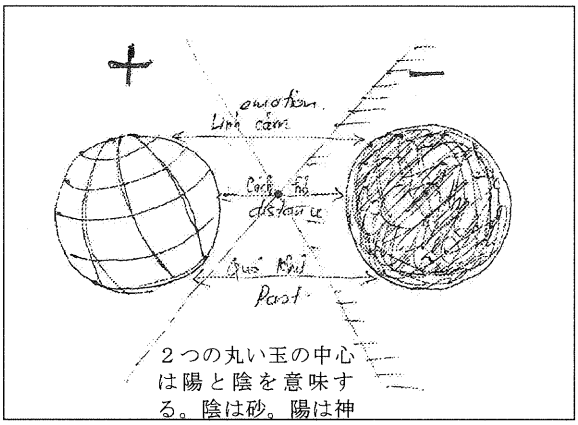
V0136①
あの世とこの世をつなぐ橋



この世の生活はうるさいが平和で緑がいっぱい。あの世はぼんやりとしてつまらない。両者をつなぐのは虹

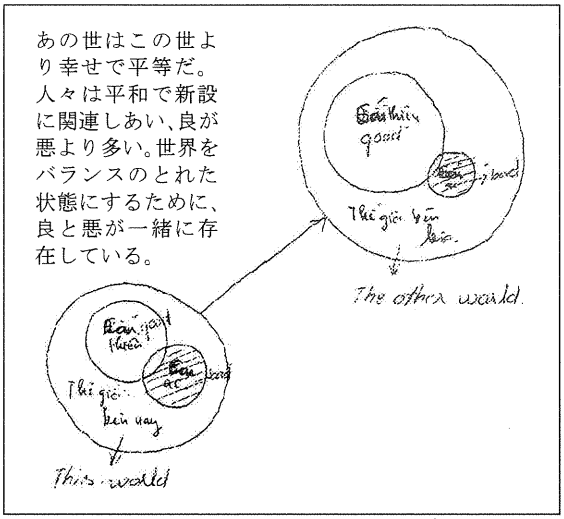
V0139①
あの世とこの世をつなぐ虹

事例 1-3　水平に描かれる「あの世」



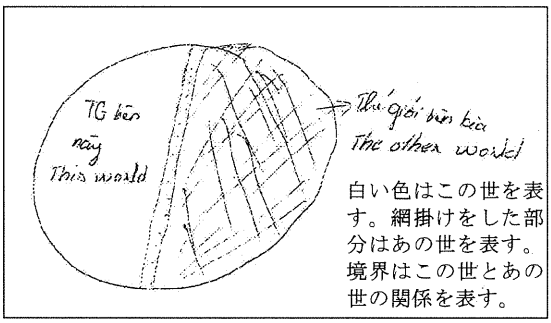
２つの丸い玉の中心は陽と陰を意味する。陰は砂。陽は神秘的な地球

V0143①　陽と陰　２つの球影



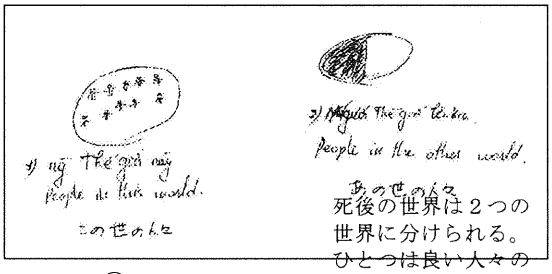
あの世はこの世より幸せで平等だ。人々は平和で新設に関連しあい、良が悪より多い。世界をバランスのとれた状態にするために、良と悪が一緒に存在している。

V0171①
この世にもあの世にも陰と陽



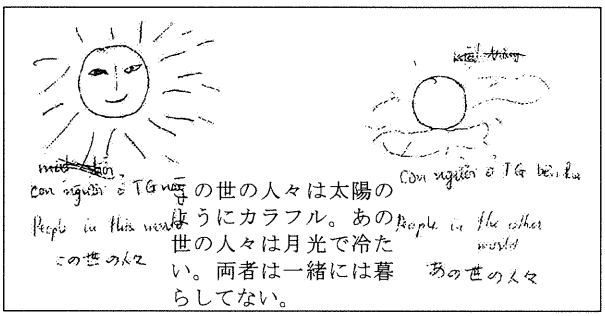
白い色はこの世を表す。網掛けをした部分はあの世を表す。境界はこの世とあの世の関係を表す。

V0175①
この世とあの世でひとつの円



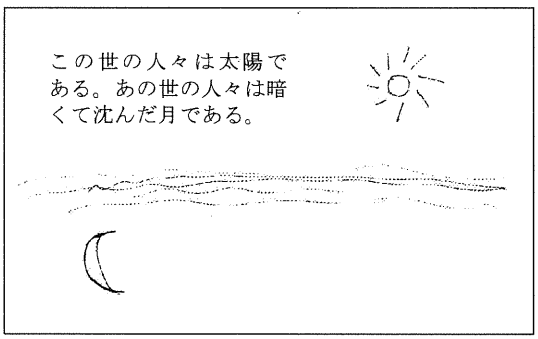
死後の世界は２つの世界に分けられる。ひとつは良い人々の世界、もうひとつは悪い人々の世界

V0091①
あの世は２分割



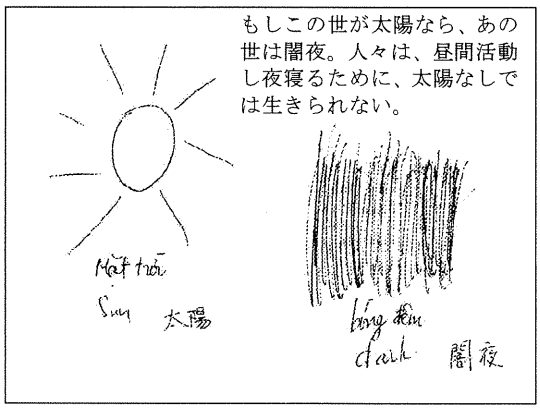
この世の人々はあの世の人々は太陽のようにカラフル。あの世の人々は月光で冷たい。両者は一緒には暮らしてない。

V0083①　太陽と月の比喩①



この世の人々は太陽である。あの世の人々は暗くて沈んだ月である。

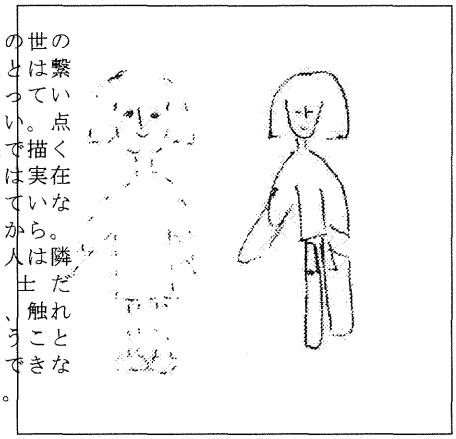
V0087①　太陽と月の比喩②



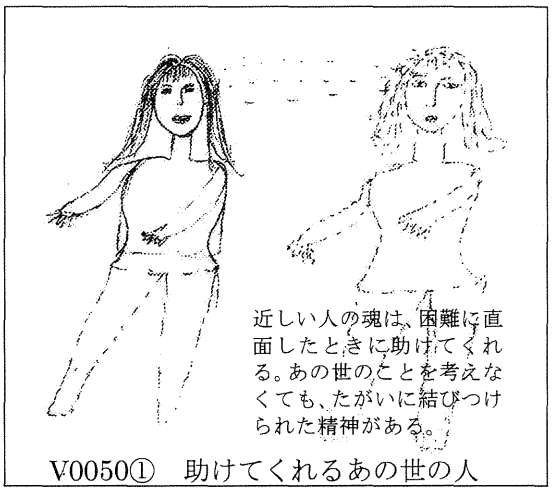
もしこの世が太陽なら、あの世は闇夜。人々は、昼間活動し夜寝るために、太陽なしでは生きられない。

V0084①　太陽と闇夜の対比

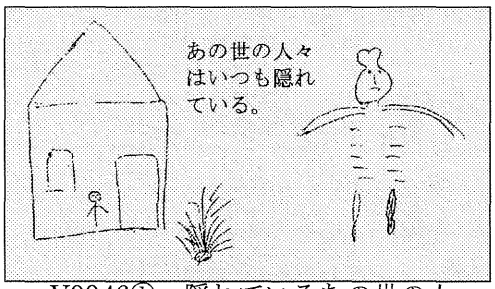
事例 1-4　陰と陽の対比



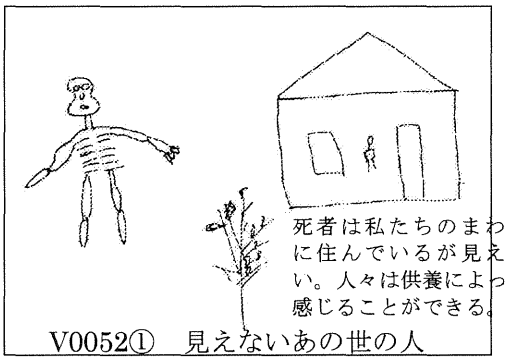
V0016①　触れられないあの世の人



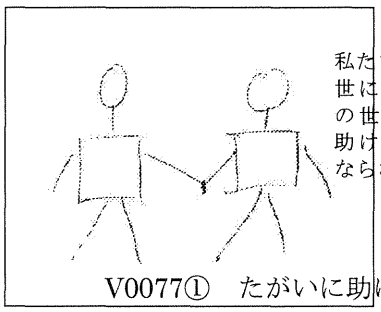
V0050①　助けてくれるあの世の人



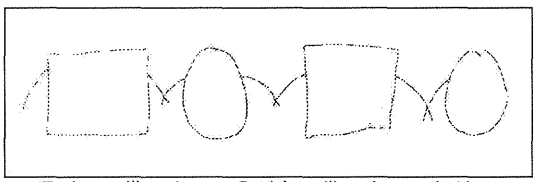
V0046①　隠れているあの世の人



V0052①　見えないあの世の人



V0077①　たがいに助けあう

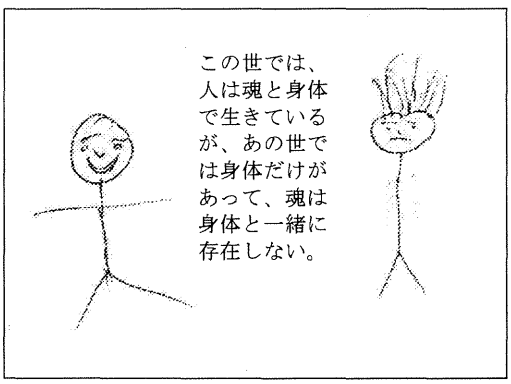


□がこの世の人々。○があの世の人々。たがいに親しい人であり、彼らは私たちと団結するだろう。

V0078①　団結しあう

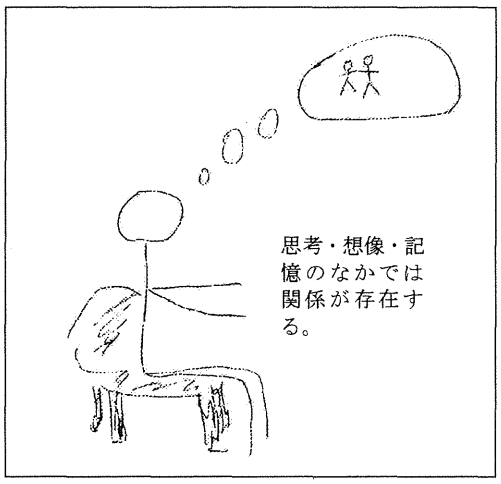


V0035①　守り教えるあの世の人

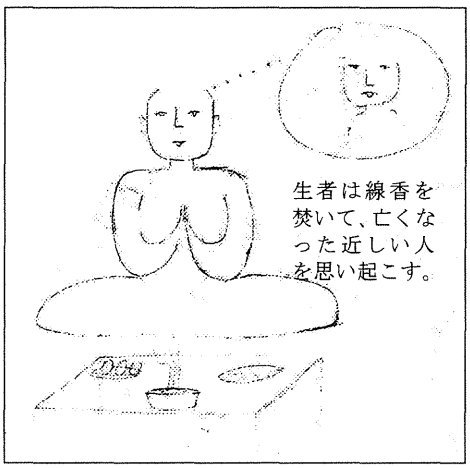


V0017①　身体だけのあの世の人

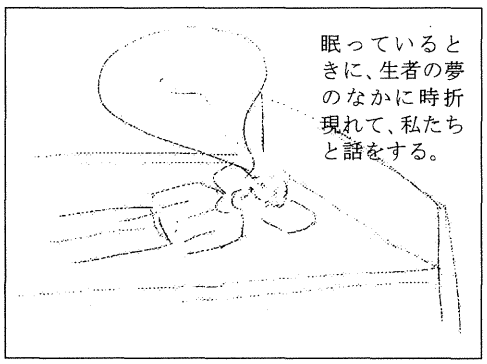
事例 1-5　身近に描かれたあの世の人



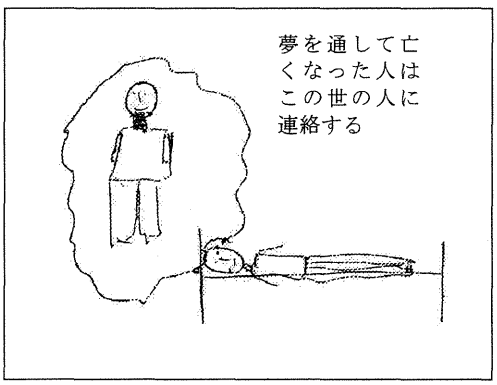
V0043①　想像のなかの関係



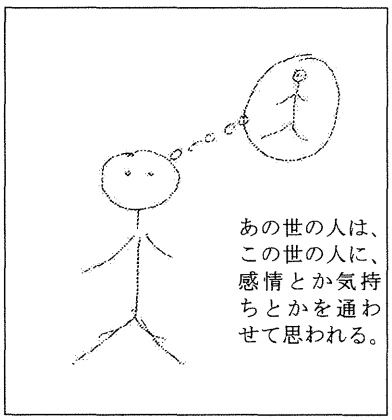
V0054①　思い起こされるあの世の人



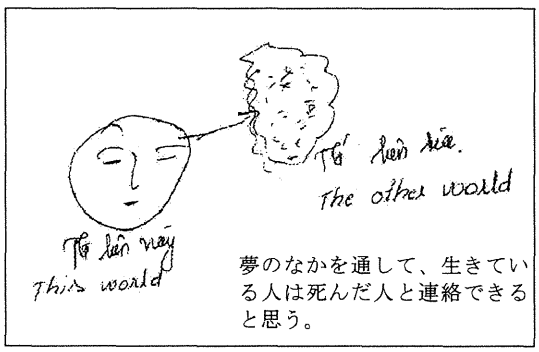
V0064①　夢のなかのあの世の人



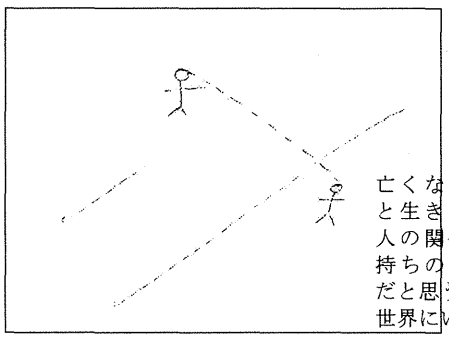
V0005①　夢を通しての連絡



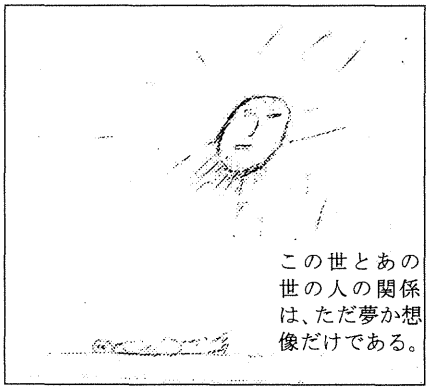
V0006①　気持ちを通じて思われる



V0152①　夢のなかでの連絡

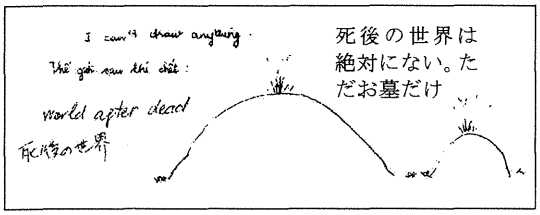


V0009①　気持ちの面での関係

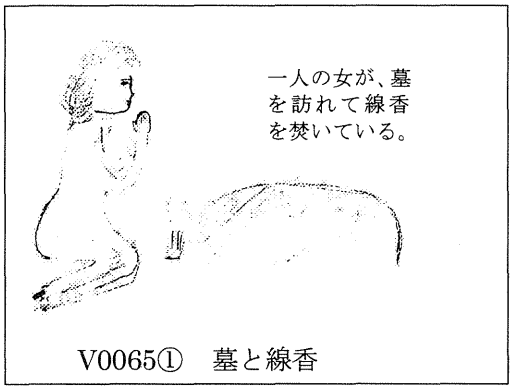


V0022①　夢や想像での関係

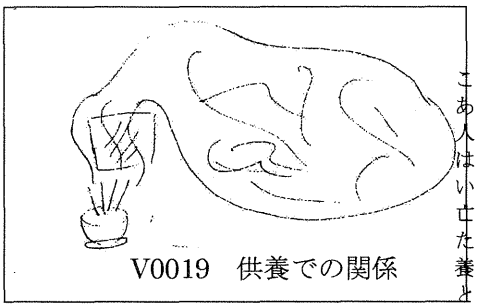
事例 1-6
気持ち・夢・想像



V0008①　あるのはお墓だけ

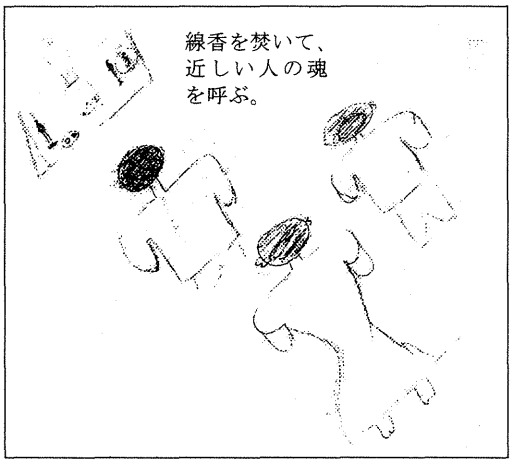


V0065①　墓と線香



V0019　供養での関係

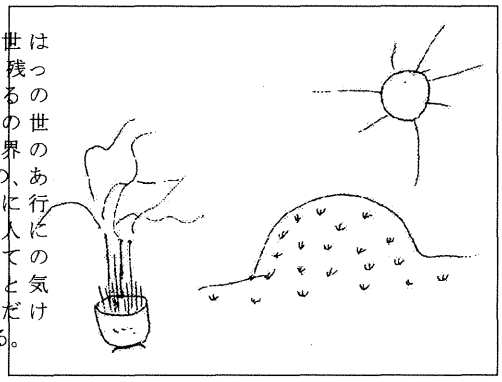
この人は、いった供養とである。



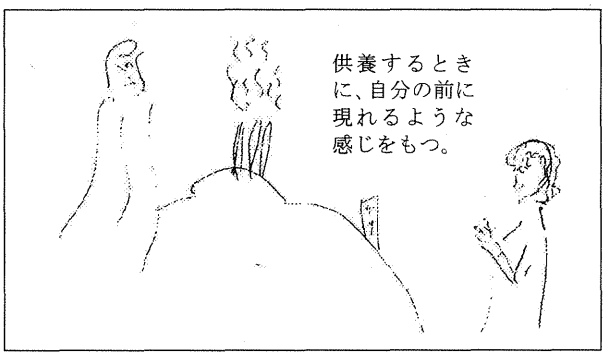
V0039①　線香で魂を呼ぶ

事例 1-7　供養と祈り

あの世はっの世のあ行にの気けない。残るの界の、に人てとだはの人間のっつ印持である。



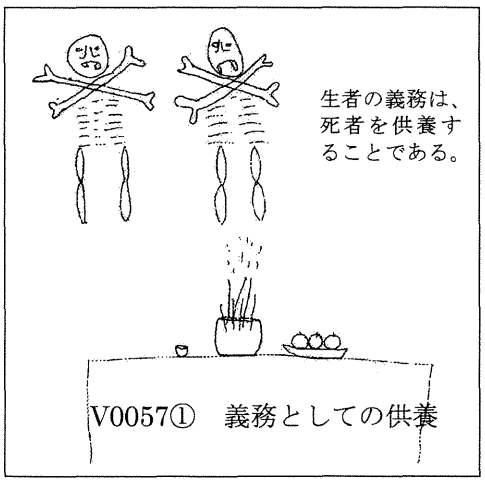
V0002①　あるのは印象と気持ちだけ



V0056①　供養で現れるような感じのする死者



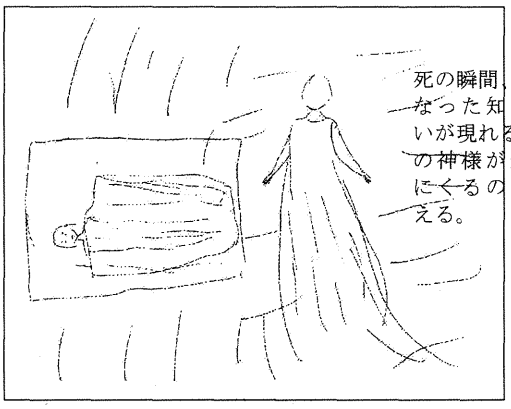
V0045①　娘の父に対する供養



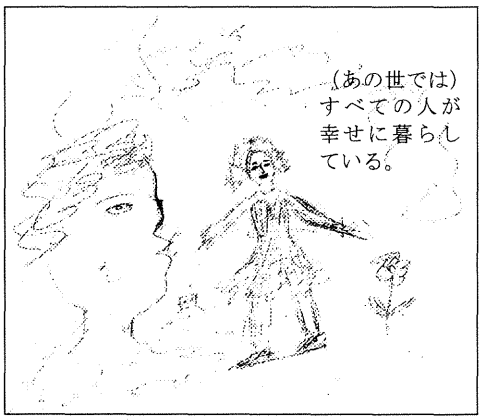
V0057①　義務としての供養



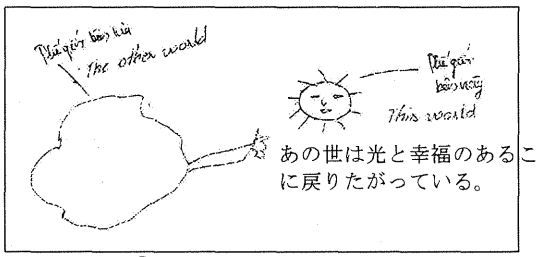
V0027①　あの世の人からプレゼント



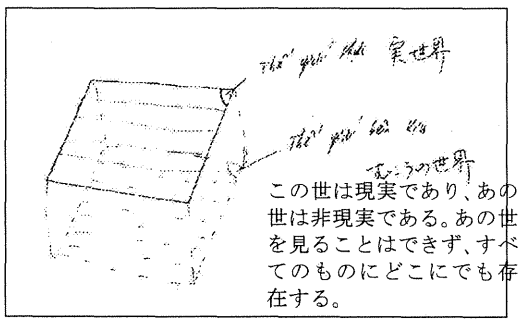
V0036①　死の瞬間の出迎え



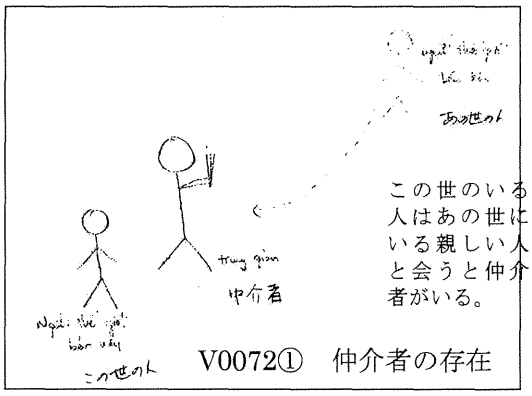
V0063①　幸せなあの世



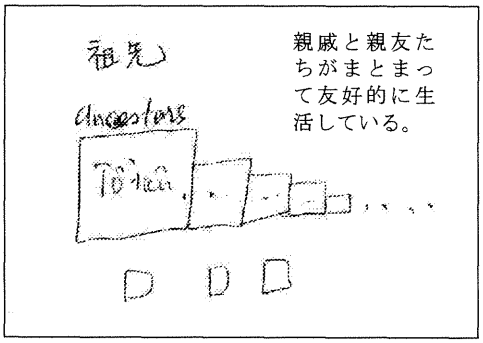
V0148①　この世に戻りたい……



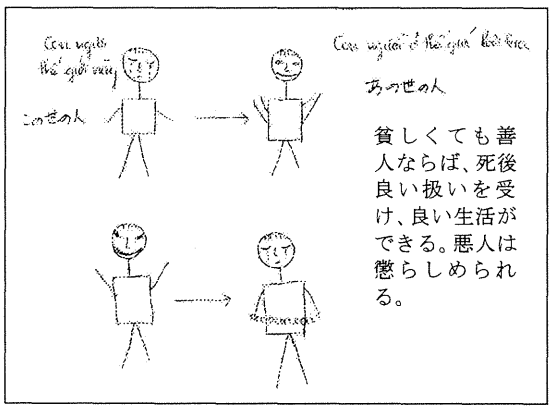
V0062①　普遍的な存在としてのあの世



V0072①　仲介者の存在



V0089①　親しい人の友好的な生活



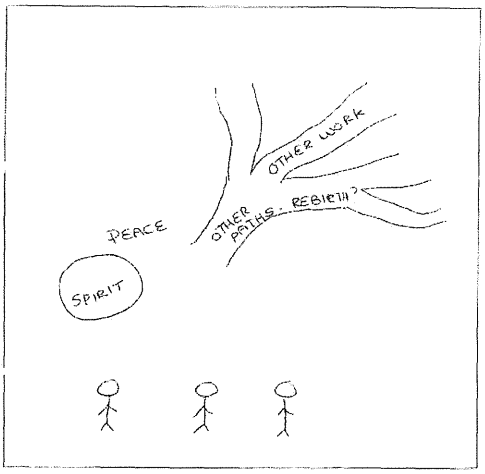
V0051①　勧善懲悪

事例 1-8　その他

6-4　この世とあの世の空間配置（3）：
イメージ画1の事例、イギリス　　戸田有一

E024-1

1) If the next world after death exists, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.

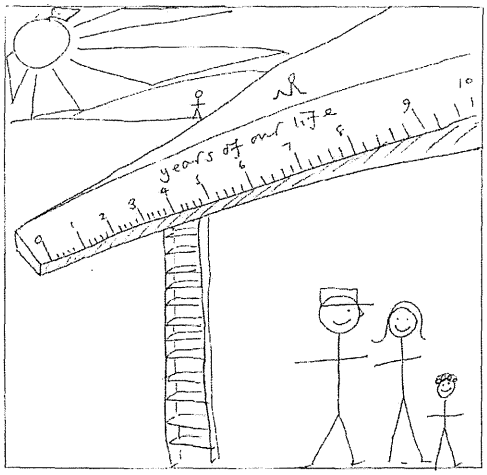


（E024）国籍：イギリス、女性、37歳、無、専攻：心理学
024-1
死体は抜け殻で、精霊は生き続け、しばらくは遺族を世話すると思われる。その後、その精霊は再誕し、精神/魂を成長させるための新たな学びをしたり仕事を遂行したりするために再び生まれる。これが、我々がなぜここにいるかについて、私が思う唯一の理由だ。でなければ、人生やその苦闘は私にとって意味をなさない。
UNDERGO REBIRTH AND LIVE AGAIN IN ORDER TO LEARN ANOTHER LESSON OR PERFORM WORK IN ORDER TO GROW AS A SPIRIT/SOUL. THIS IS THE ONLY REASON WHY I THINK WE ARE HERE BECAUSE OTHERWISE LIFE AND ITS STRUGGLE

死後のさまざまな方向性
英国・女性・37歳

E075-1

1) If the next world after death exists, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



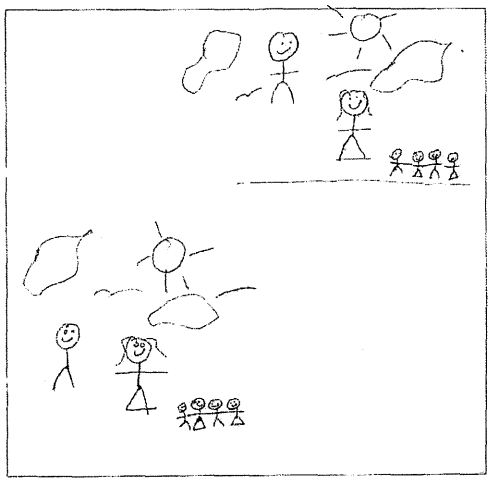
Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)
you climb the ladder when you die and have a 'review of your' before you lay down in the ground to rest

（E075）国籍：イギリス、女性、21歳、無、専攻：音楽
075-1
死後の様子を診り、休むために大地に横たわる前に、一生の回顧をする。

あの世への階段
英国・女性・21歳

E033-1

1) If the next world after death exists, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



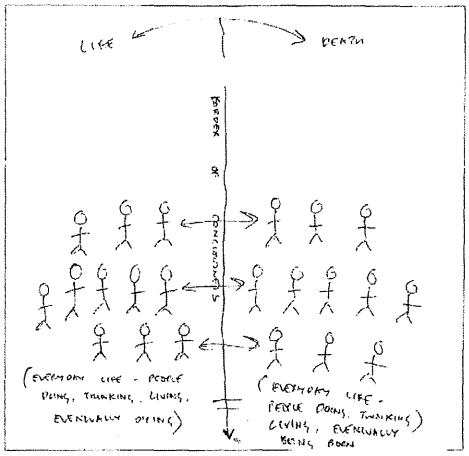
Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)
the people in this world are going to be the same in the next

（E033）国籍：イギリス、男性、23歳、無信論者、専攻：心理学
033-1
この世の人々はあの世でも同じであるだろう。

この世と似たあの世
英国・男性・23歳

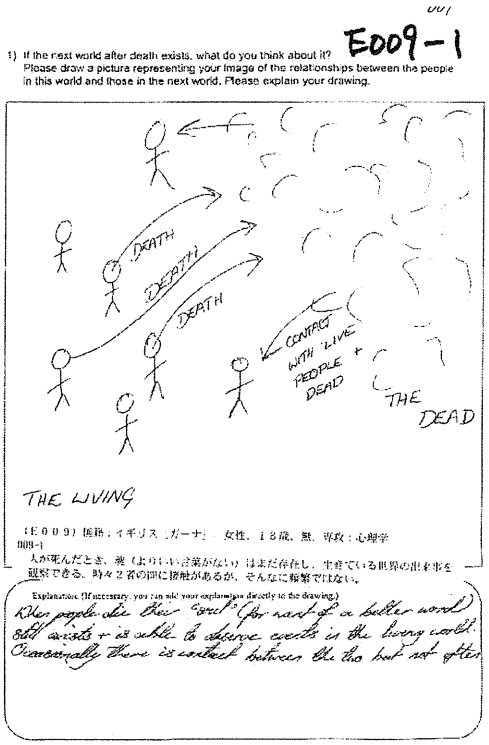
E096-1
246

1) If the next world after death exists, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



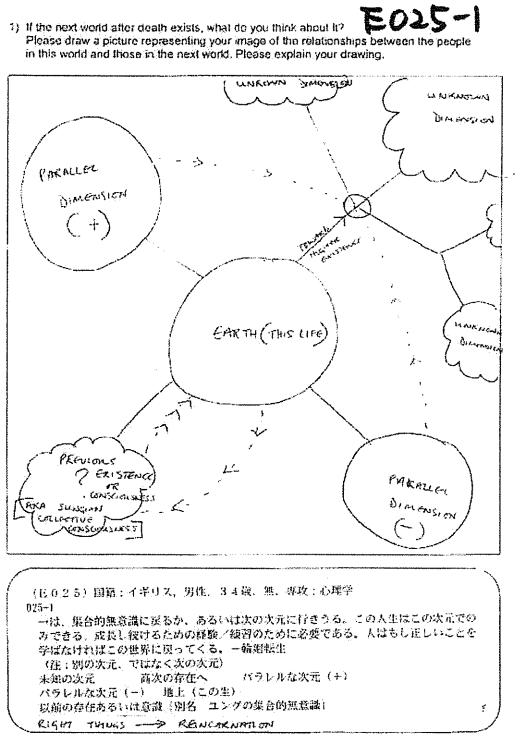
（E096）国籍：イギリス、男性、21歳、無信仰、専攻：音楽
096-1
あの世は私たち自身のこの世を映す、それは全く同じだが、ただし、人々はこの世に生まれ死んだらあの世に行く。そして、その逆もある。誰もこのことに気付いていない。
IDENTICAL, EXCEPT THAT PEOPLE ARE BORN INTO THIS WORLD AND GO TO THE NEXT WORLD WHEN DEAD AND VICE-VERSA. NO-ONE IS AWARE OF THIS.

パラレルなあの世とこの世
英国・男性・21歳



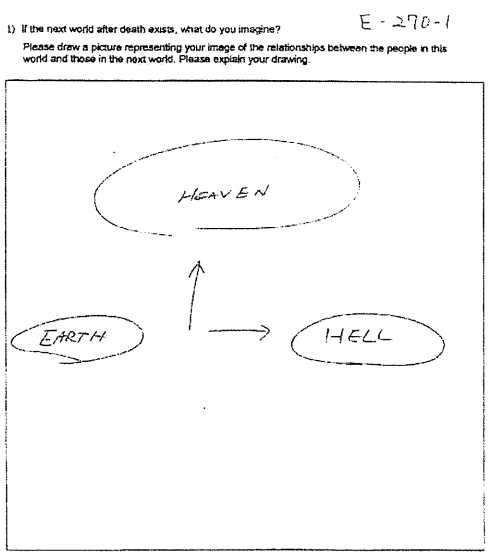
気体のようなあの世

英国（ｶﾞｰﾅ）・女性・18 歳



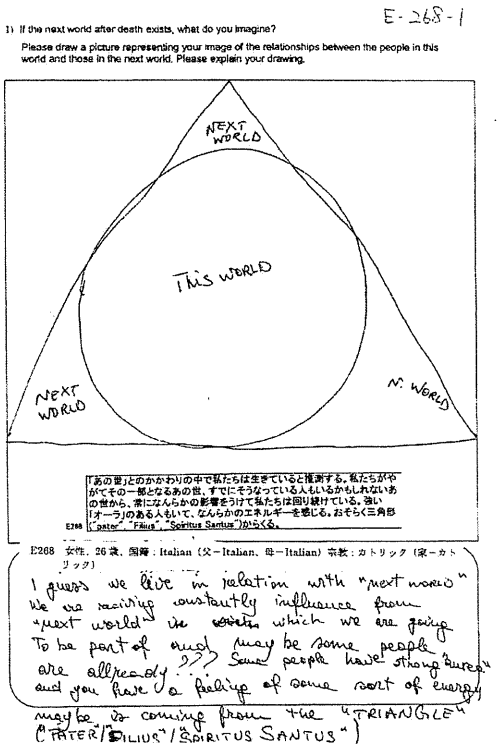
多次元的なあの世

英国・男性・34 歳



上に天国、横に地獄

英国・女性・27 歳

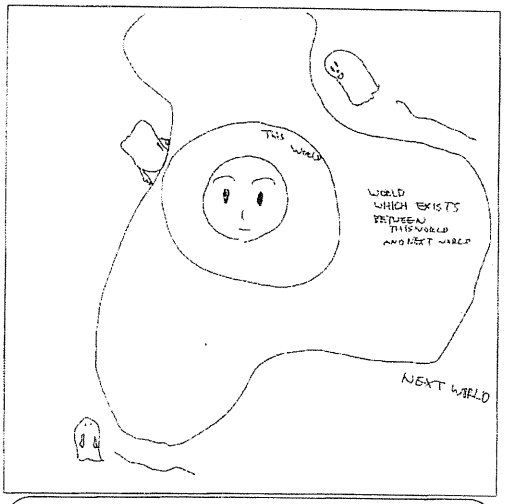


三方向のあの世

イタリア・女性・26 歳

1) If the next world after death exists, what do you imagine? E-256-1

Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

E256 女性，21 歳，国籍：British（父－English，母－Scotish）宗教：なし（家－なし）

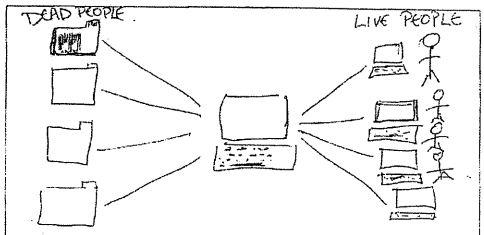
E256 この世とあの世のあいだにある世界

この世とあの世のあいだの世界

英国・女性・21 歳

1) If the next world after death exists, what do you imagine? E-261-1

Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



E261 亡くなった人は、デジタルなデータになるだけで、要望に応じて、生きている人がアクセスできる。

Explanation. (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

Dead people just turn to digitized date which then can be accessed from living people at demand

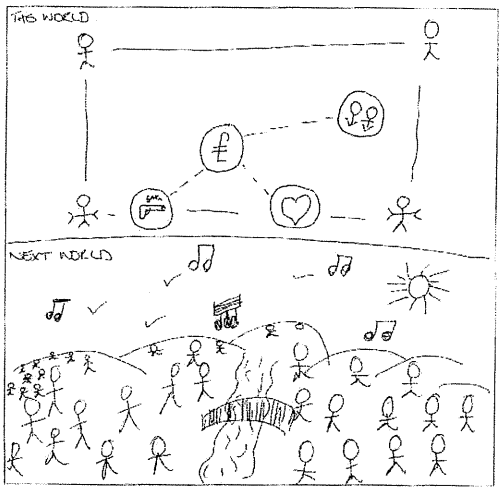
E261 男性，25 歳，国籍：Greek（父－Greece，母－Greece）宗教：ギリシャ正教（家－ギリシャ正教）

デジタルなデータ

ギリシア・男性・25 歳

1) If the next world after death exists, what do you think about it? E046-1

Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



E046 国籍：イギリス，女性，18 歳，無回答・神を信じるが宗教ではない，専攻：心理学

この世では、私たちの主な関心がお金、愛欲、暴力に集中しており、人々の関係は複雑である。人々は差別されがちでもあり隔絶されている。あの世では、人種、宗教、色に執着せずにお金や暴力の必要もなく、ひとまとまりの共同体として共に暮らしているだろう。

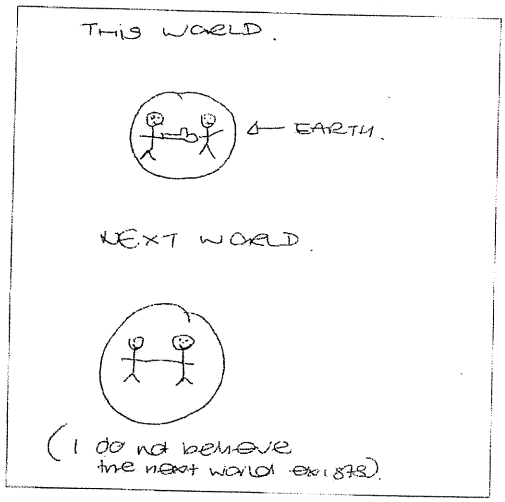
love and violence prevail us against and are thus separated In the next world we live together as a whole community regardless of race, religion or colour, without the need for money & violence (hopefully)

他界憧憬　あの世が下

英国・女性・18 歳

1) If the next world after death exists, what do you think about it? E002-1

Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



(E002 国籍：イギリス（イングランド），女性，22 歳，キリスト教，専攻：心理学 専攻 1

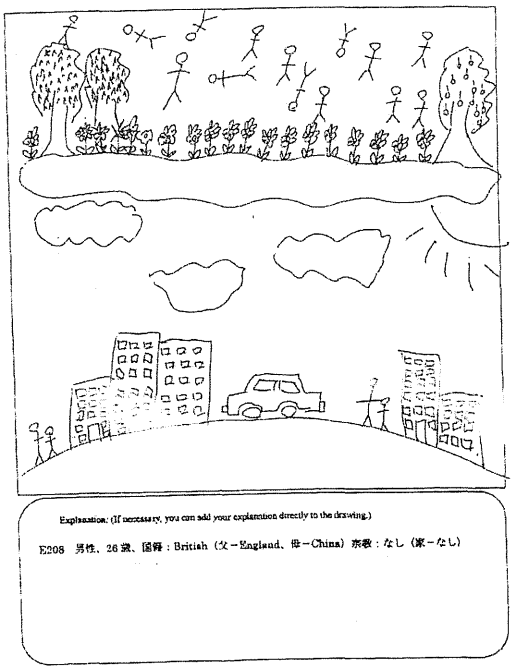
(あの世の存在は信じない。)

この世では、人々の間に多くの葛藤が見るが、あの世では、ただ穏和的。

alot of conflict between people, but in the next world it is more harmonious.

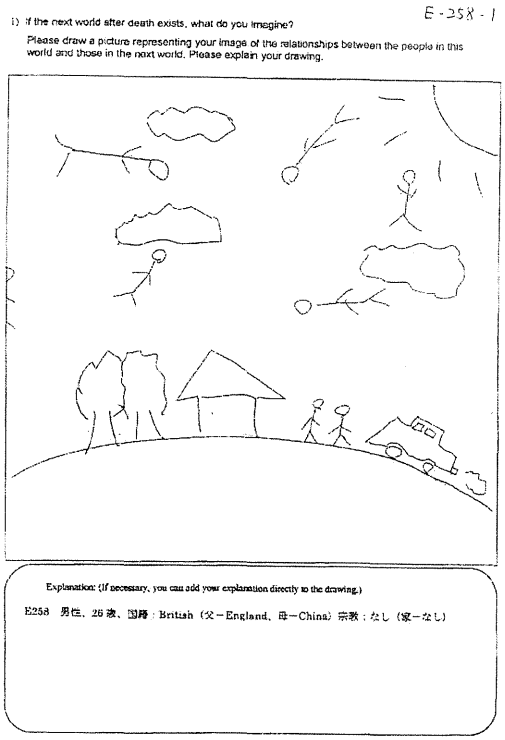
他界憧憬　あの世が下

英国・女性・22 歳



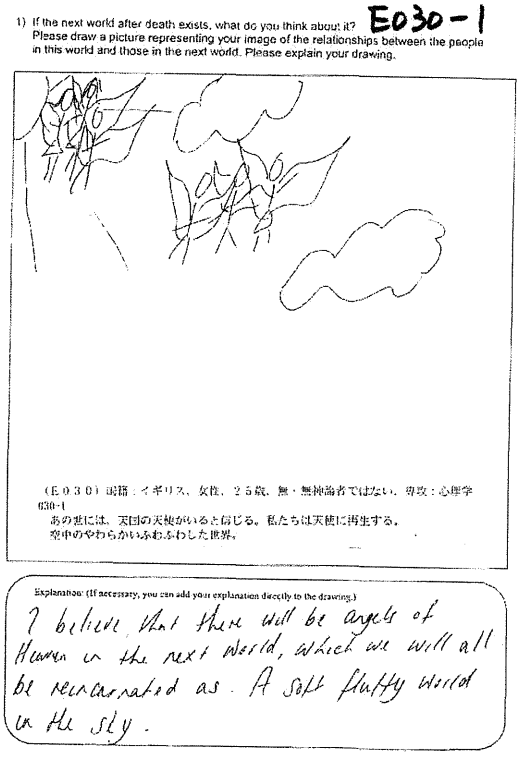
あの世の地面と人の浮遊

英国・男性・26歳



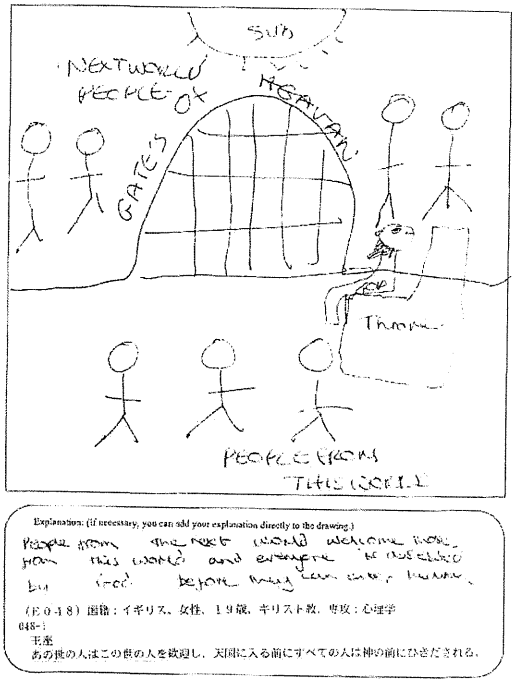
あの世の空間での人の浮遊

英国・男性・26歳



天使への再生

英国・女性・25歳



天国に入る際に神の前へ

英国・女性・19歳

E-286-1

1) If the next world after death exists, what do you imagine?

Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



それらは、私たちの頭上数方、雲の上の天空の「天国」にある。天使は、この世に降りて見下ろし、何が起こっているのか話すことができる。神は、それより上に、神の大きな空間にいる。

E286 They are above us in heaven, upon resky, on clouds. Angle creatures able to go to our world and look down at the world discussing what is happening God is above them in his big space.

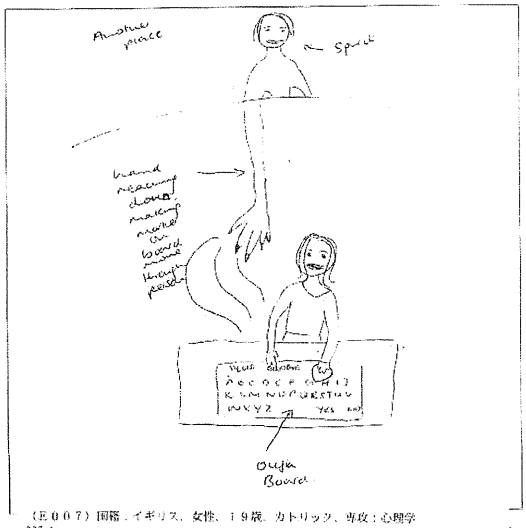
E236 女性、19 歳、国籍：British（父－Britain、母－Britain）宗教：プロテスタント（家－プロテスタント）

天使の上の神

英国・女性・19 歳

E007-1

1) If the next world after death exists, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



（E007）国籍：イギリス、女性、19 歳、カトリック、専攻：心理学
007-1
手が伸びて、人を通じて板の上のマーカーを動かす
もしも悪霊（つまり地獄から）がいたら、霊は人に入れて、その身体を乗っ取る（つまり憑依）。

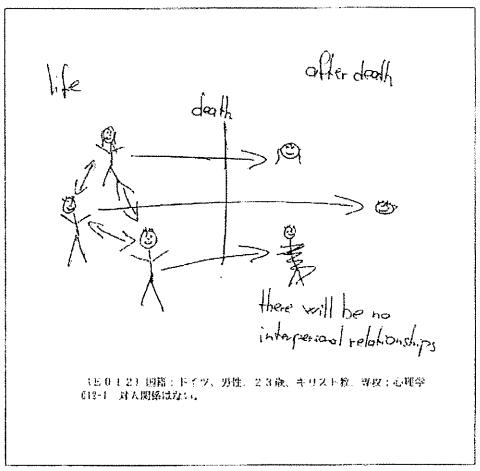
Spirit would enter the person, & have over them mostly. ie possession

霊が人を動かす

英国・女性・19 歳

E012-1

1) If the next world after death exists, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



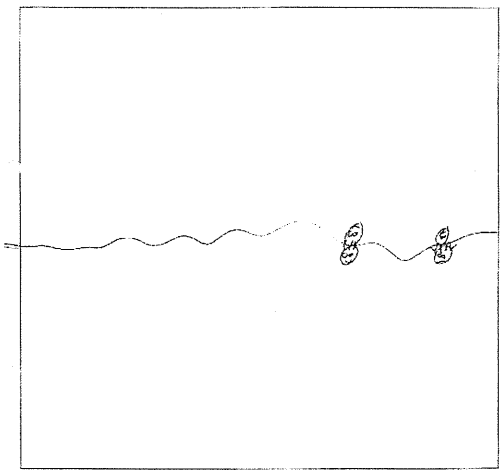
（E012）国籍：ドイツ、男性、23 歳、キリスト教、専攻：心理学
012-1 対人関係はない。

Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

頭部のみの魂

ドイツ・男性・23 歳

1) If the next world after death exists, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

Dead heads
Angle & Alive heads

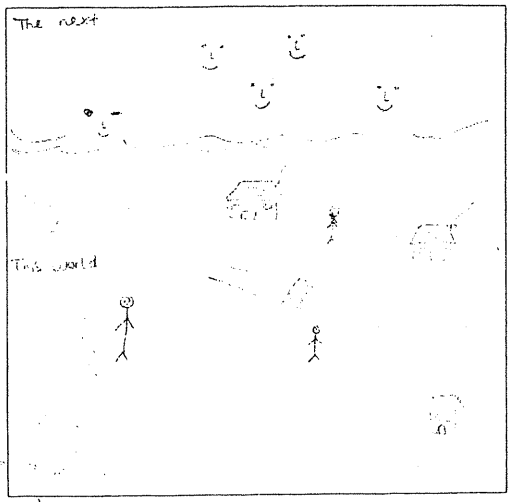
（E089）国籍：イギリス、女性、33 歳、なしあるいは英国国教会、専攻：美術
089-1
生者の頭の横の死者の頭

頭部のみの魂

英国・女性・33 歳

205

1) If the next world after death exists, what do you think about it? E055-1
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



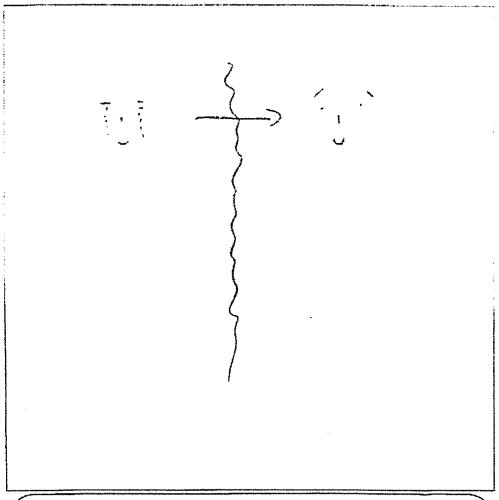
Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

I believe that those people that have cared for me - my grandparents are looking over me. There is nothing to be frightened of.

（E055）国籍：スペイン［イギリス］、女性、31歳、カトリック、専攻：非学生
055-1
私を世話してくれた人々－祖父母が私のことを見てくれていると信じる。恐れるものはない。

輪郭の無い顔

スペイン・女性・31歳



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

All the pain will go away.

E218 男性、29歳、国籍：English（父－England、母－Scotish）宗教：カトリック（家－カトリック）

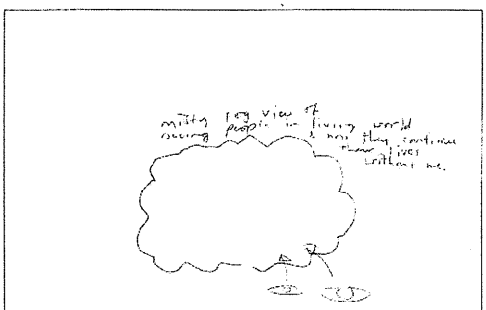
E218 すべての苦しみは消え去る。(pine はラテン語で「苦、苦しみ」の意味があるらしいです)

輪郭の無い顔

英国・男性・29歳

E094-1

1) If the next world after death exists, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



（E094）国籍：イギリス、男性、20歳、英国籍、専攻：美術
094-1
生きている世の人々や、私なしで生き続ける人々のありさまをぼんやり上見ている。私の死後、親族や友人がどのように反応し、どのように過ごしているかを観察。集まった貨幣とエゴが（ヤツ）、私を悼しむ人々を退ます。

Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

A play with seeing how my relatives & friends react & carry on after my death. Gathering with appreciation & ego. Both for people mitting me.

目のみの魂

英国・男性・20歳



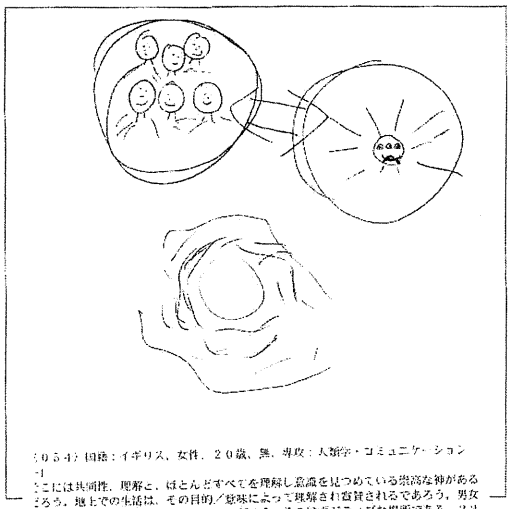
Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

E231 男性、27歳、国籍：British（父－Pakistan、母－Pakistan）宗教：イスラム（家－イスラム）

輪郭の無い顔

英国・男性・27歳

1) If the next world after death exists, what do you think about it? E054-1
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.

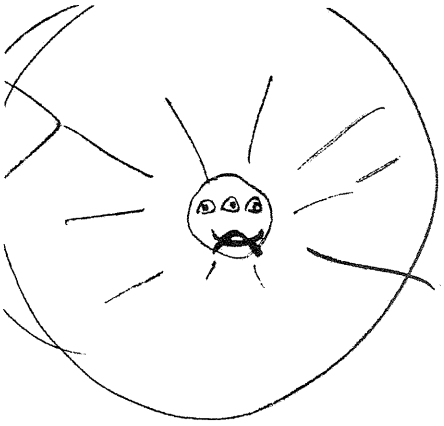


〔E054〕国籍：イギリス，女性，20歳，無，専攻：人類学・コミュニケーション
-1
ここには共同性，理解と，ほとんどすべてを理解し意識を見つめている崇高な神がある
だろう。地上での生活は，その目的／意味によって理解され尊重されるであろう。男女
の体の区別は精神の形に置き換えられるだろう。そこはポジティブな場所である。？？
はユートピアである。寛容，理解，あわれみと怒りが同様に残存している。

There will be collectivity, understanding and a higher, omniscient almost all understanding and seeing consciousness. Earthly life will be known and fully appreciated for its purpose / meaning. Spirit forms will replace male/female bodily distinction. It is a positive place. A transcendent utopia. Forgiveness, understanding, compassion and anger will exist horizontally.

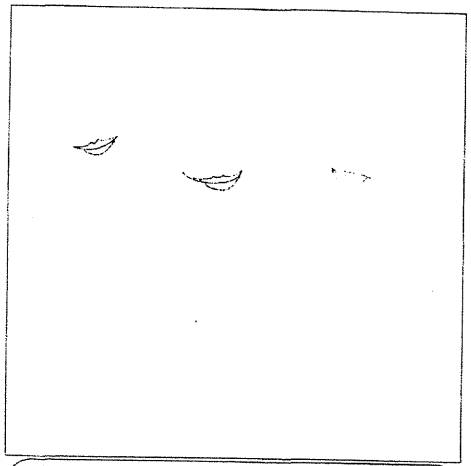
三目の神？

英国・女性・20歳



三目の神の拡大図

1) If the next world after death exists, what do you imagine? E-281-1
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

Happy place

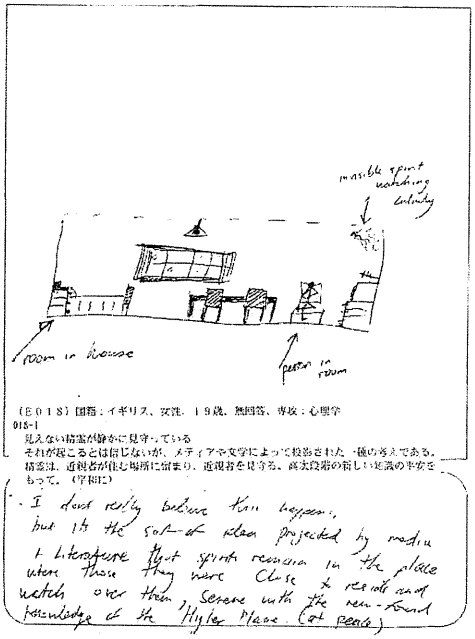
E281 女性，20歳，医師：British（父－British，母－British）宗教：なし（家－英国教会）

E281 幸せなところ

口のみの魂

英国・女性・20歳

1) If the next world after death exists, what do you think about it? E018-1
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.

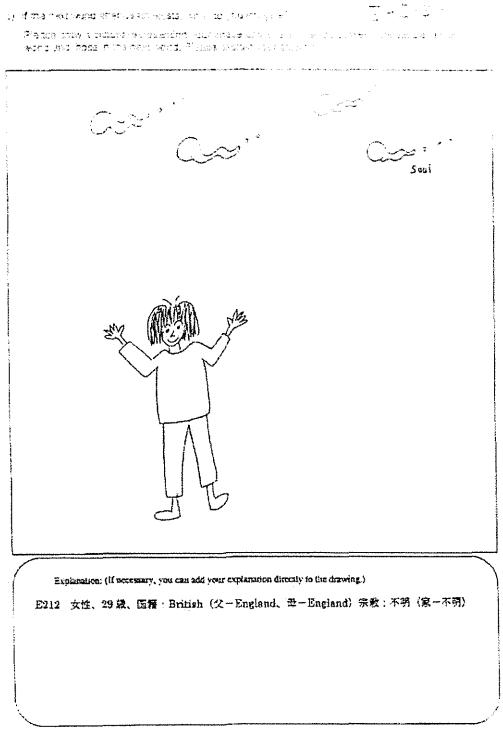


〔E018〕国籍：イギリス，女性，19歳，無回答，専攻：心理学
018-1
見えない精霊が静かに見守っている
それが起こることは信じないが，メディアや文学によって投影された一種の考えである。
精霊は，通視者が住む場所に宿り，通視者を見守る。高次段階の新しい知識の平安を
もって。（平和に）

I don't really believe this happens, but it's the sort of idea projected by media + literature that spirits reside in the place where they were close & result and watch over them, serene with the new-found knowledge of the Higher Plane (at peace)

部屋の上隅の魂

英国・女性・19歳

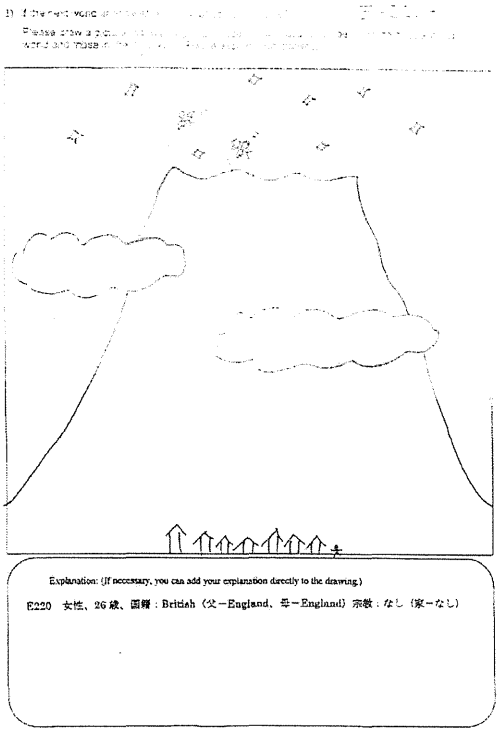


Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

E212　女性、29 歳、国籍：British（父－England、母－England）宗教：不明（家－不明）

尾付きの魂

英国・女性・29 歳



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

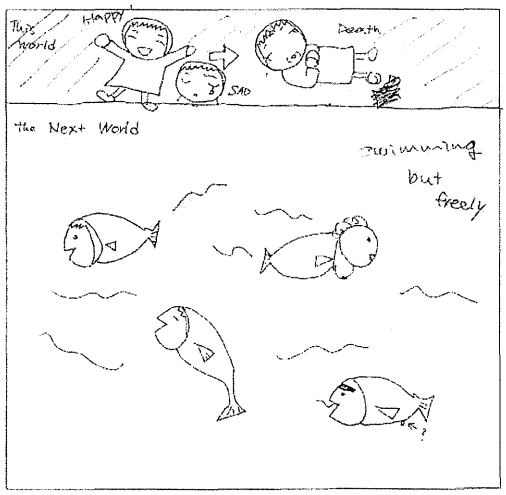
E220　女性、26 歳、国籍：British（父－England、母－England）宗教：なし（家－なし）

羽付きの魂

英国・女性・26 歳

E062-1

1) If the next world after death exists, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

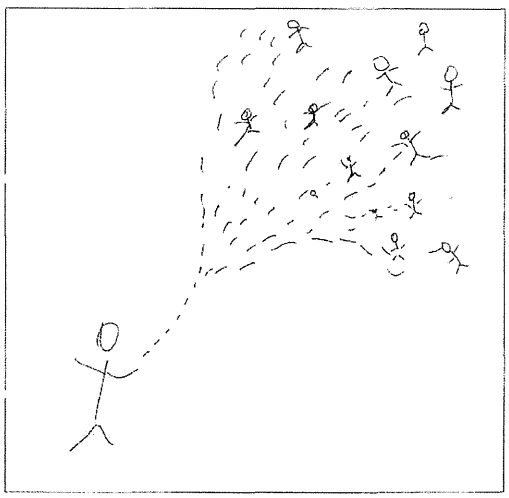
See Above.

魚のような魂

フランス・女性・22 歳

240
E090-1

1) If the next world after death exists, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

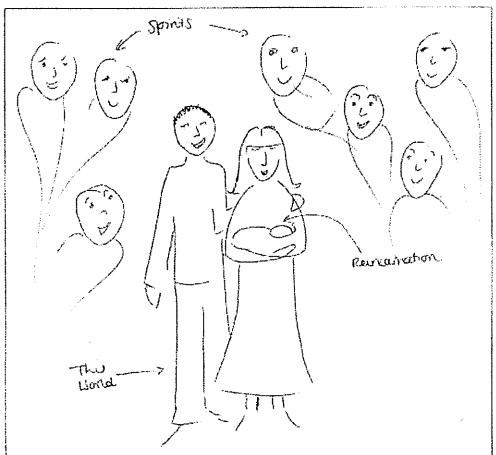
Our being will disperse into atoms to ~~feed~~ generate life in the next world

（E０９０）国籍：イギリス、男性、３３歳、プロテスタント　専攻：音楽
090-1
あの世での生命を生み出すために、人は微小分子へと霧散するだろう。

微小分子への霧散

英国・男性・33 歳

1) If the next world after death exists, what do you think about it? E036-1
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.

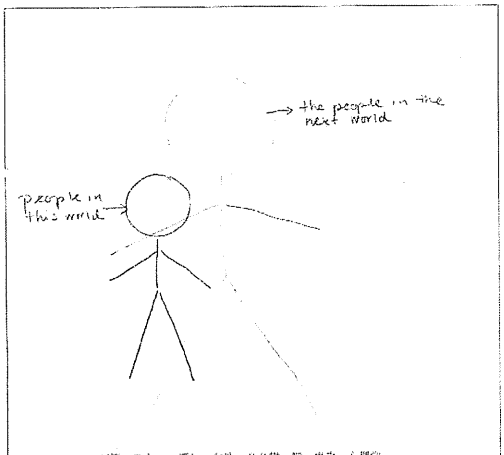


(E036) 国籍：イギリス、女性、21歳、無、専攻：心理学
036-1
精神は、人の形をとらない。それらは、どんな形もとらない。－それらは物質ではなく、エッセンスだ。おそらく電気だろう。それらはそこらにじゅうにいつもあり、輪廻転生を経て、戻ってくる。
The spirits don't take human form. They don't take any form - they are not of matter, but of essence. Perhaps electricity. They are all around, all the time, and come back through reincarnation

手足の無い魂

英国・女性・21歳

1) If the next world after death exists, what do you think about it? E043-1
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.

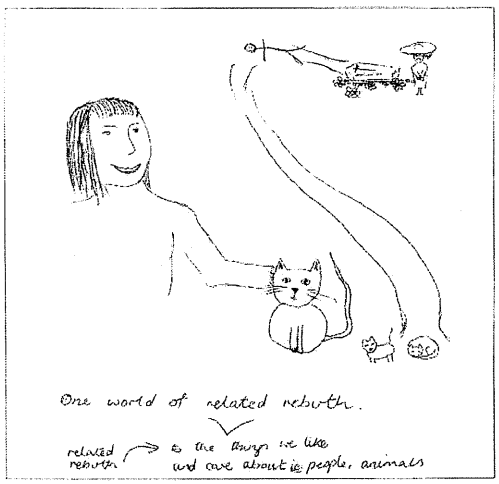


(E043) 国籍：スウェーデン、女性、23歳、無、専攻：心理学
043-1
(死は生の一部である。すべての生はまわりまわっている。愛することは生きることであり、永遠に生き続けることである。) 私たち(生きるもの)を取り囲み、うちに存在するすべての生命、かつてそのようにし、今も、そして未来も繰り返すように。あの世の「人々」は、ぼんやりしてはっきりしない。「生きているもの」よりもむしろ「一つになった全体」の一部分であるから。また、「死んだもの」はより大きく、人間らしくない(つまり、恐れ＝破壊を置き去りにしている)。－それは明らかだ。
have been surrounds us & exist in us, as we (the living) once have done, does & will do again.
"The people" in the next world is dim/vague because its more a part of the "unbeing whole" than the "living" are. The "Dead" is also larger, as it's less human (i.e. left its fear-hatred behind)-it can see clearly

薄く大きい魂

スウェーデン・女性・23歳

1) If the next world after death exists, what do you think about it? E042-1
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

(E042) 国籍：イギリス、女性、20歳、無、専攻：心理学
042-1
関連した再誕の唯一世界。関連した再誕とは、好きで世話をするもの一人々、動物への再誕。

動物への再誕

英国・女性・20歳

213
1) If the next world after death exists, what do you think about it? E063-1
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

(F063) 国籍：フィンランド、女性、32歳、仏教、専攻：人類学
063-1
どうにかして元の力に戻る。小グループに分かれる

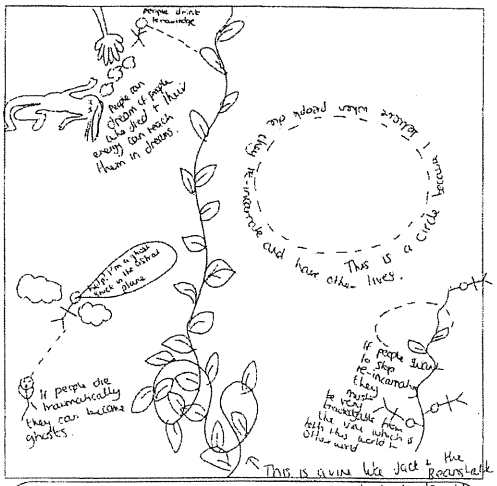
輪廻転生

フィンランド・女性・32歳

E-263-1

1) If the next world after death exists, what do you imagine?

Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.) This is given like Jack & the Beanstalk which holds all knowledge - earthly + otherworldly

E263 女性、21歳、国籍：British（父－British、母－British）宗教：なし（家－なし）

これは、『ジャックと豆の木』に出てくるようなツタで、地上および他の世界のすべての知識を蓄えています。ここに軸になっているのは、人々が死ぬと輪廻転生して他の生をうけると信じているからです。もしも人々が、転生をやめるのであれば、この世とあの世の両方につながるツタから多くの知識を得るでしょう。人々は知識を吸収する。亡くなった人の夢を見ることもできる。亡くなった人のエネルギーが夢に現く。こころに善をもってでくなると、魔霊になりうる。助けて！私はアストラル界の幽霊。

植物のイメージ

英国・女性・21歳

E-312-1

1) If the next world after death exists, what do you imagine?

Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



E312 この世＝多くの搾取　あの世＝より平等、一つの声

This world = exploitation of many

Next world = More equal one voice

E312 男性、22歳、国籍：British（父－British、母－British）宗教：不明（家－なし）

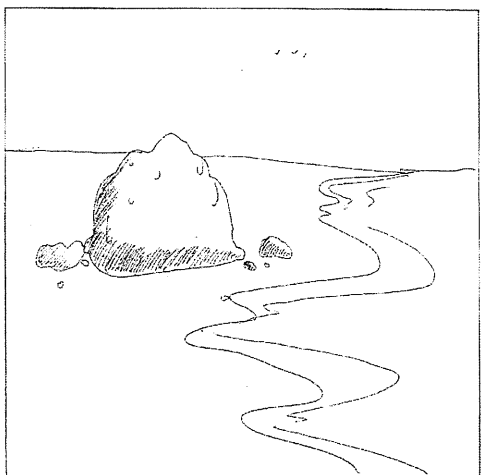
あの世では一つの声

英国・男性・22歳

E-298-1

1) If the next world after death exists, what do you imagine?

Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



E298 この岩はこの世（この世の人々）。海はあの世。両者は共に存在しているが、異なった状態。海は岩をぬらす。岩は海によってゆっくりと浸食される。このように両者はかかわりあうが、でもそれはとてもゆっくり。

The rock are this world (the people in this world). The Sea is the next world. The two exist together yet in different states. The Sea makes the rock wet & the rock is eroded slowly by the Sea. That way the two interact, but only in a very slow way.

E298 男性、20歳、国籍：UK（父－UK、母－UK）宗教：なし（家－なし）

ユニークな喩え

英国・男性・20歳

236

E086-1

1) If the next world after death exists, what do you think about it?

Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

The heart and body are seperate and cannot be joined. This body/mind dualism does not allow for concrete explanation or a certainty

（E086）国籍：イギリス、男性、20歳、不可知論者、専攻：美術・美術史

086-1

心と体は別々で、一緒には出されない。この体と心の二元性は、この地上での我々の存在に、具体的な説明や、確かさや安全性を許すものではない。

芸術性の触発

英国・男性・20歳

6-5　たましいの形とこの世からあの世への移行（１）：イメージ画２の４か国比較統計的分析

加藤義信

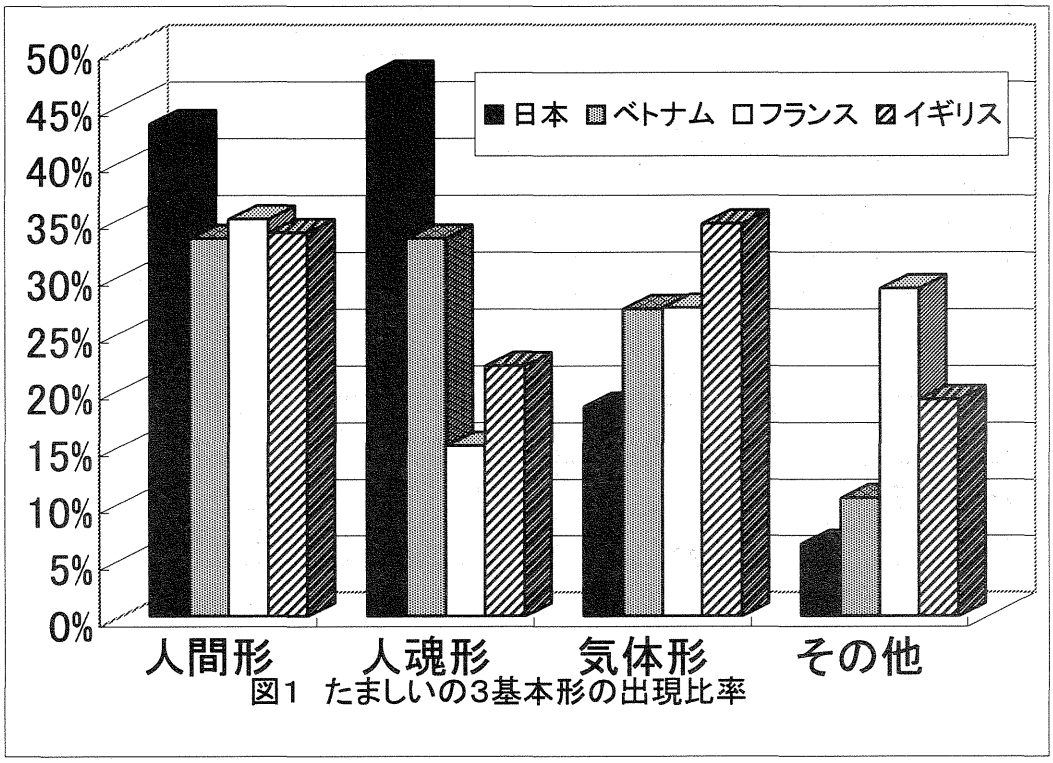


図1　たましいの3基本形の出現比率

たましいの3基本形の出現度数と比率

	人間形	人魂形	気体形	その他
日本	122	134	52	18
n=281	43.4%	47.7%	18.5%	6.4%
ベトナム	32	32	26	10
n=96	33.3%	33.3%	27.1%	10.4%
フランス	63	27	49	52
n=180	35.0%	15.0%	27.2%	28.9%
イギリス	46	30	47	12
n=133	34.6%	22.6%	35.3%	9.0%

	人間形	人魂形	気体形	その他
日本	43.4%	47.7%	18.5%	6.4%
ベトナム	33.3%	33.3%	27.1%	10.4%
フランス	35.0%	15.0%	27.2%	28.9%
イギリス	33.8%	22.1%	34.6%	19.1%

	一方向	双方向	その他
日本	32.7%	63.7%	3.6%
ベトナム	33.0%	27.8%	39.2%
フランス	43.3%	37.8%	18.9%
イギリス	44.8%	25.0%	30.1%

	赤ん坊	人間	万物流転	その他	なしor不明
日本	17.8%	15.3%	3.2%	2.5%	61.2%
ベトナム	1.7%	0.6%	0.6%	4.5%	92.6%
フランス	5.5%	12.0%	4.9%	3.3%	74.3%
イギリス	5.0%	9.4%	3.6%	2.2%	79.9%

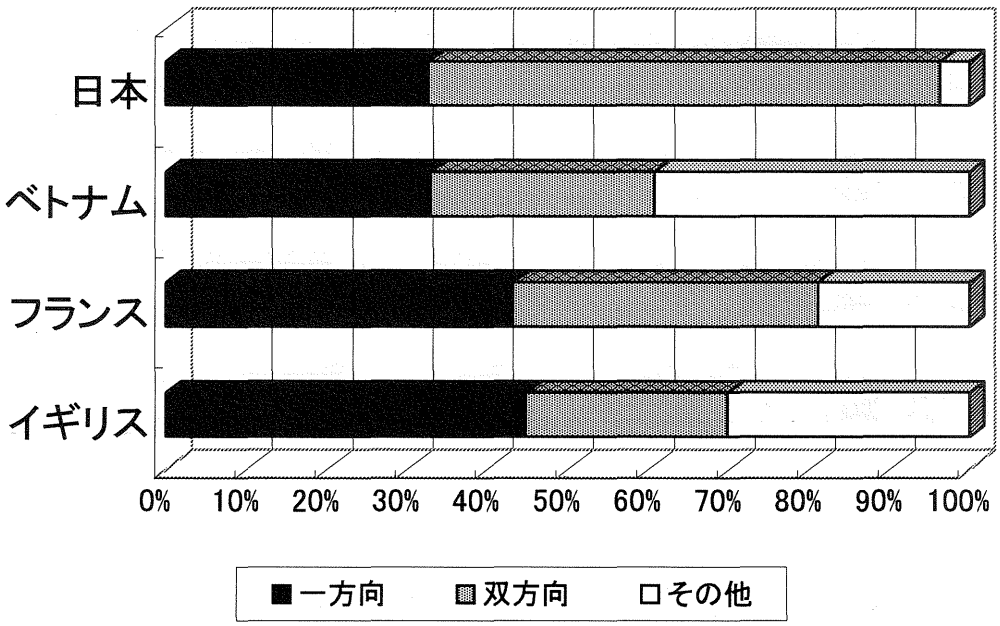


図2　たましいの往来パターンの比率

たましいの往来パターンの頻度と比率

	一方向	双方向	その他
日本	92	179	10
n=281	32.7%	63.7%	3.6%
ベトナム	58	49	69
n=176	33.0%	27.8%	39.2%
フランス	78	68	34
n=180	43.3%	37.8%	18.9%
イギリス	61	34	41
n=136	44.8%	25.0%	30.1%

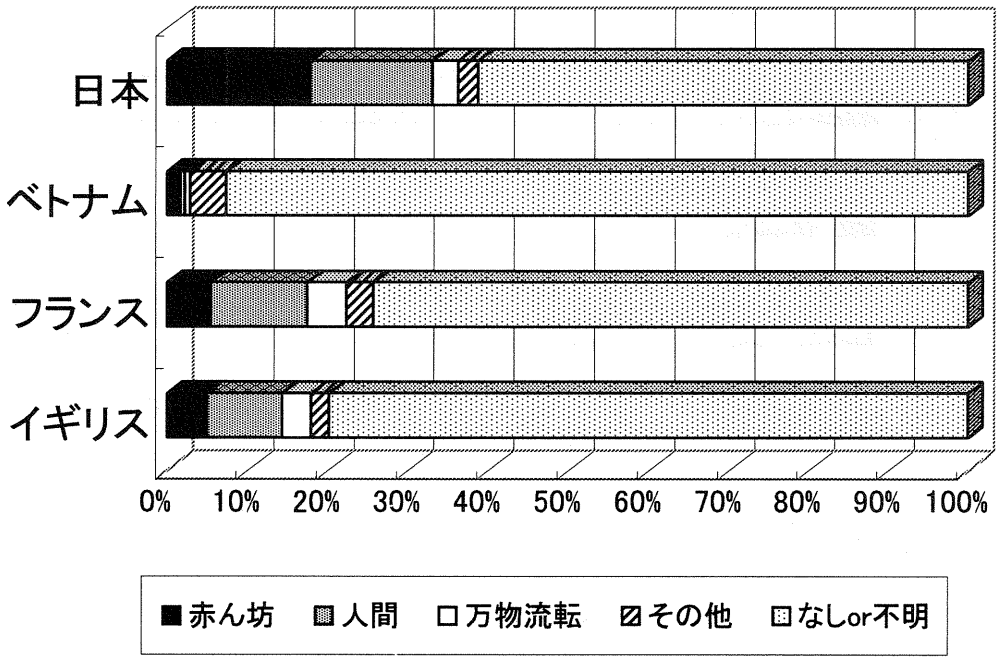


図3　生まれ変わりのパターンの比率

生まれ変わりのパターンの度数と比率

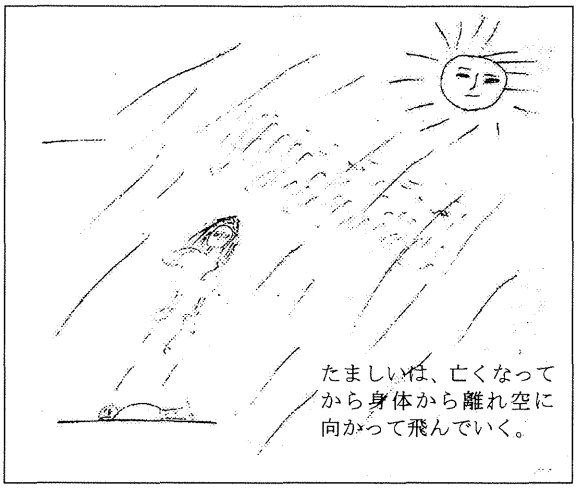
	赤ん坊	人間	万物流転	その他	なしor不明
日本	50	43	9	7	172
n=281	17.8%	15.3%	3.2%	2.5%	61.2%
ベトナム	3	1	1	8	163
n=176	1.7%	0.6%	0.6%	4.5%	92.6%
フランス	10	22	9	6	136
N=183	5.5%	12.0%	4.9%	3.3%	74.3%
イギリス	7	13	5	3	111
n=139	5.0%	9.4%	3.6%	2.2%	79.9%

	人間形	人魂形	気体形	その他
日本	43.4%	47.7%	18.5%	6.4%
ベトナム	33.3%	33.3%	27.1%	10.4%
フランス	35.0%	15.0%	27.2%	28.9%
イギリス	33.8%	22.1%	34.6%	19.1%

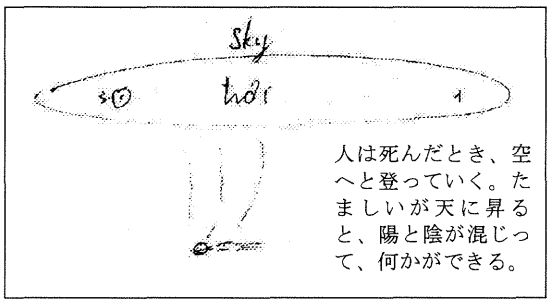
	一方向	双方向	その他
日本	32.7%	63.7%	3.6%
ベトナム	33.0%	27.8%	39.2%
フランス	43.3%	37.8%	18.9%
イギリス	44.8%	25.0%	30.1%

	赤ん坊	人間	万物流転	その他	なしor不明
日本	17.8%	15.3%	3.2%	2.5%	61.2%
ベトナム	1.7%	0.6%	0.6%	4.5%	92.6%
フランス	5.5%	12.0%	4.9%	3.3%	74.3%
イギリス	5.0%	9.4%	3.6%	2.2%	79.9%

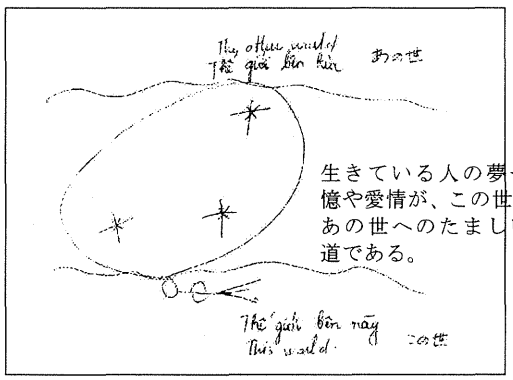
6-6　たましいの形とこの世からあの世への移行（2）：
イメージ画２の事例、ベトナム　　伊藤哲司



V0022②　天に昇るたましい①



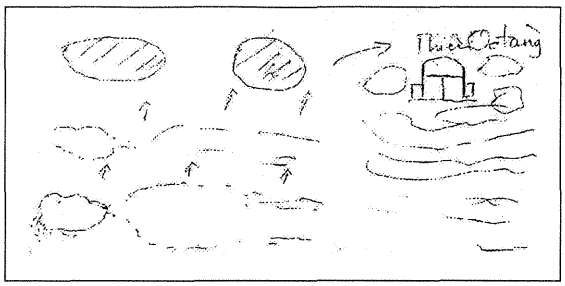
V0080②　天に昇るたましい②



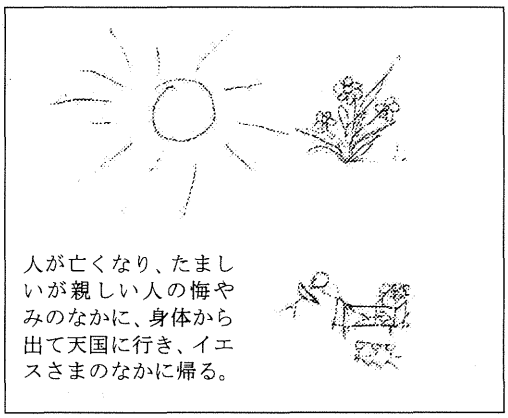
V0081②　夢・記憶・愛情がたましいの道



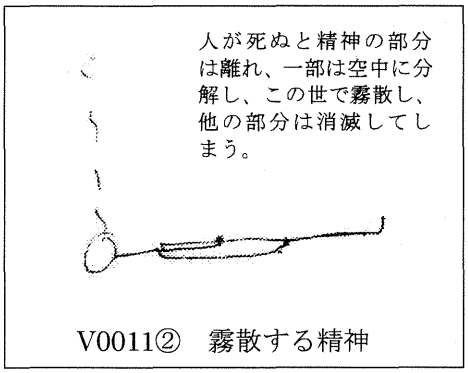
V0016②　星へと昇っていく人間形のたましい



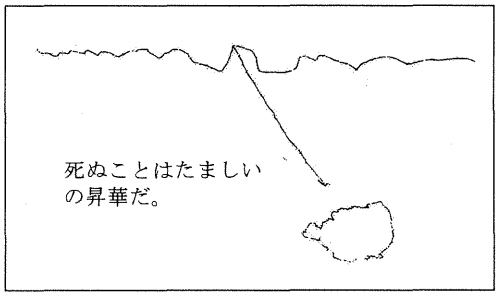
V0142②　極楽へ行くたましい



V0038②　イエスの元へ帰るたましい

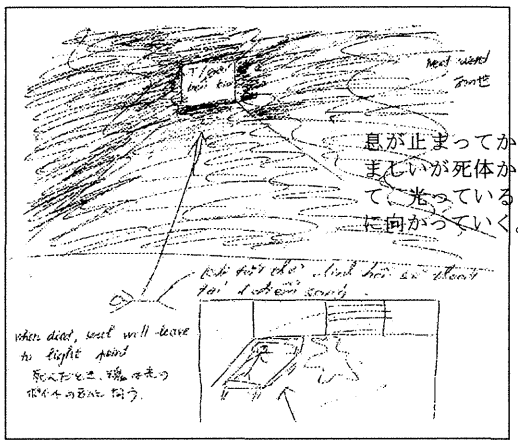


V0011②　霧散する精神

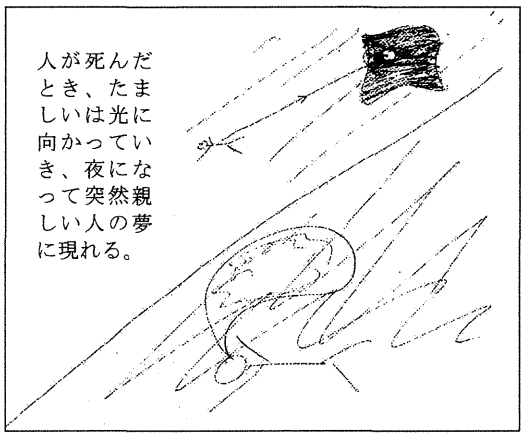


V0199②　たまいしの昇華

事例 2-1　上昇するたましい

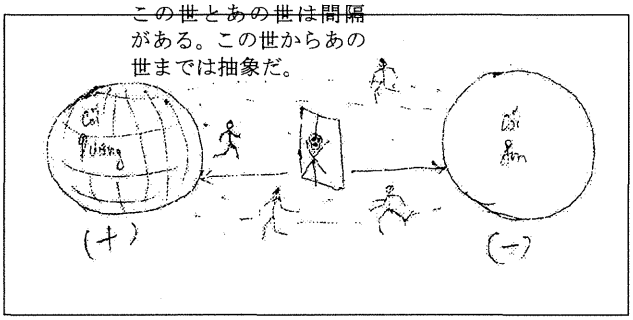


V0003②　光に向かうたましい①

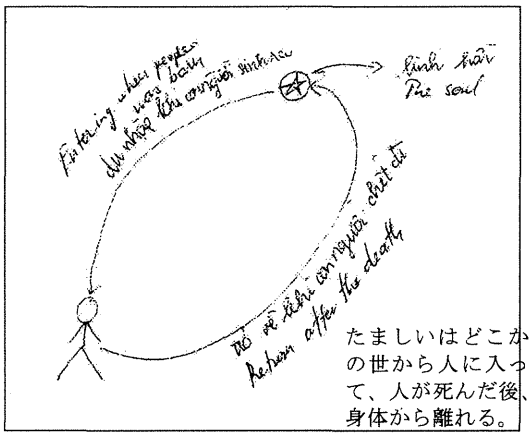


V0019②　光に向かうたましい②

事例 2-2　光に向かうたましい

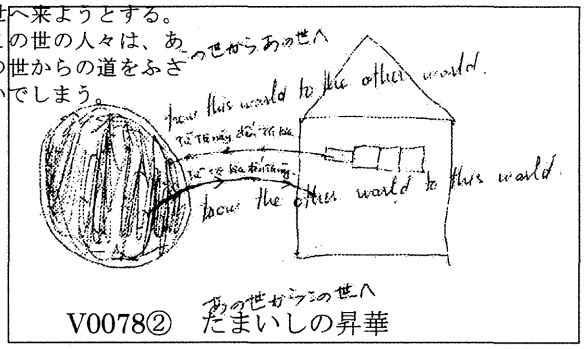


V0143②　たまいしの抽象的な（?）往復

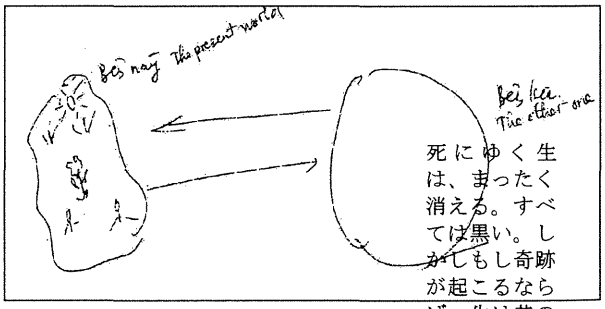


V0191②　たましいの出入り

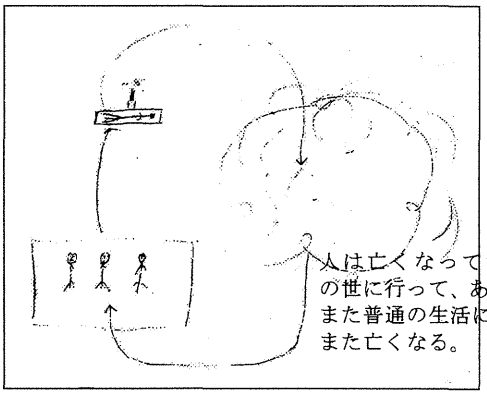
あの世の人々はこの世へ来ようとする。
この世の人々は、あの世からの道をふさいでしまう。



V0078②　たまいしの昇華

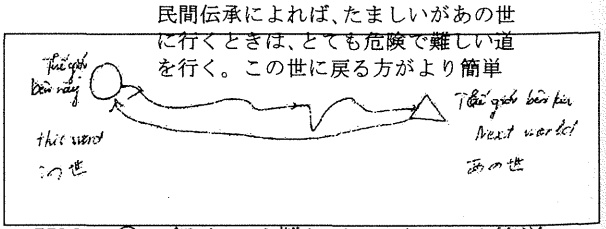


V0123②　奇跡が起これば……



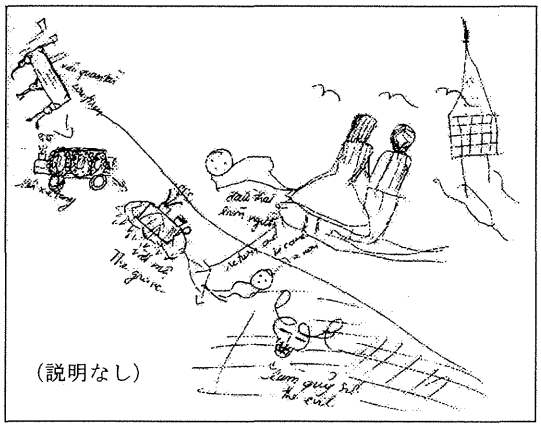
V0007②　生と死の繰り返し

民間伝承によれば、たましいがあの世に行くときは、とても危険で難しい道を行く。この世に戻る方がより簡単



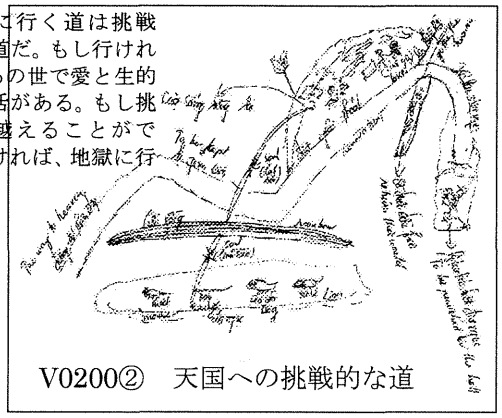
V0004②　行くのは難しく、戻るのは簡単

事例 2-3　循環するたましい

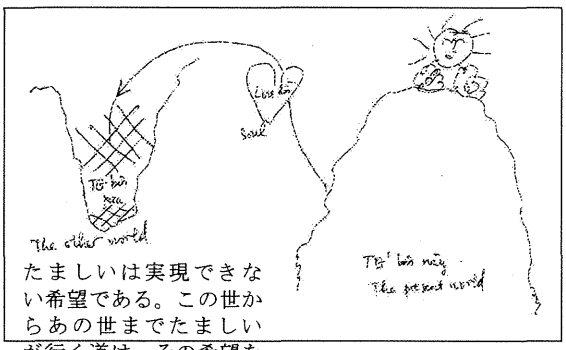


V0202②　生まれ変わりと地獄への道

天国に行く道は挑戦的な道だ。もし行ければ、あの世で愛と生的な生活がある。もし挑戦を越えることができなければ、地獄に行く。

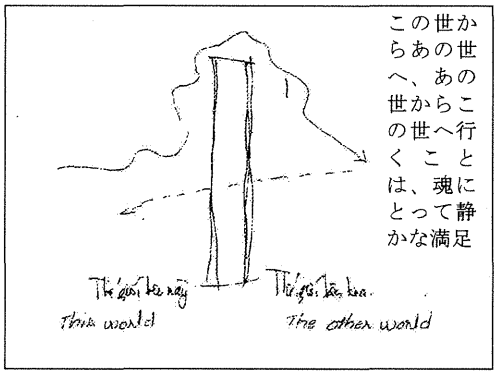


V0200②　天国への挑戦的な道



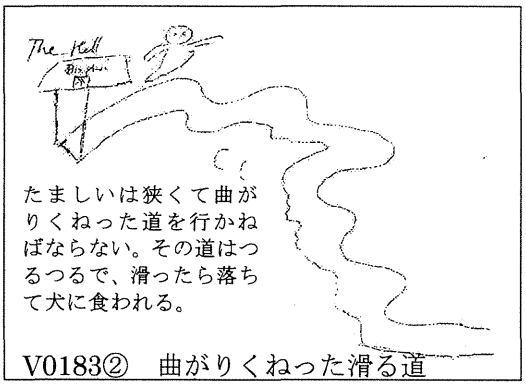
たましいは実現できない希望である。この世からあの世までたましいが行く道は、その希望を維持すること。

V0114②　希望の道？



この世からあの世へ、あの世からこの世へ行くことは、魂にとって静かな満足

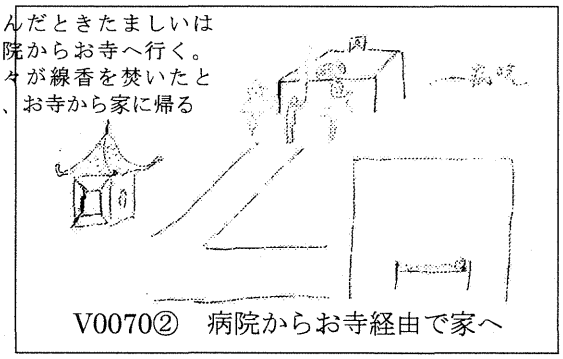
V0158②　行き来は満足の道



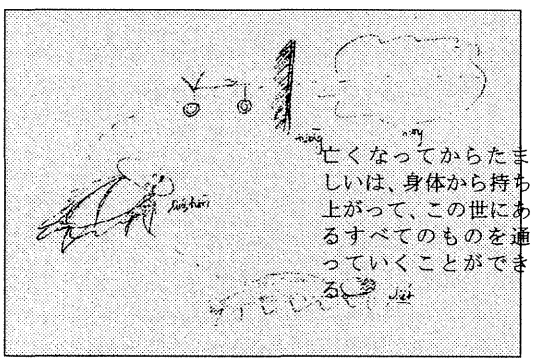
たましいは狭くて曲がりくねった道を行かねばならない。その道はつるつるで、滑ったら落ちて犬に食われる。

V0183②　曲がりくねった滑る道

死んだときたましいは病院からお寺へ行く。人々が線香を焚いたとき、お寺から家に帰る

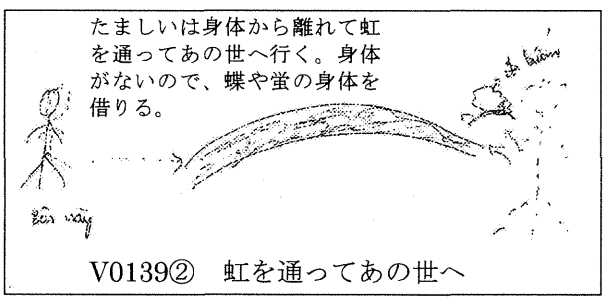


V0070②　病院からお寺経由で家へ



亡くなってからたましいは、身体から持ち上がって、この世にあるすべてのものを通っていくことができる。

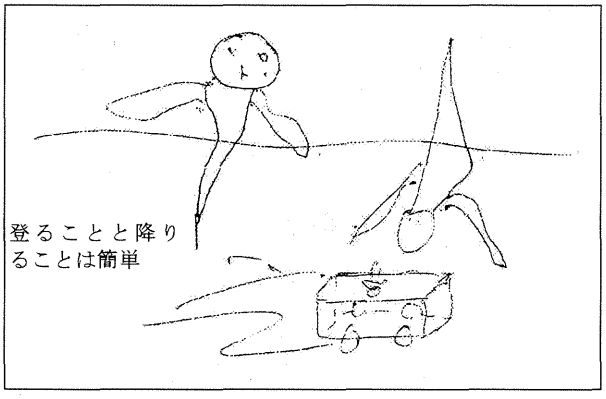
V0021②　すべてのものを通れるたましい



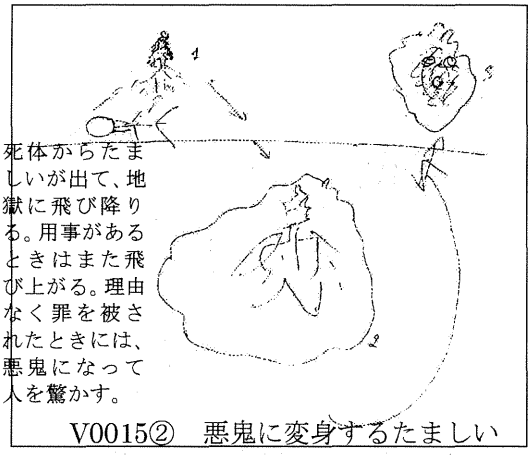
たましいは身体から離れて虹を通ってあの世へ行く。身体がないので、蝶や蛍の身体を借りる。

V0139②　虹を通ってあの世へ

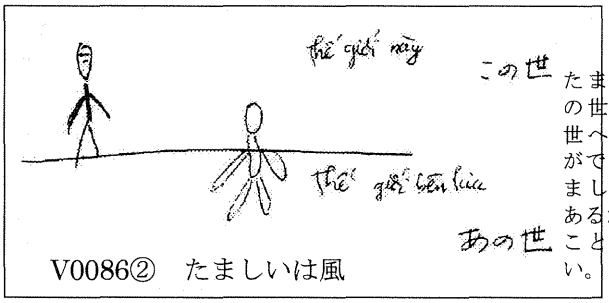
事例 2-4　たましいの通る道



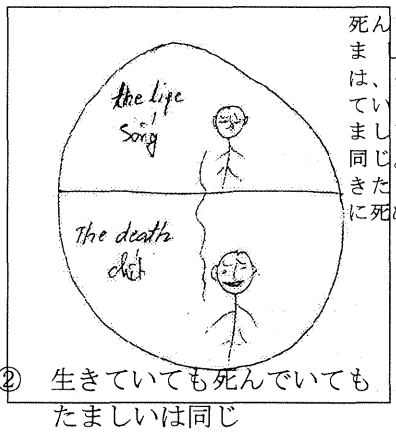
V0162②　地上と地下の自由な移動



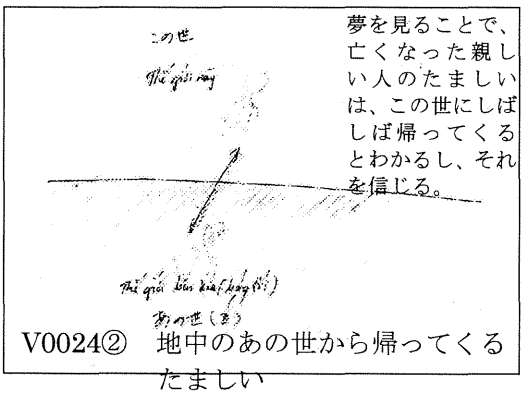
V0015②　悪鬼に変身するたましい



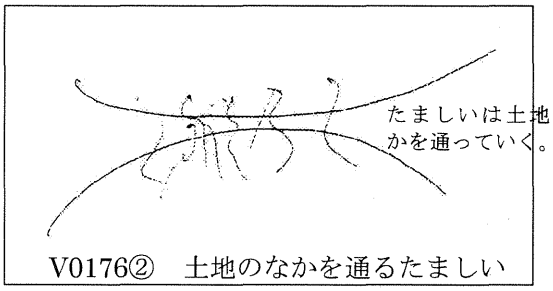
V0086②　たましいは風



V0146②　生きていても死んでいてもたましいは同じ

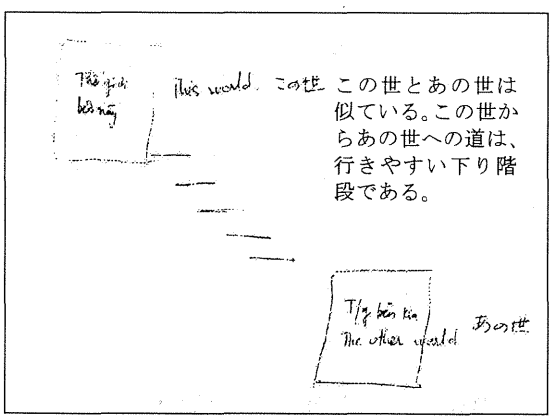


V0024②　地中のあの世から帰ってくるたましい

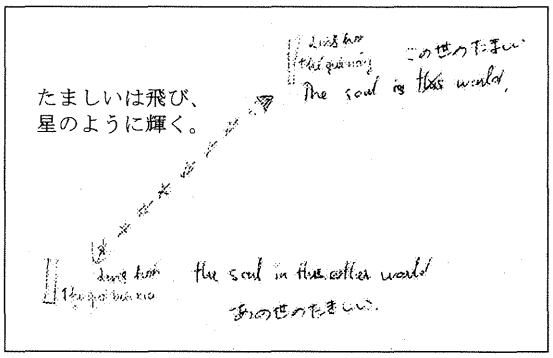


V0176②　土地のなかを通るたましい

事例 2-5　地中に潜るたましい

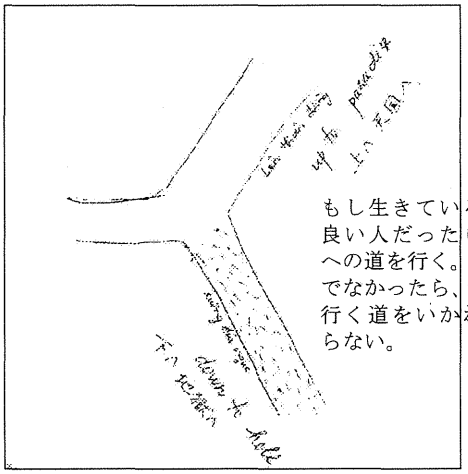


V0077②　あの世への下り階段

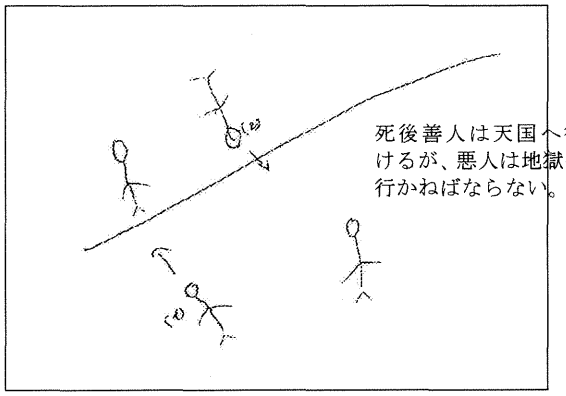


V0103②　下方に飛んでいくたましい

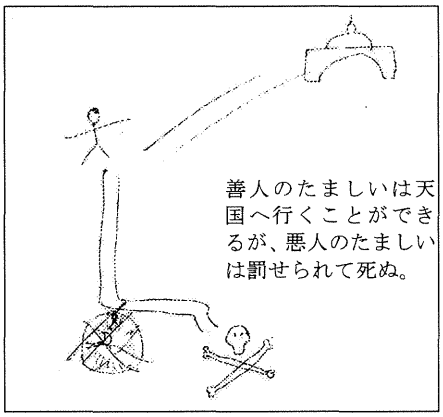
事例 2-6　下方に向かっていくたましい



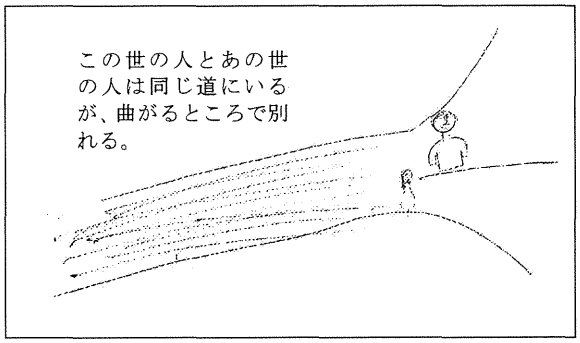
V0041②　天国と地獄への分かれ道



V0031②　天国へ、地獄へ①

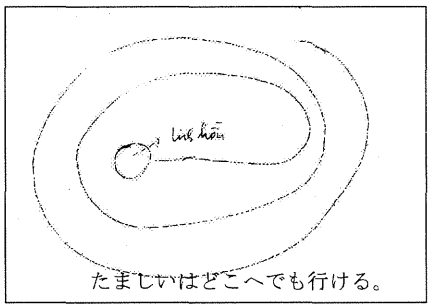


V0042②　天国へ、地獄へ②

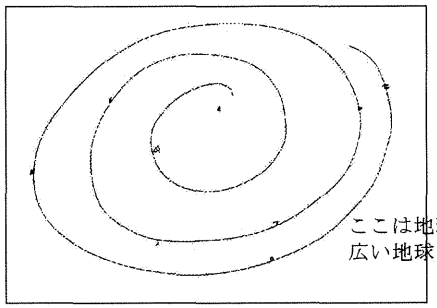


V0048②　この世とあの世の人の別れ

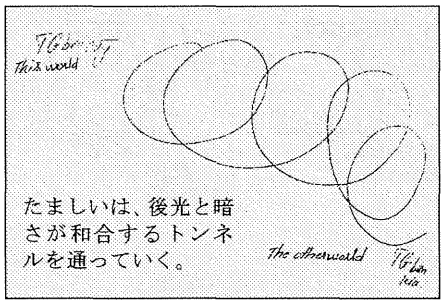
事例 2-7　たましいの分かれ道



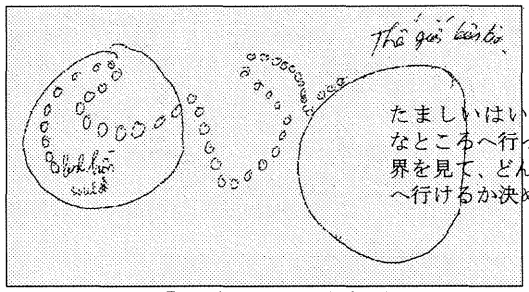
V0102②　どこへもいけるたましい



V0163②　広い地球のたましい

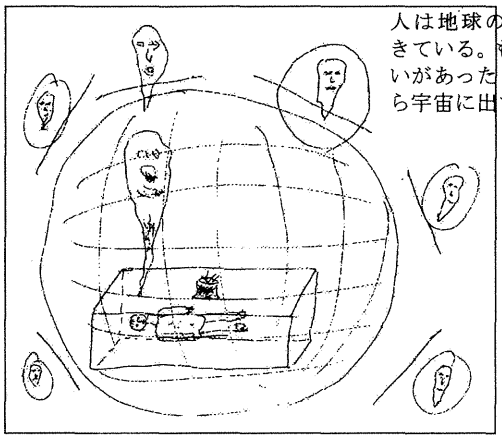


V0164②　光と闇のトンネル

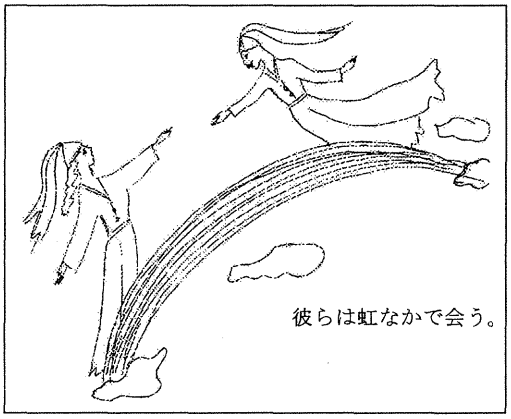


V0104②　行き場所を探すたましい

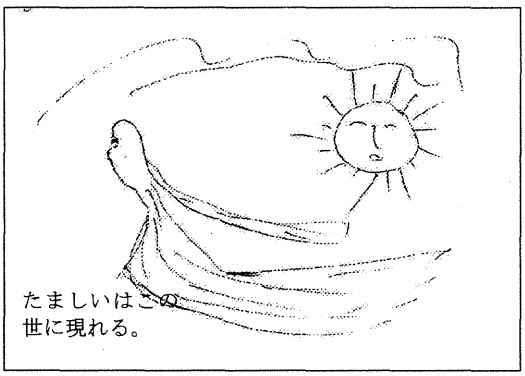
事例 2-8　渦巻くたましい



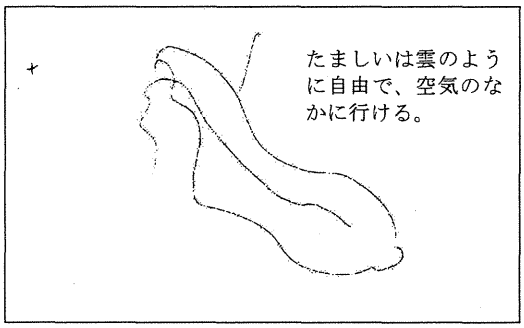
V0055②　宇宙に出ていくたましい



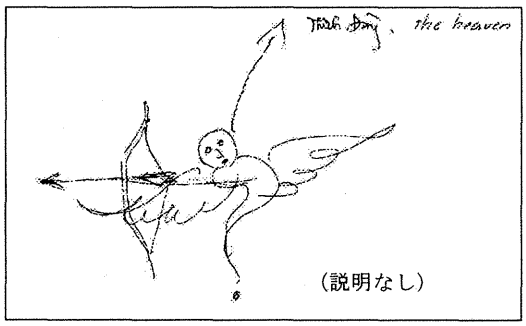
V0071②　虹のなかでの出会い



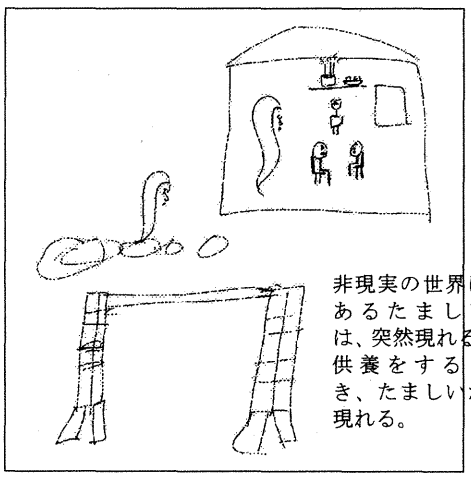
V0029②　人魚のようなたましい①



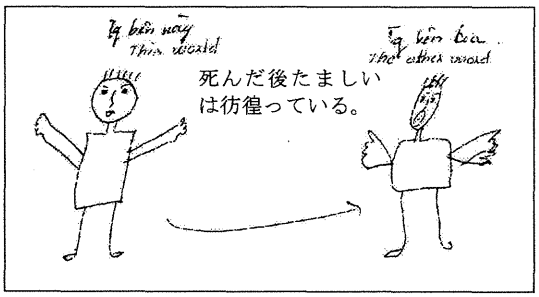
V0136②　人魚のようなたましい②



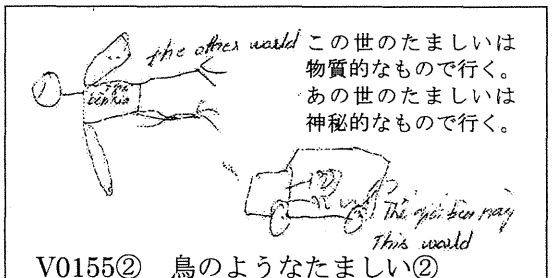
V0170②　羽のあるたましい



V0052②　魂形のたましい

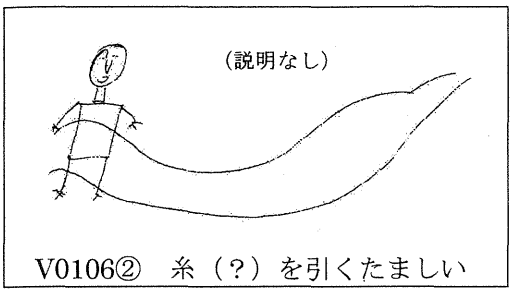


V0151②　鳥のようなたましい①



V0155②　鳥のようなたましい②

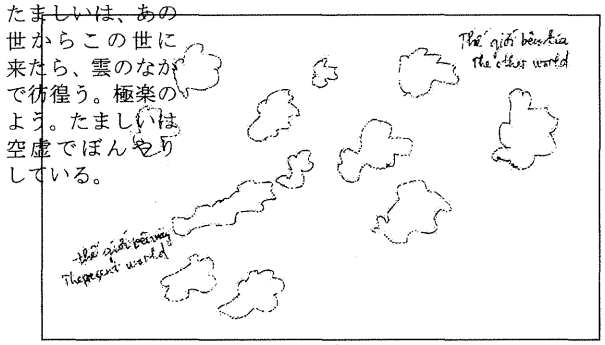
事例 2-9　たましいの形のバリエーション①



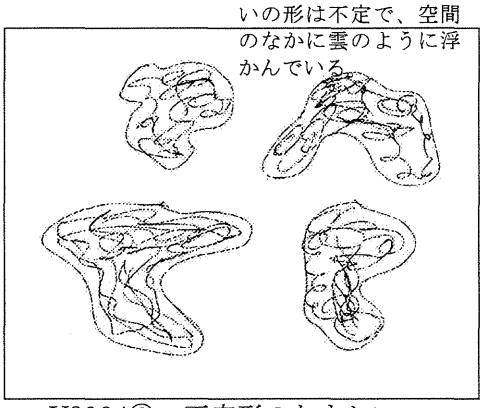
V0106②　糸（？）を引くたましい



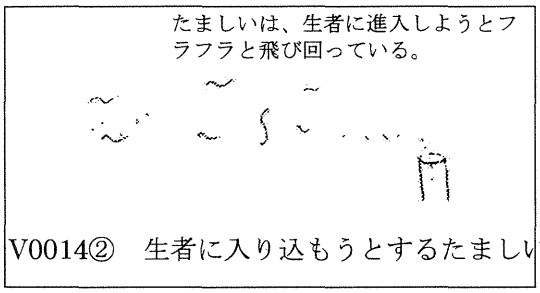
V0028②　煙のようなたましい



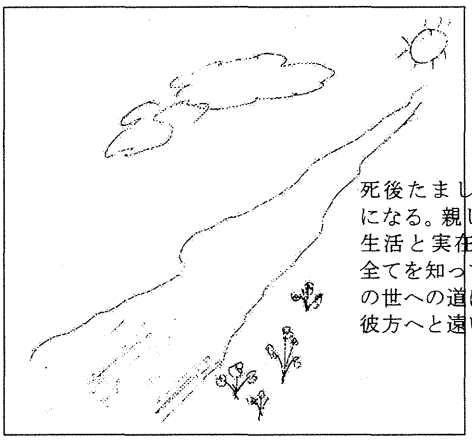
V0126②　雲のなかで彷徨うたましい



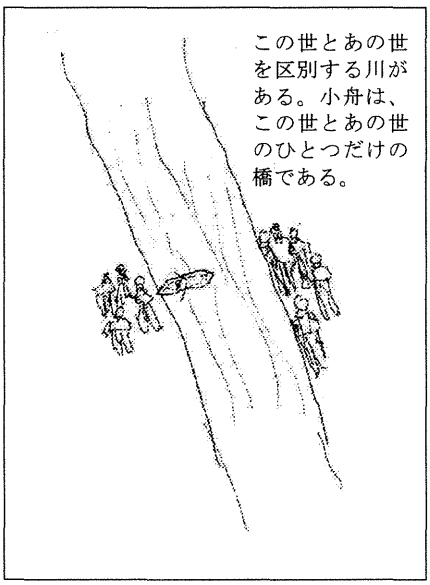
V0034②　不定形のたましい



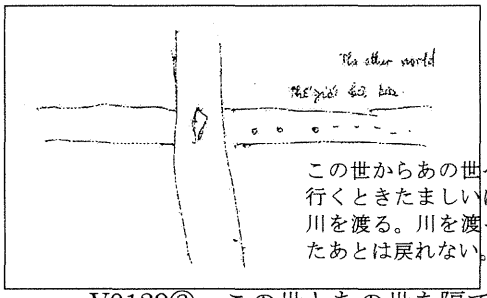
V0014②　生者に入り込もうとするたましい



V0094②　日没の彼方へ

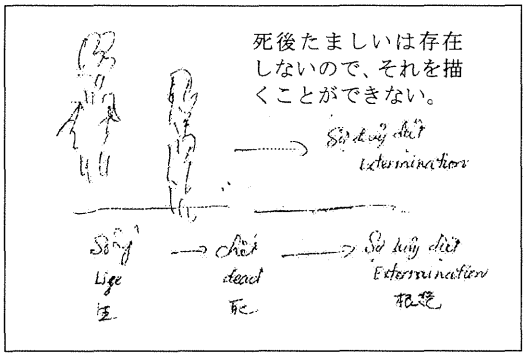


V0005②　この世とあの世を隔てる川①

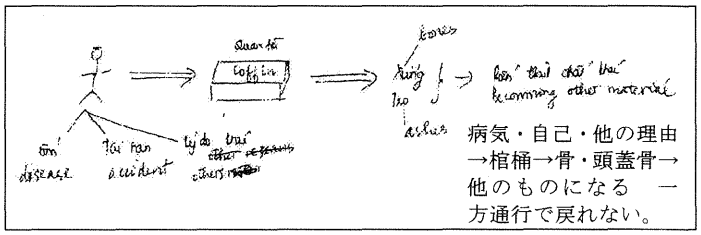


V0129②　この世とあの世を隔てる川②

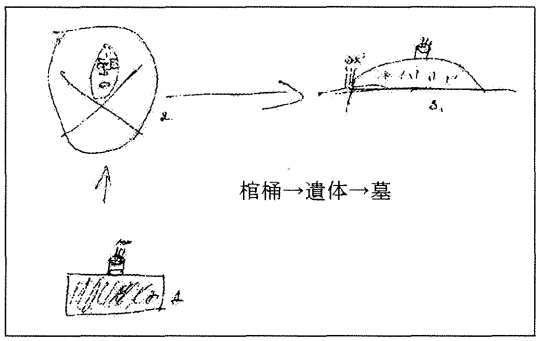
事例 2-10　たましいの形のバリエーション②



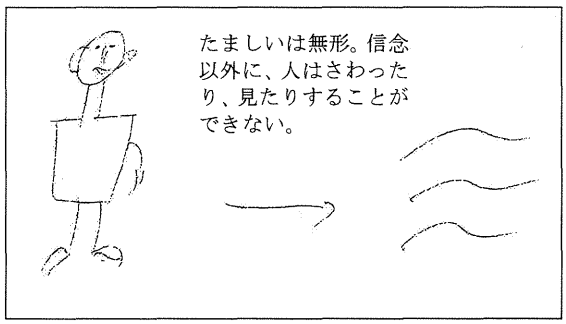
V0047②　たましいは存在しない①



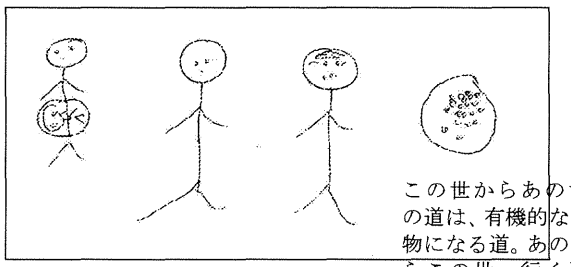
V0107②　たましいは存在しない②



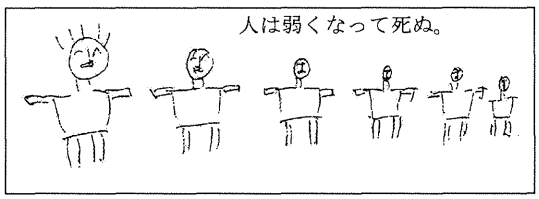
V0060②　たましいは存在しない③



V0125②　たましいは無形

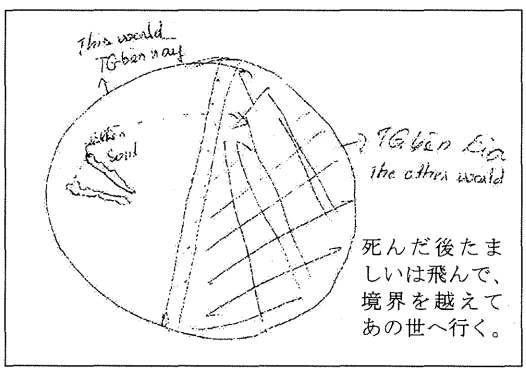


V0006②　死後は有機物に

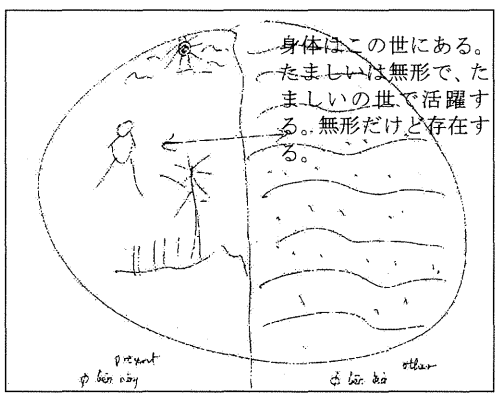


V0128②　身体ごと消える

事例 2-11　存在しないたましい、消えてしまうたましい



V0175②　陽から陰へ



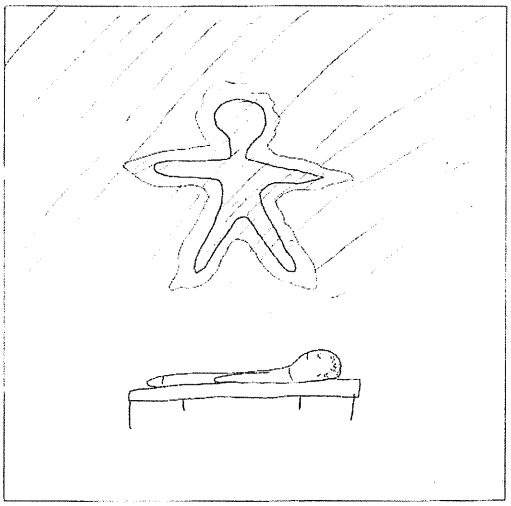
V0120②　たましいの世と無形のたましい

事例 2-12　たましいと陰陽

6-7　たましいの形とこの世からあの世への移行（3）：
イメージ画2の事例、イギリス　　戸田有一

E023-2

2) If the soul exists after death, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)
Phoenix-like movement → clearness

023-2　火の鳥のような動き　→　晴能

人のかたちと影

英国・女性・18 歳

036

E036-2

2) If the soul exists after death, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.



036-2
前の絵を見てください。前述したように、死後の世界はこの世であり、この世に魂は存在しています。死ぬと精神は解き放たれ、やがて新生児として再び生まれる。どのようにしてって？知りません。

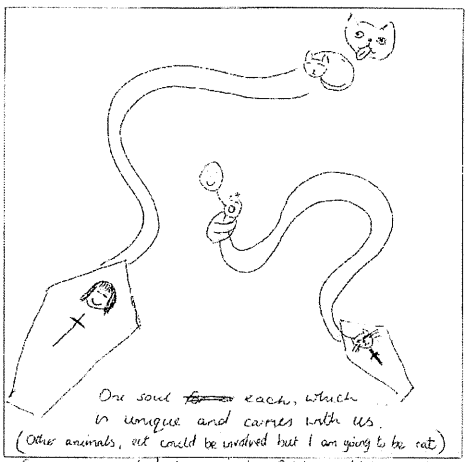
Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)
See previous picture. The world after death is this world and souls inhabit it, as I said. As we die our spirits are released, and eventually we live again as a newborn baby. Hell? I don't know.

手足の無い魂

英国・女性・21 歳

E042-2

2) If the soul exists after death, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.



Crosses represent deaths, as in the Christian religion, but this is only a representation from ~~Heaven~~ the influence of my education, I don't believe in Christianity, I am just

Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

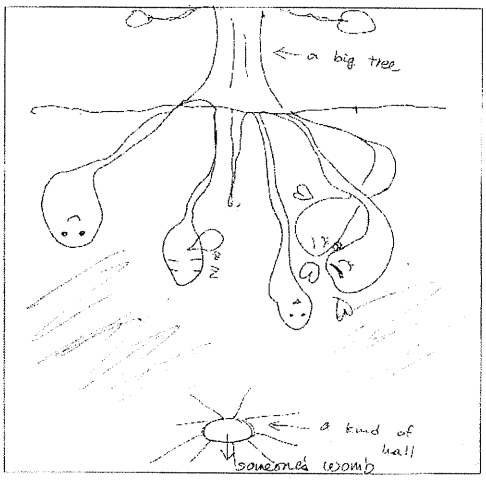
-2
それぞれに一つの魂、ユニークで固有のもの。（他の動物なんかも関わってくるだろうけど、私はネコになるの）　十字は、キリスト教におけるように、死を表しています。でも、これは私がうけた教育の影響からの表象であるだけで、私はキリスト教を信じてはいません。表象として使っているだけです。

魂は猫のことも

英国・女性・20 歳

E062-2

2) If the soul exists after death, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)
It's kind of tree and souls are growing as roots of the tree. They grow towards a hole.
They become spum, eventually. HA, HA, HA!!

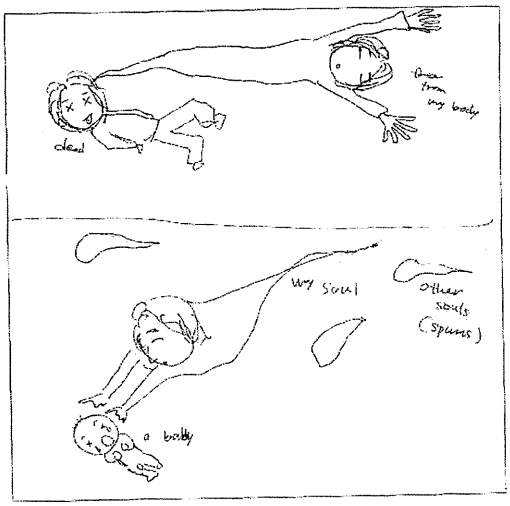
（E062：国籍：フランス、女性、22歳、無、専攻：コミュニケーション）
062-2
それは一様の木であり、魂はその木の根として育つ。それらは穴に向かって育つ。それらはやがて精子になる。ヒッヒッヒ！！　（ある種の犬、謎かの子宮）

木の根のような魂

フランス・女性・22 歳

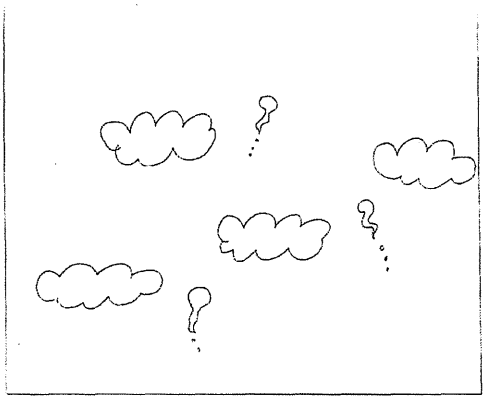
E065-2

2) If the soul exists after death, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

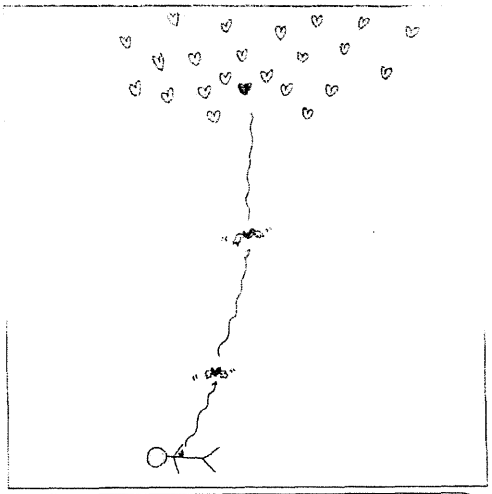
抜けだし入り込む魂
英国・男性・24 歳



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

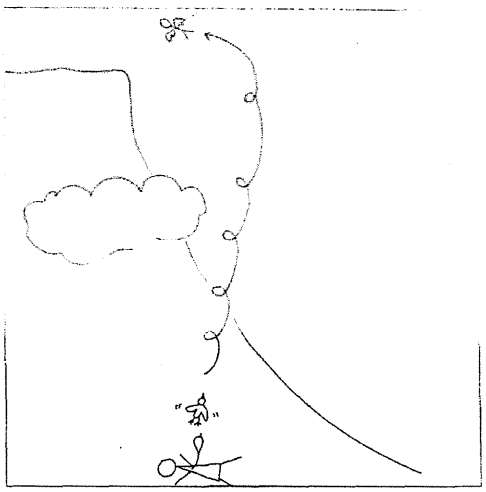
尾付きの魂
英国・女性・29 歳

E-249-2



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

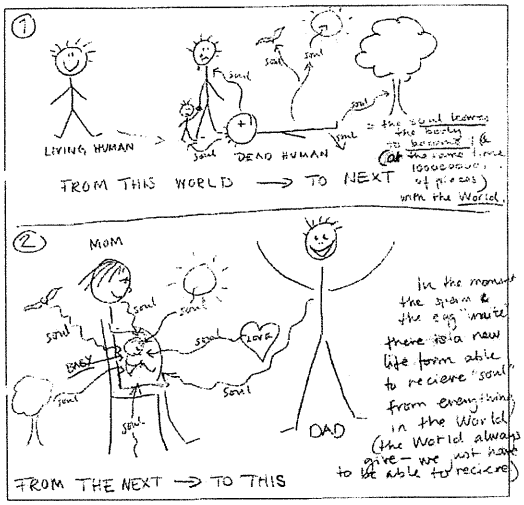
羽付きのハート
英国・女性・23 歳



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

鳥形の魂
英国・女性・26 歳

2) If the soul exists after death, what do you think about it? E043-2
Please draw a picture representing your image of soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.

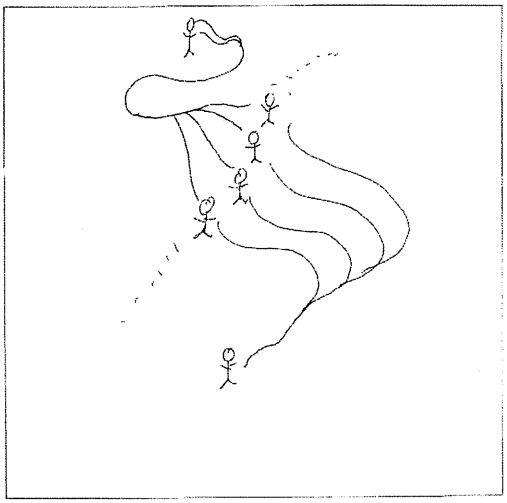


Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

043-2
魂は身体を離れて「世界」と一つになる。（同時に、数え切れない数の破片になる）
精子と卵子が結合する瞬間に、「世界」のすべてのものから「魂」を受け取ることができる新しい生命形ができる。（「世界」は常に与える－我々は受け取ることが可能であるだけでよい）

死で拡散し生で集まる魂
スウェーデン・女性・23 歳

2) If the soul exists after death, what do you think about it? E090-2
Please draw a picture representing your image of soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.

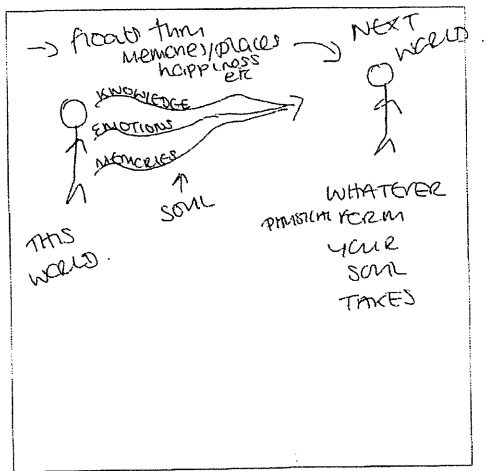


Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

Similar to everpage
090-2
前のページと同様

死で拡散し生で集まる魂
英国・男性・33 歳

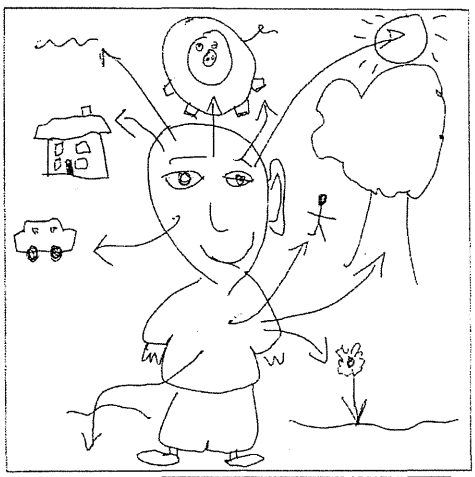
2) If the soul exists after death, what do you imagine? E-247-2
Please draw a picture representing your image of the soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

機能別に描かれた魂
英国・女性・21 歳

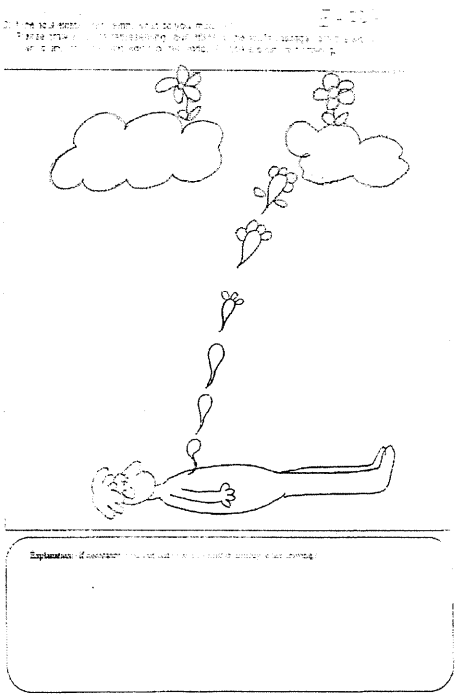
E-312-2
2) If the soul exists after death, what do you imagine?
Please draw a picture representing your image of the soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

soul entering into everything

拡散していく魂
英国・男性・22 歳

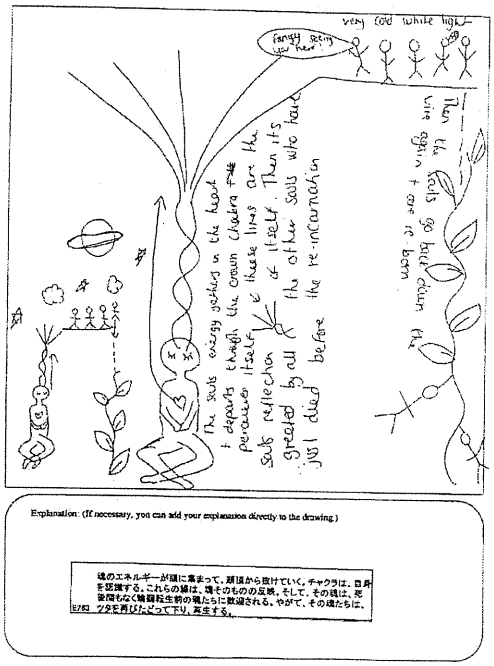


植物のイメージ

英国・女性・35 歳

E-263-2

2) If the soul exists after death, what do you imagine?
Please draw a picture representing your image of the soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

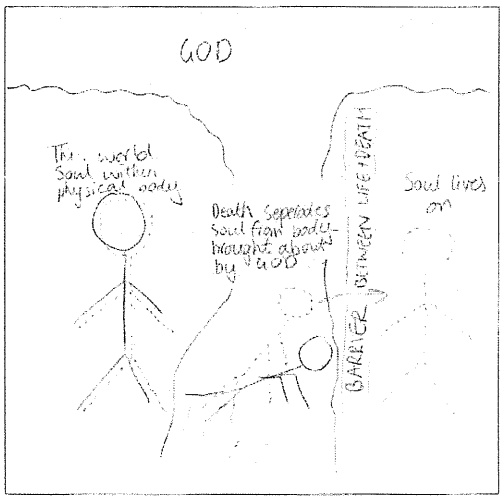
E263 魂のエネルギーが頭に集まって、頭頂から抜けていく。チャクラは、自身を認識する。これらの線は、魂そのものの反映。そして、その魂は、死後間もなく輪廻転生前の魂たちに歓迎される。やがて、その魂たちに、ツタを再び上がって下り、再生する。

植物のイメージ

英国・女性・21 歳

E037-2

2) If the soul exists after death, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

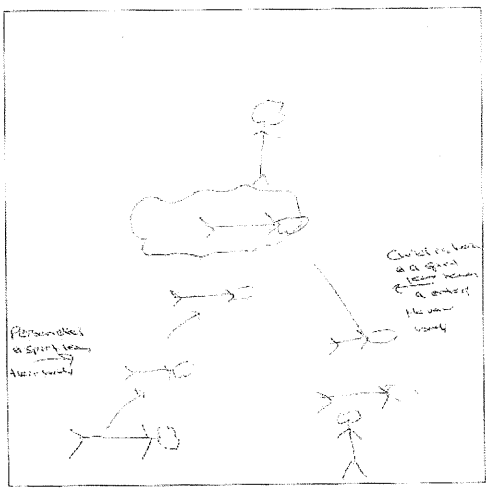
037-2
この世、魂は物質的な体の中。
死が魂を身体から切り離す－神のなせること。
生と死の障壁、魂は生き続ける。

死における神の関与

英国・女性・18 歳

E003-2

2) If the soul exists after death, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

（E003）国籍：イギリス（国名を記入）、女性、29歳、カトリック、専攻：4.科学
003-2
人が死ぬと魂は身体からはなれる。
子どもが生まれ、精霊は天国を離れその新しい身体に入る。

転生

英国・女性・29 歳

2) If the soul exists after death, what do you think about it? E046-2
Please draw a picture representing your image of soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.



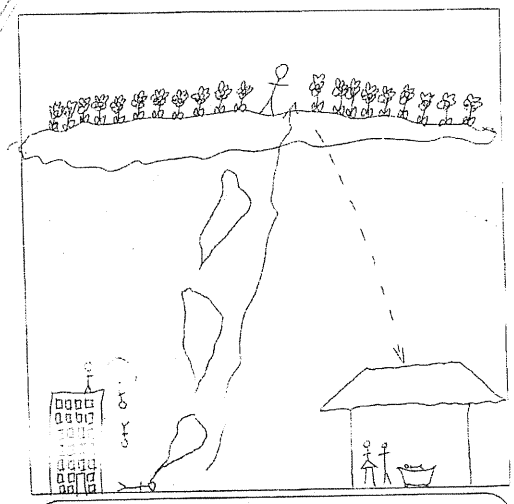
E046-2
死後、魂はあの世（非物質）に行き、それから肉体の知はないものをいじくり回す、つまり精神などと接触する人々を通して、その魂はこの世に引き戻されうる。

Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)
After death the soul is transformed into the next world (good or bad) then through people messing around with the unknown/ie contacting spirits etc the ~~soul~~ soul can be dragged back into this world.

転生

英国・女性・18 歳

E-208-2
, the soul exists after death, what do you imagine?
Please draw a picture representing your image of the soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.

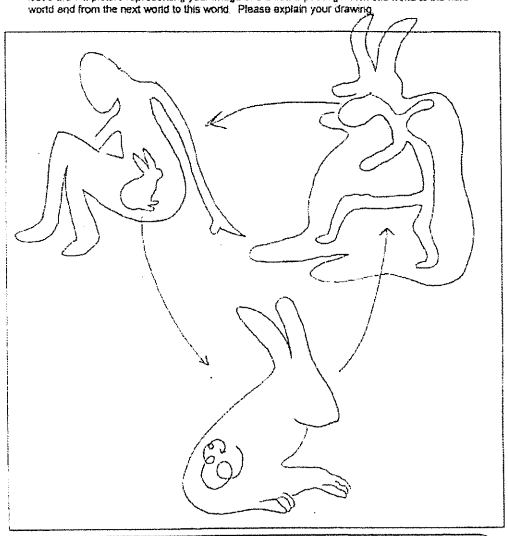


Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

転生

英国・男性・26 歳

2) If the soul exists after death, what do you imagine? E-249-2
Please draw a picture representing your image of the soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.



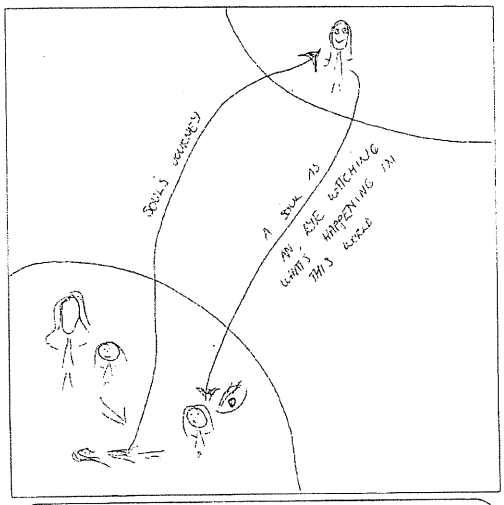
Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)
AGAIN, I DO NOT BELIEVE IN THE SOUL BUT AM FASINATED & INSPIRED BY OUR TRANSFORMATIONS AT MATTER ...

E249 同じく、魂を信じませんが、でも、私たちの転移ということに魅惑・感覚された

転生

英国・男性・24 歳

E-259-2
2) If the soul exists after death, what do you imagine?
Please draw a picture representing your image of the soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)
Mother with daughter - mother dies, her soul lives on to keep an eye on the daughter, to live with the daughter.

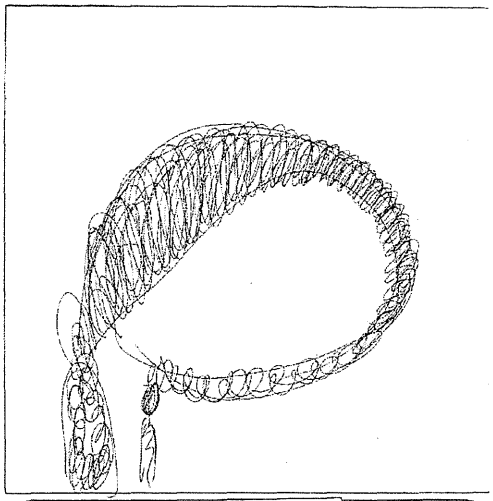
E259 母と娘。母が死ぬが、彼女の魂は生き続けてその娘を見守り続ける。娘と生きるために。魂の旅。娘としての魂が、この世で何が起こっているのかを見ている。

転生

ノルウェー・女性・26 歳

E-266-2

2) If the soul exists after death, what do you imagine?
Please draw a picture representing your image of the soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.



E266 体を残して、あるよくわからない旅にでる、そして、心地よいと思わ れる場の身体や、場所や物に、更た入り込む。

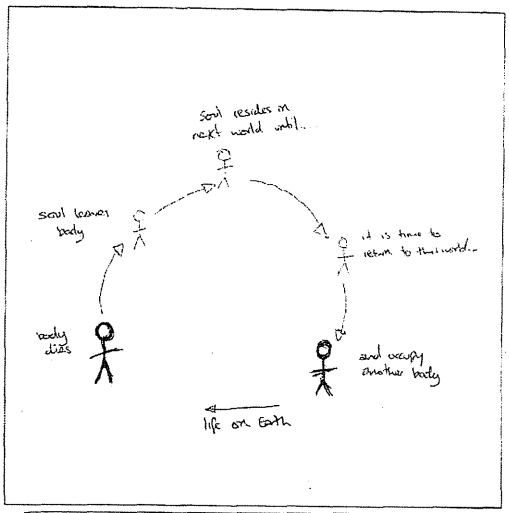
leaves body, and goes on a journey upon which I am unsure of.
It then rentes some other body, place or object which it finds peace

転生

英国・女性・21歳

E-296-2

2) If the soul exists after death, what do you imagine?
Please draw a picture representing your image of the soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

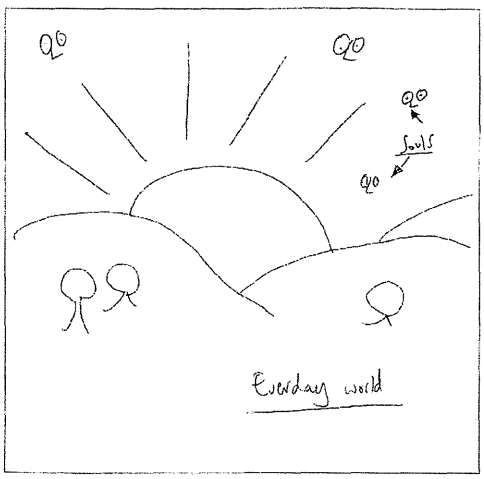
E296 身体が死ぬ 魂が身体を離れる 魂はまずあの世にいて 時がく ればこの世に戻る そして他の身体に入る

転生

英国・女性・21歳

E092-2
249

2) If the soul exists after death, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.



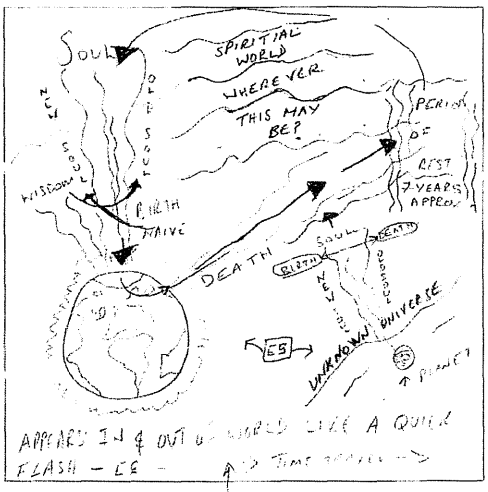
Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

輪郭の無い顔

英国・男性・22歳

E029-2

2) If the soul exists after death, what do you think about it?
Please draw a picture representing your image of soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.



Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

THE SOUL IS AN ANIMAL ... EMITY VISION >

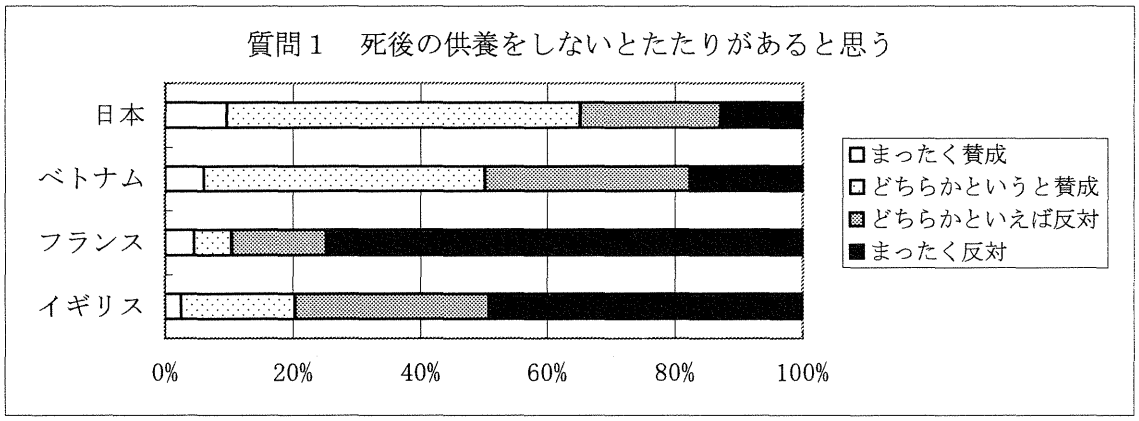
029-2
すばやい閃きのように世界に出入りする 時間旅行。
現実幻覚のイメージだ。空虚なヴィジョンだ。

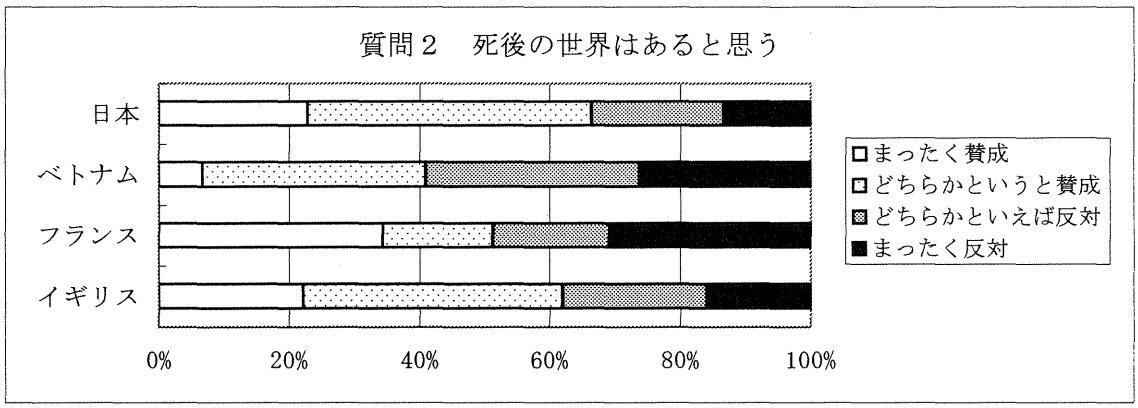
ユニークな描画

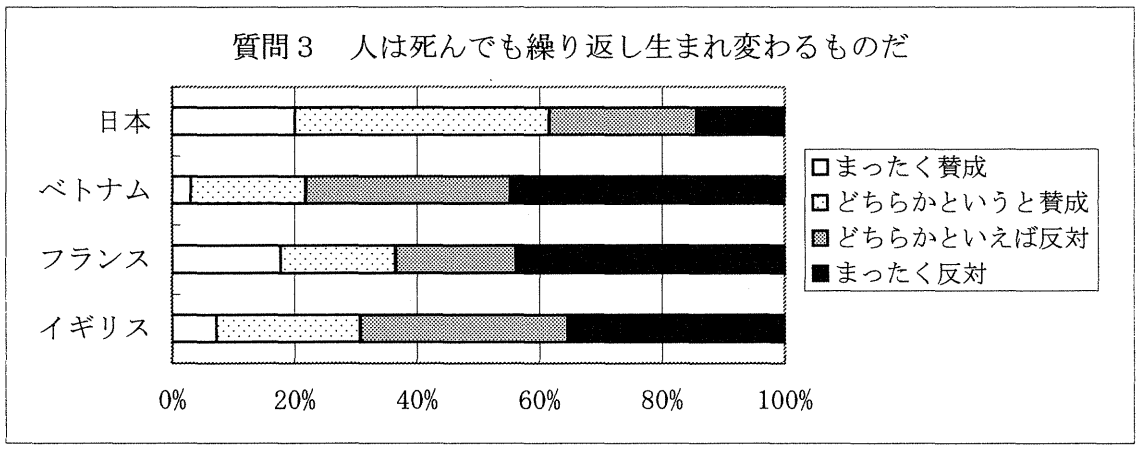
英国・不明・26歳

6-8　他界信念質問紙調査　4か国比較の統計的分析（1）：
各他界信念項目別にみた賛否回答分布図

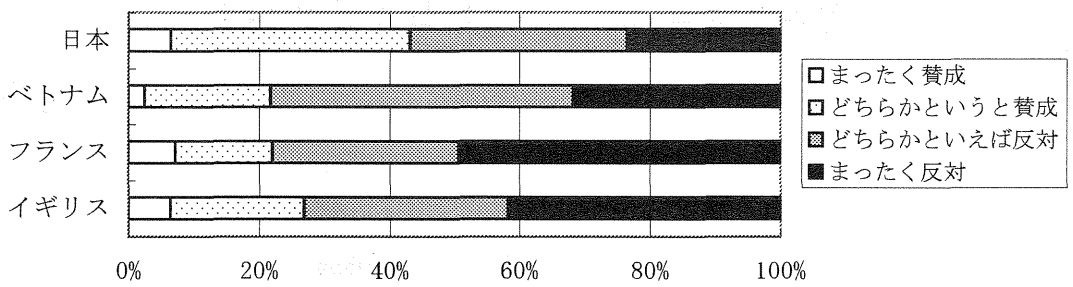
加藤義信



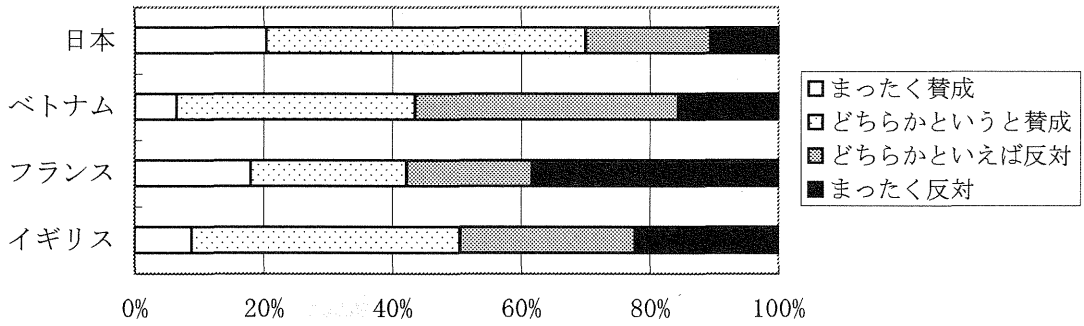




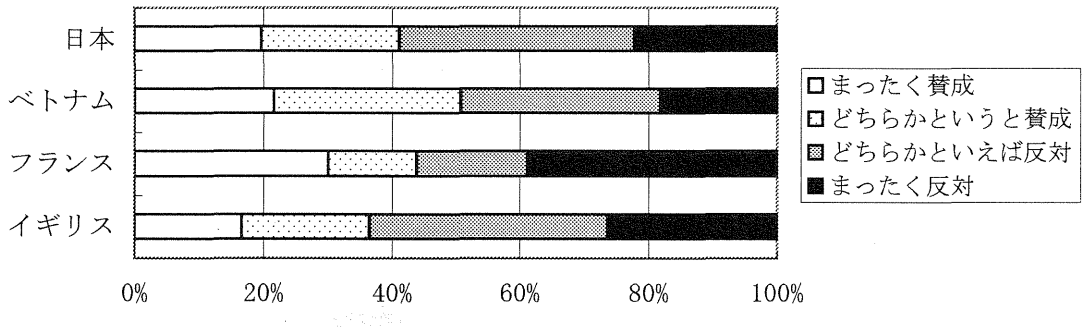
質問４　仏様や神様を信心して願いごとをすれば、いつかその願いごとがかなえられる



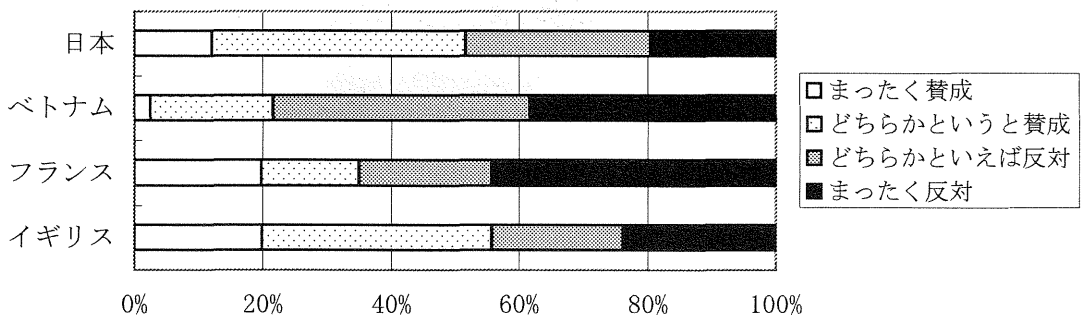
質問５　身近な人は亡くなった後、自分を守ってくれる

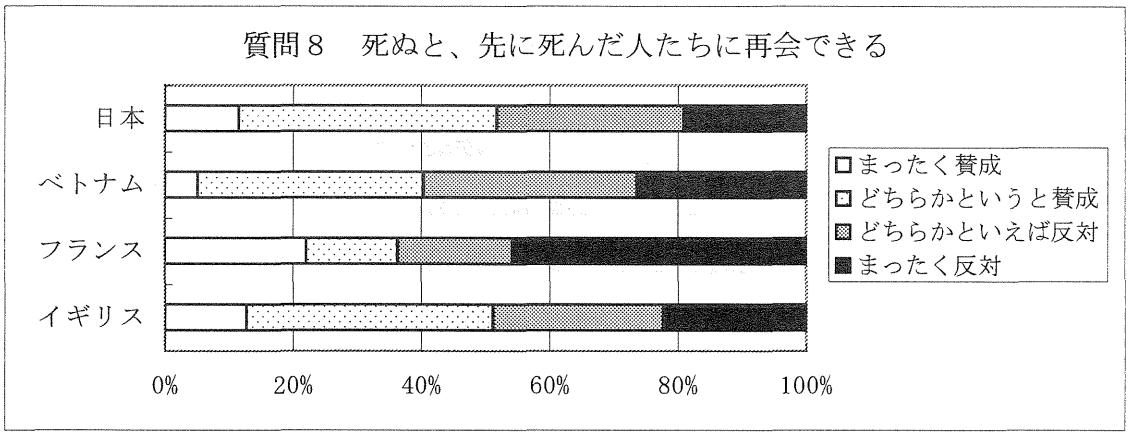


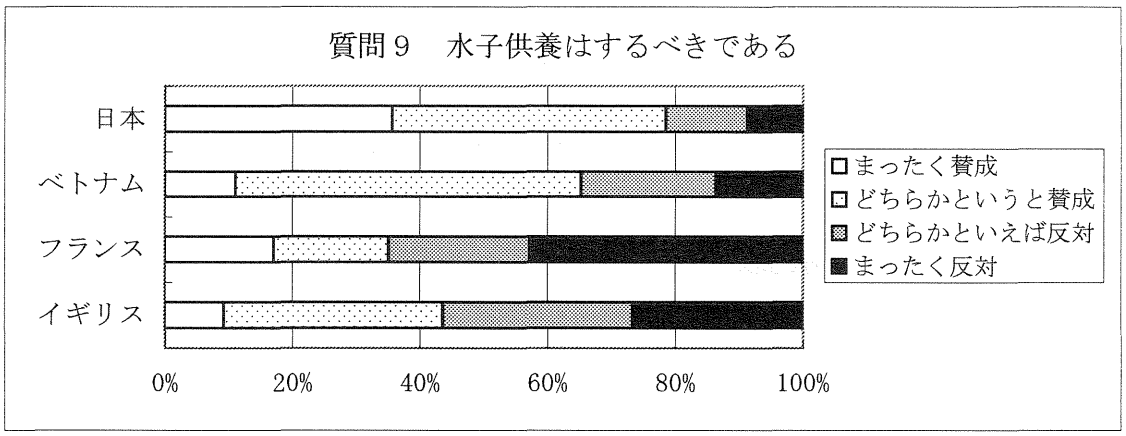
質問６　死とは自分が永久になくなってしまうことである

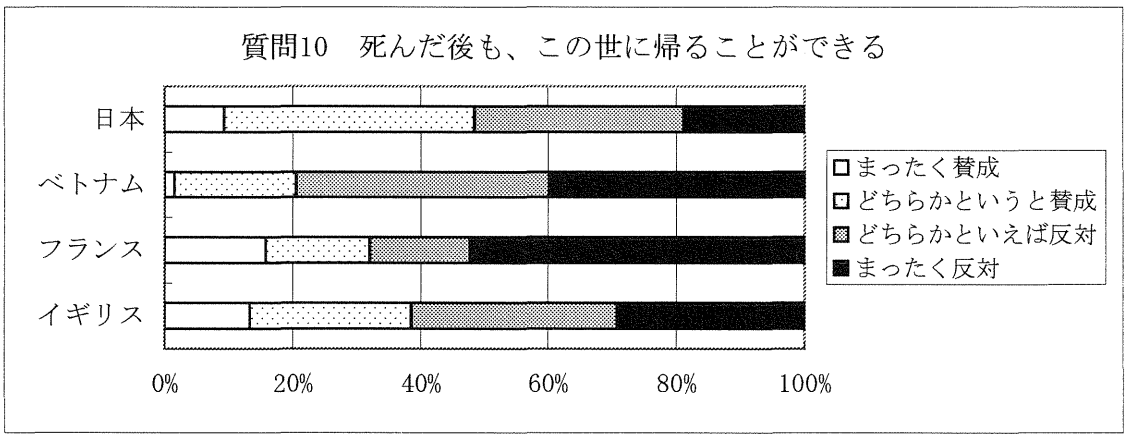


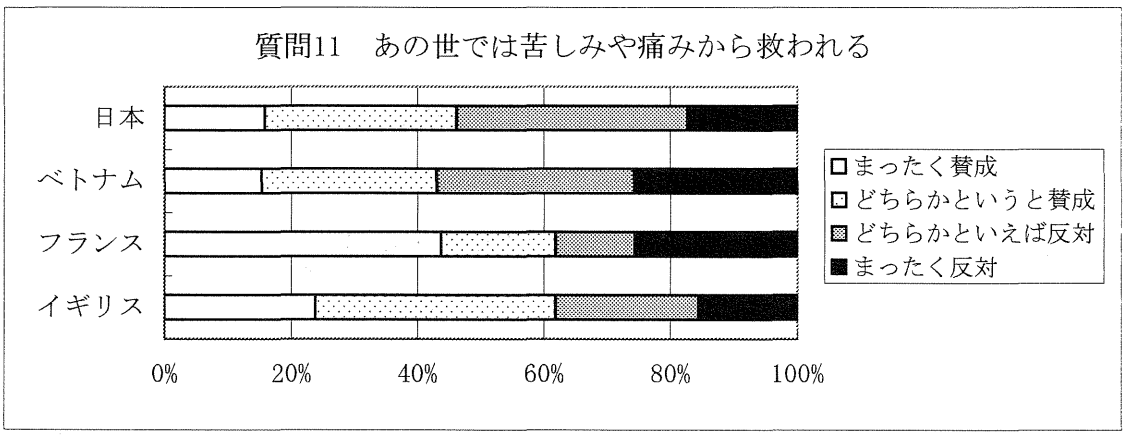
質問７　天国あるいは極楽浄土はあると思う



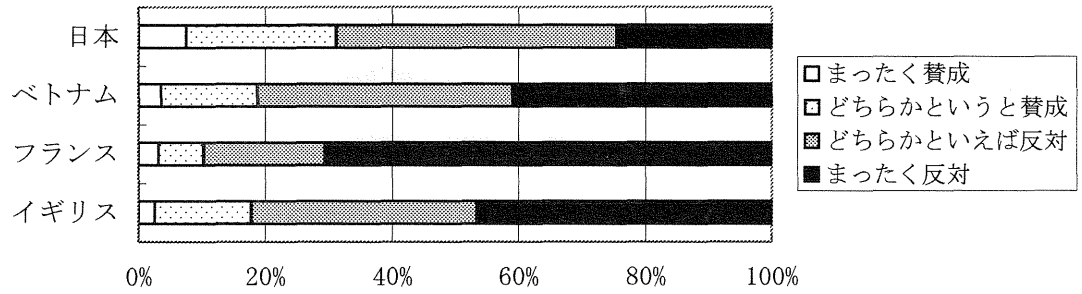

質問８　死ぬと、先に死んだ人たちに再会できる
日本
ベトナム
フランス
イギリス
0%
20%
40%
60%
80%
100%
まったく賛成
どちらかというと賛成
どちらかといえば反対
まったく反対


質問９　水子供養はするべきである
日本
ベトナム
フランス
イギリス
0%
20%
40%
60%
80%
100%
まったく賛成
どちらかというと賛成
どちらかといえば反対
まったく反対

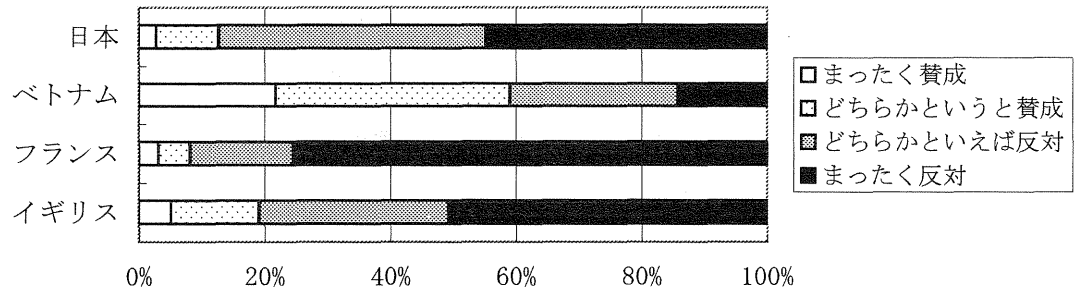

質問10　死んだ後も、この世に帰ることができる
日本
ベトナム
フランス
イギリス
0%
20%
40%
60%
80%
100%
まったく賛成
どちらかというと賛成
どちらかといえば反対
まったく反対


質問11　あの世では苦しみや痛みから救われる
日本
ベトナム
フランス
イギリス
0%
20%
40%
60%
80%
100%
まったく賛成
どちらかというと賛成
どちらかといえば反対
まったく反対

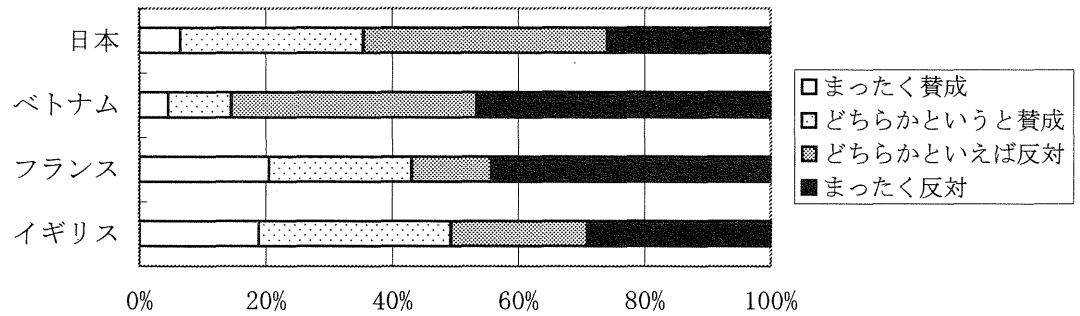
質問12　死んだ後もあの世では生前同様に生活することができる



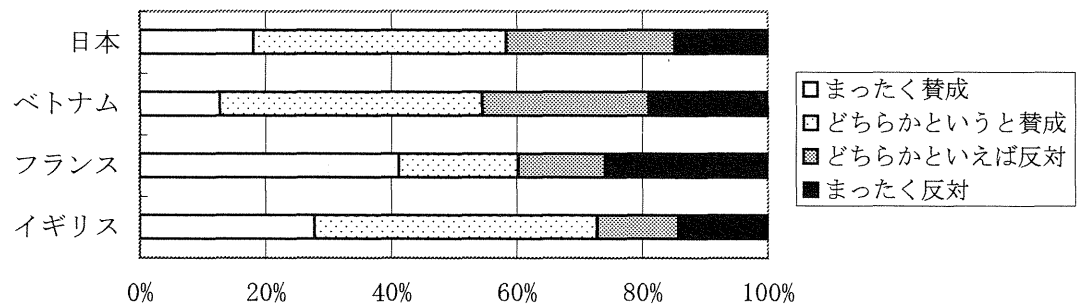
質問13　死ぬと、暗闇に入っていって、二度とそこから出ることはできない

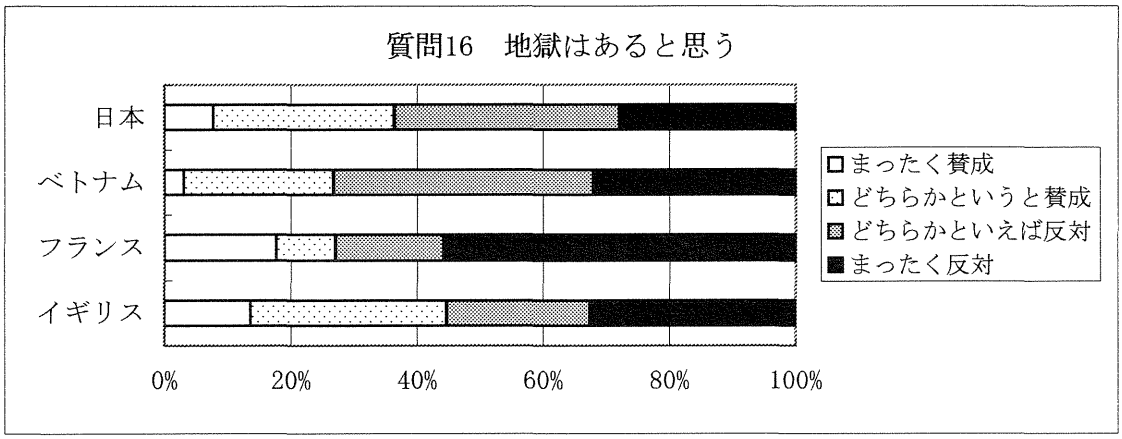


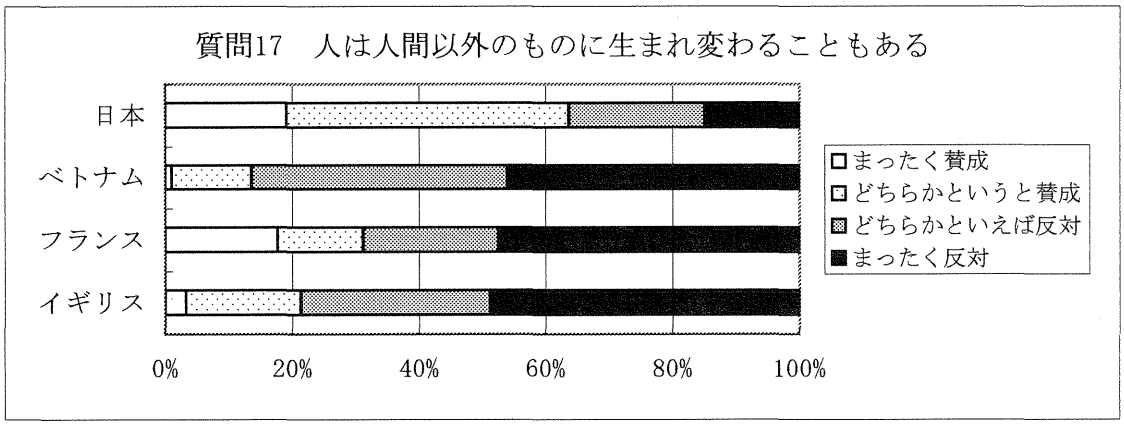
質問14　あの世はこの世よりもっとよいと思う

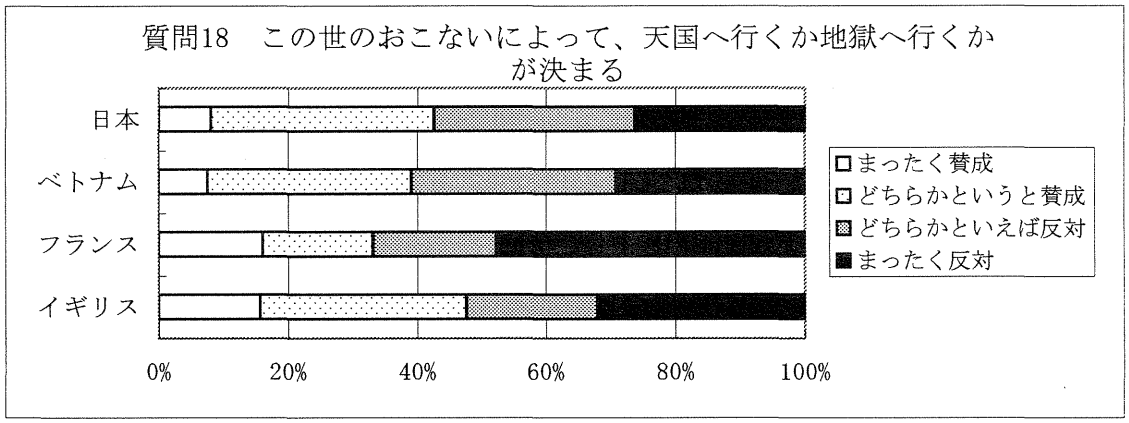


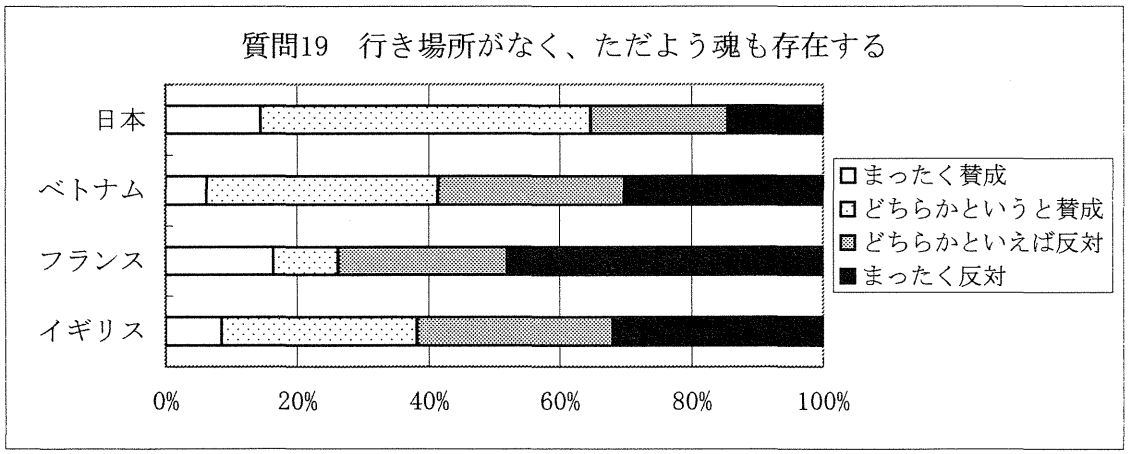
質問15　肉体は死んでも魂は残る

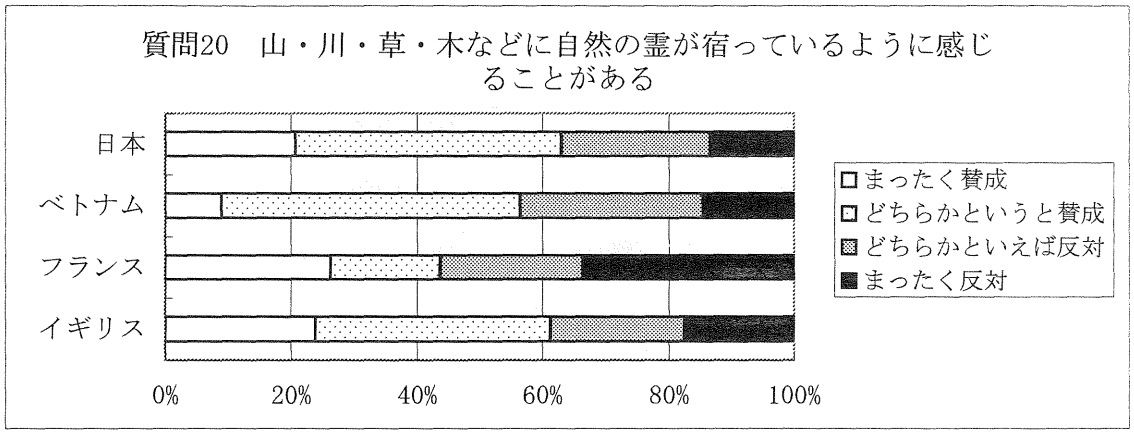


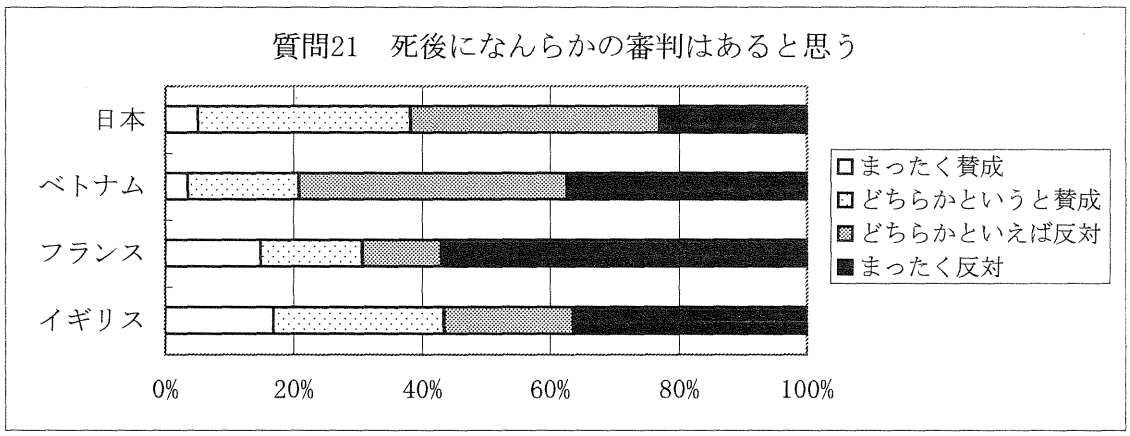

質問16　地獄はあると思う
日本
ベトナム
フランス
イギリス
0%
20%
40%
60%
80%
100%
まったく賛成
どちらかというと賛成
どちらかといえば反対
まったく反対


質問17　人は人間以外のものに生まれ変わることもある
日本
ベトナム
フランス
イギリス
0%
20%
40%
60%
80%
100%
まったく賛成
どちらかというと賛成
どちらかといえば反対
まったく反対


質問18　この世のおこないによって、天国へ行くか地獄へ行くか
が決まる
日本
ベトナム
フランス
イギリス
0%
20%
40%
60%
80%
100%
まったく賛成
どちらかというと賛成
どちらかといえば反対
まったく反対


質問19　行き場所がなく、ただよう魂も存在する
日本
ベトナム
フランス
イギリス
0%
20%
40%
60%
80%
100%
まったく賛成
どちらかというと賛成
どちらかといえば反対
まったく反対


質問20　山・川・草・木などに自然の霊が宿っているように感じることがある
日本
ベトナム
フランス
イギリス
0%
20%
40%
60%
80%
100%
まったく賛成
どちらかというと賛成
どちらかといえば反対
まったく反対


質問21　死後になんらかの審判はあると思う
日本
ベトナム
フランス
イギリス
0%
20%
40%
60%
80%
100%
まったく賛成
どちらかというと賛成
どちらかといえば反対
まったく反対

各他界信念項目別にみた賛否回答分布：人数と比率

質問１　死者の供養をしないとたたりがあると思う

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	31 (9.6%)	179 (55.6%)	71 (22.0%)	41 (12.7%)
ベトナム	12 (6.0%)	88 (44.2%)	64 (32.2%)	35 (17.6%)
フランス	9 (4.5%)	12 (6.0%)	30 (14.9%)	150 (74.6%)
イギリス	4 (2.5%)	28 (17.8%)	48 (30.6%)	77 (49.0%)

質問２　死後の世界はあると思う

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	74 (22.8%)	142 (43.7%)	66 (20.3%)	43 (13.2%)
ベトナム	13 (6.7%)	67 (34.4%)	64 (32.8%)	51 (26.2%)
フランス	67 (34.4%)	33 (16.9%	35 (17.9%)	60 (30.8%)
イギリス	35 (22.2%)	63 (39.9%)	35 (22.2%)	25 (15.8%)

質問３　人は死んでも繰り返し生まれ変わるものだ

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	65 (20.1%)	135 (41.7%)	78 (24.1%)	46 (14.2%)
ベトナム	6 (3.0%)	37 (18.8%)	66 (33.5%)	88 (44.7%)
フランス	34 (17.7%)	36 (18.8%)	38 (19.8%)	84 (43.8%)
イギリス	11 (7.2%)	36 (23.5%)	52 (34.0%)	54 (35.3%)

質問４　仏様や神様を信心して願いごとをすれば、いつかその願いごとがかなえられる

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	21 (6.5%)	119 (36.7%)	108 (33.3%)	76 (23.5%)
ベトナム	5 (2.5%)	39 (19.3%)	94 (46.5%)	64 (31.7%)
フランス	14 (7.2%)	29 (14.9%)	56 (28.7%)	96 (49.2%)
イギリス	10 (6.4%)	32 (20.5%)	49 (31.4%)	65 (41.7%)

質問５　身近な人は亡くなった後、自分を守ってくれる

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	66 (20.4%)	161 (49.7%)	63 (19.4%)	34 (10.5%)
ベトナム	13 (6.5%)	74 (37.0%)	82 (41.0%)	31 (15.5%)
フランス	35 (18.0%)	47 (24.2%)	38 (19.6%)	74 (38.1%)
イギリス	14 (8.9%)	66 (41.8%)	43 (27.2%)	35 (22.2%)

質問６　死とは自分が永久になくなってしまうことである

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	64 (19.7%)	70 (21.5%)	119 (36.6%)	72 (22.2%)
ベトナム	43 (21.6%)	58 (29.1%)	62 (31.2%)	36 (18.1%)
フランス	59 (30.1%)	27 (13.8%)	34 (17.3%)	76 (38.8%)
イギリス	26 (16.7%)	31 (19.9%)	58 (37.2%)	41 (26.3%)

質問７　天国あるいは極楽浄土はあると思う

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	39 (12.1%)	128 (39.6%)	93 (28.8%)	63 (19.5%)
ベトナム	5 (2.5%)	38 (19.1%)	80 (40.2%)	76 (38.2%)
フランス	39 (19.8%)	30 (15.2%)	41 (20.8%)	87 (44.2%)
イギリス	31 (19.9%)	56 (35.9%)	32 (20.5%)	37 (23.7%)

質問８　死ぬと、先に死んだ人たちに再会できる

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	37 (11.5%)	130 (40.4%)	94 (29.2%)	61 (18.9%)
ベトナム	10 (5.1%)	70 (35.4%)	66 (33.3%)	52 (26.3%)
フランス	43 (22.1%)	28 (14.4%)	35 (17.9%)	89 (45.6%)
イギリス	20 (12.7%)	61 (38.6%)	42 (26.6%)	35 (22.2%)

質問９　水子供養はするべきである

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	115 (35.6%)	139 (43.0%)	41 (12.7%)	28 (8.7%)
ベトナム	22 (11.1%)	108 (54.3%)	42 (21.1%)	27 (13.6%)
フランス	34 (17.1%)	36 (18.1%)	44 (22.1%)	85 (42.7%)
イギリス	14 (9.3%)	52 (34.4%)	45 (29.8%)	40 (26.5%)

質問10　死んだ後も、この世に帰ることができる

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	30 (9.3%)	126 (39.3%)	105 (32.7%)	60 (18.7%)
ベトナム	3 (1.5%)	38 (19.1%)	79 (39.7%)	79 (39.7%)
フランス	30 (15.8%)	31 (16.3%)	30 (15.8%)	99 (52.1%)
イギリス	21 (13.3%)	40 (25.3%)	51 (32.3%)	46 (29.1%)

質問11　あの世では苦しみや痛みから救われる

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	51 (15.9%)	97 (30.3%)	117 (36.6%)	55 (17.2%)
ベトナム	30 (15.4%)	54 (27.7%)	61 (31.3%)	50 (25.6%)
フランス	84 (43.8%)	35 (18.2%)	24 (12.5%)	49 (25.5%)
イギリス	37 (23.9%)	59 (38.1%)	35 (22.6%)	24 (15.5%)

質問12　死んだ後も、あの世では生前同様に生活することができる

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	24 (7.5%)	76 (23.8%)	142 (44.4%)	78 (24.4%)
ベトナム	7 (3.6%)	30 (15.3%)	79 (40.3%)	80 (40.8%)
フランス	6 (3.1%)	14 (7.3%)	37 (19.2%)	136 (70.5%)
イギリス	4 (2.5%)	24 (15.3%)	56 (35.7%)	73 (46.5%)

質問13　死ぬと、暗闇に入っていって、二度とそこから出ることはできない

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	9 (2.8%)	32 (9.9%)	137 (42.5%)	144 (44.7%)
ベトナム	43 (21.7%)	74 (37.4%)	53 (26.8%)	28 (14.1%)
フランス	6 (3.1%)	10 (5.1%)	32 (16.4%)	147 (75.4%)
イギリス	8 (5.1%)	22 (14.1%)	47 (30.1%)	79 (50.6%)

質問14　あの世はこの世よりもっとよいと思う

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	20 (6.5%)	90 (29.0%)	120 (38.7%)	80 (25.8%)
ベトナム	9 (4.5%)	20 (10.1%)	77 (38.9%)	92 (46.5%)
フランス	39 (20.5%)	43 (22.6%)	24 (12.6%)	84 (44.2%)
イギリス	28 (18.9%)	45 (30.4%)	32 (21.6%)	43 (29.1%)

質問15　肉体は死んでも魂は残る

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	56 (18.1%)	125 (40.3%)	83 (26.8%)	46 (14.8%)
ベトナム	25 (12.8%)	82 (41.8%)	52 (26.5%)	37 (18.9%)
フランス	80 (41.2%)	37 (19.1%)	27 (13.9%)	50 (25.8%)
イギリス	43 (27.7%)	70 (45.2%)	20 (12.9%)	22 (14.2%)

質問16　地獄はあると思う

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	24 (7.7%)	90 (28.8%)	112 (35.8%)	87 (27.8%)
ベトナム	6 (3.1%)	46 (23.7%)	80 (41.2%)	62 (32.0%)
フランス	34 (17.7%)	18 (9.4%)	33 (17.2%)	107 (55.7%)
イギリス	21 (13.6%)	48 (31.2%)	35 (22.7%)	50 (32.5%)

質問17　人は人間以外のものに生まれ変わることもある

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	59 (19.1%)	138 (44.7%)	66 (21.4%)	46 (14.9%)
ベトナム	2 (1.0%)	25 (12.6%)	80 (40.4%)	91 (46.0%)
フランス	34 (17.7%)	26 (13.5%)	41 (21.4%)	91 (47.4%)
イギリス	5 (3.2%)	28 (18.2%)	46 (29.9%)	75 (48.7%)

質問18　この世のおこないによって、天国へ行くか地獄へ行くかが決まる

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	25 (8.0%)	108 (34.6%)	97 (31.1%)	82 (26.3%)
ベトナム	15 (7.5%)	63 (31.7%)	63 (31.7%)	58 (29.1%)
フランス	31 (16.1%)	33 (17.1%)	37 (19.2%)	92 (47.7%)
イギリス	24 (15.7%)	49 (32.0%)	31 (20.3%)	49 (32.0%)

質問19　行き場所がなく、ただよう魂も存在する

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	45 (14.4%)	157 (50.3%)	65 (20.8%)	45 (14.4%)
ベトナム	12 (6.2%)	68 (35.2%)	55 (28.5%)	58 (30.1%)
フランス	31 (16.3%)	19 (10.0%)	49 (25.8%)	91 (47.9%)
イギリス	13 (8.4%)	46 (29.9%)	46 (29.9%)	49 (31.8%)

質問20　山・川・草・木などに自然の霊が宿っているように感じることがある

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	65 (20.7%)	133 (42.4%)	74 (23.6%)	42 (13.4%)
ベトナム	18 (9.0%)	95 (47.5%)	58 (29.0%)	29 (14.5%)
フランス	51 (26.3%)	34 (17.5%)	44 (22.7%)	65 (33.5%)
イギリス	37 (23.9%)	58 (37.4%)	33 (21.3%)	27 (17.4%)

質問21　死後になんらかの審判はあると思う

	まったく賛成	どちらかというと賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
日本	16 (5.1%)	104 (33.1%)	122 (38.9%)	72 (22.9%)
ベトナム	7 (3.5%)	35 (17.4%)	84 (41.8%)	75 (37.3%)
フランス	29 (14.9%)	31 (15.9%)	24 (12.3%)	111 (56.9%)
イギリス	26 (16.9%)	41 (26.6%)	31 (20.1%)	56 (36.4%)

6-9 他界信念質問紙調査 4カ国比較の統計的分析(2) 因子分析

戸田有一

＜4か国全体での分析＞

表6-9-1 固有値

因子	初期の固有値 合計	分散の %	累積 %
1	8.006	38.1	38.1
2	1.676	8.0	46.1
3	1.608	7.7	53.8
4	1.094	5.2	59.0
5	0.919	4.4	63.3
6	0.848	4.0	67.4
7	0.735	3.5	70.9
8	0.672	3.2	74.1
9	0.635	3.0	77.1
10	0.610	2.9	80.0
11	0.505	2.4	82.4
12	0.471	2.2	84.7
13	0.457	2.2	86.8
14	0.427	2.0	88.9
15	0.415	2.0	90.9
16	0.397	1.9	92.7
17	0.345	1.6	94.4
18	0.337	1.6	96.0
19	0.318	1.5	97.5
20	0.284	1.4	98.9
21	0.240	1.1	100.0

表6-9-2 主因子解(回転前)

	因子 1	2	3	4
2. 死後の世界ある	0.768			
8. 死による再会	0.758			
7. 天国・極楽浄土ある	0.750			
21. 死後の審判ある	0.707	0.345		
15. 肉体死後も魂残る	0.692			
16. 地獄ある	0.675	0.367		-0.327
5. 亡親族に守られる	0.662			
3. 人の輪廻転生	0.650	-0.493		
18. 今世の行動で天国か地獄	0.647	0.360		
19. 浮遊霊もある	0.644			
10. 死後この世に帰れる	0.632	-0.418		
17. 人は人以外に転生も	0.604	-0.327		
14. あの世はこの世よりよい	0.583		-0.424	
4. 神仏への願い叶う	0.583			
12. 死後も生前同様の生活	0.574			
9. 水子供養はすべき	0.539		0.399	
6. 死は永久の無化	-0.416			
20. 山川草木に自然の霊	0.374			
11. あの世で苦痛から救われる	0.305			
13. 死後は暗闇に				
1. 供養しないと祟り	0.482		0.538	

表6-9-3 主因子解後のバリマックス解(固有値1以上)

	因子 魂と転生	他界憧憬	死後審判	供養必要
3. 人の輪廻転生	0.787			
10. 死後この世に帰れる	0.713			
17. 人は人以外に転生も	0.645			
19. 浮遊霊もある	0.535		0.331	
15. 肉体死後も魂残る	0.509	0.435	0.301	
5. 亡親族に守られる	0.444	0.350		0.419
6. 死は永久の無化	-0.386			
20. 山川草木に自然の霊	0.338			
14. あの世はこの世よりよい		0.689		
8. 死による再会	0.327	0.655		
7. 天国・極楽浄土ある		0.613	0.427	
2. 死後の世界ある	0.472	0.545	0.310	
11. あの世で苦痛から救われる		0.479		
12. 死後も生前同様の生活	0.312	0.323		
16. 地獄ある			0.756	
18. 今世の行動で天国か地獄			0.696	
21. 死後の審判ある		0.333	0.663	
1. 供養しないと祟り				0.740
9. 水子供養はすべき				0.593
4. 神仏への願い叶う		0.345		0.371
13. 死後は暗闇に				

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴わないﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法

表6-9-4 主因子解後のバリマックス解(3因子)

	因子		
	来世存在	双方向性	供養必要
7. 天国・極楽浄土ある	0.732		
14. あの世はこの世よりよい	0.698		
8. 死による再会	0.676	0.362	
2. 死後の世界ある	0.629	0.476	
21. 死後の審判ある	0.606		0.46
16. 地獄ある	0.568		0.442
15. 肉体死後も魂残る	0.546	0.488	
18. 今世の行動で天国か地獄	0.523		0.477
11. あの世で苦痛から救われる	0.407		
4. 神仏への願い叶う	0.401		0.379
12. 死後も生前同様の生活	0.368	0.351	
3. 人の輪廻転生		0.794	
10. 死後この世に帰れる		0.712	
17. 人は人以外に転生も		0.656	
19. 浮遊霊もある		0.545	0.334
5. 亡親族に守られる	0.323	0.514	0.309
20. 山川草木に自然の霊		0.378	
6. 死は永久の無化	-0.314	-0.345	
1. 供養しないと祟り			0.634
9. 水子供養はすべき		0.333	0.571
13. 死後は暗闇に			0.331

回転法: Kaiser の正規化を伴わないﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法

表6-9-5 主因子解後のバリマックス解(因子)

	因子	
	死後世界	転生
21. 死後の審判ある	0.78	
16. 地獄ある	0.738	
7. 天国・極楽浄土ある	0.738	
18. 今世の行動で天国か地獄	0.719	
8. 死による再会	0.672	0.353
2. 死後の世界ある	0.61	0.467
4. 神仏への願い叶う	0.562	
14. あの世はこの世よりよい	0.54	
15. 肉体死後も魂残る	0.505	0.483
12. 死後も生前同様の生活	0.479	0.321
5. 亡親族に守られる	0.474	0.473
9. 水子供養はすべき	0.468	
1. 供養しないと祟り	0.417	
11. あの世で苦痛から救われる	0.304	
3. 人の輪廻転生		0.787
10. 死後この世に帰れる		0.709
17. 人は人以外に転生も	0.304	0.62
19. 浮遊霊もある	0.442	0.488
6. 死は永久の無化		-0.347
20. 山川草木に自然の霊		0.342
13. 死後は暗闇に		

回転法: Kaiser の正規化を伴わないﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法

表6-9-6 主因子解後のプロマックス解(固有値1以上)のパターン行列

	因子			
	魂と転生	他界憧憬	死後審判	供養必要
3. 人の輪廻転生	0.947			
10. 死後この世に帰れる	0.831			
17. 人は人以外に転生も	0.752			
19. 浮遊霊もある	0.558			
15. 肉体死後も魂残る	0.449	0.312		
6. 死は永久の無化	-0.424			
13. 死後は暗闇に	-0.371			0.362
20. 山川草木に自然の霊	0.345			
14. あの世はこの世よりよい		0.846		
8. 死による再会		0.71		
11. あの世で苦痛から救われる		0.677		
7. 天国・極楽浄土ある		0.606		
2. 死後の世界ある	0.322	0.481		
12. 死後も生前同様の生活				
16. 地獄ある			0.92	
18. 今世の行動で天国か地獄			0.827	
21. 死後の審判ある			0.724	
1. 供養しないと祟り				0.833
9. 水子供養はすべき				0.609
5. 亡親族に守られる	0.321			0.38
4. 神仏への願い叶う				0.318

因子相関行列

因子	魂と転生	他界憧憬	死後審判	供養必要
魂と転生				
他界憧憬	0.686			
死後審判	0.591	0.709		
供養必要	0.537	0.459	0.580	

因子抽出法: 主因子法　回転法: Kaiser の正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法

表6-9-7　主因子解後のプロマックス解（3因子）のパターン行列

	因子		
	来世存在	双方向性	供養必要
14. あの世はこの世よりよい	0.859		
7. 天国・極楽浄土ある	0.795		
8. 死による再会	0.695		
2. 死後の世界ある	0.606	0.312	
21. 死後の審判ある	0.589		0.363
16. 地獄ある	0.55		0.353
11. あの世で苦痛から救われる	0.525		
15. 肉体死後も魂残る	0.515	0.376	
18. 今世の行動で天国か地獄	0.484		0.409
12. 死後も生前同様の生活			
3. 人の輪廻転生		0.889	
10. 死後この世に帰れる		0.767	
17. 人は人以外に転生も		0.697	
19. 浮遊霊もある		0.499	
5. 亡親族に守られる		0.44	
20. 山川草木に自然の霊		0.388	
6. 死は永久の無化		-0.308	
1. 供養しないと祟り			0.717
9. 水子供養はすべき			0.61
13. 死後は暗闇に			0.444
4. 神仏への願い叶う	0.309		0.316

因子相関行列

因子	来世存在	双方向性	供養必要
来世存在			
双方向性	0.637		
供養必要	0.576	0.468	

回転法: Kaiser の正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法

表6-9-8　主因子解後のプロマックス解（2因子）のパターン行列

	因子	
	死後世界	転生
21. 死後の審判ある	0.896	
16. 地獄ある	0.851	
18. 今世の行動で天国か地獄	0.835	
7. 天国・極楽浄土ある	0.775	
8. 死による再会	0.642	
4. 神仏への願い叶う	0.578	
14. あの世はこの世よりよい	0.549	
2. 死後の世界ある	0.507	0.332
9. 水子供養はすべき	0.444	
12. 死後も生前同様の生活	0.422	
1. 供養しないと祟り	0.404	
11. あの世で苦痛から救われる	0.326	
3. 人の輪廻転生		0.891
10. 死後この世に帰れる		0.778
17. 人は人以外に転生も		0.655
19. 浮遊霊もある		0.43
15. 肉体死後も魂残る	0.37	0.397
5. 亡親族に守られる	0.337	0.397
20. 山川草木に自然の霊		0.341
13. 死後は暗闇に		-0.329
6. 死は永久の無化		-0.327

因子間相関＝0.661

＜国別の分析：日本＞

表6-9-9　主因子解後のプロマックス解（4因子・日本）

	因子			
	循環性	他界憧憬	他界畏怖	供養守護
15. 肉体死後も魂残る	0.789			
10. 死後この世に帰れる	0.752			
3. 人の輪廻転生	0.71			
6. 死は永久の無化	−0.664			
17. 人は人以外に転生も	0.597			
2. 死後の世界ある	0.466			
20. 山川草木に自然の霊	0.368	−0.304		
8. 死による再会		0.65		
14. あの世はこの世よりよい		0.627		
7. 天国・極楽浄土ある		0.596		
11. あの世で苦痛から救われる		0.575		
12. 死後も生前同様の生活		0.559		
4. 神仏への願い叶う				
16. 地獄ある			0.86	
18. 今世の行動で天国か地獄			0.786	
21. 死後の審判ある			0.737	
13. 死後は暗闇に	−0.449		0.473	
19. 浮遊霊もある	0.397		0.414	
1. 供養しないと祟り				0.698
9. 水子供養はすべき				0.685
5. 亡親族に守られる				0.64

表6-9-10　主因子解後のプロマックス解（3因子・日本）

	因子		
	循環性	他界憧憬	他界畏怖
15. 肉体死後も魂残る	0.744		
3. 人の輪廻転生	0.714		
17. 人は人以外に転生も	0.648		
10. 死後この世に帰れる	0.603		
20. 山川草木に自然の霊	0.555	−0.332	
6. 死は永久の無化	−0.538		
19. 浮遊霊もある	0.513		0.452
5. 亡親族に守られる	0.506		
2. 死後の世界ある	0.48		
9. 水子供養はすべき	0.377		
14. あの世はこの世よりよい		0.678	
7. 天国・極楽浄土ある		0.655	
8. 死による再会		0.651	
12. 死後も生前同様の生活		0.611	
11. あの世で苦痛から救われる		0.564	
4. 神仏への願い叶う			
18. 今世の行動で天国か地獄			0.803
16. 地獄ある			0.802
21. 死後の審判ある			0.714
13. 死後は暗闇に	−0.456		0.473
1. 供養しないと祟り			0.381

＜国別の分析：ベトナム＞

表6-9-11　主因子解後のプロマックス解（4因子・ベトナム）

	因子			
	他界存在	供養守護	他界楽観	無化暗闇
16. 地獄ある	0.983			
7. 天国・極楽浄土ある	0.832			
17. 人は人以外に転生も	0.767			
19. 浮遊霊もある	0.694			
21. 死後の審判ある	0.661			
15. 肉体死後も魂残る	0.551			
8. 死による再会	0.439			
2. 死後の世界ある	0.417			
18. 今世の行動で天国か地獄	0.369	0.333		
5. 亡親族に守られる		0.718		
1. 供養しないと祟り		0.701		
20. 山川草木に自然の霊		0.545	0.356	
9. 水子供養はすべき		0.527		
4. 神仏への願い叶う		0.377		
11. あの世で苦痛から救われる			0.743	−0.477
14. あの世はこの世よりよい			0.667	
3. 人の輪廻転生			0.504	0.353
10. 死後この世に帰れる			0.486	0.372
12. 死後も生前同様の生活			0.46	
6. 死は永久の無化				−0.638
13. 死後は暗闇に				−0.621

表6-9-12　主因子解後のプロマックス解（3因子・ベトナム）

	因子		
	他界存在	他界作用	無化暗闇
10. 死後この世に帰れる	0.8334		
14. あの世はこの世よりよい	0.7508		
3. 人の輪廻転生	0.6851		
11. あの世で苦痛から救われる	0.6763		0.472
17. 人は人以外に転生も	0.6762		
2. 死後の世界ある	0.6076		
16. 地獄ある	0.5886		
12. 死後も生前同様の生活	0.5785		
15. 肉体死後も魂残る	0.5199		
8. 死による再会	0.4764		
7. 天国・極楽浄土ある	0.4757		
21. 死後の審判ある	0.4362	0.3256	
1. 供養しないと祟り		0.7604	
5. 亡親族に守られる		0.6572	
9. 水子供養はすべき		0.5786	
19. 浮遊霊もある		0.5159	
18. 今世の行動で天国か地獄	0.3125	0.4464	
20. 山川草木に自然の霊		0.4207	
4. 神仏への願い叶う		0.3893	
13. 死後は暗闇に			0.5432
6. 死は永久の無化			0.524

＜国別の分析：フランス＞

表6-9-13　主因子解後のプロマックス解（4因子・フランス）

	因子			
	他界憧憬	循環性	他界畏怖	供養祟り
14. あの世はこの世よりよい	1.008			
8. 死による再会	0.858			
7. 天国・極楽浄土ある	0.823		0.315	
11. あの世で苦痛から救われる	0.619			
2. 死後の世界ある	0.603			
5. 亡親族に守られる	0.465	0.397		
3. 人の輪廻転生		0.915		
17. 人は人以外に転生も		0.8		
10. 死後この世に帰れる		0.771		
19. 浮遊霊もある		0.62		
15. 肉体死後も魂残る	0.448	0.485		
20. 山川草木に自然の霊		0.443		
6. 死は永久の無化		-0.388		
16. 地獄ある			0.785	
18. 今世の行動で天国か地獄			0.756	
21. 死後の審判ある			0.692	
9. 水子供養はすべき			0.567	
13. 死後は暗闇に			0.526	
4. 神仏への願い叶う			0.334	
12. 死後も生前同様の生活			0.31	
1. 供養しないと祟り				0.796

表6-9-14　主因子解後のプロマックス解（3因子・フランス）

	因子		
	他界憧憬	循環性	他界畏怖
14. あの世はこの世よりよい	1.048		
8. 死による再会	0.886		
7. 天国・極楽浄土ある	0.868		
2. 死後の世界ある	0.586		
11. あの世で苦痛から救われる	0.581		
3. 人の輪廻転生		0.938	
17. 人は人以外に転生も		0.804	
10. 死後この世に帰れる		0.788	
19. 浮遊霊もある		0.608	
15. 肉体死後も魂残る	0.413	0.495	
20. 山川草木に自然の霊		0.45	
5. 亡親族に守られる	0.395	0.406	
6. 死は永久の無化		-0.39	
9. 水子供養はすべき			0.758
21. 死後の審判ある			0.722
18. 今世の行動で天国か地獄			0.68
1. 供養しないと祟り			0.646
13. 死後は暗闇に			0.59
16. 地獄ある			0.578
4. 神仏への願い叶う			0.528
12. 死後も生前同様の生活			

＜国別の分析：イギリス＞

表6-9-15　主因子解後のプロマックス解（4因子・イギリス）

	因子			
	他界畏怖	循環性	他界憧憬	供養守護
18. 今世の行動で天国か地獄	0.959			
16. 地獄ある	0.888			
21. 死後の審判ある	0.761			
4. 神仏への願い叶う	0.402			
3. 人の輪廻転生		0.985		
17. 人は人以外に転生も		0.78		
10. 死後この世に帰れる		0.7		
19. 浮遊霊もある		0.495		
20. 山川草木に自然の霊		0.475		
12. 死後も生前同様の生活				
11. あの世で苦痛から救われる			0.759	
2. 死後の世界ある			0.717	
8. 死による再会			0.609	
15. 肉体死後も魂残る			0.593	
14. あの世はこの世よりよい	0.341		0.569	
13. 死後は暗闇に			−0.454	
7. 天国・極楽浄土ある			0.435	
6. 死は永久の無化			−0.356	
9. 水子供養はすべき				0.986
5. 亡親族に守られる				0.451
1. 供養しないと祟り				0.414

表6-9-16　主因子解後のプロマックス解（3因子・イギリス）

	因子		
	他界畏怖	循環性	他界憧憬
16. 地獄ある	0.911		
18. 今世の行動で天国か地獄	0.857		
21. 死後の審判ある	0.85		
9. 水子供養はすべき	0.668		
1. 供養しないと祟り	0.496		
4. 神仏への願い叶う	0.456		
6. 死は永久の無化	−0.31		
3. 人の輪廻転生		0.878	
10. 死後この世に帰れる		0.81	
17. 人は人以外に転生も		0.656	
19. 浮遊霊もある		0.558	
20. 山川草木に自然の霊		0.558	
5. 亡親族に守られる	0.319	0.376	
12. 死後も生前同様の生活			
11. あの世で苦痛から救われる			0.692
2. 死後の世界ある			0.676
14. あの世はこの世よりよい			0.601
8. 死による再会			0.593
15. 肉体死後も魂残る			0.588
13. 死後は暗闇に			−0.479
7. 天国・極楽浄土ある	0.31		0.381

6-10　他界信念質問紙調査　4か国比較の統計的分析（3）
イメージ画と信念調査との関係

戸田有一

イメージ画1およびイメージ画2の統計分析結果を、他界信念項目の結果と国別にクロス集計させた結果を提示する。

ただし、すべての集計結果を提示すると膨大な量になるので、提示は限定する。

他界信念項目に関しては、死後の場に関する項目「死後の世界ある」とそれとは対照的なアイデンティティに関する項目「肉体死後も魂残る」、そして、輪廻転生に関する項目とアニミズム的な項目「山川草木に霊」に絞り込んだ（表6-10-1）。

また、イメージ画に関する分析結果も、下記の表に示したものに限定した。

表6-10-1　信念調査とイメージ画のクロス集計に用いた項目

他界信念項目	イメージ画1およびイメージ画2
項目2「死後の世界ある」	「『あの世の人』がいる位置」
項目3「人の輪廻転生」	「分離・境界の有無」
項目15「肉体死後も魂残る」	「境界の種類」
項目20「山川草木に霊」	「コミュニケーション」
	「感情評価」
	「たましいの形」
	「往来のパターン」
	「生まれ変わり」

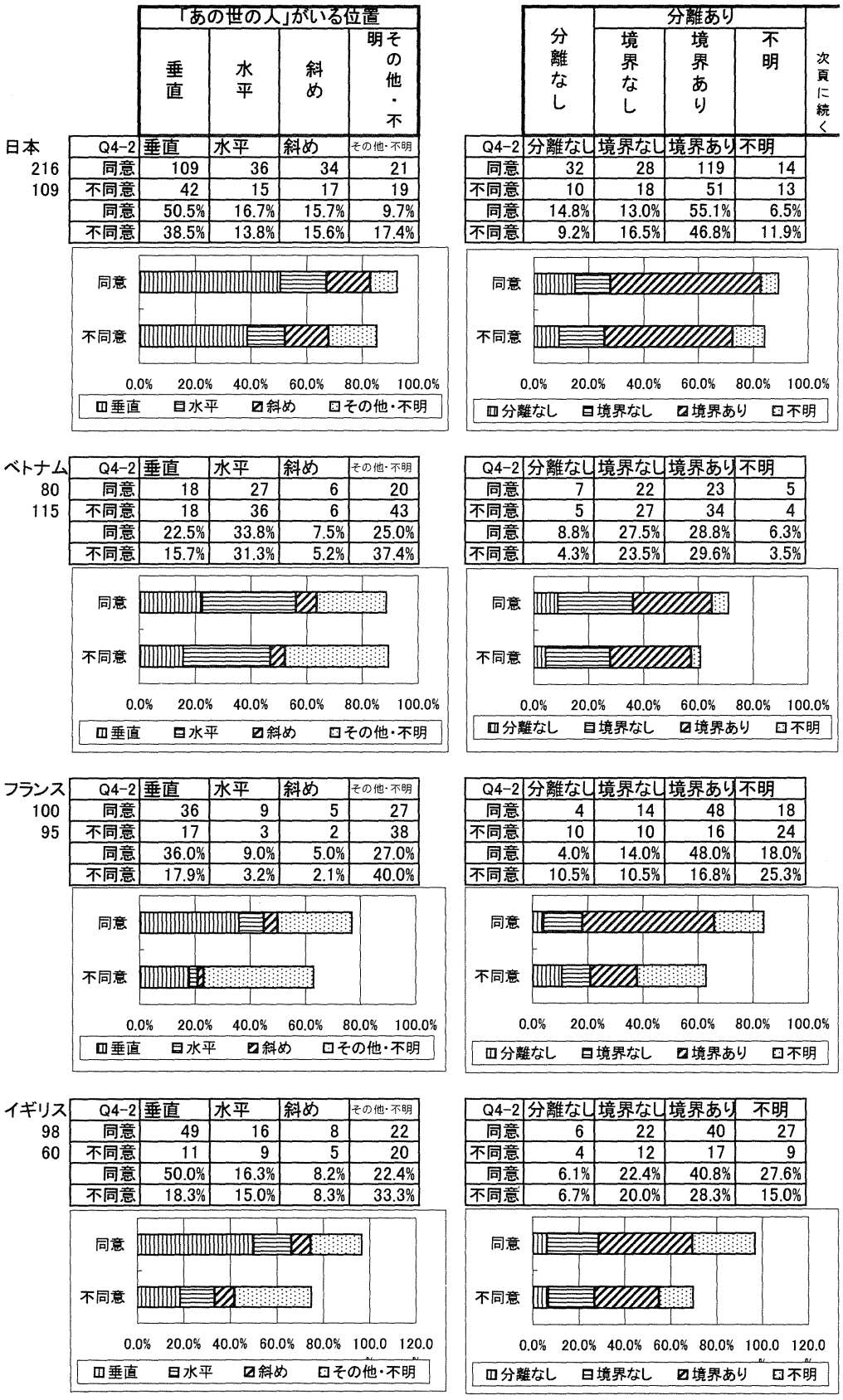
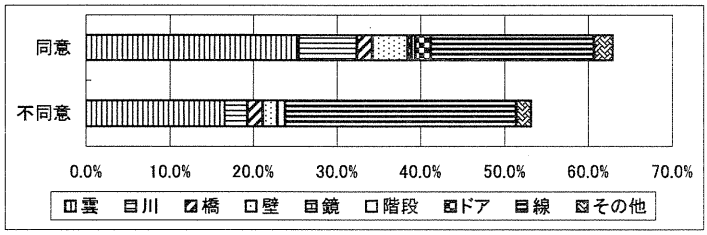
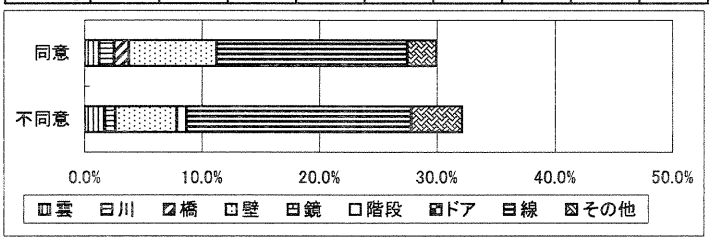


図6-10-1a 項目2「死後の世界ある」と「『あの世の人』がいる位置」・「分離・境界の有無」

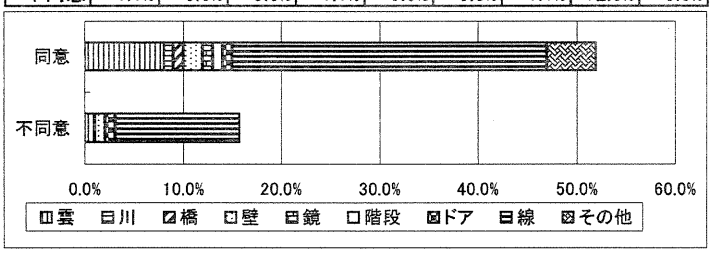
		分離あり 境界あり								
		雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
日本	Q4-2	雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
	同意	55	15	4	9	1	1	4	42	5
	不同意	18	3	2	2		1		30	2
	同意	25.5%	6.9%	1.9%	4.2%	0.5%	0.5%	1.9%	19.4%	2.3%
	不同意	16.5%	2.8%	1.8%	1.8%	0.0%	0.9%	0.0%	27.5%	1.8%



ベトナム	Q4-2	雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
	同意	1	1	1	6				13	2
	不同意	2	1		6		1		22	5
	同意	1.3%	1.3%	1.3%	7.5%	0.0%	0.0%	0.0%	16.3%	2.5%
	不同意	1.7%	0.9%	0.0%	5.2%	0.0%	0.9%	0.0%	19.1%	4.3%



フランス	Q4-2	雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
	同意	8	1	1	2	1	1	1	32	5
	不同意	1			1			1	12	
	同意	8.0%	1.0%	1.0%	2.0%	1.0%	1.0%	1.0%	32.0%	5.0%
	不同意	1.1%	0.0%	0.0%	1.1%	0.0%	0.0%	1.1%	12.6%	0.0%



イギリス	Q4-2	雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
	同意	12	1		1	1		2	20	5
	不同意	2			2			1	10	1
	同意	12.2%	1.0%	0.0%	1.0%	1.0%	0.0%	2.0%	20.4%	5.1%
	不同意	3.3%	0.0%	0.0%	3.3%	0.0%	0.0%	1.7%	16.7%	1.7%

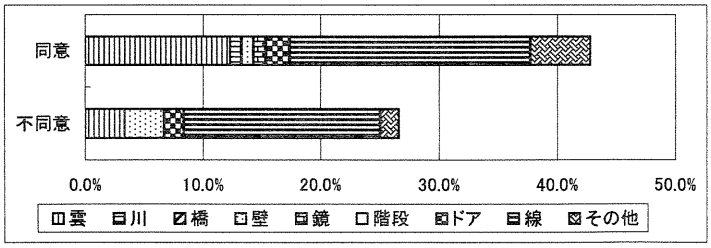
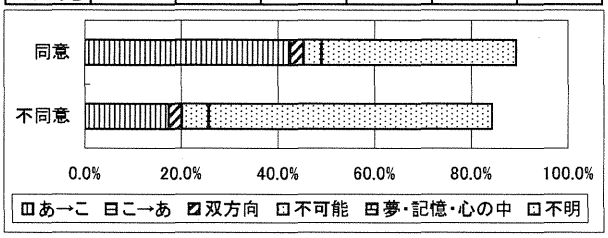
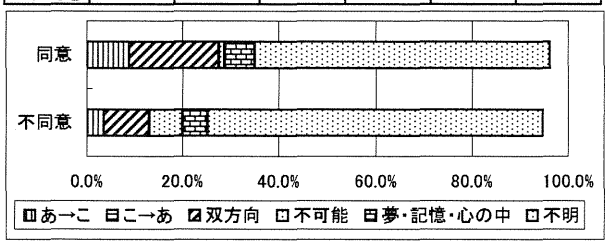


図6-10-1b 項目2「死後の世界ある」と「境界の種類」

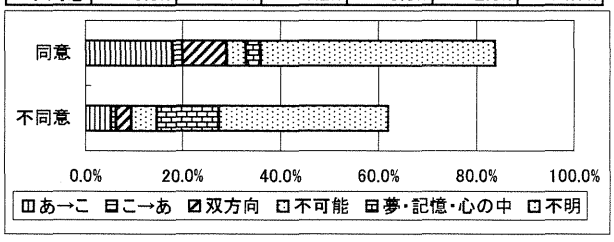
		コミュニケーション					
		可能か不可能かが明らか				心の中・夢・記憶・	
		あ→こ	こ→あ	双方向	不可能		不明
日本	Q4-2	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能	夢・記憶	不明
	同意	92	0	6	8		87
	不同意	19	0	3	6		64
	同意	42.6%	0.0%	2.8%	3.7%	0.0%	40.3%
	不同意	17.4%	0.0%	2.8%	5.5%	0.0%	58.7%



	Q4-2	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能	夢・記憶	不明
ベトナム	同意	7		15	1	5	49
	不同意	4		11	8	6	80
	同意	8.8%	0.0%	18.8%	1.3%	6.3%	61.3%
	不同意	3.5%	0.0%	9.6%	7.0%	5.2%	69.6%



	Q4-2	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能	夢・記憶	不明
フランス	同意	18	2	9	4	3	48
	不同意	5	1	3	5	12	33
	同意	18.0%	2.0%	9.0%	4.0%	3.0%	48.0%
	不同意	5.3%	1.1%	3.2%	5.3%	12.6%	34.7%



	Q4-2	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能	夢・記憶	不明
イギリス	同意	19	4	8	5		57
	不同意	10		3	3	5	24
	同意	19.4%	4.1%	8.2%	5.1%	0.0%	58.2%
	不同意	16.7%	0.0%	5.0%	5.0%	8.3%	40.0%

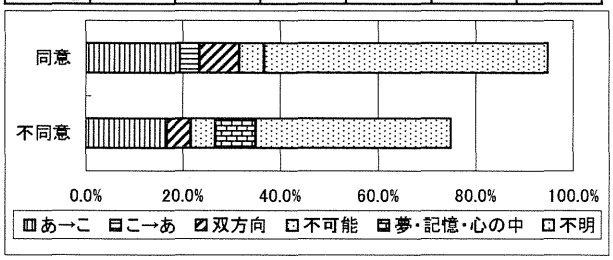
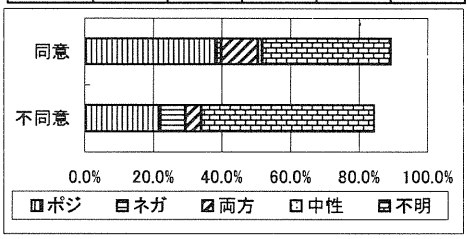


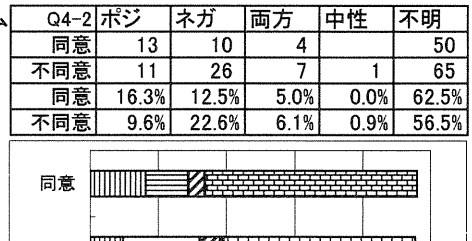
図6-10-1c 項目2「死後の世界ある」と「コミュニケーション」

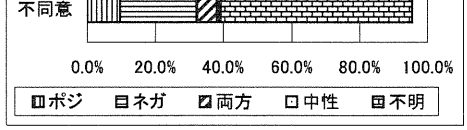
感情評価　ポジAND/ORネガ

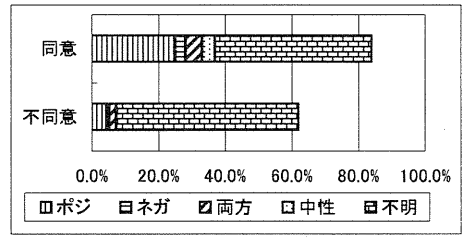
あの世

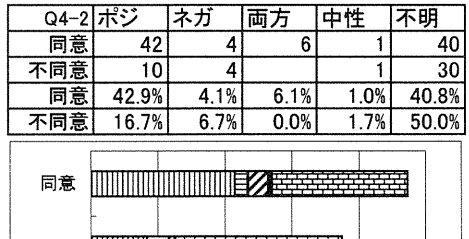
	ポジ	ネガ	両方	中性	不明
日本					
同意	83	3	23	3	81
不同意	24	8	5	0	55
同意	38.4%	1.4%	10.6%	1.4%	37.5%
不同意	22.0%	7.3%	4.6%	0.0%	50.5%
ベトナム					
同意	13	10	4		50
不同意	11	26	7	1	65
同意	16.3%	12.5%	5.0%	0.0%	62.5%
不同意	9.6%	22.6%	6.1%	0.9%	56.5%
フランス					
同意	25	3	5	4	47
不同意	4	1	2		52
同意	25.0%	3.0%	5.0%	4.0%	47.0%
不同意	4.2%	1.1%	2.1%	0.0%	54.7%
イギリス					
同意	42	4	6	1	40
不同意	10	4		1	30
同意	42.9%	4.1%	6.1%	1.0%	40.8%
不同意	16.7%	6.7%	0.0%	1.7%	50.0%

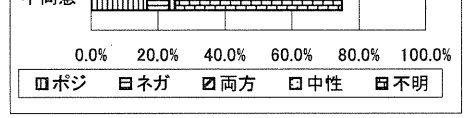






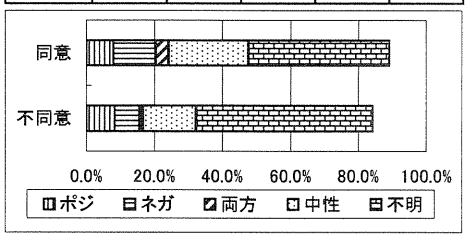


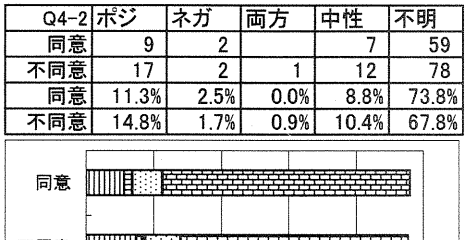


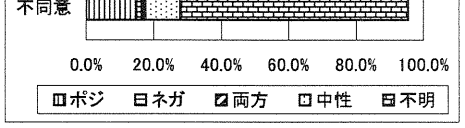


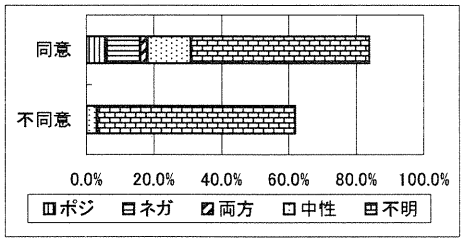
この世

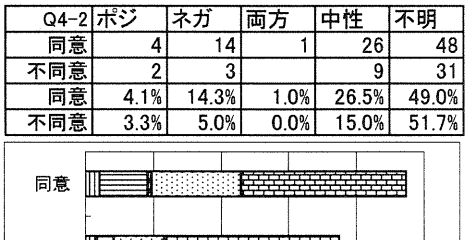
	ポジ	ネガ	両方	中性	不明
日本					
同意	17	27	8	51	90
不同意	9	8	1	17	57
同意	7.9%	12.5%	3.7%	23.6%	41.7%
不同意	8.3%	7.3%	0.9%	15.6%	52.3%
ベトナム					
同意	9	2		7	59
不同意	17	2	1	12	78
同意	11.3%	2.5%	0.0%	8.8%	73.8%
不同意	14.8%	1.7%	0.9%	10.4%	67.8%
フランス					
同意	6	10	2	13	53
不同意				3	56
同意	6.0%	10.0%	2.0%	13.0%	53.0%
不同意	0.0%	0.0%	0.0%	3.2%	58.9%
イギリス					
同意	4	14	1	26	48
不同意	2	3		9	31
同意	4.1%	14.3%	1.0%	26.5%	49.0%
不同意	3.3%	5.0%	0.0%	15.0%	51.7%











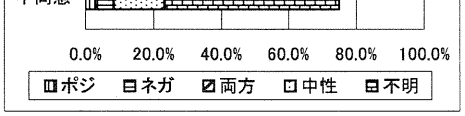
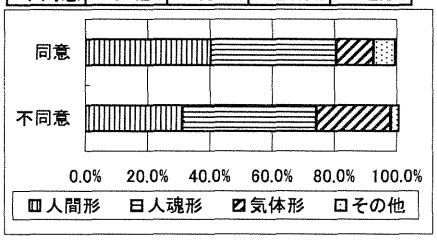


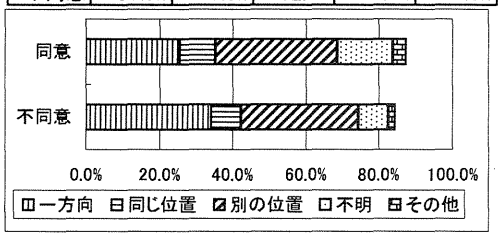
図6-10-1d　項目2「死後の世界ある」と「感情評価」

日本

Q4-2	たましいの形 人間形	人魂形	気体形	その他
同意	87	87	26	15
不同意	34	47	26	3
同意	40.3%	40.3%	12.0%	6.9%
不同意	31.2%	43.1%	23.9%	2.8%

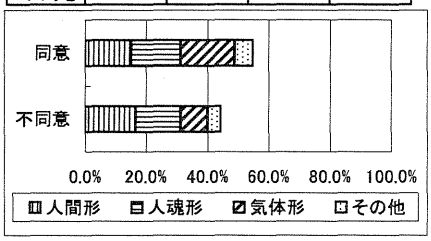


Q4-2	往来のパターン 一方向	双方向 同じ位置	別の位置	不明	その他
同意	55	21	72	33	8
不同意	37	9	35	9	2
同意	25.5%	9.7%	33.3%	15.3%	3.7%
不同意	33.9%	8.3%	32.1%	8.3%	1.8%

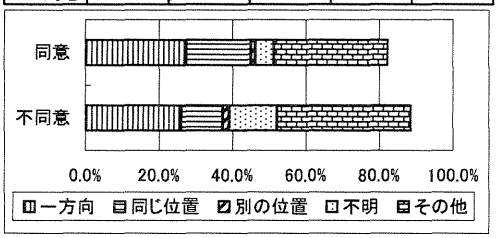


ベトナム

Q4-2	人間形	人魂形	気体形	その他
同意	12	13	14	5
不同意	19	17	10	5
同意	15.0%	16.3%	17.5%	6.3%
不同意	16.5%	14.8%	8.7%	4.3%

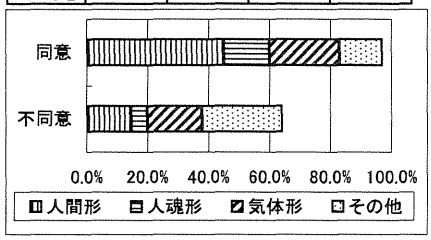


Q4-2	一方向	同じ位置	別の位置	不明	その他
同意	22	14	1	4	25
不同意	30	13	2	15	42
同意	27.5%	17.5%	1.3%	5.0%	31.3%
不同意	26.1%	11.3%	1.7%	13.0%	36.5%

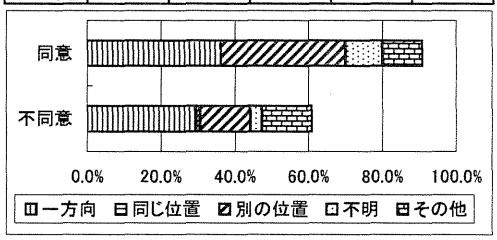


フランス

Q4-2	人間形	人魂形	気体形	その他
同意	45	15	23	14
不同意	14	5	17	25
同意	45.0%	15.0%	23.0%	14.0%
不同意	14.7%	5.3%	17.9%	26.3%

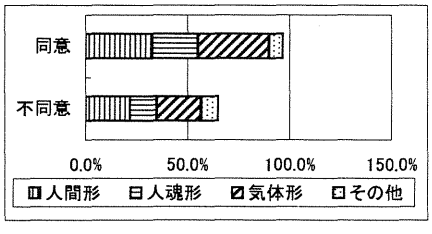


Q4-2	一方向	同じ位置	別の位置	不明	その他
同意	36	0	34	10	11
不同意	28	1	13	3	13
同意	36.0%	0.0%	34.0%	10.0%	11.0%
不同意	29.5%	1.1%	13.7%	3.2%	13.7%



イギリス

Q4-2	人間形	人魂形	気体形	その他
同意	32	22	34	7
不同意	13	8	13	5
同意	32.7%	22.4%	34.7%	7.1%
不同意	21.7%	13.3%	21.7%	8.3%



Q4-2	一方向	同じ位置	別の位置	不明	その他
同意	46	3	18	3	22
不同意	15	2	8	0	18
同意	46.9%	3.1%	18.4%	3.1%	22.4%
不同意	25.0%	3.3%	13.3%	0.0%	30.0%

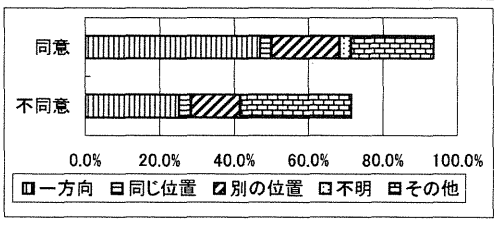
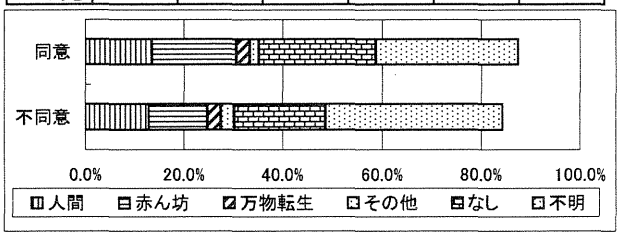


図6-10-1e 項目2「死後の世界ある」と「たましいの形」・「往来のパターン」

	生まれ変わり					
	あり				なし	不明
	人間	赤ん坊	万物転生	その他		

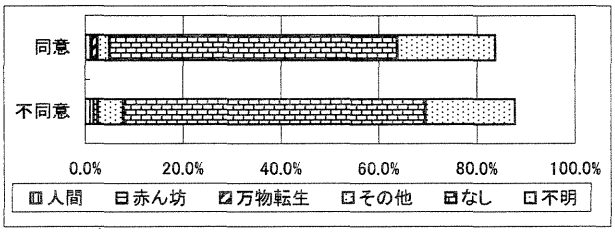
日本

Q4-2	人間	赤ん坊	万物転生	その他	なし	不明
同意	29	37	6	4	51	62
不同意	14	13	3	3	20	39
同意	13.4%	17.1%	2.8%	1.9%	23.6%	28.7%
不同意	12.8%	11.9%	2.8%	2.8%	18.3%	35.8%



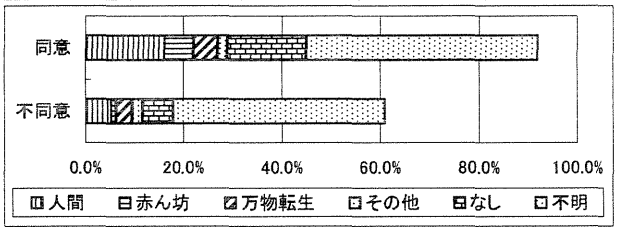
ベトナム

Q4-2	人間	赤ん坊	万物転生	その他	なし	不明
同意	1		1	2	47	16
不同意	2	1		6	71	21
同意	1.3%	0.0%	1.3%	2.5%	58.8%	20.0%
不同意	1.7%	0.9%	0.0%	5.2%	61.7%	18.3%



フランス

Q4-2	人間	赤ん坊	万物転生	その他	なし	不明
同意	16	6	5	2	16	47
不同意	5	1	3	2	6	41
同意	16.0%	6.0%	5.0%	2.0%	16.0%	47.0%
不同意	5.3%	1.1%	3.2%	2.1%	6.3%	43.2%



イギリス

Q4-2	人間	赤ん坊	万物転生	その他	なし	不明
同意	10	5	3	2	68	6
不同意	3	2	2	1	33	3
同意	10.2%	5.1%	3.1%	2.0%	69.4%	6.1%
不同意	5.0%	3.3%	3.3%	1.7%	55.0%	5.0%

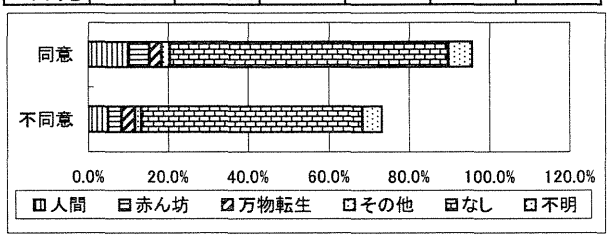
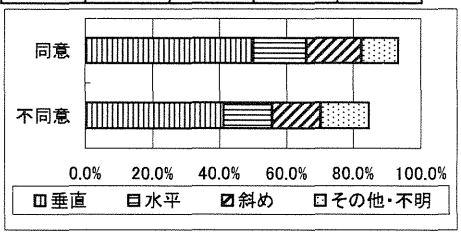


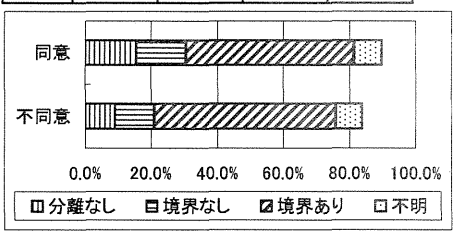
図6-10-1f 項目2「死後の世界ある」と「生まれ変わり」

日本
124
200

Q4-3	垂直	水平	斜め	その他・不明
不同意	51	18	18	18
同意	100	32	33	22
不同意	41.1%	14.5%	14.5%	14.5%
同意	50.0%	16.0%	16.5%	11.0%

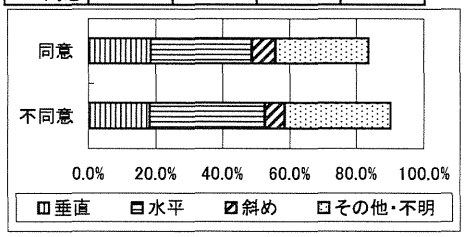


Q4-3	分離なし	境界なし	境界あり	不明
不同意	11	15	68	10
同意	31	30	102	17
不同意	8.9%	12.1%	54.8%	8.1%
同意	15.5%	15.0%	51.0%	8.5%

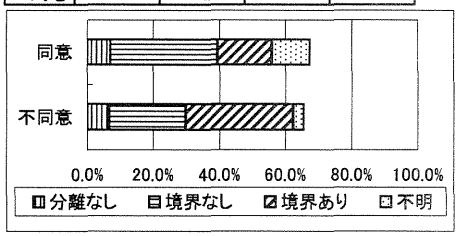


ベトナム
154
43

Q4-3	垂直	水平	斜め	その他・不明
不同意	28	53	9	49
同意	8	13	3	12
不同意	18.2%	34.4%	5.8%	31.8%
同意	18.6%	30.2%	7.0%	27.9%

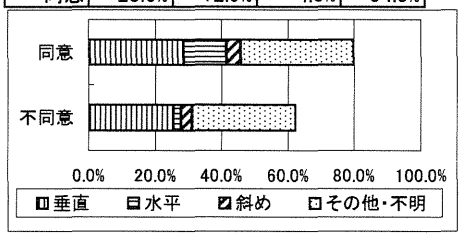


Q4-3	分離なし	境界なし	境界あり	不明
不同意	10	36	50	5
同意	3	14	7	5
不同意	6.5%	23.4%	32.5%	3.2%
同意	7.0%	32.6%	16.3%	11.6%

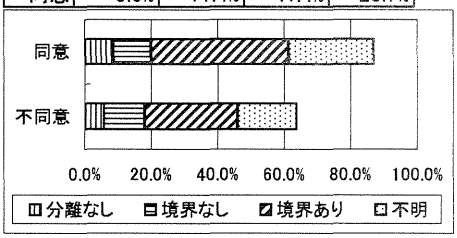


フランス
122
70

Q4-3	垂直	水平	斜め	その他・不明
不同意	31	3	4	38
同意	20	9	3	24
不同意	25.4%	2.5%	3.3%	31.1%
同意	28.6%	12.9%	4.3%	34.3%

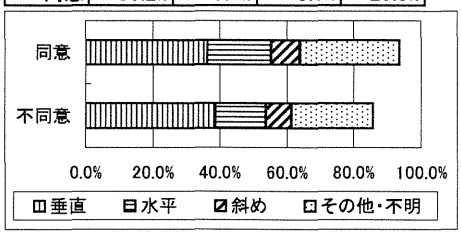


Q4-3	分離なし	境界なし	境界あり	不明
不同意	7	15	34	22
同意	6	8	29	18
不同意	5.7%	12.3%	27.9%	18.0%
同意	8.6%	11.4%	41.4%	25.7%



イギリス
106
47

Q4-3	垂直	水平	斜め	その他・不明
不同意	41	16	8	26
同意	17	9	4	14
不同意	38.7%	15.1%	7.5%	24.5%
同意	36.2%	19.1%	8.5%	29.8%



Q4-3	分離なし	境界なし	境界あり	不明
不同意	5	22	39	19
同意	4	12	14	15
不同意	4.7%	20.8%	36.8%	17.9%
同意	8.5%	25.5%	29.8%	31.9%

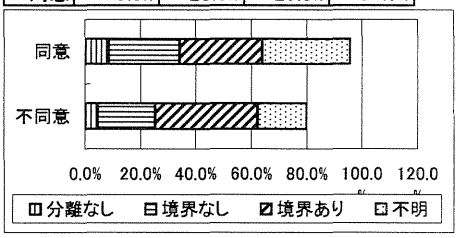
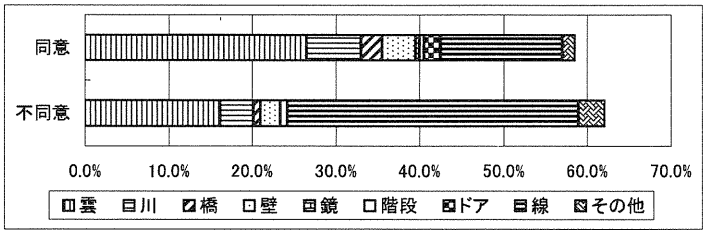
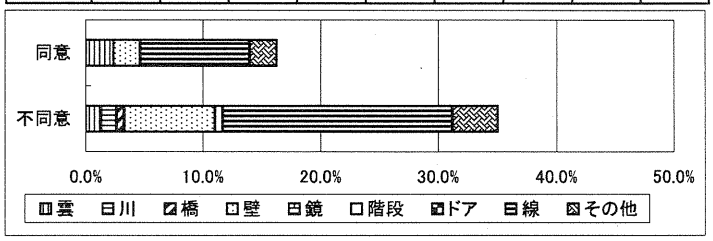


図6-10-2a 項目3「生まれ変わり」と「『あの世の人』がいる位置」・「分離・境界の有無」

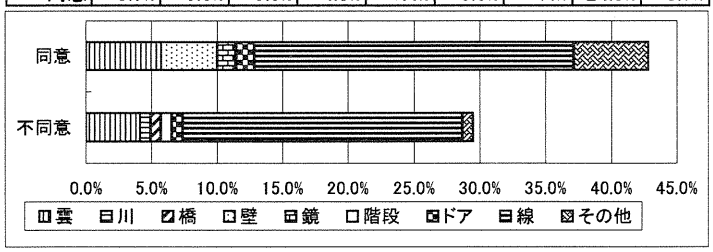
		分離あり 境界あり								
		雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
日本	Q4-3	雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
	不同意	20	5	1	3		1		43	4
	同意	53	13	5	8	1	1	4	29	3
	不同意	16.1%	4.0%	0.8%	2.4%	0.0%	0.8%	0.0%	34.7%	3.2%
	同意	26.5%	6.5%	2.5%	4.0%	0.5%	0.5%	2.0%	14.5%	1.5%



ベトナム	Q4-3	雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
	不同意	2	2	1	12		1		30	6
	同意	1			1				4	1
	不同意	1.3%	1.3%	0.6%	7.8%	0.0%	0.6%	0.0%	19.5%	3.9%
	同意	2.3%	0.0%	0.0%	2.3%	0.0%	0.0%	0.0%	9.3%	2.3%



フランス	Q4-3	雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
	不同意	5	1	1			1	1	26	1
	同意	4			3	1		1	17	4
	不同意	4.1%	0.8%	0.8%	0.0%	0.0%	0.8%	0.8%	21.3%	0.8%
	同意	5.7%	0.0%	0.0%	4.3%	1.4%	0.0%	1.4%	24.3%	5.7%



イギリス	Q4-3	雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
	不同意	11	1		1	1		3	19	3
	同意	2			2				9	3
	不同意	10.4%	0.9%	0.0%	0.9%	0.9%	0.0%	2.8%	17.9%	2.8%
	同意	4.3%	0.0%	0.0%	4.3%	0.0%	0.0%	0.0%	19.1%	6.4%

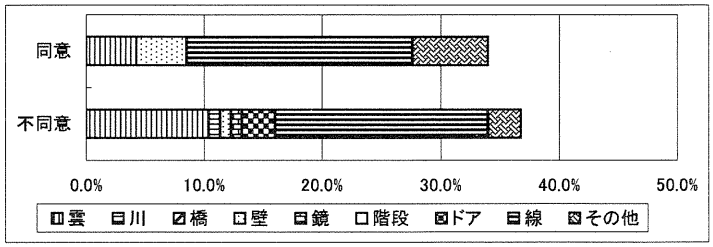
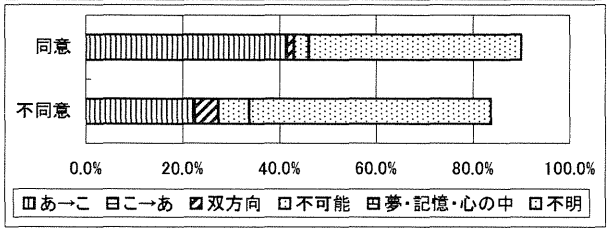


図6-10-2b 項目3「生まれ変わり」と「境界の種類」

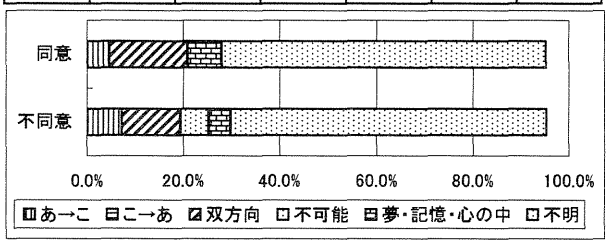
日本

	コミュニケーション					
	可能か不可能かが明らか				夢・記憶・心の中	不明
	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能		
Q4-3	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能	夢・記憶	不明
不同意	28	0	6	8		62
同意	83	0	3	6		88
不同意	22.6%	0.0%	4.8%	6.5%	0.0%	50.0%
同意	41.5%	0.0%	1.5%	3.0%	0.0%	44.0%



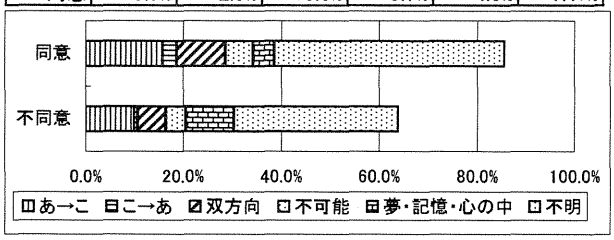
ベトナム

Q4-3	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能	夢・記憶	不明
不同意	11		19	9	7	101
同意	2		7		3	29
不同意	7.1%	0.0%	12.3%	5.8%	4.5%	65.6%
同意	4.7%	0.0%	16.3%	0.0%	7.0%	67.4%



フランス

Q4-3	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能	夢・記憶	不明
不同意	12	1	7	5	12	41
同意	11	2	7	4	3	33
不同意	9.8%	0.8%	5.7%	4.1%	9.8%	33.6%
同意	15.7%	2.9%	10.0%	5.7%	4.3%	47.1%



イギリス

Q4-3	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能	夢・記憶	不明
不同意	17	3	7	6	5	51
同意	8	1	4	2		29
不同意	16.0%	2.8%	6.6%	5.7%	4.7%	48.1%
同意	17.0%	2.1%	8.5%	4.3%	0.0%	61.7%

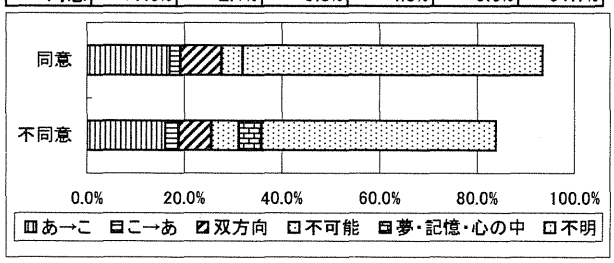
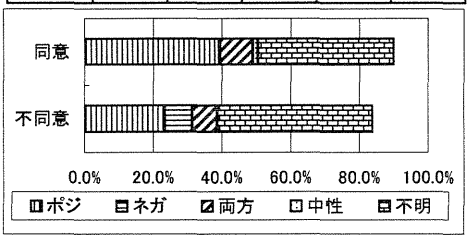


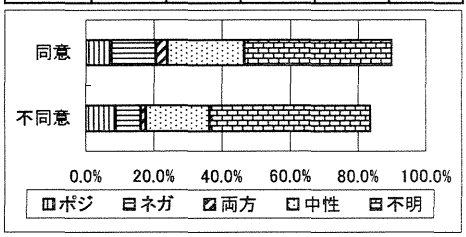
図6-10-2c 項目3「生まれ変わり」と「コミュニケーション」

感情評価 ポジAND/ORネガ

日本

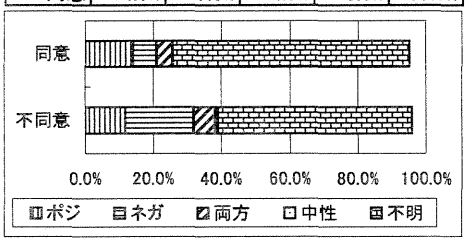
	あの世					この世				
Q4-3	ポジ	ネガ	両方	中性	不明	ポジ	ネガ	両方	中性	不明
不同意	29	10	9	0	56	11	9	2	23	59
同意	78	1	19	3	79	15	26	7	45	87
不同意	23.4%	8.1%	7.3%	0.0%	45.2%	8.9%	7.3%	1.6%	18.5%	47.6%
同意	39.0%	0.5%	9.5%	1.5%	39.5%	7.5%	13.0%	3.5%	22.5%	43.5%

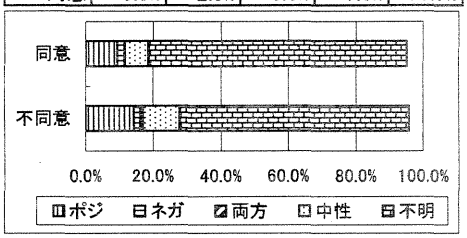




ベトナム

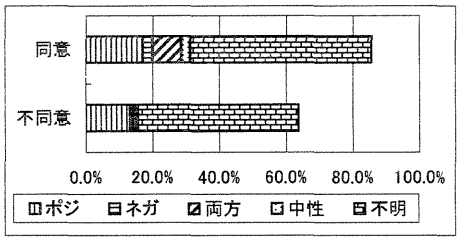
Q4-3	ポジ	ネガ	両方	中性	不明	Q4-3	ポジ	ネガ	両方	中性	不明
不同意	18	31	10	1	88	不同意	22	3	1	17	105
同意	6	3	2		30	同意	4	1		3	33
不同意	11.7%	20.1%	6.5%	0.6%	57.1%	不同意	14.3%	1.9%	0.6%	11.0%	68.2%
同意	14.0%	7.0%	4.7%	0.0%	69.8%	同意	9.3%	2.3%	0.0%	7.0%	76.7%

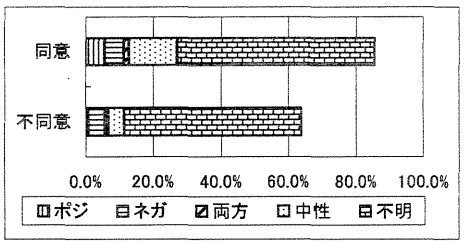




フランス

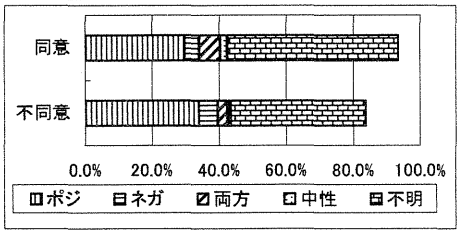
Q4-3	ポジ	ネガ	両方	中性	不明	Q4-3	ポジ	ネガ	両方	中性	不明
不同意	16	1	1	1	59	不同意	1	6	1	6	64
同意	12	2	6	2	38	同意	4	4	1	10	41
不同意	13.1%	0.8%	0.8%	0.8%	48.4%	不同意	0.8%	4.9%	0.8%	4.9%	52.5%
同意	17.1%	2.9%	8.6%	2.9%	54.3%	同意	5.7%	5.7%	1.4%	14.3%	58.6%





イギリス

Q4-3	ポジ	ネガ	両方	中性	不明	Q4-3	ポジ	ネガ	両方	中性	不明
不同意	36	6	3	1	43	不同意	4	10		25	50
同意	14	2	3	1	24	同意	1	7	1	9	26
不同意	34.0%	5.7%	2.8%	0.9%	40.6%	不同意	3.8%	9.4%	0.0%	23.6%	47.2%
同意	29.8%	4.3%	6.4%	2.1%	51.1%	同意	2.1%	14.9%	2.1%	19.1%	55.3%



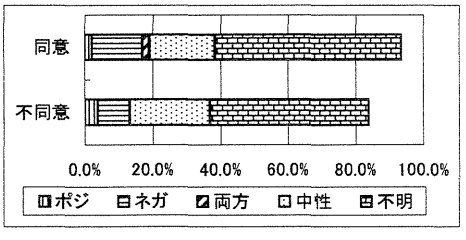
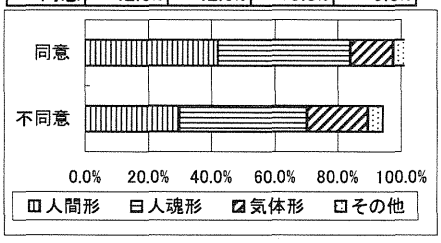


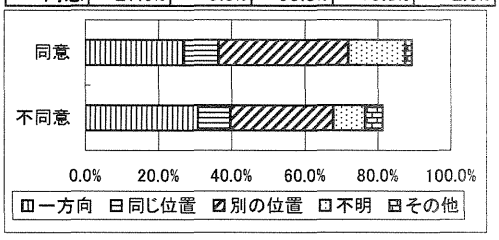
図6-10-2d 項目3「生まれ変わり」と「感情評価」

日本

	たましいの形			
	人間形	人魂形	気体形	その他
Q4-3	人間形	人魂形	気体形	その他
不同意	37	50	24	6
同意	84	84	27	12
不同意	29.8%	40.3%	19.4%	4.8%
同意	42.0%	42.0%	13.5%	6.0%

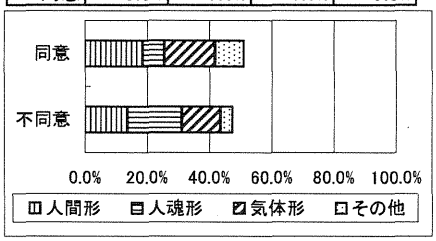


	往来のパターン				
		双方向			
	一方向	同じ位置	別の位置	不明	その他
Q4-3	一方向	同じ位置	別の位置	不明	その他
不同意	38	11	35	11	6
同意	54	19	71	31	4
不同意	30.6%	8.9%	28.2%	8.9%	4.8%
同意	27.0%	9.5%	35.5%	15.5%	2.0%

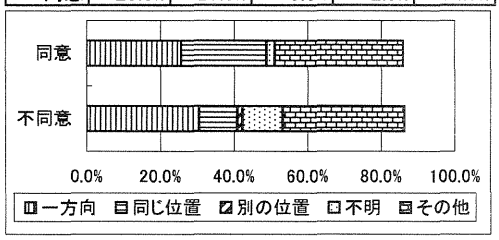


ベトナム

Q4-3	人間形	人魂形	気体形	その他
不同意	21	27	19	6
同意	8	3	7	4
不同意	13.6%	17.5%	12.3%	3.9%
同意	18.6%	7.0%	16.3%	9.3%

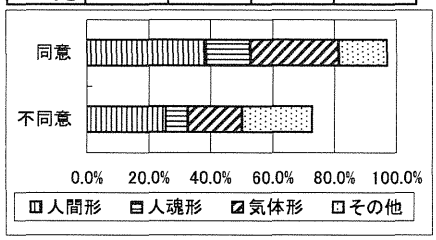


Q4-3	一方向	同じ位置	別の位置	不明	その他
不同意	47	16	2	17	51
同意	11	10		1	15
不同意	30.5%	10.4%	1.3%	11.0%	33.1%
同意	25.6%	23.3%	0.0%	2.3%	34.9%

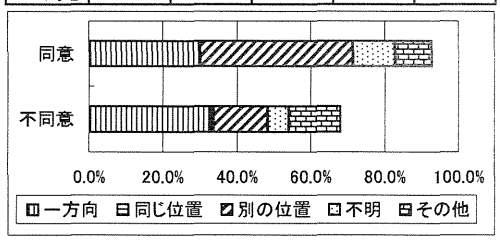


フランス

Q4-3	人間形	人魂形	気体形	その他
不同意	31	9	21	28
同意	27	10	20	11
不同意	25.4%	7.4%	17.2%	23.0%
同意	38.6%	14.3%	28.6%	15.7%

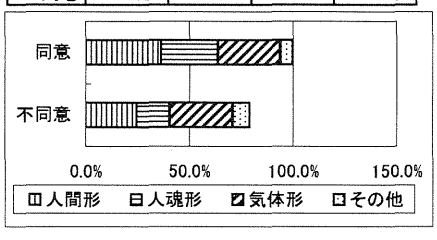


Q4-3	一方向	同じ位置	別の位置	不明	その他
不同意	40	1	18	7	17
同意	21	0	29	8	7
不同意	32.8%	0.8%	14.8%	5.7%	13.9%
同意	30.0%	0.0%	41.4%	11.4%	10.0%



イギリス

Q4-3	人間形	人魂形	気体形	その他
不同意	26	17	32	9
同意	17	13	14	3
不同意	24.5%	16.0%	30.2%	8.5%
同意	36.2%	27.7%	29.8%	6.4%



Q4-3	一方向	同じ位置	別の位置	不明	その他
不同意	46	2	10	1	28
同意	14	3	15	2	10
不同意	43.4%	1.9%	9.4%	0.9%	26.4%
同意	29.8%	6.4%	31.9%	4.3%	21.3%

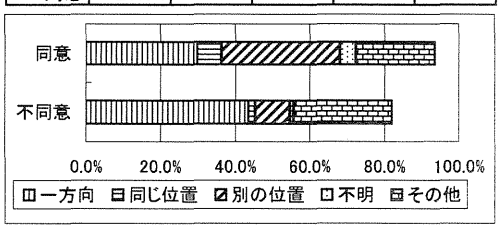
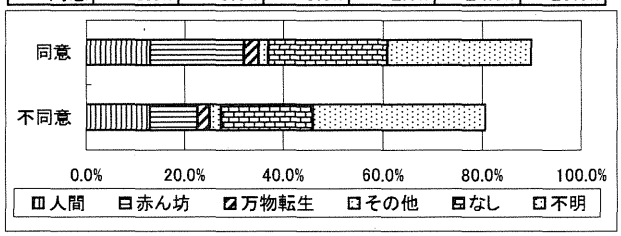
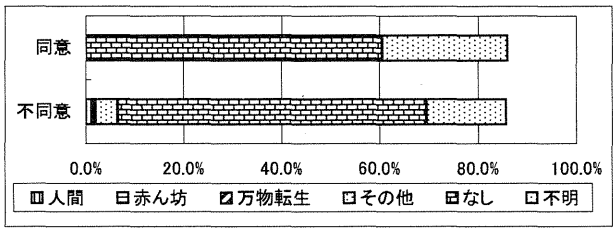


図6-10-2e 項目3「生まれ変わり」と「たましいの形」・「往来のパターン」

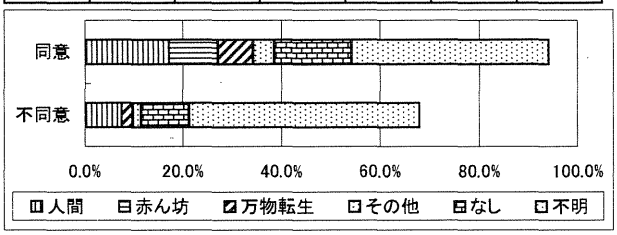
		生まれ変わり					
		あり				なし	不明
		人間	赤ん坊	万物転生	その他		
日本	Q4-3	人間	赤ん坊	万物転生	その他	なし	不明
	不同意	16	12	3	3	23	43
	同意	26	38	6	4	48	58
	不同意	12.9%	9.7%	2.4%	2.4%	18.5%	34.7%
	同意	13.0%	19.0%	3.0%	2.0%	24.0%	29.0%



	Q4-3	人間	赤ん坊	万物転生	その他	なし	不明
ベトナム	不同意	2	1		7	97	25
	同意					26	11
	不同意	1.3%	0.6%	0.0%	4.5%	63.0%	16.2%
	同意	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	60.5%	25.6%



	Q4-3	人間	赤ん坊	万物転生	その他	なし	不明
フランス	不同意	9	0	3	2	12	57
	同意	12	7	5	3	11	28
	不同意	7.4%	0.0%	2.5%	1.6%	9.8%	46.7%
	同意	17.1%	10.0%	7.1%	4.3%	15.7%	40.0%



	Q4-3	人間	赤ん坊	万物転生	その他	なし	不明
イギリス	不同意	2	4	2	1	74	5
	同意	11	3	3	1	24	4
	不同意	1.9%	3.8%	1.9%	0.9%	69.8%	4.7%
	同意	23.4%	6.4%	6.4%	2.1%	51.1%	8.5%

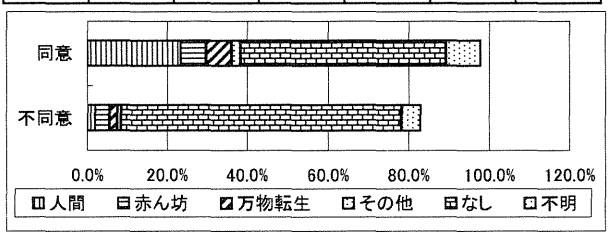
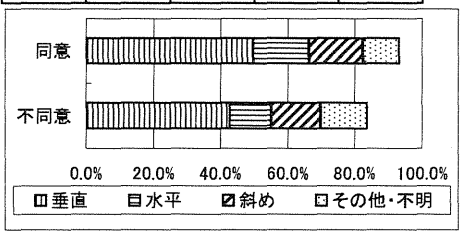


図6-10-2f 項目3「生まれ変わり」と「生まれ変わり」

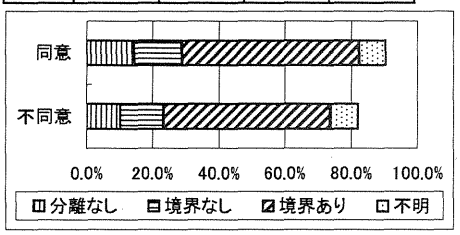
次頁に続く

日本
181
129

Q4-15	垂直	水平	斜め	その他・不明
同意	90	30	29	20
不同意	55	16	19	18
同意	49.7%	16.6%	16.0%	11.0%
不同意	42.6%	12.4%	14.7%	14.0%

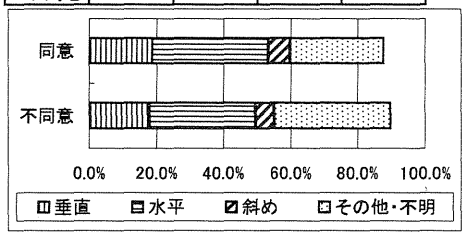


Q4-15	分離なし	境界なし	境界あり	不明
同意	26	26	97	15
不同意	13	17	65	11
同意	14.4%	14.4%	53.6%	8.3%
不同意	10.1%	13.2%	50.4%	8.5%

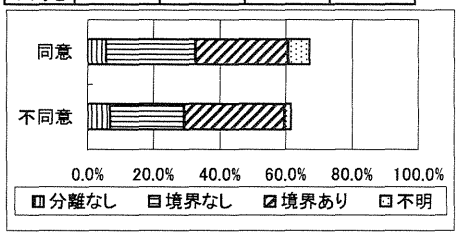


ベトナム
107
89

Q4-15	垂直	水平	斜め	その他・不明
同意	20	37	7	30
不同意	16	28	5	31
同意	18.7%	34.6%	6.5%	28.0%
不同意	18.0%	31.5%	5.6%	34.8%

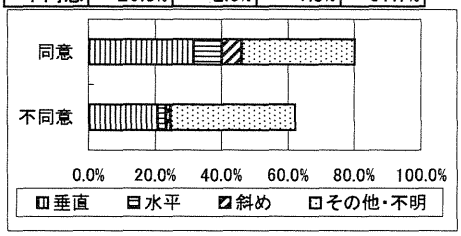


Q4-15	分離なし	境界なし	境界あり	不明
同意	6	29	30	7
不同意	6	20	27	2
同意	5.6%	27.1%	28.0%	6.5%
不同意	6.7%	22.5%	30.3%	2.2%

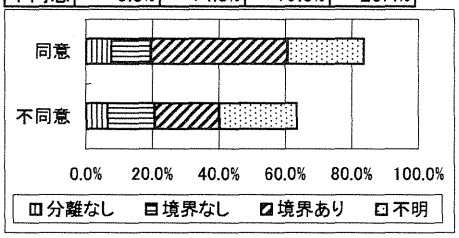


フランス
117
77

Q4-15	垂直	水平	斜め	その他・不明
同意	37	10	7	40
不同意	16	2	1	29
同意	31.6%	8.5%	6.0%	34.2%
不同意	20.8%	2.6%	1.3%	37.7%

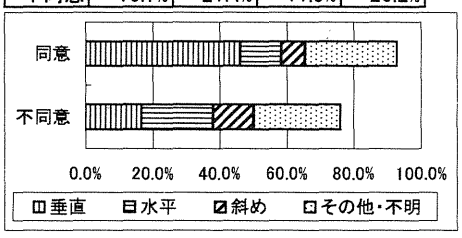


Q4-15	分離なし	境界なし	境界あり	不明
同意	9	14	48	27
不同意	5	11	15	18
同意	7.7%	12.0%	41.0%	23.1%
不同意	6.5%	14.3%	19.5%	23.4%



イギリス
113
42

Q4-15	垂直	水平	斜め	その他・不明
同意	52	14	8	31
不同意	7	9	5	11
同意	46.0%	12.4%	7.1%	27.4%
不同意	16.7%	21.4%	11.9%	26.2%



Q4-15	分離なし	境界なし	境界あり	不明
同意	8	24	44	29
不同意	1	10	12	7
同意	7.1%	21.2%	38.9%	25.7%
不同意	2.4%	23.8%	28.6%	16.7%

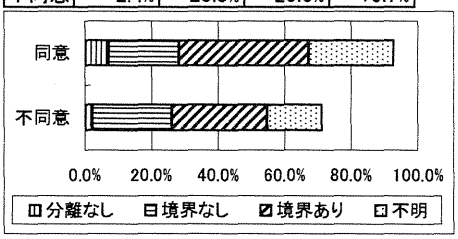
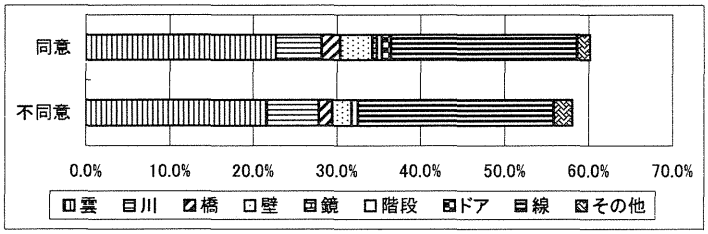
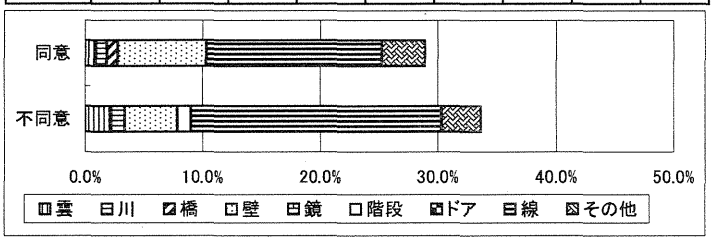


図6-10-3a 項目15「魂残る」と「『あの世の人』がいる位置」・「分離・境界の有無」

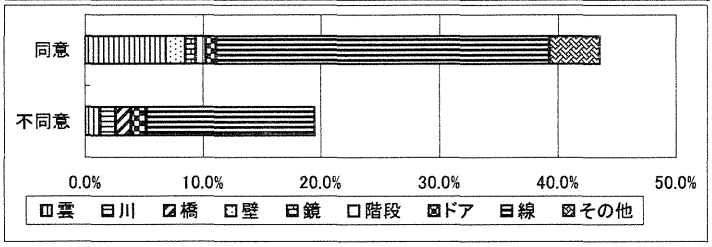
		分離あり 境界あり								
		雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
日本	Q4-15	雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
	同意	41	10	4	7	1	1	2	40	3
	不同意	28	8	2	3		1		30	3
	同意	22.7%	5.5%	2.2%	3.9%	0.6%	0.6%	1.1%	22.1%	1.7%
	不同意	21.7%	6.2%	1.6%	2.3%	0.0%	0.8%	0.0%	23.3%	2.3%



ベトナム	Q4-15	雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
	同意	1	1	1	8				16	4
	不同意	2	1		4		1		19	3
	同意	0.9%	0.9%	0.9%	7.5%	0.0%	0.0%	0.0%	15.0%	3.7%
	不同意	2.2%	1.1%	0.0%	4.5%	0.0%	1.1%	0.0%	21.3%	3.4%



フランス	Q4-15	雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
	同意	8			2	1	1	1	33	5
	不同意	1	1	1				1	11	
	同意	6.8%	0.0%	0.0%	1.7%	0.9%	0.9%	0.9%	28.2%	4.3%
	不同意	1.3%	1.3%	1.3%	0.0%	0.0%	0.0%	1.3%	14.3%	0.0%



イギリス	Q4-15	雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
	同意	11	1		3	1		1	23	4
	不同意	2						2	7	2
	同意	9.7%	0.9%	0.0%	2.7%	0.9%	0.0%	0.9%	20.4%	3.5%
	不同意	4.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	4.8%	16.7%	4.8%

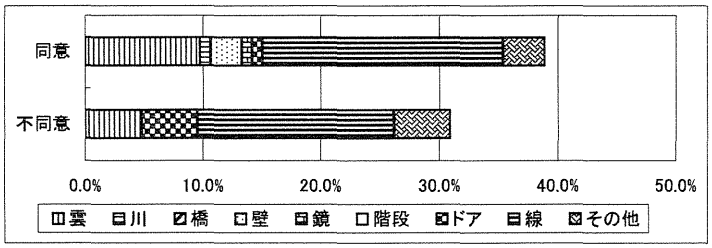
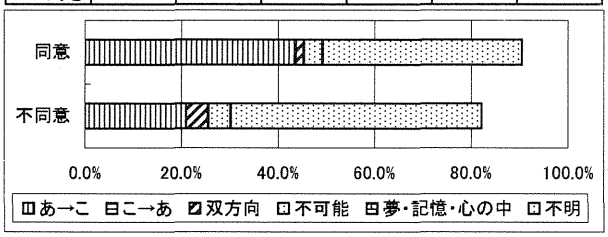


図6-10-3b 項目15「魂残る」と「境界の種類」

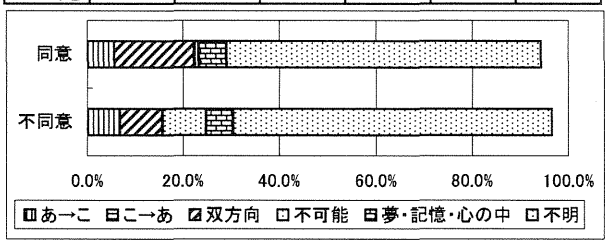
日本

	コミュニケーション					
	可能か不可能かが明らか				夢・記憶・心の中	不明
	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能		
Q4-15	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能	夢・記憶	不明
同意	79	0	3	7		75
不同意	27	0	6	6		67
同意	43.6%	0.0%	1.7%	3.9%	0.0%	41.4%
不同意	20.9%	0.0%	4.7%	4.7%	0.0%	51.9%



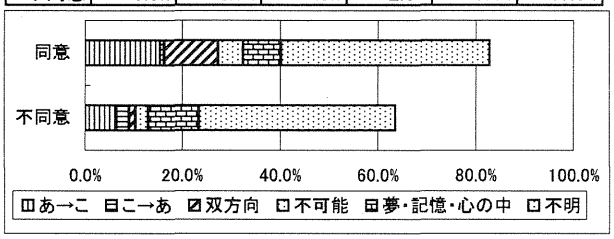
ベトナム

Q4-15	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能	夢・記憶	不明
同意	6		18	1	6	70
不同意	6		8	8	5	59
同意	5.6%	0.0%	16.8%	0.9%	5.6%	65.4%
不同意	6.7%	0.0%	9.0%	9.0%	5.6%	66.3%



フランス

Q4-15	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能	夢・記憶	不明
同意	18	1	13	6	9	50
不同意	5	2	1	2	8	31
同意	15.4%	0.9%	11.1%	5.1%	7.7%	42.7%
不同意	6.5%	2.6%	1.3%	2.6%	10.4%	40.3%



イギリス

Q4-15	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能	夢・記憶	不明
同意	22	3	8	4	3	64
不同意	5		3	4	2	17
同意	19.5%	2.7%	7.1%	3.5%	2.7%	56.6%
不同意	11.9%	0.0%	7.1%	9.5%	4.8%	40.5%

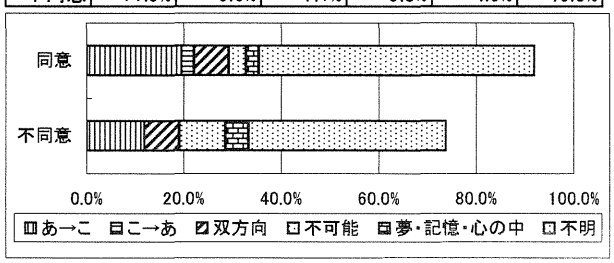
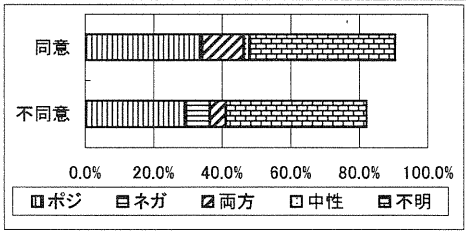


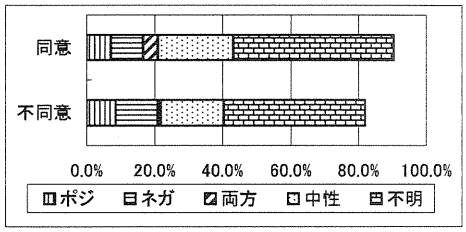
図6-10-3c 項目15「魂残る」と「コミュニケーション」

感情評価　ポジAND/ORネガ

日本

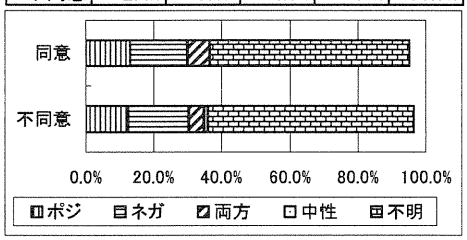
	あの世					この世				
Q4-15	ポジ	ネガ	両方	中性	不明	ポジ	ネガ	両方	中性	不明
同意	61	1	22	3	77	13	17	8	40	86
不同意	38	9	6	0	53	11	16	1	24	54
同意	33.7%	0.6%	12.2%	1.7%	42.5%	7.2%	9.4%	4.4%	22.1%	47.5%
不同意	29.5%	7.0%	4.7%	0.0%	41.1%	8.5%	12.4%	0.8%	18.6%	41.9%

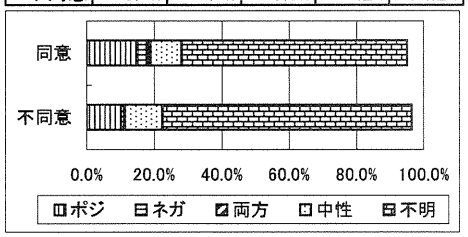




ベトナム

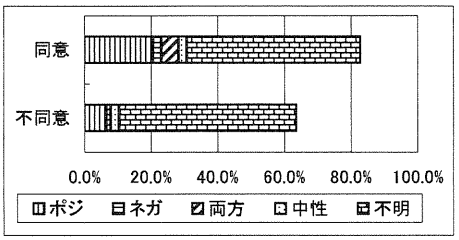
Q4-15	ポジ	ネガ	両方	中性	不明	Q4-15	ポジ	ネガ	両方	中性	不明
同意	14	18	7		63	同意	16	3	1	10	72
不同意	11	16	4	1	54	不同意	9	1		10	66
同意	13.1%	16.8%	6.5%	0.0%	58.9%	同意	15.0%	2.8%	0.9%	9.3%	67.3%
不同意	12.4%	18.0%	4.5%	1.1%	60.7%	不同意	10.1%	1.1%	0.0%	11.2%	74.2%

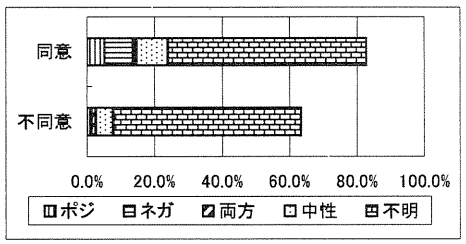




フランス

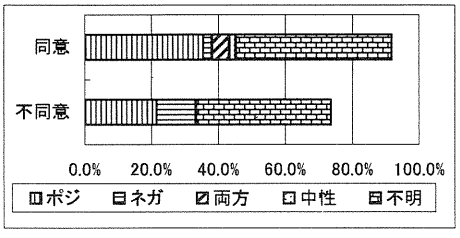
Q4-15	ポジ	ネガ	両方	中性	不明	Q4-15	ポジ	ネガ	両方	中性	不明
同意	24	3	6	3	61	同意	6	10	1	11	69
不同意	5	1		2	41	不同意	1		1	4	43
同意	20.5%	2.6%	5.1%	2.6%	52.1%	同意	5.1%	8.5%	0.9%	9.4%	59.0%
不同意	6.5%	1.3%	0.0%	2.6%	53.2%	不同意	1.3%	0.0%	1.3%	5.2%	55.8%





イギリス

Q4-15	ポジ	ネガ	両方	中性	不明	Q4-15	ポジ	ネガ	両方	中性	不明
同意	40	3	6	2	53	同意	5	13	1	23	62
不同意	9	5			17	不同意		4		10	17
同意	35.4%	2.7%	5.3%	1.8%	46.9%	同意	4.4%	11.5%	0.9%	20.4%	54.9%
不同意	21.4%	11.9%	0.0%	0.0%	40.5%	不同意	0.0%	9.5%	0.0%	23.8%	40.5%



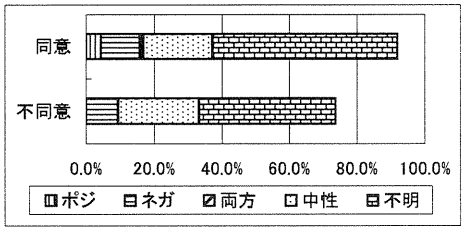
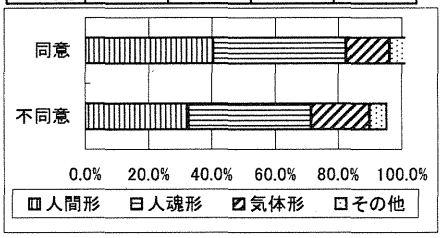


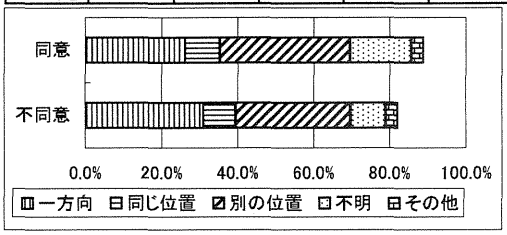
図6-10-3d　項目15「魂残る」と「感情評価」

日本

	たましいの形			
Q4-15	人間形	人魂形	気体形	その他
同意	73	76	25	11
不同意	42	50	24	7
同意	40.3%	42.0%	13.8%	6.1%
不同意	32.6%	38.8%	18.6%	5.4%

	往来のパターン				
		双方向			
Q4-15	一方向	同じ位置	別の位置	不明	その他
同意	47	17	62	29	6
不同意	40	11	39	12	4
同意	26.0%	9.4%	34.3%	16.0%	3.3%
不同意	31.0%	8.5%	30.2%	9.3%	3.1%

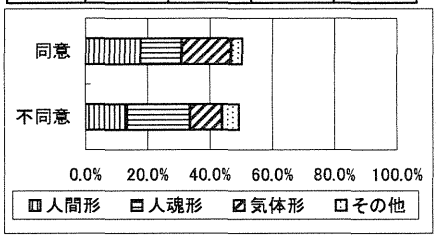


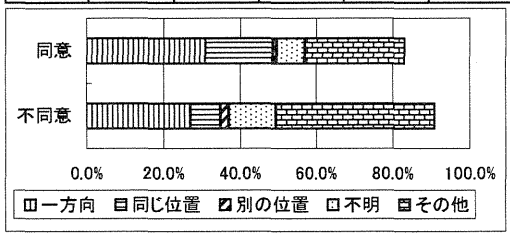


ベトナム

Q4-15	人間形	人魂形	気体形	その他
同意	19	14	17	4
不同意	12	18	9	5
同意	17.8%	13.1%	15.9%	3.7%
不同意	13.5%	20.2%	10.1%	5.6%

Q4-15	一方向	同じ位置	別の位置	不明	その他
同意	33	19	1	8	28
不同意	24	7	2	11	37
同意	30.8%	17.8%	0.9%	7.5%	26.2%
不同意	27.0%	7.9%	2.2%	12.4%	41.6%

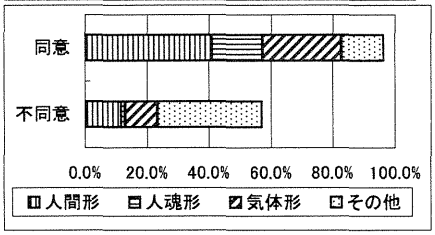


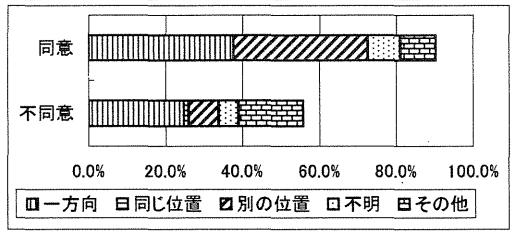


フランス

Q4-15	人間形	人魂形	気体形	その他
同意	48	19	30	16
不同意	9	1	8	26
同意	41.0%	16.2%	25.6%	13.7%
不同意	11.7%	1.3%	10.4%	33.8%

Q4-15	一方向	同じ位置	別の位置	不明	その他
同意	44	0	41	10	11
不同意	19	1	6	4	13
同意	37.6%	0.0%	35.0%	8.5%	9.4%
不同意	24.7%	1.3%	7.8%	5.2%	16.9%

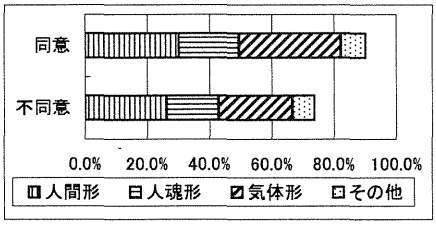




イギリス

Q4-15	人間形	人魂形	気体形	その他
同意	34	22	37	9
不同意	11	7	10	3
同意	30.1%	19.5%	32.7%	8.0%
不同意	26.2%	16.7%	23.8%	7.1%

Q4-15	一方向	同じ位置	別の位置	不明	その他
同意	49	3	22	2	28
不同意	10	2	4	0	12
同意	43.4%	2.7%	19.5%	1.8%	24.8%
不同意	23.8%	4.8%	9.5%	0.0%	28.6%



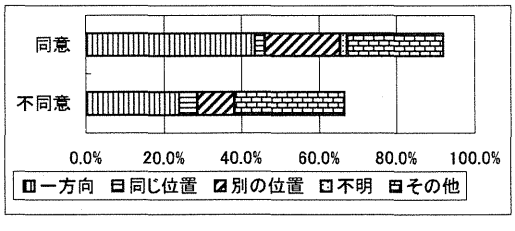
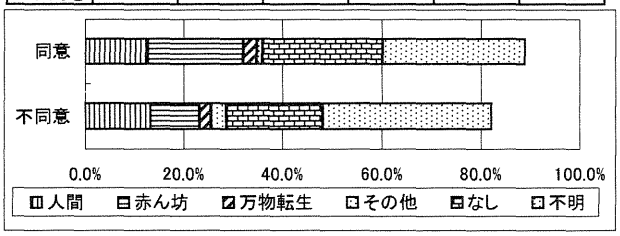


図6-10-3e 項目15「魂残る」と「たましいの形」・「往来のパターン」

	生まれ変わり					
	あり				なし	不明
	人間	赤ん坊	万物転生	その他		

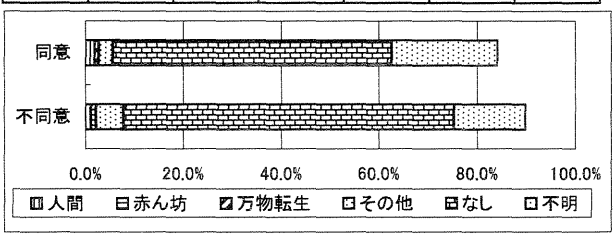
日本

Q4-15	人間	赤ん坊	万物転生	その他	なし	不明
同意	23	35	5	2	44	52
不同意	17	13	3	4	25	44
同意	12.7%	19.3%	2.8%	1.1%	24.3%	28.7%
不同意	13.2%	10.1%	2.3%	3.1%	19.4%	34.1%



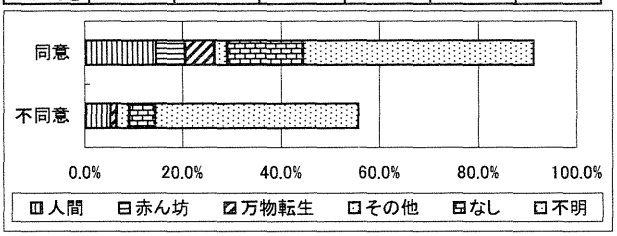
ベトナム

Q4-15	人間	赤ん坊	万物転生	その他	なし	不明
同意	2		1	3	61	23
不同意	1	1		5	60	13
同意	1.9%	0.0%	0.9%	2.8%	57.0%	21.5%
不同意	1.1%	1.1%	0.0%	5.6%	67.4%	14.6%



フランス

Q4-15	人間	赤ん坊	万物転生	その他	なし	不明
同意	17	7	7	3	18	55
不同意	4	0	1	2	4	32
同意	14.5%	6.0%	6.0%	2.6%	15.4%	47.0%
不同意	5.2%	0.0%	1.3%	2.6%	5.2%	41.6%



イギリス

Q4-15	人間	赤ん坊	万物転生	その他	なし	不明
同意	10	5	3	3	77	8
不同意	3	1	2	0	22	1
同意	8.8%	4.4%	2.7%	2.7%	68.1%	7.1%
不同意	7.1%	2.4%	4.8%	0.0%	52.4%	2.4%

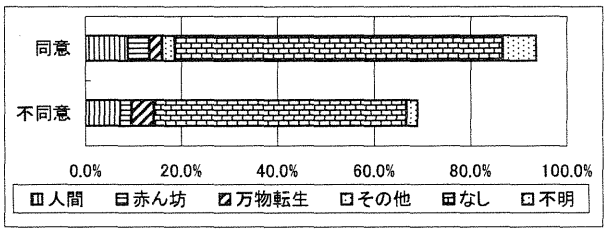
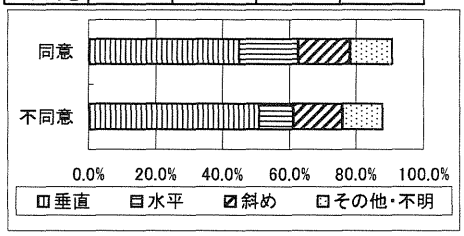


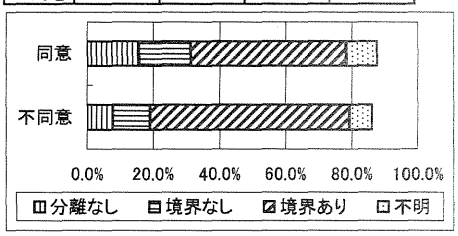
図6-10-3f 項目15「魂残る」と「生まれ変わり」

日本
198
116

Q4-20	垂直	水平	斜め	その他・不明
同意	89	35	31	25
不同意	59	12	17	14
同意	44.9%	17.7%	15.7%	12.6%
不同意	50.9%	10.3%	14.7%	12.1%

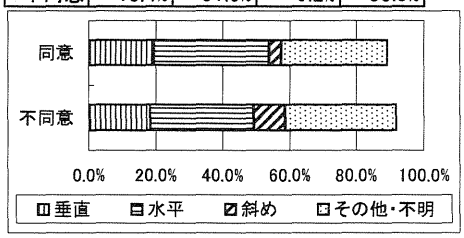


Q4-20	分離なし	境界なし	境界あり	不明
同意	31	31	93	19
不同意	9	13	70	8
同意	15.7%	15.7%	47.0%	9.6%
不同意	7.8%	11.2%	60.3%	6.9%

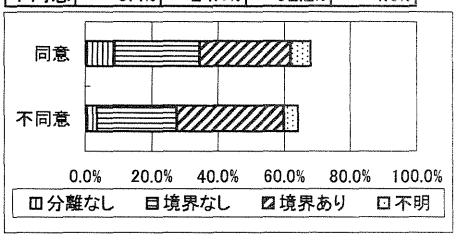


ベトナム
113
87

Q4-20	垂直	水平	斜め	その他・不明
同意	22	39	4	36
不同意	16	27	8	29
同意	19.5%	34.5%	3.5%	31.9%
不同意	18.4%	31.0%	9.2%	33.3%

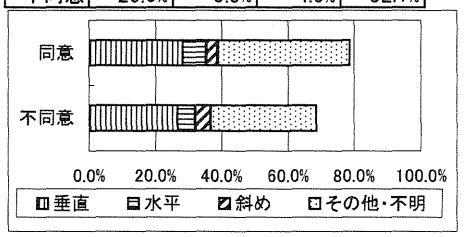


Q4-20	分離なし	境界なし	境界あり	不明
同意	10	29	31	7
不同意	3	21	28	4
同意	8.8%	25.7%	27.4%	6.2%
不同意	3.4%	24.1%	32.2%	4.6%

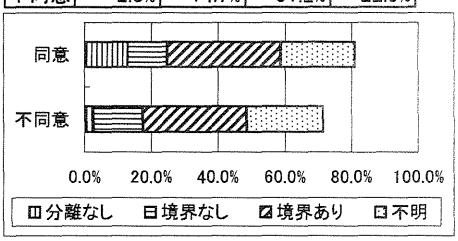


フランス
85
109

Q4-20	垂直	水平	斜め	その他・不明
同意	24	6	3	34
不同意	29	6	5	35
同意	28.2%	7.1%	3.5%	40.0%
不同意	26.6%	5.5%	4.6%	32.1%

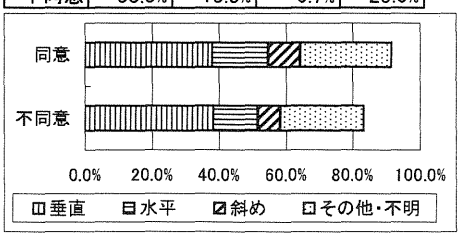


Q4-20	分離なし	境界なし	境界あり	不明
同意	11	10	29	19
不同意	3	16	34	25
同意	12.9%	11.8%	34.1%	22.4%
不同意	2.8%	14.7%	31.2%	22.9%

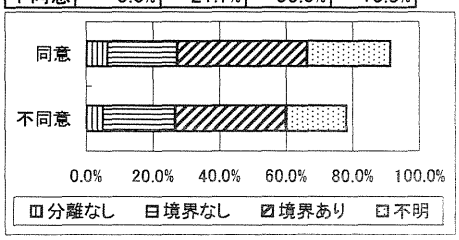


イギリス
95
60

Q4-20	垂直	水平	斜め	その他・不明
同意	36	16	9	26
不同意	23	8	4	15
同意	37.9%	16.8%	9.5%	27.4%
不同意	38.3%	13.3%	6.7%	25.0%



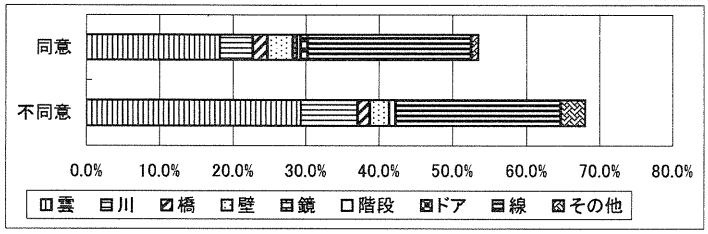
Q4-20	分離なし	境界なし	境界あり	不明
同意	6	20	37	24
不同意	3	13	20	11
同意	6.3%	21.1%	38.9%	25.3%
不同意	5.0%	21.7%	33.3%	18.3%



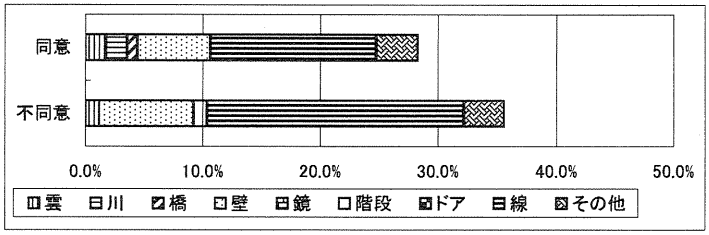
次頁に続く

図6-10-4a 項目20「山川草木に霊」と「『あの世の人』がいる位置」・「分離・境界の有無」

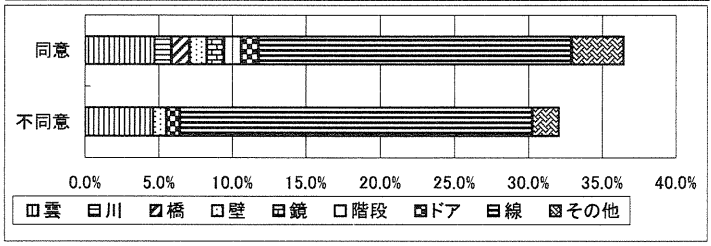
		分離あり 境界あり								
		雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
日本	Q4-20	雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
	同意	36	9	4	7	1	1	2	44	2
	不同意	34	9	2	3		1		26	4
	同意	18.2%	4.5%	2.0%	3.5%	0.5%	0.5%	1.0%	22.2%	1.0%
	不同意	29.3%	7.8%	1.7%	2.6%	0.0%	0.9%	0.0%	22.4%	3.4%



ベトナム	Q4-20	雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
	同意	2	2	1	7				16	4
	不同意	1			7		1		19	3
	同意	1.8%	1.8%	0.9%	6.2%	0.0%	0.0%	0.0%	14.2%	3.5%
	不同意	1.1%	0.0%	0.0%	8.0%	0.0%	1.1%	0.0%	21.8%	3.4%



フランス	Q4-20	雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
	同意	4	1	1	1	1	1	1	18	3
	不同意	5			1			1	26	2
	同意	4.7%	1.2%	1.2%	1.2%	1.2%	1.2%	1.2%	21.2%	3.5%
	不同意	4.6%	0.0%	0.0%	0.9%	0.0%	0.0%	0.9%	23.9%	1.8%



イギリス	Q4-20	雲	川	橋	壁	鏡	階段	ドア	線	その他
	同意	7			3	1		3	19	4
	不同意	7	1						11	2
	同意	7.4%	0.0%	0.0%	3.2%	1.1%	0.0%	3.2%	20.0%	4.2%
	不同意	11.7%	1.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	18.3%	3.3%

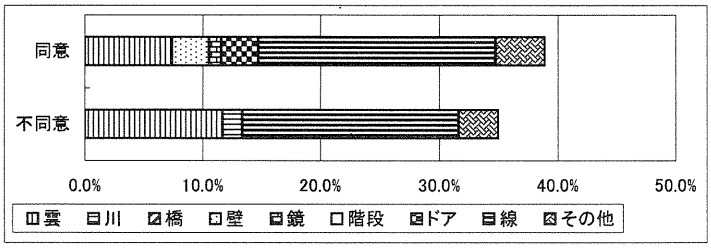
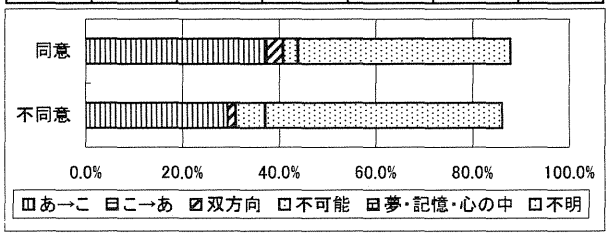


図6-10-4b 項目20「山川草木に霊」と「境界の種類」

日本

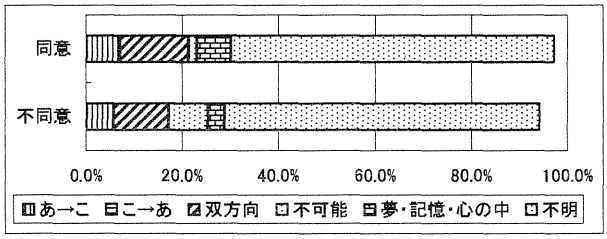
	コミュニケーション					
	可能か不可能かが明らか				夢・記憶・心の中	不明
	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能		

Q4-20	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能	夢・記憶	不明
同意	74	0	7	6		87
不同意	34	0	2	7		57
同意	37.4%	0.0%	3.5%	3.0%	0.0%	43.9%
不同意	29.3%	0.0%	1.7%	6.0%	0.0%	49.1%



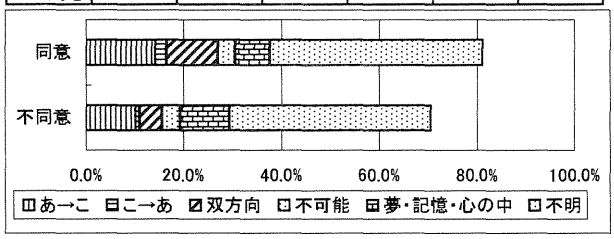
ベトナム

Q4-20	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能	夢・記憶	不明
同意	8		16	2	8	76
不同意	5		10	7	3	57
同意	7.1%	0.0%	14.2%	1.8%	7.1%	67.3%
不同意	5.7%	0.0%	11.5%	8.0%	3.4%	65.5%



フランス

Q4-20	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能	夢・記憶	不明
同意	12	2	9	3	6	37
不同意	11	1	5	4	11	45
同意	14.1%	2.4%	10.6%	3.5%	7.1%	43.5%
不同意	10.1%	0.9%	4.6%	3.7%	10.1%	41.3%



イギリス

Q4-20	あ→こ	こ→あ	双方向	不可能	夢・記憶	不明
同意	18	4	7	6	2	50
不同意	10		3	2	3	30
同意	18.9%	4.2%	7.4%	6.3%	2.1%	52.6%
不同意	16.7%	0.0%	5.0%	3.3%	5.0%	50.0%

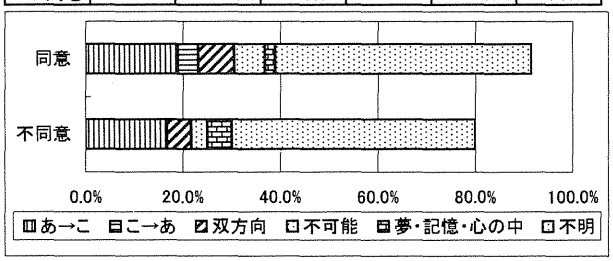
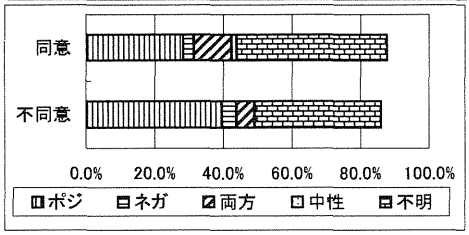


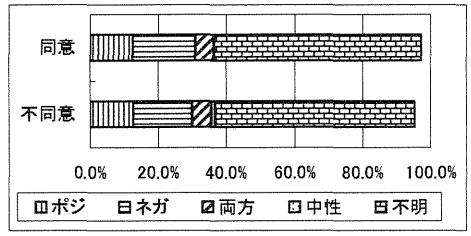
図6-10-4c 項目20「山川草木に霊」と「コミュニケーション」

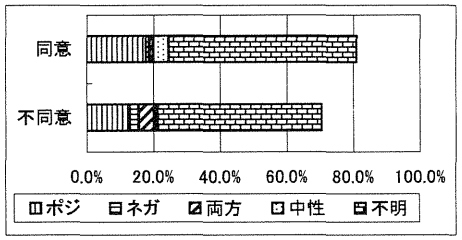
感情評価 ポジAND/ORネガ

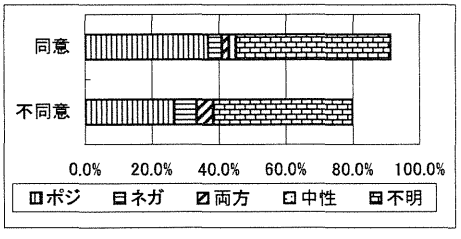
あの世

	ポジ	ネガ	両方	中性	不明
日本					
同意	56	6	22	3	87
不同意	46	5	6	0	43
同意	28.3%	3.0%	11.1%	1.5%	43.9%
不同意	39.7%	4.3%	5.2%	0.0%	37.1%
ベトナム					
同意	14	21	6		69
不同意	11	15	5	1	51
同意	12.4%	18.6%	5.3%	0.0%	61.1%
不同意	12.6%	17.2%	5.7%	1.1%	58.6%
フランス					
同意	15	1	1	4	48
不同意	14	3	5	1	54
同意	17.6%	1.2%	1.2%	4.7%	56.5%
不同意	12.8%	2.8%	4.6%	0.9%	49.5%
イギリス					
同意	35	4	2	2	44
不同意	16	4	3		25
同意	36.8%	4.2%	2.1%	2.1%	46.3%
不同意	26.7%	6.7%	5.0%	0.0%	41.7%



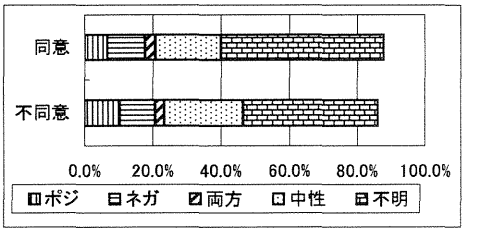


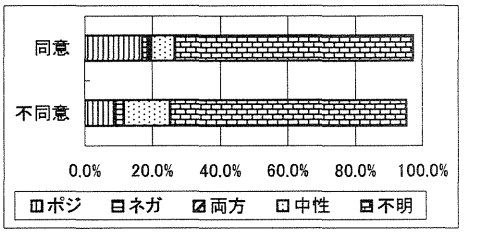


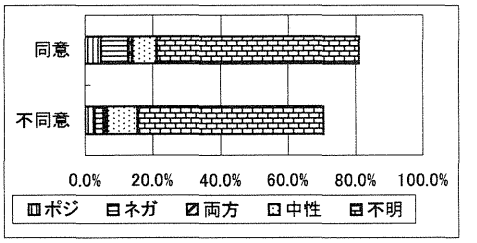


この世

	ポジ	ネガ	両方	中性	不明
日本					
同意	13	22	6	38	95
不同意	12	12	3	27	46
同意	6.6%	11.1%	3.0%	19.2%	48.0%
不同意	10.3%	10.3%	2.6%	23.3%	39.7%
ベトナム					
同意	19	2	1	8	80
不同意	8	2		12	61
同意	16.8%	1.8%	0.9%	7.1%	70.8%
不同意	9.2%	2.3%	0.0%	13.8%	70.1%
フランス					
同意	4	7	1	6	51
不同意	3	3	1	10	60
同意	4.7%	8.2%	1.2%	7.1%	60.0%
不同意	2.8%	2.8%	0.9%	9.2%	55.0%
イギリス					
同意	2	13		21	51
不同意	3	4	1	14	26
同意	2.1%	13.7%	0.0%	22.1%	53.7%
不同意	5.0%	6.7%	1.7%	23.3%	43.3%







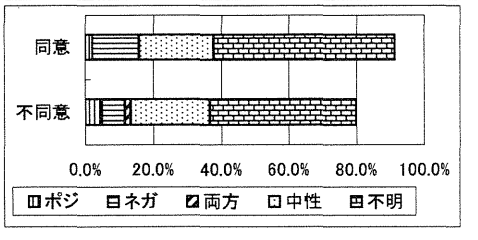
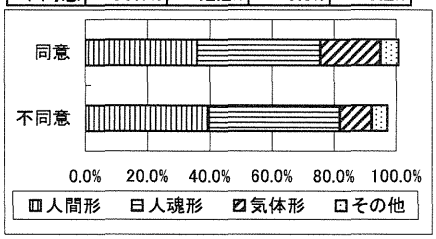


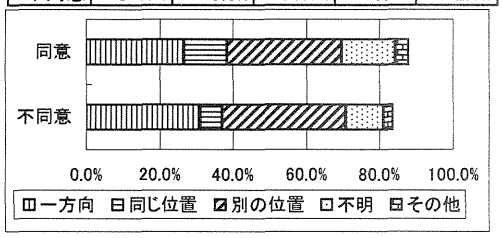
図6-10-4d 項目20「山川草木に霊」と「感情評価」

日本

	たましいの形			
	人間形	人魂形	気体形	その他
Q4-20	人間形	人魂形	気体形	その他
同意	71	79	38	12
不同意	46	49	12	6
同意	35.9%	39.9%	19.2%	6.1%
不同意	39.7%	42.2%	10.3%	5.2%

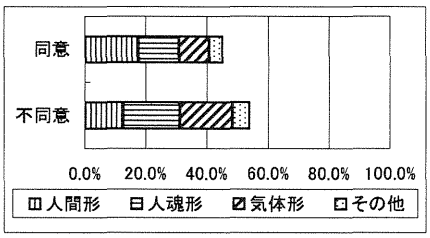


	往来のパターン				
		双方向			
	一方向	同じ位置	別の位置	不明	その他
Q4-20	一方向	同じ位置	別の位置	不明	その他
同意	53	23	62	29	7
不同意	36	7	39	12	3
同意	26.8%	11.6%	31.3%	14.6%	3.5%
不同意	31.0%	6.0%	33.6%	10.3%	2.6%

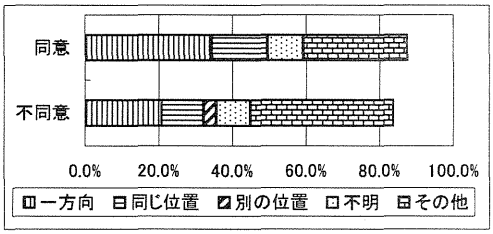


ベトナム

Q4-20	人間形	人魂形	気体形	その他
同意	20	15	11	5
不同意	11	16	15	5
同意	17.7%	13.3%	9.7%	4.4%
不同意	12.6%	18.4%	17.2%	5.7%

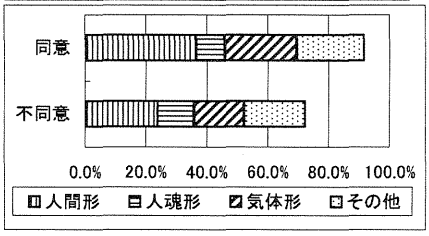


Q4-20	一方向	同じ位置	別の位置	不明	その他
同意	39	17		11	32
不同意	18	10	3	8	34
同意	34.5%	15.0%	0.0%	9.7%	28.3%
不同意	20.7%	11.5%	3.4%	9.2%	39.1%

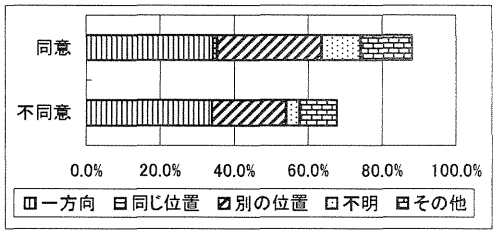


フランス

Q4-20	人間形	人魂形	気体形	その他
同意	31	8	20	19
不同意	26	13	18	22
同意	36.5%	9.4%	23.5%	22.4%
不同意	23.9%	11.9%	16.5%	20.2%

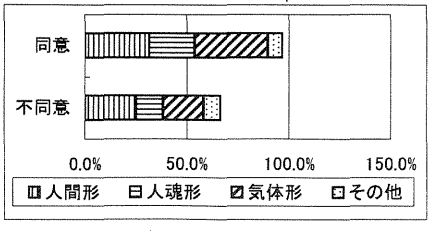


Q4-20	一方向	同じ位置	別の位置	不明	その他
同意	29	1	24	9	12
不同意	37	0	22	4	11
同意	34.1%	1.2%	28.2%	10.6%	14.1%
不同意	33.9%	0.0%	20.2%	3.7%	10.1%



イギリス

Q4-20	人間形	人魂形	気体形	その他
同意	30	21	34	7
不同意	15	8	12	5
同意	31.6%	22.1%	35.8%	7.4%
不同意	25.0%	13.3%	20.0%	8.3%



Q4-20	一方向	同じ位置	別の位置	不明	その他
同意	41	3	23	2	18
不同意	20	2	3	0	21
同意	43.2%	3.2%	24.2%	2.1%	18.9%
不同意	33.3%	3.3%	5.0%	0.0%	35.0%

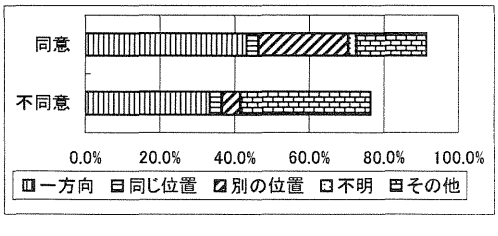
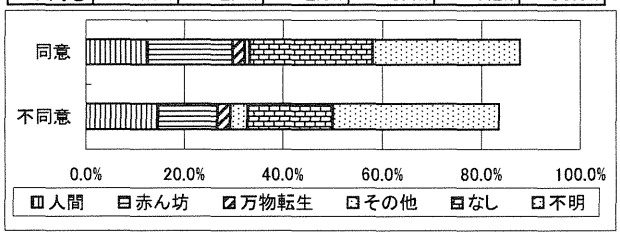
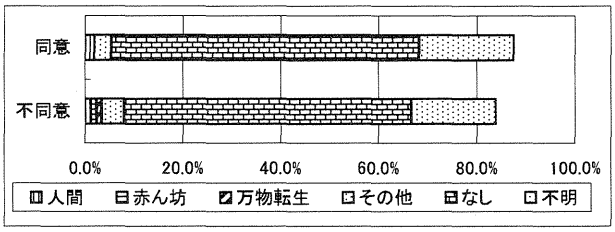


図6-10-4e 項目20「山川草木に霊」と「たましいの形」・「往来のパターン」

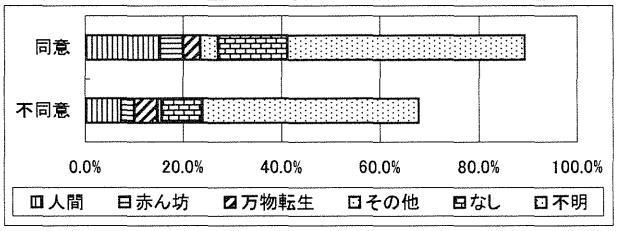
		生まれ変わり					
		あり				なし	不明
		人間	赤ん坊	万物転生	その他		
日本	Q4-20	人間	赤ん坊	万物転生	その他	なし	不明
	同意	25	34	5	2	49	59
	不同意	17	14	3	4	20	39
	同意	12.6%	17.2%	2.5%	1.0%	24.7%	29.8%
	不同意	14.7%	12.1%	2.6%	3.4%	17.2%	33.6%



ベトナム	Q4-20	人間	赤ん坊	万物転生	その他	なし	不明
	同意	2			4	71	22
	不同意	1	1	1	4	51	15
	同意	1.8%	0.0%	0.0%	3.5%	62.8%	19.5%
	不同意	1.1%	1.1%	1.1%	4.6%	58.6%	17.2%



フランス	Q4-20	人間	赤ん坊	万物転生	その他	なし	不明
	同意	13	4	3	3	12	41
	不同意	8	3	5	1	9	48
	同意	15.3%	4.7%	3.5%	3.5%	14.1%	48.2%
	不同意	7.3%	2.8%	4.6%	0.9%	8.3%	44.0%



イギリス	Q4-20	人間	赤ん坊	万物転生	その他	なし	不明
	同意	10	5	5	3	59	8
	不同意	3	1	0	0	41	1
	同意	10.5%	5.3%	5.3%	3.2%	62.1%	8.4%
	不同意	5.0%	1.7%	0.0%	0.0%	68.3%	1.7%

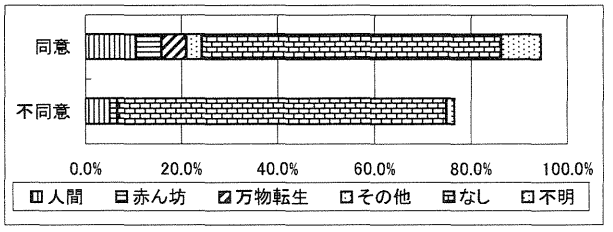


図6-10-4f 項目20「山川草木に霊」と「生まれ変わり」

6-11
学会発表資料　日本教育心理学会第３８回総会　発表論文集　(筑波大学：1996年11月)
発　達　2-1

「あの世」と「この世」の関係イメージ（１）
―２つの世界の空間配置―

○ やまだようこ　　加藤　義信
（愛知淑徳大学文学部）

問題

どの文化においても、人間はその生命を「個」として終結させず、人生の延長上に「あの世」を想定することによって、より大きな世代サイクルや生命循環の中に自己を位置づけようとしてきた。このような世界観は、科学の支配する現代にあっても根強く民衆の心の中に存在し、人が素朴に自己の人生をイメージする上で重要な機能をもっていると考えられる。

本研究は、現代日本の若者がもつ素朴な他界観イメージの特徴を明らかにすることを目的とする。特に今回は、「あの世」が「この世」との関係でどのようにイメージされているかに焦点を当てて実施したイメージ画調査の結果を報告する。

方法

被験者： 首都圏のＴ大学（理系）134名、及び愛知県のＡ大学（教員養成系）の学生285名、計419名。このうち、白紙回答、文章のみの回答を除外して、分析対象としたのは、332名（男子128名、女子204名）である。

調査内容及び手続き： 被験者に、①「あの世」と「この世」の関係イメージ、②２つの世界の移行に関するイメージ、をそれぞれ絵に描かせた。今回は、①についてのみ報告する。調査は、大学の教室で集団で実施し、所要時間は全体で30～40分、用紙の大きさはＡ４であった。なお、①の教示は以下のようであった。「もし死後の世界があるとしたら、どうでしょうか？あの世にいる人と、この世の人との関係をイメージして絵に描いてください。説明をつけ加えてください」。絵の巧拙は問わないこと、絵は具象的でも抽象的でもかまわないことも、併せて教示した。

結果

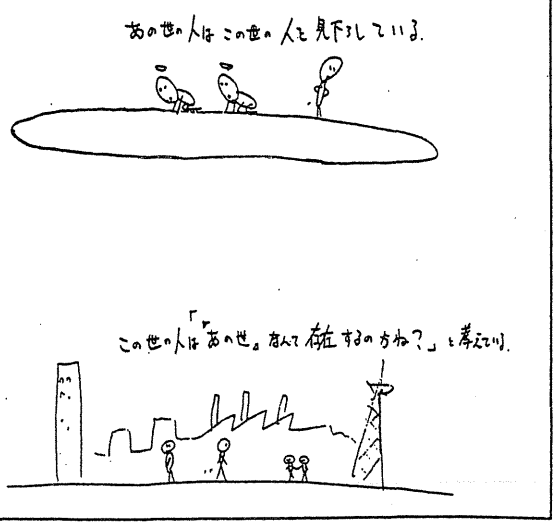
著しい性差はみられなかったため、一連発表の（１）、（２）の結果はすべて男女をこみにした全体の分布に関するものである。

「あの世」の用紙上の空間配置： まず、２つの世界が垂直的配置、水平的配置、その他のいずれによって表現されているかを見たところ（表1-1）、分布は一様でなく（χ^2=110.97,df=2,P<.01）、全体の６割近くが垂直的に配置されていた。さらに、垂直的配置の中では「あの世」を上に表現した絵（図1-1）が圧倒的に多く、水平的配置の中では、「あの世」を右に描く絵のほうが多かった（χ^2=15.04,df=1,P<.01）。配置の左右差は、時間軸が一般には左が過去、右が未来としてイメージされるため、死後の世界が右に表示されたためと考えられる。垂直的配置のほうが比率としては多かったが、水平配置は、日本文化の古層にある水平他界観や、他界の住人が超越的存在ではなくこの世の人間とそっくりに描写されやすいこと（人間の他界への水平移動）等と関連させて考えると興味深い構図である。今後国際比較したいと考えている。なお、２つの世界の空間的配置を意味の視点から整理してみたが、用紙上の客観的配置の比率と大きく異なるものでなかった。

表1-1「この世」に対する「あの世」の位置関係

垂直 59.3%			水平 27.4%		その他 13.3%
上 53.0%	上下 1.8%	下 4.5%	左 8.1%	右 19.3%	

図1-1　２つの世界の垂直的配置の例



発　達　2-2

「あの世」と「この世」の関係イメージ（２）
－２つの世界を分ける標識－

○　加藤　義信　　やまだようこ
（愛知淑徳大学文学部）

目的

「あの世」と「この世」の関係イメージを２つの世界を分ける標識の面から分析する。

方法

発表論文（１）と同じ。

結果

２つの世界の分離の有無とその表現形態

図2-1に見られるように、２つの世界を別の世界として分離して表現した絵が８割以上に及んだ。そのうちの多くには、境界の標識表現が多くみられ、中でも線と雲を標識とする表現が比較的多数現れた。「分離なし」の表現とは、たとえば図2-2のような絵であり、「あの世」が超越的な世界として表象されるのではなく、近傍の世界としてイメージされるものである。約１割ながら、このような絵が現れたのは興味深い。

図2-1　２つの世界の分離の有無とその表現

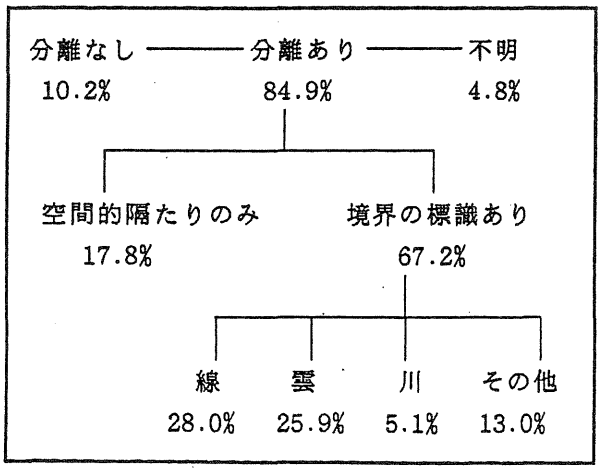
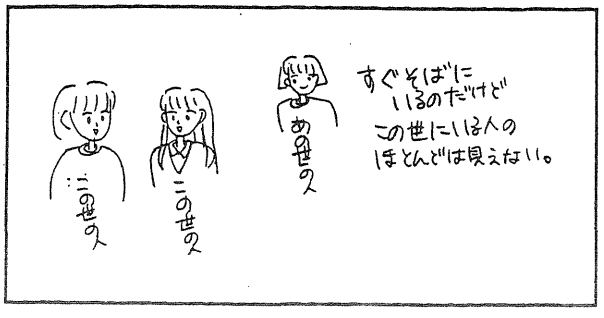


図2-2　２つの世界に分離のみられない絵の事例



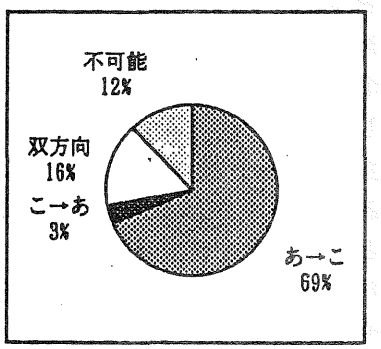
「あの世」を「この世」から区別する標識

「あの世」をどのように「この世」と異なって表現したかに注目したところ、環境(47.9%)、中でも花、雲などの自然の表現(44.3%)による差異化、翼や光輪の付加、足の欠如などの人間の表現による差異化(46.1%)が多く見られた。神などの超越的存在(15.7%)の表現は少なく、人工の事物による差異表現はわずか3.6%であった。

２つの世界のコミュニケーションの方向性

絵と説明文から「あの世」と「この世」のコミュニケーションの方向性を見たところ（判断の一致率、90.7%）、判断可能であった絵（全体の51.8%）の内分けは図2-3のようになった。図1-1のように、「あの世」から「この世」への働きかけは可能であるが、逆は不可能とする一方向的イメージが多かった。また、そのときの行為は「あの世」の人が「この世」の人を見る、見守るとする表現が比較的多かった。

図2-3　「あの世」と「この世」のコミュニケーション



２つの世界のそれぞれに対する感情評価

絵と説明文から２つの世界がどのように評価されているかを、肯定的、否定的、両価的、中性的、不明の５つのカテゴリーによって分けた（判断の一致率は、「あの世」94.1%、「この世」94.9%）。全体としては中性的、不明が多かったが、２世界の評価の関係は表2-1から、「この世」よりも「あの世」の肯定が相対的に多く、前者を肯定、後者を否定するパターンが逆より多くみられた点に特徴があった。

表2-1　2世界の感情的評価　（数字は人数）

		この世			
		肯定	否定	両価	中性、不明
あの世	肯定	2	18	2	41
	否定	1	1	1	10
	両価	0	0	1	20
	中性、不明	3	3	2	227

日本発達心理学会第８回大会発表論文集
（１９９７年３月２７～２９日：大阪大学）

PB 63

「あの世」と「この世」の関係イメージ（３）
－質問紙調査にみる他界観とイメージ画との関係の分析－

加藤義信・やまだようこ
（愛知淑徳大学文学部）

問　題

筆者らは、現代日本の青年が素朴に抱いている他界観イメージの特徴を描画表現を通して明らかにしようとしてきた（教心1995）。この報告では、イメージ画とともに実施した他界観に関する質問紙への回答傾向と絵の特徴との関係を取り上げ、分析する。

方　法

被験者：首都圏のＴ大学（理系）の学生134名、及び愛知県のＡ大学（教員養成系）の学生285名、計419名（男性163名、女性256名）。

調査内容及び手続き：被験者に、①「あの世」と「この世」の関係イメージ、②２つの世界の移行に関するイメージ、をそれぞれ描くよう求め、さらに、表１に示すような他界観、霊魂観に関する10項目の質問紙（1.まったく反対－4.まったく賛成まで４件法で回答）を実施した。質問紙の項目は、金子（1994）の来生観尺度や死観尺度を参考にして作成した。今回分析対象となるのは、①の絵の特徴と質問紙への回答傾向との関係についてである。

結果と考察

各質問項目の賛否の割合：各項目の回答を反対と賛成に二分してその比率をみた（表１）。死後の世界をあると思ったり（項目3）死者に守られているように感ずる（項目10）青年が約３分の２いることや、死者や超越的存在への恐れを感ずる（項目1,7）青年が約４分の３に達していることは注目に値する。

描画の有無と質問項目回答傾向との関係：イメージ画を描いた者（332名）と描かなかった者（87名）との間に、各質問項目の回答傾向において差はみられなかった。絵を描いた者が描かなかった者に比べ特別な信念傾向をもった人たちでないことが確認された。

因子別にみた性差：各項目の回答を得点化し因子分析を行った。その結果、「霊」因子と「他界」因子の２つが抽出された（バリマックス回転後、累積寄与率54.9%）。両因子共に負荷量の高い項目9を除いて、６項目（1,2,4,7,8,10）と３項目（3,5,6,但し5は逆転項目）の得点合計をそれぞれ「霊」得点、「他界」得点として男女別にその平均をみたところ、前者では女性の得点が有意に高く、後者でも有意に高い傾向がみられた。女性は霊や死後の世界の存在を男性より信ずる傾向があるといえる。

イメージ画との関係：絵の特徴分析の際に用いた４つの指標（①「あの世」と「この世」の位置関係、②２つの世界の心理的距離、③２つの世界のコミュニケーションの可能性、④両世界の評価）と各得点との関係を調べた。その結果、④では「あの世」をネガティヴにイメージする者は、ポジティヴにイメージする者や両義的にイメージする者よりも「霊」得点が有意に低いことが明らかになった。これは、「あの世」にネガティヴなイメージをもつ者ほど霊の存在やその現世への働きかけに懐疑的な傾向がより高いことを示している。その他の３つの指標と２つの得点との間には特別な関係は認められなかった。

表１　各質問項目の賛否の回答の割合

			反対	賛成	無回答
霊因子	Ｑ１.	死者の供養をしないと、たたりがあると思う	25.8%	73.3%	1.0%
	Ｑ２.	祟りや風習が不幸をもたらす	30.6%	68.0%	1.4%
	Ｑ４.	先祖の霊拝をはんぱにすると、ばちがあたる	33.9%	65.4%	0.7%
	Ｑ７.	死んだ人は子孫の供養をつねに自分を守ってくれる	25.0%	74.2%	0.7%
	Ｑ８.	神仏や水子供養はたいせつである	15.3%	82.9%	1.9%
	Ｑ10.	亡くなった人が自分をいつも見守っているような感じがする	31.0%	67.1%	1.9%
他界因子	Ｑ３.	死後の世界はあるとの思う	33.4%	65.4%	1.2%
	Ｑ５.	地獄・極楽はあるという迷信である	48.7%	50.1%	1.2%
	Ｑ６.	人は死んでも、繰り返し生まれ変わるものだ	36.0%	62.6%	1.4%
	Ｑ９.	神様や仏様を信じ心から願いごとをすればそのねがいがかなえられる	48.7%	49.6%	1.7%

日本発達心理学会第８回大会発表論文集
（１９９７年３月２７～２９日：大阪大学）

PB 64

「あの世」と「この世」の関係イメージ（４）

－イメージ画にみる「たましい」の移行と往来プロセス－

やまだようこ・加藤義信
（愛知淑徳大学文学部）

問題　本研究の目的は、「たましい」が実在するか否かを論じることではなく、個人の信念体系いかんにかかわらず、文化的表象として「たましい」イメージが存在するならば、それがどのような特徴をもつかを明らかにすることである。本報告では、人生移行の極限のかたちとして現世から他界への移行をとりあげ、死後の「たましい」の現世への帰還を含めて、二つの世界の往来プロセスの特徴を分析する。

方法　被験者　大学生419 人のうち分析対象者332 人（男子128，女子204 人）

手続き　「あの世」と「この世」の関係イメージを問う質問紙調査の２つの問いのうち、次の②の設問に対する描画を今回の分析対象にした。②もし人が死んでも「たましい」があるとしたらどうでしょうか？亡くなった人のたましいが、この世からあの世へ「いく」過程、あの世からこの世へ「かえる」過程をイメージして絵に描いてください。説明をつけ加えてください。（本報告の分析には、愛知淑徳大学の渡辺ミカコが参加した。）

結果と考察

１「たましい」の移行のしかた　－垂直と水平移行

垂直軸における移行は72.9 %，水平軸における移行は20.4% であった。上昇移行が下降移行より多く、左から右への移行が右から左への移行よりも多かった。性差はなかった。

２「たましい」は帰還するか　－往来の可能性

「たましい」の移行は、一方向（27.3%)よりも双方向（66.4%)で描かれることが多かった。死後の「たましい」は行くだけではなく帰ることも想定され、双方向的な往来としてイメージされたといえる。だが往来とは、必ずしも、もと居た場所へ帰ることを意味するわけではない。往来の場合に、紙面上で「行く」場所と「帰る」場所をみると、同じ位置（12.9%)に戻るよりも、別の位置（53.5%)に戻ることが多かったからである。

３「たましい」は生まれ変わるか

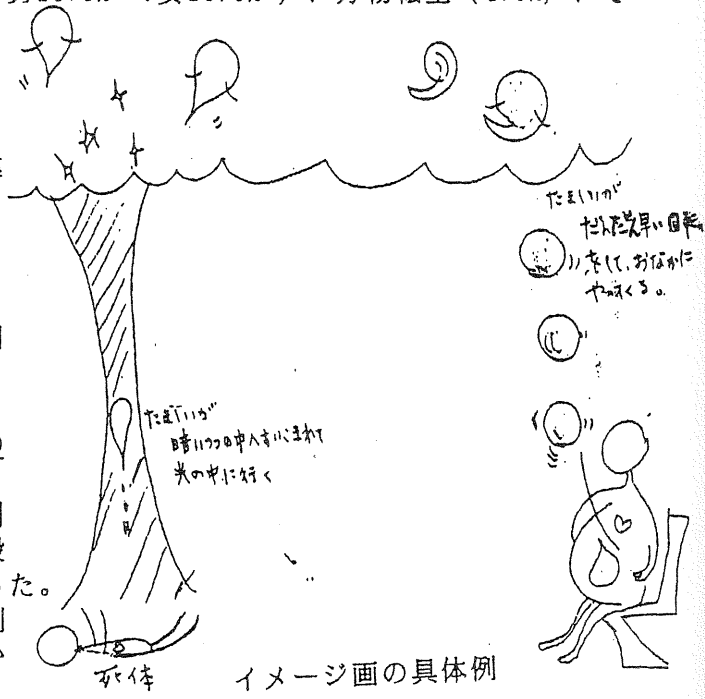
双方向の往来がある絵のうち、生まれ変わりが想定されないもの（28.2%)に対して、何らかの生まれ変わりが想定されるもの(69.4%) が多かった。その内訳は、人間（24.6%，男30.8% ＞女20.7% ）、赤ん坊（19.8%，男13.8% ＜女23.6% ）、万物転生（4.5%）、その他（20.1%)であった。いわゆる輪廻転生ではなく、「たましい」が別の人間の身体に入って生まれ変わるというイメージで描かれることが多かった（図参照）。

４「たましい」移行の行きと帰りの相違　－移行ステップの数

移行が何段階のステップで描かれたか、「行き」と「帰り」別に集計した。共に発と着の２段階（行き39.9%,帰り32.4% ）が多かったが、行きの方が帰りよりも中間に媒介ステップが入る３段階（行き32.7%，帰り17.7% ）が多かった。

５移行途中には何があるか　－「三途の川」や「お迎え」や「審判」はあるか

移行途中には、雲（20.4%)光（11.4%)川（5.1%）などの自然物が、道（11.1%)階段（2.7%）扉(1.2%)など人工物よりも多かった。お迎え(11.1%　女14.8% ＞男5.4%）や審判（7.8%　女5.4%＜男11.5% ）は多くはなかった（% は「行き」の場合）。



イメージ画の具体例

日本教育心理学会第３９回総会　発表論文集　（広島大学：1997年９月）

「あの世」と「この世」の関係イメージ（５）

―質問紙調査にみるフランスの大学生の他界観―

○ 加藤　義信（愛知淑徳大学）　やまだようこ（京都大学）

問題

筆者らは今まで日本青年の他界観イメージを描画表現を中心として調べてきたが（教心1996，発達心理学会1997）、その特質をより浮き彫りにするため、フランスにおいて同様な調査を実施し、比較分析を進めつつある。今回は、フランスの大学生にイメージ画とともに実施した質問紙の結果の概要を報告する。

方法

被験者：パリ第３大学（ソルボンヌ）及びパリ第８大学の学生89名。うち今回分析対象となるのは、24項目の質問紙に回答した64名（男9名、女55名）。

調査内容及び手続き：「あの世」と「この世」の関係イメージに加えて、他界観、霊魂観に関する24項目（下記表参照）の質問紙を４件法で実施した。質問紙は、まず、金子（1994）の来生観尺度や死観尺度を参考にして日本語による項目を作り、それを筆者らがフランス人共同研究者と討議の上、仏訳して作られた。

結果と考察

各項目への回答を賛成と反対に二分してその比率を表に示した。項目２の「死後の世界の存在」に関して、賛否が相半ばしていること、項目22の「魂の存続」について６割の学生が肯定していることがまず特徴的な点として指摘できる。その一方、項目１や項目５にみられるような他界からのネガティヴな働きかけに関する質問では賛成率が低い。この点は日本の学生のデータ（発達心理学会1997）と比較し著しい対照をなす（日本の学生では賛成率73.3%と74.2%）。さらに、項目16の「輪廻転生」を内容とする質問に、３割の賛成率があった点は、ユダヤ=キリスト教的文化を背景とする典型的な西欧近代の国フランスでの調査だけに大変興味深い。試みに項目2,16,22の相互のクロスをとってみると、「魂の存続」を認めない者は「死後の世界」や「輪廻転生」も必ず認めないが、「輪廻転生」や「魂の存続」を認めて「死後の世界」を否定する（5例と9例）場合のあることなどから、他界観の構成に「魂」の概念が中心的な役割を果たしているらしいことが伺われる。

本研究の実施にあたっては、Philippe Wallon（仏国立健康医学研究所）とClaude Mesmin（パリ第８大学）の協力を得た。

	賛成	反対	無答
1．死者の供養をしないとたたりがあると思う。	14.1%	85.9%	0 %
2．死後の世界はあると思う。	46.9%	53.1%	0 %
3．祖先はうやまうべきである。	45.3%	54.7%	0 %
4．死んだ人が、生き返ることがある。	28.1%	71.9%	0 %
5．神や仏をそまつにするとばちがあたる。	14.1%	85.9%	0 %
6．水子供養はするべきである。	40.6%	59.4%	0 %
7．神様や仏様を信心して願いごとをすれば、いつかその願いごとがかなえられる。	28.1%	71.9%	0 %
8．亡くなった人が自分を守ってくれるように感じる。	20.3%	79.7%	0 %
9．死ねばもっとよい世界へ行ける。	42.2%	57.8%	0 %
10．死ぬと人はやがて忘れさられてしまう。	9.4%	87.5%	1.6%
11．死とは自己が永久になくなってしまうことである。	45.3%	51.6%	3.1%
12．死ぬと、先に死んだ親しい人たちに再会できる。	43.8%	54.7%	1.6%
13．あの世では苦しみや痛みから救われる。	54.7%	43.8%	1.6%
14．人は死んでも天国へ行き、幸せに暮らすことができる。	34.4%	64.1%	1.6%
15．あの世は、この世よりもっとよいところだと思う。	41.3%	57.8%	1.6%
16．死んでも魂はさまざまな生物に繰り返し生まれ変わる。	29.7%	67.2%	3.1%
17．死んだ後も、あの世では生前同様に生活することができる。	14.1%	84.4%	1.6%
18．生まれ変わりはあると思う。	32.8%	65.6%	1.6%
19．死ぬまでに、何か生きた証しを残したい。	60.9%	35.9%	3.1%
20．死ぬと、暗闇の世界に入ってしまい、二度とそこから出ることはない。	14.1%	82.8%	3.1%
21．死はどんな生きものにとっても生命の永遠の終わりを意味する。	57.8%	40.6%	1.6%
22．肉体は死んでも魂は残る。	59.4%	37.5%	3.1%
23．死について真剣に考えることはあまりない。	42.2%	56.3%	1.6%
24．死とはその人間に与えられた最後の試練である。	64.1%	34.4%	1.6%

「あの世」と「この世」の関係イメージ（６）
－「たましい」の形－

やまだようこ　　加藤義信　　渡辺ミカコ
（京都大学教育学部）　（愛知淑徳大学文学部）

問題　多くの文化において人生は死によって終結しない。人生の延長上に「あの世」が想定され、世代連関を含む大きなライフ・サイクルが生の時空に組み込まれていた。死後に消滅する身体とは別の存在としての「たましい」表象も、古今東西多くの文化に共通してみられる。「たましい」とは何か。その観念は科学的であるはずの現代においても人々の心のなかに根強く生きているのではないだろうか。本研究では、一連調査の一環として、現代の若者の「たましい」イメージを、その形態の特徴をもとに分析する。

方法　被験者　首都圏と愛知県の大学生、計332人（男子128人、女子204人）
手続き　「あの世」と「この世」の関係イメージに関する２つの設問のうち第２設問の描画を分析対象とした。設問は以下の通り。「もし人が死んでも『たましい』があるとしたらどうでしょうか？亡くなった人のたましいが、この世からあの世へ『いく』過程、あの世からこの世へ『かえる』過程をイメージして絵に描いてください。説明をつけ加えてください。」

結果と考察

1．「たましい」の３類型の分類基準

死者の「たましい」として描かれた形を、図１のような３類型に分けた（一致率97%）。分類基準は、人間形は魂形と区別して、次の２つ以上を満たすものとした。A)頭と身体の分離、区切り、くびれがある。B)手か足がある。C)顔の要素がある。気体形は魂形と区別して、A)点線による表現形。B)明確な形が特定できない表現形（光、煙、エネルギーなど。）C)消滅、破壊、粒子化、希薄化など、有形から形がなくなっていく表現が明確なもの。魂形は人間形と気体形の中間形である。図２は３つの形の関係を示した概念図である。

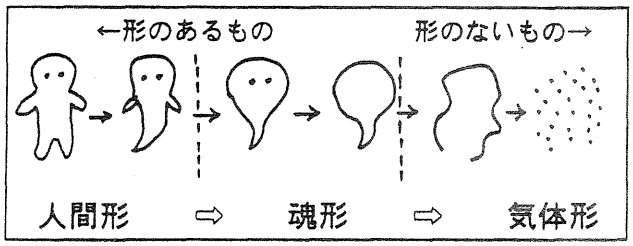


図１　「たましい」の形の一変容図

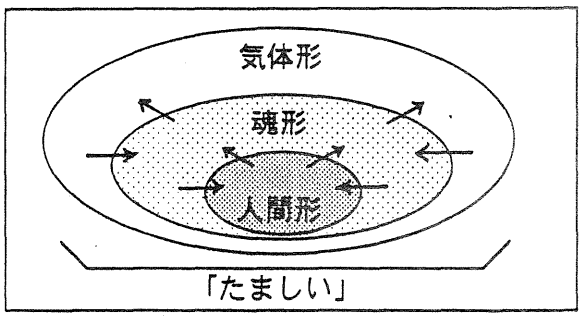


図２　「たましい」の形の関係図

2．「たましい」の３類型の出現頻度

図３のように魂形の表現が多かった。「たましい」の３類型は、形あるものから形ないものへ、固形から気化へ、地上での形態と機能（足や手）から空中での浮遊化（足の喪失、羽の付加）へ、個別性から匿名性（顔の喪失、衣服の画一化など）への変容を意味する。

いわゆる魂形は、「たましい」の日本語語源の一つ「玉し火」をあらわす象徴であるだけでなく、機能的にも、この世からあの世への移行形として、きわめて合理的な形態をもつといえよう。霊魂のギリシア語、プシュケーは蝶、吐息をあらわす。「たましい」を身体と気との中間体とみなすと、異なる文化間の共通性も高いと考えられる。

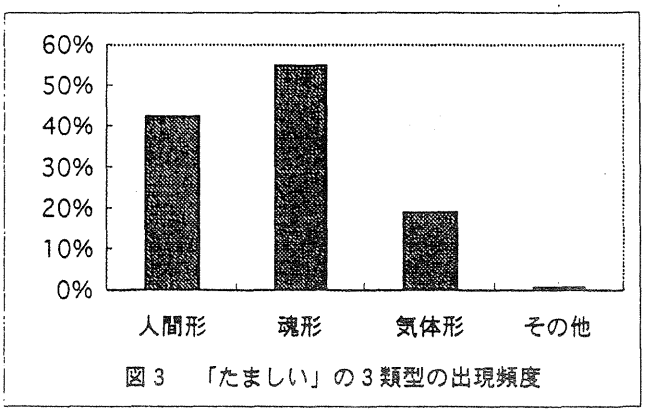


図３　「たましい」の３類型の出現頻度

日本発達心理学会９回大会発表論文集（1998年；日本女子大）

「あの世」と「この世」の関係イメージ（７）
－「たましい」の形の変容過程－

加藤義信　　やまだようこ　　渡辺ミカコ
（愛知淑徳大学文学部）（京都大学教育学部）（愛知淑徳大学文学部）

問題　現代の若者の「たましい」イメージをライフサイクルや世界観との関連で明確にするために、特に、この世からあの世へ「いく」過程と、あの世からこの世へ「かえる」過程において、「たましい」の形がどのように変化・変容して描かれたかを分析する。

方法　被験者　首都圏と愛知県の大学生、計332人（男子128人、女子204人）
手続き　発表（６）と同様の手続きで、「あの世」と「この世」の関係イメージについて調査した第２設問の描画を分析した。

結果と考察

１．この世からあの世へいく過程の「たましい」の形の変容

「たましい」の形の変容は1)人間形、2)魂形、3)気体形の３類型をもとに図１の９型に分類した（一致率98.5%）。1-1型は、人間形→人間形の移行型で、あの世の死者もこの世と同じような人間の形態で存在するとイメージされたものである。

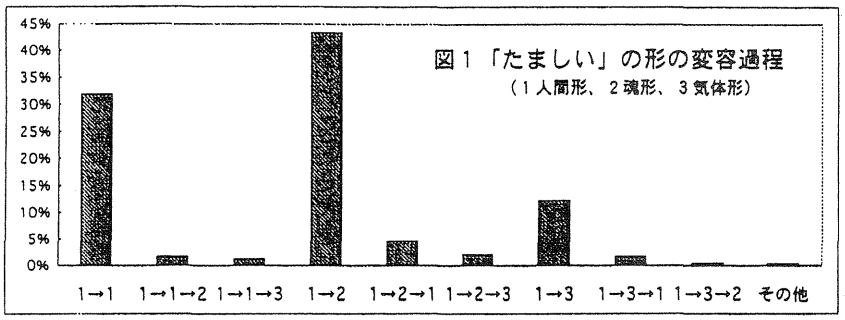


図１「たましい」の形の変容過程
（１人間形、２魂形、３気体形）

しかし、1-1型に分類された絵も、詳細にみると図２のように衣服の変容、光輪や羽の付加など、何かの標識によってこの世の人とあの世の人が区別されていた。その典型は人間→天使（羽や光輪の付加）変容であった。これは浮遊化という観点では魂形への移行と軌を同じくしているが、固形性や名前は失わない変容である。また、多くの文化に蝶や鳥などを魂のシンボルとみなす人間→鳥（蝶）変容があるが、これは「名前は喪失／固形性は保持」する型で人間→天使と人間→魂形の中間である。この変容はほとんどみられなかった。

1-2型は、人間形→魂形への変容（図３）で、この型がもっとも多かった。注目されるのは、この世とあの世へ移行する中間段階のみ魂形に変わり、あの世でまた人間の形に復帰する1-2-1型である。1-3型は、人間形→気体形への変容である。

２．あの世からこの世へかえる過程の「たましい」の形の変容

「いく」過程に比べると、「かえる」過程は不明確で多くのステップには区分されなかったが、「たましい」が希薄・霧散・消滅して無くなるという世界観ではなく、図３のように人間の形を失ってからまた人間形にもどる、再生・復元・循環世界観が多く描かれた。

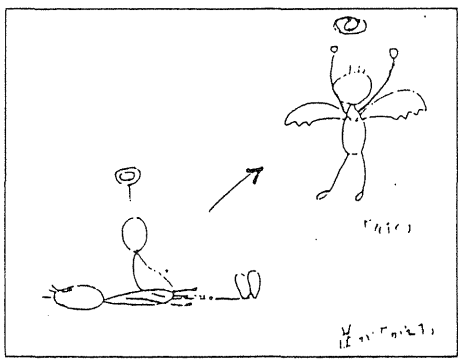


図２　1-1型の変容
人間→天使（光輪、羽の付加）

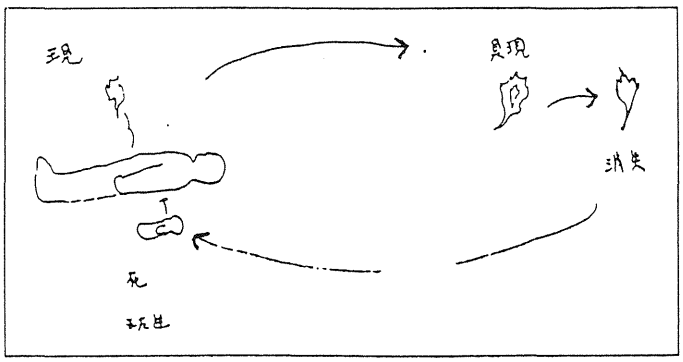


図３　1-2型の変容
再び人間形に復元して循環。人間形→魂形（→人間形）

「あの世」と「この世」の関係イメージ（8）

―質問紙調査にみる日仏大学生の他界観比較―

○ 加藤　義信（愛知淑徳大学）　やまだようこ（京都大学）

問題：筆者らはこれまで他界観イメージ調査の一環として、日本で10項目（発心1997）、フランスで24項目（教心1997）の質問紙を別々に実施してきた（調査１）。今回は、新たに21項目の日仏共通の質問紙を作成・実施し（調査２）、両国の大学生が素朴に抱いている他界観の傾向を直接に比較検討してみる。

方法：＜被験者＞日本の大学生327名（教員養成系、芸術系、理科系の各大学の学生、うち男性96人、女性231名）。フランスの大学生96名（パリ第８大学心理学専攻の男性9名、女性90名、性別不明3名）。＜調査内容及び手続き＞表に示すような他界観、霊魂観に関する21項目の質問紙（1.まったく反対―4.まったく賛成まで４件法）を日本語でまず作成し、それをフランス人研究者と討議のうえ仏訳した。これらを、イメージ描画課題を含む全体調査の一部として日仏両国でほぼ同時期に実施した。

結果と考察：21項目の質問のいずれかに未回答のあった被験者（日本―38人、フランス―23人）を除く全回答者（362人）の項目得点のデータ行列を因子分析したところ、３因子が抽出された。３因子による累積寄与率は53.2%であった。因子の解釈に用いる項目は、.50以上の負荷量をもつことを基準とした。なお、日仏のデータそれぞれについて因子分析した場合も、全体をこみにした場合とほぼ同様の因子構造であることが確かめられている。

表には、３つの因子のそれぞれの負荷量の高い項目をグループにして示し、併せて各項目への日仏の賛成率を対照させた。表をみてわかるように、第１因子の負荷量の高い項目は他界や魂の存在とその肯定的評価を内容とする項目であり、「他界憧憬」因子と命名された。第２因子の負荷量の高い項目は、死後の再生あるいは現世への帰還に関する項目、あるいは内容的にその逆転項目であったので、「循環性」因子と名付けられた。第３因子は、死後の運命への不安、たたりへの恐れに関する項目に負荷が高かった。したがって、「他界畏怖」因子と命名された。

次に、３因子のそれぞれについて標準因子得点を算出し、日仏の大学生間でその平均値に差が見られるかどうか、比較してみた。その結果、「他界憧憬」の因子得点の平均についてはフランスのほうが、また「循環性」と「他界畏怖」では日本のほうが有意に高かった。つまり、フランスの大学生のほうが他界を肯定的に評価する傾向が高いが、現世と他界の関係を連続性や循環性においてイメージし、死者や他界に対する恐怖の感情やたたりへの不安が大きいのは、日本の大学生のほうであることが明らかとなった。

（本調査のフランス・データの収集にあたっては、Wallon, Ph.[I.N.S.E.R.M]と Mesnin, C.[パリ第８大学]の協力を得た）。

表　日仏大学生の各項目への賛成率（積極的賛成と消極的賛成を合算したもの。なお無答率はいずれも0-6%の範囲内。）

因子名		日本	フランス
他界憧憬	Q14　あの世はこの世よりもっとよいと思う	33.6%	51.0%
	Q７　天国あるいは極楽浄土はあると思う	51.0%	40.6%
	Q８　死ぬと、先に死んだ人たちに再会できる	51.1%	44.8%
	Q２　死後の世界はあると思う	66.0%	52.1%
	Q11　あの世では苦しみや痛みから救われる	45.3%	67.7%
	Q15　肉体は死んでも魂は残る	55.3%	66.7%
循環性	Q３　人は死んでも繰り返し生まれ変わるものだ	61.2%	32.3%
	Q17　人は人間以外のものに生まれ変わることもある	60.2%	24.0%
	Q10　死んだ後も、この世に帰ることができる	47.7%	32.3%
	Q19　行き場所がなく、ただよう魂も存在する	61.8%	27.1%
	Q６　死とは自分が永久になくなってしまうことである（逆転項目）	41.0%	39.6%
	Q５　身近な人は亡くなった後、自分を守ってくれる	69.4%	46.9%
	Q20　山・川・草・木などに自然の霊が宿っているように感じることがある	60.6%	37.5%
他界畏怖	Q１　死者の供養をしないとたたりがあると思う	64.2%	13.5%
	Q16　地獄はあると思う	34.8%	27.1%
	Q18　この世のおこないによって、天国に行くか地獄に行くかが決まる	40.6%	37.5%
	Q21　死後になんらかの審判はあると思う	36.7%	38.5%
	Q13　死ぬと、暗闇に入っていって、二度とそこから出ることはできない	12.6%	6.2%
	Q９　水子供養はするべきである	77.7%	41.7%
	Q４　仏様や神様を信心して願いごとをすれば、いつかその願いごとがかなえられる	42.8%	31.2%
	Q12　死んだ後も、あの世では生前同様に生活することができる	30.5%	9.3%

「あの世」と「この世」の関係イメージ（9）

―空間配置の日仏比較―

○ 加藤　義信　　やまだようこ　　渡辺ミカコ
（愛知淑徳大学文学部）　（京都大学教育学研究科）　（愛知淑徳大学文学部）

key words: another world, spatial disposition, Japan-France

問題　人々が生活の中で素朴に抱いている他界観イメージは、それぞれの文化の奥深いところに存在する基底表象からその内容を汲み取りながら、個人の生をより大きな世代連関のサイクルに位置づけるうえで重要な役割を果たしてきた。筆者らはこれまで、こうした他界観イメージを絵および質問紙の双方から明らかにしようとしてきたが（教心1996、発心1997、教心1997、発心1998）、今回の発表では、工業化の水準ではほぼ同じレベルにありながら宗教的バックグラウンドも近代的個人の観念も大きく異なっている日本とフランスの大学生が描いた「あの世」と「この世」の関係に関するイメージ画を、とくに空間的配置の面から分析し、比較・検討してみる。

方法　被験者　日本の大学生420名（首都圏の理科系、愛知県の教員養成系各大学の学生、うち男性163名、女性257名）。フランスの大学生173名（パリ第８大学及びパリ第４大学の学生、うち男性25名、女性145名、性別不明3名）。このうち、イメージ画１に回答したのは、日本332名（男性128名、女性204名）、フランス123名（男性13名、女性109名、不明1名）。

手続き　被験者に次の２つのイメージ画をＡ４用紙の所定の枠内に描かせた。1)「あの世」と「この世」の関係イメージ、2)両世界の間の移行のイメージ。調査は集団で実施し、所要時間は30分～40分であった。本報告では、第１設問のイメージ画を分析対象とする。その具体的教示は以下のようであった。「もし死後の世界があるとしたら、どうでしょうか？あの世にいる人と、この世の人との関係をイメージして絵に描いてください。説明をつけ加えてください」。

結果と考察

1　日仏大学生の描画の特徴

絵を描いた回答率は、日本79.2%、フランス66.3%であり、日本のほうが高かった。しかし、フランスの大学生には文章のみで回答する人たちが相当数いたことを考慮すれば、質問自体への拒否率が両国で大きく異なっていたとはいえない。描画の質についていえば、日本の絵のほうが全般に詳細・豊富に描かれており、内容のバリエーションも大きかった。しかし、言語的説明に関しては、フランスのほうが詳しかった。言語優位の文化か、イメージ優位の文化か、の違いがここにも表れていると思われる。

表１　この世にたいするあの世の空間的位置（上段ー日本、下段ー仏の%）

垂直			斜め			水平		その他
59.3			**15.3**			**12.0**		**13.3**
48.0			3.3			15.4		33.3
上	上下	下	左上	右上	右下	左	右	
53.0	**4.5**	**1.8**	**3.6**	**11.7**	**0**	**4.5**	**7.5**	
43.1	0	4.9	2.4	0	0.8	0	15.4	

2　「この世」にたいする「あの世」の用紙上の空間的配置

「あの世」のみを描いたり両世界の位置関係表示がなかったりした絵はその他のカテゴリーに入れ、日仏を比較してみると、上位４カテゴリーの全体的な分布に有意な差がみられた（X^2=33.12, df=3, p<.005）。垂直的配置と斜め配置の比率は日本のほうが高かったが、これはその他の比率がフランスで高かったことが影響していると思われ、両世界の関係が何らかの形で描かれた場合に限って比較すれば、垂直的配置は日仏で著しい差はないと考えたほうが妥当であろう。次に下位カテゴリーの分布をみてみると、「あの世」を上に描いた絵がいちばん多くなっている点は日仏で共通している。水平配置においては、フランスの大学生はすべて右に「あの世」を描いたが、日本では、右に「あの世」のある絵と左にある絵の比率は、ほぼ２対１であった。左が過去、右が未来という時間軸意識の強さ、左から右へ展開する書字規則の存在などがこうした日仏の特徴差の原因として考えられる。

3　２つの世界の分離の有無と境界表現

フランスの大学生の絵はシンプルなものが多いためか、分離の有無が「不明」な絵の比率が日本より高くなった。にもかかわらず「分離なし」や「空間的隔たりのみ」の比率に日仏で差がみられなかったことは、注目してよい。「分離なし」は生者の世界と死者の世界が同一空間に重なって表象される場合だが、比率は必ずしも高くなくとも、日仏両文化にほぼ同じ割合でこうしたイメージが存在することは興味深い。

（本調査のフランス・データの収集にあたっては、Wallon, Ph.[I.N.S.E.R.M.]と Mesmin,C.[パリ第８大学]の協力を得た）。

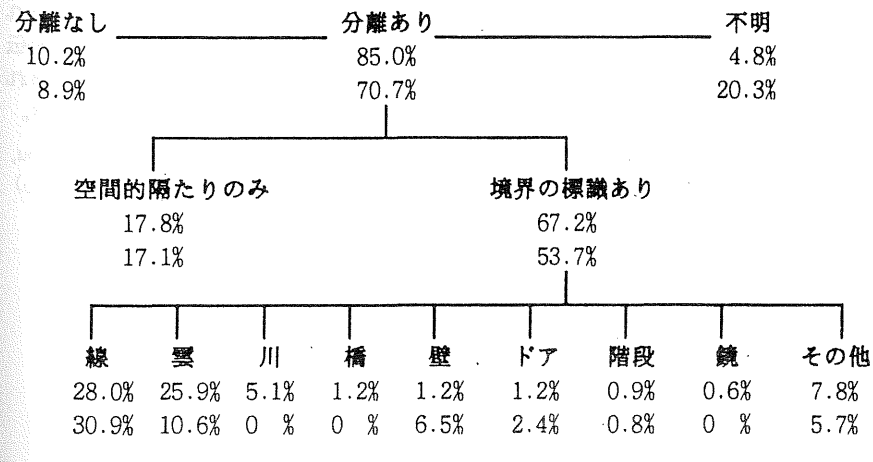


図１　「この世」と「あの世」の境界（上段が日本、下段が仏の%）

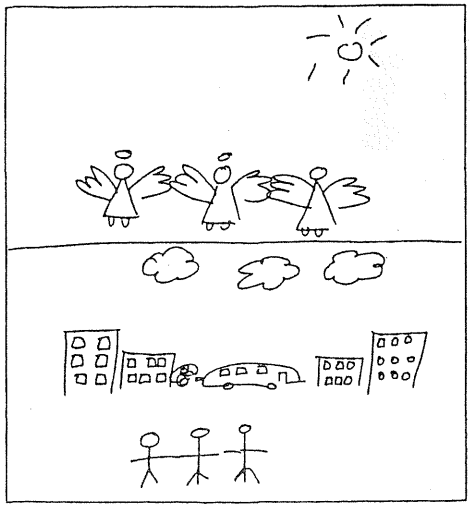


図２　垂直的配置の例（フランス学生）

「あの世」と「この世」の関係イメージ（１０）

―たましいの形の日仏比較―

○やまだようこ　　加藤義信　　渡辺ミカコ
（京都大学教育学研究科）　（愛知淑徳大学文学部）

Key words: another world, image of soul, Japan-France

問題　「たましい」は、古今東西、多くの文化において、身体から遊離して死後も存続する生命原理として表象されてきた。プシュケー、アニマ、ソウル、スピリットなど、心の働きをつかさどる心理学の根本概念でもある。日本では「たま」は、のちにカミ、オニ、モノに分化したともいわれる。「たましい」観念は現代でも重要であり、文化の違いを超えて共通性が高いのではないだろうか。宗教や慣習が大きく異なる日本とフランスの「たましい」の形と他界との往来イメージを、ライフサイクルや世界観との関連で明確にしたい。

方法　被験者　大学生、日本332名（男性128名、女性204名）、フランス130名（男性16名、女性113名、不明1名）

手続き　次の第２設問の描画を分析。「もし人が死んでも『たましい』があるとしたらどうでしょうか？亡くなった人のたましいがあの世へ『いく』過程、あの世から『かえる』過程をイメージして絵に描いてください。説明をつけ加えてください。」

結果と考察

１　たましいの形　―３類型の出現頻度の日仏比較

たましいの形を、図１のように「人間形」「魂形」「気体形」「その他」に分類した（分類基準は発心発表６参照）。日仏で人間形には差がなく、日本は魂形が、仏では気体形が多くみられた。仏では、人間の身体が描かれるか、希薄・気体化しているか二極に分かれたが、日本では、形あるものから形ないものへの移行表象、身体と霊（気・幽）の中間表象、この世とあの世の境界表象としての魂（玉し火）形が文化表象として存在しているようである。

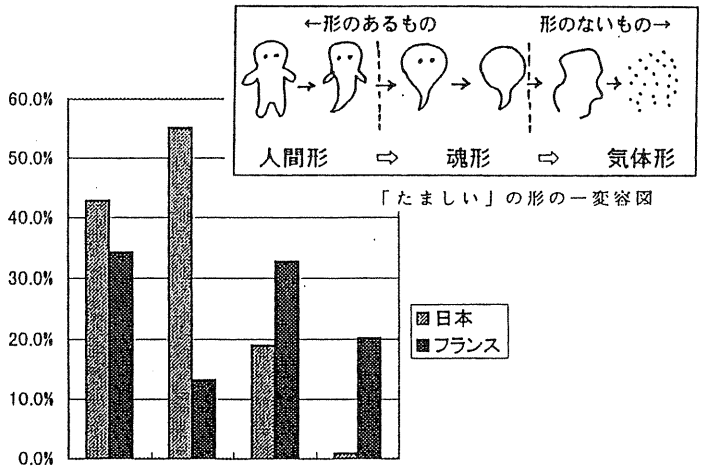


図１
「たましい」の
３類型の
出現頻度
（日仏）

２　たましいの往来パターンの日仏比較

たましいがあの世へ行ったきりで戻らない「一方向」パターンは、日本では少なく（22.9%）仏では多かった（43.1%）。あの世からこの世への帰還を含む「双方向」は、日本で多く（74.7%）、仏で少なかった（38.4%）。双方向のうち、日仏とも、同じ位置に戻る円環図ではなく、別の位置に戻る図が多かった。柳田國男が日本の他界観の特徴としてあげたように、日本では、死者や先祖との行来が想定された循環世界観がみられる。しかし仏でも、双方向の往来パターンが想像以上に多くみられた。図２の事例のように、魂形も循環図式も日本とよく似ており、根底イメージの共通性がみられることは興味深い。

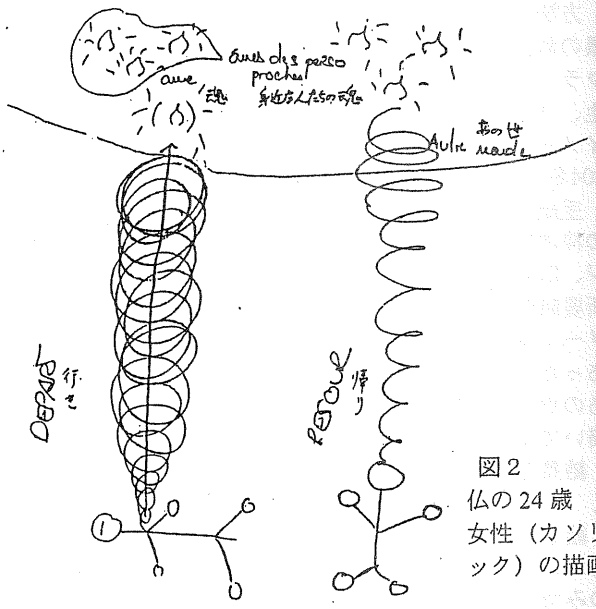


図２
仏の24歳
女性（カソリック）の描画

３　生まれ変わりのイメージの日仏比較

柳田國男が日本の他界観の特徴としてあげた「生まれ変わり」の描画は、図３のように日本で非常に多かった。それは人間や赤ん坊になって生まれ変わることに限られ、他の生き物にもなる万物転生はきわめて少なかった。これは循環世界観であるが、輪廻転生思想とは異質である。仏では、生まれ変わり「なし」の絵が61%と多数派であったが、民俗的伝統が大きく異なるにもかかわらず、人間と赤ん坊への生まれ変わりが、合計して22%あったことは特記すべきである。

(YAMADA Yoko, KATO Yoshinobu, &WATANABE Mikako)

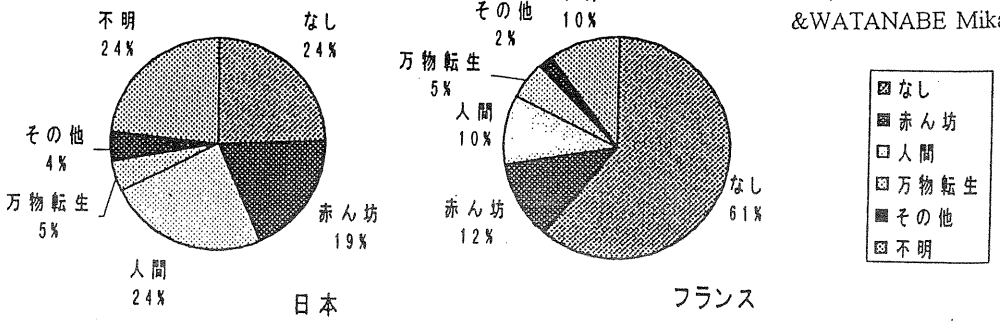


図３　生まれ変わるか、何に生まれ変わるか（日仏の比率）

日本教育心理学会第 41 回総会発表論文集, P. 700.

「あの世」と「この世」の関係イメージ（１１）

－フランスの大学生の宗教的背景別にみた「たましい」イメージ－

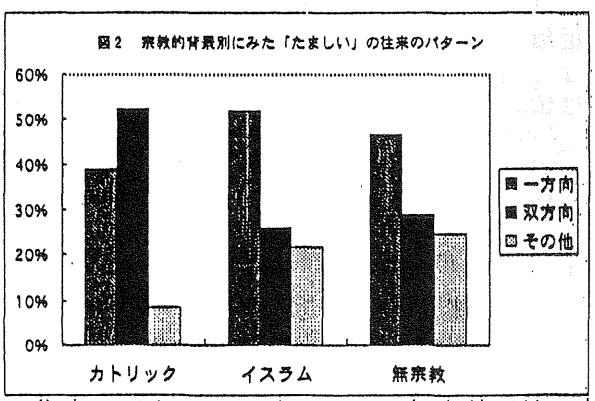
○ 加藤　義信（愛知淑徳大学）　やまだようこ（京都大学）　渡邊ミカコ＃（愛知淑徳大学）

問題：筆者らはこれまで日仏大学生の他界観をイメージ画の手法によって比較・検討してきた。このうち、「たましい」のイメージ類型に焦点を当てた分析（日心1998）では、死後の「たましい」は日本では「魂形」が多いのに対し、フランスでは「人間形」や「気体形」の多いことがわかった。また、「たましい」の往来のパターンについては、日本では圧倒的に双方向のイメージが多かったが、フランスでは一方向が相対的に多数であった。しかし、フランスでは大学生の属性は日本ほど均質でなく、宗教的背景や出身によって集団内部に異なる傾向の存在することが予想される。そこで、被験者の属性を詳しく尋ねた調査をフランスで新たに行い、特に宗教的背景の違いによって「たましい」イメージに差があるかどうかをみた。

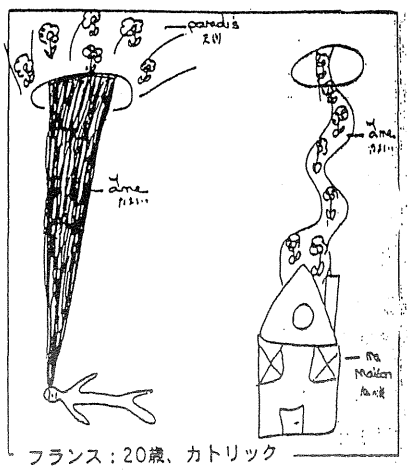
方法：＜被験者＞パリ第８大学の学生234名（男性52名、女性170名、性別不明12名）。白紙回答を除き実際に分析に使用したのは180人。＜調査内容及び手続き＞これまでの調査と同様、他界観に関する２つのイメージ画を描かせた。本報告では、次の第２設問の描画を分析する。「もし人が死んでも『たましい』があるとしたらどうでしょうか？亡くなった人のたましいがあの世へ『いく』過程、あの世から『かえる』過程をイメージして絵に描いてください。説明をつけ加えてください。」

結果と考察：宗教の分布は、カトリック59名（32.8%）、イスラム23名（12.8%）、無宗教69名（38.3%）、その他29名（16.1%）であった。フランスの大学生の中にイスラム教が無視できない比率で存在していることがわかる。これらの人々は、両親あるいは本人が旧フランス植民地出身という文化的背景をもっている場合が多い。

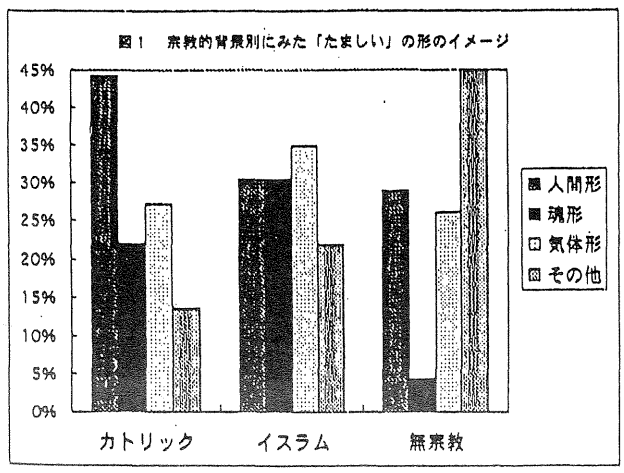
＜「たましい」の形の３類型＞20名以上あった３つの宗教的背景のカテゴリー別に「たましい」イメージの類型分布をみた（１枚の絵に複数の類型あり：故に図１の各宗教における類型分布の合計は100%を越える。なお、類型の分類基準については日心1998参照）。カトリックでは人間形が44.1%と多数であったが、魂形は22.0%と比較的少なかった。イスラムでは特にそのような傾向は認められなかった。無宗教の場合は具体的な形をイメージできない場合が多数を占め、魂形はきわめてわずかであった。魂形は移行表象と考えられるが、カトリックや無宗教の人々にはこうした中間的な文化表象が弱いと思われる。



＜往来のパターン＞イスラム、無宗教では一方向が多数であったが、カトリックでは双方向（52.5%）が一方向（39.0%）を上回る比率となった（図２）。循環世界観的教義をもたないカトリックの人々にこうした傾向が見られ日本のイメージ画とも共通する右のような絵がいくつかあったことは、一文化が内包する表層と根底のイメージの重層性示唆していて興味深い。



フランス：20歳、カトリック



「あの世」と「この世」の関係イメージ（１２）
文化表象としての「たましい」の形態変化モデル

やまだようこ　　加藤義信
（京都大学教育学研究科）（愛知淑徳大学文学部）

多くの民族や文化において想定され物語られてきた、「たましい」とは何だろうか。「たましい」概念は、現代に生きる我々においても、ライフサイクル（いのち循環・人生周期）観の根底にある、生命観、身体観、死生観、倫理観、世界観にかかわる根本概念ではないだろうか。筆者らは、文化心理学、フォークサイコロジーの立場から、とくに日本文化の「たましい」イメージ、意味記号（シニファン）としての描画形を明確にするために比較文化研究を行ってきた。今回は、文化表象としての「たましい」の形態変化を位置づけるモデルを提案する。

1　概念枠組　　居場所と人間形（Human form）を基点として、「たましい」の場所変化（空間的距離）と形態変化の二次元で枠組をつくった。垂直 U-D は、上昇（Up）－下降（Down）の軸である。水平軸 N-S は、左方向「無」形（Non-Form)の軸、右方向は「異人」形（Strangers-Form）の軸である。左右は非対称。ここでは、UN、US、DN、DS の４象限のうち、多くのイメージ画が描かれた UN と US 象限を特に問題にする。

2　たましいの形態変化のモデル（図１）

無形化は、固体としての形態を失い、希薄化・消滅化に向かう変容である。人間形から気体形への変化は上昇に向かう人間形→人魂形→気体形と、地上における人間形→影形→気体形の二方向変形が考えられる。

異人化は、「異類異形性（人間形からの形態変化）」と「他者性（空間・時間・社会的距離）」の２つで定義される。たましいの表象として特記すべきは、鳥形（鳥類だけではなく飛ぶ生物。プシュケは蝶）への変容であり、途上には天女や天使形や人面鳥形も含まれる。

UN象限（左上）では人間が無になり、固形性を失い、希薄化・浮游化気体化に向かう。幽霊形や影形は、その途上で、十分に気化できなかった中間形である。人魂形は人間と気体（プシュケは気息、風の意）の中間の移行形と位置づけられ、個性や名前を喪失し、浮游化と流動化を得た、尾のある玉の形である。

US象限（右上）では、人間と異なる生物に変身する。人間の形態は失うが、個としての名前は必ずしも失わない。形態や性格はデフォルメされ、別のアイデンティを得て、個性は強化されやすい。（Yamada,Y., & Kato,Y.）

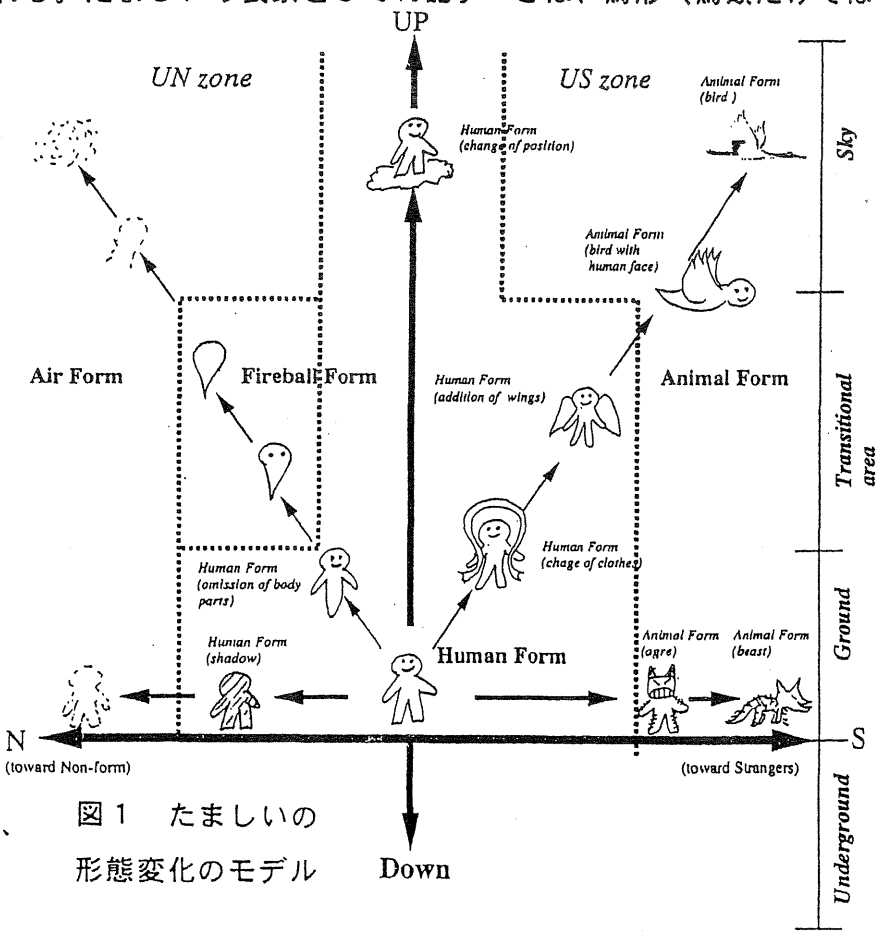


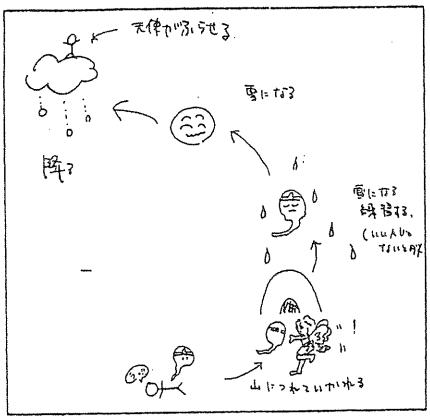
図１　たましいの形態変化のモデル

「あの世」と「この世」の関係イメージ（１３）
－日仏青年にみる「たましい」の形態変化の諸事例－

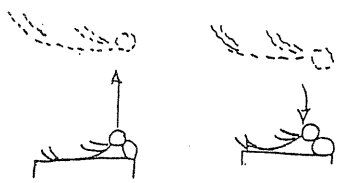
加藤義信　　やまだようこ
（愛知淑徳大学文学部）　（京都大学教育学研究科）

問題　筆者らは今まで他界観イメージの数量的分析を行ってきたが、発表（12）では質的分析の観点から「たましい」の形態変化のモデルを提示した。これは、文化表象として現れるさまざまな「たましい」イメージには、形象的合理性を踏まえた変容のロジックがあるとする仮定に基づいている。このようなモデルの中に、異なる文化において現れる「たましい」のイメージ表現を位置づけることにより、いっそう特定の文化のイメージ特質が理解可能になったり、共通のイメージ成分の確認が期待できる。そこで、本発表では、日仏青年の「たましい」の絵の諸事例をモデルに照らして紹介し、考察を加える。

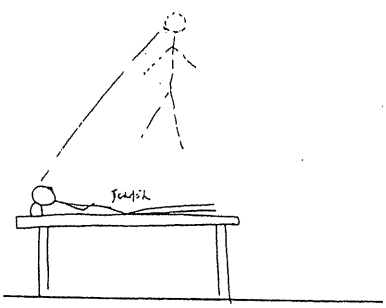
方法　日本の大学生327名（男性96名、女性231名）とフランスの大学生234名（男性52名、女性170名、不明12名）に死後の「たましい」のあり方についてのイメージ画を描かせた。手続きは、やまだ&加藤の日心発表（1998）と同じ。なお、実際に絵を描いて回答した被験者は日本281名、フランス180名で、この中から事例を選んだ。



事例１（日本）



事例２－１（フランス）



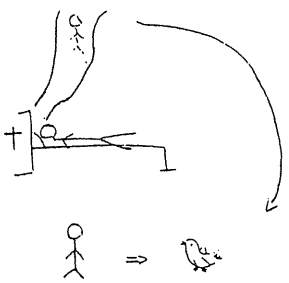
事例２－２（日本）

結果と考察

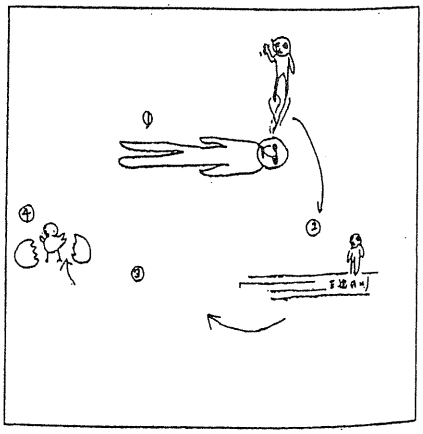
事例１は、モデルのUN象限対角線方向の変容パターンを示している。「たましい」はまず足を脱落させた人魂形として表象され、続いて雪（気体形の一種）となる。あの世は圧倒的に上方向にイメージされることが多いので、あの世へと上昇しようとする「たましい」がはじめは個別性を維持したまま（顔有り）浮遊化のために手足を脱落させるのは合理的なイメージ変容であろう。さらに、他界に近づくにしたがい匿名性といっそうの浮遊・流動性を有する存在となるために気体化する点は興味深い。こうしたパターンは比較的、日本の被験者に多くみられた。

事例2-1は、はじめから気体形であり、中間形をもたず一挙に浮遊化と個別性の喪失が生ずるタイプで、フランスに比較的多かった。しかし、日本でも驚くほど類似の絵が少なからず見られた（事例2-2）。

事例3-1と事例3-2は動物形（異人化）となる珍しい例である。こうした絵は日仏双方で少数ながら見られた。輪廻転生観からはほど遠いキリスト教文化圏のフランスでもこのタイプの絵が見られた点は興味深い。(Kato, Y. & Yamada, Y.)



事例３－１（フランス）



事例３－２（日本）

「あの世」と「この世」の関係イメージ(14)
-イギリスにおける「たましい」の形と移行-

○戸田　有一（鳥取大学）　やまだ　ようこ（京都大学）　加藤　義信（愛知淑徳大学）　井上　篤子#（ロンドン大学）

問題　「たましい」は、古今東西、多くの文化において、身体から遊離して死後も存続する生命原理として表象されてきた。プシュケー、アニマ、ソウル、スピリットなど、心の働きをつかさどる心理学の根本概念でもある。「たましい」観念の文化間比較を行う基礎資料として、すでに、やまだ・加藤・渡辺(1998)により、フランスにおける描画の分析結果は発表されている。今回は、英国における描画の分析結果の一部について検討を行う。

方法　調査協力者：ロンドン南東部のカレッジの大学生 107名（男性26名, 女性80名, 不明1名)。手続き：やまだ・加藤らの一連の研究の質問紙の英語版を作成し、予備調査を実施。その結果を検討後に本調査を実施した。今回は第2設問("If the soul exists after death, what do you think about it? Please draw a picture representing your image of soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.") の描画を分析する。

結果と考察

1 「たましい」の形－3類型の出現頻度　「たましい」の形を「人間形」「魂形」「気体形」「その他」に分類した(分類基準は発心発表6参照)。日本では魂形、フランス（以下、仏と記す）では気体形が多くみられたが、英国の結果も仏の結果と非常によく似ていた(図1)。英国では、魂形を描いた6人(5.7%) の国籍は、英国4、ドイツ1、台湾1であった。また、顔の要素が輪郭なしで描かれている画(図2参照)が2例あり、その描き方が何を表象するのか興味深い。

「たましい」の移行の過程については、もともと「たましい」の形を複数描いている画が7つのみで、その中でも順序性が明らかなものは少なかった。移行の過程そのものへの関心の薄さ、あるいは描画の緻密さの違いのためだろうか。

2 たましいの往来パターン　英国では、たましいが「あの世」に行ったきりで戻らない「一方向」パターンは38.7%(日22.9%, 仏43.1%),「あの世」から「この世」への帰還を含む「双方向」は17.0%(日74.7%, 仏38.4%)だった。仏以上に「双方向」が少なく、同じ位置に戻る円環図ではなく別の位置に戻る図が多かった。明確な円環図は2例(英国18歳女性／ﾌｨﾝﾗﾝﾄﾞ32歳女性・仏教)のみであった。

3 生まれ変わりのイメージ　柳田國男が日本の他界観の特徴としてあげた「生まれ変わり」の描画は日本では非常に多かった(やまだ・加藤・渡辺, 1998)。英国の描画では(図3)、仏と同様、「生まれ変わりなし」と「不明」で72.6%を占めた(仏では71%)。しかし、「人間」「赤ん坊」への生まれ変わりも17%みられた(この18人中ｱｼﾞｱ系は1人のみ)。英・仏ともキリスト教文化圏にあるにもかかわらず、生まれ変わりがこのような率(17%と22%)で描かれたことは、たいへんに興味深い。

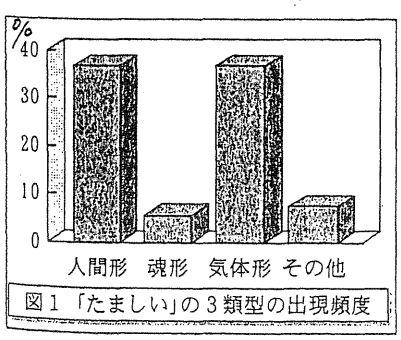


図1 「たましい」の3類型の出現頻度

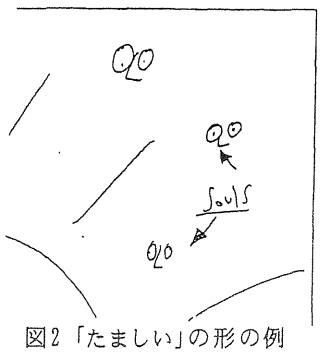


図2 「たましい」の形の例

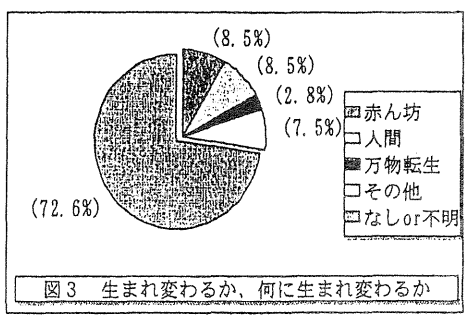


図3　生まれ変わるか、何に生まれ変わるか

(TODA Yuichi, YAMADA Yoko, KATO Yoshinobu & INOUE Atsuko)

「あの世」と「この世」の関係イメージ（15）
― ベトナムにおけるたましいの形と移行 ―

○伊藤哲司（茨城大学人文学部）　やまだようこ（京都大学教育学研究科）

問題　人間が死んだあと「たましい」になるという観念は、古今東西多くの文化において認められる。やまだらはこれまで、日本およびフランスのデータを比較しつつ、この問題について論じてきた。洋の東西という言い方で、西洋あるいは東洋が一つにくくられてしまうことが多いが、東洋の中でも文化は一様ではなかろう、本報告では、ベトナムのデータを取り上げ検討する。

方法　被験者：ベトナム（ハノイ）の大学生 74 名（男性 29 名，女性 44 名, 不明 1 名）

手続き：「もし人が死んでも『たましい』があるとしたらどうでしょうか？亡くなった人のたましいがあの世へ『いく』過程、あの世から『かえる』過程をイメージして絵に描いてください。説明を付け加えてください」と文書で教示し、イメージ画を描いてもらった。

結果と考察

1．たましいの形

イメージ画に描かれたたましいの形を、図 1 のように「人間型」「魂型」「気体型」「その他」に分類した（分類基準は発心発表 6 参照）。たましいの形は気体形が圧倒的に多く、日本人がイメージしやすい魂形はきわめて少なかった。これは、魂形が多く気体形が少ない日本人学生の結果（発心発表 10）とは、明らかに異なる結果である。この世とあの世の境界としての魂形という文化表象は、ベトナムのデータからは明確には認めがたい。

2．たましいの往来パターンと生まれ変わり

たましいがあの世にいってこの世に戻ってくることが描かれているのは 20 %しかなく、日本の場合の 75 %（発心発表 10）と比べると極端に少ない。生まれ変わりがあるものとして描かれているのも 4 %しかなく、大半（81 %）は、生まれ変わりが描かれていない（図 2）。日本でよく見られる循環世界観は認めがたく、祭壇や線香など、現実の物が描かれることが多い（図 3）。

3．ベトナムの文化的背景

以上のようにベトナムのデータは、日本のそれと比べて大きく様相が異なる。ベトナムの宗教的背景は儒教・仏教・道教にあると言われ、中国文化の強い影響下にある。各々の家には必ずといっていいほど先祖を祭る祭壇がある。不慮の死を遂げた人の遺体は家に戻してはならず、霊になって初めて家に帰ることができるとされる（冨田, 1995）。しかし一方、近年、外国から大量に入ってきた科学的な技術や物に対する信頼感はとても強い。それゆえとくに若い世代は、たましいやあの世を含んだ世界観を抱きにくくなっているのかもしれない。さらなる検討を要するところである。

（ITO Tetsuji, YAMADA Yoko）

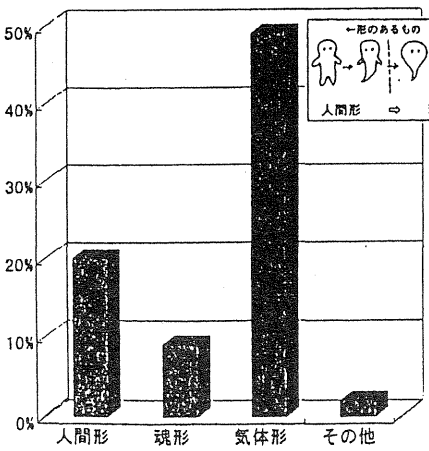


図 1　「たましい」の 3 類型の出現頻度

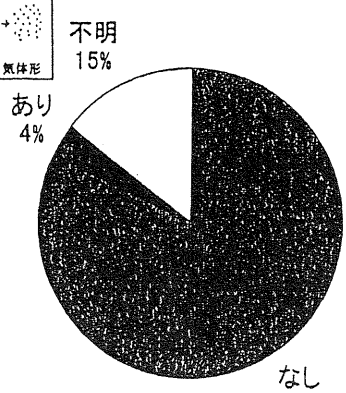


図 2　生まれ変わりが「あり」か「なし」か



図 3　21 歳男性（無宗教）の描画

「あの世」と「この世」の関係イメージ（１６）
－多文化理解の枠組みとしての社会文化的表象ネットワーク・モデル－

○やまだようこ　　加藤義信
（京都大学教育学研究科）　（愛知県立大学文学部）

問題　筆者らはこれまで日本とフランスを中心とする「他界イメージ」と「たましいイメージ」について調べてきた。その基本的立場は、従来の交差文化的研究にみられた西欧文化中心の尺度による比較とは異なって、非西欧文化（本研究の場合は日本）に根ざす発想から出発して、今まで見えなかった西欧文化の中にある他界表象の多様性に光をあてると同時に、日本文化の他界表象を西欧文化のそれに対する「特殊性」としてでなく認識していこうとするものである。筆者らはこのような視点に立って、さらにイギリス、ベトナムを加え東西の多様な他界表象のあり方を理解していきたいと考えるが、ここではそのための枠組みとなるモデルを提案する。

モデル構成のための基本的概念　本研究では、他界やたましいのイメージを社会文化的表象として扱う。社会文化的表象とは、Moscovici(1984, 1988, 1989)らによって提唱された社会的表象（représentation sociale）の概念とほぼ同義であるが、本研究ではイメージや言語に焦点をあてた多文化理解を念頭においているので、敢えて「文化」の語を加えて使用する。社会文化的表象としての他界やたましいとは、ここでは「そのような名前で呼ばれ、何からの性質や価値を付与されて、人々の中で共有されているイメージであって、絵によって表現できる」ものとして定義される。

他界とたましいの社会文化的表象ネットワーク・モデル　下にモデルを図示した。図は２つの文化を便宜上独立に描いているが、本来、文化間には相互関連・相互影響のあることは言うまでもない。どの文化にも共時的次元としての社会文化的コンテクスト、通時的な次元としての歴史的コンテクストがあり、社会文化的表象はその中に埋め込まれていると考える。図では、私たちの研究が扱う表象である「他界イメージ」と「たましいイメージ」がネットワークの結び目に位置づけられている。各表象の中にはさらに小さい表象のネットワークがあって、入れ子状の構造をなす。たとえば、「他界イメージ」の中には個人と社会の相互作用によって生み出されるさらに小単位の表象があって、その最小単位が実際に描かれる個々のイメージ画であるとみなされる。ネットワークのあり方は文化によって異なる。文化間の比較は、社会文化的表象ネットワークの全体パターンの比較である場合もあれば、個々の表象の比較である場合もあるが、私たちの研究は後者を対象とする。そこでは、異文化間にみられる「他界イメージ」や「たましいイメージ」の単なる共通性の抽出でなく、多文化の多様なイメージを統一的に理解可能とする理念的な基本構図を作り上げることが目的となる。

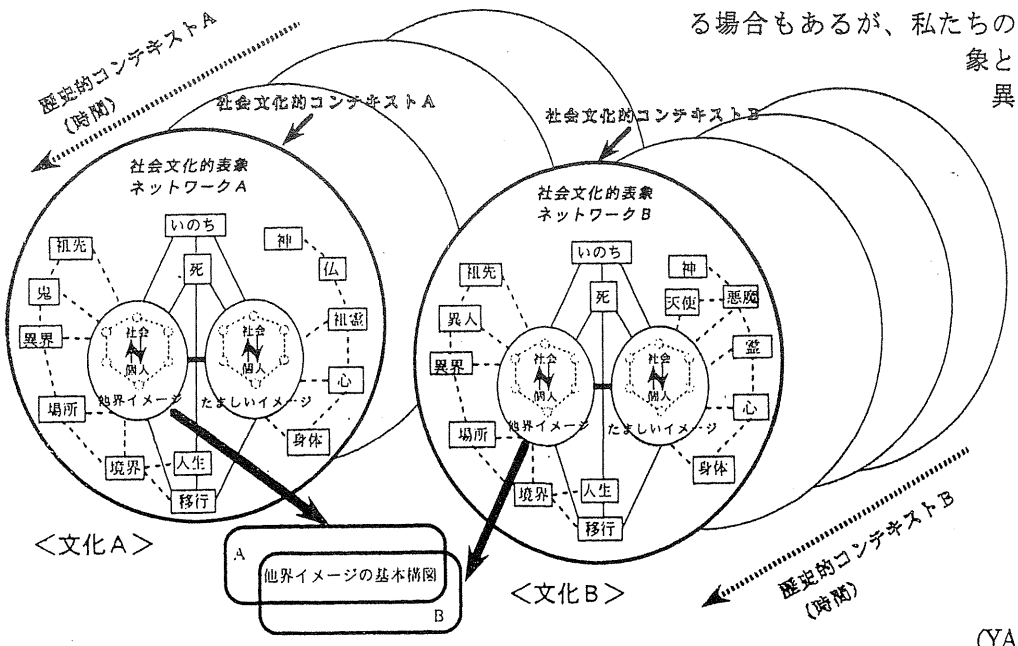


図　多文化理解の枠組みとしての社会文化的表象ネットワーク・モデル

(YAMADA Yoko & KATO Yoshinobu)

PB 102

「あの世」と「この世」の関係イメージ(17)
－イギリスにおける2つの世界の空間配置と分離標識－

○戸田　有一（鳥取大学）　やまだ　ようこ（京都大学）　加藤　義信（愛知県立大学）　井上　篤子#（ロンドン大学）

問題　昨年は「イギリスにおける『たましい』の形と移行」についての集計・分析結果を提示した。今回は、「あの世」と「この世」のイメージ画における用紙上の空間配置、「あの世」と「この世」を区別する標識、2つの世界のコミュニケーションの方向性、2つの世界のそれぞれに対する感情評価についての、集計・分析結果を提示する。

方法　調査協力者：ロンドン南東部のカレッジの大学生 107名(男性26名, 女性80名, 不明1名)。手続き：やまだ・加藤らの一連の研究の質問紙の英語版を作成し、予備調査を実施。その結果を検討後に本調査を実施した。今回は第1設問 ("If the next world after death exists, what do you think about it? Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.") の描画を分析する。

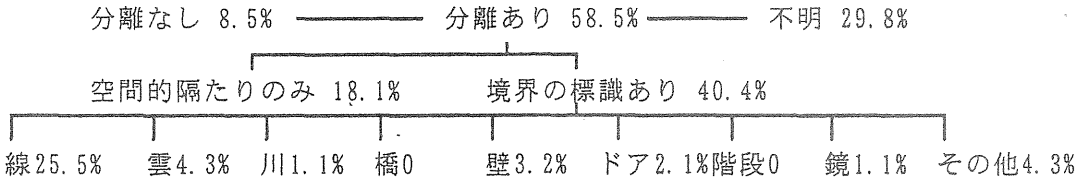
結果と考察

1「あの世」と「この世」のイメージ画における用紙上の空間配置(%)

垂直			水平		斜め				その他	不明
33.0			22.3		20.2				5.3	25.5
上	上下	下	左	右	左上	右上	左下	右下		
23.4	3.2	6.4	4.3	18.1	6.4	10.6	1.1	2.1		

集計結果は、上の表のようになった。「水平」「斜め」の中でダブル・カウントされている場合があるため、合計は100%にならない。やまだ・加藤(1998)による日・仏の結果と比較すると、本結果では「垂直」が少なく「水平」「斜め」が多いように思われる。「垂直」の中では「上」が多いことは日仏と同様で、「水平」の中では「右」が多いことは仏と同様であった。仏では0であった「右上」が1割あったことは意外であった。

2　2つの世界の分離の有無と境界表現



仏の結果と比べて「不明」が1割近く多く、その分「分離あり」が少なかった。また、「線」「雲」の比率が仏(30.9%, 10.6%)に比べてやや低かったが、全体的には仏の結果と同様であった。

3「あの世」と「この世」を区別する標識

「人間の表現による差異化」「超越的存在の表現」「自然の表現による差異化」「人工の事物による差異表現」の順に多かった(ダブル・カウントをしない場合、順に30.9%, 24.5%, 17.0%, 10.6%)。

4　2つの世界のコミュニケーションの方向性

「不明」が6割弱あった。判断可能な画における内訳は、「あの世からこの世のみ」62.2%,「不可能」15.6%,「双方向」13.3%,「夢・記憶・心の中」8.9%と続き、「この世からあの世のみ」はなかった。

		この世（数字は人数）			
		肯定	否定	両価	中性・不明
あの世	肯定	4	7	2	18
	否定	0	0	0	3
	両価	0	0	0	9
	中性・不明	0	0	0	51

5　2つの世界のそれぞれに対する感情評価

右表の結果のとおり、「あの世」が「肯定」でない場合には「この世」への感情評価は明示されていない。

(TODA Yuichi, YAMADA Yoko, KATO Yoshinobu & INOUE Atsuko)

「あの世」と「この世」の関係イメージ（18）
― ベトナムにおける2つの世界の空間配置と分離標識 ―

○伊藤哲司（茨城大学）　やまだようこ（京都大学）

問題　昨年は「ベトナムにおける『たましい』の形と移行」についての集計・分析結果を提示した。今回は発表(17)のイギリスデータと同様に、「あの世」と「この世」のイメージ画における用紙上の空間配置、「あの世」と「この世」を区別する分離標識、2つの世界のコミュニケーションの方向性、2つの世界のそれぞれに対する感情評価についての集計・分析結果を提示する。

方法　調査協力者：ベトナム（ハノイ）の大学生103名（男性38名、女性63名、未記入2名）

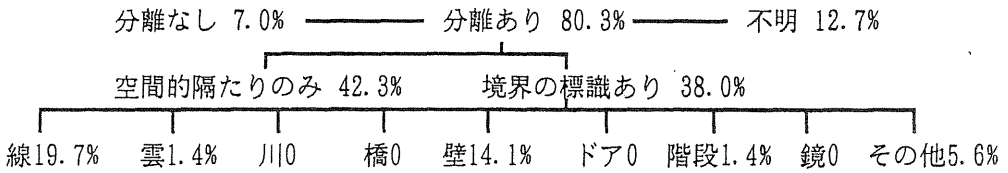
手続き：やまだ・加藤らの一連の研究の質問紙のベトナム語版を作成し、大学の講義時間に実施した。今回は第1設問（「もし死後の世界があるとしたら、どうでしょうか？あの世の人とこの世の人との関係をイメージして絵に描いてください。説明を加えてください」）の描画を分析する。

結果と考察　1「あの世」と「この世」のイメージ画における用紙上の空間配置（%）

垂直			水平		斜め				その他	不明
26.8			46.5		9.9				2.8	15.5
上	上下	下	左	右	左上	右上	左下	右下		
8.5	2.8	15.5	16.9	29.6	2.8	7.0	1.4	1.4		

集計結果は、上表のとおりである。「水平」「斜め」の中でダブル・カウントされている場合があるため、合計は100%にならない。やまだ・加藤(1998)による日本・フランスおよび発表(17)のイギリスの結果と比較すると、ベトナムは「垂直」がもっとも少なく「水平」がもっとも多くなっている。「垂直」は少ないのであるが、その下位項目の「下」は日仏英越のなかでもっとも多い。ベトナムでは、火葬が増えてきたものの土葬がなお主流を占め、また田畑のなかにお墓があるなど、身近な土中に実際に死者がいるということと関連があるのかもしれない。

2　2つの世界の分離の有無と境界表現



「分離あり」が、イギリスよりは多いものの、日本・フランスとは大差がない。ただしそのなかで、「空間的隔たりのみ」というのが相対的に多く、「境界の標識」が描かれることは少なかった。描かれたとしても、シンプルな「線」あるいは「壁」のみであることが多い。「階段」や「雲」などの表現はわずかであった。

3「あの世」と「この世」を区別する標識

「人間の表現による差異化」「自然の表現による差異化」「人工の事物による差異表現」「超越的存在の表現」の順に多かった（順に、26.0%, 20.8%, 3.1%, 2.1%）。

4　2つの世界のコミュニケーションの方向性

「不明」が7割弱あった。判断可能な絵では、「双方向」13.3%、「夢・記憶・心の中」9.2%、「あの世からこの世のみ」5.1%、「不可能」4.1%と続き、「この世からあの世のみ」はなかった。

		この世（数字は人数）			
		肯定	否定	両価	中性・不明
あの世	肯定	3	1	0	5
	否定	10	0	0	8
	両価	1	0	2	5
	中性・不明	1	0	0	62

5　2つの世界のそれぞれに対する感情評価

右上の表のとおり、日仏英にはほとんど見られなかった、この世が肯定的であの世が否定的という絵がいくつか認められたのが特徴的である。　(ITO Tetsuji & YAMADA Yoko)

日本教育心理学会第43回総会発表論文集，P.312.

PD 04

「あの世」と「この世」の関係イメージ（１９）

－日・越・仏・英データにみる信念項目群内の順序性構造の表現－

戸田　有一　（鳥取大学）　やまだ　ようこ　（京都大学）　加藤　義信　（愛知県立大学）　伊藤　哲司　（茨城大学）

目的　日・越・仏・英各国における「あの世」に関する信念項目に関しての回答パターンを比較して考察するために、項目群内の順序性構造を記述する方法を開発し、その方法による記述を試みた。

方法　著者らが1990年代後半に共同で収集した上記４か国のデータを用いた。用いたデータの数は、日327、越103、仏234、英104。

まず、４値である各項目を２値に変換し、項目群内二項目の組合せすべてについてクロス表を作成。次に、順序性基準を満たす程度を検討した。すなわち、おのおののクロス表について、セル間の比率基準(S1)と最小セルの百分率基準(S2)を満たすかどうかを検討した。Ｓ１は、最小セル以外のセルが、最小セルに対して何倍の人数になっているのかを示すもので、すべてが２倍以上であった場合に○、すべてが1.5倍以上であった場合に△一つでも1.5倍に満たない比率があれば×。Ｓ２は最小セルの全体に対する百分率に関するもので、それが10％以下であれば○、15％以下であれば△それよりも大きい場合には×。

この２つの基準を満たしているかどうかについての９パターンのそれぞれについて、「行の項目が『反対』ならば、列の項目はほとんどが『反対』」という場合にはプラスを用い、「行の項目が『賛成』ならば、列の項目はほとんどが『反対』」であればマイナスを用いて、下記の表１のように表記する。

表１　基準と符号の対応

S1	S2	符号	
○	○	＋＋	－－
○	△	＋	－
○	×		
△	○	(＋)	(－)
△	△	(＋)	(－)
△	×		
×	○		
×	△		

表２　４か国すべてのデータを用いての順序性構造の表現

	15	2	9	20	11	5	19	3	8	1	17	18	7	10	14	16	4	21	12
15						(+)	++	++	++	+	++	++	++	++	++	++	++	++	++
2							+	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++	++
9						(+)		(+)	+	++	+	++	++	+	+	++	++	++	++
5	(−)		(−)					(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	++	+	+	+	++	+	++
20							(+)	(+)		+	+	(+)			(+)	(+)	(+)	+	++
11													+		++	(+)	(+)	(+)	(+)
8	−−	−−	−			(−)								(+)	++	+	(+)	+	++
19	−−	−		(−)										(+)		+	(+)	(+)	++
3	−−	−−	(−)	(−)		(−)								(+)		(+)	(+)	(+)	++
7	−−	−−	−−		−	−−									(+)	(+)	(+)	(+)	++
18	−−	−−	−−	(−)		(−)										(+)	(+)	(+)	(+)
17	−−	−−	−	−		(−)											(+)	(+)	(+)
1	−	−−	−−	−		(−)													(+)
4	−−	−−	−−	(−)	(−)	−−	(−)	(−)	(−)		(−)	(−)	(−)						
14	−−	−−	−	(−)	−−	−			−−				(−)						(+)
10	−−	−−	−			−	(−)	(−)	(−)										(+)
16	−−	−−	−−	(−)	(−)	−	−	(−)	−			(−)	(−)						
21	−−	−−	−−	−	(−)	−	−	(−)	−		(−)	(−)	(−)						
12	−−	−−	−−	−−	(−)	−−	−−	−−	−−	(−)	(−)	(−)	−−	(−)	(−)				

表３　フランスを基準にしての各国の順序性構造の比較

質問項目（略記）	日	越	仏	英
15．肉体死後も魂残る	○	◎	◎	◎
2．死後の世界ある	◎	○	◎	◎
11．あの世で苦・痛から救われる	△	×	◎	◎
14．あの世はこの世よりよい	△	△	◎	◎
20．山川草木に自然の霊	×	○	○	◎
9．水子供養はすべき	◎	◎	○	○
8．死による再会	○	○	○	○
18．今世の行動で天国か地獄	△	○	○	○
5．亡親族に守られる	◎	△	○	○
7．天国・極楽浄土ある	○	△	○	○
16．地獄ある	△	△	○	○
21．死後の審判ある	△	△	○	○
19．浮遊霊もある	◎	○	△	△
1．供養しないと祟り	◎	○	△	△
3．人の輪廻転生	○	△	△	△
10．死後この世に帰れる	○	△	△	△
17．人は人以外に転生も	○	△	△	△
12．死後も生前同様の生活	△	△	△	△
4．神仏への願い叶う	△	△	△	△

◎：基礎項目　○：中間項目　△：上位項目

×：他の項目との順序性が全く無く、削除した項目

各項目を組合せたクロス表すべてに、表１の基準で符合を与え、その結果を一覧表にした。その一覧表を、行と列のそれぞれについて、＋符合と－符合の差の大きい順に並べ替え、表２のような順序性の構造を求めた。この作業を、４か国全体及び国別に行った。その順序性構造に基づき、順序が先になる項目群から、基礎項目、中間項目、上位項目に分類（ここの基準がまだ曖昧である）。４つの国のいずれかを基準として、国別に異なる分類結果を同時に示した。表３に示したのは、フランスを基準にしたものである。

結果と考察　国ごとに異なる順序性構造が得られ、その結果を、いずれかの国を基準にして示すことで、特定の国からみた「あの世」観の文化差を示しえたのではないかと思われる。比率の差の分析や、相関分析である因子分析とは、項目分類結果の意味あいが異なっている。今後は、方法の精緻化と、より多くのデータを用いての集計、その結果からの丁寧な考察が望まれる。

「この世」と「あの世」の関係イメージ（20）
── ベトナムにおける大学生の他界観 ──

○伊藤哲司（茨城大学）　やまだようこ（京都大学）

問題　一昨年は「ベトナムにおける『たましい』の形と移行」について、昨年は「ベトナムにおける２つの世界の空間配置と分離標識」について発表を行った。今回は、ベトナムで行った同じ調査に含まれている他界観についての質問項目結果について、すでに報告済み（報告８）の日本での結果と比較検討しながら報告する。

方法　調査協力者：ベトナム（ハノイ）の大学生205名（男性68名、女性133名、未記入4名）
手続き：やまだ・加藤らの一連の研究の質問紙のベトナム語版を作成し、大学の講義時間に実施した。今回は第４設問の、他界観についての21項目の質問項目（下記参照、回答は４件法）の結果を分析する。

結果と考察　21項目の質問の回答（まったく賛成・やや賛成・やや反対・まったく反対）を、賛成と反対に二分し、それぞれの項目の賛成率を算出した。また男女別での集計も行った。下の表に、日本の大学生の結果とともに列記する。

表　ベトナムの大学生の各質問項目への賛成率（%）

	質問項目	ベトナム 全体	ベトナム 男性	ベトナム 女性	日本
Q1	死者の供養をしないとたたりがあると思う	48.8	35.3	54.9	64.2
Q2	死後の世界はあると思う	39.0	26.5	45.1	66.0
Q3	人は死んでも繰り返し生まれ変わるものだ	21.0	14.7	24.1	61.2
Q4	仏様や神様を信心して願いごとをすれば、いつかその願いごとがかなえられる	21.5	19.1	23.3	42.8
Q5	身近な人は亡くなった後、自分を守ってくれる	42.4	39.7	43.6	69.4
Q6	死とは自分が永久になくなってしまうことである（逆転項目）	49.3	51.5	49.6	41.0
Q7	天国あるいは極楽浄土はあると思う	21.0	19.1	20.3	51.0
Q8	死ぬと、先に死んだ人たちに再会できる	39.0	22.1	48.1	51.1
Q9	水子供養はするべきである	63.4	54.4	67.7	77.7
Q10	死んだ後も、この世に帰ることができる	20.0	11.8	23.3	47.7
Q11	あの世では苦しみや痛みから救われる	41.0	45.6	39.8	45.3
Q12	死んだ後も、あの世では生前同様に生活することができる	18.0	11.8	21.8	30.5
Q13	死ぬと、暗闇に入っていって、二度とそこから出ることはできない	57.1	64.7	54.1	12.6
Q14	あの世はこの世よりもっとよいと思う	14.1	13.2	13.5	33.6
Q15	肉体は死んでも魂は残る	52.2	42.6	56.4	55.3
Q16	地獄はあると思う	25.4	20.6	28.6	34.8
Q17	人は人間以外のものに生まれ変わることもある	13.2	11.8	12.8	60.2
Q18	この世のおこないによって、天国に行くか地獄に行くかが決まる	38.0	30.9	41.4	40.6
Q19	行き場所がなく、ただよう魂も存在する	39.0	30.9	42.9	61.8
Q20	山・川・草・木などに自然の霊が宿っているように感じることがある	55.1	51.5	56.4	60.6
Q21	死後に何らかの審判はあると思う	20.5	14.7	22.6	36.7

註）無答率は7.5%未満　全体の百分率が男女両方の百分率を上回るものがあるのは性別未記入のものがあるため

おおむねどの項目でも、ベトナムの大学生のほうが日本の大学生の肯定率を下回った。とくに「Q2 死後の世界はあると思う」「Q3 人は死んでも繰り返し生まれ変わるものだ」「Q10 死んだ後も、この世に帰ることができる」「Q17 人は人間以外のものに生まれ変わることもある」「Q19 行き場所がなく、ただよう魂も存在する」には顕著な差異が認められる。逆に「Q13 死ぬと、暗闇に入っていって、二度とそこから出ることはできない」では、ベトナムの大学生の肯定率が大きく上回っている。ベトナムの男性と女性を比較してみると、男性のほうがおおむね肯定率は低い。ベトナムでは日本以上に伝統的な考え方や行事などが根強く残っている一方、若い大学生がこのような回答をすることから窺われる他界観は、さらに検討される必要があろう。因子分析を行った結果も、日本の大学生のそれとは様相が大きく異なった。それについては当日発表したい。（ITO Tetsuji, YAMADA Yoko）

会員企画シンポジウム 36

ライフサイクルと死生観

＜企画・司会＞　やまだようこ（京都大学教育学研究科）

＜話題提供＞

「ライフサイクルのパラダイム」をめぐる問い　西平直（東京大学教育学研究科）
沖縄のオバァの長寿と死生観　大橋英寿（東北大学文学部）
臨死体験研究と人生観　カール・ベッカー（京都大学総合人間学部）
日仏青年の「あの世」と「たましい」イメージ　やまだようこ（京都大学教育学研究科）

key words: life cycle, developmental models, life and death

＜企画趣旨＞　人類がかつて経験したことがなかった高齢化社会を迎えて、私たちは老いや死の問題と真剣に向き合わざるをえなくなった。今まで青年期どまりであった発達心理学は、生涯発達心理学に変貌し、成年期や老年期など人生全体を視野に入れるようになってきた。しかし、生涯発達は、単に時間軸を長くするというライフ・スパン（巾）の問題としてではなく、人間観や人生観や世界観のパラダイム変換の問題としてとらえなければならない。かつては多くの文化において、人の生命（life）や人生（life）や生活（life）は「個人」の死とともに終結し無になるのではなく、死や死者を含めた人生サイクルが想定され、世代間連関のサイクルや、生命循環など「関係性」のなかで位置づけられてきた。このシンポジウムでは、サイクル（円環・循環）概念をもとに、近代の進歩・進化思想に彩られた単線・上昇・階段状の発達観を根底から問い返してみたい。そして「死」の側から見た「生」という逆照射によって、成熟とは？　老いとは？　生きがいとは？　死とは？　など人生の根本問題について新たな視点を提供し、それをもとに心理学理論を再構築していく可能性について考えていきたい。

「ライフサイクルのパラダイム」をめぐる問い

西平直（東京大学教育学研究科）

ライフサイクルの中での死とは何か。どういう意味を持つことなのか。その問いに対する答えは、そのまま、ライフサイクルの「かたち」を暗示するだろう。

人が生まれ、死んでゆく。そのプロセス全体のイメージ。燃えつきる。昇っていって消えてゆく。むしろ、満たされ、完成する。還っていって、また来る・・。

もしそうした「かたち」の全体を、「パラダイム」と呼んでみれば、「ライフサイクルのパラダイム」。おそらく、それを相手にするということは、私たちがまさにそれを生きている当の人生を問うことであり、それはそのまま、私たちの「こころ」の深層を問うことでもあるのだろう。さしあたり、シュタイナーやユングの思想を手掛かりに、いくつかのモデルを検討してみたい。

沖縄のオバァの長寿と死生観

大橋英寿（東北大学文学部）

沖縄は世界有数の長寿地域であるが、それはオバァたち高齢女性で、平均寿命85.08歳は全国一であるばかりでなく（全国平均 83.22 歳）、威厳さえ感じられる。土着シャーマニズムのフィールドワークの知見をもとに、沖縄のオバァの長寿には伝統的コスモロジーや日常的信仰がかかわっている、との仮説をいだくにいたった。すなわち、（1）自己の一生を祖先系譜と子孫をつなぐ「点」としてとらえており、両者を媒介する役割の自覚がオバァに責任感と威厳をもたらしている。（2）「あの世」についてのリアルで確かな存在感が、死をめぐる緊張感を緩和して長寿を促している。（3）習慣になっているウグァン（祖先拝み）が自律性解放をもたらし、自己治癒作用をもつ。

要するに、「祖先崇拝」という民間信仰の日常実践とそれを支えるコスモロジーに、精神療法や長寿促進要因が巧まずして組み込まれているのであり、それを培ってきた沖縄の精神文化に注目したい。

臨死体験研究と人生観

カール・ベッカー（京都大学総合人間学部）

臨死体験という現象は、千年も昔から日本でも記録されているが、最近は学問的に研究されるようになった。蘇った臨死体験者の話を追跡調査すると、意識不明の患者が知る術のない事実を把握していたという発見が度々ある。その様な体験に驚いた平安時代の仏教僧が来迎図や往生極楽記等を残したが、現在も日本人は同様の体験をし、これは深層心理や精神に深い影響を与える問題である。

臨死体験は、体外離脱、トンネル、他界体験、先祖再会、生涯反省、境界線によって特徴付けられるが、これらはどの様に応用できようか。分類してみると、（1）死への恐怖を取り除くカウンセリング、（2）自殺防止カウンセリング、（3）看護婦カウンセリング、（4）遺族カウンセリング、（5）尊厳死、（6）世間体的価値観の見直し、の6つに分けられるであろう。

日仏青年の「あの世」と「たましい」イメージ

やまだようこ（京都大学教育学研究科）

かつて死は人生の終結ではなかった。多くの文化において人生の延長上に「あの世」が想定され、個人のライフサイクルは、世代間連関や共同体の歴史や神話を含む大きなライフサイクルに組み込まれていた。日本文化においても、生と死は、時間・空間概念である「世」（沖縄では世・ユーは、豊饒をも意味する）コスモロジーのなかに位置づけられ、柳田國男が「他界の近さ」と言ったように、親しい死者との交流が生者の生活世界のなかに位置づけられていた。生命原理としての「たましい」（たま、魂魄、プシュケー）概念も、古今東西、多くの文化に共通してみられる。このようなイメージは、科学文明が浸透した現代においても、心理的表象や素朴概念として重要な位置をしめるのではないだろうか。

現在共同研究をすすめている、日本とフランスの青年が描いた「この世」と「あの世」のイメージ画分析（共同研究者：加藤義信＆ Wallon,P.）から、現代の他界観とたましいのかたちと人生移行、サイクル・リサイクルを含む生態循環世界観について考えてみたい。　（YAMADA Yoko, NISHIHIRA Tadashi, OHASHI Hideshi, & BECKER Carl）

社会・文化的文脈からみた人生サイクルと他界観

日本・ベトナム・イギリス・フランスの「この世とあの世」のイメージをもとに

企画：　やまだようこ　（京都大学）
司会：　戸田有一　（大阪教育大学）

話題提供：

他界の空間イメージ　―日本、ベトナム、イギリス、フランスの大学生が描いた絵の比較
加藤義信　（愛知県立大学）

アジアの視点からみた他界イメージ　―ベトナムにおける「この世とあの世」のイメージ画を中心に
伊藤哲司　（茨城大学）

他界観を含むライフ（いのち・人生）サイクル　―4か国の「たましい」の循環と生まれ変わりのイメージ画をもとに
やまだようこ　（京都大学）

指定討論：

遠藤利彦　（京都大学）
渡辺恒夫　（東邦大学）
矢守克也　（奈良大学）
山本登志哉　（前橋国際大学）

企画趣旨

本シンポジウムでは、話題提供者たちが共同研究をしてきた日本・ベトナム・イギリス・フランスの「この世とあの世」のイメージ研究を素材にしながら、発達心理学、理論心理学、社会心理学、アジアのフィールドワークなどをベースにもつ論客と縦横に論じ合いたい。そして、生涯発達心理学の新たなモデルをつくっていくための理論的・方法的問題について、遠くの地平線のかなたを射程に入れながら、なおかつ足を地に着けて具体的・現実的に考えてみたい。具体的な研究をもとに議論しなければ、机上の空論と総論に終わる。それでは真の独創的な研究の発展は望めないと考えるからである。

発達心理学が、生涯発達心理学に変貌してから久しいが、まだ個人の生涯（生まれてから死ぬまで）だけが視野に入れられている。生涯発達の新たなモデルをつくるためには、世代間の関係性と生命観や他界観を含むライフサイクル理論が必要だろう。それには、心理学が前提としてきた、時間や空間表象の理論的問い直しが必要となる。なぜなら、サイクルとは、循環する時間や繰り返される時間という概念を含むからである。このような観点から、心理学が依拠してきた「近代西欧」や「科学」的世界観を、特に日本を含めた東アジアの発想をもとにして問い返す作業を試みたい。

また、人間の生涯を社会・文化的文脈のなかで捉える必要性は、今や生涯発達心理学では常識になった。しかし、それを実際にどのような方法で研究すればよいかは相当に難しい。社会・文化的文脈の異なる人々が何を考え、どう行動しているかを知るには、単純な国際比較をしても、簡単には理解できないだろう。なぜなら用いられる理論的前提や方法・道具にすでに文化的バイアスが含まれているからである。この観点を推し進めれば、「国際比較」をしないで、それぞれの固有の文脈に深く入り込んだローカルなフィールドワークをしたほうが実り豊かということになる。その通りである。しかし、それだけでよいのだろうか。地を這う「虫」の視点とともに、国境や時代を超えて飛ぶ「鳥」の視点をもつために、何をどう研究すべきだろうか。生き生きしたフィールドの知と理論の知、文化的多様性と文化を超える一般性、両者を併せ持つ方法論のあり方についても考えてみたい。

他界の空間イメージ
－日本、ベトナム、イギリス、フランスの大学生が描いた絵の比較－

加藤義信
（愛知県立大学文学部）

問題：やまだのアイデアによって始まった他界観に関する私たちの共同研究では、これまでの研究とは異なる以下のような視点・方法を重視してきた。①言語的に表現可能な他界の実在性に関する信念の領域だけを問題としないこと、②むしろ、通常ははっきりした形となって表現されることのない他界観の映像的側面、すなわち他界イメージを問題とすること、③その際、個人が生成するイメージの多様性を大切にすること、④そうした多様性を貫いて存在すると思われるイメージ合成やイメージ変形のロジックに注目すること（Yamada & Kato, in press)、⑤異なる文化の中にどのようなイメージ形態の共通性と差異性が見いだされるかを２項、３項の比較でなくmultipleな比較によって明らかにすること、⑥とりわけ、近代西欧のフレームを通して検出されるアジア的異質でなく、日本あるいは東アジアのフレームによって逆照射される西欧の中の異質に目を向けること。

このような研究意図がどの程度実現したかを議論する材料として、本話題提供では、日本、ベトナム（以下、越と略)、イギリス、フランスの４カ国の大学生が描いた「この世とあの世」の関係イメージの絵を、主に空間的次元から比較・分析して報告する。

方法：＜研究協力者＞日327名、越205名、英222名、仏234名の大学生。このうち、実際の分析にあたっては、白紙回答者、及び英仏２カ国の場合は異文化出身留学生を除いた。＜調査内容＞調査は①「あの世」と「この世」の関係イメージの描画、②２つの世界の移行に関するイメージの描画、③他界信念質問紙、からなる。ここでは、①の結果を報告する。

結果と考察：得られた絵を３つの視点から分析した。a）<u>「この世」と「あの世」の用紙上の空間配置</u>：不明な場合を除き、垂直、水平、斜め、その他に分類してみたところ、日英仏の３カ国はいずれも垂直配置が50%強、水平配置が20%前後というよく似た傾向を示したのに対し、越の場合だけ、垂直が32.2%、水平が58.5%となった（図１)。このことは、特定の国を代表例として「西洋対東洋」あるいは「西欧対東アジア（日本)」といった大づかみな文化比較図式から何事かを語ることの危うさを物語っている。日本の垂直配置の優位については、伝統文化に根ざす要因によるものか、「近代」社会の上昇イメージを反映する空間図式によるものかは議論の余地があるだろう。b）<u>「この世」と「あの世」の分離と境界の標識</u>：４カ国とも、２世界が同一平面に共存する「分離なし」タイプの絵の比率は１割前後であった。日越では「不明」の割合は少なく（１割以下）英仏ではこれが４分の１近くに達したが、この点を除けば、２世界を分離してとらえるか否か、分離としてとらえているとすればそこに境界を画するか否か、に関しては４カ国を通して類似の傾向が見られたといえる。ただ、境界を画する場合に何をその象徴として利用するかは文化によって異なっており、日では「雲」が、越では『壁」が相対的に多く用いられる傾向があった。c）<u>「この世」と「あの世」のコミュニケーションの可能性</u>：いずれの国においても判断不能がもっとも多かったが、判断可能な絵についてのみ見ると、日本では「あの世」からの一方的なコミュニケーションとしてイメージされる割合が高く、なかでも天上から「見守る」タイプの絵が多かった。対照的に、越では双方向の割合が高く、英仏は日越の中間の傾向となった。

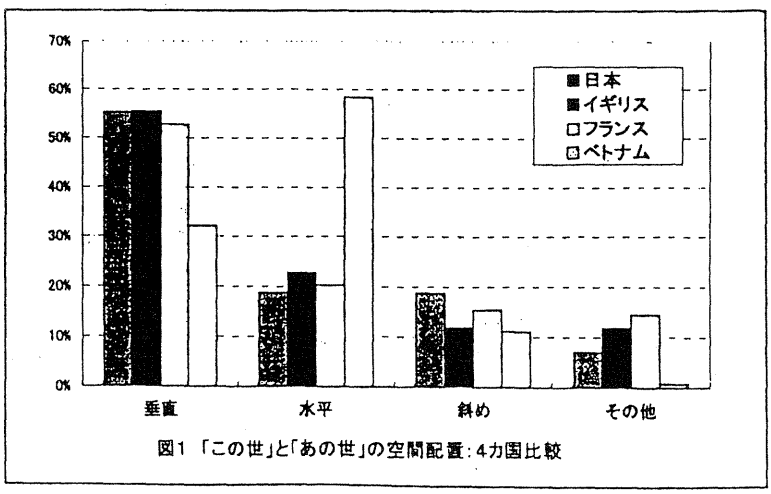


図1「この世」と「あの世」の空間配置：4カ国比較

日本発達心理学会第14回大会発表論文集，2003年3月

アジアの視点からみた他界イメージ

── ベトナムにおける「この世とあの世」のイメージ画を中心に ──

伊藤哲司
（茨城大学人文学部）

やまだを中心とするこの共同研究では、当初日本とフランスで収集されたデータの比較を中心に進められてきた。そこに後からイギリスとベトナムのデータが加わり、現在では4カ国の国際比較研究へと進展している。ありがちな西洋と日本の比較ということにとどめず、アジアのなかでも、その多様性を探ろうという試みも続けている。洋の東西という言い方にそってアジアはひとくくりに考えられがちだが、当然そこにも豊かな文化的多様性が認められる。

日本とベトナムは、文化的な背景として共通点も少なくない。宗教的にはベトナムも仏教（大乗仏教）が中心であるし、儒教や道教の影響も見られる。言語的には、ベトナム語もまた中国語の影響を大きく受けており、多くの漢越語が存在している。ベトナム語の表記こそ現在ではアルファベットを常用しているが、漢字表記も可能な単語が少なくない。食文化という点でベトナムは、日本・朝鮮・中国と、お箸を常用するということが共通している。ベトナム中部の街（ホイアン）にはかつて日本町が存在したと言われるし、戦時中の日本軍による支配という時代があったものの、おおむねベトナム人は親日的であるし、日本への関心も高い。

しかし、政治的にはベトナムは周知の通り社会主義国であり、ベトナム共産党が一党で支配する国家体制を形成している。かつての指導者であるホー＝チ＝ミン氏に対する人々の親近感はとても強く、現在でも彼はベトナム人の精神的な支えとして位置づけられている。（むろんベトナムの戦後にボートピープルとなり難民として国外に出たベトナム系住民にとっては、より複雑な想いが存在するも事実である。）1975年に、いわゆるベトナム戦争が最終的に集結し、翌1976年に南北の正式な統一が実現するが、その後の社会主義経済は必ずしも上手くいかず、「貧しさを分かちあう社会主義」と言われた貧困の時代を約10年間にわたって経験した。その後1986年からドイモイ（刷新）と呼ばれる市場経済化に乗りだし、東南アジアのなかでは目覚ましい経済発展を遂げつつある。現在のベトナムでは、都市部では多くの物が溢れるように売られており、社会主義的な雰囲気を感じることのほうが難しいという一面もある。

この遅れてやってきた近代化の波のなかでも、もちろん伝統的な習慣や考え方というのは根強く残っている。しかしながら意外にもと言うべきか、ベトナム人学生が描く「この世とあの世」のイメージ画は、必ずしも豊かではなく、「信じていないから（あの世は）描けない」といったものであったりする。あるいは「あの世」は直接描かれず、線香を供えて祈る人の姿だけが描かれることも少なくない。日本人の学生によるイメージ画とは相違点が大きく、むしろ日本データは、フランス・イギリスのそれに近い。ベトナム人学生が近代科学的なものの考え方がやや遅れて入ってきた社会主義国のエリートであるということを考慮すれば、これはある意味でうなずける結果である。

そのようなベトナム人学生が描いた絵でも、もちろんしばしば何らかの「この世とあの世」のイメージが描かれる。そしてそれらを検討するうちに、ベトナムのイメージ画には、他国のイメージ画には見られない特徴があることがわかってきた。たとえば、日本・フランス・イギリスのイメージ画には、地獄でもない「あの世」が下に描かれるということはほとんどないが、ベトナムのイメージ画にはしばしば見られることである。土中にいる死者が紙面上で横に描かれることもあり、どうやら私たちが暗黙のうちに抱いている上下という絶対軸の概念からして違っているようである。

本報告では、このベトナム人学生が描いたイメージ画を日本などとのそれとの比較の観点から取り上げ、ベトナムにおける他界観を検討したい。またそのことを通して、ベトナムということにとどまらないアジアの多様性を見渡す視座を提供したいと思う。

他界観を含むライフ(いのち・人生)サイクル

—4 か国の「たましい」の循環と生まれ変わりのイメージ画をもとに—

やまだようこ
(京都大学大学院教育学研究科)

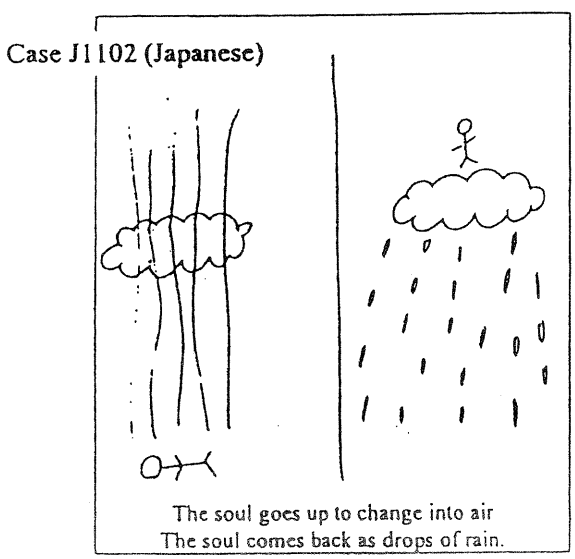
発達心理学が、生涯発達心理学に変貌してから久しいが、まだ個人の生涯だけが視野に入れられている。「人が生まれてから死ぬまで」を扱う「ライフ・スパン」モデルでは、一方向に進む線形の時間概念が仮定され、人生のスタートを「誕生」に、ゴールを「死」においてきた。

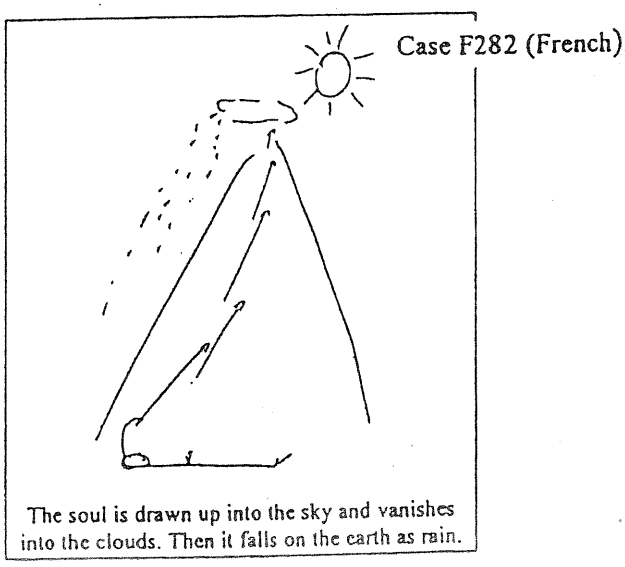
人の人生のゴールは「死」だろうか？遅かれ早かれ訪れる「死」によってすべては消滅し終わるのだろうか？それは一理あるが、別の考え方もできる。人間は想像力によって死後の世界を予期し、未来から逆照射して現在の生を生きることができる動物である。死後のイメージは、人間が想像力をフルに使って長年紡いできた「共同幻想」「共同物語」かもしれないが、人間は「幻想」や「物語」によって生きる存在だから、「幻想」や「物語」はそれ自体が心理的リアリティをもち人間の生を規定しうると考えられる。

個人の「死」のあとに何かが生き残るというイメージは「たましい」(soul,spirit) と呼ばれ、多くの文化で普遍的に仮定されてきた。これは前近代の非科学的なイメージにすぎないのだろうか？しかし、たとえば「遺伝子」を考えてみよう。個人の「死」後に何かが生き残り、それが次世代に引き継がれるというイメージは、個人を超える共同体としてのいのちの流れを考えるならば、その呼び名(「たましい」と呼ぶかどうか)は別として、世代間連関を考えるために重要なイメージとして再考できるだろう。

私たちの共同研究では、「たましい」や「他界」の実在性を問うてはいない。この世とあの世を往来する「たましい」のイメージ画をもとに、日本文化のなかに根強くある「生死の循環」「いのちのサイクル」「生まれ変わり」概念を、他の文化のイメージと比較し相対化しながら考えてみたい。そして、心理学が依拠してきた「近代西欧」や「科学」的世界観を問い返し、ライフサイクル観の再構築を試みたいのである。

方法：＜研究協力者＞＜調査内容＞加藤の発表と同様。特に②死後の「たましい」の移行(たましいが、この世からあの世へ行く過程と帰る過程)のイメージ画を分析。結果と考察：たましいの形と往来のパターンを分析した。(図は、日仏学生がよく似た構図で描いた、「たましいが空気となって空にのぼり、雨となって地に戻ってくる」天地循環イメージの事例)





「あの世」と「この世」の関係
イメージ調査

イメージ比較文化　研究会

世界の多くの文化には、「あの世」と「この世」の関係について、さまざまに異なるイメージがあると思われます。同時に、文化の違いを越えて共通するイメージもあるでしょう。この調査は、こうした基本的なイメージの多様性と共通性を調べるために、日本、フランスをはじめとする世界の国々で実施されます。

これは、イメージの文化比較のための調査です。性格や描画の能力を見るためのものではありませんから、一人一人の回答内容を分析の対象とはいたしません。調査は**無記名**でおこない、全体の結果だけについて考察し、お答えしていただくあなた個人にご迷惑のかかることはありません。

国際比較のために、ことばよりも絵を使います。問いかけられたことについて、思い浮かんだイメージをあまり深く考えないで、気楽に描いてください。絵の上手・下手はいっさい問いません。絵は、何かにたとえたものでも、どんなものでも結構ですので自由に描いてください。

研究代表者　980-11　愛知県愛知郡長久手町大字長湫字片平9
愛知淑徳大学文学部コミュニケーション学科
教授　山田　洋子
教授　加藤　義信

最初に、あなた自身のことについて、おうかがいします。

（1）調査年月日：　19　　年　　月　　日

（2）年齢（性別）：　　歳　（男　女）

（3）次の問いにたいして、下から番号を選んで（ ）内に記入し、県名を書き添えてください。

a．あなたが主に育ったところ：　（　　）　　県

b．あなたが現在住んでいるところ：　（　　）　　県

＜選択肢＞ 1　農・山・漁村地域
2　一部は市街地化が進んでいるが、農・山・漁村の姿が多く残っている地域
3　ほとんどが市街地化された都市の近郊（住宅地）
4　中小都市の町なか
5　大都市の町なか

（4）次の問いにたいして、下から番号を選んで（ ）内に記入してください。

a．あなたの現在の職業：　（　　）

b．あなたのお父さんの職業：　（　　）

c．あなたのお母さんの職業：　（　　）

＜選択肢＞ 1　学生　2　自営業（農業、商業など）　3　現業・技能職　4　一般事務職
5　管理職　6　専門職　7　主婦（パートで働いている）　8　主婦（専業）
9　そのほか［　　］

（5）前問aで「学生」と答えた方は、学校名を記入してください。

学校名：　　（　　学部　　学科・課程　　年）

（6）近親者のうち死別した人がいますか。当てはまる番号にマルをつけ、「いる」と答えた場合には、さらに（ ）内の該当する項目にマルをつけてください（複数回答可）。

1　いない　2　いる　（祖父母　父　母　兄弟姉妹　そのほか［　　］）

（8）身近な死に立ち会った経験がありますか。「ある」と答えた場合には、さらに（ ）内の当てはまる項目にマルをつけてください（複数回答可）。

1　ない　2　ある　（近親者　友人　ペット　そのほか［　　］）

（9）自分が死ぬかと思った経験がありますか。「ある」と答えた場合には、さらに（ ）内の当てはまる項目にマルをつけてください（複数回答可）。

1　ない　2　ある　（病気　事故　悩み　そのほか［　　］）

（10）次の問いにたいして、下から番号を選んで（ ）内に記入し、答えてください。

a．あなたの家族の宗教：　（　　）

b．あなた自身の宗教：　（　　）

＜選択肢＞ 1　キリスト教（カトリック）　2　キリスト教（プロテスタント）　3　ユダヤ教
4　イスラム教　5　仏教　6　神道　7　そのほかの宗教［　　］
8　なし　9　わからない

1）もし死後の世界があるとしたら、どうでしょうか？
あの世にいる人と、この世の人との関係をイメージして絵に描いてください。
説明をつけ加えてください。

説明：（もし必要なら、絵の中に説明をつけ加えて結構です。）

2) もし死んでも「たましい」があるとしたら、どうでしょうか？
亡くなった人のたましいが、この世からあの世へ「いく」過程、あの世からこの世へ「かえる」過程をイメージして絵に描いてください。 説明をつけ加えてください。

説明：（もし必要なら、絵の中に説明をつけ加えて結構です。）

3）もし「この世」と「あの世」のそれぞれを色でイメージするとしたら、どの色で表しますか？
それはなぜですか？

この世 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

（理由 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

あの世 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

（理由 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

4）次の問いについて、いちばん当てはまる番号にマルをつけてください。

まったく賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	まったく反対
1	2	3	4

1	死後の供養をしないとたたりがあると思う	1	2	3	4
2	死後の世界はあると思う	1	2	3	4
3	人は死んでも繰り返し生まれ変わるものだ	1	2	3	4
4	仏様や神様を信心して願いごとをすれば、いつかその願いごとがかなえられる	1	2	3	4
5	身近な人は亡くなった後、自分を守ってくれる	1	2	3	4
6	死とは自己が永久になくなってしまうことである	1	2	3	4
7	天国あるいは極楽浄土はあると思う	1	2	3	4
8	死ぬと、先に死んだ親しい人たちに再会できる	1	2	3	4
9	水子供養はするべきである	1	2	3	4
10	死んだ後も、この世へ帰ることができる	1	2	3	4
11	あの世では苦しみや痛みから救われる	1	2	3	4
12	死んだ後も、あの世では、生前同様に生活することができる	1	2	3	4
13	死ぬと、暗闇の世界へはいって、二度とそこから出ることはできない	1	2	3	4

14	あの世は、この世よりもっとよいと思う	1	2	3	4
15	肉体は死んでも魂は残る	1	2	3	4
16	地獄はあると思う	1	2	3	4
17	人は人間以外のものに生まれかわることもある	1	2	3	4
18	この世のおこないによって、天国に行くか地獄に行くかが決まる	1	2	3	4
19	死後、行き場所がなく、ただよう魂も存在する	1	2	3	4
20	山・川・草・木などに自然の霊が宿っているように感じることがある	1	2	3	4
21	死後に、なんらかの審判はあると思う	1	2	3	4

ご協力、ありがとうございました。

◇◇◇◇◇◇

描いていただいた絵は、学術論文などに利用する場合があります。この点も含め、この調査についてご意見があれば、なんでもお書きください。

◇◇◇◇◇◇

TƯỞNG TƯỢNG VỀ MỐI QUAN HỆ GIỮA THẾ GIỚI NÀY VÀ THẾ GIỚI BÊN KIA SAU CÁI CHẾT

Mục đích của bảng hỏi này là tìm hiểu những tưởng tượng của con người trong cuộc sống hàng ngày về mối quan hệ giữa thế giới này và thế giới bên kia sau cái chết. Nghiên cứu của chúng tôi được thực hiện trong khuôn khổ tâm lý học văn hóa với sự hợp tác của các nhà nghiên cứu từ nhiều quốc gia như Nhật bản, Pháp, ...Chúng tôi không quan tâm đến các kiểu giải thích phân tâm về dữ liệu cá nhân. Vì thế bạn đừng lo lắng về điều đó.

Chúng tôi cũng không có ý định nhận dạng các cá nhân qua bảng hỏi để so sánh với kết quả học tập. Vì thế, bạn không cần phải ghi lại tên mình trên bảng trả lời.

Nghiên cứu của chúng tôi sử dụng phương pháp vẽ tự do cùng với giải thích bằng lời. Chúng tôi cho rằng vẽ là phương pháp thuận tiện và hữu ích để so sánh các biểu trưng của nhiều nền văn hóa khác nhau.

Bạn đừng bận tâm đến kỹ năng vẽ của mình. Bất cứ kiểu vẽ hình tượng, ẩn dụ hoặc trừu tượng bạn đều có thể sử dụng được.

Ngày:....., 1998 Tuổi: .....
Giới tính: 1. Nam
2. Nữ
Trường: .....
Chuyên ngành: .....

Bạn đã từng chứng kiến cái chết của người thân của mình chưa?: 1. Có
2. Không
Nếu "Có" thì đó là ai?: .....
Bạn đã từng trải qua thời điểm kề cận cái chết: 1. Có
2. Không
Nếu "Có" thì trong trường hợp nào? .....
Bạn đã từng trải qua cảm giác sợ chết một cách mạnh mẽ?: 1. Có
2. Không
Nếu "Có" thì lúc đó bạn bao nhiêu tuổi? .....
Tôn giáo của gia đình bạn ..... Tôn giáo của bạn: .....

1) Nếu như tồn tại một thế giới bên kia sau cái chết thì bạn nghĩ về điều đó như thế nào? Bạn hãy vẽ một bức tranh trình bày tưởng tượng của bạn về mối quan hệ của con ngươi thế giới này và những người ở thế giới bên kia.

Bạn hãy giải thích bức vẽ của mình.

2) Nếu linh hồn tồn tại sau cái chết thì bạn nghĩ về điều đó như thế nào? Bạn hãy vẽ một bức tranh trình bày tưởng tượng của bạn về đường đi của linh hồn từ thế giới này đến thế giới bên kia và từ thế giới bên kia đến thế giới này.

Bạn hãy giải thích bức vẽ của mình.

3) Nếu bạn phải tô màu cho thế giới này và thế giới bên kia sau cái chết thì bạn sẽ chọn màu nào? Bạn hãy giải thích lý do tại sao bạn chọn màu đó.

Thế giới này: .....
(lý do: .....)
Thế giới bên kia: .....
(lý do: .....)

4) Bạn hãy khoanh số tương ứng phù hợp nhất cho mỗi mệnh đề sau đây:

Đồng ý hoàn toàn	Đồng ý	Không đồng ý	Hoàn toàn không đồng ý
1	2	3	4

1. Nếu chúng ta không tổ chức lễ cúng cho người chết thì chúng ta sẽ gặp rắc rối trong tương lai	1	2	3	4
2. Có tồn tại thế giới bên kia sau cái chết	1	2	3	4
3. Con người có thể tái sinh nhiều lần sau cái chét	1	2	3	4
4. Nếu ta tin vào Chúa trời và dâng lên Người những lời cầu nguyện thì ước muốn của ta sẽ được toại nguyện	1	2	3	4
5. Sau cái chết của một người thân trong gia đình thì linh hồn của họ sẽ phù hộ riêng tôi	1	2	3	4
6. Chết có nghĩa là cái tôi ngừng tồn tại mãi mãi	1	2	3	4
7. Thiên đường hoặc ông Trời có tồn tại	1	2	3	4
8. Sau khi chết, chúng ta có thể gặp lại những người trong gia đình và những người bạn thân đã chết trước kia	1	2	3	4
9. Chúng ta nên tổ chức lễ cúng cho những linh hồn của trẻ sơ sinh hoặc thai nhi đã chết được siêu thoát	1	2	3	4
10. Người ta có thể trở lại thế giới này sau khi chết	1	2	3	4
11. Chúng ta sẽ được giải thoát nỗi đau và không bị stress ở thế giới bên kia sau khi chết	1	2	3	4
12. Chúng ta có thể tạo ra một cuộc sống ở thế giới bên kia giống như ở thế giới này	1	2	3	4
13. Khi bạn chết, bạn biến mất vào bóng tối và không bao giờ trở lại từ đó	1	2	3	4
14. Thế giới bên kia tốt hơn thế giới này	1	2	3	4
15. Thân thể chết nhưng linh hồn vẫn tồn tại	1	2	3	4
16. Có tồn tại địa ngục	1	2	3	4
17. Con người có thể là sự tái sinh của những thực thể không thuộc người như động vật chẳng hạn	1	2	3	4
18. Việc chúng ta có thể lên thiên đàng hay rơi xuống địa ngục phụ thuộc vào hành vi của chúng ta ở thế giới này	1	2	3	4
19. Một số linh hồn lang thang không nơi trú ngụ sau khi chết	1	2	3	4
20. Thỉnh thoảng tôi cảm thấy tinh thần của thiên nhiên cư ngụ ở núi, sông, cỏ, cây...	1	2	3	4
21. Có tồn tại sự đánh giá của Chúa trời sau khi chết	1	2	3	4

Les images de la relation entre ce monde et l'autre monde

Cet enquête se situe dans le cadre d'une coopération entre la France et le Japon (Université Aichi-Shukutoku de la ville de Nagoya). Elle vise à cerner les images que se font les personnes vivant dans le cadre de cultures différentes. Il s'agit d'une recherche de psychologie comparative. Nous ne nous intéressons pas à interpréter les résultats d'une manière psychanalytique, vous n'avez donc pas à vous en préoccuper.

Cette recherche se fait sous le couvert de l'**anonymat**, et les protocoles sont adressés directement à l'INSERM (Dr. Wallon, Chargé de Recherche, Centre Georges Devereux, Université Paris VIII) sans être examiné individuellement. Aucun rapprochement ne sera fait pour identifier les personnes et utiliser les réponses pour les comparer avec les résultats académiques (scolaires ou universitaires).

Le dessin est utilisé en relation avec les réponses écrites. Il est considéré comme le meilleur moyen d'exprimer des contenus inconscients, souvent imagés et difficiles à formuler avec des mots. Il devrait permettre de comparer au mieux les représentations issues de cultures différentes.

Vous devez dessiner ce qui vous vient à l'esprit sans effort. La qualité du dessin ne sera pas prise en compte. Il pourra être abstrait ou concret.

Date de l'enquête: le___ mois ___ 1996
Age: _____ ans **Sexe:** féminin masculin
Nationalité actuelle: _____ **Nation d'origine:** _____
Langue maternelle: _____
Lieu de naissance:*
Paris; Banlieue Paris; Ville > 50.000 hab.; Ville 5.000 à 50.000 hab.; Ville < 5.000 hab.; Village
Lieu où vous avez été élevé:*
Paris; Banlieue Paris; Ville > 50.000 hab.; Ville 5.000 à 50.000 hab.; Ville < 5.000 hab.; Village
Ville où vous habitez:*
Paris; Banlieue Paris; Ville > 50.000 hab.; Ville 5.000 à 50.000 hab.; Ville < 5.000 hab.; Village
Profession: * Etudiant; Universitaire; Employé; Cadre; Prof. libérale; Artisan/Commerçant;
Ecole (Université):* Paris; Province;
Spécialité (UER): _____ **Niveau d'étude:** _____
Profession du père:* Employé; Cadre; Prof. libérale; Artisan/Commerçant; Retraité;
Sans activité professionnelle actuelle (chômeur, invalidité, etc.); Décédé; Prof. non connue
Profession du mère:* Employé; Cadre; Prof. libérale; Artisan/Commerçant; Retraité;
Sans activ.prof. actuelle (au foyer, chômeur, invalidité, etc.); Décédé; Prof. non connue
Personnes déjà décédées: * grand-père paternel; grand-père maternel;
grande-mère paternelle; grande-mère maternelle; père ; mari de la mère; mère;
femme du père; frère(s); soeur(s); demi-frère(s); demi-soeur(s); autres**
Expérience de assister à la mort d'une proche parent: Oui; Non;
(Si votre réponse est affirmative, c'est qui? _____)
Expérience de faillir mourir: Oui; Non;
(Si votre réponse est affirmative, à quelle occasion? _____)
Expérience de peur très forte de la mort: Oui; Non;
(Si votre réponse est affirmative, à quel âge? _____)
Religion de la famille: catholique; protestant; juif; musulman; sans religion; autre;
Pratique religieuse: pratiquant; non pratiquant;
Religion de vous-même: catholique; protestant; juif; musulman; sans religion; autre;
Pratique religieuse: pratiquant; non pratiquant;

* Entourer la mention appropriée.
** famille proche: frère(s) ou soeur(s) de l'un ou l'autre parent.

1) S'il y a l'autre monde apres la mort, qu'est-ce que vous en pensez?
Vous dessinez votre image qui represente la relation entre les vivants dans ce monde et les morts dans l'autre monde et vous expliquez votre dessin.

Explication: (si besoin, vous pouvez aussi ajouter votre explication dans le cadre de votre dessin.)

2) S'il existe une ame apres la mort, qu'est-ce que vous en pensez?
Vous dessinez votre image qui represente le passage de ce monde ver l'autre monde aussi bien que le retour de l'autre monde a ce monde et vous expliquez votre dessin.

Explication: (si besoin, vous pouvez aussi ajouter votre explication dans le cadre de votre dessin.)

3) Si vous deviez donner une (ou des) couleur(s) à ce monde et à l'autre monde, quelle(s) couleur(s) préféreriez-vous? Expliquez la raison de votre choix.

ce monde _____

(raison: _____)

l'autre monde _____

(raison: _____)

4) Cocher la case qui convient le plus à chacune des propositions suivantes:

	d'accord:			
1. Si l'on ne donne pas de messe pour le repos de l'âme du mort, la malédiction pèsera sur nous.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
2. Il existe un autre monde après la mort.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
3. Il est possible de renaître plusieurs fois après la mort.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
4. Si on croit en Dieu et qu'on Lui fait confiance, notre souhait se réalisera.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
5. Après la mort d'un proche parent, son âme revient pour me protéger.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
6. La mort, cela signifie la disparition éternelle du moi.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
7. Le paradis existe.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
8. Après la mort, nous pouvons revoir les gens intimes qui sont morts avant nous.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
9. On doit dire une messe pour le repos de l'âme du fétus ou du nouveau-né qui est mort.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
10. Il est possible de revenir dans ce monde après la mort.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
11. On est délivré de la souffrance et de la douleur dans l'autre monde.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
12. Même après la mort, on peut mener la même vie dans l'autre monde	pas du tout	peu	assez	tout à fait

13. Après la mort, on est emmené dans les ténèbres et on ne peut plus s'en échapper.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
14. L'autre monde est meilleur que ce monde.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
15. Le corps meurt, l'âme reste vivante.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
16. L'enfer existe.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
17. On peut renaître sous la forme d'un animal ou d'un autre existence non-humaine.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
18. Monter au ciel ou descendre en enfer dépend de notre comportement dans ce monde.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
19. Il y a des âmes qui errent sans destination après la mort.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
20. Je ressens quelquefois l'esprit de la nature qui vit dans les montagnes, les rivières, l'herbe, les arbres, etc.	pas du tout	peu	assez	tout à fait
21. Il existe le jugement de Dieu.	pas du tout	peu	assez	tout à fait

Merci de votre coopération !

The Relationship between This World and The Next World after Death

—An Inquiry Using Image Drawings—

The aim of this inquiry is to examine what kind of images people have in their everyday life on the relationships between this world and the next world after death. We are collecting these images in various countries worldwide such as Japan, UK, France, Vietnam, etc.

Please draw your images just as you like, and do not worry about your drawing skill. This is not a project test, a personality test, or an achievement test and our aim is not to evaluate you individually. We are only interested in appreciating the variety of images. You need not put your name on the form.

This inquiry is a unique study by a method of freehand drawings. We hope you enjoy it, and please explain your pictures in detail. Drawing is a convenient and useful method for understanding various representations from different cultures.

Y. YAMADA (Professor, Kyoto University, Japan; Oxford University, U.K.)
Y. KATO (Professor, Aichi Prefectural University, Japan)
Y. TODA (Associate Professor, Osaka University of Education, Japan)
A. INOUE (Graduate Student, London University, U.K.)

Today's Date : 2001 / 2002 Age:_____ Sex: M / F

Present Nationality : _____ Nation of Origin:_____

Father's Nation of Origin:_____ Mother's Nation of Origin:_____

Your Native Language: _____

Place where you were born: _____

Place where you grew up (If there are many, put the two principal places.) :

_____

Place where you live now:_____

Your Occupation : _____

Name of University :_____

Subject of Study: _____

Have any members of your family passed away? Yes / No

Have you looked after a dying person who is close to you? Yes / No
(If "yes", who? _____)

Have you ever felt that you were about to die? Yes / No
(If "yes", on what occasion? _____)

Have you ever experienced a strong fear of death? Yes / No
(If "yes", at what age? _____Years-old)

Your Religion: Christianity (the Church): Anglican [ ] ; Protestant [ ] ; Catholic [ ] ;
The Greek Orthodox [ ] ; Other Churches [ ]
Judaism [ ] ; Islamism [ ] ; Hinduism [ ]; Buddhism [ ] ; Others ( ) ;
No religion [ ]; Do not want to answer [ ]

Religion of your Family: Christianity (the Church): Anglican [ ] ; Protestant [ ] ;
Catholic [ ] ; The Greek Orthodox [ ] ; Other Churches [ ]
Judaism [ ] ; Islamism [ ] ; Hinduism [ ]; Buddhism [ ] ; Others ( ) ;
No religion [ ]; Do not want to answer [ ]

Do you usually participate in religious activities? : Yes / No

1) If the next world after death exists, what do you imagine?
Please draw a picture representing your image of the relationships between the people in this world and those in the next world. Please explain your drawing.

Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

2) If the soul exists after death, what do you imagine?
Please draw a picture representing your image of the soul's passage from this world to the next world and from the next world to this world. Please explain your drawing.

Explanation: (If necessary, you can add your explanation directly to the drawing.)

3) If you were to put colour(s) to this world and to the next world after death, what kind of colour(s) would you choose? Please explain the reason why you chose it, if you can.

This World: _____.
(reason:_____)

Next World: _____.
(reason:_____)

4) Please circle the number which is the most appropriate to each of the following statements:

	Strongly agree 1	Moderately agree 2	Moderately disagree 3	Strongly disagree 4
1. If we do not hold a memorial service (mass) for the dead, misfortune or harm will come.	1	2	3	4
2. The next world after death does exist.	1	2	3	4
3. It is possible to be reborn again and again after death.	1	2	3	4
4. If we believe in God and offer prayers to Him, we will get our wish.	1	2	3	4
5. After a close member of the family dies, his/her soul protects me.	1	2	3	4
6. Death means that the self ceases to exist forever.	1	2	3	4
7. Paradise or heaven does exist.	1	2	3	4
8. After our death, we can reunite with familiar people who died earlier.	1	2	3	4
9. We should hold a memorial service (mass) for the soul of a foetus who has died.	1	2	3	4
10. It is possible to come back to this world after death.	1	2	3	4
11. We will be released from pain and distress in the next world after death.	1	2	3	4
12. We can have the same style of living in the next world as in this world.	1	2	3	4

	Strongly agree 1	Moderately agree 2	Moderately disagree 3	Strongly disagree 4
13. When you die, you enter a world of darkness and can never escape.	1	2	3	4
14. The next world is better than this world.	1	2	3	4
15. Body dies, but soul subsists (lives on).	1	2	3	4
16. Hell does exist.	1	2	3	4
17. Human beings can get reborn as non-human beings such as animals.	1	2	3	4
18. Whether we can go up to paradise or fall to hell depends on our own behaviour in this world.	1	2	3	4
19. There are some souls that are wandering without destination after death.	1	2	3	4
20. I sometimes feel that the spirit of nature dwells in mountains, rivers, grasses, trees, etc.	1	2	3	4
21. The judgement of God after death does exist.	1	2	3	4

Please note that your drawings may be published for academic purposes.
If you have any comments on this study, please list them below.

Thank you for your participation!